

# 集団における個人

— その自由と責任 —

第7回全国婦人会議記録

目次

はしがき

全国婦人会蔵の構成

全国婦人会議次第

講演

日本における集団の問題について.....お茶の水女子大学学長 蠟山政道.....一

部会

第一部会.....八

第二部会.....一〇三

第三部会.....一九

第四部会.....二六

総会

移動会議.....二六

# 全国婦人会議の構成

## 全国婦人会議

「集団における個人——その自由と責任——」

労働省・日本放送協会

昭和三十四年四月十二・十三・十四・十五日

東京産経会館・NHKホール

名 称  
主 催  
期 日  
場 所  
部 会

- 第一部会 都市
- 第二部会 都市
- 第三部会 農村
- 第四部会 農村

出席者 六〇名(全国の応募者中より中央選考委員会が決定)

## 中央選考委員

お茶の水女子大学学長

蠟山 政道

(選考委員長)

評論家

伊藤 藤昇

評論家

坂西 志保

東京農工大学教授

大谷 省三

評論家

渡辺 智多雄

日本放送協会教育局長

川上 行藏

日本放送協会婦人課長

江上 フジ

労働省婦人少年局長

谷野 せつ

労働大臣官房総務課長

大野 雄二郎

## 会議リーダー

第一部会

伊藤 藤昇

第二部会

坂西 志保

第三部会

大谷 省三

第四部会

渡辺 智多雄

## 事務局

労働省婦人少年局長婦人課職員

THE 1948 NATIONAL WOMEN'S CONFERENCE  
 全国婦人会議次第

四月十二日(日)

開 会 式 一〇・三〇〜一一・三〇

——合唱「世界の花」——

開会のことば

労働省婦人少年局長 谷 野 せ っ

あいさつ

労働 大臣 倉 石 忠 雄

日本放送協会会長 野 村 秀 雄

講 演

お茶の水女子大学学長 堀 山 政 道

部 会 一三・三〇〜一七・〇〇

四月十三日(月)

移動会議と視察 (東京・神奈川・千葉・埼玉)

四月十四日(火)

部 会 九・三〇〜一七・〇〇

四月十五日(水)

総 会 一〇・三〇〜一二・三〇

——合唱「世界の花」——

あいさつ

日本放送協会教育局長 川 上 行 藏

経 過 報 告

労働省婦人少年局婦人課長 高 橋 展 子

部会報告と話し合い 会議リーダー・会議員・一般傍聴者

アトラクション

——独唱と合唱——

閉会のことば

労働省婦人少年局長 谷 野 せ っ

個人の自由と責任が

集団をそだてる

—— 第十一回 婦人週間 スローガン ——

講 演



## 日本における集団の問題について

お茶の水大学学長 蠟 山 政 道

「婦人の自主性の確立——特に集団との関係において——」というテーマは、非常にむずかしい問題であります。おそらく、その問題に対して完全な回答を見出すことは、不可能なことではないかと思うのであります。

さきほどの谷野局長のお話の中で、婦人の参政権の歴史において、先人の多くの苦心においてさえ、なお今日、依然として問題が残っている、と申されましたが、実にその通りであると思うのであります。しかし、人生の行路において、たとえ完全に達成することのできない事柄であるうとも、常に希望として、また理想として考えてゆくということは大切なことであり、役に立つことであると考えるのであります。

私は社会科学の勉強をしている者であります。社会学や政治学の方面におきましても、この「集団、特にその中における個人の自由と責任」というような問題は、理論的にも、その回答が容易に見出されないものであります。また回答があるとしても、それはいくつかの回答であって、これこそその回答である、というような、理論的に割り切ったものはないのであります。それだけに相当の判断力をもって解決に向かっなければならぬ問題であります。また、理論よりむしろ、実際の経験を積み重ねて、互いに教育されていかなければならぬと思うのであります。

しかし、私は今、皆様の御参考として、私どもが学問の世界において問題にしております日本における集団について、問題点を、いくつか取り上げてみたいと思うのであります。

集団現象というものは、もとより昔からあったのであります。とくに戦後、戦時中の統制体制が崩壊して以来、反動的な現象として、いろいろな集団が発生し、今日におよんでいるのであります。これらは、それぞれ異なった性質を持つ各種の集団で、学問的にいろいろな種類に分類することができそうですが、いずれにしてもここに多数の集団が現実存在しているということは、動かすことのできない事実であります。したがって、それらの集団のあり方は、その集団の性質によって異なっているということを、まず理解しなければなりません。

最も身近な、自然的な集団である家族、あるいは近隣の集団、さらに一歩拡げて、学校におけるPTAのような集団、また、農協のような団体、そしてその中にある婦人部という集団、地域の婦人会、職場における労働組合等、婦人の属している集団がたくさんあります。

これらの集団は、それぞれ、目的や発生の原因、また、社会において果たしている役割などの点において違っていますが、これらの集団に共通な点が一つあります。それはすべての集団は個人によって構成されているということです。いいかえれば、集団はさまざまであるが、そのメンバーはすべて、人間個人であるということです。この事実を深く認識することが大切であります。

また、一人の人が同時にいくつかの集団に関係する場合もありますが、そういう場合に、それぞれの集団生活をうまく行なっていくには、それらの集団の性質をよく理解することが大切であります。こういうことは、ごく一般的な問題でありまして、世界のどここの国にも共通な問題であると思うのであります。日本においてとくに解決しなければならぬと思われる点を、三つほどあげてみたいと思います。

その第一は、集団が個人の活動や個人の人格を全部くんでしまう、いわゆる「なにになにぐるみ」という言葉がよく示している状態です。これは個人の立場から見ますと、集団の中に自分を全部埋没してしまうことであり、また、集団の側からは、個人を全部その活動の中に引き込んでしまおうということでありまして、集団にはこういう傾向があるのであります。ですから、個人がその自主性を確立するためには、集団の傾向である、この「ぐるみ主義」に対し

て、いかにして自己を確立してゆくかということが大事なのであります。一方、集団そのものは、あくまで個人を取り入れ、引きずっていかねければならないのでありますが、個人としては、その集団だけに属しているのではありませんから、その辺の調節をどうするかということが、具体的に大きな問題となってまいります。

第二の問題は、言葉は熟しておりませんが、私はこれを統制主義と呼びたいと思います。集団には小集団から大集団まで種々ありまして、それぞれ力を持ち、一つの集団が他の集団と関係を持つ場合、大きな集団は小さい集団を統制しようとするのであります。また上からの統制も、この統制主義の中に入ると思います。集団は一つの個性を持つものであり、多くの場合、一つの単位になっております。そういうものがいくつか集って、より大きな集団になることもありましようし、また別の集団が小さい集団を下部組織として構成しようとする傾向もあります。統制ということも、ある程度必要な場合もありますが、そのために、個性を捨てようとする小集団がおさえられてしまふということは問題でありまして、これをどう解決するかということは大きな問題であります。

さて第三の問題は、やや通俗に過ぎるかもしれませんが、派閥主義ということでもあります。これは、集団の種類・性質・大きさなどによって若干違いますが、集団の中には必ずといってよいほど、分派が生ずるものであります。これは多く集団の指導者との関係がうまくゆかない場合に生ずるもので、集団がなごやかにゆかないという問題があるのであります。

派閥主義は政党についてよくいわれますが、これはひとり政党ばかりではありません。政党の場合は、公けの権力をもっている団体で、非常に目につきやすいために問題にされるのでありますが、やはりそれぞれの集団に派閥関係というものが大かれ少なれあるという事実を見のがすことはできないと思うのであります。

以上の三つの問題は、特にわが国の集団において見られる傾向であります。これを解決してゆくにはどうしたらよいかというところに、理論だけでは割り切れないむずかしい問題があるのであります。結局これは、それぞれの集団に属している個人、あるいはまた、いくつかの集団に属している個人が、その人格をどのように確立していくか

ということであり、その個人こそが、集団という扇の要になっているといえるのではないかと思います。ですから、この扇の要に立つ個人が自主性を確立し、それを通じて集団の個性を確立してゆくことができるならば、その個人においてはその人の人格の内容や活動の方面を豊富にするとともに、そういう個人の活動を通じて集団を正しく伸ばし成長せしめていくことができるのではないかと。これがおそらく民主主義というものの原理からくる問題であらうと思ふのであります。「個人は個人だけでは生まれない」ということは、昔からいわれている真理であります。ところが集団ができると、個人がすっかりその集団の中に埋もれてしまふ、封殺されてしまふようなことがあります。これでもまた困るのであります。要するに個人が自主性を確立するということは、個人が集団の中であって、個人の正しい役割、指導者ならば指導者としての役割を正しく自覚してゆくという事実を通して解決せられる問題だと思ふのであります。そしておそらく、これが民主主義の根本的な問題の一つであり、全国婦人会議が数年にわたって積み上げてきた問題の最も本質的なものに触れていることではないかと思ひます。

こうした問題について皆様の御討議が成功いたしますならば、その幸福はひとり皆様だけのものではなく、全国の婦人の、また、婦人とともに考えなければならぬ日本人全体の問題であらうと思ふのであります。

皆様の御討議の成功を祈ってやまない次第でございます。

部 会



# 第一部会

出席者

|                  |              |              |              |              |              |               |                |              |                 |               |               |              |              |               |               |
|------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|----------------|--------------|-----------------|---------------|---------------|--------------|--------------|---------------|---------------|
| リ<br>ー<br>ダ<br>ー | 大分           | 長崎           | 香川           | 鳥取           | 大分           | 滋賀            | 三重             | 愛知           | 福井              | 新潟            | 東京            | 埼玉           | 秋田           | 青森            | 北海道           |
| 評論家<br>伊藤藤昇      | 草野克子<br>(主婦) | 住吉紀子<br>(主婦) | 田口三子<br>(主婦) | 下口三子<br>(主婦) | 和田治子<br>(主婦) | 片山久子<br>(会社員) | 宮前初子<br>(歯科医師) | 風間昭枝<br>(主婦) | 斎藤茂子<br>(電話交換手) | 織田ウタ子<br>(主婦) | 中野美代子<br>(主婦) | 長岡兼子<br>(主婦) | 茂内礼子<br>(教員) | 高谷容子<br>(公務員) | 小幡貞子<br>(会社員) |

## はじめに ― 今年のテーマについて

伊藤 みなさんの話しあいに入る前に、さっき鎌山さんのお話にもあったのですけれども、みなさん今年の婦人週間のテーマを出された時に、やはり非常にむずかしい問題だというように受け取られたと思うのです。どうしてこういうテーマが出たかということですね。まあ私なりに理解している点を簡単に申し上げますと、私は、今から三年前日本の家庭を明るくするにはどうするかというテーマの婦人週間で、助言者をつとめました。そこで話しあいをしてみますと、日本の家庭を暗くしている原因として、第一がやはり人間関係です。その次がなんといっても経済条件です。日本の家庭を明るくするという場合に、貧乏な家庭、明日の暮しにも困るというところで笑っているわけにいかないから、これはどうしても非常に重要だ。

その次に、やはり主婦を中心とする婦人の健康の問題です。これは私たち生活していてもみなさんもそうでしょが、一家の母親、主婦が健康を害するということが、一番家庭を暗くする理由になると思います。

四番目が、教育の問題です。子供をどういう条件で正しく健康に育ててゆくかという、これによって家庭の明るさが左右される、これも大切だと思います。

そういう問題が出てきたために、その次の年は、明るい人間関係をどうしてつくるかということをやったわけです。私はこの年には欠席いたしました。結局そういう明るい家庭をつくるか、明るい人間関係を築いてゆくために、婦人はなにをしなければならぬか、あるいは婦人のできることはなんだろうかということまでつきつめてゆきますと、一人でできることと、一人でどうしてもできないから仲間をつくることと、あるいは大ぜいの同志を語らって、そうしてグループをつくり、あるいはもっと大きな組織の中に入って、その組織の力で社会をよくすることと、あるいは経済的な生活を向上させるといったようなことがあるいは話しあわれたと思います。したがって明るい家庭、明るい社会をつくるためには、婦人たちが力をあわせる、すなわち協同活動で自分たちの仕合わせもまた地域の仕合わせも、ひいては社会全体の仕合わせと、明るさを築き上げてゆこう。ですから御承知のように、昨年の婦人週間のテーマは協同活動について、ということであつたわけです。

昨年私は、この今年のリーダーと御一緒にお話し相手をしてきたのですけれども、協同活動は多くの方がいろいろの形で、いろいろやっておられると思いますけれども、その協同活動をやってゆく上にいるいろいろの支障が感ぜられた

わけです。

去年の婦人会議で、グループ活動、協同活動というものを考えていった場合に、やはりぶつかった問題は「リーダー」とはいったいなんだ」というようなことです。これも当然今年の「集団における自由」という問題に帰すると思いますが、グループの、あるいは組織のリーダーとはなんだろうか、会員の意識というものはどういうものだろうか。たとえば読書会を非常に大ぜいで始めたけれども、毎月毎月、毎回毎回人が減っていった、とうとうしまいに三人になってしまった。これはいったいどういうふうにか考えたらいいたろうか。そうしますと、そのグループとかその組織そのものに意味があるのか、あるいは目的がはっきりしているか、とか、端的に申しますならば、グループや組織、集団が会員にとって魅力をもっているかどうかということですね。そうしてその魅力が続け、しかも会員に積極的に参加させ、継続してゆくためにはどういう努力が要るだろうか。しかもある大きな組織の場合に、その組織の決定することに對し、会員としては不満であり反対であるというような場合に、どういう態度をとったらいいたろうか。

これは昨年の協同活動についていろいろ話があった結果、まだまだたくさん矛盾とか不合理な点が出てきたわけですが、したがっておそらく今年のみなさんがお考えになる。

まず「集団」ということですが、家族集団というものは運命的なもので、おれはこの家に生まれるぞ、といって生まれてきた人はいないから、これは運命的な集団です。国家というものもそうです。日本人として生まれるかと思えば生まれてきたわけではない。こういうように、運命的な集団があるのです。

また逆に、自分で音楽のグループ、あるいは読書会に入る、これは入らなくてもいい、自分の意志で入る。そういう集団もあるわけです。家族集団、地域集団、職業的な集団と社会集団、それらは別々のものであるかという点、私はそうもいえないと思う。その中における一つの人間と人間が固まって生活してゆく、その中における規律というものはなにかやっぱりあるのではないか。こういう考え方で私は集団ということもあまりはっきり定義付けずに今日話してあつてみて、そうしてさきほど申しましたように、集団というものは大体あつたことらしい、その中で自由と責任というものを考えるのはこういう角度から考えていた方がいいのではないか。お互い話したいから、いくつかの方向といったものををつかみあげてゆく、そういうふうなやうにやうてゆきたいと思ひます。がいかでしようか。みなさんのほうから御意見を出していただいて……。

りましたようなテーマが出てきたのは、協同活動ということについて考え合わせたところが、行き詰るところは、集団とはなんだろうか、その中に自分というものがいる。その自分というものはいったいどういふものか、どれだけの自由を持ち、責任を背負わされたものかということをお考えなければならぬ、そこに来たのではないかと思うわけですが。

ところで、集団とか自由とか責任ということを抽象的に考えては私たち満足できないと思うのです。これは鎌山先生の話にもあったのですけれども、個人の自由とか責任とかいうことは、私はその場その場でみんな違うと思うのです。これは一種の民主社会における非常に大切な道徳である。これは今まで私たちに教えられていなかったと思うのです。これから私たちがつくり上げてゆかなければならない道徳だということに考える。そこで、極端にいえば、問題は実践です。みなさんが生活の中で、あるいはお勤め先で、組合の中で、職場でぶつかつておられる、その中から問題をとり上げてゆく以外にはないと思うのです。そのためになんかはいらんの経験を重ねておられるのですから、それをさくばらんここにさらけ出して、そうしてなにか、三日間話したいをしてみたら、ああそんなものかなというくらいでお帰りになつていいのではないかと思ひます。

草野 自然発生的な集団と目的をもった集団を一緒に、ごっちゃにしてはじめるという先生のお考えですね。

伊藤 そのごっちゃにしてというのは、はじめからばらばらにという意味ではなくて、いろいろの角度から、十五人の方が問題をもつておられる、それを大別して、まずいまの宿命的、運命的な集団としての家庭、家族という問題で問題をもつておられる方が、ここにも三人か四人おられるわけですね。

その次には婦人会とか、あるいはグループ活動、そういう中で問題をもつておられる。それから婦人会に關してはやっぱり地域の問題が出てくると思う。地域婦人会とか地域の生活の中で、地域社会での問題を出して、それから職場の方が大分ここにはおられますが、職場で問題をもつておられる方そういうふうな形で話を取り上げてみたいのです。家庭の中の人間関係でという点に自由の問題があるか、という点に自由を束縛する点があるかという点を出して、その次に地域婦人会に移って、それから職場に移るといふようなやり方でやっていたらどうかと思うのですが、いかがでしょうか。あまり固くならないで、ひとつ家族の問題からさくばらん、なごやかな話したいを進めてゆきたいと思ひます。

そうして今日は、私がいま申しましたようないろいろな

条件のもとで、自由というものが、どういふふうに束縛され、あるいはある立場では自由がこれほど認められているというような話をしていったらどうかと思うのです。そうして、明後日の午前中に、そういうふうに自由が束縛され、また伸ばされている場合に、責任というものはいったいどういふものだろうか、というふうにしていて、最後に、結局集団というものはこういうふうな考え方で、この中で人間は自由と責任をこういふふうにする、そのために人間の自主性、婦人の自主性はどうかあるべきかというようなことを話しあわれたらどうかと思いますが、いかがですか。それでは、特別の御異議がないようでしたら、家庭の問題から入りましょうか。

#### 家庭の中の自由

草野 いま先生がおっしゃったのを考えてみまして、家庭というものは、自然発生的なものだとおっしゃいましたけれども、私の子供はそうではありません。私自身は結婚する場合に自分の意志で自分の家庭というものをつくったと思うのです。ですからそこに自由がなければならぬはずだと思いますが、私の場合、まあある程度成功して、主人が私の自由を認めてくれましたから家庭でもって女の自由というのはあったと思うのです。ざっくりばらんに申します

るへ来まして、まあ一番末っ子は二才ですけれども、そろそろ準備して、これから中年になったら、社会に出て、今までの体験で、深い愛で世の中の仕事をし行けば、どんなに世の中がよくなるかという夢をもった。

そうしますと、大分の地方会議で、ずいぶん反対を受けまして、十三年も空白のある女を雇うところはどこにあるかといわれました。そういわれると一言もないが、教員の技術の面では空白かもしれないが、人間的深さにおいては、職場で成長するよりも、家庭で子供を育てることによって成長したほうが、私にとっては多かったのではないかという考をもっておりす。

伊藤 たいへんむずかしい問題がいきなり出てしまっておりすけれども、引続き長岡さんの場合をお聞きしたいと思ひます。

長岡 私も草野さんと同じように、結局女の人は、いずれは人間を育てる役ですから、結婚した場合は、新しい一つの小さな基本的な集団をつくるのに、まずその集団の目的と、いろいろな方針を選ばなければならぬと思うのです。

私が親に口答えをしますと、子供のくせに親になてつくといひ、たいへん叱られることが多いのですが、やはり親だからとか、子供だからというのではなくて、家族をつ

と、月給袋もそのまま私に渡しますから、私が自由自在に家計をやつてゆく。若い時分に学校の先生をしていて、やはり戦後の暗い社会の中でも外に出て働らくということにとても生き甲斐を感じていました。ところが、夫婦だけの時はよろしいのですが、子供が出来ました時にはそのことができないし、それから主人も、子供が二人にもなれば家庭に入れないといひますし、また主人がそういひわれないにしても、赤ん坊を人に預けて出かけることは、私、とても不安な感じがいたしました。そこに私の自由というものがストップされたわけですね。主人は中小企業のもう一つ下の零細企業主で、子供は五人です。高校一年が上で、二才半が一番下で、六年、三年、二年がおります。私は自分自身の才能が役に立つものだったら社会の役に立ちたいという希望を持ち続けてきた。末っ子が小学校に上って一応手が離れたら、今度は自分の希望というものをかなえたいと思ひまして、それで暴言を吐いたわけで、子供をもった若い母親は家庭にかけられと書いたわけですね。

子供を育てるということ、人を育てるということは、自分自身も、とても育てられると思うのです。託児所という制度もありますけれども、とにかくお母さんというものは、家に帰って子供を育てる時に成長するのだということを、私の一生の半分で考えたわけなのです。でその半分のこと

くっている一風として、もっとお互に押しつけあわないで、権力をふるわないで、考えてゆけば、社会に出てからも自分というものを生かした発言がどんどんできるようなになると思うのです。

そういう観点から、みなさんの家庭はどんなふうにしていらつしやるか、伺つてみたい。

伊藤 いまの御家庭は、どういう環境で？

長岡 三年前に結婚しまして、主人は学校に勤めております。今の家庭はそれこそ民主的で、私がかえって、しゅうとさんにたいへん教えられるのです。父や母、全員で会食しますと、お嫁さんはいへん気を使つうらしいのですが、私が今いる家では、お嫁さんだからといって別にみなさんのお給仕もなくていいのです。お茶も、テーブルの上にドンと大きな土びんを置きまして、各自が自分でお茶をいれるのです。私、最初結婚した頃は、みなさんのお給仕をしなくてはいけなかつたかと思つて、自分はいただかないできよときよとしていたのですが、そうすると父が、「ひとのことを気にしないで、お前の食いたいものをどんとん食え」とおっしゃる。うちは一応簡単な垣根がありまして、その中に三軒あるのです。母屋というか、父や母や長岡の弟がいる。ですから、母を中心とした未婚者の家族が奥のほうにいまして、庭をちょっと距てまして、花壇をつ

くって、花鳥のこちら側に私の小さな家を建てました。その脇に私の主人の姉がおります。そこには子供が二人おります。

伊藤 その限りでは、ある意味では地域社会の問題も含んでおられるわけですね。それに引続いて住吉さんですか、集団住宅ですね。

#### 集団住宅の問題

住吉 私は現在、十二軒の市営住宅に住んでおります。その住宅に入った当時はお互に助け合ってゆこうという気持はもっていたのです。しかしどういふものですか、人間は感情の動物で、日本の場合にはとくにいわゆるいま唱えられております自主性の確立ということに馴らされていまいと申しますか、習慣性がないというような点がありますので、結果においては対人関係のむずかしさというものをお互に身にしみて感じさせられるのです。私の母が、助けあおうという気持からするのですが、親切とおせっかいの限度がつかないのです。それだから、母は親切でやったというのですけれども、どうかした場合にはかえってそれが悪い結果になって、落口のもとになってしまふ。

それで私、どうもこれは、母を近所付合ひさせたいけないなと思いましたが、母に近所の人に付きあうな、とい

うことはとうていできません。けれども幸か不幸か、学校を出ましてずっと私が病氣しておりました——病氣といつても寝込むほどではありませんでしたので、ずっとぶらぶらしてゐるのも肩身がせまいし、私が家事一切を引き受けることにし、自分の地位を確立し、近所付合ひにはなるべく私が出るようにしたのです。

伊藤 お母さんが親切でやったことが巧いかなかったという具体的な例はどういうことですか。

住吉 職業の世話など、困っているからお願ひしますといわれて、世話をして、ちゃんとお膳立をして話をつけてきたのに、実はあれはもうやめにしました、なんていうことになったり、また職が決まらない場合に、いつまでもぐずぐずして決まらない、というふうに、かえって落口をいわれたり、なにかいやなことを言う場合にはうちの母のところですぐもってくる、そうして、言ってくれ、というのです。

伊藤 片山さんの場合は寄宿舎の問題ですね。

片山 紡績工場というのは、みなさん御存じないと思いますが、原則として全部寄宿舎に入ることになっていて、お食事の時間とか入浴の時間とか、それから消燈の時間というのがきちんと決められているわけですから、

私生活であるのに自由が阻まれていふという点が非常に多いのですが、その中であるべく個人の自由を認めてゆきたいというので、自治会というのをつくっている。その自治会がすべて自分たちの生活を、決められた範囲内でや

っているわけですが、私が取り上げました問題は、その自由ということよりも、むしろ集団において個人が責任を完うするにはどうしたらいいかという問題です。たいへん卑近な例ですけれども、大体十四畳くらいのお部屋に分れて五、六人一しょになって寝起きをしているのですけれども、そこのお部屋の入口の各自のスリッパというのは、自分であつたらしく名前が書いてありますから非常にきれいに整頓できるのです。スリッパのソリッパのように、誰が使つてもわからないというふうなものはどうしても使つたあとに乱雑になってしまう。もし鼻緒が切れても、切れたままにほつてあるとかいうことがあるのです。これはまあ一例に過ぎないのですけれども、そういうふうに、これは誰の責任というふうに決められているものとはとてもよく果します。各お部屋のお掃除のお当番なども、たいへんよく行き届くのですけれども、誰がしたかわからないで済んでしまふという、いわば公共のものは、なかなか大事にできないことがたくさんあるのです。そういう問題を考へてみた

伊藤 片山さんはそういう寄宿舎のどういふお仕事をしておられたのですか。

片山 私は自治会には入っていないで、その自治会のアドバイザーというような格好ですが、そのほか工場の中に併設の高等学校程度の学校がありまして、レベルはなかなか一般の高校並というわけにまゐりませんが、みんなが余暇を善用するためにというので設置されておりますので、その教師と、寮のほうの管理とを兼ねてやっております。だから自治会を外側から見ているという形です。

伊藤 そういうふうな問題で、自治会の寄宿舎にいる人たちとしじやう話しあひはあったわけですね。いかがでしょう。四人の方から、純粹の家庭の中の問題と、家庭を少し広げて地域社会、集団生活といった問題が出てきています。すこしやつつけて、疑問があったらどんどん出して、みなさんの間の話しあひに移したいと思ひます。

田口 私もアパートに住んでいます。そのアパートというのが、終戦後すぐ建てたアパートで、十畳一間だけのアパートが二十四軒あるのです。そうして二階と下に分れていまして、炊事場もお洗濯するところも共同なので、十何人が一緒に住みます。

はじめは引揚者とか戦災者はかりが集まったわけですが、

そしていろいろ変転があるのですが、とても賑やかなのです。それでその中で仲のいい人と悪い人ができる。私なんか初めからずっとそこにいるわけで、そこにいますと、ついグルーブがいろいろできるのです。それであまり特別に親しくないようにするのがいいです。ものを上げたりもらったりしますと、とても厄介になってくる。だから、わりあい個人主義というのですか、そういうふうにしたほうが結局やり易いのです。あまりに親しくしてしまいますと、ある一人の人をみながら「あの人がちゃんだ、もの言わないようにしよう」というような場合がよくあって、あまり立ち入らないようにすることが、集団生活を巧くやる方法ではないかという気がしています。

#### 妻の自由

織田 いまのみなさんのお話を先に進めるのでなくて、例を一つ申し上げたいと思いますが、そこは相当の大きな作をしてもらえるある農家ですが、旦那さんがものすごくワン・マンで、奥さんは小づかいももらえないし、自分の自由も全然ない。たまに映画に連れて行かれると、楽しみのための映画見でなく、帰って来たら「今見て来た映画の感想を話せ」とつめ寄られる。奥さんがそれだけの教養がないものですから、おどおどして、ねめつけられて、な

おさら話ができない。そうすると叩いたり蹴ったりが始まる。

また、旦那さんは帰りがおそい。おそいどころでなくて明け方に帰ってくる。奥さんがたまりかねて寝ていると、足で蹴飛ばして起すのです。旦那さんとあるところよく会いますから「あなたの要求されるような奥さんになってもらいたかったら、なぜ奥さんに伸びてゆく機会を与えないのですか」と再三言ったのです。「婦人会でもいいし、映画でもPTAの集まりでも、講演会でも何でもいいから、奥さんを出してあげたらどうですか」と、又奥さんにも「なるべく本を読んだりラジオ聞いたりなさい」と言うのですが、奥さんはくたびれていて、本も読まないし、ラジオを聞いても眠い、それより寝たほうがいい。そんな生活をしていらして、私も何とかしてあげたいと思うのですけれども、どうにもしようがないのです。

茂内 私も去年まで郡部の学校にいました、農村では母親に自由がないのです。母親に自由の場を与えるためにわたしは子供に、母親と手紙の交換をさせたのです。子供たちに常日頃、家庭で疑問に思っていることをどしどし出させました。なぜお父さんだけが酒を飲んで、お母さんに小づかいがないか。わたしは大きくなったら百姓をやらないでパーマ屋さんになって、お母さんにパーマをかけて

やる、お母さんはパーマをかけないのは、おじいさんが、パーマなんていうのは雀の巣みたいだといって、かけさせないからだが、おじいさんの考え方は間違っている、だから大きくなってパーマをかけさせてやるというようなことを、母親や家庭に対して手紙を書くわけです。こうしてお母さんに家庭の中で自由を育ててやることができる。

もう一つ、私は子供の生活の中で、劇というのを重要視している。ことに農村の人たちですと、自分で発言するという自由がない。そういうふうに出て行かれて、どこかの場に行っても、発言したり、歌を歌ったり、出て歩く機会がない。そういう子供を劇とかそういうもので育ててゆかなければいけないと思ってやりはじめたのですが、子供たちは舞台の上で非常に話をするようになりました。それに刺激されて、お母さんたちも出て来た。私の学校はそういうコンクールに出たことはなかったが、試験的にどうしても全県でコンクールに出してくれとお願ひしたら、そういうところに出て恥をかうて来るより、やめた方がいい、もの好きだといわれた。入賞するために出るのではなく、子供がその場でものを言えるのだ、農村の子供でも自分の立場を主張できるということを狙いとして出すのだからいいでしょう、と言ったら、校長も、まあ旅費はPTAからは出な

いという。子供たちに話したら、それでは劇を一つずつもらったため、小づかいを貯める、それから千守をして駄賃をもらって、それを貯めておいて、旅費を出そうという。秋田の市でやるわけですから、子供の旅費が二百四十円かかる。

ところが宿泊費がない、指定旅館に行ったら泊まると、お米を持って行って二百円です。その二百円を出せないの、児童相談所に相談し五円の実費で泊めてやるということとで交渉して出て行きました。学校では、もの好きというふうにみんなを見ていたので、誰も積極的に出てくたさらない。危ない橋を渡らないほうがいいということだった。私たちは舞台監督もしなければならぬし、照明からなにかやらなければならぬので手が足りない。お母さん方もなにか仕事をやってくれないかという、そういうことは今まで出たこともないからやれないという。子供たちも一生懸命やるといふから、お母さんたち、なにかやってくれと言ったら、お母さんも、子供たちと一緒にせりふも勉強して、それでは照明だけはなんとかやりましょうというので、お母さんたちは次の日に来て、スボットにあがって照明装置を工夫した。そして全県で始めて優勝した。それで、村を挙げて喜んで、今後はPTAで出してやろうというので、今度は旅費をもらった。

私たちも、やればこんなに仕事が出るのだといって、

今度から舞台に出る時はお父さんまでが舞台装置の仕事をしてくださるようになって、家庭のお父さんお母さん共に協力するようになり、子供がお母さんに自由を与えてくれたということになっています。

中野 私、自分の家庭の中で自分の権利を獲得してゆくのに、いかに具体的にしたらかという話をしてみたいと思います。

私は夫と意見の対立がよくあるのです。ちょっと主人のほうが進んでいるかもしれないませんが、どちらかというと意見だけで行動をしないのですから対立の意見を闘わすわけですが、そういう時になにがなんでも二人の意見が一致しなくても、いいと思っているのです。その時はとことんまで譲り合って、ふくれたりすることがあるが、その次の段階に主人の言ったことをわたしは受けとめていますし、向うも私の言ったことを認めていくくれるわけです。そうして、言わなければならぬというところまでは言って、権利を獲得していると思えますが……。

伊藤 模範家庭の話ばかりですが……。

風間 草野さんにちょっと伺いたのですが、私、家庭というものは、誰にもしわ寄せのないのが一番望ましいと思う。草野さんの場合、自分でお仕事を抱持になつて、

やりたいという気持ちを伸ばしていらっしゃる場合に、いま二才半の方があるとおっしゃっていましたが、子供にしわ寄せがまいますか。自信はございますか。

#### 共稼ぎの問題

草野 それは今後の問題ですから私も自信はないのですが、でも私が一番心配するのは、子供の不良化という問題です。心理学のえらい先生方のお話を聞くと、小学校に上るまでの子に、徹底的にしつけの点で注ぎ込んでおけば、それから先は、もし仮にお母さんが家をあけたとしても、それほど心配はないのではないかと、仮定ですが、思えます。

育児は誰も代りにやってくれない仕事だから、やはり犠牲としないで、喜んで、心の半分には、社会に出たいという気がありますけれども、それをもっているとどこちも中途半端に終わると思う。ですからある程度たつたらという線を、来つ子が六才というところに引いたわけですが……。

風間 今度出て来ます時に、やはり子供の顔を見ていると淋しそうですね、どこに行っても子供のことが気になりますして、毎日子供に手紙を書いています。私にはとても自信がない。

草野 私は六才までと線を引きましたが、地方会議では

甘いと言われました。外国では小さな子供でもほったらかして、お母さんが出て自主的に育っているではないかと大学教授がおっしゃったのですけれども、六才ぐらいまでから先もちろん淋しい顔はしますが、それから先は、外国の例にならって、ある程度淋しさも辛抱させ、自主的にやっても間違いないのではないかと。

和田 私がYWCAの仕事に一番初め手をつけたのは、今から五年くらい前だと思います。一番下が満三才。でも、仕事の子供のための仕事ですから、わたしの場合は一番下の子を連れて、ずっと来ました。結局YWCAという団体であり子供会であったから、そういうことも受け入れられたのです。ですから子供をもったお母さんが働らく場所をある程度考えれば、そういう場というものはあるのではないかと。もちろん家族の協力ということは大変ですが、私の地域は非常にインテリの中産階級が多いのですが、そういう家庭のお母さんは、自分の子供さえよければ、あとの子供はどうでもいい、という、すごいエゴイストです。それでは子供は育ってゆかない。これからの子供というのは家庭教育とか学校教育のほかに、やっぱり子供同士の仲間によって育ってゆく場というものが必要です。そうなった時にお母さんたちも自分の子供だけのことに閉じこもってしまふというのは、ちょっと時代的にずれていないか。もう

一歩お母さんが先に進んでゆかなければいけないのではないかと。いかにいうので、もっと自分の子供を取り巻いている子供の集団を守るために、お母さんのグループというものをつくったわけですが、それで、自分の子供の遊び友達たちをいつも背後から見守つてやるというふうにもってゆきたいと思っています。たとえば私がしょつ中会に出て行っても全部の娘さんが責任をもって、地域全体のことを考えている。決して自分の子供は自分だけが育てるのでないという方向に現在行きつつあるわけですが、いいましても、私もしょつ中出ますので、学校にまいますと、とても劣等感を感じて、よその子供のことがかりやって、自分の子供をほったらかしたといわれたいかと思いますが……。

茂内 私にも二年生になる女の子がいます。小さい時から共稼ぎをして、その中に育つて来た子供ですが、子供はあちこちにおばあちゃんがいるので、親が勤めに出ていて間、そこを転々と歩くが、結構子供には自主性が育っていると思う。宿題もほとんど手をかけないでやるし、私がむしろ外に出てくることによって、子供がそういうふうに出てくると、随分もっている。だから子供にも、母が外に出てくるから淋しいという意識を与えないことが必要だと思う。

今年一年生をもった先生が、非常に困っていることは、

お母さんが子供にかまひ過ぎるということです。オーバーを済めるのも、ズツを寝に入れるのも、人にやらせるように育てる。こういうことは教育効果にマイナスになることを痛切に思うが、お母さんに言っても納得してくれない。

草野 乳幼児の時はどうなさいましたか。

茂内 おぶったりしまして、おしめと野菜を同じカバンに入れてかけ足しました。通信教育の仕事はあるし、組合の仕事はあるし、睡眠時間三時間が四時間で、めまぐるしいほど負担でした。それでも子供はなんとか育ちましたし、周囲にもいろいろ迷惑をかけましたけれども、その中で育ったからもしれませんが、自主的に育って、今は安心してはなしております。

斎藤 さきほどの草野さんの話は、女性の子供を持ったらなるだけ家庭に帰るように、と言うことでしたが、私はもし結婚しても、今の交換手の仕事をやってゆきたいと思っていますし、子供が出来てもやはり働きたいと思っています。

その場合に、さきほどのお話で、子供を育てていると、女は子供によって成長するのだとおっしゃいますと、こちらには経験がないのでぐらぐらときたのですが、いまの茂内さんのお話を伺って、たいへん心強く思いました。で、共稼ぎの話になるが、局でも非常にたくさんの方が

に子供を預けて勤めておりますが、おしゅうとめさんがなくて、預けて働いているという例を見かけませんので、まだ気が決まっていなくていいです。

草野さんのお話を聞いていて、人間の成長は職場だけで求められるのではなく、一人の人間を育てることによって自分も育ってゆくのだということを聞きまして、そこのほうに私の気持ちが傾きそうです。

伊藤 小幡さんは未婚ですね。そうして今働いておられますね。そういう立場でその問題をどういうふうにお考えになりますか。

小幡 私の職場には、そういう奥さんで今勤めている方も三人ほどおります。

私たちの印刷工場というのは、どうしても自分は今日家庭に帰らなければならないのに残業を強いられるという場合がずいぶん多くあるのです。しかし私みたいな独身の場合はいいのですが、奥さん方になりますと、残業をやらされるということによって家庭にひびく影響というのがすごくあるわけです。それで、奥さん方に残業を強いるわけにはいかないのです。ところが、納品期日が問題の仕事です。その品物を納めるか納めないかによって、ある程度事業の内容も変わってくる。それによってどうしても残業を強いる形になってしまうのです。奥さん方はいへん苦

勤めていらっしゃいます。局の場合は、託児所がないのですが、お手伝いさんに頼んだり、おしゅうとめさんにお願いをし、おひるに赤ちゃんを連れて来てもらって哺乳するが、それでもいいと思う。親がかわいそうだと思うのは、もちろん親心として当然と思いますが、もう一歩上に立ってさきほどもおっしゃいましたように、あまり子供ばかりに頼っているのはいけないと思います。母親がそういう気持ちをもつということももちろんいいと思いますが、それがために子供の自主性を失うということが非常に大きいのではないかと思います。だから、ずっとお乳を飲ませる間、ついていなければならないと思うのもいいですが、それと同時に、託児所なども、もっとふやして、安心して働けるような社会制度をつくるのがほんとうではないかと考えます。(拍手)

伊藤 非常に大切な問題にぶつかってきていますが、高谷さんはお子さんがなくて共稼ぎですね。そうすると、どういうことをお考えになっていきますか。

高谷 私も述べているのですが、新しい家庭をつくったのは自分の意志です。これから子供をつくるのも私たちの意志ですが、共稼ぎをやめたら生活が苦しくなりますし、述べているのです。

それで周りの方を見ていると、大体おしゅうとめさん

がなさっているようですが、私、それを考えます場合に、いま働いている奥さん方を見ますと、生活はそれほど困らないのです。ですから、子供が大きくなって、御主人も勤めに出て、子供達は全部、学校に行っているもので、日中はほとんど暇になるらしい。家でぶらぶらしていてもしょうがないから、娘時代にやった仕事をやって、生活に余裕をみつけるという形で、働いている奥さんが多いから、同じ共稼ぎをする場合にも、必要に迫られて共稼ぎをしなければならぬという場合と、そういう気持ちで共稼ぎをしなければならぬという立場と二通りあるわけです。

私もやっぱり、なるべくなら共稼ぎしたいと考えておりますけれども、私の場合、この仕事は、技術をもっていなければできない仕事です。誰でも彼でもできるという仕事ではない。それから、経験者は、自分の仕事はあまり他人に分けてやりたくないというか、そういう気持ちが多いのです。若い子が入って来ても、自分たちの仕事は教えないのです。なぜかという、若い子に教えてしまえば、自分たちが職場を追い出されてしまう形になる。やっぱり、使うほうの側にいわせますと、奥さん方を使うより若い子を使っただけがいいということになってしまいます。それで、自分たちの仕事を教えてしまったら自分たちの仕事が

なくなってしまう。それで、なかなか自分たちの仕事を若い子に教えたがらない。それを見ていてどうしても必要に迫られて共稼ぎする場合は仕方ないですけれども、そういう場合でなければならぬ若い子に職場を譲ってやって、自分は指導する立場になって、だんだんに身をひいていくようにしたいと思っています。

下山 私、二才の子供がおります。二二年間ほど、映画に行ったことは一回か二回しかありません。子供を置いて出るといふことはとても不安でした。それに、子供を見てくれる者もない。おじいちゃん、おばあちゃんがいますけれども、頼んで出るといふことがなにか。女学校時代の友達も、二人暮らしだったら別ですが、おしゅうとさんのおる家に入ったら自由がないという。家庭の主婦というものは、一人社会から隔離されたような気がしますが、たまたま婦人会に引っぱり出されて話しあう場所を得て、とてもよかったです。

伊藤 いま草野さんの問題から、非常に大切で、なかなか切り切れない問題が出てまいりました。

長岡 私は、結婚する前は勤めておりました。その会社は封建的な会社で、結婚した人はみな辞めなさいといけません。それで、私の前に結婚してから勤めていた前例が

一つもないのです。主人は安月給なので共稼ぎをやめると生活が大変なので、頑張ってみようと思ったのですけれども、その前に家を転居したので、今度たいへん会社まで遠くなり、私のほうから辞めました。私は子供が出来たら一年か二年くらいはやっぱり自分で育てないといけないと思ったので、それまでの経済力の見直しを立てるために内職を始めようと思いましたが、絹物も、生まれてやったことがないものですから、それが商売になるまでには一、二年かかる。

会社を辞めてからさっそくに絹物の機械を月賦で買いました。社会の機構が共稼ぎが許されるようになっていたらしいですが、その辺がむずかしいものですから会社を辞めたのです。

伊藤 絹物はどうしたのですか。

長岡 現在やっております。

これから子供が生まれるところですが、さきほど申しましたように、おしゅうとめさんはおりますけれども、やはりおしゅうとめさんたちの生活もあるわけですから、孫の世話をしたいおしゅうとめさんでしたら別で話しあい、お互につけたいが、おばあちゃんだからといって、甘えて、みてくれないだらうという考えでお世話をお願いすることは、自分で生んだ責任上、やはりいけないので

はないかと思っています。

私の母になる人はいへんはつきりしております、よんどころなく、たとえどこかに出席しなければならぬやむを得ない事情ができた場合は別ですけれども、私の子供ではない、あなたの方の子供だから方角もあるだろうし、預かるのにたいへん責任を感じるから、あまりむやみには私も自信もって引き受けられないとおっしゃる。私も、そういう甘い気持ちでなく、なるべく自分たちで育てようと思っております。

草野 いまの長岡さんのお話に社会保障制度とか社会のあり方が、もうすこし私どもの行き方に合っていれば共稼ぎができるけれども、というお言葉がありました。社会のあり方とか社会保障制度というものは前途遠慮ですけれども、私どもがつくってゆくものでしょう。ですから、どっちの方向に向ってつくってゆくかということが目標にあると思います。

自分が周囲の共稼ぎを見ました時に、ある方は、おしゅうとめさんのほうがおむつのつくり方なんか熟練工だけれども自分の子だから自分で手をかけて育ててゆきたいという気持ちがあるわけです。近所の学校の先生の共稼ぎを見ておりますと、未婚の姉さんに頼んで預けていらっしやる、そこにとっても不安を感じる。

それから茂内さんは、三時間ぐらいの睡眠で苦労なさいました。そこを切り抜けてきた方です。とてもえらいと思いますが、お子さん一人だし、それが二、三人にもなりますと、身体的にもこたえてくると思う。その場合やっぱり無理がそこに出てくるのではないかと思う。現在共稼ぎをして、乳のみ子をかかえていらっしやる方に、ほんとうに本音を吐かせてみたら、苦しいとおっしゃる方が私の周囲には多い。だから経済問題とかからみまされども、やはり私の持論を通したいわけです。社会保障制度としては託児所をというのには必要かもしれませんが、私が見てきた一生の半分の体験では、子供を育てるお母さんに養育費というものを望みたい。スエーデンの社会保障の権威の方のお話でしたが、学校を卒業するまで負担してくれる、一週に四百円くらいの養育費が、保障制度として与えられる、そういうものがあつたらお母さんが肉や卵の一きれでも食べながら子供を育てることができると思う。

斎藤 いまのお話で、問題が一つあると思う。家庭に入って、子供によって成長することともとてもいいと思うが、家庭に入って接する関係が、自分の主人であり子供であるという場合、それだけに閉じ込められ易くなって、子供の顔色だけをうかがって生活するというような生活になり易いと思う。それは私の場合でいいますと、組合の役員を



際やっていますと、組合のことをいろいろやりたいと思っているが、それがひと度組合の役員ということから退きますと、自分では関心をもとうと思っても関心がもてなくなる。それと同様に、家庭だけにとると、社会とのつながりといった面が欠けてくるのではないかと思う。

だからもちろん職業をもって、自分の子供を育てることはむずかしいと思いますし、苦しいだろうと思います。私の先輩も、苦しい苦しいとよく言っていますけれども、私思うのは、苦しむのが当り前だと思う。だから、苦しいからやらないでおうというよりも、苦しいからなおやる。私も後へ続く者への立場から、そのほうがいいと思います。

伊藤 草野さんの場合、六年前の第一回全国婦人会議に出席されたときは、お子さんも小さく、育てるのに一生懸命だった。それからみごとに子供を育てました。これから職場に出てゆきますと、自信をもっていわれると思う。それを聞いて私もやりましようといっても、なかなか簡単にできない。いろいろな家庭の事情とか経済的な事柄とか、社会的な環境もあると思う。草野さんの場合が絶対とは言えないので、共稼ぎの方は多くは中学で子供を小学校まで出してしまっただけになったから、子供の大学の費用でも稼ごうかという気持ちで来られる。そうするとこれから一生懸命

か。この問題は、今度の、集団における個人の自主性という問題にびったりからまって、根本的な問題だというふうに考えられます。

そこで御参考までに申し上げるのは、終戦後混乱した日本にやって来たアメリカのベリガンという、ニューヨーク・ポストの記者ですが、日本の家庭をずっと見て回って、ほんとうに日本を民主的な国家にするためには、家庭において子供の育て方から変えなければいけないということを書いておられます。それは、日本をほんとうに民主国家にするためには、日本の社会の隅々にはびこっているポス退治する以外にはない。日本の政治は地域的なポスによって支配されている。それを退治する以外にはないが、そのためには家庭でしっかり、自己をもった子供を育てなければいけない、ということを書いているわけです。

自己をもった子供を育てるためにはどうするかといえば、やはり子供の自由と子供の自主性というものを伸ばす以外にない。日本の親は、子供を非常にかわいがる点において、世界的に知られております。子供に愛情をもつということは自慢しいと思う。しかし、その愛情が、悪い言葉でいえば動物的な愛情であって、いわゆる猫かわいがりであったという場合には、子供の自由も束縛されていますし、子供の自主性は伸ばされていない。これは直接

生きてゆくとする若い人に職場を譲ってくれと主張されるのはもつともだと思ふ。よけいな人が入って来ると困る。そういう非常にむずかしい問題があって、いちがいには割り切れないが、斎藤さんのように、あるいは高谷さんの場合にはすこしよめきかかっているようですが、これから、という方々がそれぞれのお考をおもになつたと思うが、もう一つ、この問題の底にある、そしてみなさんの間から話しあいが出たのは、子供の育て方の問題だと思ふ。この育て方の問題に関しては一つ私、御参考になるかどうかわかりませんが、みなさんの話しておられる話の中から一つ言えることは、子供を甘やかして過ぎること、これは日本の家庭での子供の教育についていえるのではないかと思う。甘やかすということ、別な言葉でいえば世話をやき過ぎる、やき過ぎるということは私の考ですけれどもこれは子供の自由を認めないということになりがちだということです。家庭で子供は子供なりに自由をほしい。自己を主張する場合にそれを非常に感情的な世話やきで制限してゆきますと、私は、自由というものを知らない自己主張のできない子供が育てられてゆくのではないかと思うわけです。そして、そういう子供が社会人になるということ、結局、自由というものを知らず、したがって責任というものを感ぜない子供が育てられるのではない

共稼ぎという問題にからまるわけではないが、その点はやはり今後の話しあいの中で考えあって、進めてゆきたいと思っています。

一応この辺で、家庭といったものを中心とした話題から、さきほどから出ております寄宿舎の問題、集団住宅の問題、またみなさんの中で地域婦人会などのお仕事をしておられる方の間では、いろいろな問題があると思いますが、日本の、われわれの住んでいる生活周辺の中から自由という問題をもう少し進めてみたいと思います。

中野 子供の育て方ですが、実は私の友達で、その方は相当民主的に子供を育てていますが、たとえば、雨降りに出掛ける場合に、自分の長靴しか洗わない。子供に、自分のを洗いなさい、と手紙を書いて出てくる。自分で洗ったほうが早い、子供に自分の仕事は自分でさせたいというので、すべての場合にそれ式のことを実行していらっしゃるわけです。しかし、時々ふつと、こんな子供の育て方をして自分のことだけじゃない、なにも人のことを考えない人になってしまったらたいへんだな、ということに反省しながらいるけれども、どんなものかしら、とおっしゃるのです。

伊藤 しかし、自分のことだけじゃない子供が出来たら、立派なものではないですか。

軍野 そこにサーブイス精神というものを、私、非常に重要視するのです。

#### 婦人会の中の問題

田口 私のところの婦人会というのは、運営がわりあい低調というか、会員にちっとも発表させないで、上のほうで決められてしまっています、誰も反対意見がなくて、パチパチと手を叩いて、スムーズにいったと考える婦人会が多い。私のところの「くらしの会」というのは、世の中をよくするために私たちはどうしても自分たちのくらしと政治をむすびつけ、政治に関心をもちなければいけないという考でつくったわけです。私もはじめ家庭にずっとおりまして、四年ぐらいい前に、家の中にばかり閉っ込んでおったのでは世間のことがわからないから、せめて月に一回くらいは出て行って、世間の人とお話したいと思い、何の会に入ろうかと思っていました時に、新聞にくらしの会といって、私たちのくらしの中にあるいろいろな問題を解決してゆきましようという会があった。そこで、その会に入ったわけです。

会員は、四十人くらいで、全国的なものです。私たちのくらしの会は、みんなそういうふうに、入ろうと思って入った会ですから、みんなそれぞれの意見を闘わすのです。

う人」とい意味にとらうと、私たちの会で言い合ったわけなのです。

伊藤 どこにでもありそうな問題ですが、織田さんの場合、どうでしょうか。

織田 私のところは昔からなかなか堂々たる婦人会があったのですが、田口さんのおっしゃったような問題がこじれて解散した。そのもとなつたのは、結局今までのふんまんをもった人たちが、社会学級というもので頭をあげたわけです。そして急激に事をやるうとしたのです。ある程度まで計画をもって、忍耐をもって徐々にやればよかったと思うが、それをやらないで、いきなりぶちこわしてしまつたので、みんなわれてしまつた。二、三年くらい前から意見を発表すると叩きつけられ、何か希望があつてもいれられず、役員と普通の会員の間に一線ある。社会学級などではだいに目覚めてきたような人にはがまんがならなくなつてきているのに、上のほうは依然として得意気にしていられつるわけです。そんなので、結局やぶれたのですけれども、市の連合婦人会のほうからも、この地区は大きいから、そのまま婦人会をもたないでいてもらつては、まことにいろいろな点困るから、なんとかやれと、公民館を通して働きかけがある。それでは会員の募集をし直して、今まで通り四町内一併にした大きな地区の婦人会を

が、地域婦人会というのは、その地域に住んでいたから婦人会に入つたという人が多い。

くらしの会の人たちが、方々の地域におりまして、婦人会に入っているわけです。そうしてある方が会に行きまして、その会に講師の方がいらつて話した時に、講師の方が、昔風の、女の人は女らしい、という態度をなさつたので、その方がちよつと反撥を感じ、それに対して意見を言つたわけです。そうしたら、そのあとで講師の方が、この会の中には「けちゃもん」がおるものだからどうも巧いかな、というふうなことをおっしゃつたわけですね。その方は、ずいぶん恥をかけたわけですね。「けちゃもん」というのは、ほんとうは悪い言葉らしいのです。けちをつけるもの、とかいう言葉らしいのです。わたしもはっきり知らないのですが――

そうしたところが、もう一人講師の方がいらして、その方は、婦人会に「けちゃもん」がおらないと、婦人会というものが発展しないとおっしゃつた。それでその人は面目を取り返した。そういう話で、なにか反対の意見を述べるとすぐそういうふうに「けちゃもん」だとか、出しゃばりだとかいわれるわけです。そうして、せっかく私たちが男気をもって発言しますとすぐ何かいわれるわけです。だけれど「けちゃもん」というのは、「自分の自由を堂々と言

つくる」ということになって、今まで通りでは反対が多いので、とにかく各町内から副会長のなの人たちを一人ずつ選んで、会長なしで運営してゆくというやり方でやりかけたが、それがまた問題になって、引っくり返つてしまつた。それで半年くらい何も具体的なきを起さないできたのです。

それが二月ごろ、このままではとてもだめだ。婦人一人一人が充分発言したり、自主性を育てたり、責任を果たしてゆくには、グループ活動が必要で、社会学級というものはわりあい特殊な目で見られているから、今までになじみの深い婦人会を手だてに、できるだけ大ぜいの人を何とか引張って行こうではないかということになりまして、その話が巧くいって、私たちの町内だけで婦人会が出来たわけですね。それで会長を私のところにもってきたが、引受けるについて、三日くらい考えました。というのは、やっぱり土地柄が土地柄ですから、会長になる順序があるわけですね。私の番にくるのはまだ早いのです。社会的地位とか、経済的ゆとりのある人とか、教育程度からゆけば、私はまだまだ下ですが、選挙の結果、私のところに来て、ここで私が断ると、せっかく新しい気持でみなさんが会を何とか巧くもつてゆこうという気持で選んできてくださったとすれば、その人の考をつぶし、機会を逃すことだと思つたか

ら、図々しいけれども、会員一人一人、役員一人一人が助けてくださるならばつまらない者でも会長は勤まるということを実証しようと思って、勇気をもって受けた。

百軒ほどの町で、会員は六十人しかいないけれども、全部の人にできるだけ会員意識をもってもらいたいと思つた。それが動いていかなければならない。それには町内が班に分れているから、婦人会も班に分けて、班に班長を置く。一人の班もあるが、一人の班でも班長を決めてくださうという。当然その人がなるわけですが。

そして、各班に仕事を分けてもってもらつたのです。会場がないのでお風呂屋さんの板の間に座って、三時にお風呂をあけなければならぬというので、時計を見ながらですが、それでも教養部とか、レクリエーション、奉仕部とか、みなさん御存じのようなものをつくりました。ほんとうのことをいいますと、みんな得意のところに加わるのが理想的ですが、そうすると弊害があるので、班ごとにお願ひして、一年交替ということに決めた。そうして、敬老会をやる時は奉仕部が主になって案を練ります。もちろん私もその中に入りますが、その人たちがうんと一生懸命やるわけです。

それから、経済的になんとか確立してないと会も巧くいかないと思つた。そうかといって、頭下げて寄付を仰ぐの

もいやですし、会費を上げるといふことも問題がありますから、保険の集金というのをやりまして、これも抵抗がありました。みなさんが協力してくださつたので乗り切つて、今月から三千円ぐらいのお金が会分に入ることになつて、何に使おうかとみんな楽しんでいふというわけですが、今のところは非常に巧くいっているように私は思つていふのですけれども……。

伊藤 いまの場合にもうちょっとお伺ひしたいのは、今までの会が解散した直接の原因は、社会学級のようなもので勉強した人たちが起つたというのですが、社会学級が特殊な目で見られているというのはどういうわけですか。

織田 やっぱり、ああいう人たちは頭の程度が高いとか、有閑マダムというのですか、そんなふうにみられるのです。

伊藤 社会学級はどういう仕事をしているのですか。織田 仕事はしていません。集まって自分たちが楽しんでいふのです。

われらきつかけをつくつたのは、社会学級の中の一人の勇敢な婦人が、総会で発言したのがもつた。今までのやり方がいけないというのです。ワンマン的な、一方的な会の運営ではいけない、下から盛り上げてゆく会であればいけないということを強硬にいったのです。それを後

ろかわからない。

伊藤 いろいろな問題をもつておられると思うが、下山さんもやっぱり婦人会の問題ですね。

下山 私どもの婦人会は、戦争中の婦人会の組織がそのまま続いております。町内に住んでいる婦人は全部婦人会員で、お嫁に來た人は知らない間に会員にされて、会費を取りに来るといふことがあつた。会員数は二百数十人で、もう一つ悪いことは、それが町内会の婦人部だったので、自主性が認められていない。町内会というのがちょっと困るのですが、選挙の度に特定な候補を推せんする。それに婦人会が横柄を入れ批判しますと、「町内会は専主だ、亭主の言うことを女房が聞かんのはなにござだ」といふのです。婦人会も、町内の福祉になるようなことでしたら反対しません。選挙や寄付集めを強制的にやらすのです。町内会に出てみますと、役員は当番制になっていまして、二十何人いるのですが、その中に発言するのが三人くらいなのです。会長とその腹心の、二、三人の言いなりになってしまつています。当番制ですからその中にいろいろな職業の人があります。三十七、八の教員の方もいらっしゃる。どうして何にも言わないのかというところ、言つたところでどれだけの中でわかってくれるか、だから言わないほうがありました、ということです。大体考えようもしない男の人が

押しした人が、自由と責任とを充分に考えない人だったために巧くゆかなかつた点もあるのです。それは、喋ることには喋るのです。やりなさいやりなさい、私たちが大ぜいいつている、という、ところが言いつぱなしで、責任はとらなかつた。そんなことで、孤軍奮闘という立場になつてしまつたのです。しかし、そのおかげで、みんなが考える人間になつたと思ひます。ですからその方に一生懸命、あなただのやつたことはよかつたといふことを吹き込んでいふのです。

自分で実際にやってみて、今行き詰つていふことは、まあ大体の方は協力的で、一生懸命になるのですが、中に、役なんかもつてこられては、会に入らないとか、集まつて来てくださうと言つても、出て来ない班が一つある。六人いる中で一人しか来ない。「今火をたいていますから」「お客さんがありますから」「御飯食べていますから」といつて出ない。それで書記をしている方が、会長がここまで来ているのに出ないなら、入つてもらうのは迷惑だといつて、私が、まあまあと止める。そういう人たちにどのように協力的になつてもらうかということが課題です。できるだけ先生方にお願ひして、いらしていただいたりというようなことから始めようと思つて、来月とりあえず社長の先生にお願ひしたわけですが、それにも出てくれるかど

多い。まあいわれる通り「はいはい」と全く自主性のない男性によって運営されている。婦人会はこれまで会長、副会長でなくとも決めていたらしい。そしてそれは三役で決めるから、町内会の圧力に耐えかねて、一年の中に何回もやめるといってはまたわりやりにさせられることがあった。

それが今度私たち三人に代りまして、すべてを会員に話しかけたのです。どういう問題が起きても会員に全部わかりますから、そういう圧迫をするような町内会なら悪い紐を切るうという話が出まして、町内会に婦人会を独立させるように、再三再四言っても「絶対に独立させない」とだめなのです。しょうがないから、いまの婦人会を自然消滅の形で、独自のグループをつくらうという話を話し合った。そうしたら町内会が今度、そんなグループをつくらつづけてやるといいます。それで一つの町内会の中から、喧嘩してもいけませんし、少し冷却期間を設けようという、婦人会では沈黙職権に入りました。

ところが三月半ば頃になって突然、独立させるといってきた。私たちはあつげにとられてしまった。どうしてこういうふうな町内会が低姿勢で出てきたかと思つたが、これまでの交渉の結果を全部全員にお話ししたら、全員が隔ってから言ひのは失でしよう、だから夫で形成されている

います。そうすると各当番を集めまして、今度こういうことになったからというので、前の選挙の時などは婦人会の人がみんな一生懸命にやりました。それをやらないと、あの人は区長にたてをついたということになりますから、婦人会そのものの中に会員の自主性ということとは全然ありませんし、また婦人会としても部落の幹部に対しての自主性というのは全然なくて従属関係です。またそれが大きくなって町の婦人会というものになっておりますから、私たちが前の選挙の時に、こんな馬鹿なことはない、どうして婦人会の支部長が、会員に相談しないで決めてしまうかという問題をもったが、もっとも婦人会の会合というのをやらないから、平会員という立場では言う場がない。蔭でこそそそ言っている程度です。

それで婦人会の仕事といいますが、主なのは、経費をつくるためのいろいろな物売り——石けん売ったり、ちり紙売ったり、ですから、私たち仕事をもっているのです、そういう婦人会にめったに出られない、会員として何も言えないから、どうしたらいいかと思ひまして、幸ひPTAのお母さんたちで話しあえる人があったので、PTAの婦人会というところで、ともかく有志の人たちだけで集まってこういうことをいろいろ考えたらどうだろうということになった。

町内会でやはりそういう力が働いたのではないかと思ひます。一応独立した形になりました。これまでは共稼ぎのような全く婦人会活動に参加できない方も会員だったが、今度ほとんど入りたい人だけの婦人会になりました。

伊藤 大休地域婦人会を中心とする問題が三つばかりありましたが、これについてお聞きなさい。いまの場合、町内会としての自主性とか、その中における会員の自由とかいうようなものがほとんどなかったのです。幹部だけが動かしていた……そういう問題についてお話し願ひたいと思います。

宮前 私たちの婦人会もやっぱり同じような国防婦人会的な、自分が知らないうちにいつの間にか自然に入っていて、お嫁に来ればすぐ会費を徴収に来るといったような形です。やっぱりそういう町内会——うちのほうは町内会といわないで、字というのですが、アザから婦人会に対して、おすかですが補助金をもらっていますから、紐つきです。やっぱり選挙の時になると、アザの区長の言ひになります。区長さんが今度町長選挙にこの人を支持することに決めたから婦人会も応援してくださいという、婦人会の支部長というのは、会員に相談するでなしに、その場で、「喜んで応援させていただきます」という形になってしま

ところがあるだけということになると、特別な目で見られ、結局やめることになるから、みんなに呼びかけましようということになった。今度の婦人会は、字の小さな集まりですが、それをするだけでも、やっぱり区長さんに許可をもらわなければならぬし、PTAと名前をつけた以上は、男の役員にも相談しなければならぬ。私たちもいろいろなるものと考えましようというちょっとした小さいグループをつくるということが、そういうふうにあちこち引っかけが出来る、始めて小さい部落の中の仕組というものにびくびくしてしまつた。

ともかく、何でもいから出来易い形でやってゆくよりしょうがないというので、男のPTAの役員にも呼びかけ、区長の許可ももらって、学校の女の先生と話しあおうとしましたが、女の先生は女の先生で、校長先生の許しを得なくてはなりません。すると校長先生が「わしが行く」ということになって、その会の時に校長先生がいらつして、それからともかく月一回の会は続いているのです。

伊藤 その会はないか名前つけましたか。

宮前 名前をつけようといったら、やっぱり特別扱いにされるから、PTAということにしようということで、PTA〇〇支部というふうになっています。

校長先生がその時に学校の先生を連れていらっしゃるという形になって、なんだか初め自主的な集まりだったのが、校長先生の息がみななかかってしまっただけで、自由な話し合いができないという形になっているので、今度から校長先生にこないでいただくという形になっていくことになるのだ。

それからもう一つ、婦人会の会長さんが、前に衆議院に立候補された。その時全部の婦人会が動員され、先覚分子の会長さんは運動員をされたが、その時も下部にはその方の政策とか意見とか全然紹介されず、会長さんだから選挙してくださいということで活動されました。下部としてはいろいろ疑問をもっていました、それを言う場がない。婦人会というのが、上意下達という式で、下からの声をちょっと入れてゆかないということに不安をもっています。

伊藤 いまの宮前さんの話を聞いていますと、一つには都会をちょっと離れて古い形の生活共同体の姿がある。その中にはほとんどの住民が選挙の自由さえもっていない。あるいは批判の自由、言論の自由さえもない、という社会がある。そういう形がそのまま婦人会に入ってきている。そういう面をみなさんの間で意見を交換して、自由に批判してもらって、その中で、会員の自由というものはこういうものだ、という点まで伸ばしてみたいのです。

族国家です。私たちが育てられた家族制度というものが、学校の中にもあった。これがほんとうは変らなければならぬはずなのです。教師も校長も、全く社会人としては対等でないといけない。平等でなければならぬ。

今日は、婦人会の問題ですけれども、婦人会の問題になりますと、大体出た問題で尽きていると思う。何年やっても、みなさんが着物を脱ぎ捨てて洋服になってきて、なかなか日本の社会にある地域婦人会の問題は変ってこない。これはまだまだこれからの都会でも出ると思いますが、主として農村のほうの都会で、たくさん出てくると思いますので、あとの時間は、職場で働いておられる方、組合の活動をしておられる方がありますから、職場の問題と、小さなグループの問題とを一緒に進めてみたいと思います。

### グループ活動における問題

和田 私はさきほど申し上げましたように、子供会をつくり、また、お母さん自身の教養を深めるために、子供会の母親グループというものをつくったのです。ちょうどいわゆるギャング時代といわれる……子供がすこし不良化しかけましたので、お母さんたちが、何とかしなければならぬと思いつながらどうにもならなかったが、初めは二、

風間 いま、PTAの会といっておきながら校長先生をボイコットするという話がありました。PTAというのは先生と父兄の会だから、当然校長先生も先生も、みな入ってお話しになっていいのではないのでしょうか。

宮前 校長先生が出ていらっしゃってのももちろん結構ですが、毎週いらしていただく必要はないですよ。そうして、学校の中の先生と校長先生の職場の関係が民主的な場合ならいいが、先生が校長先生にいつも気をかねていらっしゃって、ちょっと自由に発言なさらない。顔色ばかり見ている。そういう空気のなかでは、お母さんたちも思うように発言ができない。

伊藤 ちょっと私、感じていることを申し上げますと、校長先生の考え方は、社会的に非常に混乱している。ことに管理職手当ということで、普通の職員と違う地位をもつてゆくことによって、学校というものを支配階級に置こうとしている。校長先生自身もそういう考えをもっている。だから、校長先生がおられると普通の先生が発言がしにくいということは、この二、三年の間に非常に変わってきました。日本に伝統的にある職場の問題としては、たとえば職員室、そういうところはもう一軒の家で、校長をおやじと思いついて、そういうことで、ずっときていたのです。日本の社会構造がですね。国家全体が一つの家族でしょう。家

三人の人たちが話しあって、子供のためのグループをつくる、そうしてまた自分たちがグループをつくって子供の問題を考えてゆくということをつくったわけです。

会員は現在のところは九十名ばかりありますが、もちろんみんな地域婦人会にも入っておりますし、PTAの会員でもあります。別に地域婦人会とか、PTAにあきたらないからというわけではなく、ただ子供の問題をほんとうに話しあおうとして育ててきました。初めは二十人ぐらいのグループで、大体月に一回ぐらい勉強会をもって、そのほかには子供会のために、ハイキングや、クリスマスなどの集いの仕事を援助していたが、一年位たつと人数が多くなって、五十人ぐらいになりました。人数がふえると、メンバー同士の人間関係が薄れてきたように思ったのですが、それがいつの間にか——どういふ動機でといわれると困るが——いつの間にか、その中のメンバーがまた中心になりまして、現在五つのサークルをつくって、五つの小集団をもって一つのグループをつくっています。グループの発展の仕方としてはよかったのではないかと思っています。

そういうふうに、初めから目的をもってつくったグループですから、そこで個人の自由が束縛されているということとはあまりないのです。それで、しゃべり中アンケートをと

って、調べて——ちょうどいい助言者の先生をたくさん、見つけることができたので、わりあい科学的な調査方法で調べてみて計画を立てるが、みなさん、自由に、伸び伸びとやっていらっしゃる、もちろんグループによって学習の仕方もあるが、大体自由に喋っていらっしゃる。しかし、そうして集まったとはいいながら、やっぱり責任ということになる。まだ誰かがやってくれるだろうという気持ちがある。そこまでは成長してない。結局そこで自由に発言するとはいいますが、その二年間の経験の中では、やっぱり発言をしたことによって、とばかりが思わぬ方向にやってくれた、というようないい面もありますし、ものを言ったために、その会員同士の人間関係がぶれてきたということもあるのですけれども、私が考えるのは、結局その場で発言する訓練といいますが、そういうことを積んでゆきたい。

さきほどから地域婦人会の問題がいろいろ出ています。が、発言できないというのは、結局は私たち三十過ぎの主婦というのは、戦時中、上の命令はとにかくなんでも聞きたかったので、批判する気持ちもなければ発言する能力もないからなので、そういう能力を養ってゆくためには、百人も十人ものところでものを言えというのは無理で、小さいグ

お当番制で、リーダーをつくっていらっしゃるわけで、それの相談です。結局相談を受けて、講師の斡旋とか、全部の、集まってきた記録をまとめるとか、対外的なことをする。

それからもう一つ気をつけたいと思うのは、グループ活動というのは、同一の目的をもって集まった集団であるがために、その活動自体が閉鎖的になるというのにはある程度しやうがないが、特権意識というか、私はこないこととして、というという気持ちから、なにか排他的な気持ちに結びつく、また外部の人も、あれはああい、われわれと違う人種がやっていると、という目で見易いのです。いろいろなグループが、いわゆる上からの命令でつくったのに連合会というのでなくて、もっと広い気持ちで、輪をとじないで、お互に手をつないでいきたい。自分一人の問題と思っていたことが、あるいは社会全体の問題であるかもしれない。国として考えなければならぬ問題かもしれない。たとえば進学のこととか、母親だけが考える問題でなくて、もっと大ぜいの人がお互に手をつなぐことによって解決する問題があると思うのです。

伊藤 和田さんのグループの場合は、目的をもっているし、その中で自由が制約されることがほとんどない、割り切れたグループの場合ですけれども……。

グループで発言の練習をしてゆくのが大事なのではないか。もう一つ私が非常に気を使っていることは、発言するだけではない、それをどういうふうに使っていかるとかという勉強が、とても大事だと思う。意地悪く見たり、人の言うことを一々揚げ足をとるような聞き方をしたり、第三者に話す場合に、尾ひれをつけて、都合のいいように喋ったりというところで、グループ活動全体が乱れてくるということがあるので、発言の仕方、受取り方というのがとても大事だと思ふ。さっきも言いましたように、私たちそういう訓練を受けていまして、長い年月をかけていることが大事ではないかと思ふ。

それからグループというのは、決してリーダーだけで育つものではないということを感じているわけです。リーダーシップというものは大事だけれども、集団が育つことによって個人が育つこともあるが、個人が育つことによって集団が育つてゆくという考え方を私、とりたいて思っている。

伊藤 和田さんは、子供会ではどういう責任をもっておられるのですか。

和田 子供会は、高校生とか大学生に任せて、その相談を受ける。母親の集りも、その五つのグループがそれぞれ

風間 和田さんに伺いたのですが、いま五つのグループとおっしゃいましたが、そのお世話をするのは、どういうふうな輪番制にいらっしゃるのですか。

和田 そのグループのお世話役は、大体輪番制でやっております。会場を提供するとか記録をとるとか、司会するとか……。だから一つのグループは十五、六人です。それはグループの自主性に任しているからタッチしないが、大体お当番でやっています。

富前 私の場合は、歯科医師会にも入っておりますし、その中で婦人歯科医師会というのをつくっております。歯科医師会というのは男子の方がほとんどで、女子は少ないが、その会には実証的建設的。若い人たちの意見というのがなかなか出にくい。ちょっと反対な意見を出すと、なにか圧迫感がある。女ですとよけいなにも言えない、なぜ発言できないだろうということ、よく考えるのですが、非常に大事な会でありながら内部の事情も案外無関心で、自分がよく知らないということ。

婦人歯科医師会という女の人だけの会を、男の人たちにあまり馬鹿にされないように勉強しましょう、という目的でつくったのですけれども、やはり婦人歯科医師会というものが、歯科医師会の空気を受けていて、そういうふうになってしまっている枠があって、自由に発言もできないと

いう空気があるのです。そういうことをよく考えて、こんなことでもいいのかしら、と思うようになったのは、自分が小さいながらも、さっきお話ししましたPTAのクラブの会をやっており、その時に自分が一応リーダーなのですが、みなさんが発着してくだらないのはなぜだろうと考えるようになってからです。今度の会はどうしようといっても誰も意見を言わないから、一方的にこれでいいだろうと自分たちで勝手に決めてしまう場合が多かった。そういうことを、今度自分が婦人歯科医師会の会員の一人として見ていますと、リーダーのやり方に不満を感じて仕方がない。初めの間は私たち、とにかくリーダーにおまかせ気味で、自分が気に入らなければ出て行かなくていい、というお客様意識でやったから、自分がリーダーになった場合と比べ合せて、これではいけないと思った。婦人歯科医師会も、その中で自分たちの仕合せを受けるための会だから、その会がよく育つことによって自分たちが仕合せになれる。それを育てる努力をしないで、あなた任せで、気に入らなければしょうがない、出てしまおうという気持で、仕合せを獲得できるだろうか、というふうな気がついたもので、それから、それでそういう同じ気持の方と一緒に考えて、リーダーにお任せするだけでなく、私たちが育てましょ、それには責任をもたなければならぬから、責任をも

ところが、工場には約三十人ぐらいの工員その他の人が働いておりまして、工場がつぶれてしまったら自分たちの働く場所がなくなる。なくなるということは、明日からの自分たちの生活が危ぶまれてくるわけです。それで、いまこの会社が、つぶれてはいへんだということで、どうかして自分たちの力で、もう一度会社を建直そうではないかと決めたわけです。それまでは親睦会という名前の会があったが、その時に労働組合に変え、労働組合が出来たわけです。委員長そのほかたくさん出来ましたが、そういって、それからずっと会社再建の歩みが続けられています。それまではうちの社長はワン・マンで、あらゆることで社長の指図がなければ仕事ができなかった。工場の人も事務所の人も、自分でその仕事を進んでやるということができなかったのですが、それからは自分たちの職場をつくり直さなければならぬという自発的な気持で、仕事を自然に、自分で進んでやるようになった。それによって、今まで上らなかつた実績も、以前より上るようになりまして、会社はあれから四、五年くらいになるが、今ではどうやら代りの社長ができたわけですが、社長は常勤ではなくて、一月に一遍「どうだ」と顔を見せるくらいです。中みは、工員、あるいは職員、従業員全部で、会社を盛り上げているという、そういう会社なのです。

ためにみんなで代り代りに当番制にして、講習などもみんな考えて、要求を出して、当番制で連絡もやって、みんなでその会を分担するようにしようということで、この間も話しあって、やりかけたばかりなのです。

伊藤 一つの職業をもっている方のグループというものがあつたわけですね。これは社会的にたくさんあります。これがなかなかいまとおっしゃったように巧くいってないのです。

それで「お客様意識」という、たいへん適切な言葉が出たが、これは婦人会でもなんでも日本の集団生活の中によくあることです。職業的なグループが出たが、職場のグループでは……。

#### 職場における自由

小幡 さきほどもちょっと申しましたように、私の職場は印刷会社です。私はいまの会社に中学卒業してすぐ会計事務兼給仕という名目で入ったが、その翌年、会社は一応法人組織になっていて株式会社ですが、突然思いがけないことに、ある日社長が負債を残して、假手紙をして、失踪してしまつた。現在までどこに行っているか見当もつかないわけですが、それで工場は負債者との関係その他で、もうすぐつぶれるというはめに陥つてしまつた。

それで実は私も、入りました時は会計兼給仕、そのほかいろいろ仕事をやつたわけです。ところが自分で仕事についてみて、矛盾を感じることは、自分は会計でありながら、お金を動かすことは全然できなかったわけです。社長の失踪前は、社長の指図によって、伝票はこういうふうに通つてくれというふうに通つて、全部それによって記帳をして、金庫に入りましたお金は、一応そのまま銀行に預金するわけです。ところが、銀行に入金してしまつたらその後は、社長がどこにそのお金を使つてしまつたかわからないという状態だったので、会計という位置には座つておりましたけれども、なにかロボットのように、会計という仕事の自由というのは、全然認められていませんでした。

社長が失踪してしまつた後、工員たち、あるいは職員全部でやらなければいけないというふうになりまして、だんだん私の仕事も、自分の判断などによって進められていったわけです。

ところが最近になって、会社がだんだん盛り上つてくるにしたがつて、それまではとく離れがちであった株主その他の人がだんだん入り込んでくるようになった。そうするとまた今度、会計そのほか金銭的な問題は、会計一人に任せてはおけないということになってしまつた。現在まだ

会計の位置に座ってはおりませんが、やはり支払の問題その他は、一応取締役という名前の人が常勤でおりますので、その方に伺いを立てなければならぬ。中小企業で毎月の経理は苦しいわけですね。それで、いろいろな支払その他で集金人が来て、取締役がいなくても「会計さんどうですか」と来られると一番困る。「今日は難儀がいまぜんからわかりかねます」と答えるより仕方がない。ところが集金の人には「君、会計でありながらわからぬ法はない」といわれるが、私個人としてはどうしようもないことです。自分で会計でありながら、会計のそういうあらゆることをやってゆけないことにはささか不満を感じているのですが、どうもならないことです。

伊藤 その社長がいなくなると、みんな工場を建直して、この職場における個人の自由という問題をどういうふうに考えておられますか。ワン・マン社長の時は自由は全然なかったが、みんながやっていた時にはあらゆるものが自由であったかどうか。そうしてその自由は今度また専務とか常務によって奪われようとしている、というふうにお考えですか。

小幡 そうですね。そういうふうにはだんだんなりつつあるのです。

高谷 職場に勤めている以上、その経営の方式とか、事

茂内 職場での問題としては、職場で私たち女が伸びないというのを、もうすこし私たち女性のつながりの中にメスを入れて考えてゆくべきではないかと思う。

私は、前に小林多喜二の生れ故郷である大館川口におりました。非常に貧乏なところで、小林多喜二の家庭のように、家を捨てて夜逃げをして、村を出て行く人たちが非常に多かった。そういう中で私の勤める学校は職員が十四人で、女がその中で六人、男の中で女がある程度自分の自由を生かせるような職場で、組織的な集団としても非常にうまくいっていたが、急に去年から四十人の職員の中で女が三十人という職場に入った。

そういう大きな学校になりますと、学年の結束が強い。なにをやるにも学年単位です。学年で仕事をすると、七人が全部同じ仕事をしなければならなくて、一人別なことをしてはいけないというのです。今までは月三十円という学級費を集めて、自分の学級経営のために使ってきたが、今度の職場では学級費は月六十円、それを学年主任が全部まとめて、今月はなにを買いましょうなを買いました。と全部統制をとってしまっただけです。ですからわたしの希望は全然いれられなかった。その時私は、学級には学級の特徴がある。教師にもそれぞれの個性があるから、それぞれの特性を生かせるような場ではなければならないのでは

業のやり方については、事業主と私たちのように雇用されているものとは仕事の内容が違ふというところがあると思います。だから、いくら会計係であっても、金の行方とかについては、あまり深く立ち入らないほうがいいことがあると思います。

私は国家公務員で、営林局の仕事も秩序がきまっておりますから、秩序にしたがって働くのが私たちの自由だと思います。私も予算管理をやらされておりますが、あれもほしい、これもほしいという声が出ていても、私がいくら予算管理をしていても、いくら強がっているということがわかっていても、動かさないもので、局長の計画にしたがって動くのがほんとうだと思います。

小幡 いま高谷さんから御意見がきましたが、私が大きく言い過ぎたからそういうふうになったと思いますが、細かく言いますと、私たちの場合は残業などが多い。ゆづの夜食のチャーム代を、百円二百円集金に来た場合に、個人の意思ではそれを支払うことができないわけですね。だから、会社のお金がどこにどれだけ使ったかと深く突込んで考えるわけではないが、前の日の食費代というように、それくらいの私の自由、といったらおかしいですが、会計としての自由をある程度認められてもいいのではないかと考える。

ないかと疑問をもった。よく話を聞いたら、どの学級も足並をそろえないと、この先生はどう、あの先生はどうとPTAがやかましいから、同じにしなければならぬ。ほかの先生も、主任が言うようにしていれば、自分は絶対落伍しないという諦めがひそんでしまっただけで、全然意見を言わない。そうして過ごしてきたわけです。結局、自分の自由を放棄して、責任をもたないことを歓迎しているのは、私たち職場にある女ではないかと思う。

斎藤 私の職場は電話局ですが、現在三百名近い交換手が働いております。

その中で男性というと、課長、主任と数えるくらいで、あとは女性です。女性特異の問題も非常に多いのですが、その中でさきほど和田さんがおっしゃいました、リーダーを育てる前にまず個人が伸びなければいけないということ。私の場合はそれと逆なことがある。東京は現在ダイヤル式になっておりますが、私のところはまだ自動式になっていないので、手動式、いわゆる「何番、はい」の仕事をやっているのです。今度加入者がふえました関係上、ダイヤル式になりますと、人数が約三分の一くらい要らなくなる。そのために、一応労働協約によって、首にはできないが、いわゆる嫌がらせ職場に出まして、子供のいる人などを小さな局に追いやって職場転換、職種転換をやっている



る。

ですから、そんな問題をいろいろ抱えているわけですが、中に立ってみんなの意見をまとめてゆくのが組合の役員だろうと思います。ところが、組合の役員になり手が無い。なり手が無いということは、さきほどの話しあいでも出ましたように、いろいろな責任を負わされて、その重荷にたえかねるということもありますが、私の場合は、そのリーダーとなった人が、せっかくやってゆこうと思っても、その人の足を引っ張るようなことをする。女特有のことかもしれないが、一生懸命やろうと思っても、あの人の私生活ではね」ということで、役柄そのものよりも、うしろの事柄にものさしを当ててその人の言うことをきかない。そういうこともありまして、また人が余る関係上、自分さえよければいい、というような考え方が出てきまして、なるたけ人を蹴落しても自分がこの職場に残りたいという関係から、お互いがみ合うようなことになり易い。

この間会社から、二十五才以上の人は今度人員整理をする時に辞めてくれというような告示を出しました。その時にもものすごく動揺しまして、一応組合で反対しましたが、今度もし辞めてくれるのだったら、退職金をたくさんやるからということだったので、この際、子供もたくさんあって、辞めようかと思っている人もあるのですが、突っ込んで

になりますと門へ走って行かなければ電話がかからないという状態です。それで是非寮のほうにも電話を取り付けてほしいというので要求したのですが、私は、そういう交渉の場に臨んだ以上は組合の立場で要求するわけですが、会社はそういうふうに見てくれなくて、あなたは寮のほうの管理をしているのにそういうことを言っているのかというようなことをいわれると、なんとも言えなくなってしまうのです。そういうふうな問題がたくさんあって、結局、組合と会社との駆け引きになって苦しむことが非常に多かったのです。

伊藤 片山さんの場合、非常に特殊な場合ですね。

いま大休職場の問題を中心にくつかの例が出たわけですが、いまのような問題について御質問なり御意見の交換を、しばらくしましょう。

高谷 私の場合は、組合のことで困るとか、職場の中で困るというのでなくて、私は生活を守るためにまず働いている。この働く条件をよくするために労働組合が出来てその仕事をしている。それがほんとうに大事な私の仕事ですが、それを一生懸命やるにはどうしても家庭の仕事が犠牲にされるのが多くなってきたのですが、私は役所の仕事に忙しいので、夜間の仕事に出ますと家が犠牲になった気がします。また、組合の仕事をしている時は、役所の仕事

で考えてみますと、その人が二十五、六才で辞めたとしても、局のほうでは、三十になったら、あとの人は全部辞めるように、という簡例をつくらないかということが心配されているわけです。

いろいろな会合を組合で開いて、もっと職場をよくするために話しあいましょうというが、その時になかなか出て来てくれない。

たとえば私たち、結婚していく方にお祝いを上げると、おまんじゅうでお返しをすることになっているが、おまんじゅうを出す数が五十人も六十人も多くなつて、洗濯機を五分をおまんじゅうで出してしまった、ということがある。

みんなが、考えているが、話しあう会に出てきてくれない。それで随で取り沙汰する。私、その場になかったからということも手伝って、なかなか決議した事項に協力してくれない。

片山 私、組合の役員をやったことがあるが、私の仕事は、密着舎の管理というのですから、立場は社会的ですが、労働組合の組合員でもあるわけです。それで女子従業員の代表みたいな形で、執行委員に回ったのですが、組合と会社側のほうの交渉の時にこんな問題があったのです。外部に直接通じる電話を寮に取り付けてほしい。今、夜

をおろそかにしたのではないかと気になります。それから家に帰って御飯の仕度をしなければならぬと思って帰った時は、組合の仕事も役所の仕事も、途中でおいだ気がして、いつでも何かの仕事を手分にしてきたという束縛を感じてきた。

それで考えた結果、自分の仕事をちゃんとやってないからこういうふうになったのではないかと結論を出してきた。組合の仕事は一生懸命やって、責任を果たしたら、組合のことが気にならないで、家の仕事ができるのではない。家の仕事をやってしまっただけから役所に行ったら、役所の仕事を家のことを気にしないでやれるという解放感が出てくるのではないかと考えてみました。

私の主人も組合の専従の職員ですから、まず一生懸命組合の仕事をやってみることにしました。うちのことはあまり気にしないで、組合の方に出かけて行って、新聞をつくらしてみたり、いろいろな連絡会に出てみたりしてみたり。それが私の青年婦人部の副部長としての仕事でありまして、そういうふうにして今日の会議はすんだ、スケジュールは終わった、ということだけにほっとして自由な気持ちになれる。うちに帰って来て、これからうちの仕事をしようという時は、のびのびしてうちの中で本当にほがらになれる、そういうふうにして初めて個人の自由が束縛

されるというのは、他人に束縛されるのではなくて、自分で自分を束縛しているのではないかと考えるようになりまして。私が自由になったと感じた時に、私の主人もやはり自由になったといっておりました。組合と役所に束縛されている家庭の主婦になって、束縛されたといつてもぐちをこぼしている間は、主人も私を束縛しているのではないかと気になっているわけです。私がそういう考えをもたなくなると、安心して組合の仕事ができるようになったといっております。

伊藤 もう少し話し合いをねがった方がいいですが、時間がきてしまいました。今日はまことに漠然としたことで終ったのですが、明後日の朝までに、今日ここで出た話をどうかお一人一人で、問題点をつかんでみて来て下さいませんか。今日は主として自由というものを中心にお話し合いをしたのですが、自分が責任を果せば自由がある、これは自分たちが責任を果せば自由があるのか、自由があるから責任が果せるのか、これをお互いに考えて、明後日からすすめて行きたいと思っております。

最後に、先程から束縛という言葉が出たので気がついたが、今度ここにお集りの十五人の方たちが出て来るまでに、非常に束縛を感じた。子供さんにひかれて涙ながらに親子の別れをしたり、ことに職場の場合、外部からの束縛

ように思ったら、局長の方で、そんなわけなら特別休暇にしてやるということで、全部特別休暇にして出して下さいました。

小幡 私の場合も、印刷屋というところ、すごく低い目で見られて来た、それで印刷屋から全国大会に行くなら、印刷屋にとって大きな名譽である、行つてがんばって来い。二度と行くことはないから、行ったら二、三日遊んで来るようにいわれて出て来ました。

伊藤 どなたか、いい意味のスポンサーというところがあるんですが、仲間からお金があったということはありますか。

織田 私、お金いただきませんが草履片一方、いただきしました。(笑聲) 半分出してくれたのですから……。

それから、わたしバーマにかけていなかったら、わりやりひっぱって行ってバーマ屋さんに行つて、ちぢらしてくれて、着物の袴はかけてくれる、大さわぎして出してくれた、近所の人とグループの人です。

伊藤 それでは、今日はこれで終りたいと思います。

#### (第一日閉会)

伊藤 昨日の、四つの移動会議の報告を簡単に、どなたからでもやっていただきます。

東京班、どなたか。

を感じられた方はありましたか。

高谷 有給休暇で個人の資格で来ましたから感じなかったが、まわりの人が折角行くならどこか見て来たらしい、御成婚の行列に間に合うようにと言ってくれました。

茂内 私は当然、有給休暇と思って、校長に話しましたら、いい研究の場だから、服務免除にしてやろう、というのがです。私は正々堂々と出て来たのですが、なにしろ仕事が生きた子供を育てるのですから、私のいない間は自習のできるように教材をプリントしておかなければならないし、また主人を自炊させるための準備もあるし、三日間ぐらい一時間ぐらいしか眠りません。

織田 私自身はぼかんといい気持ちになって東京に出て来るつもりになっていたのですが、かげの方で婦人会の推薦だと思つて、戦後婦人会に入っていないくせに推薦する方も推薦する方だし、受ける方も受ける方だなどといわれたようですが、それも一緒のグループの方が弁別してくれて、私はなにも知らないうちに、そういうことがあったという話です。

片山 私は応募します時にも、課長さんからすすめられて応募しましたし、入選しました時にはみなさんとても喜んで下さって、代表みたいに押し出されて来たのです。

斎藤 束縛はないです。私も自分の年次休暇を使つて来

#### 移動会議に参加して

草野 私、一番印象の深かった養老院のことを御報告申し上げます。

養老院をはじめて見学したものですから、本当に感銘深うございました。大変設備の整った養老院で、東大なんかを設計なさった方が設計なさったということで、建物も立派で、お庭もヒマラヤ杉のような大きな杉の木があって、至れりつくせりのものです。都立だそうですが、そこで昼食をいただきましたが、一番ひとときまして、田舎へ帰って一番いいお土産だと思ひましたのは、その課長さんが、お話になりました、良妻賢母がおばあさんになって、養老院に入った時は一番始末がわるいというお言葉です。

私、聞きましてびっくりいたし、どういふことなのだろうかと、夫のことに夢中になって、ただそれだけの人間で、個人の自由とか、個人の生活ということは全然確立していない、そういう方が養老院に入つた場合に、なにを心の支えとして生きて行くかということがゼロだ、だから周囲の方との調和もよくないし、手に負えない、ということをおっしゃいます、これは田舎では、まだまだ、良妻賢母型のお母さんが多いのに標榜の宣言だと思ひ、実にいい

土産だと思いました。

個人の生活を確立しなければ、集團の中でいい生活ができないという答案が出たと思います。

伊藤 大塚、結構です。いわゆる団地族、集團アパートのところで、そこの人たちとお話しあいになったでしょう。そこをどこをどなたか……。

風間 疑問をもったことを申し上げます。実は、私もまいりましてお部屋やいろいろな施設、立派な設備などを見せたいいただきました。それはいいのですが、いま私が申し上げたいのは、団地の奥さん方とお話しあいをしていた時に、絶対に本当の生活というものは出てこない。はっきりいいますと、演出のような感じがしました。

だから私たちは、昨日もちょっとあとでお話したのですが、あの時に三十分でもいいから私を自由に行動させていただけたいと思います。私も個人として、どこの奥さんでもいいから、私も困っていることをあなたたちどんなふうに解決していらっしゃるかということ、個人個人でお話すれば、まだ少しはなやみというものが出てくるのではないかと思ったのですが、昨日のお話しあいでは、まったく自信をもって理想的なことをやっているようにおっしゃる。たとえば、私もがちょうど選挙の宣伝カーが来ておりますので、こういう集團の中で選挙というものは、う

るさいのではないか、利用されるのではないかと質問したら、みなさん、自主的にやるのはつきりおっしゃる、何にか、きれいに終ったのではないかという感じを受けました。

和田 団地の奥さんが非常にいい意味で個人主義でいらっやうで、いかに割切っていらっしゃるかということによく分かるのですが、結局、浴風園でも団地でも、そう思ったが、一応ああいふ公式的な話し合いの場では、そこでの本当のなやみとか、問題点というのは、こちらも見逃しやすいいし、出にくいのではないかしら、という気がした。

それから、一番はじめに資生堂の工場を見せていただいて、浴風園に行つて、団地に行つて新衛生生活館を見た、時間が短かったので資生堂も一応の説明を聞いただけ、生活館も五時に閉館になっていたので概要を話していただいただけで、実際活動しているところを見られなかったの、残念に思います。

伊藤 それでは次の神奈川縣、どなたでも……。

長岡 私も東芝のみなさんとお話したのですが、主婦の方がやっぱりいまのような結果で、理想的にいつているように、問題がない。

斎藤 課長さん方がいらっやいましたから、本当のことと言っていただけなかった、それに時間がありませんで

したから……。私たち、東芝に回つてから神奈川県労働婦人会館に行きまして、働く婦人のための会館を見学させていただいたのですが、日本でも数少ないうちのひとつだとおっしゃった、見せていただいてうらやましかったことばかりで、自分の県でもあのようなすてきな会館とまで行かなくても、なにか働く婦人が集つて、いろいろなことができるようなところがあつたら、とつくづく感じました。それからその場所に、いわゆる共かせぎがいらっやらない、奥様然とした方だけでしたから、本当にうかがいたいところがあるかない。

片山 出て来られないことはあつたでしょうがね。ああいうふうに、アパート生活をしている方も、寮生活をしている家族の方もいらっやるのですが、御主人が同じ職場でもって生活をしていらっやるところで問題はないはずがないと思うのですけれども……。

長岡 それが全然ないとおっしゃっていたので、不可解な気持ちでした。

小幡 私、千葉に行きまして、一番印象に残っているのは八幡学園見学ですね。少し足りないという感じは全然受けないのです。自由にみんながのびのびと絵描いたり、一番感心しましたことは、小さな男の子が一生懸命ミシンを使っているのです。布団のやぶれたのを繕っている、そ

ういうのを一生懸命、たのしそうにやっている、だから私が考えたのは、世間の人は精薄児と一概にいってしましますが、あの人たちは自分のことはあらゆることをやっています。細の作業でも相当積極的に、それで仕事ができちんとしていらっやしい。一般の家庭の小学生、中学生にしましても、自分のことを自分でするという子供はなかなか少ないのではないかと思うのですが、ちょうど行った時にはミシンを使っている子と布団をとじている子、そのほか下着を縫っている子がありました、自分の生活は自分でやっているという感じを強く受けました。

渡内 私は教員という立場から、子供を見たのですが、見学に行っている人たち——私たちのほかにもおりましたが、特殊な環境で、興味半分に見ているのではないかというのを強く感じた。

その道に四十年捧げた渡辺実先生のお話を聞いて見ますと、非常に周囲というよりも、役所が協力的でないというのです。精薄児は、熱を入れて指導したって、結局精薄児にすぎないのだ、金を出すのは焼石に水のようなものだという見方をしているから、熱の入れ方が足りない、それに対して、周囲の関心も足りないということ。そういうことで精薄児を持ったお母さんたちのつながりがなく、そういう自覚がない、常に人生の裏道を歩いて行くというひけ



さんから出たお話の中では、一つは東芝という近代工業、それから埼玉のレース工場の場合も非常に工場が近代化されている、その場合の、そこで働く人間という問題、もう一つは東芝のように——近代化された大企業で、そこで働く人の待遇も非常によく——社会的にも非常に高級とされているわけですね。したがってその奥さんたちはなんのなやみも、もっていない。そんなはずはないと、みなさんはそういうふうにお考えになるのですが、おそらく一人一人は本当になやみをもっていないかもしれせんね。おやじが伝書鳩のように月給袋のたんまりしたのを持って来て、家庭の主婦の考え方というものは、みなさんが考えるほど深刻なものでないと思う。そうすると、そういった人たちは、ある種の大きな組織の中で安住してしまっている。これは決して理想的な待遇と考えているとは思わないが、ある程度の安泰な姿。人間はものを考えないで組織のままに動かされて行っているかどうかという問題が一つ起って来ると思うのです。

それからもう一つ、これはいまのは都会の場合ですが、農村の場合に高谷さんのいわれた、春日部部落の婦人学級といったものは、非常にうまく行っているけれども、私も現地にお伴をしたのですが、それはよめとしゅうとめとかよめの務めとか、子供の育て方というふうな映画を見てみ

ていらっしやいとおっしゃいましたので、ホテルのお部屋の四人の方とお話しあいをしてみたのですが、昨日の移動会議と、一昨日のみなさんが提起なさった問題を、同じようなものをむすびつけて見たわけです。そうして一番はじめに考えましたことが、さっき出ました親切とおせっかい、いいかげんなつきあいということ、それから「けちゃもん」ということ、見ざる、聞かざる、いわざるの三ざるの思想、それは最後に婦人少年室協働員の方とお食事してお聞きした時に、団地病と名づけているとおっしゃったが、そういうものと一連の関係があると思う。

そこで私、考えましたのは、個人個人はみな違うが、人間が集団生活をしている場合に、そこに集団として盛り上って行くこととつっこむ方向に行くか、それとも団地的に回避する方向に行くかという二つの筋道がある。集団を育てようとするつっこむ方がいいか、回避する方がいいか、回避する方はことなかれ主義で問題は残しませんが、人間は深くなっていくのではないかと気がする。

いまも先生がおっしゃいましたように、安住した東芝も、ずいぶん経済的に恵まれているとおっしゃいましたが、私が行きました祖師ヶ谷の団地も最低給料が定まっています、それ以上の方しか入れなかったのです。ですから本当に経済的に安定していらっしやって、児童館などという

んなでしゃべりあう。それが社会の問題とか、社会の意識とかにはつながらないが、その点の質問がかなりみなさんの間から出ました。それに對する答は非常にあいまいなものでした。それで田口さんが実にいい例をあげられたので敬服したのですが、蚊とええをなくしましょうということとはよくいたします。しかしそれには大変な家庭の主婦たちのつながりとか努力とか費用がいる。しかし、これを役所とか、あるいは県の仕事としてやってもらえば、余計な苦勞をしなくてもかなり理想的な実行ができるのではないかと。つまり社会的な意味——市の予算とか県の予算を勉強する、そういった方向にすすまなければならぬのではないかと、ということをお口さんがいわれた。そういう話し合いから、特に社会教育法の一部改正の問題まで、会費の方から出てきて、非常に活発な話し合いが出て来たと思います。

それで昨日、全国婦人会議としては、はじめての試みであつた移動会議も、私は一つの班について行っただけですが、その班の人とも話して見て、かなり意義があつたのではないかと、そして皆さんを受け入れる側によつても、お互いに意見を交換する意味で、私は意義があつたと考えます。それでは、今日の日程を進めましょう。

軍野 私は先生が一昨日の話しあいの中から問題を考え

立派な保育所兼幼稚園の施設ができていますが、それもじから与えられたもので、自分たちがもり上げて子供たちのためにつくるという意欲のもとでできたものではない。だから、あそこでみなさんが恵まれます。私の田舎では保育所は全額負担の人は高すぎるから、おばあちゃんや七人で預金して幼稚園をたてた経験がある。そういうより上り力が存外少ないのではないかと。私の性分としても、回避する方に行くか、つっこむ方に行くかといえ、つっこむ方に行くかと思うし、その方がより人間的に深くなっていくのではないかと考えるのです。

けれどもそうするのは勇気がいる。またリーダーになる人がいる、さっきも中野さんがいいリーダーが欲しいし、またなければならぬといわれましたが、まあ普通にリーダー意識などというのは悪いということもいわれますね。どういうリーダーが新しいリーダーかということを考えなければならぬ。

伊藤 だいたいみなさん御同感だと思います。私なりに、一昨日の話しあいから問題を取り上げてみますと、この部会の取り上げ方といえますか、みなさんと相談したわけですが、家族集団とか、近隣集団とか、職場集団とか、そういう場によって分けるということをやめて、全体を関連させて考えて行くかというように、やって来たのです。あま

りに漠然としすぎたかと思いますが、一昨日出た問題を考えますと、集団の中の自由という問題に、だいたい三つの問題が出たのではないかとと思う。それは、集団に加入するという自由の問題、たとえ、よめになった途端にその地域婦人会に入っておった、加入の自由も、反対に脱退の自由もない。不加入の自由もない、そういった問題も一つある。それから集団の下で発言の自由というものは極度に、あるいはある程度阻害されているという現実があるわけですね。その発言の自由の中の、特に話が出ました「けちちゃん」——反対をする自由、というものが非常にせばまっている。反対意見を述べるということが苦しい。こういった集団の中の問題があるわけです。しかしその中で、個別に考えますと、全体としてはやはり女性の地位が低いのではないか、婦人会の地位、働く職場における婦人の地位の問題、それにも関連して、共かせぎという問題をどうするかという問題が非常に大きな問題として出てきたと思います。それは草野さんがある意味で割り切って、子供を育ててから働き出してもいいのではないかと、という問題は、むしろ斎藤さんとか小幡さんから、反響とまでは行かなくても、批判があった、これはまだ結論が出ていないと思います。それから寄宿舎なんかでスリッパの問題に関しての、

個人の公徳心という問題。また集团的アパート生活など集団における自主性の問題。それから自己主張ということに對しても、限界があるということも出てきていました。一昨日出た問題をいま申し上げたが、この問題でなやみもし、自分なりの解決をしておられるのは、高谷さんの場合ではないかと思いますがこのような問題を中心として、集団の中における責任という問題を、みなさんがお一人お一人が体験されたこと、同時に周囲を見回して聞いた話と、いうのでも結構ですから、今日はざっくりばらんに、お話し合いをすすめていきたいと思います。

#### 集団の中における責任

田口 私は婦人会に加入しておりました時は「けちちゃん」で、わりあい意見をいうわけです。意見を述べる場合に、ただ反対のための反対であってはいけないということ、を、私たちよく考えなければいけないと思っています。その会をよくするための建設的な発言をしなければいけない。ただなんでもかんでも悪いではないかと思っています。

そうして、自分がこういうものがないではないかということ、考えた場合に、あくまで自分の自由を守るということが大事ではないかと思っている、それがやはり女ですから感情的になりまして、あとで「けちちゃん」なん

ていわれますと、なんだ、むこうが間違っているのではないかという対立感情になり、そうならその会をよくすることができない、かえって悪くすることになると思うのです。だから反対した場合には気長く、その会を育ててあげようという気持ちで大事ではないかと思えます。そこに責任という問題があると思います。

風間 いま「けちちゃん」という言葉が出ましたが、うちの方ではそういうことを「こてる」といいます。私どもがなにか意見を出しますと、あの入すぐ「こてる」人だから、というのです。それでなにもいわない人が一番いい人だというふうに、みんなから思われているわけです。新しく役員の改選をしましても、役員のなり手がなく、どうして役員のなり手がなくと申しますと、思うように、新しい方向にもって行けないからです。現在はやってなくて、前に活躍した方たちが、グループをつくっていらっしやうって、いわゆるかげでいろいろおっしゃる。極端な場合を申し上げますと、投書が来るのです。前のああいいう方の意見を聞いてやったらどうだ、あなたたちのような方が、よくあんなことがいえるものだということを、本當に意地悪いのですが、投書が来るのです。そうすると若い方たちですと、いやだからやめましょうということになってしまつて、結局、若い人で考えている人は、地域婦人会に

入って来ない。考えをもっていない、みんな黙ってしまった。私はそういう方を引っ張り上げたいのです。今度、私がなりましてね、けれどもそういう場合に一度解散して、入会の自由ということ、を先生がおっしゃいましたが、入会の時に、自分がよく責任を感じて入会したらと思う。結局、おつき合いで入っているから、責任を果そうとしない。入会の自由ということは本當に大事だと思う。十円でも五円でも、会費がなんに使われるかということ、を考えて、お出しになるべきだと思います。

そんなことで、うまくいっていらっしやる方がおありになりました……。

伊藤 いま投書という問題が出たのですが、この問題で苦労しておられる方もあると思います。これは戦後の風潮として、なにをいってもいいという場をもって、そうしてそういう人がやっている。投書ですと、きまっちゃように署名がしてない。署名をしたり、これは卑怯という問題と同時に、なんら自分の言葉に対して責任を取っていない、この傾向がわりあい多い。婦人会の場合にもそういう断えを聞いております。これは責任という問題に、びったりすると思う。言論の自由、その自由に対して責任を取らないという形が、無署名とか匿名の投書ですね。このことは今度の会議でもかなり考えなければならぬ問題だと思

ます。

宮前 私はPTA婦人部会のことですが、去年勤務評定問題について、いろいろな事件がございました。その時に県のPTA婦人部会として、この九月十九日の統一闘争反対の、一応声明というのが出された。その場合に、婦人部会というものの役員に、どういう方がなっているのか、全然私——私も婦人部会の役員をしているのですが、私自身も知らないうちに会合がもたれて、声明が出された、そういうことはあとになって、総会がありました時に、あれは御自分たち個人で出されたのですか、それともPTA婦人部会の代表として出されたのですかと聞きまして、PTA婦人部会の代表として出しました、ということです。それならみんなの意見を聞いて下さるはずですが、こちらには問い合わせも相談もなしに、幹部の方たちだけで決めたということに不服を申し上げた、そうしたら、私たちはPTA婦人部会の代表として選ばれているから、これは私たち自身、六人の責任においてやりましたとおっしゃった。代表というのならみんなの意見を聞いた上の代表でなければ、責任といえないと思います。そういうことに対して、私はそれをどういうふうに確いたらいいかということを考える。

伊藤 具体的な問題として、PTAという組織、あるいは

な婦人会ができるのではないか、いまあるものを、改造して行くということとは実に困難だと、風間さんと同じことを思ったのですが、今年の地方会議の婦人に婦人連合会長と御一緒にになりまして、汽車の中でお話しましたが、農村では一度こわしてしまったら、それっきり家庭の台所に帰ってしまう女の方が多いから、やっぱりいまの地域婦人会を残して、それを小さなグループに分けてやって、分会長とかいうものが指導して行かなければ無理ではないか、ということをおっしゃったわけです。その場合役員というのが、いま下山さんのおっしゃったように、本当の事務機関でなく、よほど指導的な立場にならざるをえない気がしてくるのです。

織田 私の場合はやっぱりこわれてしまったのです。こわそうと思ったのではないが、結果的にそうなったので、それで新しい会が、うまい具合にできたわけです。それで私がその責任者になっているが、婦人会に入る人は、自由に婦人会を選んで入っているし、社会学級グループをもっている人は、そっちにも入っているが、私としては地域全部の人たちを、新しい頭の主婦たちにつくり変えたいという野望をもって一生懸命やるつもりでおりますが、それには、婦人会の好きな人もあれば、社会学級の好きな人もあり、両方出たい人もあり、あるいは音楽に興味があり、

は団体、それらの代表のあり方、あるいは会員のあり方、これはかなり掘り下げていい問題ではないかと思っております。またみなさんの中にPTAに御関係の方もいると思えますから、これを調べてみましょう。

#### 役員の問題

中野 いま役員の選び方が出てきましたが、役員というものについて、役員は偉いものであって、会員の方は、役員に一目おくといい考え方もあるが、役員や代表者は、単なる事務機関であるという考え方が、東京会議の時に発表されたが、そういう考え方も大事ではないかと思うのです。

下山 役員とリーダーなどは、事務的機械的に下からより上った所を処理すればいいと進歩した方はおっしゃいますが、会員自体の自主性がない場合には、やっぱり誤った方向に行かないということが必要なのではないでしょうか。

草野 いまのPTAの役員の問題、その前に、風間さんがおっしゃったこと、二つの問題が一緒になったことになっているが、風間さんがおっしゃった地域婦人会のことからいいますと、私も去年は現在の地域婦人会は一応つぶしてしまっ、入会の自由で新しくつくった方が、自主的

ほかには興味がない人もありますから、いろいろなグループをつくらうと思います。今度はうたのグループを計画している。うたのグループには婦人会からも、社会学級からも、青年会からも入るでしょうが、その場を一つのみなさんの話しあいの場としてのばすというふうにして、徐々に婦人会の方へも人数が増えるように、それから他の学級の方へも、青年会の方へもというふうに考えて、そういうふうな意味において責任を果したいと思っています。できるか、できないか分らないですが……。

#### P・T・A

茂内 さきほどPTAの役員の問題が出たが、根本になるのは、学級役員の選び方だと思う。個人個人が責任をもって代表を選んでいくかどうか、私が実体を見ています学級PTAの集まりの中では、選び方を話しあい、推薦制にして、だれだれさんがいいのではないかとというふうにして選ぶ、だからそれによって納得したとしても、その選び方では仕事に責任をもたないと思う。そういう場合に選ばれた人が学級なり、地域なりのつながりの中に出て行った場合に、地域から、学校から、学級が浮き上がってしまうのではないか。そういう選挙です。

和田 私の近くを見ますと、いわゆる都会の人はいい意

味で個人主義でいらっしやるので、会員全体がよく分らないのですね。全体から選り出してくるというてもどういいう人がどういいうことをやっているのか分らないから、つい、いままでもこういうことをやっていたからあの人を選んでおけば無難であろうという選り方になってしまふので、こういう点、やっぱり問題になるのではないでしようか。

住吉 地方ではこういう場合に、代議員はだいたい地元の有力量者がなってしまう。なぜ有力量をえらぶかといふすと、なにかにつけて便利なので結局選んでしまふということになる。

斎藤 私も住吉さんのおっしゃったことに共鳴するが、特にPTAの役員を選ばる場合に、選ばれる方というのは、いわゆる輿論家とした方、お金があつて、暇があつて、御主人が会社かなかでいい地位にいる人を選ぶ、なぜかといふと、PTA自体のあり方が問題になって来るが、お金がある人を使うと、なにかと便利だ、なにか害があつても、PTAの役員の人には沢山出さるうから、また出させるように仕向けてしまふ。役員に対する考え方が、PTAというものを考える時に大事ではないかと思う。

伊藤 その役員の問題、選挙の問題はだいたい同じような御意見ではないかと思いますが、ちょうど斎藤さんの口から出てそこが深められていないのはPTAという団体

は、どういふ団体か、たとえば勤労反対とか養成とかを決め得る団体であるかどうか。そういう点を少しやってみなければいけないのではないですか。

中野 茂内さんがさっきおっしゃいましたが、PTAの団体というのは、先生とお母さんが一緒になつて勉強して、お母さんがのびなければならぬ会ですから、特定の人たちをリーダーにして行く必要はないと思う。ある仕事を与えられれば必ずその人は責任を感じてくれる。ですからどんなに自分がつまらない者だとひっこんでいゝ方でも、そんな難しい仕事はPTAにあるはずがないから、その方たちもみんな参加するように、私は子供が一年生の時からたえず役員が回ってくるが、どうぞみなさん順着といふことにやりましよう、強調しています。それにたずさわってはじめて自分のしなければならぬことを自覚するといふふうにもつて行きたいと思う。

片山 私はPTAの会員になつたことは別にないのですが、よく似たことで、寄宿舎などでも責任を分け合つていゝことが非常に大切だと思ひます。いままでかけにいて、どこにいても分らない存在の人も責任を持たせてあげると、結構なさるのです。ちゃんとした能力があるといふことを、みんなに認められて、その人も非常に自信を持つて来るだろうと思ひます。

宮前 だいたいPTAの目的といふものは、現在のPTA

の役員にも、会員にも分らない。できた時には一応の規約として守られましたけれども、もう何年かたつて、いま入会する人たちは、さっきの婦人会の場合と同じように、子供が学校に入ると同時にPTAの会員になつて、目的はどうなのか、組織はどうなのか知られないし、それを疑問にも思っていない。それをどうして知らせないかといふことをよく考えるのですが、それはPTAを利用したい人もあるわけですね。みなさんが自覚してくると困る人もある、なるべく無自覚のままでおいて自分がひきずつて行かうといふことを考えていらっしやる人……ことに学校PTAの場合だったらいですが、それから上に行くほど会長とか責任の地位におられる方は、PTAの目的とかは、どうでもよくなつてしまふ。自分たちの名譽職だか、肩書きだか、そういう意味で、そういう役をもちたがる。その役員のえらび方を変えて下さいといひましても、なかなか変えて下さらない。ことにPTAの組織は女だけでなくて、男の方が沢山入つていて、上の方の組織に行くほど男の方ですから、それを女の力で変えて行くために、私は自分の学校とか地域の小さいPTAの中で、まずそういうことを考え合つて、そこからだんだん大きなPTA組織を考え合つて行かうといふことを思ひますが、それがなかなか

まゝ行かないのです。

織田 私の場合、PTAの役員をしています、会のあり方といふものをみなさんに知つてもらふために、自分のクラスの近所のお母さん方を集めて、そうして役員会にこゝういふ話があつた、解決はこゝうなつてゐる、私たちはどういふふうにして行かなければならないかといふことを勉強することをやってきました。

草野 PTAのあり方について、私は去年の勤労闘争から本當になやんでまいりました。いま一番教育上で大きな問題は勤労問題と道徳教育問題ですが、PTAの中には先生方に賛成なさる方もあるが、賛成でない方もある、私は個人的にある考えで九・一五闘争には反対だったのですが、個人の意思をどうして発表したらいいかと思つて書きました。そうしてPTAの役員会に持つて行つて、私の意見はこゝうですと書いて読み上げた。この場合、お母さん方、お父さん方の中にも賛成なさる方がありますが、それを回して、では賛成の方は署名して下さいと回しました。そうしたら賛成の方が印を沢山捺して下さいました。それで九・一五の前日に先生のところへ差し出しに行きました、その直後に、先生方がそれと反対の署名に回りなかつたらそれにも同じ人がびつたり判を捺しているのです。それでもつてPTAの自主性のなさといふものを、



なさけなく感じたのです。

私と同じ町ですが、勤務を出さない校長が全国的に知られませんでした。その場合も、PTAの中にその校長に不賛成の方もいるが、どう自分の意思をはっきり表明していいか迷ったのです。さつき、有力者とカボスとかを役員にするということをおっしゃいましたが、各クラスの役員は、私どもの田舎でさえ民主化されていると思う。私のクラスでもそれはお金があつて、ゆとりのある人はいますけれども、やはり暇のある方でなければお世話ができない、実際上の問題で、お金があるから寄付なんかにも都合がいいからという考えでは毛頭なく、時間があつてお世話が出来る人という実質的な意味から選んでいます。クラスの役員にかぎっては、このようにして選ばれています。これが学校全体の会長となりますと、やはりその町の家柄とか順序が人間にちゃんとついていて進歩の余地がない。

伊藤 御承知かもしれませんが、日教組の小林委員長が非常に不当な扱いを受けた高知の場合、あそこは先生全体がお母さん方と目頭話していて勤務には反対ですという署名を、お母さんたちほとんど出している。こういうさつきは投票という問題が出たが、この署名という問題がわれわれの、いまのある種の集団活動の中に一つの問題を含んでいると思う。署名というこれに対してちっとも

学校とPTAがなかなか時間的にも密接に關係をもてないのではない。

茂内 私が村にいた時のことですが、授業して次の日の計画をたて、子供たちの作品に目を通してと時間的に余裕がないことは事実ですが、やはりPTAとして先生と父母とのむすびつきが一番大事だと思う。教師という職業は、特に農村などでは特別な世界に住んでいるということ、そういう抵抗が、じやまになって、そういうむすびつきの作品でお母さんが部活会をもって検討会をしたり、いろいろむすびつきを考えています。

高谷 PTAもそうですが、その集団の目的をはっきり認識していないのではないかとすることは職場の中でも同じだと思います。特に労働組合ではどうして労働組合ができていないのか、どうしてそういう運動をして行かなければ、みんなで顔を合わせて話せば、一番分るが、そういう暇がないということも問題です。それであわなくても分る方法といえ、一番手っ取り早いのはニュースを流すというやり方ではないかと思う。PTAでは文集をつくって流している。そういう方法が一番たしかではないかと思っています。

責任を取っていないでしょう。投票と同じです、なんでも回ってきたから名前を書いておけという形ね。そこに一いつ今度のテーマの重要な問題があると思います。

それでは次にうつって、職場を中心とする組合ですね。そういった集団の中の自主性という問題を、どういうふうにかえて行くかということで、午前中続けて行きたいと思っていますが……。

和田 周囲を見ますと、一般的にPTAは先生に圧力を感じている、子供を先生に預けているから、はいはいと言っておかないと、自分の子供の成績に影響するという圧力を感ずる。先生方はいわゆるPTAのボスとかいわれる人に圧力を感ずる。本当の先生と父兄との話あいはできないで、お互いにかけてはこそこというが、子供のことを本当に考えての話しあいというのはいまの段階ではできていない感じがする。

長岡 私はPTAの会員でありませんが、PTAの会員の中で、PTAというものがどういうふうか理解されているか、またPTAという機関についてPTAの先輩が後輩にどのように説明しているかに疑問があると思う。最初に分らないで入った人はPTAに関心をもちても理解するチャンスがないのではないかと思う。

それから、先生はまず授業をしなればならないから、

富前 そういう先生と親の話しあいの場をつくるためには、さつき茂内さんがおっしゃったように、部落の中に入っていくのが一番いいが、できない場合がほとんどです。なぜかという、PTAのボスに先生が遠慮しているから。そういうことはそのボスがなにに気がついているか

ということ。やっぱりそのボスはその町の町長なり県の一つの権力につながっている。教師というものは、やっぱり権力に弱いのです。ですから私たちと先生だけの問題でなしに、職場の問題で、打ちやぶって行くとしても次から次と権力の壁にぶつかってしまふということ。茂内 ボスを育てるのはボスの責任ではなくて、みんなの問題だと思う。私どものPTA選挙にはボスを出さないために一日がかりで、その会長がだれになるか、副会長がだれだ、監査がだれだというふうに職員室の空気がだれのものになる、だれを出すと圧力がかわるとか真剣に討議して、選挙は個人投票ですから一つ一つ記名選挙する、その時は赤ちゃんをおぶったお母さんたち、職場の人たちでも許可をもらって選挙に来る。ですからボスを育てないような空気をつくりあげて行くのは私たち自身ではないかと思う。

伊藤 選挙の場合は先生も一票ですか。  
茂内 清き一票で、特に職員室で紛糾して個人個人の意

見をいうですから、選挙の日には職員室はPTAの問題が最高にもり上ってくる。

片山 茂内さんに質問があるのですが、さきほどみなさんが自主的に自分のあげたい人を選挙するというお話でしたけれども、いろいろ裏の工作というものはないでしょうか。組合の役員選挙の場合でも仕事の関係でどうしても組合の専従になつては都合の悪い人、選挙されては困る人がいるわけです。そういう場合、だいたい候補者をおきまして、だれをあげようということがいろいろ工作としてあるのですか……。

茂内 さきほど申し上げましたようにリーダーを、特に全体の会長とかを選ぶ場合には、小さなグループで出された人が集つて学年ができる、学年が話しあひしてまた一人です。六人出されるわけです。それから学年から出された代議員が集つて候補者を推薦して出したものを総会にはかつて、それを個人が全部投票とするわけですが、でも、ですから最後に出された人たちは下部からの声として出された人たちですから、ポストとして育てられた人ではないわけですよ。

伊藤 茂内さんの職場が、相当割り切つてやつてこれらすることはよく分るのですが、私から茂内さんにおうかがいしたいのは、そうやって一応民主的な形で選ばれた幹部と

いうものがある。勤評というような問題に対してその幹部がある一定の意思統一をして総会にかけて、勤評反対はけしからんという結論になった時に、先生はそれに従うつもりですかどうですか。

茂内 私の方では勤評問題について非常に研究したが、そのものにかぎってはPTAと対立することもあります。しかしPTAに対立するのが目的でなく、いろいろな角度から話して納得してもらわなければならないので、そのためには夜の八時も九時もかかったことがあります。

伊藤 それは分るが、PTAという団体がそういうことに對して意見統一をして一つの結論を出し得る機関だと思ひますか。

茂内 私たちの場合は、そういうことを統一して応援してもらいたいのですが、統一を強制することはできないのです。

伊藤 それは結局、PTAの団体の目的とか組織とか、あるいは権限とかの問題ですね。それに関係してくると思ひますが……。

和田 PTAというのは、もともと勤評問題によってできた団体ではないわけで、たまたま教育の問題の一つとして、勤評問題が出てきたので、だから私たちの学校のPTAの場合は個人の意思を尊重して中立で行こうということになったのです。

富前 PTAはそういうことを決める機関ではないと思ひます。しかし、教育に関する問題なら、私たちはよくこれを考へる必要があると思ひます。勤評にしろ、道徳教育にしろいろいろ教育の問題が出てきた時に、そういうことは子供の将来を左右する、大事なものであればあるほど、PTAの中で、よく研究する必要があると思ひます。そういう大きな問題を研究する場が欲しいのですけれども、それがなかなかできないのです。私どもの小さな部落のPTAの場合には、それをやりましたが、それが学校PTAになりますと校長さんに何回もこんなやかししい問題ですから検討する場をつくって下さいといつても、学校全体としてやつて下さらない。

九月十五日の問題になつてから、あわてて役員会を召集して先生の意見を聞かして下さいという。先生は、会長も校長もいらつちやつてますから圧力を感じて小さくなつて、一応の勤評の反対の理由は説明して下さいましたが、非常に熱意はないし、それも、なぜ子供たちのために大事かというのをはつきりおしやつて下さらない。だからPTAの役員でもほとんど無関心な人が多く、急に集められても自分はどうでもよい、それは中立ではないという感じですよ。よく検討して、その中の個人個人としてははつきり、自分の考えを決めるべきだと思います。PTAとし

て意思統一をすることは間違ひです。

田口 私の方のPTAは個人の意識も低いので勤評などという問題は出てこないが、出すべきだと思う。勤評反対と賛成の意見があるわけですが、それは大きな一つの流れだと思ひます。そしてPTAには結論が出にくい問題だと思ひます。私、多分出ないだろうと思ひけれども、この世の中には真実というものは一つしかないということですよ。どっちが正しいか、本当に教育を守るには勤評がいいのか悪いのかという、そこに一つの真実を求めようという気持ちがあつてほしいと思ひます。そして本当にお母さん方が勤評がいけないという結論が出るとすれば、その場合、PTAが勤評反対という意見になつてもかまわないと思ひます。ただしやはりそれぞれ意見がありますから、出にくいのではないかと思います。

伊藤 いま問題はPTAという団体、集団について一つ考へていたわけで、いま当面している問題が勤評のために、そこからこういふ話しあひがすすんできたわけですが、もう一歩、もとにもどして、PTAにこだわらずに、婦人会もまた同じ性格をもっているでしょう。ある意味では運命的な集団ですよ。子供を学校に入れた途端に会員になつて、よめにいつた途端に婦人会員になつて、という問題があるということ。ところがこれは同じではな

いが職場における組合もある点、そういうものがあるわけですね。

そういった問題を職場にまで広げて、集団という問題、組織の中の自己、その自己の責任という問題を考えます。あて行く。もちろん、それと家庭の問題とか地域集団の問題など全体をからまして結構ですが……。いろいろの集団の中で生き方を中心としてみなさんから批判なり検討を続けてやって行きたいと思っています。

#### 職場における責任

高藤 私、電話局に勤めているので、いわゆる私たちの机というものがなくて、お茶汲みということはありません。私たちが電話交換手だけでなくて、女工さんについても言えると思うのですが、現場に働いている人と、それからいわゆる事務屋の意思の疎通がうまくできないのです。これはある程度学校の先生方にも言えるのではないかと思います。

私たちの場合は、女性がたくさんいるので、事務屋と現場ということに分れるのですが、そのほかになにか職場における女の能力云々ということが問題にされていると思う。私も共稼ぎをやってゆきたいと思っていますし、女には職場で活動してゆく上に、——社会活動もそうですけれど

ども、能力がないものかどうかということをよく考えるのですが、いかがなものでしょうか。

小幡 いま、女としての能力という問題が出てきました。が、男子と比べて女子の仕事の上における能力というのは、そう変らないと思います。あるいはもう何十年もやっている方は、男子よりもっと仕事の能力があるという方が中にはいるが、これが賃金問題になってゆきますと、私たちの賃金というのはすごく安いのです。それに女子の場合は何年いても、女子であるから、これ以上上らないという線があるわけです。

伊藤 具体的にどのくらいですか。

小幡 最高が、日給二百円です。わたしは足掛七年で、事務系統で働いている。工員の場合は、上がきりがない、二年も五年もやっている方は日給六百円ももらっている方がありますが、その問題について経営者は、ほかの会社でやっていないのにうちだけが上げることができないという考え方です。要求をたまには出すが、なかなか上げてくれない。それで自然に女子工員の間で、いくら一生懸命やっても二百円しかくれないから、仕事は八時間内で適当にやっていたらいいという考えがあると思うが、なにしろ八時になったら出て来て、時間内は仕事して、五時にな

ったらさっさと帰る。仕事に対しての意欲もなく一日を過しているという形の人が多い。

伊藤 責任感という問題になってくると、どうなりますか。

小幡 ですから、責任というのは、全然といってもいいほど、ないと思う。私たちのほうの仕事は、技術の問題が多いが、どうしてもこの仕事を今日中にしなければならぬという意識はない。なにせ、五時に仕事が終わったら帰ってもいいという考ですね。

高谷 私の役所では、国家公務員ですから、男と女の差は賃金の上でも労働条件の上でもついておりませんから、女の人も男の人と一緒にやっており、責任もってやっているが、どこかで女の人が脱落してゆくというのは、女は家庭に帰ったら主婦としての仕事がある、ということが盛になつていっている。八時間の勤務で、八時半から五時まで男と一緒に仕事をし、それが終わってから男はうちに帰って御飯を炊くとか、お洗濯の仕事がないために、まだまだ仕事に対して興味をもって話したり、仕事について勉強したりできますが、女の人は五時になったら家に帰って別なことをしなければならぬ。娘の時はこれから結婚してということに縛られているために、仕事に対しても腰掛的な気分をもちはじめていると思う。

茂内 いまの問題についてですが、家庭があるからとか、結婚したから特別の家庭の雑用があるとか、そのために女が伸びない、ということをおっしゃったようですが、結局、結婚した場合に、意識の問題ではないでしょうか。結婚すれば人間価値がさがるというような、女性の底にひそむ劣等意識というものの、そういうものが意識的でなくとも、それが先に立って仕事に対して生半可な気持ちになると思う。結婚した場合にはじめて人間としての価値が生れるということの大いに女性は考え、そういう面から、仕事に対して誇りをもつべきだと思います。

私の職場が特別だということもいえるが、女と男の仕事の不等等というものはありません。給料の上でも全部、昇給の仕方も、初任給でも、一切が同じです。ただ往々にして女が責任ある仕事を与えられないことがある。それは結局男の人が与えてくれない、という見方を、たいていの場合しているが、最近私たちのグループの中で話し合って、原因はもっと別なところにあるということを考え出した。たとえば雇用主とか、そういう男性側が私たちの能力を伸ばさなかったり、仕事を与えないということではなくて、私たち自身の、個人個人の女としての心の中に、そういう能力を伸ばさない原因があるので、これからの職場に生きてゆく場合には、もっと女としての個人というものに、きびしい

くらいのメスを当てて考えないと、女の職場での向上は無いと思う。

片山 男女の仕事の能力の不等等ということですが、これは、女子は女子で、もっと女子の性格に合った職業というものがやっぱりあると思う。たとえば紡績の女工さんなんかもそうですが、昨日拝見しました東芝のテレビ工場なども、細かい手先の仕事というのはやっぱり女子がしているわけです。そういうふうに適性に応じて仕事が進むということは当然のことだろうと思います。

しかし、紡績工場の場合でいいますと、普通の一般の工員の上に、整理工というのがある、その上に組長さんがいて、その上に班長さんがいる仕組みになっていますが、いくら長く勤続した人でも、女子の場合は整理工、組長まではなれるが、班長には絶対なれないということがあるわけです。それから、条件として、未婚でなければいけない。それから賃金については、女子と男子は学歴が同じならば差はありませんけれども、昇給額がやっぱり違っておるわけです。それから女子だけについてみても、学歴によつて少し差がついてくるというのは、これまた仕方ないことだと思えますけれども、昇給額もやっぱり中学を卒業した程度の人の昇給額と、高校を出た人の昇給額とが、昇給率が違ふということがあります。

をかけられる云々ということがありましたが、PTAのボスの圧力だけだろうか。私は、勤務問題のような時こそ、女教師と母親が話しあわなければならぬと、何度も先生に呼びかけた。県で、教組全体の道德教育講習会があったが、そのあとで話しあいたいと言っても、一人はシャントアウト、一人はノーコメント、一人は話しあいたい、外の目があるからという。そこに何の圧力があるか。そこに組合の幹部の圧力がないか？

茂内 風間さんや草野さんの話を聞いていますと、非常に職場に進出する女性の立場をストップさせられているように思うのです。それが進歩だという意識をもたれると……。

風間 決して全部ではないが、茂内さん自身でも、自分に疑いをもってほしいということ。常に疑いをもって自分を大切にするのは大事です。生徒も大事ですが、先生自身が、大事なのではないでしようか。

茂内 私は仕事をしてゆくに、自信がなければできない。

伊藤 これは、午後当然出てくる、指導者とかリーダーの問題になる。リーダーが自信をもつのがいいのか、もたないのがいいのかこれはたいへん問題だと思います。

いま非常に面白い問題が出てきましたが、いまの中から

風間 私がみているところでは、結婚する前はともない先生でも、子供さんがお出来になりますと、たしかに母親として人間的には進歩だか、現実には忙しくなることは絶対どうすることもできない。大体的場合は正直なところ、レベルが下ります。

草野 いま、精神労働のほうでいっていらっしゃいますでしょう。肉体労働のほうになりますけれども、私の家は小企業ですが、珪藻土といって、何キロという重い袋を担ぎます。すると年とともに体力的に劣ってくるが、賃金のほうはストップがないからだんだんあがってくる。ですから主人なんか、うちは社会事業やっているみたいだ、というのですが……。

それで、私が考えた時に、個人の自由、個人はあくまでその仕事をしていれればいいと思っていますけれども、会社の進歩と、自分が属している集団の進歩、自分の生活が常に集団と喜びを共にするということが根本だと思ふ。そうすれば、自分は四十過ぎたら、自分の生活をこういうふうにプランしようという、自分の一生のプランを立てるべきだと思ふ。いままでもその仕事にぶら下っていると、それは、安易な考ではないかと思ふ。

それからもう一つ、どうしても申し上げたいのは、さっきの問題と続きますが、先生方がPTA役員のボスに圧力

一つ大切な点が出ていと思うのは、草野さんの言葉の中に、組合の幹部の圧力という言葉が出てきた。組合という集団の中がほんとうにわれわれの頭の中にあるような民主的な運営が出来ているのか。あるいは、一選選んでしまった幹部の言いなりに動かなければいけないのか？

#### 労働組合——幹部と組合員の責任

斎藤 組合の幹部を私たちは一応選挙で出しているが、その場合に出てくる役員、幹部は毎年きまってしまっていると私は思うのですが、幹部の言うなりになるといふよりも、私たちの場合、組合員が非常に多いですから、どちらかというと、組合幹部がものすごくいると考えてくれるのですけれども、組合員たちの意識がないために、大ぜいの組合員のために幹部が引きずられてしまふのが現状かと思ひます。下層の組合員がいるから、幹部がリードしてみんなを引っ張ってゆく場合においても、うまくリードにのってゆかない。でもそれは、理解してついでゆかないというのではなくして、なにか集団の中において、野次馬根性的にわいわい言うだけで、実際自分の問題として考えずに、ただ役員に対する反感から、協力をしないというのでしうか。

長岡 幹部の圧迫より、校長に対する教師の不平のほう

が、先生たちの意見を停止している面が多いのではない

か。  
例えば、組合は動員反対の趣旨ですが、幹部に威圧されて黙っているのではなく、組合のいうことをきくと、赤の先生であるということで、校長に懸い点をつけられるから、あの問題があつてから、教師の発言力が減ったのではないのでしょうか。組合の幹部よりもその上に立つサラリーを払っている権力が圧迫を加えていると思う。

高谷 さっき組合の幹部からの圧力を受けるのではないかといいことをおっしゃっていましたが、組合の幹部というものは、労働組合が結成された目的をいつもはききさせてゆくのが幹部ではないかと思う。ですから幹部の動きに対しては、圧迫を感じてきたのは、組合員が集団のもっている目的に対して自分自身が離れてくるのではないかと思う。目的に対して離れたのでなくて、別な圧力が出てきたとしたら、幹部は集団のための目的でなく、自分自身の私欲ということで動き出した時にそういうことが出てくると思います。いつも目的をはききさせ、みんなに知らせてゆくのが幹部の仕事であるというふうに私は考えております。

宮前 組合の幹部の圧力とおっしゃいましたが、私は、自分の学校の先生たちの場合を聞きますと、組合の幹部の指で、抵抗は感じます。果してこれでいいかどうか。ですけれどもやはり自分が組合員であり、また組合を通じて私たちと公社との関係を考える場合に、やはり働く者同士が固まらなければいけないと思います。

だからある程度、集団の中に入ったなら、みんなと一緒にやってみて、協調ということを考えなければならぬと思います。

それから私個人で疑問に思っているのは、組織の中にいますと、今度の場合の選挙ですが、組織としての候補者を立てるわけです。その場合に、組合で推せんしたから、組織の人たちはなるべくその人に応援するように、といいますが、私自身としてはまだよく考えてみないとわからないので、はっきりしたことはいいえないのです。そうした場合はどうなるのかな、と自分自身疑問をもっています。

伊藤 その場合、斎藤さん、職場大会をやるためにみなさんに迷惑をかける、いわゆる公共の福祉という問題が出るわけですね。公共のために迷惑をかけて、その場合に従わなければならないかという面が出てくる。そういう問題をどういうふうにとり切っておられますか。

斎藤 賃上げ闘争の場合をとりますと、賃金を上げてくれということ、一日に二時間ぐらいやるということがありますが、迷惑をかけますからすまないと思いますが、それをや

合が来たからこうするということをいわれるが、それならそれに対して先生たちの自覚はどうなのか。組合の幹部が悪ければ、そういう幹部を選んでるのは組合員だから、組合員としての責任を果していないということです。なぜ果していないかというと、組合幹部を選ぶ場合にも、職場委員などを選ぶ場合にも、職場委員などになれば、校長先生などに臨まれるから、なり手が無い。そこで私たちの場合なら、順番制とか、推せん制とかでえらぶ。自分たちの組合をよくするための役員だという意識で選ばれることが少いので、役員に対して組合員が協力的でないのだと思います。

斎藤 私が局に入ると同時に組合員になった。向うから組合員になったと言ってきた。組合費を取られるといった具合ですが、そこで、意識するとしなやかにかかわらず組合員になったのですが、組合員になった以上は、組合という組織の中で一応の責任感をもたなければいけないと思

う。  
たとえて申しますと、みなさん方にもよく御迷惑をかけるが、私たち時々春季闘争とか秋季闘争で、ストをやったわけですが、そのとき組合は、一応組合の幹部から示されたことによって職場大会をやるわけですが、私たちも全部職場を放棄して、その職場大会に出るということに對し

らないと公社のほうでも考えてくれない状態になっていきます。世間の人からしても、自分だけ好き勝手に闘争やって、世間の人に迷惑かけて賃金を上げて、自分だけいい目にあうといわれるが、もう一歩広げますと、せっかくチャンスがあつて、いい条件になろうとしている人の、足を引っ張ることになると思う。引っ張れば全部が伸びられないと思う。だからどこか犠牲を払っても、伸びたことによって、ほかの低賃金の方も一緒にレベルを上げるといふ考え方に、もってゆくのがいいのではないかと自分では考えます。

織田 ストをやらないでなんとかうまくやる方法はないものでしょうか。

小幡 官庁の場合は、大きな国家がバックになっていますが、私の場合は、小さい事業主相手です。春秋にストをやると聞きますが、実際私たちがいつも不満に思うことは、官庁の人は国家が相手だからストをやればいくらでも賃金は上がるが、私の場合に賃上のストをやってしまうと、明日から自分たちの生活がやってゆけなくなる。自分たちが働かなければ生涯は成り立ってゆかない。そうすると事業主のほうでも事業的にやってゆかなくなってしまうから、私は今までの二百円で満足しているわけではないが、自分たちの生活が心配で賃上げ闘争をやりたいくてもやれない。それが私たちの現状です。

奮闘 おっしゃることは私もよくわかりますが、その場合にお願ひしたいのは、だからといって、足を引く張らないで下さい、ということですが。

もう一つ考えなければならぬのは、自分たちの経営者のことも考えて、質上ができないという考え方でなくて、大きい目で見て、そこから出発して社会全体のことを考えなくては行けないのではないかと思います。政治問題にまでずっと広めて考えていって自分たちのことも考えなくてはならないと思います。ただ自分たちのことだけ考えていれば、結局ぐるぐる回りばかりで、上へ伸びるということができないのではないのでしょうか……。

小幡 そう思うのですが、実際私たちの立場は、自分の生活を守るだけでせいぜい입니다。女子工員の場合、世間のことを勉強するという意欲が全くないのです。なにせ、自分の給料をもらって、ある程度年限が来て、誰かお嫁にもらってくれる人があればいい、という気持ちだけです。伸びようとか、社会的にどうしようという意識が全くないのです。

長岡 結局問題は大きくなったり、小さくなったりしても、どんな場合でも、ある社会機構という大きな枠があつて、その中で私たちが仲間のこずきあいをしあつていてということとを少し考えていったらと思ひますが、やはり、先

ものを人間が言い出したのは、小くとも中世以後の近代的な感覚でしょう。それはどこから来たかといへば、人間の尊厳さというものから出てきたものと思ひます。

したがって、近代的な社会といわれる中で自由というものがある、まず第一に肉体的自由といふものがあるわけですが、もし武家時代、封建社会に住んでいるとすれば、町人などは切捨御免ですね。そういう意味で、われわれは現在、少くとも肉体的に、いわゆる自由といふものは一応許されています。

第二はなんといっても、言論の自由、思想の自由というものがある。考える自由といふものをもっているわけですが、そこから、さきほど来問題になってきた、集團の中で考えない人間というものが出て来ないかどうか。

それは、昨日東芝をごらんになったりあるいは東邦レーズをごらんになった人たちは、ああいふ機械化されたオートメーションの中で、人間はなにを考えてゆくだろうかと、現に多少待遇がよければその中で人間は考えなくなつてしまふという問題、言論、思想の自由といふものが第二に考えられてゐる。

それからなんといっても法治国家において司法上の、法律上の自由といふもの。法律によって自由は保証されるわけですが、憲法において、人権と言論の自由が保証されてい

生が自主的な発言をしなくなるのはなぜかというところ、結局は自分の生活権がなくなつてしまふ。それを校長が受け入れるということとをなぜしないかというところ、校長自身の立場がつかえてしまふということですが。

伊藤 いま長岡さんのいわれた、全体として社会機構に弱いわれわれといひますか、日本人といひますか、それと、組織の中の、あるいは集團の中の個人という問題は私はびつたり結びついておると思ふ。

今日、直接にはなかったが、たとえば組合幹部の圧力があるのではないかとつた問題も、やはり最近よくいわれている「集團のエゴイズム」とか、あるいは「組織無」といふ言葉が使われていますね。組織といふものは横暴をするのではないか。組織の中で人間は考えなくなつてゆくのではないか。結局奮闘さんがいわれている中にも、大きな組織の中で果して一人一人がものを考えているかどうかという問題が出てきている。そうするとそこに集團の中における個人の自由と責任という問題を考えなければならぬし、また考えてきたわけですが。

一昨日やった自由という問題、結局抽象的に自由のないところと責任はない、あるいは、責任を果さないから自由はないのだ、といふいろいろにいわれます。そういう場合の自由ということをもう一遍考えてみますと、結局自由という

る。いわゆる司法上の、法律上の自由。また四番目はなんといっても、團結の自由です。それらをひくくめて集團の中で自分といふものがある場合において、決断の自由といふものがあるのではないか。その集團の中で自分をどの位置に置くか。これは、今日一番初めに申し上げた、参加の自由とか脱退の自由とか、自分をどこに置くかという決断の自由といふものがあるわけですが、それを自分で決めた、その集團なり組織の中で自分の果すべき責任といふものは当然出てくるわけですが、その場合に、幹部だけで動かされて、その中において、ほとんど意識をもたずに入った場合には責任も果さない。ただ幹部とか、指導者についていった場合に、結果的になにが起るかというところ、日本の敗戦のような形が起つてくる。あるいは軍部がやつた、あるいは一部の特権階級がやつた、自分には責任がないというように、國家集團、社會集團について意識のないメンバーからできていると、責任は一部の人間だけに押しつけよう、自分は責任なしといふところ。婦人會の場合、嫌いな幹部がいる、それが失敗すると、あれは幹部がやつたことだ、わたしのせいではない、という逃げ方が、私たちの生活の周辺にかなりあると思ふ。

家庭においても、もし父親、母親と子供の間に和やかな話しあいというものが常時もたれていないと、子供からい

えば、あれはおやじがやった、おれの責任ではない、ということがある。権力政治、あるいは全体主義政治の場合を考えれば、一番考えられる。一部の指導階級がやったことで、私たちの責任ではない、という日本の敗戦の形です。

そういう問題で、自由というものを、思想とか、言論の自由、あるいは法律の自由、身体上の自由というものを考えた場合に、いったい自由とは何であるか。これは私がいうよりも、本を読めばいくらも出てくるが、一つの定義として面白いのは「価値があると認められる行動に対する障害のない状態」を自由というそうです。「そうです」と申し上げておきますよ。価値があると認められる行動に対して障害のない状態、これは、婦人会とかみなさんが考えておられる具体的な立場に当てはめてお考えいただきたい。婦人会の中で「けちゃもん」が出るのですが、じゃまするものがないという状態が自由。そうすると、権力とか幹部の横暴というものが無い場合に、会員としての自由が許されているわけです。

ところが、価値があると認められることはどういうことかというところ、価値に反対するもの——これは道徳的な場合に一番考えられるが、反価値ということになると、たとえば泥棒、殺人、姦通、そういったものをする行動です、そういう悪いことをするのに、障害のない状態というものは、も、「下駄箱PTA」という言葉があります。ごぞんじですか？ その集りの中では、あんな馬鹿なことがあるものかと考えていながら発言しないわけです。というのは、わたし一人がいてもどうにもならないという考え、自己卑下、自己否定があります。自分の力は弱いものだと決めてしまっている、習慣みたいなものがある。あんなこといって馬鹿なことだと思いが、なにもそれに反対しない。「けちゃもん」がないわけです。そうして、下駄箱のところまで出てくると、みんなわいわいと先生の悪口なんかいっている。下駄箱PTAといいいますか、下駄箱婦人会でもある。

こういった根性ですね。自己主張でなくて自己否定。わたし一人がやってもどうにもならないという一種の諦めが、集団の中で自己をみんな殺してしまっていて、結果的には幹部にふり回されるという集団が出来てゆくことです。やっぱり日本には、封建時代からいろいろなものがありまして、長いものに巻かれるとか、泣く子と地頭には勝てない、そういうことをいいながら、「まあええじゃないか」そのうちに、「笑って暮そう」とかなんとかい出して、生活は苦しいながら、その中でげらげら笑って暮そう、諦めですね。あるいは仏教的な考え方からきているかもしれませんが、長い封建社会に生きてきた人間のものの

考えられない。価値に反するものを行おうとする場合にいて、必ず障害がある。自由が許されない。殺人する場合にも必ず障害がある。ですから価値があると認められる状態に対する障害のない状態というわけです。

社会における自由を四つにまとめれば、そういうことになるかと思えます。一番大事なこととして、自分を決定する決断の自由というものを考えなければならぬ。そして、決断をするのは自分である。自分というのは人間である。その人間の尊厳とさというものの保証、憲法における人権の尊重ということ。そこに近代社会の一番根本の問題があるというふうに、みなさんの話の間からまとめようということです。そこには責任という問題、組織の中の個人の責任という問題がさきほど来出たわけです。

で、さきほど申しましたように、この責任感というのが、自己というものをしっかりもっていない場合に一番不安定で、あまい形になるということです。

極端な場合をさっき申し上げたのですけれども、あれは幹部がやったことだから自分には責任がない。すなわち、自己というものをメンバーが意識していないということです。

それと同時に、これはみなさんもう婦人会とか生活の周辺でいつも考えておられるのですが、PTAの会なんかで考え方がありと思います。

そういうものが、これから近代社会として団結の自由を得た場合、また新しい内容と組織でゆかなければならぬ。婦人会の場合も戦前と同じように、国防婦人会的な形をそのまま残して、その中で自己主張というものが許されない。そういったことはよほど考えてゆかなければならない。それには、新しい組織とか新しい集団におけるリーダーシップの問題、リードする人たちが、あるいは大きな組合や組織の幹部の問題、ひいては国家の問題、権力機構という問題にも結びつくと思います。そこで今日は、午後に入って、いままでも出てきた自由の問題と責任という問題を、今度はからみ合わせて、集団の中で自主性というものを、特にみなさんの場合、婦人会議ですから、女性という立場から、集団の中の自主性、そうして自主性を伸ばすために自由をどこまで主張し、責任をどこまでもたなければならぬかという問題を、午後、あげていったらどうかと思っています。いかがでしょう。

斎藤 私、さっき茂内さんもおっしゃっていたことに聞きますが、この席上で、大半の方が、結婚してしまったら女の能力が落ちるといわれたが、共稼ぎを主張する手前、ものすごく気になる。

伊藤 この問題は、今度の婦人会議にでた、非常に大き

な問題だと思います。

それが集団というものは、どちらかというと共同生活のような場合、地域社会の問題、地域集団の問題と、それから組合という大きな集団の場合、それだけではないので、家庭というものがあるわけです。これを全部置いて、私たちのものの考え方のどこに間違いがあって、ほんとうに目的をもった集団を育てるためには一人一人がどういう責任をもって、どういう努力をしなければならないかというように、問題をこれから進めていったらいいと思っているわけです。

もう時間がまいりましたので、これで午前中を終わります。特別午後について御意見があれば……。

草野 いま「価値があると認められる行動に対して」といわれるこの価値基準というものが非常に問題ですが？。

伊藤 「認められる」というのは、社会的問題です。道徳という問題もそうです、泥濘しても道徳をもっている者である。しかし特殊な場合をいっているのではない。道徳というのは社会的基準があつて、人殺しをすることが忠臣と認められた時代と、人権尊重が認められている今とは違う。道徳というものは常に社会的条件において価値観が変つてゆくということです。

斎藤 いままで出てこなかったのですけれども、集団に

いうような問題、これは責任という問題からいえば、一番不愉快な、きかない問題ですが、無名の投書とか、あるいは署名に対する軽率な考え方、それから権力に対する私たちの心がまえとか身がまえ、こういうところにはいままでの私たちの生活の仕方に問題があるのではないか。そういうことがいろいろ出てきたわけですが、はじめの目からずつと話しつづけて、これは集団というものを考えた場合に、いつも出てくるリーダーシップの問題、まづリーダーシップの問題を出して、これが三、四十分か、一時間かかるかもしれないが、あとの一時間を、いままで集団というものは非常に勝手に解釈されているが、最後に集団というものを考えて、集団をどう育てて行くか、その中に個人をどう入れて行くかという問題でしぼらなければならんと考えております。

そこで、リーダーとしての問題を少し出し合つて下さい。大分リーダーの立場に立っておられる方が多いわけですが……。

中野 そのリーダーシップの問題につながるかどうか分らないのですが、私はちょっと先生方やみなさん方に考えていただきたいと思います。それは、私は草の実会というのに入っているのですが、その団体は、新聞に投書した方たちが、投書だけしているのではだめで、そういう気持ち

おけるマスコミからくる自主性ということもやっていただきたい。

伊藤 それは今度の会議のこのテーマのゆきつくところはどこか、というところに非常に関連してくる。いまいわれましたから、午後当然その問題を出していただいて、みなさんの間で話し合いが進められなければならない。

現在、大衆社会論というものが出ていることは御承知と思う。現在、私たち一つの大きな社会機構の中で、しかもその中でマスコミというものが大きく働いているわけです。人間の考え方がほとんどテレビ、ラジオ、映画、新聞などに動かされて、その隅々に自分というものがいる。そういったもので人間の考え方はなんとなく統合されつつある。その大衆社会における個人というものの、人間の思想とか考はどうなるかということが、実は現代社会における一番大きな問題でしょう。

(休憩)

伊藤 午前中、みなさんの話し合いの中から、かなり今日のテーマで考えなければならぬ問題が派山出たと思います。社会意識、P.T.A.の問題、役員とか、役員の選挙の仕方とか、集団に一番大切な問題が出たと思います。それから職場における男女の平等も大きな問題として出たのですが、生活の仕方の中で問題になるのは、たとえば投書と

みんな一つにまとめて、社会に影響して行かなければならないという目的で集った会ですから、ある点から見ればサークル的なむすびつきをもった会なのです。会の運営などについては、かなり民主的に、どんな人たちの意見も尊重し合つてやっているわけですが、一昨日も昨日もみなさんの話し合いを聞いてみると、地域で非常にみなさんが苦心して実活動していらっしゃるわけですね。私のような団体は東京の中の、広いところから何人かが集ってきてきているわけですから、問題のとらえ方がとても違うわけです。そうして自分の身の回りの問題に、自分の会でもって育てられたことがどういうふうにむすびつけられて行つたらいいかということが、いま私一番の問題になって出てきているわけです。昨日農村を見学しましたら本当に農村でもちゃんと民主的な会があるということを見て、びっくりして、自分たちの会がこれからどういうふうにして地域やなにかと手をむすんで行くか、そのやり方、それから精神的なエネルギーというものはその会で育てられるわけですから、その利用の仕方などについて、なやんでいるわけです。

それから、だんだんに会が育つて来ると、いかに民主的だといっても、自意識過剰の特権意識をもった方の中には、そういう人が地域の団体にいった時に特別な発言を



したりほかの方を牛耳ったりすることが出てくると思う。そうすると自分たちは本当に民主的にやっていたもはたの者からは、あの会は浮き上っているとか、変だということもはねかえってくると思いますが、そういうふうな、いくぶん文化的な団体というか、そういう団体のこれからのゆき方というものをみな様に考えていただきたいと思ひます。

### 文化的グループのあり方

伊藤 いまの問題、少しだけ取り上げましょうか。草の実というのは、新聞に投書する人たちが中心となっているグループです。中野さんははっきりおっしゃいませんでしたが、問題は二つあると思うのです。

これは地域的に集めるのではなくて、投書などをする事によって、お互いものを見て行こうというものです。そういう場合に、さきほどから出ている動静の問題でもそうですが、たとえば警職法という問題が出てきた時に、その会の名前で、あるいは会の幹部の方が考えて会の名前でその声明ができるかどうかという問題が一つ。抽象的なものの考え方をしている人たちが集って、実社会的な活動をする場合、警職法に反対しましょう、街頭デモをやりましょうという時に、どういうことに基づくか、その行動の

必要だと思ふのですが、そうすると、真理というものは一体だれのためにある、結局は私たち会員の一歩多くの人たちにとってしあわせをもたらすものだ。そこで、原爆はわたしたちにとってどうなのかということを検討し合えば、自然原爆は反対しなければならぬ。これはどんな立場の人でも考えなくても当然だという結果が出てくる。そういうことになりましたら、一人一人で反対するよりみんなで行く方がよい、ただ口先でなくどういうふうにしたらそのところが効果的かということを考えて行動をやって立ち上るところまで行かないと、本当に反対の意味をなさないのでないかということ私のグループで話しあって、原爆反対の時には行進にも参加し、会として一応行動に立ち上ることに決めた。

織田 中野さんのお話を聞いていまして、私は地方なものですから、特別なグループに属して、そこでもっている自分たちの向上をはかったり方向を見出したりするわけですが、それを自分のところにもって帰れる、うまくではないかもしれませんが、なんとかやろうと思えばやれるわけですから、中野さんの場合は、東京という土地柄だからそれほど難しくはないのではないのでしょうか。しかし、中野さんのグループはグループとしての使命があるはずですから、割り切って行動なさって、自分たちの周

不活発さとか、あるいは決定するのに非常に問題が多いところから、一部では当然これは市に浮いたグループではないか、ものずきに同好会みたいなもの、少くなくとも同志的な集りではない、そういったことで内部ではいろいろの考え方があってはいないかと思うのですが、みなさんどういうふうにお考えになるか……。

中野 もう一つ、私が地域から離れているのは、大きい動静とか警職法とかの問題はみんな考えられるが、本当の身の回りのことが考えられないということ。

伊藤 東京の場合ですと、地区別にグループができておりまして、そこにはわりあい生活周辺の問題も話しあいはされるわけです。

中野 実践活動ができないということが出てくるわけですね。

宮前 私も実は名古屋の方のいずみの会に入っている。私たちは名古屋の本部とはずいぶん離れて、三重県のまた小さい支部なので、そこでも一応この夏、原爆反対の行動に、対してどう取り上げるかということを討議したのですが、やっぱりこの投書グループはいろいろの考えの方がいるので考えをまとめるということとはむずかしいのですが、さっき田口さんがおっしゃったように、真理は一つだということ。なにが本当に真理かということを検討することが

辺のことは協力すべきところは協力するという態度で、ある点は回りの方におまかせになっていいのではないですか……。

宮前 私は中野さんのおっしゃったような、地域の人たちのむすびつきでない、人数も少ないグループで、警職法とか動静を討議しすけれども、それでいたい力になるだろうかとかよく考えます。こんな会はおしゃべり会だとかなんとかそういう批判も非常に受けました。だけれどもが参加できる幅の広い会ということは一番大切だと思いますが、一応そういう意識をもって集る会に、だれでも参加させるということはまあ無理ですから、そこに参加したわたしたちがまた地域に帰って近所の人とか、同好などで小さいグループ活動をやって、そこで勉強してきたことをうまく広げて行く方がいいのではないかと考えます。

田口 ぐらしの会の場合は、高松の地方の地区から集って来て、ぐらしの会になっていますが、その人たちが各地域でまた違うグループをつくって活動しているというようになっています。

伊藤 ぐらしの会のやる仕事としてはどういうふうにしておられますか……。

田口 経済や政治との関係、それからそれだけでなく、普通の読書もやりますし、それから新劇を見るとか、

作文集をつくるとか、児童文学を研究しようとか……。

伊藤 意思決定はされるのですか。

田口 します。勤労問題、警職法問題などもやりまいた。

伊藤 そうすると中野さんの方の章の実とかなり違っている組織ですね。

中野 私の方は警職法をやられたら私たちの会ができなくなってしまうという気がついたので、下の方から絶対反対してほしいという声があつて、ほとんど全員が反対して行動いたしましたけれども、勤評の時には立場によって意見が違ふわけです。そこでどうしても反対しなければならぬ人たちが動いたわけです。その時も宮前さんがおっしゃったように、会に入っている以上は社会を改めて行くために大きく動いて行かなければならぬから、会の名前で動きたいという考えが沢山あつたが、それでも個人の意思を尊重することとやりたい方がやるという線が出たわけです。私自身としても、はたしてそのどちらがいいかということが解決していないわけです。

伊藤 午前中に、組合などの場合に、幹部が一方的にリードしてしまうのではない、しかも組合員の意識は非常に低いということが斎藤さんから出たわけですが、そういうものをひっくるめて、リーダーの問題の話し合いをす

げる役目が必要ではないかと思う。

風間 私の地域の場合、リーダーになつていただきたいという方が、リーダーになつて下さらないというやみがある。

伊藤 選挙みたいな話ですね。

風間 本当にそうなのです。リーダーがなくて成長しないという、そういう団体をいくつも見ているのですが、そういう場合、どうしたらいいでしょう。リーダーを……。

伊藤 なぜリーダーになつてももらいたくない人がないかという問題を少し話して下さい。

片山 地方会議の時にはそれと同じような問題があつたわけです。会長とか役員をお願いしても、なかなか手がない。そういうものを拒む自由がどこまであるかという問題が出たのですけれども、いろいろお話し合いをしまして結果、リーダーに立つと周りの人はあなたまかせになつてしまつて、非常にその人の上に負担が加重になるということですね。

それからいろいろお話が出たのですが、結局結論としては、自分がどういう気持ちでその会に入っているかということと婦人会のみんなが、もう一度考え直さなければならぬ時期にきているのではないかということになつたわけですね。みんなが自分たちのための会なのだ、という意識をも

めて下さい。

### リーダーシップ

和田 リーダーというのが、一体どういふことをするのか、本当のリーダーの資格が私にもよく分らないのですけれども、私がいま考えているリーダーというのは、自分の意思でみんなを引っ張って行くというのではなく、メンバー一人づつの自主性をのばして行くために、リーダー時には先頭に立つこともあるし、時にはうしろから押し出す時もある、時には手をつないで行くこともあるが、大阪の場合で見ましても、地域婦人会、連合婦人会とか大きい集団の、いわゆるリーダーという人は専門職業的なセミプロになつてしまふ。御自分はいろいろな会に出て行っているいろいろな理想的なことを得々とお話しになるが、一般の会員は、何年たつても同じレベルのところにおいて、年々、役員と会員との溝が深くなつて行くばかりだと思ふ。リーダーがみんなをのばして行くことを忘れていふと思う。

中野 リーダーというものは、リーダーが周りの人を引き上げて行くのでなくて、周りの人がリーダーを育てて行くのが一番のぞましい状態ではないかと思ひますが、あまりにも周りの人が低い場合にはリーダーはある程度引き上げて一人リーダーを立てたらその人に全部仕事をかぶせるのではなくて、よく周りの人が補佐をしていて、もりたてて行くというようになって行くのではないかということになったのですけれども……。

伊藤 片山さんの場合、あなたが実際に紡績工場の監督のようなことをしておられて、そういった集団がある意味ではリードしなければならなかつたわけでしょう。

片山 自治会というのは私はタッチしない。いろいろ困つた問題の時には聞きますし……自分の手だけではどうしてもできない問題は相談をもちかけてきます。そういう場合に会社と自治会の間に立つて橋渡しをするような役をするわけです。

伊藤 具体的にあなたがぶつかつた問題でどんな問題がありますか？

片山 寮の中の設備ですね。たとえばアイロンをかける設備があるのですが、その時間が制限されているわけですね。そういうことについては自治会だけで決めるわけにはゆかないのです。アイロンの管理をしているのが私ですね。自治会だけで一方的に決めて申し入れをしても、私たちの勤務の時間の都合などで自治会の要求をそのまま通すことができない場合もありますし、そういう時にはやはりお互いによく話しあつて、どちらにも無理がないように、

自治会の人にもなるべく、フルに活用できるように、そうしてそれも私と自治会との話しあいだけで決りませんので、それを会側側に申し入れるという役目をつとめているわけです。

斎藤 私は全電通福井分会に属していますが、現在私は組合の役員はなにもやっておりません。去年あたりからなにか組合の役員を引受けてくれないかといわれているのですが、私、引き受けなかったのです。というのは、矛盾したようなことを申し上げるようですが、組合の役員になって、いままですてきていた組合の中に入っていくと、組合の役員くささというものに、なじんでしまうのです。ですから私、お断りした時に、もっと新鮮な立場でいたいから、なんていう生意気なことを言ったのです。それともう一つは、局に勤めて十何年という方が非常に多いのですが、私もものように新米みたいな子のいうことは、あなたのような若い子だからと、すぐきめつけられてしまうのです。でも不思議なことに、組合の役員なら若い子でも小さい子でも一応聞いてくれるというようなことがある、だからいいみたいですが、私自身考えて見ると、それだけではちょっと納得できません。

高谷 私は全林野の労組に属しており、現在組合の役員をやっております。役員の仕事はその集団の目的を、いつ

をするより、サークルをつくって、みんなにいろいろなことをやらせて行く方が、性格として好きなので、その方にタッチしています。組合の役員になれば、サークルの方がお留守になるということも考えられますから……。

伊藤 お互いに話しあっても解決が得られる問題ではないが、一昨日お話しになったので、織田さんの場合、既成の婦人会が自然解消的になくなって、そのあと、おされて織田さんが新しい責任者におなりになった、その時に織田さんの話では、やはり先輩はあるし、自分の番ではないと思っても、自分が引き受けなければどうにもならないということからお引き受けになったという、その点をもう一ぺんくりかえしになるかもしれませんけれども、お話し下さい。

織田 いままでの婦人会のやり方に反抗しておった人たちがあって、それがきっかけになって、しまつに負えなくなって解散しました。そうしていままでの婦人会は大きくするために、役員のなり手がないこともあったので、今度は小さくすることになって、私の方は一つの小さい婦人会をつくったわけです。それで選挙になったのですが、あけて見たところ私が私になったので、私もずいぶんやんだわけですね。けれども、結局、私がいまこれを受けなければ、めんどくさいような立場の人が受ける場合にさまたげになると思うのです。役員というのはえらいのがなるのでは

もはっきりして行くことではないかと思っております。労働組合の場合は、労働条件をよくして、私たちの生活を守るのが目的ですから、その目的にむかってすすむ場合、いろいろな仕事が出てきます。そういう仕事をやって行くのが役員ではないかと思つてやっておりますが、その役員になり手がいないというのは、その目的をはっきり認識しないからではないかと思ひます。

それからいままですてきた役員の方が、その仕事をとてもいやがって、早く切り上げてだれかに譲りたいという態度を見せたら、絶対あとの方は仕事を引き受けないと思ひます。私はいまやっていることをやらなければ目的にすまれないという自覚をもって、責任をもってやっていたら、次の方に仕事を引き受けてもらう時には話しやすくなつてきて、認めてもらえるのではないかと思つてやっております。

斎藤 弁解の意味でちょっと……そういう意味で役員になるという方は、ほかにもなにか役をもっているというふうになり、いくつも重つてしまひやすい。私たちの電話局では組合だけでなしに、読書サークルとかコーラスとかいろいろのサークル活動をやっています。私が思うには、だいたいにおいてサークルをやる人は組合意識をもとうとする人と同一人物になつてしまふ。私はどうせやるなら組合の仕事

なくて、会員一人一人によつて、また役員の一人一人によつてささえられれば、だれでもがやるのだということを知つていただくために勇敢に受けのぞくのです。

伊藤 大分みなさん役員の立場にあられる方がおられるのですが、さつきから出ている責任観念とか、負担が多すぎるのかという問題を、具体的に申し合つてみたらどうでしょうか。

室前 私は実は地域の小さなPTAの支部を私が言い出してつくつたものなのですけれども、はじめのつくるきっかけというものは、いままでのPTAとか地域婦人会のやり方にあき足らなくて、私が泉の会などで勉強して来るものから、非常に地域の人たちがおくれるのがまどろっこしくてしょうがない、なんとかしてその人たを引上げようという、いまから考えると傲慢で傲慢な考えをもつていたのです。それでそれから民主的にみんなの意思を尊重してとか、そういうことをいいながら、実際の場で話しあいということになりますと、発表するということになれておりませんし、意見が出ないのです。実際さまじい地域で発表すると、あとののはねかえりをおそれて意見が出ない。そうするとこちらはあせつて、こういうことは考えなければいけないのですよと問題をおしつけてしまひことになる。その場合、大半の方はそういう話は難しすぎて分らな

いので、その場に出て来ないか、かげでいるあんな会  
は難しいとか、かげ口をきくようになったわけです。そう  
すると出て来た人が今度また引っこんでしまう。あんな会  
に出る人は頭のいい人とか、えらいさんだとかいわれる  
のがいやだから出て来ないという形になってきて、出て来  
ても一方的にこちらがおしつける御意見拝聴。反響はなに  
も出てこない、かげでばかり反響が出ているということ  
で、つくづく考えてしまいました。結局、私は一体なにを  
しているのか、みんなのためだといえながら、ここに出て  
いる人たちは、私たちの会とも思っていない、それぞれ口  
にはいわないが、なにかしらもやもやした要求とか不平と  
があるに違いない、それを私が全然無視して、こっちから  
いうのは大失敗だったと気がつきました。そこでそういう  
人たちの声を聞くにはどうしたらいいかと思つて、今度は  
小さく分れて話しあいの会をもってもらったのです。とこ  
ろが五人か六人のグループの中にもリーダーというのがな  
いとだめだということが分った。小さいグループをいくら  
つくつても意識をもった人がいない場合には、そういう小  
さい話しあいの会が、本当に非戸端会議でまともりがなく  
て、今度はけんかみたいな対立が起つたり、人の悪口の会  
になったり、結局なにもならないということも考えられ  
た。それで、ともかく思つたことを言ってもらいました。

のは、かげにいて話しあいをしたりたてて行くというふう  
にもつて行つたら、わりにみんなが話をなさるのです。  
茂内 私の方では、しゃべる人を立てようということは一  
言も出てこない、実行に移せる実践力のある人を選ぼう  
というのを根本にしていますので……それも話しあいで  
は絶対に決めませんで選挙です。子供が何人いて、どうい  
う職業をもつて家ではどういう仕事をしているということ  
も一応分つていても、肩書きとか一切を書いたものを渡し  
て全部投票するわけです。

風間 いま選挙という言葉が出ましたが、地域婦人会で  
新年度の役員を選挙する時に、みなさんに紙を渡しまし  
て、どなたでもいいからみなさんのいい方を書いて下さい  
というわけです。みんなで書きますね。集めて順次に上か  
ら会長、副会長というふうに決めます。ところが当人はそ  
こに来ていらつしやらないのです。いらつしやらないの  
ですが、それでも満場一致などと拍手で決めるのです。一応  
こういう方に決めることにいたしましたので、あとで私たち  
が交渉いたしますからなどというところで解散するのです。そ  
れで今度この方たちが行かれると、私そんな話知りませ  
んからと言つて蹴つていられれない、そういう場合選挙の効  
力ですが、そういうものを先生、どういうふうに考えたら  
よるしいでしょうか。そういう選挙になった場合、どうし

するとその中で生活の問題がいろいろある。実際私たち  
は、だいたい子供の勉強のことが主だったが、うちの子なん  
かは親のあとをついで百姓をしたらいいという人や、その  
日ぐらしという人は、子供の教育なんかどうでもいい、子  
供の話なんか聞いてもなんにもならないと思つてゐる。そ  
うして聞いてみると、一番大事な生活の問題があるというこ  
とがわかりました。PTAの中で生活の問題をなんとかと  
らえて行くということで、寄付の問題とか教科書の問題  
で、もっとみんなの不平等を、話しあいましよう、というこ  
とで、いまやっています。

伊藤 いま富前さんから失敗談と自分では言つておられ  
るが、私は決して失敗でなくて、非常に建設的な意見が出  
ていると思う。おそろくみなさんはそういう失敗は重ねて  
きていられると思いますが、もう一人ぐらい、そういうた  
点で……

草野 さっきからいいましたように、私の方のPTAの  
クラスの小さな会はわりに民主的に行つています。そのク  
ラスの場合に、私は話しあいをする時でもよくしゃべる  
ので、私をクラスの会長にしようとするのですが、私は会  
長になつてもならないでもしやべるのだから、しゃべらな  
い方を会長さんにして下さい、というわけです。なるべく  
しゃべらない方が会長、副会長になつて、よくしゃべるも

ても受けなければならぬでしょうか。

伊藤 そういう経験は、みなさんおもちではないです  
か。

茂内 先生に質問ですが、リーダーということとは男の世  
界でも問題になるわけですが、女の世界のようなこんな形  
がありますか。

伊藤 地域婦人会と同じ形で問題になるのは、地域青年  
団です。地域青年団の幹部は、固定してしまつて、動脈傾  
化になつてしまつて、下部の会員は意識がないという問題  
は同じです。

それからさきほど来出ている、組合における組合幹部と  
組合員の意識の問題、これは当然同じ問題として出てく  
るでしょう。

中野 風間さんにおたずねしますが、リーダーにお願い  
しに行つた時に、どういうわけでお引き受けにならない  
か、理由はお聞きになりませんか。

風間 もちろんおっしゃる、それは適当な理由があるの  
です。忙しいとか家庭の事情や健康状態を申されて、どう  
しても引き受けられない。そういう時に引き受けなければ  
いけないということがいえるかどうか。

私が平会員の時に、そういう問題があり、その時の会長  
さんがお困りになりました、どうして決まらなかった。そ

れでどう決ったかといえ、いままでも副会長をされた方が会長になった、そうなる時の様子を聞きましたら、古い前にやった会長さんが集って来て「私もやる時は涙をのんで引き受けたから、あなたも泣いて引き受けなさい」といった。その場合の個人の自由ということに疑問に思ったのですよ。選挙に効力があるかないか疑問です。

高谷 効力はあると思います。選挙のやり方は、全員だれでも指名するという選挙の仕方をしたのですから、だれでも選ばれを可能性をもっているが、その可能性が与えられたら必ず引き受けるべきだと思います。だからそういう会に入っていて、そういう仕組みで選挙されるということは、はっきり認識しなければならぬと思います。

伊藤 おしつて引き受けなかったら除名しますか。

高谷 私はそういう自由は与えてもいいと思います。加入の自由があるんですから……。

風間 除名するといえ、喜んでしまうのです。

伊藤 そこには婦人会とかPTAとかいうある意味ではあまい集団の本質があるのですね。

風間 だから婦人会の意味というものはもう一度考え直して行きたいと思っています。

片山 それはよくその方に説明する必要があると思いますが、全員、選挙権も被選挙権もある、もしその方がどう

たのですが、私の周囲を見ましたら、小さいグループの場合は問題ないが、やっぱり大きい地域婦人会とか組合の幹部になられたら時間的にはとても大変だと思う。うちの御近所に、教員組合の婦人部長をしていられる方があったが、一時、二時まで会議で家のことはなにもできない、だから幹部がそういう荷物を全部背負ってしまう状態だったら、やっぱり引き受ける人には家庭的なものや、その他いろいろ条件が揃わないと受けられない現状になっていると思う。

伊藤 和田さんの意見は、もっといろいろ条件に従って判断し考慮すべきだということですね。

中野 私は自分が目的を知ってここに入ろうと思って入った会なら、引き受けた方がいい。PTAのように一人にPTA会員になってしまいうような会の時なら、いわゆる選挙されても引き受けられないと思う。

伊藤 ようするに会の目的とか、性質の明瞭度が左右するということ、その人の生活条件とか、その他の事情を考慮して決定するという以外にはないのではないのでしょうか。みなさんの話しあいでは……。

草野 私、選挙をした以上は、選挙に従うべきだと思います。でなければ選挙というものの価値がなくなってしまう。権威がなくなってしまう。ですからいろいろの個人的な

しても役員を引き受けたくなくて、ほかにいい候補があるならば、その場合に出席して選挙すべきだと思う、その権利をお捨てになったのだから、自分がいなかったらという、拒むことはない。

伊藤 ある意味では会員としての責任を果たしていないということになりますね。

風間 自由ということはどうなりますか。

草野 自由はその方にあると思います。どうしても引き受ける都合が悪かったら選挙の前にお断りする。

風間 だって立候補もしないのに……。選挙の前に、今日しますけれども、いらっしやらない方があっても有効と見えず、というみなさんの決議があったら別ですが、それがなくて、やった場合に効力があるかどうか。

宮崎 はっきり規約をつくっておくということが必要だと思う。

風間 規約はできているが、もやもやした古いもの……。

伊藤 役員選挙の規約はできているが、だいたい会員が知らないでしょう。その前にその通りやっている会が少なから、いよいよ事にぶつかった時に風間さんのような問題が出る。

和田 選挙の時に引き受けるかどうかということが、出

条件があるならば、やはり選挙の前にお互いに話しあって、一旦選挙した以上はそれに従うというのが民主主義のルールではないでしょうか。

中野 それは指名委員会やなかで指名された時は、その時に拒否できると思うが、一方的に選挙だけでやるという時にはちょっと難しいと思います。

伊藤 会員の意識の問題ではありませんか。本当に選挙されても逃げる人は、会の意義とか重要性を考えていない、ただ漠然と会員になっているという場合に起り得ることでしょう。ですから小さなグループとか、集団の場合にははっきりするけれども、少し大きな少し漠然とした会の場合には、それがなかなか実現しないということではないでしょうか。理屈としては風間さんや高谷さんのいわれる通りと思いますが、そこに現実問題としてPTAとか婦人会の問題があると思う。これらは一種の運命共同体なのです。意識的な集団ということよりも宿命的な集団状態、よめにいってたら婦人会に入っている、子供が一年になったらPTAに入っている、入っても入らなくてもPTAや婦人会の会費を取られる、という意味では日本的……日本のというのは、寄附金を集めないという国の教育予算が少いから、PTAが教育を守っている、だからあれをあいまいな性格にしておることがいまの教育行政の上からはいいわけ

なのです。そういう問題まで考えて行けばやはりPTAの存在とか、婦人会の性格をどうと真剣に考えるというところだけはいえるでしょうね。そこでリーダーシップの問題ですが、私、御参考までに考えてみた、というのは、いま指導者の問題で沢山の問題が出ています。いま出てくる小さいグループなら実ははっきりしているが、大きい団体の場合に問題が多い、しかもその中では人間関係と草野さんいれたが、人間関係が非常に複雑になってきた、その中でリーダーはなにを知らなければならぬか、そうすると宮前さんのように非常に卒直に、おくれた人を引き上げようと、自分でもあせりすぎた、ということをおられるが……。

それから言葉としては、会員の人々をのばすことがいい、リーダーはそういうことがいいといわれたが、それが実際にはなかなかできないのが現実でしょうね。そういう問題を考えて場合、それから午前中は茂内さんと風間さんの間で非常におもしろいお話しあいがあり、茂内さんのいわれることは非常に正しくてきちんとしているが、少し自信をもちすぎているのではないか、私の見る現場の教師というものは、必ずしもそういっていない。けれども、リーダーは自信をもたなければいけないのではないかと、いろいろな問題がいろいろ出てきたわけです。そこで私のよ

図をあるいは組織をつくって行く、いろいろなキャラクターがあるわけです。そういうものを大ざっぱに分けたものがありますから、ここにお伝えしておきます。

会員にしても、幹部にしても、いろいろな型があるので、まず会を組織したり維持して、いつまでも魅力のある会として維持して行く、あるいは前進させて行くために必要な、あるいはそれに適当な性格というのはみなさんの中にいろいろお考えがあると思いますが、第一が激励型、しっかり、しっかりと一生懸命激励する。

#### 第二番目が調停型。

第三が妥協型——というのは調停型は、まあまあというあれです。妥協型は、ああそうですか、わたしは間違っていましたとすぐ妥協してしまふ。

引き入れ型というのがある。たとえばここで十五人、もう二日やっているわけですが、だれも一言の発言もしないとする、あなた、何かおっしゃりたいことがあるでしょう、もっているものをお出しなさいという。これは引き入れ型ですね。

それから五番目が標準設定型。なんでもこれこれが基準として、という標準を決めてものごとを運んで行く。これ決して強型ではないですよ。

六番目が観察、解説型。いつでも会の動きをそとからに

うな者が、みなさんにお説教するのは出すぎているので、リーダーというものの理想的な姿について、イギリスの教育学者のいうことをお取り決まさせていただきます。ラヴリーズという教育学者がおります。この夏の世界教育会議にも出て来ますが、この人がリーダーシップの五つの条件というものを出しています。みなさんが現在リーダーをやっておられるという立場を一応ここでは認めないということで、みなさんリーダーではないとして聞いて下さい。

一、あまり自信をもちすぎないこと。

二、野心がすぎたはいけない。

三、小さな仕事を一つの時に一つだけをやりなさい。

四、あなたの夢をあまり重大に取りあげてはいけません。

五、明日になったら、今日いったことを訂正したくなると思いなさい。(笑)

いま笑っている人は自信のある人だと思えます。(笑)それからリーダーに関連して考えるべき問題は、組織とか団体、集団の中の人間関係でしょう。ヒューマンリレーションという言葉が流行言葉になっていますが、人間には非常にいろいろな特性があり、リーダーになり得る特性の人もありますし、リーダーや幹部にはなれないが、そのかげで表によく仕事をしてくれる人だっているわけです。集

やにやしながら見ている会員がある。あれが幹事になってなができるか。解説型はいい方です。静かに記録など取ってね、そういう役割もあるわけです。

第七はいい意味の従属型。まあ従って行く会の方針にはだいたいいつて行く従属型。

みなさんは、いまの中のどれかに入らないう。これから絶対に入らないというのを申し上げます。これはいいない型です。特にリーダーとして考えなければなりません七つの型があります。

一、攻撃型。

二、妨害型。

三、自己顕示型。

選挙の放送なんかには、なにもいわないで、名前だけくりかえす人があるでしょう。それは顕示型の病的になったものですね。

四、自己弁明型。

どうもわたしに至りませんで、と始終いって歩く人があるのですね。

五、脱走型。

これはさっきの観察型にもあるが、にやにや笑っていてとうとうやめてしまう脱走型。

六、威圧型。

これは独断型といってもいいかもしれません。なんでも自分のいうことについてこないと、威圧してしまふ。

#### 七、依存型

なんでもいいなりになってしまふ。この従属型と依存型とはちよつと違うように考えますが、悪い意味の従属です。まあその七つです。そういうものを組織の会員として、また幹部として人間関係において考える点があるのではないかと、いろいろ考えるわけです。

それから、これから最後の仕上げに入ることにあります。さっき草野さんから出た人間関係という問題。それから風間さんが出した大変難しい——とにかく一定の会則なり目的を漠然ながらもっている会において、自由と責任という問題が出たら、草野さんがはつきりとそれに責任が果せないではないか、逆にいへば会長に選ばれても引けない自由だであるといわれた。今年の婦人会議の非常に難しい点にぶつかっているわけです。

そこでいままでは漠然と組織というものを頭の中で考えていたが、おそらく一人一人は違ったものを考えていたと思います。そこで、最後に自主性という問題、組織の中における自主性、集団の中における自主性というものを考えながらみなさんの頭の中にある集団を、どのようにのぼすかという問題に、少しづつしぼって行ったらと思う。

と、草野さんははつきり自分ならとびこんで行くということをしていれたが、そういう時の集団の考え方に、私、問題があると思います。たとえば集団住宅という場合に、これは田口さん、集団住宅——おそらく東京の昨日御覧になった場合とは非常に違うアパートでしょうが、そんなところであらうと田口さんは、下手に集団的な行動をとるとかえって人間関係で難しいことが起ってくるから、正しい意味で個人主義をすすめて行くべきだということをいわれた。その辺の問題から集団というものを考えて行ったらいいと思います。

風間 団地に入ってから来て、まずあすこの家がどんなカーテンを掛けるかということが一番はじめに周囲の問題になるそうです。年寄った方がいていらっしやいました。夏は年中レースのカーテンを閉めたきりの生活だそうです。子供さんのある方はそんなことをしてられないからついでにあげたばなしで、なにもかもまる出しになるとおっしゃっていました。若い方はわりあい割り切っているしやるが、ちよつと年取った方が入った場合に、なにか問題があるようです。

田口 私はそれこそきめめなアパート生活ですが、実に愉快です。わりあいにはあげたばなしで、夫婦喧嘩もすぐ隣りに聞える状態ですが、まあ結局あまり人の生活には立ち

中野 その前に少し私たちのような会は、これからどうして行つたらいいかということ、ちよつと教えていたいただきたいので、さきほどのべたようなことに関連して……

伊藤 私、やっぱり教養とか文化という言葉もなるほど適当ですが、ただ家庭の主婦が、ものごとを生活の中で考えて行くということを、はじめは投書という形であらはし、そういう考え方をする人たちが漠然と集っているわけですから、そこには思想とかはっきりした運動目標というのはないわけでしょう。そういう会の、動議反対とか、どぶ掃除をどうしようとかいうことについて、ついでにこないと問題にする方が問題だと思ふ。

さきほど一顧の解決法が出たと思いますが、地域であえて引つ張り上げようとする分裂が出て会を抜ける。事情によって組織が分裂したり脱退さわぎが起るのは当然で、そんなことを恐れているのは集団はなりたないが、「草の夷」の場合、その会の特質によって違うということがいえるのではないしょうか。

これも「草の夷」だったかと思いますが、昨日都会の集団生活、アパート生活をながめて、都会の人たちあの集団生活の中から脱落して行く、あるいは虚無的にニヒルになって行く。その場合、草野さんの考えで二つある、集団の中にとびこんで行くことを、集団から逃避するこ

入らないわけです。話しあいということはとくにしないのですが、結局話しあいは炊事場でもできますし、お洗濯場でもできるわけで、そんなにしている中に本当の話しあいができまして、私たちの団体は政治に関心をもって行かなければいけないという会なのですが、私が別に選挙に行つて下さいとはいわないが、常に話しあいがされていると、どんなに選挙が大事かということが自然に分つてもらえて、いままで一回も選挙に行かなかった方が、今度選挙になると、すすんで行かれるというぐあいです。

住吉 私のところは市営住宅ですが、田口さんと同じゆき方をしています。なるべく他人の生活に迷惑になることをいっただいとはいはじめるのに出た問題に全部いまいかえつたわけです。

伊藤 だいたいはじめの月に出た問題に全部いまいかえつたわけでは集団の中の自主性というものについて、家庭という場からはじめましよう。

家庭集団というのが運命集団としてあることを話したのです。はじめの月に共棲ぎの問題が出て、草野さんは子供を育てる場合に、家庭に帰ることがいいのではないが、それに対して年輪の若い層からとんでもない、そんな人はとんだ帰るなさいという問題が出ていたが、その時に私が申し上げたのは、家庭とか子供に対する愛情が盲目

的動物的である場合は、子供の自由というものはその場において損なわれて行くのではない。家庭において自主性のない人間がつくられて行けば、それが社会に出た時に、どういう型になるか、そういう人間のかたまりである社会はどういう形になるかということを示し上げたわけです。

#### 再び共働きについて

草野 子供の育て方についてあんまり子供につき過ぎるということ、大分一昨日批判をいただきました。私の意見は、子供を育てる母親というものは、子供を育てることによって、自分自身伸びるのだし、子供を育てる間は家庭の経済がある程度許せば、少々の貧しさは辛抱してでも家庭に帰れ、という考です。

ところが、女の自由というものを思うと、子供がある程度成長して、学校に行くようになったら親を引いて社会に出ればいいというプランですが、その場合、共稼ぎの若い方から、そんなに子供子供とくっつかないほうが民主的に育つということですが、私考をしまして、子供のそばにつきのはなぜかという、私の目標は、何でも言う、伸び伸びとした、意地の悪くない子供を目標に置いている。何でも受けずけ言う子供にするためには、母親が言わせるように仕向ける。そのためには親がそばにいたほうがいいというこ

い。

先生がもしお勤めからお帰りになった場合、妻がまだ帰ってなかったというので不機嫌になりますか？

伊藤 その問題は高谷さんが解決しておられるので、高谷さんから御説明を聞きましょう。

高谷 私の家では解決したことになっていますが、一般の方から見た場合、悪妻ではないかと見られるかもしれません。私も夫婦の中で、女だから家の中の仕事は全部やらなければならぬと決めつける考え方がありませんでした。組合の仕事をやっている上でも共同ですから、家庭に帰った場合でも一緒になければならぬと思った。いまのところ、私たちはどっちでも早く帰った方が御飯の支度もやるようにしておりますし、買物なんかも、男でできる限りのものはやっております。そういうやり方は、夫婦の中で解決してゆくのだと思います。

宮前 私は実は戦前派ですから、女は家庭の主婦となるのが一番立派だというように、良妻賢母型の教育を受けてまいりました。ですから、歯科医専を卒業して職業婦人になったのに、結婚した時やめてしまったのです。

戦後になりました、インフレで、やってゆけなくなったので、やむを得ずまたはじめましたが、その時主人のほうでは、今までの男の立場で家の中は女がするものだという考

とになるのですが……。

斎藤 草野さんは子供に対する愛情とおっしゃったが、ある点を除いて全くその通りだと思います。ある点を除いてというのは、母親と子供のつながりが、そばに接触するだけから生れてくるという表現をされたのですが、果してそれだけでいいかということを考えます。もう一つ考えなければならぬのは、草野さんのおっしゃることは、今までのいわゆる女というものの、母親というものの観念を考えてきてそうおっしゃるので、私もそこから来た面からいうと何も言えないが、これから新しくやってゆこうと考えるわたしにとってはただ愛情面だけで考えずに、社会制度というか、大きな面で考えてみたい。

住吉 子供に接触することだけが愛情ではないと思う。一人一人の子供にいろいろな特性があるので、そうすることがその子の特性にあっているという教育の方法があれば、それが一番……。

下山 子供は絶対母親が育てるべきだということはおわっているが、自分自身の問題として、何か仕事をしたい。それと同時に、家庭の集金は夫婦が第一です。

最近子供が少し大きくなりましたので、仕事をもちたいと思ったが「ぼくのサラリー」の半分もつてくるなら出掛けてもよろしい」と言う主人です。紙のものを横にもしなえ方を身につけてしまっており、私自身も同様なので、仕事と、家庭の女ということになりますと、家の中の仕事が巧いことなく、主人は仕事なんかしてもらわなくてもいいから、世話女房になってほしいという。私としても、やめてしまおうかと思うことも何回もありましたが、しかしやはり自分の職業をもつてみて、いろいろ勉強できたいと思います。

今まではほんとうに、自分の家庭で子供を育てる母親、それだけの意識で、狭い意味だったのが、何だか世界がひらけた気がしました。そういう時に憲法が変わって、家族制度が廃止されて、男女平等が謳われた時に、ほんとうに自分が解放されたという感じがしました。その解放感、実際、主人との問題もありますが、家の問題です。主人のほうの親は主人が長男なので長男の嫁をもらったという意識です。だからわたしは、長男の嫁、長男の嫁という意識でいつも見られていることにはびっくりした気持はもっていません。抵抗感を感じていました。それが戦後解放された時に、現実の問題としては、親のほうは憲法を認めたわけでもなし、実情は変わったのではないが、意識の上で自分が解放されるということが大きな喜びになったのです。共稼ぎがどうこうとか、やっぱり女は家庭に大事にしなればならないということがさきほどからいわれてきていま



すが、その問題だけを取り上げた時は、女は家庭を大事にして、子供のそばについてやって、いい教育をするという事は、一番いいことだが、社会的問題として捉える時には、憲法改正がいわれ、家族制度が今の現状に合わないから、変えたほうがいい、という政治の上の流れ、それに利用されてしまっているのではないか、この問題は大きな、今の政治の流れの中で、もっと掘り下げて考える必要があると思うのです。

茂内 私の言いたかったことも宮前さんのおっしゃったことです。それで、子供のことでありますが、私の校長先生が、卒業式にお母さんたちに話したことでありますが、あるアメリカのお母さんが子供さんを連れて日本の家庭に遊びにいらっしやう。その時、お茶を出された時、お茶をまいた。しかしお母さんは知らない顔をして見ていた。そうしたら子供が一人で立って行って、ふきんを貸してくださいと手まねをして借りてきて拭いた。それを黙って終始お母さんはうるたえずに見ていたという。日本のお母さんは「どうしてお母さんが全然かまわないのですか」と聞いた。そうしたらアメリカでは子供を育てるに、満三才になると、子供の自主性というものを植えるために、子供の責任においてやらせるという。それをお聞きになったお母さんは、自分の場合だったらうるたえて、ハンカチを出して拭いて

やるだろうといわれた。そういう育て方をしている傾向が、日本ではまだあるのではないか。そういう点から、子供のそばに親がいるので、子供が育つという考え方は、どこか心の底にひそんでいるというところが、ある意味では、女の人が職場へ出て行くことをストップさせるという原因にもなるのではないかとということが憂えられる。

伊藤 この家庭の問題だけにこだわっていると、集団というものの捉え方が狭くなって、時間の制限もありますから、家庭における育て方というのは、一番初めの日に問題にしたのは、いま茂内さんといわれたが、日本の子供の育て方が、いくらか間違っているのではないか。現に——ということでは、この間、アメリカの新聞記者の例を引いて申し上げたのですが、日本の社会の隅々に根を張っているボスというものを退治しなければ、日本はほんとうに民主的な国家にはならない。そのボスを退治するにはなにが一番必要かというと、家庭において子供を育てるということに気をつけなければならない。それはなんであるかということ、子供の自主性を伸ばす以外には、社会の隅々からボスを退治することはできないのではないか。自主性のない人間は人の言うなりになって生きてゆくということでは、そうならば、すでにボスに支配された政治になるのではないか。そういう意味で、草野さんの言う、子供は母親の判断

で育てたいというのは間違いないと思う。そんなことをしないで育てます、というのは、子供をもたない方が言うことで、それと、この育て方というのは違っています。

それだけ注意することにして、次に同じ運命的なものとして、家庭と地域とある。その他農村の場合に、たとえば宮前さんが字という問題を取り上げられて、字における古い仕来り、これは言い換えれば部落根性、もう少しむずかしいいえば運命共同体、あるいは部落共同体というような言葉を使いますが、なんでも、その一人の支配者みたいなもの、有力者、実力者のいうなりにならなければ、村八分ということが起る。そういう古い形の生活環境というのがまだまだあるわけでしょう。そういう問題。一応集団というものを集約的な運命的な集団、それから意識的な意識集団といいますが、自ら入ってゆく、あるいは自分の意思で動かしゆくという集団、サークルにしてもグループにしてもそうだと思います。けれども、その中間のものもある。中間というとおかしいが、前近代的な形であるのが婦人会とか、ある意味のPTAです。意識しなくても入ってゆかなければならない。そういうもの。その婦人会とかPTAについては、わりあい集団として話し合いが出たと思うが、最後に残るところは、組合とかあるいは中野さんが出されたサークル、グループですね。もちろん婦

人会なんかも引くくめて差支ないわけですが、そういうた中の個人の自主性というものを、もうちょっと話し合っで、だんだんしぼってゆきたい。

#### 運命共同体の中で——選挙の問題

住吉 運命的な集団の中の対人関係ですが、みんなを牛耳るというような有力者が一人おりますと、みんなが圧迫されて、自分の言いたいことも言えなくなってしまう。

思いきって、喧嘩でもする気持でお話しあいなさったら、ということはいわれた方がありましたが、それもやってみましたが、そうしたら、相手が裏面工作をするし、みんな周囲の人をその相手から引き離してしまっで、自分のほうに引き入れてしまっで。完全に孤立させてしまっで。そういう経験もいたしましたし、ですから、できるならそういう争いなくしてわかってもらいたいのですが、そんなのはどうしたらいいでしょう。

伊藤 自己主張の限界があることはみなさん体験しておられると思うのです。

長岡 喧嘩したら裏面工作になるが、その前に、不満がある人たちにまず話しあって、行動に移す前になにかできなかったかしら。それからやれば、一人に孤立させられることは少なくなるのではないか。

住吉 でも、それができるくらいなら喧嘩しません。

宮前 町長がある政党に属している場合に、町会議長が会長になって、そうして町の役場から書類が出て、各部落の区長のところに書類が来まして、区長から組頭に来て、組頭が一枚一枚持って回って、これに署名してくださいます。そういう時に、それを断られるという人はほんとうに限られた人しかいない。そういう場合は、はっきりと強制的だとはいいませんが、事実上強制です。こういう圧力というものをどうしたらいいかということですが、さっきの問題でやっぱそれに私たちが、そういうことをはっきり批判する仲間をつくるということがもちろん大事なのですが、そういう場合に一人の町長の圧力だけでなく、下部の、各組頭にまで浸透している場合には、たくさんの方が生活上の問題で、ついてゆかなければたちまち困るので、そういうことは悪いとわかっていても反対することができない。

伊藤 要するに、形として現われなくても、目に見えない村八分ですね。

風間 そういう時は後援会に入って、選挙の時は自由になさる？

宮前 自由にしてもいいはずだが、その時になると自由にしませんよ。

時代には立派な選挙ができるようにと思いますが。

田口 四、五年前ですが、いまのような状態で、とても汚い選挙が行われていた時に、若い純真な方が、それをばらしちゃったという村八分にされて、その若い方は負けて、自殺をしたという事件がありました。そういう状態が、まだまだ農村のほうにとっても強いわけです。私なんかもうそういう場面にはとても行きづまって、ほんとうに絶望を感じるわけです。ところがやはり民主主義というのは、気を長くもたなければいけない。何年か経つ中に一人わかる人ができたら、その次にまたわかる人ができるといいうに、だんだん味方ができてくるわけです。だから決して絶望したらいけない。勇気を出して反対して、共鳴する方を仲間につけてゆくということが大事なことでないかと思えます。

伊藤 さっきリーダースhipのところ、一遍に何でもやっばいはいけないことがあったが、そういうことも関係して、大体結論に近くなってきた。

勇気をもたなければならぬということは、みなさんも経験しておられるが、そこで絶望とめとして、自分たちの属している集団、その集団は家族集団などの運命共同体的な集団であっても、あるいは意識的な集団であってもこれを伸ばしてゆく、そうして、なんのために意識集団をつく

手拭の一本とか、会食もやるでしょうし……。  
風間 大体票を候補者が読みますね。それと実際とはほとんど一致するのです。そこに、選挙に対しての自主性のない証拠がまだ残っていると思う。

伊藤 問題になっているのが、いまの運命共同体の形で一人のボスにしたがってゆかなければ生活できないというの、少なくとも封建以前の社会機構ですね。それが日本の隅々に残っているということです。それが今日ではいくらかずつは変りつつあるということはお考えにならないですか……。

草野 公明選挙運動なんかは、まことに徐々ですが、よくなっていくとは思いますが、まだまだとても私も女でなくても男の方でも、箸にも棒にもかからない状態だと思います。これをどうしていったら、ということ、第一回の婦人会議にも同じ問題が出ました。私はこれはとても私どもの力ではどうすることもできないと、九州っ子は気が短いものですから諦めてしまいましたが、ではどうすればいいかと思ったら、次の時代のために、そういうボスになるような子供を絶対育てたらいけないと思うわけです。

それで、男の子には、ボーイスカウトなんかを町にこしらえて、とにかく私どもの時代はしようがないから、次の

らなければならぬかという問題をみなさんで絶望とめの形で建設的方向の意見を交換していただきたいと思えます。織田さん。一遍あなたの地区の婦人会がなくなると、新しい組織でやってゆかなければならぬということをお考えになった点を、具体的に一つ御意見として出していただきたい。

#### 集団を育てるために

織田 私は、婦人会がないほうが楽だと思ったのです。なにも責任もかかってこないし。いろいろな波風も当らないし、まことに楽ですけれども、それだけでは……やっぱり、集団においてこそ自分というものが育ってゆくという方面から考えれば、なんとかしてゆかなければならないというところに気付いて、そうして話しあったわけなのです。そうしてそれをみなさんに知っていただくために、私たちが話しあうのでなく、呼びかけて、全部の町内の婦人方に集っていただいて、入る入らないは自主性にお任せしますが、ただ、こういうものがあること、まあみんな協力して、婦人会というものを盛り立てなければならぬのではないかと、今度希望者を募ったわけです。そしてその後、今度は希望者を募ったわけです。

伊藤 織田さんの場合は、はっきり言えることは、今まで

運命的な地域集団としての婦人会があったが、それを運命的な意識集団に切り替えるという一つの大きな努力があるわけです。御自分ではけんそんしておられますが、やっぱり、意識をもつて入る入らないは個人の自由だといわれたところにあるわけですが、そこに今度意識をもつて進んで入ってきた人たちによって運営される婦人会というものは、地域的な、今までの形の婦人会とは非常に性格の違うもの、したがってそこにおける会員というものは、意識をもった意識をもつということ、会員としての責任を意識しているということだと思ふ。ここに婦人団体、婦人会といったところの問題の一つの解決がはっきり出ていると思います。

それから、いま織田さんは集団の中で自分が育つということは何気なしにいわれておりますが、この問題が今年の婦人週間の非常に大切な点ではないかと思ひます。集団の中で自分が育つという点を、みなさんどういうふうに体験し、これからどういふふうにやってみよう、ということ御意見があったら述べていただきたいのですが……。

和田 私のグループの場合は、ほんとうに下から盛り上った要求でもって出来た、はっきり目的をもったグループです。今までは自分のことだけしか考えられなかったお母さんたちが、そういうグループをつくっているいろいろな

ですかれ。

風間 私の場合は、地域の婦人会と小学校のPTAと、社会学級と三つに入っている。私だけではなく、どの会に行きましても、顔ぶれはみなさん同じなのです。やることも大体同じで、行事の組み方でも、向うのほうでもあんなことをやったから、わたしのほうでもいい先生を頼んで来ましようということ、とても拙かったのですが、両方の役員の方が話しあわれまして、社会学級のほうは教養面をやられて、婦人会のほうではわりに社会的なほうへ動いている。去年はそういうこともめたということを聞きませんでした。やはりそこに話しあいということが当然出てくる問題と思ふ。

それからもう一つで序でに伺いたいと思ふが、普通の家庭の主婦として、そういうふうにくつもグループがある場合に、いったいどれに入りたいか。アブ峰とらずで、みな責任を果すことができないということがあります。

伊藤 風間さんは、自ら問題を出して自ら解決しておられるようですが、たとえば風間さん自身がPTAに入り、婦人会に入り、社会学級に入っている、それぞれ意識の度合いが違いますね。したがって、おつきあいで入っている、一番初めの日に出てきたお客様会員というものがある

供のことを考えてゆくうちに、非常に社会的な目が広がってきた。

それから、ほんとうに地域でもって、みんなが力を合せて仕事をしたら、自分一人が頑張るややるよりもいい結果が出てくるということを通して身にしみて体験したので、いまのところはまあとても自主的で巧くいっているのではないかと思います。

ただ、私が心配して、これから問題になると思ふのは、グループ内の自主性は出来ているが、グループ外の人の人間関係になるとうまくいかないという面がある。それは、階級意識とか特権意識というものでないのですが、やっぱり何か謙虚さというものがなくて、あまり自意識過剰というか、自己主張が強過ぎるという面が出てきているのではないかと思います。

伊藤 この問題は、集団活動の場合に経験しているように、たとえば委員会にしても組合にしても、斎藤さんがいわれた、組合員でありながら、いろいろな特別の目的によって結ばれるサークル活動がある、婦人会の中にもグループ活動ができていて、そういう時の一番の問題は、グループ、グループの間が非対称に冷たい関係になる。一つのグループなりサークルをつくると排他的になる、という一つの傾向がある。それはみなさん体験しておられるのではない

でしょう。会費だけ出して責任を果していない。その時に自分はどれをするかということは、自分の選択でしょう。

中野 集団の中で自分が育つということを感じたのは、私なんかどちらかというと、自分の思ったことが正しいと思うたちですが、集団の中に入るといろいろな意見をもらった人がいる。それで叩かれて、自分の考えていることを何回も何回もたしかめて、いつもいつも反省しながら、これでいいのか、自分は間違っていないかということいつも考えるようになったことです。

伊藤 もう一つ、風間さんの問題にも関係するが、いろいろな集団に入る。私たちは、いくつかが集団に入っているわけですよ。そうすると結局、自分というのはどこにあるだろうかという疑問が出てこないですか。

悪くいえば、集団にふり回されている、という問題が出てくるわけでしょう。それはさきほどの、午前中の最後にマスコミが人間を動かしてしまっただけじゃない、いわゆる学者たちが取り上げている問題……。たとえば御成婚という日に、ほとんど全国の人間がテレビを見るからラジオで聞いているか、同じことばかり考えている。これは、マスコミがこんなに進達しない時にはこういう意識の統一みたいなものはあり得なかった。そういうた広い意味の社会集団、そういう中での個人という問題もやはり考えなければ

ばならない。

風聞さんの場合には、いくつかくさんの集団の中に入っていて、自分はどれを退すべきかということになって、個人が集団の中に埋没するという現実、ある意味では人間の思考力とか、考える力を奪ってしまふような集団社会が、現実にあるわけでしょう、そういう問題の中の自己というものはどういうふうにお考えになるか、その辺が大體結論に近いものではないかと思いますが……。集団の中における個人の自主性という問題を、もう少しやっていただきたいのですが……。

### 集団の中における個人の自主性

田口 広い意味における社会の中の自分ということですが、私はおよそ五十近い者ですが、やはり普風に、上から抑えられ命令されるという教育を受けているわけです。だから講演会なんか聞きますと、その人の言うことがいいのではないかと思う。新聞読みますと、その言っていることが正しいのではないかと思う、放送を聞きますと、その放送に出ている人の言うのがほんとではないかと、そういう先入感があるわけです。それを、気をつけなければいけないと思うのです。社会教育でいいのではないか。これは労働省がするからいいのではないか、NHKがする

からいいのではないかということをお気をつけて、やはり批判精神といいますが、そういう自主性を私たちが気をつけて行かなければならないと思います。

伊藤 田口さんから非常に重大な御意見が出たが、いまいわれた一番大切なことは、マスコミに騙されないこと、と思う。批判精神とは何であるかということ、これがほんとうの近代精神です。近代精神の根本には批判精神がなければならぬ。

高谷 私、集団に引き回されるということ、たしかにそういう悩みをもったことがあります。労働組合はたしかに私たちの生活を守るためにできているが、専従職員をやっている主人は、徹夜で団交をやったり、オルグとかで出張して、二週間と一緒に生活したことがない。なんのために結婚したのか、労働組合は私たちの生活を守るといながら破壊する、ということをお考えしました。いつも主人とそういうことで喧嘩して、結婚しなければよかった、といったことがありましたが、労働組合はなんのためにあるかということをお考えしました。労働組合があるから私の主人が専従職員を組合のためにやっているということをお考えた時に、引き回されるように思いましたが、私たち人間の生活をよくするためにあるのだということをお考えましたら、私たち個人の生活をよくするために結婚したので、私たち

の生活をよくするために組合もできている、というふうにお考えしてみたら、私、引き回されるといふことを感じなくなってきた。ですから、集団というものは、初めから出来ていたのでなくて、私たちが自分の必要に迫られてつくったのだというふうにお考える必要があるのではないかと思えます。

宮前 さっき、批判精神とおっしゃいましたが、たいへん大事なことです。私たち、国家社会の一員ですから、国の在り方も批判する必要があると思う。政治ということに当然関心をもたなければならぬと思います。現在、行政協定が調印されるという話になっていますが、こういう協定ができてしまえば、そういうものが私たちをしばってしまふのですから、これがどんなものか、それが私たち国民のためになるものかならないものか、批判しなければならぬと思う。

私たちの町に「生活を守る会」が出来ている。そういう中で政治のあり方を勉強する——どんな政党色もないのですから、ただ政治を勉強するという会で、平和を守るというために会をつくっているが、その会の調査がされた。警察が、その会員である二人の青年の職場にも行って、そういう人たちがどんな考え方をしているか、どんな本を読んでいるか、どんな友達付き合いをしているか、どうい

時に夜出かけるかということをお調査した。そういうことは非常に私たちの自由を束縛していると思う。こういうことに對して、非常にふんがいがしているのですが……。

伊藤 さっき風聞さんがいわれた、婦人会にもPTAにも社会学級にも入っている人に注意しなければならぬのは、たとえば社会教育について、法の改正で補助金が出る、するとこの三つの団体は、うっかりすると競争して補助金をもらう。そうすると、時の政府が考えていることに都合のいい方向の運動をするものに補助金をたくさん出すということも考えられる。そこで自主的運動がなくなつて、制約を受ける。根本的に人間がもたなければならぬ自由、そして自主的社会教育というものに対して束縛を感じずということになるわけです。

それで、大體さっき田口さんから出た御意見から引續いて、結論の方向が出ていると思いますが、最後に草野さん……。

草野 その批判精神が、近代的なもので一番大事だとおっしゃいましたが、それでは、批判する基準をどこに置くかということがまた大事で、さっき高谷さんがおっしゃったように、組合にふり回されているのでなく、組合は自分のためにあるのだということが大事だと思う。

前に朝日新聞の、現在の神々というところで、組織とい

うものを解剖していらつしやったと思う。私も自分がつまらないから、誰かに縋っている。朝日新聞の論説委員だから伊藤先生のお考えが絶対だ、また、大学教授の考えが絶対だというところに、現在の神様は誰か。伊藤先生が神様か、大学教授が神様かというときに、いつも私は、自分が神様だと思う。天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず、ともいいますが、自分個人がいかに正しく生きるか、自由をもって生きるかということが神様だ、自分が神様だ。その他のものはそれを幸福にするためにあるものだというふうに考えますが、間違っているでしょうか。

## 結 び

伊藤 大体この辺でおしまいにしましょうか。

みなさんの話合いの中にも、家庭における教育という問題が非常にでたと思うのです。

この問題についてちょっと私の考え方をいわしていただきたいのですが、いま民主的だとか民主的でないとか、いろいろな見方があると思いますが、今日なお、集団における自由と責任という問題をわれわれが考えなければならぬのは、私たちの過去の教育において、集団というもののから教えられることが少なかったということです。ここには戦後の新しい教育を受けられた方ももちろんおられるの

で、私、この会談を通じて感じたことは、戦後のいわゆる新教育を受けた人たちが、そうでない以前の人たちとの間に、集団に対する考え方が大きく開いているというふうに感じました。それは、私たちが教えられた教育は個人中心の教育です。男の子に対しては陸軍大将、海軍大将になれ、総理大臣になれ、その通りみんな勉強したら、日本中、陸海軍大将と総理大臣ばかりになるのですが――。女性に對しては良妻賢母、非常に、えらくなれということを謳っていました。

今日の学校教育においてはそうでなくて、集団の中で仲間でものごとを考えてゆくということが教えられていると思うのです。その考え方は、齋藤さんとか、小幡さんとかいう人たちの意見に、個々に出てきたと思います。それが、実戦の中では、高谷さんたちにある、それを教育の方針とするという点では、茂内さんが、児童劇というもので集団的な研究をしてきたという形で、いろいろの集団に対する考え方が、教育の問題から出てきたが、今日の学校教育において集団指導というものをやっている点をもう一度……草野さんは、子供を育てることによって自分が学んでゆくことをいわれたのですが、それは家庭内においてもそうですし、もっと広くは、子供の教育の現場を勉強することによって、いまの母親たちが成長してゆくとい

うことを改めて考えなければならぬように思うのです。PTAの活動なんかしておられるお母さん方には当然おわ

かりのことと思うが、私たちが受けてきた教育は、個人を中心とする指導。戦後多く行われているのは集団指導。これは、道徳教育についても大いに関係がありますから特に申し上げておきたいが、この集団指導の狙いはなにかというと、私が大体承知していることで、三つの点を申し上げます。

第一は、一人一人の子供が、一つの集団の中で生き生きと学習に取り組める姿。これをそのまま婦人会とかみなさんがやっておられるグループとか組合というものに適用させていたきたいわけです。

第二は、一人一人の子供が、その悩みや要求を自由に語りあう雰囲気や学校の中につくり出すこと。これを少し逆の面から見ますと、わからないことをわからないといえる、一種の解放された人間関係。解放された人間関係という言葉が不適当ならば、自己の主張のできる集団の中で生きいきとした子供、自己の主張のできる人間を集団の中でつくってゆく。これはやはり学校における道徳教育も含めて集団指導の一つの柱だと思う。

第三番目は、一人一人の仲間のももの考え方、見方、感じ方を認めあい、尊重しあってゆく集団、これが三つの、

今日私たちの子供たちに学校の現場で教えられている集団指導の柱というふうに考えられると思います。

そうしますと、こういった雰囲気や育てられる子供たちの集団に対する考え方、集団の中での自己の主張ということとは、さきほどみなさんの間から当然出てきたことで、私たちのむしろ子供、次の時代に期待をするというようなことは、私は現実にはこういった教育の場から出てきているのではないかと思う。私自身は個人指導というふうなもので、お前だけえらくなればよいというふうには教えられた。時に排他的であり、仲間を蹴落とすということもある意味で教えられた。私たちにそういう経験とかそういう実感がなかったため、婦人会をやってみてもPTAをやってみても、みんな巧くゆかない。ところがこれからの子供たちが社会の形をつくってゆけば、その中にすいぶん変わった考え方、自己主張が出てくるのではないか。集団における自由と責任について、一昨日から考えてきたのですが、その中で自由というものをどういうように考えたらよいか。この話しあいを通じて出てきたのは、やはり自分を大切にすること、その自分というものは、人間として、憲法によって人間の尊厳が保障されている。そういうことをもう一遍考えて、しばしばみなさんの言葉の中に出てきたが、今日の政治とか社会のあり方が、憲法を否定するよう

な方向にゆくのではないか。あるいは、口こそ、あるいは形にこそ出ないが、家父長的な家族制度の復活、そこから男女不平等さへも一部に考えられているのではないかと、いう現実を、改めてみんなで考えてみる時期ではないかとみなさんの話しあいを、私として要約させてもらったわけだ。

どうもたいへん長い間、私がいろいろとよろめいたためにみなさん方が思うことも充分言えず、とりとめのない会になったかもしれないが、私が申し上げたかったことはそういうことです。

大体四時から、私の下手な司会を熱心に聞いていただいた傍聴の方たちと、会議員のみなさんとの話しあいの意味を兼ねた質疑応答になるわけです。

#### 質疑応答

質問 織田さんは、解散されて新設された新しい会の会長となられて、前の会の幹部の方々と交流は円滑にしているでしょうか。

織田 私の場合、仕合せに、古い頃とした幹部は一人もいらっしやらない。たいへんいい方で「今まで自分は難儀してきたから、今度はわたしをのけて、あなたの方の力で……」というふうにおっしゃったのです。それでもわたしと

渡内 日教組の組織の中に教員が巻き込まれる、意思がないのに引っ張られているということはよく問題になりますし、たしかに一部そういうことはあると思いますが、私の場合はそういう例は見られません。

伊藤 茂内さんの場合は、茂内さん自身がものごとを非常にはっきり割りきって考えておられるし、現に自分の職場を完全に、理想的といっているのかどうかわかりませんが——組合活動という線に沿って、職場を少くとも明るく運営しておられる。実践としてやっておられるから、あるいは茂内さんからお答えはしにくいと思う。しかし、そこにも問題がある。自分の職場だけならばいいが、全国的に言えばいま御質問のように、非常に疑問をもっておられる方も少なくないでしょう。

私、その点で少し考えている点があるのですが、昨年、勤労の問題を中心にしていまのような意見なり考え方が、非常に広く出てきたと思う。これは勤労の問題がそういうふうなことになるのではなくて、日本の大きい労働組合のあり方というものが一つの批判をされる時にぶつかっていると思う。

なぜならば、戦後これまで自由をもたなかった勤労者が組合をつくった。婦人の場合も自主的婦人会がわあっと出来て、あれに入っていないければ時代に遅れるということ

すれば、ずいぶん骨折られて来られたのですから、悪い点もあったかもしれないが、今までやって来られた仕事に対する尊敬の意味で、一応その方に、時には、いかがでしょうか——まあ、たとえば敬老会の問題でも、わたしは始めてよくわからないが、今まで通りがいいか悪いか、その通りにするかどうかわかりませんが、今までなさっていたことをおきかせください、というふうに、時々伺ったわけですよ。そうするとその方はやっぱり喜んで話してくださった。決してじゃまなさらないです。

質問 その方たちは、特定の相談役というところにはお置きにならないで、そのままですか。

織田 そうです。そして平会員です。

質問 ある職域代表で議員に推せんされた人が、その時、自分はたいのことはみなさんの意見を代行するつもりだが、どうしても意見に従えないことがあると思うけれども、それでも自分を推せんされるかということを含めて立候補して当選し、非常に立派な地方議員としての職責を果たされた方があられるけれど、組合代表者となられる場合に、このような行動をとることはできないものでしょうか。日教組の中央指導方針にしるしがついて行かれる先生を見る時に、いまいったような自主性をもって行動されたらと思うのですが——。

で、形だけ出来てしまった。労働組合のほうも、ほんとうに意識をもって出来たということよりも、組合をつくればなんでもいいということ、で、漠然として組合をつくっている。それはリードしている人にとってはリードのし過ぎといえますが、それを引っ張ってゆくには、あの組合幹部の努力がなかったら伸びてゆかなかったと思いますが、組合員一人一人の意識がだんだん民主的にものを考え、選挙ということを考え、少し幹部のやっていることに對して批判が出てくる時にどういう問題にぶつかったかというところ、おれは嫌だ、あいつは組合好きだから選んでおけばいいではないかということになって、ほんとうに私どもの理想とする選挙の手続では出て来ないと思う。

これは今日も斎藤さんからずいぶん話が出て、選挙をやると、幹部の同じような人がいっものなる、という問題が出された。果して日本の労働組合というものが民主的な選挙によって選ばれた民主的な団体というものであるかどうか、そこに疑問をもったということだと思ふ。

これは、内部からも当然疑問が出てくると思う。その時に果して脱退ということが正しいか、勤労の問題を通じて御承知のように、ある一部の先生方は脱退をしておられます。次に校長になろうと思う者はしきりに脱退している。そういうような事態は、子供たちに、嫌だったらやめてい

いのだよ、ということをお教えることになりはしないかという心配がある。

今日お話しになった集團とか組合は人間の暮し、生活を正しく幸福に伸ばすためにあるのだということになれば、その中に間違ひがあるならば、その中で闘ってやっつけていかなければならないのに、脱退という形で、あるいは脱退を促進する動きがあるということ、それが政治であるかもしれないが、いろいろの力が働くことになるでしょう。そういつた中で、先生自体が、いまいわれるような、ほんとうに自分というものを考えて、自分というものを生かすために組合というものを考える、そういう時期に来ていると思う。

ですからこれは直ちに解決ということではなくて、やはり日本の民主化の一つの途として労働組合とか、ずっと話しあいをしてきた婦人会とか、青年団にもそういう問題があると思う。

これは今後日本の民主化という点で、お互に考えなければならぬ問題だと思います。

質問 一応、職場、家庭、組織の役員、三重の役割を果していらっしゃることですが、これは組合役員として、一般組合員は既婚婦人も未婚の方と差別なく推せんなさり、選挙してくれませんか。私は一民間会社の者ですが、

すようにしております。男の方も女と一緒にやり辛いわれれますのは、女の方は年とって家庭をもちますと、私は職場だけでなくて家庭の仕事もあるのだ、私は主婦だということを見ていて歩く。主婦という仕事にかくれて職場の仕事をする程度逃れようとする気が出てくるからだと思います。ですから、私、女の方の考え方が大事だと思えます。男の方が締め出すのでなくて、女の方が自分から逃げるのではないかと考えておりますが……。

伊藤 その問題、根本的に不思議なことがあると思うのは、組合の中に婦人部というのがある。そのこと自体おかしくないですか。組合の中に婦人部、それから青年部というものの。婦人と青年と一緒にはいっている青年婦人部というものの、このこと自身にもう少し疑問をもたなければいけないと思う。

高谷 私の組合では、労働運動を始めてゆく初歩的な段階としてつくった。次第にそれが消えてゆくのではないかと考えてやっておりますが……。

伊藤 あれは、考えようによっては、婦人部というのはいつまで経っても青年の程度しか発達しないのだという、したがっていまの御質問のように、婦人の高令者が若い青年と一緒にやる。これは、男女差別のはっきりした名残りだと思ふ。

組合活動にも既婚婦人はあまり歓迎されないのですが……参考のために……。

高谷 私のほうは青年婦人部ができていて、男は満二十六才まで、女は無制限になっておりますが、組合員になった限りにおいては、被選挙権も選挙権もみなもっているわけですから、そういう差別は全然つけられておりません。女の方は若い中は振替的な勤めが多いが、既婚者になると仕事に対する認識の仕方が大分変わってきますので、むしろ既婚者のほうが、ものごとをはっきりみつめてゆくとおもいます。

質問 私も結婚して青年婦人部の役員をやっています。が、やっぱり男の方は満二十七才、女は定年までということになっている。青年婦人部長は男の方で、下に女と男二、名ずくの副部長がいます。男の人にいわせれば、仮に青年令の婦人が立候補した場合、若い部長が思うように扱えないから、若い女の人も、やはり年のいった方が上に立った場合は、話がしにくいし、遠慮しているのではないかとされる。

高谷 私も役所に入った当時は、年とった女の方に対して、怖いものを感じていました。私がだんだん年をとってきた場合に、若い人に怖いものを感じさせてはいけないうと、思っていて、中学校を終って入ってきた人にも一緒に話

ただ、戦後選挙権ももたなかった婦人が、組合の中で、自分でのことを考えて、伸びてゆこうとする一つの手段として婦人部が認められたのは事実だと思うが、高谷さんのいうように、将来において解消してゆかなければ、同じ権利に対して差別待遇が盛られている。ことに組合の中に婦人部活動というものは考えられないと思います。

質問 私ども二十七軒です。都営住宅ですが、私どもで管理をしております。はじめ越して来た時に責任をもたされてやりはじめたのが、とかくいろいろにいわれて、さんざん今まで苦勞してきました。各婦人会などに入っている人はまだいいのですが、政治的、政策的な考え方や立場が、私生活や近隣生活の中にもち込まれて人との話しあい、とくに女の人の話しあいができない。話しあいのきっかけをつくるにはどうしたらよいのか。

織田 私は、PTAに出まして話を聞いてきますと、興味をもったような方に呼びかけて話してあげたり、この頃はNHKで婦人学校を放送していますので、「ラジオでたいへんいい番組ができたからいっしょいっしょ」というと集ってくる。そうやっている中に、うまくゆくのだと思う。

宮前 私は結びつきをどうももっていったらいいか、ほんとうに困った。ことに職業が、近隣の人と全然離れていすから、結びつくきっかけというのは、自分がPTAの一

會員であるということから、お母さんたちならなにを聞いても子供の問題が一番話し易いだろうということで、PTTAのAの中で、共通の問題として子供の問題をまず取り上げました。

質問 私もPTTAの会長を何年もやっていますが、女の人ばかりを閉じているというの、なかなか寄ってこない。だからそこを、何とかしたいと思うのですが、どうしたらよいでしょうか。

宮前 私たち、集って来ない人もいますし、PTTAの会は固い、ということもありますから、食べる会をしまして、ということもやりまして、三十円会費で米二台持ち寄り、食べておしやべりして、息抜きの会をやっている。そういうところで個人的な問題がいろいろ出てくるのです。が、その時にこちらが親身になって相談相手になってあげる。うちのこと、御主人とうまくゆかないで困るという時には自分で解決できなくても、一緒にそれについて考えあげる。そういうことを一、二度やっている間に何となしに仲間みたいなものが出来てきたのです。

伊藤 では、これで会を閉じさせていただきます。みなさんの御協力ありがとうございます。

質問 私もPTAの会長をやっていますが、女の人ばかりを閉じているというの、なかなか寄つてこない。だからそこを、何とかしたいと思うのですが、どうしたらよいでしょうか。

宮前 私たち、集つて来ない人もいますし、PTAの会  
は固い、ということもありますから、食べる会をしまし  
うというともやりまして、三十円会費で米二台持ち寄り  
で、食べておしやりして、息抜きの会をやっている。そ  
ういうところで個人的な問題がいろいろ出てくるのです  
が、その時にこちらが親身になって相談相手になってあげ  
る。うちのこと、御主人とうまくゆかないで困るという  
時には自分で解決できなくても、一緒にそれについて考  
え、てあげる。そういうことを一、二度やっている間に  
何となしに仲間みたいなものが出来てきたのです。

伊藤 では、これで会を閉じさせていただきます。みなさんの御協力ありがとうございました。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 鹿 | 大 | 熊 | 福 | 愛 | 徳 | 広 | 岡 | 兵 | 大 | 岐 | 山 | 東 | 楊 | 秋 |
| 見 | 分 | 本 | 岡 | 媛 | 島 | 島 | 山 | 庫 | 阪 | 阜 | 梨 | 京 | 木 | 田 |
| 島 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 野 | 川 | 上 | 河 | 高 | 国 | 竹 | 小 | 原 | 飯 | 横 | 土 | 村 | 小 | 加 |
| 井 | 川 | 上 | 野 | 橋 | 領 | 中 | 川 | 田 | 田 | 関 | 屋 | 松 | 川 | 藤 |
| 近 | 加 | ト | ミ | 晴 | 朝 | 由 | 澄 | 道 | よ | 千 | 明 | 愛 | 志 | ナ |
| 子 | 津 | 午 | ヤ | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 核 | 子 | 子 | 子 | な | ル |
| 商 | 榮 | 主 | 主 | 主 | 舞 | 看 | 無 | 主 | 主 | 公 | 主 | 会 | 主 | 主 |
| 業 | 養 | 婦 | 婦 | 婦 | 踊 | 護 | 職 | 婦 | 婦 | 員 | 務 | 婦 | 員 | 婦 |
| 保 | 士 | 婦 | 婦 | 婦 | 家 | 婦 | 職 | 婦 | 婦 | 員 | 婦 | 員 | 婦 | 婦 |



## 自己紹介

加藤 「しおん会」という婦人のグループに属しています。一週間に一回、午後三時頃ほど生活改良普及員の講習所へ出ております。

小川 志な「草の実会」の会員で、県南の連絡係をいたしております。六人の家庭の主婦です。

村松 家で主人と主人の兄で小さな工場をやっておりますが、事務員を雇うことができないので、私が事務をやっております。婦人会だとか、いろいろな団体に入っておりますが、「よしみ会」という近所同士のグループがありまして、その世話をしております。

土屋 甲府の新しくできた団地に住んでおりますが、環境を整備するために会を作る必要があって、必然的に「友和会」というグループが生まれました。幹事は交替で私は昨年九月から今までやっております。

横関 私は婦人会の役員を若い方に譲りまして、今は陰から婦人学級などのお手伝いをいたしております。それから民生委員などもいたしております。

飯田 三年前から毎日新聞の「女の気持」グループに属しております。二年半ほど世話役をやり、総会でまた三度目の責任者に選ばれたのですが、これ以上続けてはいけません。

まで五人おりますので、小学校のPTAの役員をしております。又、PTAの役員という資格で、お母さん方の母親学級を開いております。

村上 私は熊本へ移りましてまだ六カ月にしかならないので、婦人会には入会しておりませんが、市内の読書好きな婦人によって結成されております読書グループに入っております。

平川 別府の肢体不自由児施設に栄養士として勤めております。所属団体としては、大分県の「肢体不自由児を育てる会」に所属しております。

松井 夫が療養生活をしておりますので、子供も学校を出し、夫も十分に療養させたいと思って小さなお店をもっておりますが、社会生活の重要性を感じたしまして、少しずつ貯金したりして、昨年から子供の図書室を開いております。

坂西 お話を伺い、皆さんも大体どういうグループに入り、どういう方かということの、御見当がついたと思います。大きく分けましますと、家庭のことを考えて、そのグループの問題を中心にして文章をお書きになった方、そうしてまた今後も考え方の重点がそこにあるという方が四人いらっしゃいます。それから小さいグループと申しますか、読書会とかあるいは地域の問題、協同で進むいろいろの問題

と思ひまして、断固としてやめさせていただいております。

原田 地域の福祉会に所属して、その中で委員をいたしております。

小川 澄子 私は職歴がないかわりに八年間の病歴を持っております。私の所属しております団体は「総社市文化協会」という文化団体です。総社には俳句だとか、お茶、お花、いろんなサークルがありましたが、でんぜんばらばらだったので、これを一つにまとめて文化協会を作ったのだらうというお話がออกมาして、一三ほどのサークルが集まって、協議会組織の文化団体を作ったのです。私は音楽のサークルのリーダーをしているほか、会の常任幹事役員、会の書記役員、機関誌の編集のチーフをしております。

竹中 この四月から似島中学校で保健衛生の養護をしておりますが、それまで広島県立病院で六年間看護婦をしておりました。

国領 職業は舞踊家で、二年ほど前東京から徳島に参りました。それまで東京で舞踊の研究をしておりまして、金日本芸術舞踊家協会に所属しております。

高橋 私は「友の会」に所属する十年会員で、そのほか教会の日曜学校のお手伝いを六年している主婦です。

河野 子供が大きなのは大学、小さいのは小学校五年生

を考えていらっしゃる方が七人です。それから地域社会、近所隣、これは団地も含めまして、そういう方が三人、職場の問題というのがお二人、こう見て参りますと、集団ということが次のように分れてきましよう。一番小さいのは家庭で、次は地域社会——男女を含めまして……。それから職場サークル、婦人団体、あるいはいろいろ皆さんの属していられっしゃる団体。こういうふうな今年のテーマである集団というものが、皆さんの頭の中にいろいろ形は違いますが、はっきり浮んできましよう。自分のところでは家庭も職場も、あるいは地域社会においても、サークル活動においても非常によくいってらっしゃるといふ方がおあります。そうかと思うと、一生懸命やってみたけれどもあまりよくいかない。そこで問題を出して、こういうことはどうしたらいいだろうか。またほかの方が同じようなことをして成功していられっしゃるとすれば、どこに自分の成功しなかった原因があるのか。今朝藤山先生のお話にもありましたように、いろいろ集団の問題点がございまいしょう。結局、ここにいらっしゃる方々は、家庭のメンバーでしやう。家庭の中の一人であるあなたが、その小集団の中でどうしていられっしゃるかということから始めたらどうでしょう。——それでは横関さんに、どういふふうな問題を扱って、またどういふところでの問題を解決なさったか

ということの口切りをしていただきましょうか。

#### 家族集団と個人の問題——話し合うということ

横関 私は今度の所感文で、家庭という集団における個人の考え方と生き方という問題を取り上げたのですが、私たちの家庭生活は、民主化されたとはいながらも、個人の向上を束縛することが日常問題でたくさんあるのです。私の家庭には七十九才になる主人の祖父がおります。その祖父はいなかの山の中で、二〇年間孤独の生活をしてたのですが、老人になってさびしいというので、私の家へ来たのです。そうしますと、日常生活で、祖父と子供の間に考えかたや生活態度で相いれない点がたくさんあります。祖父も子供も、お互いに相手の立場になって考えてやるということが全然ない。私はそのため間に立って大へん悩んだのです。こうした問題を一人で責任をとってその悩みを背負わなければならないのか、と考えておりましたところ、ラジオの講座でこうした問題があったときに、全部のものがお互いに責任をもち合って話し合っていって成功するということを知り、これを家庭に及ぼしたいと思ひまして、お互いに子供の立場、祖父の立場をいろいろの場合に話し合って聞かせたのです。

一番問題になった食事については、あっさりしたものを

好む祖父の食事の世話を子供にもたせ、ごつてりしたあぶらっこい栄養のある料理を私が作りました。一つの食事にごつてりしたもの、あっさりしたもの、お互いにほんとうに話し合えるようなことになったのです。それまでもっていくにはほんとうに考え込むようなことがあったのですが、こうした問題には根気と寛容の気持が必要だと思ひます。お互いに相手の気持になってやる、そして話し合う。それは根気と寛容の気持でやらなければならない、ということを考えまして、テーマに出したわけです。

坂西 こういうお話を聞きになって、皆さんはいろいろお考えになることがあります。私が問題を拾って、これはどうですか、これはどうですかというのだったら非常に味気ないものになってしまふ。それよりも皆さんが横関さんのお話を聞いていて、いろいろ疑問があらわれない。それをお互いに話し合ってみようではありませんか。横関さんは、一人のいわゆる異分子、血はつながっているけれども、考え方、生活の様式の変った方が入って来た。それを横関さんは御自分の方法で苦勞しながら解決なさった。お話はそういうことです。

飯田 今の問題は家庭の中の新しい世代と古い世代の対立の問題ですね。横関さんの場合はおじいさんですが、姑と嫁の問題とも関連しておりますね。そのほか、若い世

代の夫婦と古い世代の夫婦の問題、若い世代の子供と古い世代のおとなの問題、みんな共通していると思ひますから、その問題をみんなで話し合ったらいいかがでしようか。

松井 私は二十八年間、姑についておりました。若い皆さん方はお笑いなさるかもしれませんが、私は決して口答えしなかった。私が口答えすることによって家庭を暗くするならば、私自身が低下することだと思つたのです。盲従したのではなくて、道徳的なこと、また私の精神に關することだったら、敢然と抵抗しようと思つたのです。しかし私はやはりだまって姑の言うことを聞きながら、徐々に姑を教育してきました。そして死ぬ前に姑が、ほんとうによかったといつて死んでいきました。その過程というのは、つらくて便所まで泣いたこともあるし、書置きを書いたこともありましたが、私が無言で口答えしなかったということが、私の最大の抵抗で、私をここまで成長させたということが喜びを感じております。

原田 御自分でごしんぼうなさっていらっしゃったということは大へんいいことだと思ひますが、私考えますのに、そんなに自分というものをみじめにならないうで……、もう一段の進歩のための努力をされたらよかったのではないでしようか。

松井 私はみじめには考えませんでした。そうすることが私の生活だと思つたのです。

原田 もう一つ解決方法があつたのではないかと思ひます。お姑さんとお嫁さんの問題は、今までだったらそういう状態が多かつたと思ひますけれども、今のこの時代にそういうことはいけなのではないかと思ひます。

松井 年をとつたものは、よいこと悪いことの判断よりも、ただがんに自己を主張したいのです。私がさからうていたら家庭は暗くなると思つて、私自身は犠牲ということではなくて、それが私の喜びだと思つております。

河野 姑さんと立場が違いますが、封建的ながんな主人がおりますが、主人が言います通り「はい、はい」と無批判に服従しておりますと、子供が男三人、女二人と五人おりますが、女というものは男には絶対服従しなくてはならないというふうには知らず知らずのうちに教育されるのではないかと思つて、主人のきげんのいいときなんかを見はからうて、主人が「なるほどな」と言うまでは話し合うようにしております。

高橋 私は原田さんのおっしゃった御意見が妥当ではないかと思ひます。嫁と姑の問題、それから親と子供の問題でも、家庭の中に二つの意見があつても、三つの意見があつても、それが自由というものではないかと思ひます。

二つの意見を一つにしようと思うから無理ができるのだに思うのです。そのときに、今横関さんのおっしゃったように、寛容さというものがあつたら、二つの意見があつても衝突しないでいけるのではないかしらと思うのです。単純な親と子の場合でも、時代の違いというものはあるので、子供の方はジャズがいいし、私なんかはクラシックがいいと思つても、どっちがいいというわけではなく二つあつていいのではないかと思ひます。

坂西 高橋さんは家庭の中に、二つあるいは三つ意見があつてもいいので、そういうのがいわゆる自由だということにおっしゃっていらつしやる。この問題について何か御発言がありますか。

小川澄子 私は高橋さんの御意見に賛成です。人間は平等な立場でものを言つたり、考えたりすることは当り前だと思ふのです。ところがいつも年令とか環境とか、そういうものをつけて見られるということがたまらないのです。

村上 私の家は夫と子供と四人家族です。子供も大きくなりましたので、大へんいろいろな議論が生まれて、けんけん相手になると、四人が四人、口角泡を飛ばして、けんけんがくぐりますが、でも夫だからといって、決して自分の意見を押しつけもいたしません。子供や私の意見を聞きますし、子供たちも父親を友だちのように思つております。

そしてお互いがお互いを尊重し合うように努めておりますから、けんかもいたしますけれども、いつの間にかとけ合つて、決して家庭内で暗い気持ちになつたことは一度もありません。

加藤 自分自分の立場を守るということについて、私は母親の立場、妻としての立場、自分としての立場をその時々に応じて守っていくことが大事だと考へております。

村松 この間東京会議のときにも出ましたが、職場で組合活動なんかやると、男の人が喜ばないとか、そういうことをちょいちょい聞くのですけれども、私はそれが信じられないのです。男の人でも、お姑さんでも、女が家庭の主婦として、ちゃんと自分の判断力をもつて、一家を運営していく能力をもつことを欲しているのではないかと思ふのです。みんな男は勝手だといつてますけれども、たとえば疲れて帰ってきたのに、くどくどとぐちをこぼされるのはやり切れないというのが男の人の気持で、判断力もち、相談すべきことは相談する、そういう女性を求めているのではないかと思ふのです。

坂西 ここらで問題をまとめたかと思ふのですが、少し横関さんからお出しになつた問題からそれてきていると思ひます。横関さんの問題をこういうふうに解釈してごらんになりましたか。おじいさんがいらつして苦勞なつた。

それで話し合いができるようになったときまでにとのくらの時間がかかつてゐるか、ということをお聞きしたいのではないですか。

横関 祖父が二〇年間の孤独な生活から私の家へ入りまして、二月間の間は非常に苦しんだのです。三月月日にはほんとうに私の家庭は世間でも喜んでくださるような家庭になりました。

坂西 二月の間に、その困難な仕事をなすつたわけですね。松井さんは二十何年お忍びになつた……。問題は、松井さんは御自分というものを完全に埋没させてお姑さんの言うことをだまつて聞いて、これが自分のレジスタンスである、抵抗であるというふうに感じていらつしたのですけれども、最後に自分が勝利を得るという御自信が最初からおありでしたか……。

松井 私には私なりの理想があつて、姑に仕えながら、その理想に向つておりましたのであまり苦痛とは思わなかつた。完全にはできませんが、私たちの家庭はどうにかスームスにみんなが話し合つて、楽しい家庭でした、最後に姑もそうになりました。

原田 先ほど家の中にいくつの意見があつてもよく、それが自由であるとおっしゃつたのですが、結局意見が違ふとなると問題が解決しないのではないですか。自分の

ものだけにしないで、自分から呼びかけていたらどこかに解決するところがあるのではないかと思つてゐるのです。

高橋 教会学校を六年間お手伝ひしておりますけれど、主人が教会に行くのはいいけれども、日曜学校の先生までしないでもいいと言ひます。しかし、いいことだらけで、自分が主人に迷惑をかけないように家庭内のことを処理しておいてする分にはかまわないと思つて、ともかく六年続けたのです。三年目ぐらいから主人も言わなくなりまして。そのときに、いろいろ性格が違ふから、けんかになる御家庭もあるかもしれません。それは子供と親の場合でもそういうことがたくさんあると思ひますが、理解し合つたらできるのではないのでしょうか。

松井 私そう思ひます。

平川 高橋さんにちよつとお尋ねします。御主人があとには理解してくださつたとおっしゃつたのですが、理解なさるまでの間家庭の中がおもしろくなかつたのではないかと思ふのですが、その点いかがでしょうか。

高橋 それは大反対したわけではないのです。日曜学校に行くのには八時半には家を出なくてはいいけない。主人は日曜ぐらいごはんをゆくり食べたかと思つたりするのですが、それほど大問題ではないですから、家庭が暗くなる

ほどではなかったのです。

河野 先ほどの松井さんのお話、それから横関さんのお話でも、おしいちゃん、おばあちゃんは今まで家長という立場に立っていらっして、みんなが自分に必ず隷属して、服従してくるものと思っただけで、みなさんが自分で、けれども完全に自分を捨ててしまっただけで、家庭の中をやっていこうとすると、どこかに犠牲者が出る。犠牲者を作ったから協同活動はうまくないのではないか。協同活動の問題点は犠牲者を作らないでどうやって理解させるかということに問題があると思います。

横関 どんがんな姉さん、若い者とほんとうに話し合えばいい。話し合いによってお互いの気持ちを知るということです。話し合っているうちには何かの機会に足がかりができて、どんな問題は解決すると思います。私は一家の主婦というものが、犠牲者にならなくても、ただ司会者になればいいと思うのです。

村松 今のは新しい世代と、古い世代の問題だと思うのですが、昔のように家長に隷属するというのはもちろんいけないけれども、よく奥さんや娘さんたちが、自由だと思っしやるが、それは自分も自由であると同時に、年寄りの方も自由でなくてはならないということを忘れているのではないかと思うのです……。やはり年寄りの意見も聞い

てはならないか。話し合いの場がもてないということに一つの問題があると思うのです。

坂西 一の新しい問題が出てきました。横関さんが最初から話し合えばわかるとおっしゃって、松井さんは話し合うというよりもむしろ自分というものが一つの理想をもって、それを胸に描きながらある点までじっとしていることによって問題を克服できる。今度は加藤さんが、話し合えないけれども、実際話し合いのできない場合があるのではないかと、これは非常に大きな問題だと思っています。話し合えても、相手がまるで石の壁みたいで、どんなに話したって動かないでしょう。そうするとあなただ、もうどうにもならなくて、行き詰る。

小川志な 私もしゆうとはありませんけれども、御近所のおばあさんがしょっちゅうぐちをこぼしにくる。お嫁さんの方もくるのです。両方の話を聞いてみると、努力すれば話し合いができるのではないかと思います。ぐちをこぼす人ほど、なんか弱いのではないかと。もっとしっかりと自分の強い考えをもっていたら、話し合いの場が必ず作れると思うのです。

坂西 ここで新しい問題がまた一つ出ました。自分の考えというものが話し合いができないのではないのか。もし非常に単純なことであったも、自分がこう考え

あげる、若い人の方からそのくらいにいたわるといふか、年寄りの自由を尊重してあげるといふ気持ちになってもらいたいと思います。

坂西 村松さんのおっしゃるのは、大体今の時代は、若い人を主にしてものごとを考えているけれども、年寄も自由があるし、発言権があるから、結局はお互いに人格を尊重するということですね。

加藤 今、話し合っているというお話が出ましたが、これは私の場合ではなく、ある農村の若い方の話です。自分のお父さんがものすごく封建的で、話し合いの場をもともしないし、もてないという。その方の家は農家で、お父さん一人で農業をやっておる。お父さんが、冬の土起しを手伝えと言ったら、家のことを手伝ってもおこづかいももらえないから、そば屋なんかのアルバイトをするというのです。お父さんはそば屋のアルバイトなんかするのは外間もよくないから、そんなことしないで家のことをしろという。するとその方は一方的に考えて、お父さんはわからずやだというのですが、この場合は自分の生活の基盤はお父さんの農業にかかっている。それで生活しているのに、自分はお父さんに協力しようとはしない。だから、自由というよりわがままですね。お父さんを理解しないから、お父さんもういじになって話し合いもしないというこ

ろ。自分の立場はこうであるという一つの足場ができて、そして今度はあなたの話も聞くことができるし、それからまた自分の考えもはっきりあなたに伝えることができる。そうですね。

平川 今の話し合いの場合ですが、自分だけはいくつかの立場だ……という特権意識、例えば、その家の家長の場合、わしが全部を養っているのではないかと、そういうエゴイズムなところがあるのだと思うのです。だから今の若い人が、もっとそういう人にやさしい気持ちで対していけば、いつかはわかってくれると思うのです。現に私の家では、もう今は父がいまませんが、とても父ががんだった。子供が四人おりましたが、みんな負けず劣らずがんだったのです。母が、それでは悪いからということで、話し合いの場をもったのです。それで最初なかなかがんだった父も折れてきて、家庭が明るくなった。これからの主婦の方は、もっとやさしく包んであげるといふ努力が必要ではないかと思っています。

坂西 世の中には特権意識をもった人があって、そういう人はがんで説得するのに困難だ。ところがその人にやさしさをもちて接すれば、必ず成功するということですね。

松井 私は加藤さんの説に賛成します。どんなに話し合

っても、こっちが自分をなくしても、たとえば「おばあさん、今夜何にしよう」といいますと「知らん」と言ったり、「今夜は何にしてくれ」と言ったり、それがごきげん次第なのです。どんなに努力してもできない。それで私は自分の理想に向って、何年たってもいいからやってみようと思つて無言の抵抗をしました。話し合いはむだだと思ひます。

坂西 ときによつては話し合いは功を奏さないことがある。そういうときには、自分は話し合いでいこうという努力はするけれども、それが失敗したときには、やはり自分の正しい考えに基いて行動する。

河野 お姑さんもお嫁さんも全部自分の嫁、自分の姑という立場で相手を見て、女性同士という考えがないのです。私たちもこのくらいの年配になりますと、お嫁さんの立場からお姑さんの立場からもしょっちゅうぐちを聞きますが、だれかが女同士の緩衝地帯になってくれれば話し合いも通じるのではないかと思います。

坂西 しんぼうしてたんねんに話し合えば必ず通ずるといふ信念ですね。

今まで大伴皆さんの発言は個人の立場から、家庭というものを来て来たわけですが、

それでは今度はみなさんの個人という考え方を、家庭――

いうふうに、自分の意思によつてできた集団の理解だったらいふと思うのです。

坂西 そうすると竹中さんは家庭というものの御自分の意思によつて運んだ……。〔笑声〕ここでちょっと抽象的なことになってますが、集団は二つに大きく分けられると思う。一つは自然に発生した集団、これは家族がそのいい例でしょう。大体いままで日本の社会では、結婚は家を中心であった。こういう人と結婚すれば自分は幸福に生活出来るということではなくて、他から強制されてしまったという例が多いのではないですか。ですから、集団というものは、御自分の意思によつて作ったものではなくて、知らないうちにそこに置かれてしまった。ことにお子さんになると、これは親を選択する権利もないのです。自然に生れてきてしまうのですから……。それから近所隣りというものもそうです。いやだと思つても、鳥にしろあねば飛び立ちかねつというふうに、何かそこに落ちついてしまつたら、一番いい方法で解決していくより仕方がないような場合が多い。広く言えば国家もそうです。日本に生まれたことが不幸だ、アメリカへ行きたいから世話してくれというような手紙を私はもらったのですが、国籍というものはやはり自然的に発生したものです。その半面、おとなになつたみなさんが意識して選ぶ集団があります。サークルもそ

小さい集団の中に移して考えていただけませんか。そうすると一歩前進しますから……。

#### 家族集団の中の個人

竹中 さきほどのお話の中で、家族の中に対立した意見があつてもいいではないかという御意見がありました。私はそういうふうであつてもいいと思ひますけれども、あくまでも家族の集団であるということをよく意識して、たとえば、今日は大掃除をしなければならぬというようなときには、個人の問題か、家族の問題かということをお自分でかみ分けてみて、私はハイキングに行きたいけれども、大掃除だったらどうしよう、というふうに集団の一員であるということをよく理解した上で、個人の自由を許される範囲で自分でもつていたいと思ひます。

坂西 集団というものをよく理解して、その中の一員として自分の自由というものを考える。ですから集団を第一にいつも頭の中において、自分の計画と照らし合わせて考える、これが竹中さんのお考えです。

竹中 ちょっと付け加えたいと思ひます。圧迫された集団ではない。集団として自分もそうすることが当然の責任だということにかみ分けた上で、たとえば、私もこの家に住んでいるのだから、大掃除をしなければいけないというです。団体もそうです。ある意味においては職場もそうです。抽象的なことはこれくらいでやめましょう。それでは今度、家庭という自然に発生した集団において、竹中さんは集団のメンバーとしていつも家庭ということを考えてながら、御自分の行動を調節していくということですね。これについて……。

小川遼子 私はそのときに、横関さんがおっしゃった寛容さというものが非常に大切だと思ひます。これはどの集団でもそうなのですが、相手に対して寛容な気持ちをもつということ、相手も自分に対して寛容な気持ちをもつ、お互いにそういう気持ちをもち合えば問題は解決するのではないかと思ひます。私は特に自分と違つた意見をもつ人に興味と好意をもつのです。その人が私と意見が違つていゝとか生活とか、いろんなものがあると思ひます。それを知つて理解すれば、自分はそういう人と同じ意見になるかもしれないのですから……。

坂西 小川さんは寛容という幅の広い、どういふものでもよく受け入れる心をもちなければいけないとおっしゃる。小川さんの場合には違つた意見が出て、それは違つた意見であるからこそ自分はそれを取り入れて、自分の成長を試みていく、こういう御意見ですが、どうですか。

村松 小川さんへの答ではないのですが、さっき竹中さんのおっしゃったように、自然に発生した集団であつても、やはり自分がその集団の一員であるということは忘れてはいけないと思うのです。地域社会というものも、大きくいえば国でもやはり自分がその一員であつて、ただ政治が悪いから、環境が悪いからというのではなく、自分もそれを作っている一員だからよくしていくように努力をしなくてはならない。そのためにはやはり人と手をつながなければならぬので、家庭でも、私事と家庭という集団の場とは別に考えて、私事は干渉しない。だけでも集団の場については協力しなくてはならない責任がある、そういうふうに割切つて考えております。

飯田 集団に対する一つの心構えと、自分を厳しく律するということの二点のかまえていくわけですね。

飯田 家庭という集団の中で寛容ということが大切だというお話が生まれて、私は非常に賛成なのですが、みなさんの御意見は、かなりよい御家庭の中での、御意見です。寛容と放任とこっちゃにして、お互いに自由である、お互いに干渉しないということを、放任という形で行っている家庭が案外多いのです。私も身近かにそういう例をもっておりますが、お互いに老人夫婦も若い夫婦も、孫に当る子供も、徹底した個人主義なのです。そうすると、その

ことが大切か、その人が自分のしたいと思うことをやるのがいいか、そのときどきの判断によつて、自主的にきめていきたいと思ひます。家庭の中でも、社会の中でも、

飯田 いろいろ問題があつても、御自分で、そのときどき場合によつて、一番いい方法をとってきた。ときによつては自分をなくすることがあるかもしれないけれども、ときによつては集団をこえて御自分の意思を通したということですね。

土屋 飯田さんがさきほど、放任ということは愛情がないとおっしゃったのですが、ある御家庭で、御主人が療養生活に入つていらつして、子供が七人もいます。小さな子供が三人も四人もいて、お母さんは内職をしなければならぬという場合、小学校や中学校へ行っている子の相談相手になつてやる時間がない。その日その日の糧に追われて、子供の相手になつてやるどころか、子供に食べさせるものを自分が生産しなくてはならない。そういう悲惨な例を知っております。そういうことは社会的責任がもしあつても、放任すなわち愛情がないという結論に達するのは、ちょっとどうかと思ひます。

飯田 飯田さんの愛情と放任に答えて、土屋さんは、放任ということが決して愛情がないということではない。家庭の事情によつて、ことに経済的な事情によつては、幾ら

れがお互いにいいようなのですけれども、冷淡な家庭なのです。寛容は愛情の裏づけがある。愛情は責任をもつております。放任というのは冷淡で無責任です。お互いに家庭の中で、二つも三つも意見があつてもいいとおっしゃいましたが、その場合決して冷淡な気持ちで意見が幾らあつてもいいというのであつてはならないと思うのです。

飯田 端的にいって見ますと、ここにお集まりになつた方は理想の線をもつていらつして、いいところばかりいっている。しかし、家庭では異つた意見が出る。それでいいとおっしゃる高橋さん。また小川さんのように、過つた意見を取り入れるとおっしゃったところで、これは理想の社会をいっているもので、現実の社会というものはもっともと厳しい、そしてまた明るい理想的な家庭だけではない場合が多いのではないかと、飯田さんはいふ……。

高橋 私は意見が二つあつてもいいと申しましたが、放任という意味ではないので、以前の封建的な社会のときの家庭では、やはり一つにまとめるときに家長がリーダーシップをとつていたと思うのですが、そのリーダーシップをとるのが子供であつても、主婦であつても、主人であつてもいいということ、それから話し合つて、一番いい意見に従うこと、だから二つあつても衝突しない。

松井 人間生活ということ基準にして、集団に協力す

愛情をもつていても、結局は放任ということに陥つてしまふ場合もあるとおっしゃるのです。

村松 さっきから老人と同居する場合の経済的な問題というのが出なかつたのですが、私の妹のところであつたこの間、いふとが自殺未遂をやつた。というのは非常に生活が困難で、夫婦共かせぎでも食べていけないのです。それで働けないし、いふとが自殺をはかつたのです。そのときでも若い人の打撃はひどいのですが、私はそういう手紙を妹からもらつても、自分はそのことに對してどんな慰めもいふことができない。私たちの気持ちの持ちようとか、そんなものではなくて、もっとやはり、いまだ働いて働いて働けなくなつた年寄りに、もう少し自由を与えるということ、は、私たちだけの力ではできないと思ひます。

飯田 そうすると村松さんは、今日の年寄りというのは若い人からじゃまにされている……。

村松 そういう考えをもっているわけです。年寄りでずから、社会的に考えないで、ただ私がいるからみんなが苦しいのだ、私がいなかったら……、そういう考えしかもてないわけです。

飯田 竹中さんのおっしゃつたように、家族という集団の中において責任というものをもう少しみんな痛感して果すならば、そういう問題が解決されるとおっしゃるわけで

すか。それとも個人のこういう問題は今日の社会では解決できないから……。

村松 個人では解決できないけれども、やはり個人の力が集まって、それがもっと大きな国の政治を動かすようにならないければ解決できないのではないかと思います。

平川 集団というものは、個人だったらできない強さというものがあろうと思うのです。だから集団というものをもっと相談相手として見れば、何らかの解決方法が出たのではないかと思います。

加藤 私には個人の責任の限界というものがあろうのではないかと思います。今の話の場合、自分がいなければまわりのものが経済的に楽だろうという気持ちだったろうと思いますが、個人の責任の限界をこえた問題は社会の責任に移すべきで、家庭でも母親の責任の限界、妻の責任の限界というものがあると思うのです。限界についての主観的な見解の相違はあると思いますが、それは話し合いのときに問題になるのではないかと思います。責任の限界と能力の限界というものを考えて、その上でやる。とにかく自分というものを中心にして、だからといってエゴイズムではなくて、そのときどきの立場において、それぞれ母親の責任、妻の責任を果たすことから自分としてはじめたいと思っております。

つと大きなものになってくる。そこにみなさんの仲間の集団の意識というものが必要になってくる。いま、寛容の心構え、愛が必要になってくるのではないか、放任ということになればこれはばらばらになるし、そしてまたそこからいろいろな社会悪が生まれてくるというお話がありました。いま家族全体を個人の関係の上において考えながら、属するということ、集団の仲間の意識、家族の仲間意識というものがどうあるべきかということが、大きな問題になってくるのではないのでしょうか。

原田 集団の意識ということですが、その具体例を申しますと、実は私は主人と二人なのですけれども、主人の兄は満洲から引き揚げて参り慢性的な病気で仕事ができなくなり、兄嫁は子供をつれて出ていってしまったので、いなかで年取ったお母さんと生活していました。私たちも幾らか援助していたのですけれども、公務員の身ですので、経済が許さず、全面的に生活を見ていくことができないで、心苦しい思いをしておりますが、とうとう二十九年にお母さんが亡くなり、引き取るという問題がおこりました。困ったあげく来年までは健康保険で病院の方にお世話になることになりましたが、問題は私の家庭の家族は主人と二人ですが、一人入ってきたために悩みがある。愛情という、その理屈だけではわかっておりますけれども、どうして

### 集団の仲間意識

坂西 お話がわき道にそれて参りましたから、もう一度本筋に戻すべきだと思いますが、結局は集団を考えるときにそれに属するといふ意識ですね、集団の意識、これについてもう少し考えてみましょう。終戦前は家族の集団は家長の下にあって、家長に統制されていた。自由がないかわりに、家族のメンバーは家長を除けば、割に責任がなかったわけですね。ところが今度は新しい時代になって、個人の自主性が非常に強く叫ばれるようになった。そして家族という集団に属する人たちの意識が調整され、まとまりがつけばいい家庭ができるわけでしょう。ところがいまみなさんが例を挙げられたが、その属するという意識からはみ出る人があるわけですね。自分はこの家族という集団に属しない、いわゆるのけ者にされている、そして集団の和を破っているだから自分がいなくなればもっとよくなるであろうという結論を自分で出すわけなのです。この属するということ、親と子の関係、夫と妻の関係であつたら非常に緊密なですね。ところが日本の今日の社会では、家庭と西欧のように、いわゆるファミリーとして夫婦と子供というだけに限ることができないでしょう。この問題、集団というものが憲法に規定されているものよりは、実態はも

もできないことがあります。経済的にも……。

小川志 私は継母の立場にありまして、三人の子の母親になりました。子供が小さいときはそんなに苦労しませんでした。が、中学校を出て、母親が過うというのを他人が意識させたりする、そういうことについて非常に精神的な重荷がありました。家の中ではうまくいっておりますが、世間というものは継子とか継母ということをはたたく見がちですが、継母の問題は、世間が血のつながりとか、そういう古いものにこだわらないで、もう少しあたたかい目で見ていただきたいと思います。

坂西 小川さんのおっしゃりたいことは、御自分の家庭という集団の内部においては、みんなが努力をしようといっているけれども、今度は既成の社会的な考え方というものがある。水が水として、住みにくいものにする場合があるということですね。そうすると、今あなたの家庭は、解放されてみんなが自分の考えというものを述べて、継母であつてもお互いによく理解しているけれども、やはり古い考えというものが外から支配するということですね。

村上 先ほど先生が集団の意識ということをおっしゃいましたが、自分が家庭集団の中のメンバーであるということ意識するということは、現在の都会の家庭では行きわたっていると思うのですが、農村の家庭ではなかなかそれ

が思うようにいかないと思うのです。私の親類の話ですが、家中で相談して、台所を改善しようという話があったのです。ところがおいじさんが、迷信をかつぎ出して、家相が悪いとか、なんとかいって絶対させないといっているのです。台所を改善したらどんなに能率が上り、衛生的になり、お中が明るくなるか、目に見えてわかっているのです。おいじさんがさせないで、話し合いにも何にもならないのだそうです。そういう場合にはどうしたらいいか、皆さんどういふふうにお考えになりますか？

坂西 これは深刻な問題で、いろいろな面で世代の違いというものが出て参りましょう。

国領 ただんこに反対する権威に対してぶち破っていきたい。そういうふうな心の柵を取ることが必要ではないかと思ひます。

坂西 おじいさんの心の柵はどうして取るんですか？

国領 おじいさんの方を取るのではなくて、何かにつけておじいさんをいたわるとか、同じ方に気が向いてくれるようにするということが大事ではないでしょうか。

坂西 台所を改善しないというがんこなおじいさんを、台所を改善してうまくいっている明るいところへ招いてもらって、ごちそうを食べさせて——ごちそうといつてもきれいな台所で能率的に、ふつうのものを使つてもこんなに

おいしくできるといふようなところを経験させるんですね。

村上 農村には根強い迷信があるのです。それを打ち破るように努力しなければならぬ。

竹中 私は国領さんと同じ意見ですが、一人の人をいろんな角度から見ると、私は十四のときに母を亡くしておばあさんのもとに帰って参りましたけれども、都会といふなかの差で、わかつてもらえない面があったのです。けれどもあとからよく考えてみたら、わかつてもらおうとしなかった私が悪かったわけです。おばあさんはとにかくがんこな人だといふ考えではなくて、おばあさんにいつもくっついて歩いたのです。そして私がおばあさんから何か受けるものがあるのではないかと考えましたときに、おばあさんはお琴が上手なものですから、私はお琴を教えてもらったのです。すると今度「映画見にいこうか」というときには、おばあさんの方から「洋画見てもいいよ」といふようなことで、そういうふうにいるんな角度から人を見て、その中でどういうことを望んでいるか、早くいったらその人を理解していくように努力する。

坂西 そうして、一緒に住んでいる人と一緒に育っていく。あなただけ育つてはだめでね。——この問題のきつかけを出してくださった方は横間さんですが、担当いろいろ

の角度から論議しましたが、どうですか横間さん、今あなたはこの議論の中でどういうことをお学びになったか。あるいはどういふふうにお考えになるか……。

横間 私は皆さんのお話を承りまして、非常に参考になったのですが、私のやったことは正しいと思ひます。集団と個人といういろいろの問題でも、絶対解決できるというものではないのです。解決はできないけれども、そこにいい道を考えるという一つの仕事だと思ひます。お互いに人の立場をよく考えるということ、それから寛容な心ということとはどんな集団においても必要だと思ひます。それとたゆみない根気が第一だと考えております。それからお互いに悩むだけ悩んで、そして一歩踏み出す。一歩前進するということによってすべての解決の道が開けるのではないかと思ひます。

坂西 それではいかつままで申しますと、松井さんは自信をもって御自分の理想を貫かれた。しかしそれには約二十八年の時間がかかったわけですから。そうしてほんとうに涙の出るようなつらい思いをなさった。ところが今日の社会を見ると、大体そういう時代は過ぎたといつてよさしい。けれどもこれは、御自分の思ったことが全部通るわけではありません。国領さんも、それから小川さんも、決して自分の発言がどんな家庭においてもすらすら通るということ

ではありませんが、先ほどから高橋さんが繰返しおっしゃっているように、意見が二つあつても、やはりその中で「和」といふことは成立つ。それからまた、たくさんの方々がいらっしゃるように、結局は話し合いである。また村上さんのおっしゃる通りに、わけのわからないがんこなおじいさんに出会つても、そのおじいさんを説得するためにはいろいろの角度からそのおじいさんの心をとくほすような努力をする同時に、また変つた時代に触れさせて考えを交えてもらう。迷信の問題も困難な問題です。ある点まではいろいろの新しい計画によつてといふことができません。しかし最後に残るものは、私たちは生きた人間と接近しているのですから、ある病氣は死なないうちで治らないといふことも、ここではっきり言っておいていいのではないのでしょうか。

それでは今度は問題を広げまして、やはり同じような角度から地域社会の問題に移つてみたいと思ひますが、家族と同じように自然に発生した場合が多いのです。それではあなたが孟子のお母さんみたいに、この場所はいいから自分はそこに移つていくといったところで、今日の社会では貸家はありませんし、自分でお金を出して家を建てるわけにいきませんし、そしてしかも皆さんは、住む環境をよくしていくといふことは楽しいことであり、必要な



ことだと思っても、なかなか動けないでしょう。……それでは団地に住んでいられっしやる山梨の土屋さんに口を切っていただきますようか。

#### 地域集団と個人の問題

土屋 私たちのところはいわゆる団地族と申しまして、収入額なんかもある一定の線を引かれておりますので、生活というものも大體輦が一致しております。それだけに人にたよらなくても自分が生活できるという気持が強く、そのために孤立しやすいと申しますか、自分の壁に閉じこもって、お互いあまりにも無干渉過ぎる。これは都市のアパート生活はみな共通しているのではないかと思います。もちろん無干渉ということではなくて、あくまでも、あまりにもそれが過ぎますと、近隣の親近感というものがなくなるような気がするのです。一朝事が起った場合とか、たとえば子供のことで近所の人たちがお互いに協力してやりたいたいという場合でも、お互いに知らない人の生活には立ち入れない。そういう親近感というものが生まれません。そこで私の方ではよその団地を参考にして、運動会を開いて一棟々々の対抗リレーとか、試合とかをやってお互いに親近感を深めたり、各集ごとに常会をもちまして顔を合わせるといふようなこともやっております。私たちの棟は十八戸あ

らお休みなというふうにはしないで、無理のないところで消費者の協力と、商工会自身のめいめいの自覚によって推進させたいと思つて、消費者の方にお聞きしたのです。十人ぐらゐの方にお聞きしたら、非常に困るとおっしゃるのですが、皆さんどうお考えでしょう。定休日は推進した方がいいか、推進するならばどういう方法が無理のないようにやれるか。これを考えていただきたいと思ひます。

坂西 これは一つのことをきめても、そのルールが行われない。なぜ行われないかというと、結局は地域の人が不便だから、あるいは自分が困るからといってルールが破られるわけでしょう。ただいま土屋さんは地域社会の集団生活というものはルールを作つて、それに従ふことによつてほんとうにいい生活ができるというふうにお考えになつた。そしてそれを体験してらした。松井さんは、商工会議所によつて作られたそのルールはいいルールだと思つて、しかしそれを地域社会の人は守らない。この二つの対立した考えが出てきましよう。これは何も松井さんや土屋さんのところに限つたことではない。

結局こういうことです。個人として、地域社会を一つの集団とみなせば、それをほんとうにいい集団として盛り立てて、育てていくためには、私たちはどういふことができるか。そうしてまたその集団の一人としてあなたの意見、

なのですが、そのうち十戸は共かせぎで出ておりますので、集会は夜にしたいだくというふうにして解決しております。

坂西 少し問題は違ひますが、やはり御自分の考えを通して地域社会の考え方を變えていった松井さん、お店に公休日をこしらえて地域社会の人から文句が出ませんでしたか？

松井 町の一斉定休日を商工会がきめました。ところがそれが現に崩れかけているのです。それを支える空気の薄さというものを非常に感じたものですから……。私は定休日にきちんと締めてゐるのです。その前も日曜日は仕入れに参りますから締めておりました。人口二万の、あまり大きな町ではないのですが、商工会がそうきめまして、私は非常にいいことだから協力しようと思つたのです。商工会の人としてみんな協力すべきでしたが、守れない人がいます。小さな店であればあるほど、店を締めると損だといふわけですね。私の前にもやはり文具店がありますが、日曜日でも開いていらっしやれば、私自身損したような気持がするのです。でも私は割り切りましたからしませんが、ほかの方は、定休日なのに店を開いてゐるといふ非難する、その裏に自分も調きたいという気持をもつていらっしやるのではないかと思ひます。これを正面切つて定休日だから

あるいは町が作つたそういう意見というものがなぜ育たないのか、あるいはどういふふうにして育てていくことができるか。またあなた個人の発言が、地域社会に何か影響することがあるのか。それともあなたはだまつて口をつぐんで、その中にじつとして生きていかなければならないか、こういう点がいりるございましょう。

#### 話し合いによる協力

村松 私の方は東京の大田区の工場街で、小さな町工場がたくさんある。住んでゐる人は町工場で働いてゐる人が多いのです。いろいろの職業の人がいるのですが、どうしてもお互に協力しなければ自分たちの生活が守れないのです。その一つの例として、水道がないために夏なんか夜はほとんど眠らないで、たつた一つのおく出ない水道からバケツを並べて順番に水を汲んでくるといふ状態だった。お互いに、あの家は水をくれないとかいって悪口ばかりいっていたのです。けれども考えてみると、お隣の人が悪いのではなくて、水道の本管が入っていないといふことが悪いのだ。けんかしてもだれの得にもならないのだし、けんかはやめて水道局にいつて本管を引いてもらいましようといふわけで、みんなで水道局へ働きかけ、それで水道の本管請願運動に成功し、一年目にみごとに水が出た。そのとき

に初めて、めいめいがばらばらであってはいけない。共通の問題はこれからも一緒にやっていかなければいけないというところで会を作ったのです。下水一つでも、自分たちの方から進んで役所へ足を運んで作ったものですし、それから線路の柵がこわれると会社へ交渉にいったりして、だんだんみんな少しずつよくしていったわけです。だからどぶも自分たちのものだ、これをいつまできれいに流れていようにするには人にかかえず、自分たちでやらなくてはならない。それには自分自分でやるのがいいか、日をきめて一緒にやるのがいいか話し合いをしたのです。その結果みんな一緒に何曜日にしたらいというのをきめて、みんなが責任をもってやっているのです。ところがあとから越してきた人とか、最初から会に入っていない人たちは、同じどぶを使っているもなかなかお掃除に協力してくれないというので、会の人からだんだん不満が出てくるようになった。それでよく考えてみると、結局私たちは自分たちがどぶ掃除を必要だと認めて自分たちで自主的に日をきめてやったことだから責任をもてる。けれどもほかの人たちにとっては、私たちの会できめて「今日はどぶ掃除するのですよ」といわれたのでは、結局押しつけられることになるから、気持ちよく出てきてくれないのは当然ではないかしらと、この間の月例会でそういう話になったのです。それ

で、会に入っていない人たちも、町会には入っていますので、町会の班長と話し合いをして、あなたの方でも皆さんと相談していい日をきめてください。私たちの方でも一緒に考えて同じ日にするから譲り合おせましょと、そういうわけで、会のグループの当番の人たちがめいめい手分けして、まわりの人たちに呼びかけた。呼びかけられた人も非常に喜んで、今まで気にしていたのだけれども、自分の希望の日を書いてくださいました。どんないいことでも人に押しつけられたことは言うことがきけない。戦争中の経験もありましたから、団体行動というものは、自分の意思が圧迫されるというふうに考えている人も、多いわけです。

坂西 今、村松さんが非常にいい点を並べてくださいましたね。それを拾い上げてみましょう。たとえばやらなければならぬ、しかしそれはみんながそうだと思うことが必要なのです。あなたが目覚めて、自分はこれが必要だといって声を大きくして叫んでも、ほかの人がほんとうに身近かに必要だと思わなければできない、これが一つ。それから今度はそういうふうに必要なと思うなら、一人の人が掛け声をかけて組織してしまうのではなく、みんなで第一回のときにお話ししたと同じようにここでも話し合い、みんなの意見をよくまとめて、一致してやるということ。そ

れからこればうまくいって、今度はかから新しく入ってきた人は、あなた方がきめのだから、自分はその利益を得るけれども、別に協力するという意思はない。そのときに村松さんのグループの方はどうなさったかというところからいって、いろいろ話し合いをし、向うの意見も十分に取り入れて一致して歩むようになった。ここに全体の考え方の基礎というものがあつた、それからおとりになった手段方法というものが非常にいいと思うのです。

こういうことを中心にして——ここに職場の方がお二人いらつしやる。平川さんは栄養士、竹中さんは看護婦ですが、職場においても同じではないですか。竹中さんの経験をお話してくださいませんか。

竹中 私たちが取り上げました問題というのは、看護婦の通勤制の問題で、看護婦は全寮制というのが世間一般の人の常識なわけです。全寮制というのは、結局結婚した人はやめていかなければならないという一つの前提になるわけです。それが一つの例をとりますと、せっかく注射が上手になった人がやめていくということになり、看護という意味ではマイナスになるわけです。私たちはどうしたらいいだろうかと、みんなで考えました。そして通勤しても差し支えないのだ。もっと社会にいい効果を与えるのではないかと、ということをお互いにわかっていただこうではないか

という声がたくさん出て参りました。とにかくやらせてみてください、もし悪かったらそのときにやめてもいいですからというみんなの声もあり、熱意もあって、それで通勤制が行われたわけです。実際にやりましたら苦しいことがいろいろありました。一番困りましたのは時間が不規則だということ。それで家庭をもつて人は家庭と職場の両立がむずかしくなってきた。事務のようなお仕事ですと、今日は切り上げてまた明日続きをしようとか、家に帰って帰ることができませんが、私たちは手術している途中で「今日はこゝまで」ということはできません。それで通勤制ということはみんな計画を立てて、みんなできめてしたので、残るうではないかと励まし合ひまして、もし私たちがこれを乱したら、通勤制はこわれてしまうのだという自覚をもってやっております。地域社会の人にも迷惑をかけずに、職場における女性として自覚と責任をもってやっているといます。

坂西 竹中さんのように最初に決意した方は団結してお仕事に支障のないように、だれにも迷惑のかけないようになすったでしょうが、そのあとに続く方々が、あなた方の気持というものをよく心得て守ってくださいましたか。

竹中 私が入りましたときは、通勤制ができておりました。私は通勤するという条件で採用されました。その当時

としては例外なくらいでしたが、その例外なことを可能にしたいというみんなの気持もあって、「通勤者だ」といって指をさされたくないという意識がありました。通勤者ということがよいことの総称でありたいというふうに、みんなでも支えあっておりました。

坂西 平川さんは營養士として、社会の問題と接触していってほしいんですが……。

平川 私たちは食生活に一番関係があるのです。私たちの病院は子供たちばかりですが、そのなかでいろいろな性格が現れるのです。小さい子供たちはみんなと同じものを喜んでくれるけれども、ある程度大きくなって、四、五年生ごろになると、女の子はみんなと同じものを食べるということになんとかいや気を感じるのですね。そのいや気というのは女の子独特のグループ意識とか、いろいろあると思いますが、そういう女の子の人の気持が四年ぐらいいなると出てくるのです。そしていろいろ調査もしてみるのが、自分と自分というものを現わすことも必要なのですが、自分というものをある程度譲らなくてはならない。さっきも寛容ということが出ましたが、そういう気持が集団生活にあっても必要ではないかということが感じられるのです。

坂西 集団生活の中で生きていくには、ある程度自分を譲って妥協していかなければならないのではないかと、とい

うことですね。

#### 集団のルール

土屋 地域社会を向上させるには、人に迷惑をかけないということに一番重点を置くということが必要なのではないかと思うのです。私たちのところはアパートですから、生活してゆくうえに特にこのことが必要なことですが、でも長い生活のうちには不注意というか、エゴイズムと申しますが、つい投げやり顔が出てくるのですね。

村上 これは松井さんがお出しになった一斉公休日のお話になりますが、敗米では、公休日とか時間になったら店を締めてしまうということは、とても厳重に守られているというようなことをよく聞きます。日本ではそれがうまくいかない。たとえば肉屋さんなんかでも、公休日に一軒だけあけている店があると、ついそこで買ってしまふ。それでそのお店がものすごくはやって、そこだけもうかるわけですね。ほかの肉屋さんには、ばからしいと思うのではないかと思います。一軒ルールを乱すために足並みが乱れるように思うのです。やはり公休日ときまったら、ルールを守って、一斉に締めなければうそだと思ふのです。私どもも、何曜日は肉屋さんはお休み、何曜日は魚屋さんは休みだと決めてしまいましたら、私どもの生活の中にそれはと

けこんでしまつて、その前に買っておきますし、そういうふうに訓練するということが必要なのではないでしょうか……。

坂西 いいかえらるなら、個人の生活に計画性がないというところになりはしませんか。二十五日は野物屋が休みだから、その前の日に野菜、果物を買っておこうとか、二十日は魚屋さんが休みだからということの主婦が頭に入れておいて計画を立てればいいのですが、そこまでいかないで行き当たりばったりの生活をする。

原田 経営者の方からの提案で、消費者に一日の間に買物をする時間をきめてほしいということを強くおっしゃってました。

河野 小倉市には中央市場というのがあります。お役所の建物ですから、その八百屋さん、魚屋さんは日曜日はやむなくお休みで、店員さんは思いがけなく休日ができました。それに同調して、商店街が月一回定休日を設けるようになったのです。それに対して不便だという声が消費者の中から出てきたのですが、商店員の教育ということからしますと、ふだん何も娯楽とか、希望ももてないものですから、つまらないことにお金を使っていたが、一日の定休日設けられるようになってから、みんな希望がもてるようになって、むだ使いをやめてその日のためにとっておくよ

うになった。今までは店員さんというのは家族と一緒に見られていないで、女中さん同様に扱われていたわけですが、そういう人たちの立場を考えて、なるべく主婦たちも定休日の前の日に買物をするようになりました。

横間 その問題について、私も非常に困っているのです。私の町は三〇〇戸ばかりの戸数なのですが、八百屋が日曜日に休むようになったのです。私たちお勤めものは日曜にはごちそうがしたいという気持があるし、またそういうときに限ってお客さんがあるのですね。前の日に二重に買っておくと、余分のものまで買って、ついぜいたくになったりします。非常に困りまして、私のところは北町と南町とにあるものだから、交替に休んでくれないかと申入れたのですが、断られ仕方なしにそのままにしていたのです。ところがその後何でも何でもあらゆるものを売っているりっぱな主婦の店ができました。ところがそれができたら商店街の方が押されるものですから、その主婦の店に対していろいろ妨害するのです。主婦の店は日曜に休まないということに魅力がありますし、とても安いのですね。

平川 日曜日は大分でも八百屋が休みですが、土曜日にまとめて買うのです。多少の不便はあっても、主婦の方が協力してお休みをきめていくようにしてあげなければ、商

店に勤める人がかわいそうではないかと思ひます。

飯田 私はいなかの方に住んでおりまして、不便ですの  
で、三、四日分いつもまとめて買いますが、それで余分の  
ものを貰ってぜいたくという事はありません。

加藤 商店の方々に休みに休まされては、ふだん勤めてい  
らっしゃる方が困るというのだったら、ルールは変更して  
もいいのではないかと思います。主婦の声でできたルールで  
ない場合でしたら、消費者と売方と相談してきめ直す必  
要があるのではないかと思います。

竹中 私たち勤めているものにとって、定休日があるの  
はやはり不自由を感じることもありますが、先ほどお話の経  
営者の方の争いの中に、もっと消費者の方のことも考えて  
いただく。今の横間さんのお話でしたら主婦の人たちは、も  
っと消費者の立場を考えてくださいと話して、たとえば第  
一日曜はこちら、第三日曜はあちらが休みというふうにし  
てもらうとか、みんなの気持を知っていただくような、そ  
ういう話し合いの場をその人たちに作ってあげるとい  
うにしたらどうでしょうか。

坂西 今まで出た御意見をまとめてみますと、結局地域  
社会をよくするのは、村松さんがかなり強くおっしゃって  
いましたように個人の目覚めですね。個人が真剣に考え

て行動することが多くありませんか。これでいいでしょ  
うか。

村松 先ほど平川さんが集団の中で自分を譲ることが必  
要だとおっしゃいましたけれども、私は自分を譲るとい  
うことではないのではないかと申すのです。私なんかの場  
合、地域社会の中でやっていると、いろんな考えの人と共通  
の目的のために一緒にやっているとかなければならない。そ  
ういう場合によくだれのことでも、あの人はあんなことを言  
っているとか、つまらないことで争うことがあるのですけ  
れども、そういうときは、私たちは今共通の目的のことを  
考えているので、共通の目的に關係のないことはがまんし  
たらいいではないか。目的を達するためにこの人と手を  
握ってやらなければならない。仲よくしなければなら  
ないというはっきりした目的のもとに譲歩するので、自分を譲  
るといのではない……。

平川 譲るといふのでなくて、それはあくまで自分の自  
主性というものに基いたもの……。昔の人は何かといえ  
ば美談めいた、自分だけがまんすればいいといった行き方が  
多いわけですが、集団というのはレイ・モードを  
生むところではないかと思う。譲るといっても自分の立場に  
立てて譲っていただきたい。

坂西 それでは第三の問題に移っていききたいと思ひます

て、こういうことが行われなければならない、こういうこ  
とをすればみんなが住みよくなる。そしてそれを今度は話  
し合いでみんなに伝え、グループを作ってそこで解決して  
いく。それから今度は、もしその仕事がいまいきいまい  
ですが、落伍者が出る、きめたことが守れないというふう  
なことが起きたときにはもう一度反省して、どういふこと  
に理由があるか、その落伍した人たちをもう一度いろいろ  
の方法でもって自分たちのグループの中に呼び込んで協  
力していただくということ。それから職場の方は、いろい  
ろのルールを変え、手段を改めていくのに話し合いによ  
る。一つのきまりがあるのは何かのほっきりした理由があ  
るのですから、それをよく尊重して、変えた以上はそれが  
ほんとうに守られて、だれも不満を感じないようにもつ  
ていく、いわゆる良心的な態度というものが必要であるとい  
うこと。ここに一つ問題が出たのですが、最初から皆さん  
は人に迷惑をかけないということをよくおっしゃいます  
ね。これはいわゆる日本の社会の倫理になっているわけ  
でしょう。なぜあなたはそういうことをするかというこ  
とはだれそれには義理があつてとか、また、自分がこうい  
うことをしたについては、人に迷惑をかけないように、家族  
の体裁外聞というものがありますからというふうに自分が  
主になって考えるというよりも、むしろだれかを対象にし

ので、ここでまとめさせていただきます。家庭と比べて地  
域社会の個人の発言権、あるいは個人の考えというものは  
もう少し自由に、そしてまた受け入れる側でも態度がもう  
少し柔軟性があるのではないか。皆さんがもう少し少しく  
な気持。ことに最近では地域社会の、あるいは職場のグル  
ープというものの中にはかなり自主性を取り入れてくれるよう  
な要素ができてきたと思ひませんか。ここでもう一度考え  
なくてはならないことは、個人の発言権もかなり認めら  
れ、そしてまたいい考えであればいろいろの人があなたに  
力をかけて一緒に仕事をしてくれろという望ましい環境に  
あるわけですが、同時に今までの社会のしきたりというも  
の、一口に封建性といってしまうとそれまでですが、そ  
ういふものがまた入ってきていますね。これもやはり時間  
をかけてゆつくりときほぐしていくのでなければなら  
ないといふことが相当ありませんか。たとえばあなたが家庭  
の主婦であつても、今度はお子さんが大きくなるにつれて  
少し腕を広げてPTAに属したい、また属する必要も出  
てきましよう。あるいは婦人会に、青年団にというふう  
なことも、それはほんとうにいい考えだからそれでは属  
しましやうというときに、どうですか、あなただけの、あ  
るいは御夫婦だけの場合だったらずっといきますよ。しか  
しそうでない場合、あるいはまた地域社会が都会でしたら

そういうことはないと思いますが、小さなところであつたらあなたがどこかに属するかということが批判される傾向もありましょう。ですからこういうことは、これをどういうふうにしてときどきしていくかということは、時間を迫ってきたから次の問題に移ったときに同じところで考えていきたいと思います。

今度は自然発生的なものではなくて、あなたの意思によって入る機能的なもの、何かの目的をもった集団というところに移ってみようではありませんか。——そうすると大体において、家庭においての個人というものはどういうものであるか、地域社会、あるいは職場においての個人というものはどういうものであるか、ということがわかつて、今度は大きな集団における個人——大きな集団というのはどういふふうな性格のものであるかということの一般の様子がおわかってきましよう。それではこれについて書いていращる小川さんいかがですか。あなたは「草の実会」へ、自発的に入りになったのでしょうか。

#### 機能的集団と個人の問題

小川志な 私がこのグループへ入りました動機は、主人の勧めが東京になり、二重生活になりましたが、一番最初

を知らないということは非常に不安で、生活の中でおびえまして、お友だちがほしかったわけですね。そのお友だちをグループの中に求めまして、いろんな知恵を拝借して、お力を得たりして生活の不安がなくなり、自分も同時にいろんなことを少しづつ学ぶことができました。現在は連絡員をいたしておりますが、自分が少し成長してみると何か寄りかかっているような主婦の立場というものが弱いものに見えてきたのです。人まかせといいますが、あまり責任というものをとれないのではないかと思うのです。そういう責任をもたないということをよく考えますと、やはり主婦は夫や子供の庇護のもとに、社会の直接の風当たりを受けずに生活できるという弱さが責任のなさということになるのではないかと私は考えます。

坂西 そこで、御自分の意見を述べ、お互いに磨かれてきて、非常に良くなつたということですね。大きなグループではないが、いろいろなところで広い接触をもっているという飯田さんに……。

飯田 私は三年ほど前までは家の中にこもっておりまして、毎日新聞の「女の気持」欄に投稿しまして、それが採用されて載りましたときに、私のようなものでも社会に訴えることができるということの喜びを感じまして、それで初めて私個人と、社会のつながりを非常に感じたわけな

のです。投稿が契機となって、書くことによって視野が広がりました、もっと勉強しようという意欲が出ました。それで同じような気持の人と手を取って一緒に勉強していけるのではないかと、という気持でその会へ呼びかけましてペングループを作ったわけです。初めどうしていいかちっともわからなかったのですが、みんな同等の立場に立つてグループ作りをしなくてはいけないと思つておりましたので、初めのうちは全然リーダー・シップをとってはいけな

いと思ひまして、皆さんの御意見をただグループの上に反映して、小使役しかいたしませんでした。そうしますとグループが少しも動きません。と申しますのは非常におとなしい主婦の集まりでして、それからこういうことを申し

すとグループの皆さんに誤解を受けるかもしれませんが、新聞の投書が契機になっていきますので、新聞社が運営のめんどろを見てくれるのではないかと思われた方が多いのです。会費を取ったり、会則をきめたり、会報を発行したりなんて、そういうむずかしい組織作りは主婦たちは忙しくてできないという意見が圧倒的だったのです。それで私は小使役に終始しようと思つて半年ほどそれで過しておりましたが、グループの目的を果そうと思ひましたら、自主運営を強力に進めていくのが司会の責任でもあり、世話役の責任でもあると思ひまして皆さんに呼びかけて、強く自主

運営を進めたわけですね。会の目的を果すために一生懸命努めたわけですが、指導をして若干行き過ぎたので、今度は反省いたしまして引込んだというわけですね。

#### 地域婦人会の問題

村上 今の小川さん、飯田さんのお話は自分たちの好みに合った小さなグループですから、割合うまくいくのではないかと、思うのですけれども、私は、地域婦人会の問題をちょっと申し上げたいと思うのです。

地域婦人会に入るか入らないかは、現在の世の中では私どもの自由ですけれども、それがなかなかそうはいっていない現状のように思うのです。大体どこでも、地域婦人会はできていると思うのですが、学校に子供が入りますと、自然にPTAの会員になるように、地域婦人会は、その地に住みますと、自然に婦人会の会員にされてしまうという傾向がある。「あんたが断ると、ほかの人たちも断わってしまうから、人のためにもどうしても入ってもらわなくては行けない」とか、「区内に住めば、そういうわがままはいけませんね」とか言つてねばなられますと、やはり婦人会のあり方に疑問を持つていても入らざるを得なくなつてしまふのです。そこに私どもの自由が、確立していないように思うのです。地域婦人会に入りましても、多くの婦人は自

覚がなくなるすべからず、婦人会員になって入ってしまったものだから、婦人会の趣旨に協力もしませんし、責任もいかにせんものです。

婦人会がそういうふうなものですから、それでは好きな者同士が集まって、短歌のグループを作ろうか、読書会を作ろうかということになってしまふ。そういう小さな集まりは目的がはっきりしておりますから、とてもうまくいくのです。たとえば読書会なんかでしたら、こういう本を読みましょう、というので意見がまとまって、だんだん深く入っていくわけですね。結束も強い。でもまた、私たちは、それでいいだろうかとも思うのです。深くなることは結構ですが、それなら私たちの横のつながりというものは弱いものになってきて、たとえば文学のことは深く知るように、社会的なことがわからない。そうするとやはり大きなグループにも入らなくてはいいけないのではないかと疑問も起きるわけですね。そういうときに大きな婦人団体が昔の愛国婦人会、国防婦人会式のもののように、だんだんなってくるように思うのです。どうしたらいいだろうかというふうに悩むのです。

坂西 村上さんとおっしゃった問題は大きな問題で、今、日本の婦人団体というものは危機——曲り角に來てると思います。だんだん大きくなっているけれども、そ

とを懸いだけで、問題の発展に一步も進んでないで、もう戦後の婦人会というものが充足したときには、前と違ったもの、そして自主性のある個人からなつた大きな団体、一人ではできないことも、みんなで手をつなげばできるから、大きな団体を作りましょうということだったのでしょう。ところが十年の間に、なぜ村上さんや河野さんのおっしゃるような方向に動いてしまったか、これが問題なのです。

村松 東京でもやっぱり今の皆さんと同じような状態で、私は婦人会があることを知って、自分から進んで入れてもらいました。そのときは、うちのまわりの人たちは義理で入っている、けれども、一向会員になっても何の利益もなく責任も負わされない、つまらないからやめてしまふと言っていた。それで私は、なぜ御自分がこういうことをしたらどうかと発言しないのですかと尋ねて、その人たちと一緒にどんどん変えてゆくように努力しようという意気込みを持って入ったわけです。それでお米の値上げのときも、国がこういうことをやらなければ成り立っていかないのか、こういうことは私たちの生活に響くから、研究会を催してもらったらどうかと、みんなの意見を聞いたから、それは賛成だということで理事をやっている人のところへその意見を持っていったわけです。その理事が上の人へ

れではその中でメンバーが一人々々勝手に活動し、そしてまたその団体に属しているということが自分の喜びであり、成長してゆく一つの原因となるかというところ、そうではなくて、上から命令されて引きずられるかというところ、それではいいやだからといって出ようと思えば出られないというくらい立場にある。この点に少ししぼって議論を進めていきたいと思います。

河野 今の地域婦人会というのは、戦時中の国防婦人会をそのまま踏襲しているように見られます。会員が何十とか何万とか多いのを誇っているようにも見受けられます。総会というものなども、あんまりなくて、個人の発言は、ほとんど出す機会もないようです。それから、ただ社会奉仕という面だけで活動しております。それから、何か問題があつて、集団の意思というものが反映されていなくて、一つも個人の意思というものが反映されていなくて、ことに考えさせられております。もっと会員の方が批判して、一人々々がどうやらたら会員としての責任が果せるかというのを考えなければなりません、そういうふうな積極的な活動にいかないで、小さいグループを作つて、その方面にのめるといふ消極的なやり方で、問題から目をそむけているという状態ではないでしょうか。

坂西 その通りなのですが、これはやはり村上さんのあ

それを持っていたら、下の方からこんなことを言つて來られては困る、そういうのはアカだといつて、その理事までがとっても怒られてしまったといふのです。何かみんながやりたいと思つても、なかなか口に出して言わないのです。一番の根本的な自主的な活動といふのが、全然認められなくて、ただ私の方は民主的にやっていますと会長さんは言うのですが、あくまでも役員会だけが民主的であつて、会員にとっては一つも民主的でないわけですね。

坂西 民主的な形をとっているだけという意味でしう。

土屋 今、皆さんの言われたことは、結局、リーダーだけが浮き上つてしまふことに問題があるのではないかと思ひます。私のところでは割合農家が多いので、地方会議にそういうことが出た。村松さんの場合は都市ですから、婦人会でも末端組織の意見が、どんどん発表ができるのではないかと思ひますが、農村の場合は、ただ会費を出すだけに終つてしまひ、何をやっているのかわからない。結局、二、三の人がボスの存在になつてしまふ。

農村では、リーダーになるについては、社会的地位というところが——婦人だけではなくて、男子側からも、そういう人でないと認められないという点がある。そういう封建的な色彩があるのです。

坂西 もう少し皆さんでしほりましょう。というのは、

最初に社会教育団体として、PTA、婦人会、あるいは青年団というものができたときには、ほんとうに民主的な選び方をして、地位とか身分とか、家柄というものを無視して、いい考えを持った人、実力のある人ということできましてしょう。それが途中で土屋さんがおっしゃったようにすり変えられたときがある。そのすり変えられたときに、あなたはもういっしょに発言をしたか……

村上 先ほど申し上げましたけれども、これは県大会でも問題になりました議論の的になったのですが、婦人会の行き方がはっきりしていないのですね。県大会にも婦人会長さんという方が四、五人来ていらして、婦人会は市役所などから一文でも多く助成金を取ってやらなくては駄目だということです。それに私は大反対した。そんな助成金を当てにしてやるから、上からの命令を聞いてなくてはならん、そう申しましたら、そのお金をもらわなくちゃ婦人会は何も動けないという。助成金を貰わなければ動けない婦人会だったら何もしくなくていいではないか。一年五〇円、六〇円の会費でやれる範囲でやればいい。そういうものものを当てにしてやるから、ヒモツキになるのではないかと書いたら、主管者の社会教育課長さんが、やるものはないからっておけとおっしゃる。それで議論がこんなになってし

手に引きずり回す、またそれに引きずり回されてしまう。

上がこうしようといえはそれについていく。それがほんとうにいかどうか検討なんかないのですね。村松さんがさっきおっしゃったように、初めから、入ったからにはよくしようというので入るならば、個人も成長するし、団体も成長すると思いますけれども……

村上 私も婦人会にすすめて入りましたけれども、入った以上は会員としての責任を感じまして、いろんな集まりにもできるだけ出席しました。そしてこんな婦人会の行き方でいいのだろうかと思って意見を出しますと、かなりの賛成を得るのです。でも地域婦人会なるものは、その賛成を得ても、どこでどうなるのか、それがうやむやになってしまふのです。

松井 私たちの町は、上に立った方が自覚してくださって、十人ほどの小さなグループに分けて、そのグループの自主的な意見を、だれか一人が地域婦人会にもっていく、そういうやり方をしております。今度は子供の問題、こんな遊びをしていて危いから、婦人会で取り上げてやめるようにしようとか、下から盛り上げていく。非常に円滑に運営されております。

坂西 村松さんとは反対に、あなたの方は下から盛り上げていく。村松さんの婦人会では班が自主的な考えをもっ

まったのです。

高橋 地方婦人会議では結局婦人会のことばかり問題になったのです。来ている方は、ほとんど婦人会会長、副会長という方ばかりで、私は地域婦人会会長、副会長という方が独走していらつしやるようだと傍観者の立場で思っていたのですが、その一人の人がおっしゃるのに、とても会の運営がやりにくい、結局しようがないから入るといふ方があまりたくさんあるからそういうふうになるのだと思ふというお話で、それも一理あるなと思つたのです。

竹中 結論からいまして、個人の自覚をもっともつべきではないか。そしてそういう団体に悪いところがあるのだったら、自分たちもその中に入ってその悪いところを直そうとする。そういう人たちの力によって少しでもその団体をいい方に自主的に育てていくのが私たちの一つの目的というものではないだろうかと考えます。

加藤 逆に考えると、個人の無自覚というものが団体を悪くしていった、そしてまたその悪い団体に入っているためにその個人もまた悪くなるという悪循環をしているのではないかと思います。

飯田 リーダーが悪くしているのではないでしようか。加藤 無自覚だから、そういう自覚してる——ほんとうの自覚ではないかもしれませんが——人たちが独走して勝

てきては困るではないかとたかかれるわけですね。

松井 上がそういうふうには指導なさったのです。

平川 今、集団のリーダーの話が出ましたが、リーダーがそういうふうには流れてしまふのは個人に責任があるのだと思います。つまりリーダーにあまり権利を与え過ぎるのではないか。リーダーはあくまでその中の単なる代表者であって、リーダーに特権を与えないように婦人会をもっていったら、別にこういう弊害は起らなかったのではないかと思います。

小川 達子 私はリーダーというものは小使役だと考えたのです。

横関 私は一つ成功しつつある例をお話させていただきたいと思ひます。

婦人会も大きくなるとまとまりがなく、強制的な面も出てきますから、小さいグループにするということにして、今婦人学級を盛んにしているのです。ちょうど二〇〇〇人の会員がおりますが、グループに分けて、毎日の營養料理とか、身近かなことから始めておりますが、そのうちで皆さんが発言するというところに一番重点をおいたのです。発言しなかったらただ集団に巻き込まれて自分というものが見出だせない。個人に戻れば集団のことでも大いにいろんな意見をもちますが、発言しないためにいろんな問題が

起きるのです。それでみんな発表し合う、お互いに話し合うというところにもついていた。その司会には会員が大体回りをもちでやりまして、話をまとめるながら司会の役目を果たすのです。そのほか記録係、レクリエーション係、会場係などがあり、記録係の記録したものは一冊ずつまとめまして、グループの成長がわかるようになっております。

加藤 今の自由に発言するというお話ですが、私たちのグループは、みんな自由に発言できる会にしようという下からの盛り上がりで、みんなで発言し、リーダーはなくて当番制というような会を作ったわけですが、だんだんやっけていきますうちに、発言内容に対して不満をもって、結局陰でこそぞしてしまいうわけですね。それともう一つは、やはり当番制でも、当番に向く方と向かない方がいる。それで方向づけのためにリーダーを作ろう、ということになったのです。半年交替ということで選挙しまして、二人の人が選ばれましたが、自分はリーダー格だと自認していらした方が、リーダーに選ばれなかった。それは皆さんの目が正しいと思うのです。そしてその方は、いろいろ自分で工作しまして、ごっそり会員をもっていて、別の会を作ったのです。私たちの会というのは職業もいろいろな人の集り、皆さんのいろんな意見を聞き、自分も自由に発言し、その中で自分の考えを深めていくというのがその会の

目的なのです。勤務問題でも、これも左右両方から、教育長、組合書記長の両方から話を聞く公正な会だったのです。ところが、その方はそういう政治的に動くという会では迷惑だ、といって分れて、いざふたを開いてみると、こっちと内容の会合をもっている。こういう方が一応指導者となっているような婦人の集まりというものは、いつまでもたっても伸びないのではないかと考えます。それで、あの方があっちへお入りになったから、自分がこっちの会に残るのは悪いような気がする、そういう方はどんどん抜けておしまいになって、ほんとうに自分たちで名譽とか、権力にとらわれないでいい会に育てていくという考えのものがまとまった感じですね。

坂西 今までお話ししたのは自発的に目的をもった集団というもので、その中であって個人はどのように活動し、そしてまた集団をどのようにして育てていくかということだったのです。大体において——横関さんの例は別ですが、それからまた小さい集団では成功して非常にうまくいっているのがありますけれども、大きな集団にならずと、皆さんの御満足のいくようなものは非常に少ないということなのです。それはどういうわけかというところ、皆さんが望んでいるようなことが結局はできなく、かえって上からの指令によってみんなが動く。自主性のない、いわゆる号令によって動く集団になりかけていく。そうかといって、それではそこから抜け出して、小さい自分の仲間式のものをごしらえて、それで満足しているかというところ、ある点までいくとそれは何か自分たちを非常に弱めているものではないかというふうな疑いをもってくる。うまくいっていると思いつても、今度はその中に運営の關係上リーダーを選んで、その方に責任をもってもらう。しかもそれを交替制ということにしても、うまくいかななくて抜けてしまいう人がいる。今朝堀山先生がおっしゃった、いわゆる派閥主義というのが出てくるわけでしょう。こういうところまできたのですが、今日のお話し合いによって皆さんが大体幾つかの集団があって、どういうふうなことが期待され、またどういうふうなことが行われているかということがおわかりになった。そうして今度は次の会議でもう少しこの問題を掘り下げて、今まで話し合いということがたびたび出て参りましたでしょう。その話し合いというのは一体どういうことなのか。何を話すのか。ことに自由な話し合いということになりますと、今、小川さんがちょっと解れましたけれども、人の問題になってくると、なかなか自由にならないでしょう。どの点まで自由なのか。どの点まで自分の考えというものは押えていかなければならないのか、それに伴ういろいろの責任、そういうことをもっとと具体的に話

してみましょう。あまり間口を広げてしましますと、経験したことだけを展開する報告会になる。報告会ではないのです。皆さんの今まで経験していらしたことを土台にして、今後どうしたらいいか、どういうことを考えなければならぬかという一つの方向づけを行うことなのですから、そういうふうにご考えていただかせませんか。それでは明日は移動会議ですから、あさっての朝、皆さんにお目にかかります。どうも長い間ありがとうございました。

#### (第一日閉会)

坂西 今日が残念ですが、私は十時から重要な会議がありまして、ちょっと中座いたしますので、その間評論家の西澤子さんをお願いいたします。

一昨日のお話をまとめてみますと、最初に、一休集団というのはどういうものであるか、その集団の中にあつて皆さんは個人としてどういうことをしていらっしゃるか、問題はどのくらいにあるかという、そのきっかけをつくるために、話し合ったわけですね。集団には、大きなものから始めて小さいのまでいろいろあるけれども、その中で自然発生的な、自分が選んで入ったものでない集団があり、次には、成長するに従つて、御自分の考えをもって自発的にお入りになったものがある、もちろんその間に中間のがあります。その集団の中で全く個人、自分がある点まで埋



没しなければどうにもならないような場合がある。たとえ  
ば二十数年も自分は一つの理想をもっているが、じつと  
だまっていることによって和を保って、そして最後には勝  
利を得たというお話がありました。またある方は、その中  
にありながら、自分の意見を徐々に出して、その意見が聞  
かれるようになるまでの準備工作というものを一生懸命し  
たというお話もありました。しかし、個人が埋没してい  
るという時代は、今のところ大体過ぎて、私たちは自分が希  
望するならば、また自分が努力するならば、集団の中で自  
分の意思というものがだんだん通っていくという段階にあ  
るのではないかと。そうしてまた今度は大きな集団にな  
ると、御自分の考えで入ったのですけれども、やはり指導者  
といいますが、リーダーが出てきて、組織が非常に大き  
くなったために、個人の意見が結局ないがしろにされてい  
るのではないかと。それについてもう一度その集団というもの  
を小さく分けて、再出発したという方がありました。それ  
からまた協力が得られないときに、「なぜか」ということ  
を考えて、今度はあとから来た人が、自分たちのきめたこ  
とについていけないのだということがわかったときに、そ  
の新しい人たちを入れて、もう一度問題を練り直して出発  
したというような、非常に建設的な御意見がありました。  
こういうふうに考えてきますと、今日取り上げなければ

やる方がある。

#### 組織の必要性

飯田 私、エゴイズムなのでしょう。隣近所のグル  
ープはもちろなくないという気持が強いのです。私は隣近所と  
いう制約でなしに、広い地域にわたって同じ目的で、グル  
ープ作りをもとくと、私が主力になっていていたしておりま  
す。しかし、隣近所という集団は必要でないとは言いがた  
くないので、いまちょっと必要であることを感じ始めており  
ます。というのは道が悪いものですから、それを直すため  
にみんな考えなくてはならない。それには婦人たちが組  
織を作らなければならぬということを感じ出しておりま  
す。しかし隣近所が集団をもつということがうちの場合  
はいろいろの階層がありましてびつたりいきません。

原田 それに私反対意見なのです。私の属しております  
福祉会は、弱者の保護、児童の福祉、それから環境の浄化  
ということが目的になっております。一番初めに会に入り  
まして私たちが、何をしたらいいかと考えましたときに、  
福祉ということが皆さんの幸せを折ることだったと、それ  
を今まで通り委員長さんだけのお考えで、その福祉会を発  
展させていくことはいけないのではないかと、まず皆さんの  
意見を、上の方へ反映させることが第一だと考えたので

ならない問題は、皆さんにも御相談したいと思いま  
すけれども、話し合いということ、話し合いによって理解  
してもらおう。そしてまた基礎を作っていく。それでは話し  
合いということ、皆さんがどういうふうな考えていらっし  
やるか。お書きになった文章の中に、「自分の思っている  
ことをさっくばらんに言う」ということがあるのです。そ  
ういふことができる場合とできない場合とあります。そ  
話し合いというのは、何でもかんでもそこへみんなぶちま  
けることか。あるいは皆さんの経験あるいは知性というも  
のをもつて、これは言っていること、これは言っていないこ  
と。話し合いの限度と、内容、これは皆さんがいろいろ  
の経験をしていらっしやると思う。

それでは今朝の問題として「話し合い」ということをい  
ろいろな角度から、話し合いをしていただきましょう。集  
団が必要だということは皆さんは認めていらっしやるいまし  
ょう。今日の世の中で個人の生活、自分は一人で生きてい  
かれるという人は一人もないと思うのです。集団の一員に  
なる。それに入ったという責任を感じて努力して、もつと  
いい社会を作っていくこととするということ、もう皆さん  
おわかりですね。しかしそういう集団というものは全くい  
らないと割り切っている人があるのではありませんか。そ  
してまた皆さんの中にもそういう経験がなすっていらっし

す。そして皆さんにお話し合いを呼びかけた。それはなぜ  
かと申しますと、自分が会に入りまして考えたことが、発  
言ができなかったのです。

飯田 そうしますと、問題はいろいろの集団があります  
けれども、それがほんとうに必要かどうか。必要とお考え  
になる方もあるし、ある点までは必要でないとお考えにな  
る方もある。大きな集団あるいは御自分が選んで作るグル  
ープというものは必要であるけれども、何もあえて隣近所  
のつきあいというものの中に自分が入って行って協力する  
必要もない。そういうことは大体において個人で解決でき  
ると思っていられる方もある。これも今日の討議の問  
題になりましょう。それから原田さんがちょっとお触れに  
なったそういう集団の中においてのあなたの自由というも  
の、あなたは自由に発言できますか。あるいは集団の制約  
というもの、非常に強固になったので発言できない場合が  
多いのではないかと。あるいはその裏を返してみますと、今  
度はある上層の、それを支配する人の発言が非常に活発に  
なって、そしてあなたは、ささようではあります。では  
その通りにいたしたいと、ささようではあります。では  
ないでしょうか……。

土屋 先ほど飯田さんのおっしゃった隣近所と話し合い  
をもたなくないという気分、それは都市における共通の問

題ではないかと思ひます。私は昨日祖師谷の集団アパートへ参りまして、それからあと新宿生活館へ参りました。そうしたらそこでフリーニングを市価よりずっと割安でやっている。そこで夕食会のとときに、そういうふうになくてもやってくれるならば、あまの希望をまとめてそういうところへ注文するなり、注文取りにきてくれるように交渉するなりしないかというふうな意見をお出しになった方があるのですが、みんなが結果して注文出せばいいん経済的にも得することがわかっていても、対人関係のわずらわしさというものを、特に都会人は近隣に對してもっているのではないか。それでそういうことがわかっていてもみんななさらないのではないかと思ひました。やはり私たちの地域でもそういうことが非常にあります。

村上 団地とか、社宅とかいうところに住んでおられますと、御主人方のお勤めが大体わかりますし、社宅なんかだつたら特に夫が同じお勤めですから、地位も月給もみなわかつてしまふ。それで人間関係がかえって冷たくなるのではないでしようか。夫の地位がつまり妻の地位というふうな感情が底に流れているように……。人間的には皆さん善意をもっているわけですが……。それで近所同士のお話し合いがむずかしくなりますけれども、やはりそういうふう

の住宅街にも当てはまることだと思ひます。

横関 集団を造るということは自由なものです。いろいろな集団があつてもいいし、集団に無理に入らなくてもいいのです。隣同士というような集団は、個人として人間生活をしていく以上、集団の方でなければ解決できない問題がたいていある。やはり、そうした集団にうまくとけこんで、自由に発言できるということは責任ももてていいではないかと思ひます。

西 坂西先生は一時間ばかり中座なさいますので、その開詞会をさせていただきますから、御遠慮なくお続けください。

土屋 先ほど村上さんが、社宅において近隣関係は同じようなレベルだから冷たくなる。そこで話し合いの場をもたなくてはいいかと申されましたが、どういうふうな話し合いの場をもっていくかという問題ですね、私たちは子供がおりますから、ずっと近所隣、子供のことから仲よくとけあつたのです。

横関 私は民生委員をしておりますが、私の担当のところの未亡人が四人の子供を育てながら生活保護をうけて、ほんとうに苦しい生活をしています。その方は非常に身だしなみがよくて、一〇年も前の着物を毎年仕立て直してきれいにしている。子供の服が破れても小切れでアップリケ

な近所同士の小さなグループが発展して大きなものになっていくのがほんとうではないかと思ひます。

河野 先ほど飯田さんは地域のグループに入りたくないとおっしゃっていましたが、地域には階級の違い、教養の違いなどがあり、グループをつくるのは努力がのぞましいと思ひますが、私たちが自分の子供を育てる場合に、うちでどんなにこういうことはしてはいけないとか、危いからしてはいけないといひましても、御近所のお子さんがなされれば、すぐうちに帰ってきてきまねる。自分だけの家庭の孤立はできないということをつくづく考へております。遠いところの方と結ぶということもいいですが、地域の近隣集団も大切だと思ひます。あつう住宅街でしたら、いろいろな方が住んでいらつしやいますから、夫の地位とか立場ということとは問題にならない。私のいま申し上げるのは、社宅とか公務員宿舎という、同じ会社なり官庁なりに勤めているものが住んでいる場合にとかくおこりがちの人間関係の冷たさをどうして解決したらいいかということを考へるのです。みんな自分の穴へ入つてしまふ。穴から抜け出そうとしない。知識階級といわれるほどそういうことが感じられるのです。夫の立場とかいうものは、家庭に帰つたらもう同じわけですから、そういう殻を捨てて、やはり近所同士、隣同士、話し合つていくべきで、これはもちろん一般

して、体裁よくきれいにしている。ときには私のおこづかいをさいて、パーマをかけさせるのです。すると御近所の皆さんが、あんなきれいな着物着て、パーマをかける金があるなら、生活保護のお金はもううべきではないと、悪口をいうのです。それでその人は、私たちは破れたきたないものを着て、頭もぼうぼうにしてなければならぬかというのですが、近所というものはもっと暖かく助けあふものだと思ひます。

西 ききほどから集団の中の近所隣りの問題ということですが、話が進んでいると思ひます。近所隣りの集団というものは、作るものでなくて、そこに住めば、近隣社会という集団の中におかれていくという状態が近隣社会だと思ひます。その中でなおもう一歩進んで、それではおつき合いというものが必要か必要でないかということが出ていきましたが、どうでしょう。

村松 つき合いはいままでにしてると思ひます。近隣社会は自然発生的な集団だけれども、それを自然発生的な集団からはっきりした組織にしていくことが必要だということも私は感じました。それを周囲の人たちにも感じてもらふには、話ではだめで、行動からやっていた。たとえば子供の問題ですが、お互いにどの子供が悪い、うちの子がいいと思ひている。親たち同士話し合つてみなければ

ればならないけれども、いきなりそんな話をしましようにも、いって、だれも集まらないのです。それで子供たちが遊び場もなく、家も一間で困っているの、広いお家をお願いして、まず子供の幻燈会をやったりして、一人々々だの子供がけんかをやるばかりで手を焼いているけれども、一緒にいなければどうやって楽しく子供を育てることができるといふことを行動でやっていたのです。だんだんお母さんたちも世話を焼かなければならなくなっていて、お母さんたちの教育の場面もできてきて、まだまだやり出したばかりのところですが、だんだんと、いままでの、ただりるさいおつき合いではなくて、みんなが必要を感じつつあるというふうに向かっています。

**飯田** 自然発生的な集団においてグループを作る必要があるとみなさんがおっしゃってまうけれども、私は都会的エゴイズムかと思いますが、あまり好きません。それではそういう自然発生的の地域の集団をどのように正しくあるようにすればいいかといいましたら、それは人間社会のルールというのがありますね。よき市民としての心がけねばならないこと、そういう責任感でその自然発生的な地域集団をうまく生かしたいと思うのです。そしてそのよき市民としての教養というのですか、そういう責任感はどうして育てていくかということが問題なのですけれども、それは

やっぱり母親が勉強して、自分自身の責任感を育て、子供を教育して、人間社会のルールを育ててゆきたい。グループというような話し合いをもたなくても、自然とそういうふうになりたいと私は思います。理想論ですけども……。

**西** 飯田さんと村松さんとの間に、おそらく考えていらっしゃることはそう違わないと思いますが、一つ、これは坂西先生もお出しになる問題かどうかわかりませんが、実際問題として考えましたのは、近隣社会の中でみなさん方何か話し合いの場をもつためにグループなり、その他の何かの形の組織を作りたいという声があるわけですね。しかし一体近隣社会の中でそういう組織というものを作らなければならぬのかどうか。組織外の問題で近隣社会の中の個人の生活を確立していくべきほかの問題があるのではないか。そのところどうでしょうか。

**高橋** 私は組織を作る方がいいとは思わないのです。私の町にも町内会ができていて、そこに子供会などもあるのですが、組織となりますと、人間関係が冷たくなる。単に親しい人とおつきあひしていがる方がいいと思う。

**松井** 集団も組織も、結局は私たちの人間的な判断力によるのではないかと思うのです。私たち発狂人ですが、発狂人というのはとてもむがむのです。知的な判断をしない。理論的に考えないで、感情で判断して、至んで受け取

っていることが多いのではないかと思います。組織というものにはあつてよいが、その中で個人というものの確立、自覚というものが、社会的な判断というものは実に重要ではないかと思っております。

**国領** 私のところも別に組織はできていませんが、日曜日にはそろって外を掃除いたしましょうということ、自然にうまくいっております。そんな組織は必要ではないと、私も飯田さんのように思うのです。

**村松** 私は、組織が必要でないという方の気持ちもわかるのですが、おそらく地域の環境が違ふと思うのです。必要を感じなかったら無理に作る必要はないと思いますが、私たちの方の環境では、単に二、三軒仲がいい、それではまな問題がたくさんあるのです。組織を作ると人間関係が冷たくなるとおっしゃいましたが、私が組織を作れというのは、決して人のためではない。みんなの自覚をうながして、みんなが団結しなくては自分自身の自由もかち得られないから、そのためにどうしてもほんとうの組織が必要だ、みんなが自覚をもった集団といっても、一人々々の自覚をうながしていくものが何かなければならない。そういう意味で組織を必要だといっているの、町会なんかのことをいっているのではないのです。

**飯田** 私は町会なんかの組織はここで問題とされる話し

合いのグループではないと思います。私の方にも隣保班がございまして、役場からの伝達、税金の配布とか、そういうことはやっております。そういうものをここで取り上げる話し合いのグループと認めていないのです。

**西** でも認めていらっしやらないでも、町内会隣保班というものがあつた。それがやっぱり自主的な自発的な近隣社会の一つの集団でなくても、何かそういうものがいつの間にかできていて、できている以上、近隣社会の中で作用しているわけですね。その作用しているものに対してみなさん方一人々々近隣社会の住人として、その集団の個人として、みなさんどういう発言があるか。あるいはそこでまたすべてを悪いとしないで、そこでどういう役割を果たすことによつて近隣社会でいい生活をしていらっしやるかということ、一つ問題として出していたらどうかと思うのですが、また、近隣社会の中の組織の問題、それから、その中における一人々々のあり方の問題ということについて、ちょっと話を進めてみたいと思います。

#### 組織の中の個人のあり方

**加藤** 私、考えますのに、自主性と愛憎があれば特に組織を作らなくても、何かしなすうといつてみんなの判断でいいと思つたら組織がなくても、いいことに對してし

ようという気構えが起ると思うのです。お隣り同士のおつき合いは、その空気のやり方というものを重んじて、それには立ち入らない、あとは愛情関係で、お互いに高め合う話は自然にできると思います。それを拒んで殻の中に閉じこもってしまう方もあるかもしれませんが、そういう方も、長い間にはお隣り同士金銭授受というわけにいかないから、何かのきっかけからいいおつきあいができるようになると思います。

河野 私も町内にも関係班のような組織があります。そしてお庭やら不幸があった場合の人手がほしい時は行って助け合う。

村上 近所づき合いという話でましたが、あまりに私生活に立ち入り過ぎると問題が起ると思うのです。ですからそこをよく考えて、ある一定の線を引いて、あまりクツ手し過ぎないようにする。

村松 おつき合いではなくて、組織が必要だと申し上げたのです。はっきりした組織がある場合にはその目的があるわけです。集団の目的のこと以外は私事であって、それが何とおうが、それが組織の目的に反しない限りはだまっていわれておけばいいのだし、人の悪口をいう必要がない。そういうことにだんだん慣れていくことからあっさりしたおつき合いになれると思うのです。自然発生的なもの

らかの形を通じて地域社会の改善というふうなものをやらなければならぬということ、みなさん御意見が一致しただろうと思うのです。その場合に、その組織作りをどう考えていくかということについてのアドバイザーは坂西先生の持ち分のことですから、私はそのことについてここで結論を出すことを避けていたでいて、バトンをおあとで先生に引き渡しますが、その考え方を、どこに焦点をおいたらいいかということをお出しただくようにお願いしてみようつもりです。そこへもって来て、今度はさらに松井さんの方から、とにかくいろいろなことがいわれているけれども、結局近所はうるさいものだというふうな気持があって、きれいな言葉でいっているけれども、みんなそういう気持があるのではないかと、だいが御賛成の手が上っているわけですね。しかしうるさいからといって、その近所づき合いというものを止めてしまっても、自分だけが逃避できる私たちの毎日の社会生活であるかどうか、ということがまた問題になってくる。それを繰り返しておきますと話が長くなりますから、そのうるささというものをどうして私たちは少しでもよくしうか、というふうなことへまた戻っていただきましょうか……。こういうことによつて、うるささというもののからがれるのではなくて、一歩突っ込んでいって、そこへ取っ組んでい

を自然発生的にまかせておけば人間関係が非常にむずかしくなる、それを意識的に、近所同士に住んでいるという共通の目的でもって組織にした方が、私の体験からいうと非常によかったということです。

松井 みなさんのお話を私非常に感心して聞いているのですが、何か端的にいって近所づき合いのうるささはいやになつていらつしやるのではないかと思われますが……。

西 ここで整理します。つまり、飯田さんと村松さんとの、地域社会というものの、集団というものと、それからその中の組織というものの解釈についていろいろと違いが出てきていると思うのです。それでおっしゃる通りに地域社会は繰り返すまでもなく自然発生的な集団である。しかしそれまでは地域社会の生活というものは、もっとも近代的なものにならないし、改善しなければならぬものもある。それをするためにはどうしたらいいかということ、ここで村松さんから出された、自分たちのまわりのものから手を結び合つてグループを作った。そのグループの話し合いの中から自分たちの住んでいる身近な問題をよくしていこうとしている。そういう実践をしている。その他の方は自主的なグループではないが、近隣で隣保班組織、町内会組織を通じてそういうことをしていられしやるということもある。それぞれニューアンスは違いますが、何

って、自分は克服しながら少しでもこういうふうによくしたいということを通じて一つ話してくださいますか。

小川 志な、私は疎開したときに、近所がうるさくて逃げ出したいくらいでした。幸い私は、洋裁も和裁もいたしまから、そのうるさいのをなくすために、御近所に奉仕する意味で安く仕事を受け合いました。こちらからとけ込んていくことが必要だと思ひまして、そういうことは長い月日がかかりますが、そういうことによつて御近所との人間関係をうまく結んで、うるさが今大体なくなっているようです。

平川 私も小川さんと大体同じ意見ですが、たとえば内職するとか、本を読むとか、自分の趣味というものをもつてそれに自分の身を打ち込めたら、他への干渉が少くなると思います。

西 うるささからのがれることは絶対にできないのではないかと、それを克服していく以外ないと思う。それをどういうふうになさったか。うるささということが昨日からの討議で出ていなくて、というよりか、目前ではしななければならぬから、それと取っ組んだという例は出ておりましたが、そういううるさいというふうなことにまで、人間の関係ですから突っ込んでいって克服なすったということが一つでも二つでもあれば、何かの御参考になると思つて、

ちょっと問題を出してみたのですが、どうでしょう。

鎌田 私は、近所の方がどうお思いになるだろうかということも少しも考えないのです。私は主人の生活が衰えておりまして、朝と晩と違っておりまして、一二時まで雨戸を締めて休んでおります。皆さんがどうお思いになるだろうかということも考えませんし、二人で映画見に行くのも、いなかのことですから何とかおっしゃるのかもしれない。せんが私はそういうことは気にしません。

竹中 私が考えますのに、うるさいと考えることは、その人の考え方によって違うのではないかと思います。これは私の独断的な考え方かもしれませんが、組織は社会生活をする上の近隣の組織なので、そういう意味においては、近隣の人たちと一緒にしなければならぬことは私たちが当然しなければならぬのですけれども、私には私の生活がある。私たちの周囲をそれぞれ向上させるグループがあるのだから、近所の人に近所づきあいが悪いといわれることはかまわないと思います。社会人として、たとえば私でしたら広島市民としてすべきことをしてないのである。さういわれるならば、それは当然しなければならぬのですから、それはうるさいと考えるので、当然と考える。そういう意味で、意識の両方の方に相当関係があるのではないかと思います。

したものが必要だ。自分もそうだけれども、従って他人の生活に立ち入るものではない。のぞき見したり、干渉したり、いろいろとそういうことが非常に近隣社会の集団生活と個人の問題の中で考えなければならぬのではないかと。いうふうな意見が出ていますね。そのほか近所の方に奉仕するというような気持も大事ではないかというふうなことも、いわゆる個人の自由と責任ということに關連して考えてみなければならぬと思うのですが、立ち入らないで、しかも近隣社会の問題をよくするためにどうして話し合いをすることができるとかということも一つ考えなければならぬことだと思ふのです。具体的にどこで一つ何か出していただきましょうか。

村松 近所がうるさいというのは、その方の環境の相違でいろいろな意味があると思うのです。私の言うのは、隣人としての近所のうるささということなのですが、実はついこの間、学校のお休みのときに中学の女生徒と男生徒の交際のこと、家の近くにお母さん方がみんな働いている中学生の娘さんが三人いて、そこへ学校のお休みに男の子たちが遊びにくるわけですが、みんなお母さんがいないものですから、うちへ入って遊びなさいということがいえないで、道路で遊んでいるわけです。思春期の子供たちですが、

村上 都会では完全に「隣は何をする人ぞ」で暮らしていますが、田舎ではそういかにない現状です。近所の方を全然かえりみないで、自分一人て立っていくということは非常にむずかしい、それがまた深刻化しますと村八分とか、町内八分とかいう問題にまで発展するような場合もありまして、なかなか自分だけということでは考えられない複雑な問題がからんでくるのです。ですからやはり、その近隣の中へとけ込むということも大へん必要なことだと思ふのです。

加藤 私は、人は人、自分は自分という考えをもって、うるさいというのは相手がうるさいことですが、何か書きたときには同調したり、他の方がうるさいことをおっしゃっても、私はそうは思わないとか、私はこう思うと、自分の意見をはっきり出して終止符を打てば一応そこでどまる問題が、そこで同調しちゃうと、又ぐるぐる回りしてうるさくなるのではないかと思います。

西 ここで整理しますが、うるさいという問題が起きたのでいろいろ話が出たのですが、結局皆さん方の話を聞いていますと、グループをもつにしても、いろんな既成の近隣社会の集団の問題にしても、お互いの態度というのが一番問題である。その中には近所がどう思おうと、自分は自分の生活というふうな、自分の生活に自信をもった毅然と

ら、ほんとうにお友だちみたいにさっぱりとできないで、せつなく遊びにいったいながら女の子の方が三人で固まって逃げていく。そういうことを毎日々々繰り返しているものから、私たちの方のグループで、月例会のあるときにそのことが問題になったのです。ほとんどの人がみんなそれを知っていて、お母さんは知らないのではないかと。お母さんがいないのだから、お母さんに知らしてあげたらいいではないかというふうな話が出たのです。それまでは、そういうめんどくさいことにはぶつかると、そうと目をつぶって避けて通るというふうだったのですが、それではやっぱりいけないのではないかと。私生活に立ち入るとかいうことでなくて、やはり大きな問題だからだまって過ぎたのではないのではないかと思つたのです。ただ、お母さんに注意するのは待ってもらいたい、もう少し方法を考えるからといって、そして会が終わって表へ出たら女の子が三人いるわけです。それで、幼稚園やから手伝ってちょうだい、あなたたちのところへ遊びにくる男の子たちにも手伝ってもらいたいけど手伝ってくれませんか、といったら、お母さんたちが変なことというからいやだというのです。いろいろ話したら、そう言ってくれるのはお母さんだけだ。「よしみ会」という私たちのグループなのですが、「よ

しみ会」でいろいろ問題を私たちのお母さんたちも呼んで、近所のおばさんたちも私たちも、みんなで話し合ってくれないかと、子供たちが言うのです。それでいろいろのことがあったのですが、結局お母さんたちに話すよりも先に、その男の子と女の子たちを私の家へ呼んで、子供たち同士で話し合いをさせて、その話し合いの記録を持ってお母さんのところへ話しにいったらわかってくれました。私つくづく思うのは、もし組織がなかったら、そういう話し合いの場がなかったら、私が単なる近所のつき合いだったら、思い切って子供たちに話し合いをしたいかということさえ呼びかけられなかったらどうけれども、子供の方からおばさんたちそうやって集会をもったのだったら、私たちの問題を取り上げてもらえないかと言いつたということとはとてもよかったと思つたのです。お母さんも理解してくれましたが、そのときに、私たちが討議だの、話し合いのするのは、一人の考えというものがあやふやなものだから、みんなで話し合うことが必要だ。あなたたちも困ったときはいつでもお母さんたちでも何でも相談するようにといいことはよく言っているようなわけです。うるさいからそんなこといいわなくて、だれも放っておけばいいというのはいけないことではないか。これは立ち入るとい

情で迎えるようにお願いしました。非常にその子もうちがあなたかといふことに感謝して喜んだのです。

河野 私どもの近所にもそういう例がありまして、お母さんがちょっとノイローゼぎみになって、子供さんを二人おいて実家に帰ってしまったわけですね。お父さんは小学校の三年と五年ぐらいの子を二人かかえられて、そのころ失職中だもので人夫していたのです。ニコヨンで朝出ていって夕方帰っていらつしやるその間近所のお母さん方が自分の子供のつもりでめんどろをみてあげたのです。どこまで立ち入るかという問題は、私は自分の子供が同じ境遇になった時にはこういうふうにしてもいいという、気持ちでやっただけではないかと思うのです。

西 それでは今、近隣社会の中のいろんな問題が出ていて、それで相当時間がたっているのですが、もちろんこれは近隣社会の問題だけではありませんから、もっとほかのグループの問題の中のことでもいいし、あるいは家庭の中の問題ですべてに通じて、さっき坂西先生があげられました話し合いというものについての考え方とか、それからまた集団そのものについての考え方とか、あるいは集団の中のいわゆる自由個人のあり方の問題とか、そういったこととでいろいろ話し合ってきたらどうもけっこうだと思いま

すから、どうぞ御自由に……。

ことではないと思うのです。

西 今、村松さんから立ち入らないということ、それから立ち入らないということはどういうことかということ、自分の身近に起った問題について、うまく話をなさった。その例が出てきたわけですが、またお互いの生活の中には、ほんとうにいい生活ばかりの方ではないので、いろいろ問題をもっている家庭も相当あると思うのです。そういう家庭を近隣にかかえていながら、組織の中でやはり話し合いをしていかなければならないということは、大へんむずかしいことですね。そのとき目をうつぶしてしまえばそれで済むかもしれませんが、目をつぶれない問題が、やっぱり地域社会には起ってくる。そういうむずかしさをかえながら、どう話をしていったらいいか。一つの例が出たのですが、それと同じような何かほかの例がありましたら出してくださいませんか。

横関 私の近所の、一八才の子がちょっと不良化しまして、問題をおこしそれが警察に知れて、児童相談所に入つて二カ月ほどの保護を受けて帰ってきたのです。その子の家庭をじっと眺めますのに、その家庭は兄弟五人ですが、その子に対しては愛情がない。そのためそういう結果が出てたのだと思うんですが、その子の帰ってくるのを児童相談所から聞きまして、おうちの方に相談にいき皆さんの愛

#### 話し合いの自由

竹中 私は職場におりまして、どんなに話し合いが必要かといふことを身をもって体験したといえるのではないかと思います。その一つの具体例をとりますと、私たちが手術室に勤めて間もないころに夜の急患にしばしば起されました。冬時分でしたので、手術室に蒸気がほしかったが、ボイラーの人が快く協力してくれない。一、二カ月過ぎまして、これはどうしても解決しなければならぬと思つて、その間いろんなことがありましたがはがいて、結論を申しますと、ボイラーの關係の庶務課長さんに、実は私たちはこういうような状態で困っている。私たち一緒に話し合いたいと思うが、その機会を作ってくださいとお願ひして、その機会を作っていました。そこでよく話し合っていましたら、おまえら言ったらすぐ逃げるじゃないかといふのです。その間にほんとうに私たちの言葉の足りなかつたといふことを痛感しました。それと私たち自身が個人的な触れ合いをして、お互いにその人の立場でよく理解したときに、そういう話し合いもいい具合にいくのではないかといふことを痛切に感じました。

西 今、竹中さんから職場の中の暖房の問題で、ほんと

うにそれが必要であるならば、どこまでも自分がその必要なことを主張して、それを相手にわからせるといふ、そういうふうなわからせ方というところについて反省して、言葉が足りなかったのではないかと、そういうふうなことが出てくるわけですね。そういうふうなことでほかにもまた例がありまじたら……

河野 私は小さなグループを運営して、話し合いの訓練が足りないのではないかと思っています。話して、語り、一人の方がとてもたくさん発言なさったり、自説をとってもまげないという方が出るのです。お互いの意見というものは、それが確実だというものではない。たくさんさんの意見が出ていいと思うのですが、どうしてもそれと一緒にしようという方がある。まとめなければ落ちつけないというわけですね。又、中には自説を主張なさる方の反対に、どうしても、いくら発言をうながしても徹頭徹尾だまってる女のの方がとても多いわけです。話し合いの訓練が足りない。そのような訓練は家庭の中でみんなが話し合う態度を養っておかなければならないのではないかと、いうことをいつも感じております。

村上 家庭とか、皆さんが目的を同じくして集まったグループでは話し合いが非常にスムーズにいきます。しかし大きな集まり、婦人会とかPTAになりますと、集団の庄

たれるのです。その三〇円寄付することに反対を唱えまじたのは私一人で、結局可決されてしまいました。私はもつと皆さんいろいろなお考えがあるのだらうと思うのですが、それをあまり発言なさらないのです。それというのでも何か言ったらにまれないか。そんなこと言ったら学校の先生が自分の子を悪く扱わないかというのを考えて、発言をなさらない。それで私は、これは多数の暴力ではないかとつくづく感じました。話し合いのむずかしさということをお大へん感じております。

西 今、村上さんから話し合いのむずかしさについて、具体的なPTAの例が出たのですが、その前に竹中さんとか河野さんあたりから、そこを通り越して話し合いができる段階に入って、訓練がもう少しほしいとか、あるいは言葉が足りなかったというところで、それさえ補えばそこで話し合いができる。そういう環境をおもにならないうちのすらが、村上さんの場合はそういうものではない。もっと手前の状態があると思うのです。発言ができないという、そういう状態についてもう少しここで話し合ってみたらどうでしょうか。なにがそうさせているかという事です。

小川 志 志 私の子供の行っている中学校では朝礼が四〇分くらいありまして、五月ごろになりますと、一年生に上

力みたいなのを感じまして、なかなか思うように発言できない。それが今、河野さんのおっしゃったように発言の訓練ができてないという点もたくさんあります。たとえばこういう例があるのです。PTAの会合で、カーテンがいたんでしまったからこしらえ直すため、子供一人について三〇円ずつ寄付をもらおうではないかという動議が提出されたのです。そのときに皆さんだまってるというので、私はそれはおかしいではないかと思つた。それは四月早々の集まりでしたから、PTAの次年度の予算にカーテン代は組まれているはずなのに、どうして新しく三〇円ずつ寄付を集めるのか、それを不思議に思つて尋ねてみたら、わずかなPTA会費でカーテン代なんか組み込めない。カーテンはこの通りいたんで、暑くて子供が勉強できないからぜひカーテンがほしいというので、先生方や一部の最高役員によってきめられて役員会に出されたわけです。お金はわずかに三〇円ですけれども、子供一人頭三〇円ずつということは、出せる人もいるけれども、出せない大ぜいの人がいらっしゃることを忘れていたのではないかと申し上げたのです。私たちは自分たちだけの役員ではない。何百人かの会員から選ばれた代表なのだということを考えなくてはいいでしょう。と申し上げたら、それはあなたには子供に対する愛情がないからだ、すぐ感情論でこ

った子は忍耐力がないので倒れます。私の子が倒れたわけではないけれども、倒れた子の母さんが長い時間立たせてるのはかわいそうだと、涙をこぼして言われるものですから、PTAの総会の質疑応答のときにそれを校長先生に申し上げました。そのときはそれで終ったのですが、あとで役員の方が参りまして、小川さん、よくあんなことを言える、自分の子供の成績のことを考えないのですか、と言われまして、私は非常にびっくりしました。そういう困ったことを学校で話することは悪いことでしょうかと言いましたら、私も役員だつてなかなか校長にはそういうことはいえないといわれまして、それから私はいろいろな会合に行きましてもだんだん口をつぐんで、めんどくさいからだまっていようというふうなことになつてしまいました。それではいけないと考え直しましたが……

小川 志 志 私も経験したのですが、集団の中で自由に発言できない理由が二つあります。一つは身分的なもの、だれれさんがこう言つたというふうなことで、一つは多数決だと思います。

東京に出て参ります前に都合があつて、いろんな方にお目にかかった。地域婦人の方にもお目にかかったのですが、その方もそういうことをおっしゃつたのです。口うるさい町の中で、社会的地位をもつた方が発言するのはいい

のですが、そうでないときには、あそこのお嬢さんはこういうふうなことを言ったというふうなわけで、口ざたされとんでもないことだというふうな見方をされる。それが恐しいために発言が封じられるのです。ですから言いえしななければいいという気持ちがある。そういうものが一般に発言を封じていると思うのです。もう一つは多数決ということですね。大勢が一つの方向に傾いていくと、さっきの村上さんの御意見のように、自分はこれが正しいと思うし、こういう考えをもっている人がほかにもあるはずだと思っても、それが言えないのです。多数決というものは民主的な方法かもしれないけれども、そこに大きな問題があると思うのです。それをどんなふうにしていったらいいかと思うのです。

西 今、小川さんから、自分が属していच्छる集団の中から得られた経験として、発言できないという理由の一つに身分的なもの——というのは封建性というふうなことになるでしょうが、地方的なものも相当あるだろうと思いますね。そういったこととそれから会議をやる場合の多数決の問題が出たのですが、これはいづれまた最後のまとめのところで非常に大きな問題になってくるだろうと思うのです。多数決とは何か、多数決に従わなければならないかどうかというふうな問題も、集団と個人の問題で、一つ

の大きなテーマですから、坂西先生にバトンをお渡しすることにしたしまして、午後から一つお話し合いになっていただきたいと思います。もう少しここでは、発言を阻むものは何かということでも問題を拾い上げていきたいと思えます。

村松 私たちの、話の技術の下手ということもありですが、まず第一に自分の意見を持つということが大それたと思えます。それともう一つ、非常に大きな目に見えない圧迫があるのです。たとえば暮しのことで、自分はこんなに働いてもどうして苦しいのかということも話していても、うちのお父ちゃんの会社はこうだ、こういうふうにしてくれればいいと思うのだけれども、——という話が出るのですが、その話の前には必ずだれにも言わないでくださいということを司会者がみんなに念を押して、みんな安心してつき合える仲ではなかったらそういう話もできない。いつ自分が不満を言えばクビになるかわからないということ。この間東京会議のときに、自由を阻むものは何かということの結論みたいなもので、結局経済的な条件と社会的な条件と、自分自身の中にあるものと三つあって、その自分自身の中にあるみえだとかそねみだとか、何か人の生活をちらちらのぞき見ながら、自分自身は人に規制されたくない、そういったようなものが一番じまになっていくとい

うことになりましたけれども、もう一つはこういうことをいったら出しやばりだと思われはしないかという考慮、それからたとえばPTAなんかでもよくするのですが、とても寄付が多くてやり切れない。そんなら陰で文句を言わないで困るといったらどうですか、というと、そんなことをいったら共産党だ、アカだといわれるからいやだということ。これはあらゆるところであると思います。これがほんとうに正しいものだと思っても、そういう圧迫がどこからかかってくる。それがあつた限り、大きな会合の場所でも生活の面でも絶えずそれを感じていくら正しいと思っても、生活を脅かされては困るから言いたいことも言えなくなる。お互いに仲間同士までも警戒しなければならぬというのをひしひし感じさせられているわけです。

西 村松さんの御発言は大へん大きな問題を含んでいるわけですね。社会的経済的問題になりますと、これはそれだけでも大へん大きなことで、わずかな時間では討議できないくらいの大問題ですが、その中で自分自身の問題というふうなことの御指摘があったわけですね。それに関連して先ほど村上さんと小川さんのおっしゃった、PTAで何か発言すると子供の成績にかかわるからという、お母さんは子供がかわいいからこんなことをいうと、先生からあなたのお母さんは変だと思われはしないかしらということ、で、

自分の発言が子供の問題にまでかかっていることを大へん恐れるというふうなお話があったのですが、これもちょっと村松さんのおっしゃった自分自身の問題、女自身の問題というふうなことにひびくか、もちろん大きな将来の入学とか、進学とか、就職の問題にもかかるかもしれないが、何かそこにお母さん自身のもっている自分自身の問題というふうなものもあるように聞いたのですが、こういうふうなあたりからも少し問題をときほぐしていったらどうでしょうか。

小川 選手 私のおさつきの身分的な問題というのが、それに関係あると思うのです。私は結婚してまもなく、こういうところへ出てきてえらそうなことを言ったりすることが結婚に差し支えるだろうというふうないう人もありますが、そのことに自分がひっかかってはだめだと思おうのです。自分が正しいと信じていることは自分の信念に従う。そのために、不仕合せになることがあっても、それは仕方ないことで、私はそれを甘受していこうと思っているのです。

#### 集団と個人の関係

坂西 大へん失礼いたしました。今お伺いしたところで一応私がまとめ、また皆さんの御意見を発展させていくと



いうことで、私が第二番目に出しました、組織は必要であるかという問題で、いろいろお話し合いがあったところで、組織というのは近隣の社会では何か事があったときに助け合うというのが根本なのです。必要もないのに人の生活に立ち入るといことは邪道です。ところが、結局は組織を作ればみんな一色に染まってしまい、私があなたの生活に干渉するし、それがまた順繰りにお互いに干渉してしまふ。それはいやだからまた組織をぶちこらす。ところが、さっき申し上げたように、組織というのは助け合いというが、もっと生活をよくするということを主にしていく。ですから、また必要があれば何かの組織がいるということになってくる。それでは組織は必要悪と見ますか、皆さん。ですから根本においては現在では組織というものは必要であるけれども、またなくてもいい、とお考えになるのですか。そこに問題があるのです。

小川 蓋子 私は必要だと思うのです。その中に悪があるとしたら、それは自分でそのことにあまりこだわらないで、自分をたよって行くよりほかしょうがないと思う。組織の中の悪は理想としてはなくないでしょうけれども、どんな年代が変っても、いつも残っているのではないかと考えております。

村松 私はいつも残っていくというふうに悲観的ではな

特に組織的なことは必要ないけれども、組織を作る下地があるから、何か問題があるときに、たとえば子供もったお母さんがすぐに集まって話せる体制にあるのです。ふだんは外灯費などを月当番で集めるだけで、日常の人の生活などを束縛する組織というものはない。けれども下地があるからいざ何かというときには、必要だと思う方は入るし、必要のない方はお入りにならない。もしこれが皆さん自分々々の考えをもっていらっしゃらないで、非常に無自覚な場合でしたら、村松さんみたいにそういう方々を目覚めさせるにはやっぱり組織が必要だということになります。

坂西 地域的のつき合いといいますか、これはやはり集団と見ていいのですが、ここには何も加藤さんのおっしゃるような組織がなくてもいいわけなのです。地域的に住んでいるということ、協同の問題をいろいろ話し合って解決することなのです。何と会長さんを選んで、昔のように隣組を作ってその人が指揮命令をかけるというふうなことはなくて、おっしゃる通りにばく然として、ただし問題が起きたときには必ず話し合って協同で対策を講ずるというふうな意識のつながりがあればいいわけです。

平川 加藤さんのように都市の場合にはそれでいいと思

いのです。今、人の生活に立ち入るとか、人をうらやむとかいふのは自分自身というものがなくてほんとうに無意味でしょう。自分というものが確立されてないから、自分が必要を感じたのでなくて、おつき合いでやるといふのがあからうるさいということになるので、もっとめいめいがほんとうに自覚をもって、しかも一人ではできないことをみんなと一緒にやっていこうというふうになったら、そんなことはなくないと思います。

坂西 悲観的と楽観的の御意見が出たのですが、組織というものは必要である。ただし現在では、という少し制約をつけましてね。現在では大体において組織というものがあまり他人の生活に深入りするために望ましくない。しかしこれは御自分をよく知ってその限界をはっきりつけることによって非常にたやすく克服できるのではないですか。村松さんのはそういう御意見でしょう。

村松 私は組織というものが個人の生活に立ち入るとは思わない。組織があれば他人の生活に立ち入らないようになると思うのです。

加藤 私の方の例をとりますと、一四の世帯で、一つの組織というはつきりした形をとっておりませんが、自分自身が自主性をもって自分の生活に自信をもつ。一応入っている集団のルールを守っていつて他人を犯さない。ふだん

います。それだけ一応あるレベルよりも上の人が集まって、意識が高から下地ができていますのですけれども、今の世の中には、それより以下の人がずいぶんいる。そのためにはだれか号令をかける人が現在でも絶対必要だと思います。その点、村松さんの意見に賛成です。

坂西 わからない人、自分の生活に対して計画性をもっていない人、うろろろしている人がたくさんいる。村松さんはそういう人を何とかして目覚めさせるために呼びかけて、組織とまでいなくても、何かの形でまとめることが必要だとおっしゃる。ところが、そういう人があるから、平川さんはだれかが集めて「号令をかける」という言葉をお使いになった。これは皆さん気になりますでしたか。

村松 号令をかけるということは、何か昔を連想させておかしいのですが、そういうことをおっしゃったのではないと思います。自主的な盛り上りと何かとかで、近所の集団というのは社会性の秩序を保つためにはやはり必要ではないのでしょうか。それで同じようなレベルの人ばかり持っていれば、さっき加藤さんがちゃんと横につながる下地ができていとおっしゃいましたが、やっぱりそうばかりもいれない近隣があると思うのです。

坂西 そこに問題がある。それを私は皆さんに話し合ってもらいたい。号令ではなくて、どういうふうにしてみん

なの意識を盛り上げるかという、そこなのです。

土屋 私のところでも地方会議でそれがとても問題になったのですが、そういった比較的上層の階級の人には組織というものを全然必要としないのです。下層といいますが、庶民階級ほど組織は必要である。それには割合に自覚がない人、時間的にも経済的にも余裕がない人が多いから、絶対に二、三のリーダーというものが必要であるという結論に立って、そのリーダーという方はやはり時間的にも経済的にも、組織を引っ張っていくためにはある程度の数養も必要であるという結論に達しております。

松井 号令をかけるとおっしゃいましたけれども、私はやはり、私たちは自分自身で自主的にこうしていきましようとして盛り上げるまでの段階に到ってないような気がするのです。ですからいいことでしたら号令をかけてくれる方があったら、考えて、納得したらすなおに受け入れたらいいのではないかと思います。

竹中 号令をかけるという言葉が気にかかるとはありますが、号令ではなくて、音頭をとるとか、みんなに呼びかける人、そういう人が必要なのではないでしょうか。

平川 そういう意味の号令です。

村松 どういうふうにして呼びかける、どうやって盛り上げてきたかということは、大体この前の目にお話したことが、その班長は、こんな連判状なんか持ってきて、だれが言い出したんだというところで、やっぱりまだにもたもたしてるわけですよ。今までの人は何かいうとすぐにだれが言い出したというところへきて、いつもる式に調べていくのです。そんなわけで私たち何も言えなくなってしまう。小さな組織でも、ほんとうにみんな自主的に盛り上げてきた組織があったために、だれが言い出したのだということも、私たちみんなが言うのだということでおしえてくれる……。

坂西 そこなのです。今、平川さんがおっしゃった「号令をかける」を、私が意地悪く取り上げたようにお思いになった方があるかと思いますが、私はそういう言葉の裏にどういふものがあるかというのを考えていたのだった。それを発展させてくださったのが村松さんです。村松さんのおっしゃることは共同の責任において事をやるということでしょう。あなたは集団の一人として、だれかが抗議したときに、あれは坂西のやつが発言したのだ、その次の人も、私は知らない、坂西のやつだということになると、私はその地域から締め出されてしまう。もし私が発言したのいい考えだったら、だれが発言したってかまわない、自分も責任を負うということではないか、そこなのです。もう一つ大切なことは、やはり目覚めた人は、平川さん

思うのですが、さっき小川さんがおっしゃったように、百人が百人同じにはいかないということも私も認めます。ただそれがレベルが低いとか何とかならずでなくて、どうしても話し合いではわからないという立場の人がいるわけです。近隣関係の中には職場の同じ仲間ではなくて、いろいろな利害関係の違った人が一緒に入っているわけです。ですから非常にむずかしい問題が起ってきます。私たちの方は、そういうのがないから割合にうまくいっているのですが、町会との関係なんかでも、たとえば街灯一つつけても、上の方から言ってきたことだけしかやらないわけで、下の会員からの希望なんかとても取り上げてくれないのです。班長をやっている人が全然話のわからない人で、何か言うとがんだ怒ってしまえばかりなものですから、どうしたらいいたろうか、直接行こうかというところもいわれていますが、それではまずい。私たちには班長を抜きにして町会長のところへじかに自分たちのをもっていくという自由はない。だけれども班長に私たちの意見や希望を伝えて、もし班長が私たちの希望を上へ取り次いでくれないような班長だったらそれをやめさせる権利があるのだから、もっと堂々と私たちの要求を言おうではないかというので、わざわざ署名までしてもらって持ってきたのです。

のおっしゃる通りに、一歩先に進んでいくことが必要なのです。ですけれどもそれが何かハリネズミのはりのように、出ていたらおしまいなのです。能ある鷹は爪をかくすということがありましよう。自分が一歩進んでいてもかまいません。ほんとうに心からついてこれない人の気持をはっきりわかって、そういう人と何十回でも話し合う。そしてまた平川さんがそういう努力をしていらっしゃるというのを隣の村上さんが知っていらっしゃる。高橋さんがそれに協力するというふうにして下から盛り上げていくというのではないのでしょうか。

次に、西さんから伺った第二の問題にここに入っていいと思うのですが、発言の問題ですね。私今、西さんにお伺いしたのですが、話し合いの自由、たとえばこれは村上さんですが、わずかの寄付であつたけれどもこれに反対した。そうすると今度は自分がその仲間からはずれてしまいうようにお考えになる、こういう問題ですね。そうすると結局は、一つの決議をしたときにそれに反対するということのつらさというか、社会的に制裁を受けるのですね。こういうことが非常に日本では多いのです。これはさっきのリーダーがあつて号令をかける。そうするとその下には何も知らない人がたくさんいて、「はい」といえばいいけれども、「ノー」といえば今度はその人が仲間はずれ

になる。こういうことになるのですけれども、これについて民主主義の——これは多数決の問題にまた入ってくるのですが、ちょっとここで今申し上げますと、民主主義ということはどこまでも話し合いということを中心に行っているわけなのです。ですからきめるまでには話し合って話し合って、そして大体において歩調が揃った、意見が大体一致した。ですけれども、最後にどうしても一致しないときに採決することなのです。ですから、村上さんがさっきおっしゃった問題でしたら、寄付は——臨時の寄付ですが——いかにという人がある。そうすると私は、とにかくこれをしていただかなければならないのだと、私はあなたに一生懸命話しかけるのです。そうして納得していただく。ところが最後まであなたが納得なさらない。そしてまた一五人のグループの中でも、大体私の意見に賛成してくれる方が判断して多数だと思っても、やはりあなたの意見を無視することができない。けれども事をきめなければならぬというときに採決する。そこまですべて積み上げていくのです。あなたはあなたであなたの議論を積み上げていくのです。しかしあなたは私の意見が正しいと思ったら譲歩してください。ところがあなたが説き伏せて、これは臨時寄付をすべきでないということをはっきりわからしてくださるならば私もそれに同意する、あ

うしたことによくとけ込んで、「自分が」という考え方をしない。そうして自分をあまり信じ過ぎてはいけないというふうなことを感じているのです。もっと反省することが必要だと思っています。

坂西 横関さんは若い人にとって痛いところをお笑きになりましたね。(笑)

村松 話し合いということを、何か人を説き伏せるということに使っている人があると思うのです。それからもう一つは、話し合いがなかなかうまくいかないのは何かみえみえないものがある、自分の意見をもっとも否決されてしまうと恥ずかしい。自分の主張が通るという見通しが立たないと自分の意見を言わないという向きがあるのです。大きな組織なんかの、たとえば地域婦人会の役員会に私は去年一年出ていましたが、その中でどうしようもなかったのです。私はたとえ自分が一人であっても、役員一五人のうちの自分は一人の意見であるけれども、数からいえば自分の意見の方が多いのだ。私は自分のうちの会員の代弁者ののだという意識込みでやっていたのですが、やはりしまいにどうにも顔が立たなくなると、会員もどうせあんまり人合として抜ける人が多くなると張り合いがなくなつてやめてしまったのですが、私たちの小さなグループでも、こんなことを言っても私の意見はどうせ否決されて

るいは三〇円のものであったらどこかで譲歩して一五円に間に合わせるようにしてもいい。こういう努力が必要だ。こういう努力をしますか、私たちは……。

河野 私どもの婦人会やPTAなんかでその体験をたびたびしておりますが、自分の反対意見がリーダーの方の反感を買う場合があるうと一応自分の意見を発表して、自分と同じ意見の方もいらないしやるかもしれないから、それで皆さんに自分はこんな意見をもっているということを確認していただいて、それを一つのステップにしたい。ただくわけですね。今のようなお金を出す場合も話し合いますが、多数決といえませんが、皆さんの意見が全部一致することはないから、何べんも話し合います。結局希望者だけということ、ほとんど今までその通りなってきたております。反対な方はやっぱり反対なざった理由があると思ひまして、別段あとから離れさせたいというわけではなくて、快く反対なされた方もその中に入れております。

坂西 非常にいい例です。

横関 私は家庭においてもそういうことがあると思うのです。若い者が批判されたときに、若い者がほんとうに自分を反省して自分が正しいかということを考えているかということなのです。相手の気持をよく知って、集団でもそ

しまう。恥ずかしいからというので言わない人があるわけですが、それでは話し合いにならない、みんなが自分の意見をもっていて言わなかったら何にもならないということ、一つのことを焦らせないでやっていくと何かこのごろ気が長くなってきたのです。

坂西 ここで問題が出てきたのですけれども、話し合いというのは単にあなたの持っている考えを相手に説いて、相手を自分の方に引っぱりつけるということですか。

加藤 私は話し合いのときに、まず自分でこういうことをしたいと思うと云いませんで、まず初めに反対の意見の方の声を聞いて、それから自分の意見も固めて、それから反対の意見も固めていく。初めに私が自分の意見をはっきり出すと、みえとか外間て反対の意見が出ない。反対の意見を出すという方向に話を進める。たとえば討論をするときに一番条件の悪い人を基準にする、会費なんかも一番下を基準にする。とにかく一番下を基準にしてやりますと話し合いがらくに進んでいくのです。それからもう一つは、さっきPTAで発言すると子供の成績に疎かというふうな話が出ましたが、私は先生を信用しますし、そんなことで子供が悪くなつたらうちの子供だけの問題ではなくて、全体の問題になっていくと思いますから、自分ではそんなことをあまり意識しないで、自分としては正しい、ク

ラスのためにこうであつたらしいということは発言いたします。勇気をもって一言いうとそれに続く人があると思つて発言しております。

坂西 加藤さんが非常にいい問題を出してくださった。私は下から盛り上げる、盛り上げるといつているのですが、一体どうして盛り上げるのかということはいわなかった。ところが御自分の考えをまず抑えておいて、最悪の条件をもっている人の意見から聞いていて、だんだんとも意見の一致を求めていく。この問題がよそにそれる前にもう一つ考えていただきたいことがあるのです。違つた意見を出すというときに、もしそれが受け入れられなかったら自分が恥じをかくという考えが強いとおっしゃいました。しょう。そうしますと、そういうことを前提として考えるとあなたは話し合いをするときに自分の意見というものを最後まで貫き通すつもりでいらっしゃるのか。話し合いというものはそういうことではないでしょう。これは質問として皆さんに聞いているわけです。

高橋 それとちょっと違ふかもしれませんが、ここへ集まっていられっしゃる方は、きつとそんなことを夢にも思わないかもしれないが、小さい五、六人のグループでは自分の意見を出せる人も二〇人ぐらいになったら二次会でなければ自分の意見を言うのが恥ずかしいという方が必ずあります。

村上 小さな集まりでは、お互いに発言がしやすいです、責任もちゃんととれるのですが、大きな集まりになつてきますと、何が集団の圧迫みたいなものを感じて語が出にくいのです。それで発言の上手な方が一人占めになつてとうとうと述べられるとあとに続けないのです。私はあの方と反対意見だけれどもと思つても、気おくれがして発言ができない。だから前の役員の方とか司会者とか上の方が、みんなが気軽に発言できるような空気にしていただく。ことに私どもは発言が下手ですから、それを気軽に発言できるような場にしていただくことが大切ではないでしょうか。

坂西 こういうことは高橋さんどうですか。アメリカだつてずいぶんみんな自由に発言しますけれども、やはり気おくれのする人が必ず会議にはいるのです。そういうときにはずいぶん大きな会合でも、ベズ・セッションといつて

らっしゃる。この間の愛媛の婦人会議のときも、そのときに言わないで、あとで二次PTA、三次PTAでぐずぐず言うなら、そのとき言えばいいのにおっしゃったのですが、性格的にそのとき言えない、そういう人もあるのです。そういう場合は二次PTAでも三次PTAでもやって聞いてあげなければいけないのではないかと思います。

坂西 聞いてあげるためにはどういうふうな手段をとつたらいいでしょう。

加藤 すんでしまつて帰りがけに二次会がある、そのときに言える人が聞いて、こういう声もあるといつて伝えてあげる……。

坂西 会の終つたあとで二次会のときによく聞いて、また会に持つていく……。

加藤 そのくらいの親切がないといけないと思うのです。私のようにこういう会に出てくるのはそういうことはないと思つても、皆さん思つても思つてくれなくても、やはり恥ずかしいという気持ちがあるのです。そういう方はたくさんいらっしゃる。それは悪意ではないので、やっぱり聞いてあげなければならぬと思つてます。

土屋 私の方の婦人会の例ですけれども、婦人会の集会の場合にはやっぱり言われない方がいるのです。みえと云うような気分ではなくて、おとなしい、すなおな方でも恥

そっちの方に六人、こっちの方に六人というふう集まりまして、ワイワイ話をするのです。自由な小集団の発言によつていろいろ意見の調整をする。一応意見がそろつたところでもまた司会者が、みんなを集めて、小集団でまとめた意見をきく。五、六人ですと口を開くのではないでしょう。か。そういうことをやってごらんになったらどうでしょう。

村上 太田区の母親学級でそれをやりました。私もそれはとてもよかったと思つたのです。ただ困つたことは地域婦人会やなんかそういうやり方を絶対に取り上げないことなのです。

河野 私どもの小学校のPTAの中で母の会というのが昨年できました。そういう組織を作るときに、よその学校で困つていらつっしゃることやら、会員の方から苦情が出てくることなんかよくお聞きして、それを自分の会に取り入れようということになりました。まず皆さん方がたくさん集まつただけでは発言できにくい方がたくさんいらつっしゃるので、各地域ごとに集会をもつということにしまして、各町内ごとに委員の方を選挙し、その方がお世話なさつて皆さんの意見をよく聞いて、どういうことをしてもらいたいということを発表しました。私はその方の役員をしておりすまけれども、それをしているかわからないほどたくさん

ん出てきまして、ほんとうに一年生ですけれども皆さんがおっしゃったことを果してきたつもりです。

飯田 話し合いを阻むものを取り去るのが、今、村上さんがおっしゃったようにリーダーの一つの責任だと思えます。その意味で私は小川さんにリーダーが必要だと申し上げたのです。リーダーは会を象徴するものだと思います。そのために会をうまく盛り立てるように話し合いを進める。そのためにはリーダーがよい方法をとるということではリーダーの重要な仕事なのです。

坂西 リーダーというものは皆さんの中で育っていくもので、外から輸入してくるものではないのです。では大体このくらいにいたしまして、また年後から続けます。

(休憩)

坂西 今まで家族、地域社会、それから婦人団体、あるいはPTAなどに触れてお話をしたのですが、職場の問題はまだ触れてません。ここにお出の方々のうち実際に職場に關係のおありの方はお二人で、あとは大体家庭で生活していらっしゃる。東京の村松さんは職場にも關係していらっしゃるが、ここですらでしようか、一つ職場の問題、集団としての組合活動というふうなものはどういふものか取り上げてみたいと申しますのは、家庭にいらっしゃる奥さんたちであっても、結局は御主人が何かの形で職場

に勤めていらっしゃるでしょう。今度お子さんたちが大きくなるにつれて結局はやはり職場の一員として活躍しなければならぬのですから、この問題を取り上げてみたいと思います。問題を提案なさった竹中さんいかがですか。

#### 職場集団の問題

竹中 私が問題を提案しましたことは私自身のことではなく、地方会議のときにとでも問題になりましたことで、たとえば賃金ベースの問題などで、同じように採用されても年がたつにつれて差が出てくるとか、重要なポストが与えられないとかいふ問題が出てきました。そのときに大体結論として出ましたのは、女の人も男の人も同じ職場を争うようなことはしないで、女の人は女でなければできない職場を避んでほしいということです。そういう考え方は私たちにわからないのですが、女でないとできない職場にだけ女が進出することはいいことか疑問をもちます。週刊雑誌に既婚者は職場を去るべきだという投書がありました。それには腹掛的な既婚者は自分たちの文化生活を望みさえしなければ生活できるのではないかと。もっと未亡人のように職場をもたなければ生活できないという人に職場を与えるべきではないかというふうなことが書いてありまして、とても疑問をもっております。そういうことに対して何か皆

さんから御参考の意見が伺えらると思えます。

坂西 今、竹中さんのおっしゃったことは女性と職場の問題について非常に広くいわれていることでして、これが日本にとっては大きな社会問題であるということは間違いないのですけれども、今年の婦人週間の標題にしばっていただかないと賃金ベースとか、女性が職場に何年坐っていても重要なポストが与えられないとか、あるいは男と女の人ではもう根本的に職能の違いがあるというふうなことになりますと、あまり問題が大き過ぎませんか。ですから、これは職場という一つのところにあってどうなのではないでしょうか。あなたはあなたの能力、しかも個人の能力というものを十分に發揮できるようなところに今いらっしゃいますか。それともいろいろな障害があつてできないか。もしできないとすればどういふところに問題があるのか。

竹中 実は今まで申してきましたように、病院で看護婦として勤めてきましたので、女性の職業としてはほかの人たちと争うようなことはないと思います。

平川 私は肢体不自由児施設に栄養士として勤めているのです。私どもの仕事は女の職業としては一応認められているのです。これは組合ではありませんが、私共の職場に全体会議と職員会議がある。その場合に女の発言が押えられているのです。私たちは立場が違うから発言ができる方

ですが、事務員さんは上役がいるから金銭希望をもっていても話すことができないのです。それで私たちの場合は、下っぱだけ集まるという声が出て、下っぱばかり集まったわけです。下っぱばかり集まって大きな声を、上に――全体会議のときにいえるようになっていったのです。

坂西 今、平川さんのお出しになった問題で非常に重大なのは、御自分の専門があるから、どんなところに出てもその専門に関しては発言ができるということですね。これは家庭、近隣社会、また婦人会とかPTAにいても、何か自分のもっているものはいつでも言えるということではないですか。

村松 私は実は職場、といっても夫と一緒に働いているのですが、たとえば春の大掃除のときなんか、工場で大掃除をして、そのあくる日は家の大掃除をする。工場の大掃除のときは夫が指揮権をもって、今度はどこをだれがやれというわけです。ところがうちの大掃除になると、あんたがさいはい振ってくれなければ、自分は動けないのだというわけで、「今度は何しますか」と私にききます。それで近所の人に笑われるのですが、それでいいではないか、めいめい自分の責任をわきまえてやっていけばいいのではないかと思っているのです。

平川 今の場合はだんなさんと御一緒にすし、ちょうど

御理解があるからいんな話し合いもうまくいったと思うのですが、私たちが職場でいつも感ずるのは、男の人が暴君になり過ぎるのです。女のくせに何言うか、そういう意識で頭から押えつけられる。これが多いのです。私たちはうまくいっています、ほかの人に聞くと、とても圧迫が多くて、息がつけにくいのだといわれるのです。御家庭などでもここにいらっしゃる方はいいでしょうが、一般に男の人が無理解ではないかと思えます。

土屋 私無理解ではないかと思えます。女の人が無自覚だといわれることは、結局労働組合の問題にしても、女の人がそういうものに対する興味とか、学習的な態度が足りなくて、男の人に一步ひけをとっているところからきているのではないかと思います。入社すると、わけもわからないうちにまず大きな職場の労働組合中に名前を書き込まれてしまうのです。いいも悪いもなく、結局大きな集団の中に入らなくてはならない。そして幹部の言いなりに引ずられて、あまりわからずというところにある問題がある。

村上 九州全体がそうだと申し上げたら大へんなおしかりを受けるかと思いますが、九州というところは封建性が残っているような感じがいたします。男尊女卑の傾向がちらちらと見えます。私は職場に関係しませんが、

くところによりますと、組合の話し合いをするときなんかは男女平等であるべきはずなのに、男の人は勝手に発言をし、女の意見なんか取り上げないらしいのです。組合は男女とも平等で、自分たち同士のお互いの話し合いの場であるべきなのに、男の人は実に横暴だということです。職場の平等ということなんかもうところから解決していかなくてはならないのではないかと思います。

坂西 これは男の人は大へん気の毒で、欠席裁判ですね。(笑) それでは村松さんに御主人の立場に立って一つ弁護していただいて……

村松 今のうちに男が横暴だということも確かにあると思うのです。その半面女の方自身の口から、女の人は無責任だという話をよくきくのです。たとえば女はいたわられてもいいものだという考えをもっている。それで自分の仕事であっても、たとえば、お茶汲みなんかばかりさせるといいながら、それでちょっと重たいものを持たなきゃならないときは持てるものであってもみんな男の人に押しつけてしまう。みんなめんどくさいことは男に押しつけておしやればかりしているというふうなことを女の人自身の口から聞くのです。この関東会議のときにも賃金差とか、いい職場が与えられないということが出ましたが、組合員としての意識は低い。腰掛けという気持もあるのか、仕事

に対する責任感も、組合員としての意識もなかなかたない。そういうことで私は女の人がたとえ腰掛けであって、結婚したらやめなくてはならないにしても、集団の中にあるときに、しっかり自分というものを集団の中で育て上げる。そうすれば家庭に入ってもあなたまかせの人間にならないですむのではないか。それからPTA等へ今度出た場合にも幹部まかせにならない、りっぱな集団の一員ができるのではないか。それを腰掛け的な気持ちから、家庭で親の元にいるときは自分の将来の家庭ということばかり夢見て、家庭の一員としての責任を果さない。職場にあっては結婚すればやめるのだからといって、あなたまかせになる。家庭にあればまたあなたまかせになる。その調子で社会に出ていくから結局環境に引き回されるようになるのではないか、という考えをもっていたのです。ところがこの間東芝の小向工場を見学しまして、なるほどこういう機構の中では女の人は職業をもっていても自主性というものがなくなってしまうのは無理ないのではないかということを感じました。私たちのほうのほうの零細企業の場合は、もう少し収入がほしい。せめて心配なく食べていけるだけの収入がほしいという自由がほしいんですけれども、何か自分のその貧しい職場の中での自主性というのは、まだ大きな工場よりあると思います。

坂西 今の問題を整理いたしますというふうことになるのではないのでしょうか。女性の発言というものが職場で封じられている。またあってもそれが取り上げられないという一つの大きな理由は、結局は仕事というものが全生涯の使命ではないのです。男の人は自分の仕事に生命をかけている。これをやらなければ男一びき育たない。ところが女の人は逃げ道が幾つもあるのです。どっちの戸から出ていっても生きられる可能性をもっている。そういうところから先ほど平川さんがおっしゃったように、専門の仕事を持っている人は発言ができ、またそれが聞かれる。ところが事務系統になると、これが全く無視されてしまう。それからもう一つは、これは小さい職場にの話をすけれども、今度は大きな職場にいきますと組織というものが完全に成り立ってしまっていて、そしていろいろの特権を与えられるけれども、今度はあなたが一つの機械みたいなになってしまおう。一つの歯車であり、またびょうであり、一つのシャフトであって、あなた自身というものはもう全くごなごなにされてしまっていて、一〇〇〇人ここに女性が働いているとすれば、それは一〇〇〇の機械のパートなのです。むしろほんとうに人間が生きようと思うのならば中小企業あるいは商店とか、そういう小さいところでほんとうに生きられるのですけれども、今度はそこでは生活の保障

というものがない。非常に痛し痒いしというところですね。それで今日はもう傍聴者の方々をお招きしている問題を取り上げるものですから、少し急がなければならぬのでお急がせして申しわけないのですが、この辺で一つ多数決の問題というところを取り上げてみたいと思うのですが、いかがでしょうか。というのはいさうと今までの二日にわたる討議の中に話し合いということをして、そしてなるたけ意見をまとめて、そしてお互いに了解し合っていて、しかもその話し合いの場というものが下から上だんだん築き上げられた上に盛り上げていくというのが理想の形だということに大体話がまとまってきた。ところがもう少し大きな婦人会とかPTAとかになりますと総会というものがあつた。その総会というものをいかにするともう最初から問題をぶつけられて、御賛成の方は手を願います。多数決と認めます、これによって何々という宣言が下されるでしょう。こういうことをどういふふうにお考えになるか。あなたの発言というものは全くこういう場合死んでしまう場合がありましよう。個人としてのあなたの存在というものが認められないわけですね。小川さんどうですか。

#### 多数決の問題

小川 登子 多数決の問題でいつも悩むのですが、多数意

う。それならその多数意見と少数意見を問題にする場合は、そのどちらの意見が会の目的に合致しているかということとをまず考えるべきだと思う。私はいつもリーダーをしてきましてこの問題で非常に悩んだのですが、多数意見と少数意見がある場合に、少数意見が会の目的に合致しているときはそれをとってきたわけなのです。私の方のグループは非常におとなしいグループで、こうしたい、こうしたいといわなければならないけれども、大体多数意見が雰囲気としてわかるのです。例えばグループの勉強についても多数意見がのぞむのはかたい問題を勉強することではない。しかし、会の目的は私たちが勉強して、教養を深めて家庭と社会の向上に努めます。そこで私は政治や社会のことを非常に勉強したいという少数意見を取り上げてきたのですが、それについて少し推進力を発揮し過ぎたのではないかと反省しているのですが、その問題について皆さんの意見を聞きたいのです。

土屋 私は飯田さんの場合、会が小さいからそういうこととがいえるところです。私は小川さんのさきの意見に賛成なのです。会が大きな集団の場合に結局多数決になりますね。すると少数の意見というものは取り残されてしまう。そしてその行動の方では多数の意見の方を、一時そのときには歓迎しますけれども、この次にあるときには少数の

見に賛成している場合は自分の意見が通るんですから問題ないのですが、少数意見の場合には少数意見というだけの理由で抹殺されてしまう、そのことが非常に不安なのです。そのため少数意見というものはどうしても通らないという考えのもとに発言を自分で押えてしまいう方が非常に多いのです。少数意見でも私は一応発言できるというような形態というものをはっきり打ち立てていっていただきたいと思うのです。

坂西 そうするためにはどうしたらいいかということですね……。

小川 登子 多数意見で決定された事項というものは客観的に見て、それが一番いいものでなくても、いろんな状態で第二義的なものを取り上げる場合もあるのです。実行しやすいとか、それから経済的な問題とか。ですからこれに対する少数意見というものがいつも正しくないとかよくない意見だということはないと思うのです。そういう場合このたびは取り上げられなくても、この次の機会もあるし、皆さんにお話ししたら今度多数意見になるだという希望をもっているつもりで発言したいと思っております。

坂西 これについて何か。

飯田 今小川さんの発言は地域集団の中ではなくて、はっきりした目的をもった文化グループの中の問題でしよ

意見をとり上げてみんなに提議していただきたいとおっしゃいましたね。そういうふうにするのが一番いい道ではないかと考えます。

坂西 具体的例をあげて申しますと、ある県の婦人連絡協議会が社会教育法の一部改正に賛成であるという決議をしたわけです。ところが県の総会があったときに、そういうことは何も知らない。だれがきめたのだといって大きな騒ぎになった。上に立つ人が正しいと思うことを会の決議だとして大きく出してしまふ。結局会員にははかっていたわけですね。

村上 それと同じ問題があります。私は実際に経験いたしました。小学校のPTAで学校の給食設備がとてもおそまつなのです。これではとても衛生面から見てもいけなから改築しよう、そういうお話が出たのです。そうすると市当局は、例の通り予算がないといってやってくれない。市がやってくれるまで待ってられないというのです。衛生的に悪い。なんとか地元から寄付を集めて改築しようではないかというお話が出て、PTAの総会でそれが決議されたそうです。そうしましたらPTA会員だけではお金が予定通り集まらないから学校へ行てない家庭からも必分の寄付を求めようではないかと、いうことにきまつたそうです。私どもは子供が成長いたしましたから、学校

には無関係で、そういうお話は何も知らないところに近所の奥さんがこういうお話になったそうだから、密附をお願いしますとってこられた。私は何も知らないから、それはどういふことですかと聞きましたが、何も知らないとおっしゃるのです。一応納得のいくようなお話をしたいと思ってもいくところがないのです。PTAの役員に聞いてみても、役員は多数決でよかったことですから仕方ないでしょう。私たち何もいえないでましたといわれました。

坂西 こういふことは幾らでもありましょ。

河野 昨年九州の母親大会で、勤労問題が出て大会の決議にもつていこうという動きがありました。ところが、勤労反対を決議にもつていくのは考えたらどうかということが出たため、多数決にもつていこうという動きが出て、多数決といふことは重大な問題だと考えさせられました。それを決議しようとおっしゃる方はせっかく集まったのに、多数決で決議しなければ意味ないとおっしゃるが、反対の側はそれは自分たちがここで決議しても帰ってもお母さん方に、これは決議できまりましたから、この通りいつてきてくださいといつてもだれもつてこない。皆さん方によく話し合った上で、まとめるために自分の地域に帰ってから努力しよう。そういう話し合いの辺までよくはないかという意見が出て多数決の決議といふことをめぐって

その方は引きさがって、現在も町の婦人会と仏教婦人会と二つあるのです。

坂西 この場合、多数決でいきましようという、その裏には数でいつて解決するとか、自分の方で思いうように工作できるという考えがあるのではないですか。

村上 多分に感じられます。

加藤 多数決のとおり方ですが、同じ問題でも無記名で紙に書く場合は全然反対の多数決が出る場合があるのです。そういう場合にみなさん一応は自主的に、いいか悪いか考えています。『御起立願います』というときには一つの方向に流れて、自分の自主性が失われてしまふ。とにかく多数決をとるときに、全然自分のほんとうの意思が多数決に現れないといふことを多々私たち経験しております。何かむずかしい場合でも、口でいうと賛成々々といつて、票に書きますと全然反対の票が出るということが私たちの経験ではあるのです。

坂西 ここにいらっしゃる方は非常によく考えて、いろいろ経験を積んでいていらっしゃるでしょうけれども、問題が二つあるいは三つ出て分れたときに、どんな場合においても大体自分は正しい方に味方するといふことをはっきりおっしゃられますか。問題は日本では頭数さえそろえればいい。だから多数といふことは数が揃えばそのことがど

会場が騒然となりました。

坂西 最後にどうなりましたか。

河野 もみめたあぐく多数決で押し切ってしまったのですが、あと味が悪かった。それでよかったというのは、少数意見が全く無視されてしまった。少数意見の無視といふことはこれから先の会の発展といふことを非常に阻むのではないかと考えたのです。

横関 私にもそういう問題があります。八幡町のうちに仏教婦人会と町婦人会の二つが対立して、それぞれ会長はいるのです。下部は会員がみな同じなのです。仏教婦人会といふものは花まつりをやるなど、お寺の後援で非常に派手な団体なのです。町の婦人会は修養的な団体でじみじみにいくのですが、私がちょうど町の婦人会会長をしていたときに一つにまとめたかどうかといふことになりました。そこで話し合いを仏教婦人会の方へもつていったのです。仏教婦人会の若い方は、一つにしようという気持があり、お年寄りの仏教婦人会の役員の方にも話して下さいました。自分らのお寺さんの後援でやるのだから、そういう団体も必要だ、楽しみをとられるようなものだといふので、お年寄りの役員の方には聞いてもらえなかった。またその骨折ろうとした人を、仏教婦人会の方では多数決で、あの方は町の婦人会に行ってもらいましようといわれて、結局

んなことであっても正しくなるという、多数決が正しいと思っているでしょう。そのためにはいろいろ工作してもいいと思っている。しかし多数決といふのはいいことであるから多数が賛成する。そこがはっきりいっていらっしゃるか。その教育を結局は小さいときから仕込まなければならぬ。多数決以前のものであると思うのです。

原田 私の場合は、福祉会と婦人会に所属しておりますが、婦人会の方は多数決で採決されますが、福祉会の方はどうして多数決を採用しないかといふと、話し合いによってみなさんが納得がいくようにもつていきますので、多数決が採用されません。それは何であるかといふと各個人々々がしっかりした自主性を、そういう話し合いでもつてつかんだからではないかと思っております。

坂西 いま原田さんが多数決以前の問題について話し合いによって決をとらずに問題を解決しているといわれる。

原田 そうです。それはいままで非常に封建的なものがあって、上の方のおっしゃった通りに引きずられていったといふところに問題があるのではないかと私は思っているのです。

坂西 引きずられないためにあなた方は話し合いをして決をとらない……。

原田 決をとらないといふことはないのですが、みなさ



ん意見を出し合って解決の点へしほっていくようにしているのです。

坂西 いま一般に日本では何かのことをきめるのに多数決でいいといういまでしょう。ですからその多数決とは一体どういうことなのか。なぜそれできめなければならぬのか。そういう問題をときどきくしていると思うのです。

平川 私たちは職場にいるのですが、いろんな決定事項があるときに、みんなが集まっている話し合いを一応して、それで多数決をとらなければまとまりがつかない。まとまりをつけるために最後に多数決をとるのですが、その多数決にしても自主性が無い。例えば人の前で手をあげたりすることが、上役がいればならまれるのではないかと、男の人に何かいられないかという気持があり、意思表示しにくい、自主性の問題よりも前にその仕方に私は問題があるのではないかと思います。

坂西 みなさんは違った意見をもったらそれをどこまでも固守するという、目の色を変えて会場に臨んでいるのではないですか。いろいろの意見が最初からあっているのですよ。それをみんな出して話し合う。そうするとあなたの方のうちに、自分はこう考えたけれども、結局はあなたの意見の方が正しいのだ、それで私はあなたの方に歩み寄る、ところがもう一つもつとつと意見が出る。そうすると

小川 謙三 そのことはずいぶん勇気が必要なのです。一般にはそれがなかなかできにくいのです。

村上 話し合いの場をもつてとことんまで話し合えとおっしゃいましたけれども、大きな集まりになったら話し合いの場がもっていただけないのです。繰り返して話し合いをする場へ自分を入れていただくということが出来ない。また自分も入っていけないのです。

河野 たくさん集まって決をとるという場合に、女の方によく見られるのですが、人が手をあげるのを見てからあげるといふ場合がありますね。そんな現状ですから反対意見としてとてもいい意見であっても受け入れられない。いれられないまでも自分の意見を出して記録に残してもらおうということ、協同活動の中で自分の責任を果たすということですから、そこまでいけばいいのですが、人の顔色を見て、ずいぶん体裁やらみえなんかあるのが今の現状ではないかと思えます。

村松 ほんとうにとことんまで話し合って、そしてみんなが自分の意見を出して自分の意見がいれられなかった場合には多数の意見に従うというのならいいのですが、その場合、とことんまで話し合いができるような状態にしておくといいことは一番大事なことでないかと思うのです。大ぜいになると話し合いができないというのですけれど

私もあなたもあの人の意見はいい、そういうふうに進み寄る。ただし歩み寄っても最後までどうしても意見の一致が見られない場合があります。けれどもだんだん一致の方に寄っていくができない点がある。しかし問題はどうしても解決しなければならぬという最後のときに決をとるわけです。それでその決をとったあとに反対の意見をもった人とあなたはどうするのですか。

村上 それはそうやって話し合ってみなさんの意見が、なるほど納得したらそれに賛成していきますね。

坂西 納得しなかったらどうしますか。

村上 しなくてもそれは自分の意見はそうやってもってますけれども、みなさんが決議なさったことに従っていくのが民主主義ではないかと思えます。

坂西 それが正しい態度です。そうしてもう一つ重要なことは、違った意見をもっているということを決して恥じたり、臆病になったりしない。そしてもしその意見がいれられなくても記録に残しておくということが非常に大切なことであるのです。そしてさきほど小川さんがおっしゃいましたように、なるだけ大衆の意見についていくけれども、なおかつ自分が正しいと信じるものを繰り返していくようにする。そして、よくわかっていただければ、という望みを捨てないということも一つです。

でも、そこをさっき坂西先生がおっしゃったような方式でもって話をしたらどうなのでしょう。

坂西 大きなグループになると話し合いができないとおっしゃいます。民主主義の国でそれを調整する一つの大きな役目が世論というもののなのです。マスコミ、新聞、雑誌、ラジオあるいはテレビジョン、そういういろいろなもので、いろいろな意見が生まれよう。そうするとそれをみなさんが毎日よく読んで考える。そのうちに、何が正しいかということの一つの盛り上がりがあるはずで、民主主義の国で社会の動きと方向をきめるものに二つあるのです。一つは選挙であり、その次が世論なのです。世論がこの国では育たないとよくいわれるのですが、これはやはり私たちの責任ではないでしょうか。

高橋 地方大会のときに、多数決の場合、どうしても自分が納得がいかなかったら、少数意見の人たちばかり集めてまた別に会を作るといふ方法もあるのではないかという説もあったのですが、これはいかがですか。

坂西 みなさんの御意見を伺いましょう。非常に重要な問題です。

村松 問題によりけりだと思うのです。大きな目的でもって一緒だったら、脱退までしなくても同じ目的をもった団体も二つも三つもあるということではかえって力を弱くす

ることになるから、やはり妥協できるところはして、そしてその場では自分の意見を通さないでも、あとのことを考えて一緒にやっていくのがほんとうではないかと私は思います。けれどもどうしても反対の対立的なものをもって、それについていったら自分の意思がその場だけではなくて将来に向っても生かされないというのだったら、私は脱退した方がいいと思うのです。

松井 私は、集団の中で意見が一致するばかりが私たちの社会的な向上ではないと思います。あるときはやはり対立して分れて、集団を二つ作っておのおのが発展して、また一致点を見出していいのではないかと思います。私たちはやはり競争意識と申しますか、何か両方ともよくならうとする意識の中で社会の向上というものを発展させていくことができるのではないかと思うのですが……

原田 私は脱退しないで進んでやる方ですが、集団の中に入れまして、いろんな抵抗や刺激にあつて初めて自分というものが育っていくのではないかと、私はそこに気づいて参りました。

坂西 そうすると、この辺でまとめたと思います、自分の考えやまたやりたいことが他の人の考えとびつと一致するというのは、これは神様の世界だけです、人間の世界ではそういうことはあり得ない。それから今度は自分

のやりたいことだけ考えて、ほかの人が何んと思うとかまわらない。それは動物の世界です。ところが私たちは人間の世界に住んでいるでしょう。だからいろいろな条件もあるし、いろいろな問題がありますね。私が非常に重要と思っていることもあなたはちっともそう考えていらっしやらないかもしれない。しかし話せばわかるという言葉がありましよう。これは私たちの最初からの問題ですがね。歩み寄るといふこと。私は自分の主張を五〇パーセント切り捨てるかもしれない。あなたも私に対して反対を五〇パーセント切り捨ててください。そうしたら合うのではないですか。いやだったら逃げてしまふ。これも一つの方法です。それからときには非常に大きな、自分の生命をかけるような大きな問題であつたら、妥協しない。これは勇気がいります。しかし多くの場合は何でもかでも自分が気に入らない、自分がいれられなかったら逃げてしまふ。もう少し伸よく、もう少し手をつなぐという気持も必要ですね。

次に一番大切な問題である責任といふところへ移りましようか。これは締めくくりになりますけれども、大まかにいってみなさんは考える自由があり、それから集団に入る自由があるから責任がでてくるのでしう。こういうところから始めましようか。

村上 あるグループでこういうことがあつたのです。原

水爆反対の話し合いがなされて、原水爆反対の署名をしたことがございます。どなたも原水爆禁止といふことは賛成で、署名簿に署名してくださいでしたが、あとになって、ああいう平和運動はアカだとか、左翼だとか、とかくの批判がออกมาして、そのときに署名なさつた方が何だかものすごく悪いことでもしたように、いや私はだれだれに頼まれたから署名したのだ、そんなこととはつゆ知らずにしたのだというふうに、ふるえなかつた。そのときにまことに意外に感じたのです。原水爆禁止といふことは、それ一本槍で進めばアカだとか、どうとか、思想的なことは関係ないと思うのです。正しいことだと思つて署名したら、なにもぐらぐらする必要はない。自分が署名したらどうして署名したことに責任がもてないかと思うのです。

坂西 竹中さんは、職場においてのあなたの責任といふか、そういうことをどういうふうにお考えになつていますか？

竹中 私たち個人々々の責任というのは、自分の自由といふことだと考えますが、具体的に私のとりました通勤制の問題にしましても、自分の自由を得るためには必ずその

責任を果さなければならぬということ。またその責任は自分だけでなく、集団生活の中においても考えなくてはならないのではないかと思います。

小川 志な 一つのグループに入りましても、その中で責任を果していくといふことは、やはり子供がよく見てまうし、母親が責任も果せないようなグループに入つたり、隣近所のおつき合いに責任がなかつたりすると、それは結局子供の上のびていくことで、子供がやがて大きくなりましてから無責任な子を育てることになりますから、私は母親の立場としてできるだけの責任はもって生きていきたいと思つております。

加藤 いつも自分の属する集団において、家庭にいるときには母として妻としての責任をとり、小グループに属したらそのグループにおける自分の立場としての責任を果すことだと思ひます。

坂西 皆さん大へんりっぱに理路整然と述べていらつしやるのですけれども、その裏はどうなのですか。おっしゃる通りなら、頭が下るのですけれども、個人として責任ある行動をしたいと思つても、集団に属しているためにできないことがあるのではないですか。最近な例をとってみれば今度の選挙ですね、どうなのですか。

婦人の政治意識をたかめるには……

横関 その選挙についてですが、うちは家族が四人ありまして、それぞれ私はあの人にする、と言っている、どうしてでも頼まれてみるとぐらついでしようのです。公明選挙というお話も聞きますし、お話し合いもするのですけれども、その場になって頼まれると、どうしても最初自分がしようと思った人はあきらめるといふことになるのです、責任のないことだと思っております。

坂西 そちら辺がほんとうのところなのでしょうね、「あの人に入れてくれ」とたのみに来る。そういうことが身近かにありますね。義理で頼まれてどうしても入れなくてはならない。私はあちらの人と何も関係ないから入れてもつまらない。こちらの人は身内と関係があるから入れるということになる。結局、自主性が無いといえますか、しつかりした確信がないためだと思えますけれども。そういう例が非常によくあります。

選挙権を与えられたということは、ふだんからもっと政治というものを勉強しなければならぬ責任を与えられたといふことになると思うのです。それはとてもむずかしいこと、いつか笑ってしまったのです。道を歩いていたら前を行く二人の奥さんが、「また選挙だね、いやになっちゃうわね、こんなことおこみでやっつけられやいひのに」

の人に入れてもらうかと思うのかということをお互いに自由に話し合える空気がほしい。その上でいよいよ投票のときに、自分で決めればいいので、めいめいでもってだれに入れたらいいのかを内緒にしておいて、それを口へ出すことが悪いことのように思ったり、それから婦人会なんかの集まりでも、選挙のことに触れると事がめんどろだといふのでだましているのが多いのですが、そうでなくて、やっぱり堂々とどういう理由で私はあの人を推薦するといふことを、お互いに話し合うという空気ができたら、もっと私たちの政治的な意識も高まってくるのではないかと思うのです。

坂西 先ほど村松さんがいわれたように、今ある大きな婦人団体、PTA、青年団という社会教育団体の根本はおっしゃったように政治意識を育てることなのです。ところがどなたか先ほどいわれたが、政治のことをいふとややこしくなるから、これは婦人会としてはいいわいとおこらうというところがたくさんありますね。そうかと思うと、今度は政治意識を育てるのではなくて、政党活動をやるのです。皆さんだれをかついで、だれに一票を入れますかというふうに……。悪くすると、集団としてあなたの一票がみんなまとめられてしまうことがあります。

加藤 私の方で、今度市長選挙があるのです。市長選挙は生活に直結するものですから、私たちの婦人会で、立候補

(笑) 選挙があると、一体だれに入れたらいいかということでもみんな苦労してしまうらしいのです。それは私たちはみんな一緒にあって、ふだんからもっと勉強しなくてはならないのだと思うのです。

村上 こういうこともあるのです。たとえば夫の勤めている職場の組合でこの人を推薦してますね。そういうときにどうぞ家族の方にもという言葉がかかるわけです。すると、こういう人が組合から推薦されているが、おまえはどうかといわれますね。そうすると私はその人はいやなのですね。自分は別に意中の人がいる。(笑) でも夫の立場とか、職場関係、やがてはそれが生活にも響くということになりますと、そちらの方にも責任があるように思われるのです。そういう場合にジレンマに陥るのです。

坂西 民主主義の国では投票は秘密なのです。

村上 私もそこで、はいはいといっても、自分の意中の人に入れてほしいと切切ってはおりますが……。

坂西 もう一つ、あなたがはいはいとおっしゃるのも、今の段階ではある点まで仕方がないけれども、もしできましたらはっきり、「民主主義の国では一票は、よく考えて入れるのですから、私もよく考えて入れましょう」というぐら返事ができませんか。

村松 私はどういふ点であの人を推薦するのか、なぜこ

補した方三人をお呼びして、同じ時間に集まっていただけで政治の話を聞こうという会をもったわけです。皆さんはそういうふうに関心があれば立候補なさった方もきっと快く応じてくださると思います。そのときに一つの政党とか一人だけということになるとむずかしい問題があると思えますが……。

村松 政治意識を高めるべき団体が、実はたとえばさっき言われた原水爆禁止であるとか、勤務評定なんかをすぐ政治的な色彩をもっているとか、思想的な背景があるとかいう。私たちはほんとうをいえば、自分の思想をもっているのが当然だと思う。その思想はめいめい違うと思うのですが、ところが何か自分の都合の悪いことだと、思想をもつのが悪いというようにすぐにいう。そういうふうになんをそこから離させるような方法をとってきて、選挙になると、地元から出しましょうというふうなことでみんなを引きずっていつてしまう。さっき多数決の問題のときに出したかったのですが、組合だの婦人団体で候補者を推薦する場合、多数決ではなくて、推薦決議というのです、あれはどういうことなのでしょう。ああいうやり方はほんとうにみんなの政治意識を高めることになるのでしょうか。

坂西 どうでしょう。これは実際にやっている方々に

お聞きしないと……。

小川志な 選挙についてこのごろ後援会というのが盛んにできておりますけれども、御近所の方に、後援会にぜひ入ってくれとつくつくいわれた場合に、皆さんどうして切り抜けていらっしゃるか伺いたいです。

土屋 私は別にそういうものがなくても、自分の意識に基いて、その人が自分の希望といえますが、意見に一致しなかったような政策をもっている方でしたら、絶対に入れません。自分の意思に基いてきめたいと思います。

河野 地方選挙が近くなると、あちからもこっちからもいわれまして、家族ぐるみの票を当てにされるわけですが、私は一応公約をお聞きしてから判断しようということもいつもお約束するのです。推薦とか何とかいうことで、部落で推薦しようという話が出てますが、公約をお聞きして私たちが出したいという方と合致するかどうかというのを確かめなければ同調できない、そういうふうにお返事します。

村上 婦人会あたりでもPTAでも政党色に染まったらいけないというので、そういう政治の話から極力遠ざかっているようですが、婦人会は極度に恐れているみたいで、政治の話を含然取り入れないで、排除してしまっただけです。ですから何も時事問題の勉強ができていないように思うので

す。私はこういうような選挙のシーズンになってきましたら、公約とか立会演説を聞いて、婦人会で話し合う。そうして皆さんの御意見を聞いて、それぞれの胸の中でこの人はと思う人をきめていったらいいのではないのでしょうか。そういうことを婦人会が勉強してもいいのではないかと思います。

坂西 先ほどから政治活動の問題が出ていますが、これを一応締めくくりをつけたと思います。婦人が政治に参加することになると推薦が必要になってくる。そこで落とされてしまうと今度はもう出る機会がなくなる。そこで推薦されて出ても、それでは必ず自覚ある人たちの支持を得て当選するかどうかと、男性側の圧力、しかも組織の力というものが相当強い。婦人の自主性、考える力が弱いために婦人は出る機会をなくするという問題があるのですが、これはやはり民主主義の根本問題です。個人の自覚、実際個人が考えて自分のすることに責任をもち、そしてまた自分の言葉行動、こういうものがたくさんの人に幸福をもたらす。また社会をよくするという信念というか、そういうものが必要になってくるわけなのです。そこに今のところまだ到達しない悩みを私たちは感じているわけなのです。一回々々選挙を繰り返していくうちにそれでは私たちが

は一票に対する、政治の権力というものに對する自覚をもってきたかという、最初よりも少し薄れているのではないですか。最初は太いに緊張して、これでもって自分は社会改革ができると思ったでしょう。ところが二回やってみるとあんまりよくならない。そのうちに外からの圧力が加わってくる。それに安易についていった方がいいとは思われないのです。けれども、まあそれでいいではないかという妥協的なところへ陥っていると思うのです。これはいけない。政治の問題に関しては個人の自覚、自主性ということを中心として考えなくてはならないということなのです。もう一つ出てくるのは、私が最初ちょっと申し上げましたが、婦人団体、婦人会、青年団という社会教育団体であって、政治団体でも、政党でもないのです。もしほんとうにあなた方がどうしても婦人と子供のためにいい政治が必要であるということを感じて、なんとか改革しなければならぬと思ったら、日本に日本婦人党というような政党を作るのです。そうすると公けに婦人党の党員として活躍できる。ですけれども、そんなことをしなくても、ほんとうにいい人を出す力というものを私たちもっているのです。婦人会が圧力団体にならずに、いい政治ができるということが今日の目標ではないでしょうか。

村松 その集団と個人の問題ですけれども、私もそう考

えるのです。婦人団体から推薦するというのは、やはり何か政治活動をするためにあまりいいことではない。ほんとうに政治活動ができる道ではないと思うのです。婦人団体というのは社会教育団体であって、政治団体ではない。政党政治なので、無所属や何かで出たって何の力にもならないのではないかと思います。

坂西 おっしゃる通り。

河野 今の婦人会というのは、政治的な活動と政治的な知識を高めるということを混同している。もう少しみだんから政治的な知識を高めるための勉強をしておればよいのですが、選挙になって婦人会というのは、さわらぬ神にはたたりなしというのでそっぽを向いたり、反対にたやすくお母さんたちが引かかっていくことがありますね。いい方がいらしたら公約を聞いて判断してそれに投じたらいいのですが、地域なんかで推薦する場合、部落の有力者とか何とかいう方がいらつしゃれば、それを判断するときに自分というものをもちていないからたやすく同調して部落推薦なんか気軽に応じていく。

坂西 そのため婦人会があるのです。ほんとうに婦人会の中で考えることのできる人、そしてまた勉強している人があまりものを知らず、考える力もなく、またそういうことに関心をもたない人々を徐々にすくいあげて、だん

だんと関心をもつようにする。ただしそういう話し合いをするときに、結局最後に誰に一票を投じるかは本人であるということをお忘れなように……。

加藤 私の方で婦人会をもっていますが、一生懸命政治の勉強をしています。私たちの方は公務員も副知事の奥さんも、反対派の意見の方もいろいろの方が集まっています。一つの政党政派に属さないのが大事だと思います。いろいろ反対派の意見も聞かれるし、私はいい政治の勉強の場をもってあります。

村上 政治の勉強をしているとおっしゃった、それを具体的にお願いしたいと思いますが、そういうことは普通婦人会でなさらないのですか。適さかろう、適さかろうとしている。それで婦人会を勉強の場にしたとおっしゃった、それを具体的に加藤さんに伺いたいです。

加藤 私の方は誕生間もない会ですので、いろいろな方面の勉強をしているのです。政治の勉強といいますが、たとえば朝日の支局長なんかに来ていただいて政界の裏話を聞いたり、どっちにも偏さないで政治というものについてのいろいろの話を伺ったり、それから今年の選挙が始まるとすると、特定候補とか何とかではなくて、とにかく市長さんは今後の市政に対してどういうような構想をもっていらっしゃるか、こちらでお聞きしたいことなん

長い年月をかけて自分が一粒の種をまき、それが育つ、またもう一粒まきというふうに時と努力とによって育つのであって、私は一代でやれないことは次の世代に託するというふうな長期計画で、このことを考えていたと思います。お話しはなかに、やっても仕方がないからというふうなお気持ちがちよっと出ていた。それでは困る。どこまでも勇気と忍耐をもってやっていくということではないかと思うのです。

そろそろ時間もなくなりましたので、私は結局今度の会議の一番重要な問題は自由ということだと思っております。大体、終戦後私たちは相当大規模の自由を許されていたのですが、目に見えないいろいろな力でもってだんだん自由が狭められていっているのです。まず第一に私は地方の都市で、何か自分たちの考えていることに對して反対というほどではないのですが、圧力が加わっていると考えていらっしゃる方があるだろうと思うのです。こういうことを少し皆さんとお話し合って、どこに赤信号が出ているか、こういうところから自由という問題を考えてみようではありませんか。

#### 自由をはばむもの

河野 私どもが母の会などを運営しております、少し

かを伺おうというので、みんなで奔走して会がもたれることになったのです。そんなふうに勉強してあとは御自分の考えで、選挙のときにはいろいろな話を聞いた上で自分が支持する政策の人をお選びになるという方法をとっております。

国領 今の話に関係しますが、私はできるだけ新聞をたくさん読むのです。取り上げている記事が適いますので参考になります。

横関 私は婦人会においていろいろお話し合いをするのです。公約はどうか、今までの公約は果されているか、どんな人を選ぶかということについてみんなで話し合っています。

坂西 いろいろ御意見が出ましたけれども、皆さんがほんとうに望んでいるのは全国婦人会議でどういうふうにしたら政治意識を下から盛り上げていくかという、特効薬みたいなものがほしいのですが、実際そういうものはないのです。御自分の一つ一つの地域でいろいろ工夫する。もっとも反響がない場合がありましよう。まあ仕方ないからまたほかの角度からやる、そういう努力を繰り返してやっていくよりほかに道はないと思います。それからもう一つはそういうお気持ちではないかもしれませんが、何か皆さんのお話を聞いてみると、多分に焦っていらっしゃるのです。今しなければ——もちろん今する必要があるのです。しかし

政治的な知識を皆さんと一緒にもちたいと思って講師の方を物色しましても、なかなか中立という形ではできないわけですね。左か右か、どちらかに寄るというふうな問題が多いわけですね。私たちは自分たちの自由というものを考えて判断して、政治的な知識をつけるために勉強していくわけですが、それに対して私たちを利用しようというものがとてもありますね。ちょうど市会議員の選挙なんかありますと、「小倉の市政」についてという申し込みがあったり、環境の浄化について話をしてあげましようという申し入れなどがありますが、そういうものを快くいれていたら非常にわかりのいい団体ということになるわけですね。自主的に自分たちの判断で断わったりしますと、アカだとかいわれる。アカでも何でもいから自分の自由というものを貫き通す信念が大事ではないかと思っております。

坂西 そうして聞いてあげるといって自発的に申し出る人がありますね。そうするとそういう人たちが受ける受け合いという判断はどこでできるのですか。

河野 それはやっぱり町内の、先ほど申しました通り、町内で選出された委員の方とか役員全部が集まりまして、これはどういうふうな御返答したらいいかということを見込んで話し合います。少しでも利用されるおそれがありました場合はどんな親しい方でもお断りするというふうに

しております。

村上 先ほど話し合いということが出ましたが、その話し合いの場がもてないとか、話し合いが自由にできないというところは、そこに何らかの圧力がかかっているからではないでしょうか。たとえば婦人会、PTAなんかで言うことがあまりいえないということは、会長なり役員の方たちに何かしら権力者がついていらっしやる場合、何らかの圧力的なものを感じて自由に発言ができない。こういうことを言えばこちらの方に影響がくるなんて、今の民主主義の世の中では考えられないようなことが、いなかの集まりには往々にしてあるのです。そういう点で集団の圧力ということ是非常に感ずるのです。

坂西 そうすると、会長あるいは役員を皆さんの自由な意思で選んでいないためにそういう圧力が加わってくる、こうおっしゃるのですか？

村上 それはわれわれ下のものにも非常に責任があると思うのです。そういう会長や役員を選ぶ場合に皆さん知らん顔をするのです。候補者を出してみんなの総意によって選ぶとしないのです。そういうことはめんどろくさいから市長さんの奥さんとか、校長先生の奥さん方にしていたら、何かの場合に非常に得する。何か権物をする場合にそういう奥さんが出ていらっしやることすぐ事が運ぶ。害

ばくことのできるような人を選ぶというふうに、その時と場合に応じて適当な人を選ぶ、いわゆる適所適材ということへいっていったらこういうふうな圧迫というものが少しは軽くなるのではないのでしょうか。

村松 たしかにその通りなのですが、そういうふうにするにはほんとうに平会員はせつせと働いていて、今まで考える余裕がなかった、そういう人たちが考えるようになるためには、現在の既成の町内会、婦人会という組織ではそれができないのです。その平会員が集まる機会というものがない。私の方の町内会なんかでは与えられていない。そこで私は自分のまわりの小さなグループを作っていかななくてはならないと思ったのです。

小川澄子 私の町では一般に、小学校の校長さんでも家柄がよくなければいけないといわれています。いなかには特権意識をもっている人が多くて、婦人会の会長さんは言葉がきれいで、お金があつてひまがある人でないと外へ出して押し出しが悪いし、そういう人でなくてはならないという家風があると思うのです。

高橋 今おっしゃった、会長さんの圧迫感ということですが、そういう背景などでなくて選ばれた会長さんでも、一人の方が何年もしていらっしやることによって会員に圧

付を集める場合に、そういう奥さんが一言口をお聞きくださいれば当局が寄付金をたくさん出してくれるということがございますから、そういう人々たちを船えておけば問題ないといわれわれ、下のものの考え方がそれとも間違っている。それはみんなの責任ではありませんが、それが集団というふうになってきますと、われわれ圧力というふうに感じられるんですね。

坂西 その場合どうしても私たちの頭から抜けない考えがあると思うのですが、それは団体の役員になるということの名譽だと考えるのではないですか？

村上 それはいなかには多分にあります。こういう例があります。会長になるには不動産のあるもの、役員はその日の生活に困らないもの、平会員はせつせと働くもの、そういうふうに分れているということを、今度の地方の会議のときに皆さんから大へん意見が出ておりました。

坂西 実際はそうではなくて、会長、副会長、書記あるいは部会長という人はほんとうに働くことのできる人、そしてまた大へん御苦労ですけれども、一年お願いします、その次の年にはだれかまたなるのですからというふうには、平等に能力のある人を選ぶ。ことに選挙の年であつたら、どんなことにも影響されないような人を選ぶ、それからまた来年何か催があるとすれば、いい考えをもち、行事をさ

道感を与えるということはほんとうにあり得ることです。せいで二年ぐらいいでかわっていったら、そんなことにはならないような気がいたします。

村上 そんなことは到底考えられないようなことだと、皆さんは思いになるでしょうが、助成金をたくさんもらっている方が通りがいいから会長さんにしておかにやならんとか、そういうことが公然といわれておりますから……。

坂西 そうすると自由がないといわれますけれども、ない理由は、婦人会の内部で自分たちでつくっているということになりはしませんか。

村松 地位のある人、古い人が会長になる。そういう傾向が強く残ってまして、なかなかなくならないのですが、けれども、それを少しづつでもこわしていつていっていると私は思うのです。というのは、今まで何か不自由していることがあると、だれだれさんがやってくれる。あの人なら顔がきくから、金をもらってきってくれるというふうだったのです。私たちは町のはじっこだもので、それに選挙のときに一票にもなりそうにないと思うのか相手にしてくれないので、それを幸いに、私みたいに間借り同然の生活をしているものがみんなに呼びかけて、自分たちで町をよくしていった、そうするとその隣の方の人たちもやはりそれにのりつて、町会長なんか当てにしていったらしょうがない。自分

でやらなくてはだめだといってやる。そうすると今までの有力者の力というのがだんだんなくなっていく。それはほんとうに一つの町の中での一部分のことですけれども、気長にやってくずしていくよりしようがないと思っているのです。

河野 私は最近こんな話を聞いたのです。婦人会の役員を同じ方が続けられる。とても不満だとおっしゃるものですが、それでは規約で、二年なら二年と任期をはっきり押えればいいのですよと申し上げたのです。そうしたら総会がありまして、その総会で規約の改正をはかったけれどもめんどくさがって、みんながどうでもいいというので役員の任期も決めずにそのままずるずるべったりに通してしまっただけなんです。規約というのは協同活動をするための一応のルールなのです。みんなが知っていて、悪いときに改めていくように会員が心がけなければならぬと思えます。

土屋 その御意見には賛成ですが、私の方の会長さんも、任期が一応二年と定めてありますけれども、長いことやっております。それは会長になり手がないからでなくてくれといっても、私はいやだといって回避する。なりてがないというのは、会長というものの責任が重過ぎる、負担が重過ぎるという面もあるのではないかと思います。それ

んもそうやってしまおう。そうしたら婦人会がこわれてしまう。校区内におれば何としても入らなければならぬというように強制するわけです。婦人会々員になるならぬは自由であるべきなのに、その自由が強いのです。

坂西 たしかにおっしゃる通りなのです。婦人会に入っただけを納めている以上、人間であるからには役得がなければならぬと考えましょう。何か婦人会に入ったことでプラスになるものでなければいけません。そのプラスになる仕事というものを婦人会がしてないというところに問題があるのではないですか。ですからもし私が婦人会の会長であって、あなた方は義理でもって、どうしても坂西のやつが会長になった以上入らなければならぬというので入っていらっしゃる。私は大いに張り切って皆さんの期待に沿うよう努める。なるほど入ってよかったという仕事をしなければならぬわけでしょう。

村上 それを期待するわけなのですが、往々にしていかの地域婦人会なるものは魅力がない。上からの押しつけを下へ流す程度ですから、つまらないということで、会費を納めるだけの会員になる。

坂西 ところが婦人会の会長を選んだのはあなた方なのです。

村上 そこに悪循環があると思つて悩むのですが……。

をみんなが負担するというふうにすれば、会長というものはスムーズに交替できるのではないかと思います。

小川 志な 責任が重過ぎるのかということよりも、私は同じ主婦の立場からだれかに寄りかかっているということがいるんところに出てくるのではないかと思います。だれかがどうかしてくれるという人まかせ的な、まともに風を受ける勇氣が欠けていると思えます。

村上 会長によりかかってしまつて、私どもが知らん間してるといふことは、一つにはみんな婦人会員になるのに自覚しないで会員になってしまった、会員にさせられてしまったからではないでしょうか。みんなが会の目的をはっきり見きわめて、この会ならと思つて入っていないものから、婦人会なんかどうでもいい。あなたまかせ、会長さんまかせ。会長さんは金をたくさん取ってくれる人の方がいいということになってしまつてしまふ。私どもの自覚がそういうふうな会を運んでしまつていくことも多分にあります。

坂西 そうすると結局は自分の考えでなく外からの力が入れられてしまったから、責任は負えないという。ところがだれに強制されて入られたのですか。

村上 その校区内に住むと自然に会員になってしまふような、お隣の奥さんが入つていらっしゃるからあなたも入らなければいかん、あなたがいやだということとこちらの奥さ

原田 そういう役員本位でなく、会員のための婦人会であつたら、会員が真に必要な性を感ずるような会にしていったらいいのではないかと思います。それから婦人団体は民主団体であるといふ、その上に立っていらっしゃる指導者自身は民主主義をとなくてはならいしやいます。はたして内面的に民主化された団体であるかどうか。指導者自身会員のためのことを思ふのだったら、一〇年間も会長をつづけていいものか、もつと考へていただきたいと思つてゐるのですけど、その責任は各会員にあると思つたのです。

横関 皆さん婦人会は仕事をしないといふことをおっしゃるのですが、私たち町婦人会の中には社会部とか、教育部とか、生産部とか、いろいろお仕事があるのですが、それを大きな婦人会の集団にまづけていてはまともでないから、小さな婦人学級というグループにみんなその仕事を割り当てていくのです。大へんスムーズに婦人学級も活動しますし、婦人會もいい婦人會になりつつあるので

坂西 仕事を分担することによってみんなが婦人会の会員であるという意識が出てきたわけですね。

村上 婦人会が仕事をする場合、会長なり、役員の方たちが、私たちはこういう計画を立ててやつたからこうしなさい、ああしなさい、というところが多分に見えるのです

ね。下から盛り上った、こういうことをしようではありませんか、こういうグループを作ろうではありませんか、というのが大へん少いと思うのです。こういういい料理の講習会をやったのに出てこないではないか、こういういい編みものの講習会をやったのに出てこないといわれるのです……。

坂西 そういう傾向は多分にあるのですが、それは結局会長さんが浮き上って、下の方で何を求めているかはっきりつかないからでしょう。もしつかんでそれにこたえることができたなら、いろいろ仕事をやってもそういうふうに浮いてしまわないのではないですか。

村上 私ども下からの盛り上がりというのをよくつかんでいただきたいと思います。こういうことをしてやったのにお前たちはちっとも困ってこないということをよくいわれることがあるのですが、みんなの声を聞いているんな計画を立てるべきではないかと思うのです。

小川澄子 私が、いつも考えるのはリーダーがそういうことを汲みとっていただきたいということが一つと、それから責任を分担するということなんですが、私たちの団体は小さなグループが集まりまして、統合的な文化団体を作っている。それが協議体組織なので、小さいグループのときはみんな責任を感じてよくするのですが、もう一つ上の

と、その中には一つの社会的不安というものがいつても背景になっているのではないですか。こういうふうにはしたいと自分は思うけれども、もしその通りにやって世の中の人に反感を買って、近所隣の人々がまゆをひそめるようなことになる、自分に好意をもたないようなことになる、そういうときにもし自分の夫が失業したらどうしよう。子供が進学したいというときにはどうしよう。就職のときにはどうしようというふうな不安がいつでもしるにあるわけでしょう。それを今度はもう一歩進めて、もしほんとうに皆さんが与えられた政治の権利を自由によく使ったら、生活の不安が、長い目で見ていくときには、だんだん社会保障制度を通じて一掃されていくのではないか。今、来月の不安があるからといって、無自覚に行動し正しい政治が行われず、相も変らず汚職、腐敗というふうなことになる、ますます不安になっていく。こういうところにやはり一つのかぎがあるのではないのでしょうか。

村松 勉強したのですが、忙しい生活をしていて、私なんかまだいい方としても、内職でもって目を追われている人たちは勉強のための勉強なんていうのはできないのです。けれども自分の生活を通して、自分の生活というものは政治につながっているのだということを一つずつ学んでいくことが必要なのではないか。それだったらどうして

段階になると、「私知らない」ということになるのです。そこがふしぎなのですが、責任の分担といっても、大々くならぬ私たちの気持はすぐ反映しなくなるのです。そこところはもうどうしたらいいでしょう。

平川 今のお話ですが、それぞれが自分の意思を通して思っても上に反映しない。自分の意見が反映しないからその会が悪いのだというふうに、女の人ばかりはきめこみ過ぎるのではないか。ある程度は譲歩ということも必要だと思うのですが、一度に上に盛り上げようと思うこと自体に無理が生ずるのではないかと思います。

小川澄子 私たちの場合女の団体ではなく、男の方もたくさんいらっしゃるわけなのです。でも大きくなれば自分とつながりが希薄になってくるという気持がどうしても抜け切れないのです。

坂西 これはほかの問題とつながって参りますけれども、今、自由ということにしろって、皆さんの考えを言っていたいただきたいと思うのです。いろいろ外からの圧迫があると最初おっしゃったようでしたけれども、結局は自己反省が足りない。自分の考えが足りないことによって自由というものを犠牲にしようというところが今の傾向ではないでしょうか。そうしてみると、なぜそれでは自分が正しいと思うことこうしたいと思うこともできないかという

も今すぐに勉強するということとはできなくても、少しずつでも勉強せざるを得なくなってくるのではないかと思うのです。

村上 私ども去年、よその市に見学に行ったことがありました。市長さんが子供と婦人につながる政治をしたいということを標語にして立候補されたので、町に、一つの校区ごとに子供の遊び場がありまして託児施設、それに図書館が併設されておりまして、各所を回ったのですが、ほんとうにうらやましいという気がつくづくして帰ったのです。帰ってきて皆さんおっしゃるのに、「いいですね、あの市はお金があるから」とおっしゃるわけですね。皆さんに、あれは私たちの一票が、私たちがどんなことを願うか、それがそのままその市長さんにつながって、それが政治に反映されているからああいうふうになるので、今度市長さんを選ぶときに公約を聞いて、どういう立場で市長さんが立たれるか判断してから投票しましょう。そうしたらあんな町もできないことないわねということと皆さんに話したわけですが、どうも政治と生活との結びつきというものが、何となく観念的な、まどろっこしいというふうに考えられがちではないかと思うのです。

坂西 最後に、この部会では大部会が家庭の主婦でいらっしやいますけれども、社会の自由と責任、そしてその個



人の自由と責任、今日社会をよくし、家庭という集団を育て、またもっと大きな集団を育てていくということのうしろには、男女の分業という問題がある。男の方は、料松さんの場合は御主人と協力していられしやる、竹中さんと平川さんは仕事をほったり持っていられしやるのですが、ほかの方は別にこれという仕事をなさっていらししやらないとすれば、社会をよくしていく、集団を育てるという責任は大体文明の社会では女性の仕事になっていくのです。それでどうしてその女性が自覚して、ほんとうに自分で考えて、そして自分の困っている問題をお互いに話し合って、次の人と話し合って打ち勝っていく。そういうところに私はほんとうの前進する可能性が出てくるのではないかと思います。今日は男性が欠席裁判で、ひどくやられたのですが、私は男の人が悪いからというよりも、その悪い男の人たちをどういうふうにしてあなた方が牛耳って、ということと大へん失礼に当るかもしれないが、うまく操縦して、ほんとうにいい社会を作るように訓練していくか考える。家庭で今日では男と女の子とほとんど区別がないように家庭の仕事でも協力するし、それからまたいろいろの日常の問題にも真剣になって男の子は考えてくれましよう。お母さんのいい友だちです。家庭で幼いころから、責任を分担する仕組みになっているのです。分業の中から、手をつない

いのですが、必ず集団には集団全体としての責任があると思えます。これはまずい面を言わなければならぬかもしれないですが、私たちは道を直すということになったのです。その中の一軒の人が、私はその道は通らない。こちらの道を行くから私はそんなところに協同して出る必要はないとおっしゃった方がいるのです。でも自分がそこに住んでいる、その集団に参加しているのですから、そういうことはいやでも、ある程度の自分の犠牲はあっても、やはり大きな集団の目的のためにはその方に協調しなくてはならないかと思えます。

飯田 集団の中の個人の自由と責任の意味をはっきり皆さんの具体的なお話の中から引き出されたかどうかということは今考えているのですが、やはり一つの意味づけをしてくださった方がいいのではないかと。みんな考えた方がいいのではないかと思えます。私はこう解釈しているのですが、皆さんにも伺いたいし、先生の御意見も伺いたいのです。目的をもった集団とに分けます。自然発生的な集団の中で、個人の責任は人間社会において、その市民としての正しいルールを守るということが責任だと思ふのです。それで自由というのは、正しいことを妨げられない自由をもつことだと思ふのです。正しいこととは何かという解釈

で仲よく生きる心構えが育って行く。こういう点もお考えいただきたい。

今まで取り上げた問題で、私は皆さんのお考えを伸ばし自分の考えを抑しつけようとは思いません。しかし、またそういうことができるものだとも思いません。しかし、二日のお話し合いでまだたくさん疑問が残っていると思いますが、こういうことは改めて聞きたい。あるいはもうちょっとの時間でも話し合いたいという問題はありますか。残りの時間を有効に使うために取り上げたいと思ふますが……。

竹中 それほど重大な問題ではない、本人の自覚の問題だといえどもそれまでもありませんが、先ほどの責任ということですが、大きなグループの目的、集団の目的のために一人々々が責任を果たすことによって個人的に少し犠牲が起きた場合、それが集団の目的として大きく自由が与えられるというときは許されてもいいものですか。

坂西 あるときには集団の目的を果たすために、しかもそれが将来大きな効果をもたらす、有利になるという場合には、個人は自分を犠牲にしてもそれに参加して、そしてそれが完成するように努めるべきかどうかということですね。

土屋 私はそう思います。一人々々の責任の場合にはい

になると思いますが、国家権力に拘束されない自由、権力の意味を広くとって勤め先の上位による権力とか、広い意味の権力に拘束されない自由……。

坂西 今最初におっしゃいましたね、ルールを守るということ。これは非常に重大なことでルールは守らなければならない。しかしそれでは人間というもののはどこまでもルールの犠牲になってしまうかどうかということになりましよう。これはあなたが今おとりになった家庭、あるいは地域集団、隣近所のつき合いとか、あるいはもっと大きくいえば国家という一種の宿命的なグループがありますね。そのグループに私たちはみんな属しているのです。その中の集団の「和」を保つためには、どこまでも自分を犠牲にしていかなければならないかという問題にぶつかって来る。ことに私たちはこの前の戦争のことを考えるときに何かこう水を浴びせられるような感じがするでしよう。負けいくさだと知りながらも一生懸命努力してきたわけですから、あなたが自分一人でこんなにくさに参加したくないといったところで、国家がいくさを始めてしまったら、やっぱり協力するより仕方ないでしよう。協力して、あとには責任をとわれて追放になり、戦犯になったということもありましよう。こういう大きな悩みが人間にあるのです。シューアイツァー博士たちは、そういう問題を人間の肩か

らおろすために、大きな平和運動を起さなければならぬといっているのです。宿命的に非常に重い痛みを人罰はしよっているのです。ただ私たちは第二次大戦後に相当解放されて、そうして自分の意見というものはっきり言うことができるようになった。そうして今度は、その自分の意見を言うことができるようになったと同時に、責任ができた。それからもう一つはたびたびこれは日本で問題になり、また間違つた解釈が下されていくのですが、人間は自由であるからいやなら飛び出していくことができる。しかし、国家から飛び出すことはできないでしょう。どこまでいってもあなたは日本人なのです。外国に行つたところであなただけ日本人ですよ。学校がいやだ、だからストライキを起す。しかしこれではあなたが責任をもてるようになってからやってください。学校の規則がきらいだ。あなたは批判する権利がある。話し合いも出来る。しかし、それを強制するのはしばらく待って頂きたい。どうぞ大きくなくて税金を払ってください。金持になってたくさん払ってくださいね。いいです。そうするときにあなたは、公立学校であれば法律を改正することによって変えることができる。私立学校であれば、あなたはその学校の理事になって規則を改正することができる。こういうふうな手続きというものがやはりあるのです。家庭でも同じことです。その

家庭に育つ以上は話し合いによって親も子供の意見を聞くのですから、子供もまた親と協力して家庭の運営がうまくいくようにするということが子供の責任になってくるわけです。自由と責任ということは、むしろ難しい問題でして、すばつと割り切つた定義なんてものはないのです。時と場合によっていろいろ考えていかなければならないのです。

#### 質疑応答

質問 この会議を第一歩として、今後一年間どのような具体策をもって地域社会の中の個人として生活していきますか、その指針をお聞かせください。

小川憲一 私は「草の実」という小さい会だけの動きしかしておりませんでしたから、これから婦人会とか、それからいろいろな祝賀会と手をつないで、その中から私どもが今まで考えていなかったことをいろいろ交換し合つて、会を発展させ、そこから問題を解決し、また成長していききたいと思っております。

河野 私は今までリーダーの立場でしたが、今年から子供が大学に入りまして、うちが忙しくなりまして、役員もできないので、帰りましたら一人の会員としてリーダーと平の会員の間の掛け橋になって、皆さんの意見を反映して、まあ責めを委ねたいというご期待があります。その方向へもっていくためのお手伝いを何かやりたいと思っております。

小川憲一 私は今まで外に出たことがありません。今日この会議に出していただいた皆さんの御意見をたくさん伺ったのです。その中の大部分が私が考えていたことを裏づけてくださったということがとてもうれしかったのです。今までずいぶん自分は現実肯定派というか、前向きの人間だと思つていて、それでも突き当る壁が多かった、そのことに疑問をもつていたのですが、自分の考え方を裏づけていただいたことがうれしくて、その方向に向かつて勇氣をもつていきたいと思つてます。

加藤 私も会議に出させていただいて、初めは個人の資格で自由な気持ちでいいとおっしゃったのですが、国民の税金でこれだけの費用をかけて出していたのですから何かお役に立たなければならぬと思つております。こういう会議に来て、私は恵まれた立場にあると思つたのですが、私の属しているグループは自主的で自由で、会長というものがなくて幹事は当番制、地区の隣り合っている同志でもっている会で、隣近所も問題がない、というと語弊があるかもしれませんが、よくいっているようなのです。さつき村松さんがおっしゃったように、そういうふうな会に出てこれる方は問題ないのですが、出てこれないような方、そういう方々をなんとかして会に出られるような

村上市 私はただいま小さな読書のグループに入れていただいて文学の勉強、という大げさですが、そんなことをさせていただいているのです。よい助言者の先生を置いて、文学ということに對してはだんだん深くなる。深くなるのはけっこうなのですが、ふつと、これでいいだろうかというのをよく考えるのです。結局だんだん穴が深くなっていくだけで、世の中とのつながりからは遠ざかるように思う。社会科学的事業から遠ざかっていくようですし、政治からも目をそむけるようなことになって、よくこれでもいいだろうかということを感じ合つたのです。ですからその考えをもう一歩進めまして、横とのつながりを深めていきたい。地域婦人会なんかも、あんなものつまらんつま

らんといいないで、そういう集團は私たち個人が育てるということもよく考えてみる。そういう団体とも手をつなぎ、政治の勉強ももちろん大事だからそういうこともしていきたい。今年中にできるかできないか知らんけれども、そういう方へ一歩でも進みたいと思っております。

坂西 村上さんは今まで、一生懸命勉強していたのですが、それが何か自分の穴を窺って、キツネみたいにその中にすっぽりはまってあぐらをかくてしまおうようなことになっていたので、この会議にきて集團の中に生きるといわれる横のつながりがどういう意味をもつかということをお学びになった。今度は横のつながりを主にして集團の中で個人がどのように力強く生きていけるかということを実際にやってごらんになりたい、そういうことです。

横関 私は婦人学級の陰の力になっているのですが、また帰りましたらこうした婦人学級の話し合いを度々してお互いの向上をはかるということ。それからお互いに人の立場をよく考えてやるという寛容な心、それから自分の問題にたゆまない根気が必要だということを痛切に思いますから、そうした気遣いの力になってあげたいと思っています。

飯田 この会議ではグループの中のリーダーの問題と、それから会員の自主性のなまという二つがだいぶいわれます。

が、この会議に参りましたのは私自身の力ではなくて皆さんのおかげと思って感謝いたしております。未熟であった私がこの会議の中で皆さんのお力によりまして、自信をもったようです。それは女であるということ、子供を育てるとともに集團の育成という大きな使命を負わされているとさつきおっしゃいましたが、私は子供もおりませんので、ほんとうにこれからその言葉を生かしていきたいと思えます。それには、どうしたらいいかと考えておりますけれども、話し合いをするということがいいのではないかと考えたのです。私は今まで話し合いということは何の気なしにしてきたのですが、それがほんとうによかったのではないかしらと思いました。それを自分だけのものにしないで、皆さんとともにやったら、この社会がどんなによくなるかと、それを強く感じておりますので、努力がいてと思えますが、それを一歩一歩しみに進めていって私の力の発揮できるものがどこにあるのではないかと思っております。

坂西 原田さんは家庭と地域社会と集團の中で、すくすくと育っていらしたために、何か自分というものをまだはつきりつかないでいらしたのかもしれない。ところがこの会議にきてはつきり自分を発見した。今後は今まで無意識にやっていた話し合いを、もっと自信と自覚をもって進めていくそうです。

したので、私は作文グループ活動をいたしておりますが、帰りましたら、その活動の中で会員の自主性を育てるということと、政治意識を高めるといふ、そういう方向づけを気長にあせらないで皆さんとの話し合いにおいてなごやかにやっていこうと思っております。

坂西 飯田さんは少し御自分がリーダーシップを発揮し過ぎたのではないかと発言をもって御出席になったわけですね。この会議の結果として気長に、号令をかけるのではなくて、みんなと一緒にやって大きな目的のために進んでいこうという……。

竹中 ちょうど私たち帰りますと、中国プロダクトの地方会議の「全国会議の発表会」というふうなことが計画されておりますので、中国から参加していらっしゃる多くの人たちで、いろんな角度からこの全国会議の意義のあったことを報告して、何かの参考にしていただければと思っております。私たちの職場の中で自分たちがある程度成功しているのではないかと自負しておりますけれども、もっともとたくさん盲点のあることも教えられましたので、そういうことをじつとみつめて、一人一人が向上するようにいかな形で努力していきたいと思えます。

原田 私は集團の中で自分が育っておりますので、この会議に参加いたしますときに、皆さんに申し上げたのです。

土屋 私は私のまわりの集團の中で毎日生活しております、その點から外へ目を向けなかったときがあるのではないかと深く反省しております。やはりもっと自分というものを、世間の視野を広くするといひますか、もっと説背グループへ入るとか、婦人雑誌の友の会に入るとか、そのことでもっと視野を広くして先ほど先生が、この社会をよくするのは女性の責任だとおっしゃいましたが、それにはやはり自分自身というものが学習的な態度で、法律のようなこととか、社会保障のようなこととか、もう一度一歩戻ってゆっくり勉強して、今までよりもっとよく近隣のものとも話し合って進んでいきたいと思えます。

坂西 土屋さんは大体今まで集團の中で一生懸命活動していた。もちろん自分というものもつかんで個人として生きていらしたのですが、今後もっと真剣に勉強することによって自分をしっかり確立させるといふことです。

高橋 今まで地域婦人会とか、そのほかの会にあまりに冷淡であったと思いますから、入る入らないは別として、ここにいる皆さんから伺ったことを生かして、もっと親切な気持ちで、婦人会のためにも何かお役に立ちたいと思っております。

国領 私は舞踊家という特殊な職業ですが、特に今度の会議でいろんな方に接しられたということはほんとうに自

己の成長だと思っています。最初はちょっと驚きましたが、特に昨日参りました移動会議がとっても勉強になりました。広い社会にはいろんな方がいらっしゃるのだということを感じました。私の職業を通じて、もっと社会的に働かしていただくと思っています。

松井 私は文具屋をやっておりますから、接するのの子供たちなのです。それで子供たちと一緒に小さな図書室を開いております。子供たちには年令や、知能の程度がありますから、そこでしつけをしたり、読ましたりして、社会の中の責任と自由というものを徐々に植えつけていきたいなと思っております。

坂西いろいろの点で私も皆さんからたくさん教えていただきました。それからなお明日の総会でこの問題がもう一度広く取り上げられますから、どうぞそそとときによく締めくくりに御自分でおつけになってください。長いことありがとうございました。

### 第三部会

|        |        |             |        |        |        |        |        |             |        |        |        |        |        |             |  |
|--------|--------|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|-------------|--|
| 青<br>嶋 | 山<br>形 | 神<br>奈<br>川 | 富<br>山 | 岐<br>阜 | 静<br>岡 | 京<br>都 | 奈<br>良 | 和<br>歌<br>山 | 島<br>根 | 山<br>口 | 愛<br>媛 | 福<br>岡 | 宮<br>崎 | 鹿<br>兒<br>島 |  |
| 斎藤敦子   | 植松富枝   | 加藤梅子        | 大坪恵美子  | 栗山米子   | 金子サト子  | 岡部裕子   | 小出圭子   | 半生カズエ       | 小村明子   | 弘中れい子  | 松浦定子   | 馬場幸恵   | 梅北千代   | 佐々木絹子       |  |
| (農)    | (農)    | (農)         | (農)    | (農)    | (商)    | (農)    | (主)    | (農)         | (教)    | (農)    | (農)    | (農)    | (農)    | (主)         |  |
| 藥      | 藥      | 藥           | 藥      | 藥      | 藥      | 藥      | 婦      | 業           | 月      | 業      | 業      | 業      | 業      | 婦           |  |

大谷 これからお話し合いに入りたいと思いますが、なかなか気持ちでさくばらんには、腹の底にあることをお話し合いしたいと思っています。今日は、自分たちの最も身近な集団としての家族の中での自分という問題、を考えてみたいと思います。この問題は、所感文にそういう問題をお書きにならなかった方でも、共通の場を持つという意味で、お互いに話し合っておくことが大事ではなからうかと思つたのです。あとで、自分たちが意識的に作った地域婦人会とか農協婦人部とか、あるいは読書会とかいったいろいろな目的集団の問題にするわけですが、その前提として、この運命的集団と自分との関係について、一応これを嘆きしめておく必要があるのではないかと思うので、そこから話し合いに入っていきたいと思っています。

私、昨年も農村関係のリーダーをやったのですが、この会議を通じてほんとうに、会議員のみなさんが、心からのお友だちになられたことを大へんうれしく思いました。これは、最後に提案しようと思つていたので、昨年、私はお別れにさいして、こういう提案をしたのです。みなさんは、いわば婦人会議の同期生なのだから、北から南にちりおりに別れても、この婦人会議でお互いに心の中から語り合つたことを忘れないで、心と心の交流をいつまでも続けていくことが望ましいのではないかと。そしてその部会

では北から南の部会員にノートがずらりと回っていついてるわけです。そうしてお互いに自分の感じたこと、あるいは悲しいこと、嬉しいこと、そういつたことを書いてまわしているわけです。で、宮崎県ではこれが新聞にも「愛の手帳」というので大きく出ました。それがね返って今度は北海道の新聞に紹介されたのですが、そういうふうには北海道に話し合いをすれば、わずかの日数でも心と心が触れ合つて、そして困っている人にはお互いに助けるというか、支えてあげようというような愛情も生まれてくると思います。どうかそういう雰囲気が生まれるように、お互いに信頼し合つてお話し合いをして頂きたいと思うのです。

#### 家庭内での自由

佐々木 私は大体外地(台湾)で育ちました。主人も姑もおりますけれども、皆外地育ちで、三十年以上おりますので、封建的ということはありません。感じたことはありません。主人も子供も参りますのについても大変理解がありますし、まず子供に話しますとぜひ行つて来いとまっ先に賛成してくれました。婦人会などに出る機会が多いのですが、そういう場合でも主人はお母さんは社会をよくするためにいいお話を聞きに行くのだからというのを、小さい子供たちにもいい聞かせてくれるので、子供が大変よく理

解してくれました。一番よく協力してくれるのが主人と子供で、その点地域におきましてもあすは旦那さんの理解があるから通つておりますので、割に動きやすいと思つております。

梅北 私のところにはいろいろな身の上相談に来る人があります。その方たちが大いへん遅くまで話し込んでいきます。うちでは家族四人が家事を分担しております。夕御飯の仕度は私の責任になっていきますが、皆が遅くまで話し込んでいると食事が遅くなり、子供たちが大変不平をいうことがあります。ですから夕方の来客はとて困つておりますが、農村では面と向つてお断わりもできず、その点で苦労しています。

松浦 今はちよつと家を離れていますが、父や姑があります。実は北海道に若い夫婦でおりましたが、戦争ちよつと前に四国の方に帰つて来ましたが、私たちが非常に自由にふるまつたものですから、両親のごきげんを損じまして、家庭の中でも村で評判になるくらい苦しい生活をしたわけですが、しかしその後お互いに生活の事情がわかりまして、今はとてもいい両親になりました。ちよつと今私の方は煙草を植える時期で、一反の煙草畑で丁寧に植えないといけないので子供や近所の者に任すのはいやだと思いましたが、お母ちゃんがやるように一本一本丁寧に植えるから

といつてくれましたので、男の子四人と主人とに任せて来たわけですが、あまりうちのことは心配しないでこの会に参加することができたのは、子供や主人の理解があるからと大変喜んでおります。

弘中 今は大変しあわせで、家族関係も円満にしておりますけれども、私はほんとうに生活のどん底に一時おりました。やっぱりどん詰まりにいったときには相当喧嘩とまではいかないが、お互いの神経がとがってしまふことはあるので、結局「和」ということは精神面もあるけれども、やっぱり経済的に最低生活だけは安定していることが必要でしょうね。

幸生 私の家では子供が六人おりますし、私たち夫婦と姑とおりますが、それぞれに経済的に独立しているのです。経済的にみんなそれぞれ独立している関係で、自主的でめいめいが自分は何党や、何党やと家族の討論会のようにやり合います。皆それぞれに自分の意見を誰にも恐れずに言いますし、行動もあまり拘束されずにしておるような状態です。

小出 私が今日の自分を生み出すまでに家庭でずい分苦しみました。家族は夫婦と子供五人で、たゞいまは全部サラリーマンと学生です。私が育友会、婦人会に加入しているので昼、晩と外出する機会が月に半分くらいあり、昼は

鮎をかけておいでくるのです。ところが五年生の子が三時ごろに帰ってくるので、その子を納得さすのに悩ましました。井の中の蛙のようなお母ちゃんでもいから僕と一緒にいてくれた方がいいというのです。毎日毎日納得させましたら、今度六年生になりましたけれど、昼は出られるようになりました。夜分はサラーマンと学生ですから、みんな七時半に帰ります。ところが会合が七時から七時半からやるのです。私は時間勵行を皆に言っている関係上、自分が行かないと時間勵行を言われませんので、帰るのを待たず放っておいて行く場合があるのです。そうしたら昼は行ってもいいけれども、夜はいたらどうかという意見が出て、それで会に遅れたこともありますし、時計ばかりにらんで行きたいなと思っても行かれない晩もありました。「お母ちゃんが教養を高めんとこれから生きていけない。視野を広げんといかんから出して貰いたい」といって、このごろは子供が帰ったら自転車転の荷台のうしろにつけて貰って行くようになりました。私は自分が家庭から自由を得たものを婦人会やPTAに持っていきまして、みんなにだんだんにそれを押し広げていきたいと思っています。自由を与えられて責任を果さないとまずいので、家庭という場をあくまで忘れないように自覚して、日常の生活の中に計画と工夫を入れて、出るときにはそれだけの用意をちゃん

ません。子供は姑に育てられますので、自分の子供がまるで小姑みたいなことになりますので、そういう問題で悩んでおります。

金子 農村では、周りの人たちの言うことを気にしなければなりません。私のところは本家があって、七人の兄弟が全部同じ町に分家しており、私の主人が末から二人目です。ですからどうしても上の人たちに気がねをしなければなりません。子供のしつけなども周りの人に気がねをしていると、自分の子供だけをよくすることは非常にむずかしいので、環境をよくしなければと思って、外地から帰って来た人たちの話を聞き、そのことを主人にも話しました。主人は新聞を読みたくなると「新聞を持って来い」お茶を飲みたくなると「お茶を持って来い」といっていたのが、このごろは子供たちと話し合って自分でやるようになりました。それから一番風呂は主人が入るものとしていました。子供たちと話し合って誰が入ってもいいということになりました。家内中がかせをひき、私が一番長くやすんだ時、一番末っ子が、お母さんが一番榮養をとるのが少いので病気になるのも早くお母さんといふたのです。それで子供たちが当番制で炊事をやって、みんな公平なおかずを作ろうということになりました。長男が炊事当番のときに主人がいらないのに風呂が沸いて困ったことがあり、私が一

として、自由に対する責任を遂行しておりますけれども、まだまだ甚だ不完全です。四十九才ですが、年を絶対意識しません。音楽同好会も皆若くなれといひ引っぱり参ります。詩吟にも参ります。

岡部 私たちの部落は大変貧乏で田圃も少ないし、「あしふち豊年米食わず」といって、雨だけで田圃を稼げるので、みんなが豊年だ豊年だという年には早稲でお米がとれず、みんなが今年ではできなかった、降り続いたというときに豊年なのです。昔は畑地で養蚕をやっていたが、このごろ養蚕がだめになりましたから、川から電気で水を上げるようにして、畑を田圃にしたりしてお米がとれるようになりましたが、五反農家で、部落の中も兼業農家が多く百戸の戸数の中で学校の先生をしている家が十軒あります。そのほかお勤めに出ている人もいて、ほんとうに農業だけでやっている家はごく少ないのです。私は嫁いだ翌年に別がなくなりましてからです、舅のやっていた男仕事全部私の方にかかり、姑と二人でやりました。子供ができませんと、姑は若い者に仕事をさせなければなりませんから、子供は自分が引き取って育ててくれます。それで私はお乳も朝とお昼と晩と三回よりやれないのです。仕事をしている途中で帰って来てお乳をやったりすると、仕事の邪魔になりますし、おしめも朝かえたら昼までかえてやれ

番風呂に入ってもいいということになりました。そのときにあまり幸福そうなお顔をして喜んだので、主人が帰って来て、そんなに嬉しいならこれから一番風呂に入っていいたいこと、それから家庭の中が民主的になりました。

栗山 私の家は六人家族です。両親は子供がなかったものですから、私の主人は三年生のときに養子に來たのです。結婚したときは主人が二十三才で私が二十才で、面倒な世話のやるものでしたが、母がとても理解がありました。嫁に行った日から「財布はここに置いてくれば、使うのだよ」といってなんでも面倒がらずに教えてくれました。そういうしあわせな生活をしておりまして、今度の婦人会議にくることに、畑で働いていたら母が手袋を持って来て、「いつもだったら手袋など持ってきて上げてあげないけれど、東京へ行くのにあまり手がきたないといけないから」というのです。お母さんの思いやりがほんとうに嬉しくて、仕事をしながら涙をこぼしました。今は子供も大分成長して楽になったけれども、二、三年前はとても苦しかったので、主人と三人になったとき子供に、「えらいなあ、休もうかな」といったら、子供がこの歌を歌った楽になるよといひ「しあわせの歌」を歌ってくれました。そのときほんとうに子供は成長したなと思ひました。このときから子供や主人になんでも話し合えしあわせになるといふこと

がよくわかって、なんでも話し合っております。母も出かける二、三日前にはどこに行かなければならないということをはっきり申しますし、私も会合があつて出かけたときは朝の食事や晩の食事のときに話し合つてゐるので、家族の中でのいろいろ悩むことがないのでほんとうにしあわせです。

大坪 私の方はまだ一般に封建性が強く、経済的にゆたかな家でも、お嫁さんには下着一枚買つてやらない。全部実家から持つて来なければならぬのです。お金も全然買えないために、子供に何一つ買つてやることもできず、若妻会の会費にも困るというお嫁さんが少なくありません。少しでも小遣をいただければ、目的貯金をして洗濯機などを買うこともできるのですが……、嫁にも、たとえ少しでも小遣を与えるようにしてもらいたいと思つてゐます。

加藤 私のうちは約二町歩足らずの畑をやつており、主人と二人で牛を飼ひ、毎日二人だけで忙しく働いております。私の家は以前から学問を非常に尊んだ家庭ですから、現金収入のない今の状態で全部子供を學校にやるようなはめになつてしまひ、それは強いられただけではなく好きでやつたのですけれども、現在仔牛の収入も少なくなつておりますので、このごろは大変な苦勞で畑を一枚ずつ片づけて子供たちにかける状態です。こうしていっしょうけんめい

たちも子供に束縛を受けておりませんが、自由であります一方、親に対する責任觀念が非常に少ないのではないかと考へ、ありもしないお金で全部子供を教育しようとしたのが間違つてゐたのではないかと、主人と話し合ひます。ほかに主人と一緒に短歌グループに出まゝして楽しく過してあります。

植松 開拓地の者で、家族は九人で民主的に仕事は分担してやっております。私の実家の付近はもと地主が多く、非常に封建的なところですが、私のところは開拓地なので非常に考え方が進歩的で、私が結婚したときなじむまでは自由にしてなさいと姑から言われ、そのときは家族の仲間外れのように非常に悲しかったのです。それで私にも仕事を下さいと言ひ、今は家畜の世話を受け持ち、毎日が張りがあり、楽しくしています。またこんなこともありました。果樹地帯なので消毒が月に二回ほどあり、いつも四時半ごろ起きるのですが、消毒の疲れで目を覚ましたのが六時ごろでした。「お母さん遅くなつてごめんなさい」といふたら、まあ誰でもくたびれてゐるのだし、ゆつくりなさいと言われたときはほんとうに涙が出ました。近所の方が十年も経つて家族のいざこざで自殺したことがあります。が、このような犠牲者の出ないようには若妻会を通して明るくしたいものだと思つております。

働いて借金して學校にやつて、その子供たちが果してどういふ生活をするだらうということに疑問を持つようになつたのです。子供たちもうちの内情をよく知つており、むだづかひはしませんし、家庭教師などをよくして大學に行つておりました。が、どうやら二人大學を出まして、その次のが大卒、あと高校ということになつておりますが、卒業したあかつきに農村にとどまる子が一人もなくならないか。私たちは残り残された畑を死ぬまで耕し、子供たちは自由な社会で自由に暮らす。それもべつに悪いことではないと思ふのですけれども、なにか親のあとへついて来ない子供を作つてしまつたという事を思つてときどき悩むことがあります。朝の五時に起きまして乳を絞る、日中は畑仕事をしたり乳を絞つたり餌をくれたり、また夕方絞る、夜の最後の乳が九時半から十時の間に絞る、やすみすると一時間くらいになつてしまふ。そういうふうになつて一日をふり返つてみると、子供たちはあつちの部屋、こつちの部屋に全部電氣をつけて自分たちの部屋でいっしょうけんめい勉強をしていますが、なんだか間違つていやしないか。このごろは年とつてからだは疲れやすくなつたせいか、學校教育をあまりしないで、子供たちに働かせる意欲を持たした方がよかつたのではないかと考へるときがあります。子供が自由に考へ、私たちも自由を許しております。私

斎藤 私はものごころつかないときから父と別れ、祖父と母の間に育てられました。口ではお嫁に行くといつておりましたが、一人で育てられました母を捨てて行かれるものではなく、また妹も弱いので、もやもやしてゐるうちに年をとつてしまひました。現在、婦人会、読書会と毎日歩んでいます。母が夕食の仕度をしてくれ、とてもありがたいと思つてゐます。

#### 農村社会の封建性

大谷 これで一通りお話を伺つたのですが、いろいろな問題が出てゐると思ふ。大体皆さんのお話を伺うと、一般的に考へられてゐるのに比べて農村の家庭が民主化されたと言へると思ふのです。これは戦後の大変大きな変化だと思ひます。しかしそれにしても大変問題が残されてゐる場合がある。皆さんのところはうまく仲良くいつてゐるにしても、一般に皆さん方がお住みになつてゐるところではどうなのでしょうか、私はあちこち回りまして、聞いたところではいろいろ調査してみると、農家の娘さんはできれば農家の長男のところへ嫁に行きたがらないというのが圧倒的に多いわけ。親御さんたちもできれば自分の娘は農家の長男に嫁にやりたくないという御意見を持つていらつしやる方が多いように私には考へられます。そういうこと

はどうなのでしょう。

加藤 郵路をずっと見回してみますと、今ここで皆さんがおっしゃったような民主的な家庭というのが非常に少ないのです。それで今の時代でなんなのがあるかしら、というふうには、非常に哀れなお嫁さんがあります。たとえば、お嫁さんが外から仕事を済まして帰ってくる。お嫁さんが飛び込んで行ってお茶の仕度をしてあげればいいのにと思っても、うちの中で、お母さんやおばあさんがちやほやして、お嫁さんが手を出すひまがない。ただうちの中でうるうるしている。けれども、どこからこの人たちに手をつけたらいいのかと思うのですが、お嫁さんに「もっと伸び伸びしなさい」「今の時代はこうですよ」といっても、お嫁さんにはね返りがいくのではないかと思います。

弘中 今おっしゃったお話のお嫁さんですね。そういう理解のないお嫁さんの場合は幾つくらいの方ですか？

加藤 六十八、九からですね。それより若い人もそんなふうな方はいらっしゃいますよ。

弘中 うちの近所を見てまして、ほんとに七十前後から上の方は昔の通りですね。ですからもうそういう人は大体、からだが弱ってしまっていて働けなくなっているから、あまり前のようにでないように思います。今過渡期で、だんだんよくなっていくのではないかと思っています。

とを私にはお話しして下さいませんか。近所の方に聞きますと、もっと実情がわかるのですけれども、世間的なね返りがこわいようで、お母さんの方が権力を握っているように思います。農家の長男は割合無気力で、持って帰った収入をお嫁さんにくらかでも残しておいてお母さんに渡せばいいと思うのに、全部渡してしまうのです。また、田圃に行くのにもさっさと歩く、「立話するな」と言われ、人と話すことがいけないのです。ちっともむだのないようにさっさと歩いて仕事をよくするように見えるか、そういうように努めなければならぬのです。

小出 大体都会的なところは割合お嫁さんが羽ぶりをきかしますし、農村はお婆あさんが羽ぶりをきかす。うちの方はちょうど中間にありますから半分半分です。

加藤 純粋の農家がいないのです。兼業農家でずっと余裕があるから大分いいのですけれども……。

梅北 私がお嫁に参りましたときには、馬車で挨拶回りをしましたら、宮崎県も薩摩の方に近いのですか、「加勢にいらっしゃったそうですね」というのです。嫁そのものを初めから労働力と見ている。それが近所の第一声でした。しかし最近では婦人会ができ、ある程度役割をなしたと思います。これはどうかと思うような厳しいお嫁さん方でも、実際お嫁さんを迎えますと、自分の嫁を近所の方

大坪 この間、婦人会で家計簿をつけることになって、子供のおやつのことまできょうめんについているのに、お嫁さんに買ったものは書いてないのです。結局そういうことを書くと、嫁にも買ってやらなければならないからと、カットしてしまうのではないかと思いますが……。

弘中 私のところは近所を見ても、お嫁さんの方がかわいそうなのです。お嫁さんの方が小さくなっているのです。

半生 弘中さんのおっしゃるのに同感なのです。私のところは平均して五、六反、一町と持っているとところは少なく、大てい勤めに行くのです。若いときは勤めに行くのですから嫁さんは主人からお金を貰います。お嫁さんになると今度は自分の夫は収入がないものですから、自由にお金で賄えませんが。農家では小豆とか豆とかいうようなものを売ってそれが小遣になるといって、若夫婦は今でしては落物でもお嫁さんに買ってあげるけれども、年寄には回って来ないようで、年寄の話では自分らが一番損な時代に育った。お嫁に来たころはお嫁さんに遠慮し、今ではお嫁さんが大將になって自分らが邪魔もの扱いになったし、と話合っています。

岡部 私がこうして参りますについてそういう関係のありそうなりうちのお嫁さんに聞きますと、全然そういうこ

からよく思われようという、誇りといいますが、自慢したい気持ちが先に立ちまして、お嫁さんを丁寧に扱われないですね。自分はいとお嫁さんだということをおぼえているのでしょうか。この前も、「どんなですかお宅のお嫁さんは？」という、「人間ですかいい点も悪い点もありますけれども、親さえ我儘していれば世間体もいいですからね」といまして、そんな家庭が多いようです。

佐々木 鹿児島県も相当封建性の強い有名なところで、男性が断然権をきかしておりまして地方会議のときでも、男性は民主化のガンだということを盛んに言われました。

(笑) そのせいでしょうか、姑と嫁の問題は割合ないようです。結局経済の面が一番問題のようで、経済的に縛られて牛馬のように働かされ、婦人会などに一日出ていけばそれだけその日の収入にさわるわけで自由がなくなる。お嫁さんとお嫁さんは同じ悩みを持っているようです。

斎藤 私は岩手県に近い三戸郡ですが、青森市の近辺よりは私たちの方は封建制が強いようです。家族制度はなくなりましてけれども、一家の主人が相当権力を持っておりまして、あとの人たちはあまり意見を言わないというよりも言えないような立場です。ことにお嫁さんは発言すると女のくせに発言したといって、その態度を非難されます。純農家は三年間は自分の持つて来た作業衣の修理もできな



い状態で、盆とか正月に三日くらいひまを貰ってうちに帰るのですが、そのとき帰って帰って帰って帰る次第です。また財布の問題は、私たち二十人ばかりで集まってお話し合いました。大概十年近くになってもまだ姉さんが握っているのです。旦那さんも働いて中堅をなしているのだから、財布を貰えないでしようかといまして、働くときは技術的には息子さんが進んでいるので、その点では認めるようですけれども、収穫のときには全部が親父さんが取り上げ、結局親父さんの奥さんである姉さんはいくら小遣は貰えるのですけれども、息子さんは財布も握っていない。そのお嫁さんは結局みじめなわけです。

### 結婚の費用

大谷 非常に大きな問題だと思って、いつでも気にかかっている問題なのですが、ここでの問題とは直接関係がないようだけれども、都会に比べて非常に農家ではいわずに分不相応なほど結婚に金をかける。その場合に被嫁にお金をかけるということもありまうけれども、娘の仕度には大変なお金をかけるわけです。これは全国的に見ると今二、三十万使っているのが普通なのです。ところが二、三十万というお金は都市の勤労者にとっては大変大きなお金です。このお金をもって生産的に使わなければいけない。結局暮し

けの仕度をしてやらなければ申しわけないという親御さんが多い。ですから教育を受けた人は割合に仕度をしていかなければならないと思うのです。農村では家と家の結婚ですから、教育しない娘は教育しない息子に行くので、なんの疑いもなく仕度というのは一番大事なもの、供応の問題が一番大事なものだという觀念があるのだらうと思います。

松浦 私の近所で最近お嫁に行った方がありますが、そのお嫁さんのお兄さんたち夫婦は私たちのグループで、いつも生活改善を叫んでいる主婦者なのです。だからあなたの妹さんのときには理想的にやりましようねといっていたのですが、それがいざとなるとやっぱり五十万の山を売ったのです。五十万の山を売ってお兄さんたちの子供が小学校の四年くらいのを頭に四人くらい女の子があるのですが、その子たちにも多少貯金として残るかと思つて夫婦は思っていたところが、全部お母さんがやって、そのほか農協から何十万も借りたのです。それ以来うまいっていた若夫婦とお母さんの間が不和になっています。このことを考えてみるとやっぱりお母さんが社会の体面を考えたということが一番の要因で、受入態勢の方は学校の先生で、お父さんがなく、お母さんは社会教育に非常に熱心な方なので、贅物をたくさん持って来ても流行が変るし、普段着は息子に買わせるから、と言われたにも拘らず、親類などの対面

をよくしていくためには生産力を上げなければならぬ。生産力を上げるためにはお金がいる。しかも貧乏だから自分たちは生産力を上げるためにお金を使うことはできないというのを農村では言う。そこでもう少し娘のお仕度を少なくすることはできないか、多いところでは七十万も使っているのですからね。一軒が飛び抜けて多いのではありません。その村全体の平均が七十万になっているところもある。こういうことがどうして行われるかということに突き詰めていくと、いろいろな理由山があげられます。これはみえの問題が大きくものをいっているわけですね。みえだけではなく、実質的に娘にそれだけのことをしてやらなければ娘がしあわせになれない。それはなぜかという嫁にいて「自分の作業衣を買ってほしい」「洋服を買ってほしい」という要求が遠慮なしにできるようになるまでには二十年かかるというのです。だからお仕度をしななければ不幸になるのだということを書いているわけですね。これは方々で聞くことです。だとすれば、表面的には非常に民主的になったように見えても底の底にはそういう根が残っているのしょう。その根はどうなのですか……

加藤 私の近所を考えてみると、農村ではあまり子供に教育をしないのです。中学を卒業させて農事の手伝いをさせるので、娘に対する謝罪の意味が含まれていて、これだ

伊予の方の状態だと思えます。

植松 私の場合結婚式は部落の青年団と、夫の友達に一切を任し、会費制でやったのです。結婚の仕度も下着と作業衣だけにしておいたというので、その通りにやりました。でも近所の結婚式を見ますと料理の方を凝く簡単にやって娘さんの仕度をもの凄く盛大にしているのです。田畑を売ってやっているとあるところもあるのです。結婚式の次の日に筆筒開きといって近所の方、親戚の方、をみんな集め一人一人手で触ってみるのです。そういうときに一人前に仕度しなかった場合、お母さんが恥じるわけです。それで借金しても娘に恥をかかせたくないというのでやるのではないかと思います。

金子 農村では人間の値打ではなくて、物の方に執着を持っています。持っていないのです。ですからお嫁に行くにしても自転車を持っていかなければならない。ミシンも持っていかなければならない、貰った方でもそのうちにあるから持っていかなくてもいいと思うのですが、自分で持っていないものでないといふことがありますが、自分です。ですから山を売っても田畑を売っても仕度をしてやるように

なる。

大谷 その自分の持っていたものでなければ使えないとか、一定の年令がくるまで作ってほしいと言えないということであれば、ほんとうの民主化、近代化ではないのですね。考えてみるとこんなばかなことはないと思う。娘が生まれたら、お金をかけて育てて、養育費、教育費の上にさらに何十万というお金を使ってたづけるという、こんなやっかいなものはないわけでしょう。

金子 ですから、子供が生まれたときに女の子だと喜ばない。また女の子かというのですね。

岡部 今、結婚の簡素化をやかましく申しまして、そういうお荷物見せることを公式にはやめようというふうになりました。結婚簡素化の場合、結婚金は三万円まどとか、お料理はこれだけという貰う方の制約は固く実行しますが、持ってくるお荷物はこれ以上受けないという規約はないのです。それを娘さんを持っているお母さんたちは不足に思うのですけれども、やはり行ったときには荷物の多い娘さんはいいお嫁さんという評判になりますから、やっぱり自分の娘がかわいいので……。

栗山 私は戦争中に結婚したので、嫁箱もなかったし着替えもありませんでした。そうしたら実家の両親がかわいそうだといってあとから嫁箱、ミシンを持って来てくれた

した。お姑さんも理解してくれて「物で貰ったのではない。人格で貰ったのだから」と、お姑さんも主人も言います。それで貰い受ける人の自覚が大事だと思うので、私も今度自分の息子の嫁を貰うときは私が受けたようなあたにかい心で、物などなにもなくていい、ほんとうにからださえくれればいいという嫁を貰おうと思うのです。

小出 私の方も農家でないので、だんだん結婚が派手になりました。新生活実践運動で結婚の簡素化をいいますと、金のある人はそんなことまで団体に拘って貰わなくてもいいというので徹底しないのです。どういうふうにしたら簡素化できるか悩みの種です。

弘中 私の女の姉妹は四人いるのですが、一人は新潟、一人は石川におり、私は山口に来たのですが、私が嫁入仕度も一番お粗末だったのですけれども、余計作っていった姉たちがいつも足らん足らんといって、子供ができた最初の子供はおさまでみてやる、嫁箱も作るというふうなのに、私のところは近所を見ているとお産でもなんでも貰った側がなさいます。

大谷 先ほど家族の「和」というか、相互の理解というのはやはり一定の経済的な基盤がなければ、最低限の生活の基盤がなければ危くなるというお話がありましたね。必ずしも余裕があって仕度をするのではなくて、山を売った

り田を売ったりしてやっているわけでしょう。そうすると皆さんのところでは問題でないにしても、一般的に言えば自分たちで民主的な自由な家庭を作る基盤を自ら放棄することをやっていると云えるでしょう。突っ込んで考えてみると、そこに問題があるのではないか。経済的にある程度の基盤を持っていらっしゃるから、結局はうちの中がごたごたしないということなのでしょう。家庭内の問題はまたあとで折に触れて出すことにして、今結婚の問題が出たのですけれども、結局自分がどう考えようとも、農村に住んでいけばやはり部落とかあるいは村、いわば農村社会におけるしきたりの中から自分だけが抜け出することはなかなか困難ですね。そこで、つぎには、そういった農村社会の問題に入っていきます。部落の問題というのは抜け出すことができない、いわば宿命的な最も基本的な集団だ。それから農村に住んでいる限り、部落が最も身近な決定的な役割を果たす集団ですから、それと個人の問題、家族の一員としての個人であると同時に、部落というものの中では家族の一員として部落に繋がっている場合と、個人的に部落に繋がっている場合とあるわけですね。その問題を掘り下げましょう。

#### 部落集団における個人の自由

加藤 この問題を痛切に感じたことがあります。市町村の選挙で、主人が町議に立候補致し、今度で四回なのですが、あの方が立っていればほかの方も山に上っていく、それでやめて貰いたいということになったらしいのです。それで主人には言わず、私がおうちにきました時、その役を買ったらしい部落の方が、「今度は町議でなく町長にお立ちになったらいいでしょう。部落推薦でなく立ったけれども、部落推薦でないと投票する人がありませんよ」というのです。「町長にお立ちになればいいでしょうけんめい応援しますよ」とのこと。「町長なら楽々当選の可能性があるのですね」といいましたら、「それも今回のところはむずかしい」といいます。「私のところで立ったからといって誰かが立ってもいけない」ということは言いませんし、なにも悪いことをしたわけではなし、むしろ部落推薦よりいいのではないですか」といったところ、あとで村中であんな悪態はないという評判になった。思ったことをはっきり言うのは非常に悪態なのだそうです。私は家庭ではみんなの言葉を束縛しない、楽しい生活をしているので、正しいことは言った方がいいという世間知らずの点があります。加藤さんのところは、御主人の当選はあれではおぼつかないというデマも飛んでいるらしく、私の言う自主性は部落では通らないということをつくづく感じました。子供が学校

を卒業して農村にとどまるとしても、そういう人たちとつき合わなければならないという問題に当面しますと、子供が村を逃げ出したくなるのではないか、強く言えば村八分になりかねないという心配もあり、非常にこのごろ暗い気持ちを持っています。

孝生 今選挙の話が出たので、私の方で二月の末に市会議員の選挙があったときのことを思い出したのです。七カ町村が合併して橋本市になりましたが、市会議員の選挙は大休部落推薦になっていました。私たちの部落では前のときは一人推薦で当選しました。今度は六百の票があり、四百そこそことると当選になるのですけれども、お金がかかるのですから候補者がなかったのです。初めのうちは「自分のところの部落から出ていないのだから今度は気楽やね」といっていたのがもの凄いくい込みがあって、運動員同士を取り合いがあったのです。しまいに私は私の組内で「誰々候補の演説を応援に行ってください」、「御飯炊きに出て下さい」というふうなふれがどこからともなしに回ってくるのです。私のうちでは文句を言う者が多いので、今度は区の推薦でもなんでもないのでそんなところに出て行くことはいらんと、どんなに応援を頼まれても行かなかったのです。選挙になると近所づき合いのために、まるっきりこちらに向いてないということがわかっていて人まで応援にい

かなければいけないことになっています。ところがそのときに応援に来た人は、その事務所の御飯を一回でも食べたなら、なんとなしにその気になるといふことです。あれは落選になるだろうと言われているところ、選挙の前日に二百人御飯を食べる人が寄ったそうで、そのためかすつと上の方で当選したのです。そんなことから考えたら、婦人よりも男の人にすつと近隣の関係に縛られている人が多いと私は思います。

大坪 私たちの地域の婦人会長さんが結婚の簡素化に非常に関心を持たれて、婦人会のお金八万円と農協から五万円と寄せて貸衣裳を作ること提唱なさったのです。まずアンケートをとると、八十七対七十五という十二票の差で貸衣裳を作ることができなくなったのです。わずかの差だったから作りましょうというのですけれども、幹部の方たちが、折角作ってもそれを使用して下さらなかつたらなんにもならないから、もう一年啓蒙して来年こそ貸衣裳作って、振袖だけでも節約しましょうという話になっていました。

佐々木 ある方が民主化の先端をいこうというわけで、公民館でもの凄く民主化した結婚式をあげたのです。呼んだ方が少く、宴会費が少くなったのですが、呼ばれなかった方からひどい反感を持たれたそうです。その後の方が人を

呼ぶことに非常に気を使って、家族の仕度などはそっちのけで土地の顔役を呼んで三日がかりくらいで宴会を続けたそうです。男子を含めてですけれども、一たん部落の中できめられた問題には一切反対せず、ただ服従しなければならぬということがすつと徹底しているのだと思います。私たちのところでも男の方がきめた問題が、婦人にはどうも気に入らないという問題がありました。それは三年ほど前に学校で給食すると大変経費がかかるから、してはいけなという運動があり、部落に給食反対の線が出ました。その次に、有線放送についてこれも金がかかるからよしよしというという決議が出ましたので、私たち婦人同志がその晩早速四、五人集まり、男の方がきめた問題に自分たちが反対しては叱られると知りながら、放つてはおけないので、次の晩に部落会でこういう問題になっているけれども、子供のことを考えるのは母親だから、お父さんに任さないできめましようかと話あいました。そうしたら男の方に「この貧乏な農家でそんなことができるか」とくつてかかられたのですけれども、自分たちが働いて一握りづつお米を節約しても給食費を出そうということがきまつたわけです。有線放送のときも十戸組に一つづつでもつけましようときめたわけですが、四、五人のこの人たちの区長以上の発言力の非常に強い人がいるので、黙っていないとその人たちが

うるさいからというようない方があるのが今の部落の現状ではないかと思えます。それで選挙の運動にもこき使われるし、土木事業などもその人たちが決めていくのです。その人たちに気に入らんことを言うと、あれは共産党だとか、社会党だとか言われるような傾向があるのではないかと思えます。

小出 私の方はかなりひらけた町になっていますが、いまだに選挙などには家長支配制といえますが、婦人の自主性が無いというのか、自分でこの人と思つてながらお前は誰に入れるという主人の支配制が多分に残っているのです。私はいつの会合でも、御主人の言いなりにならないように、自分は自分でいい人を選んで入れなければこの町がよくなるという言ひなのですが、婦人の自主性に対して疑問を持つのです。

岡部 選挙の問題ですが、地域の代表者が最高点で当選することを非常に名誉だと思ひ、その場合は会議員としての発言力が非常に強いという感じを持っています。地域で一人の候補者を推した場合に他の候補者に運動をする有志がいますと、それに対して監視の目が非常に強くなり、マクされた人が今日ほどこそこの家を訪問したから、またこちの方が行って話をするといいということもありまして、マクされた人の親友とかそういう人が入れ代りたち代り野

ねて、そういう違反的な、自分の主義を通すようなことはやめた方がいい、みんなと協議して地域の人を推すようにしたいといいと注意します。町会議員になると、あすこの家はここの人に入れる、あすこの家はこの人に入れる、あすこの家はここの人に入れるというところが縁故関係で区分けがつくのです。それでどこにも属さない中立的な家に対しては非常に選挙運動が激しいのです。今日はあつちの候補者からくると思うと明日はこつちの候補者からくるというふうで、いよいよ投票のときになると字の書ける人でも自分で字を書いて投票したら誰に入れたかわかりませんので、字を書けないとして、顔を立てる必要上おばあさんたちも引張っていき、誰々に入れて下さいといつて立会の人に頼んで書いて貰うのです。そうしますと、証拠が出ますから、あの人たはたしかにあの人に頼んだということがわかるので、うしろにみんなずつと投票に続いて参りますし、立会っている人に私は誰々に入れたと思うからといって頼みます。そうすると立会の人が書いて入れるので、うしろに続いた人は誰候補に入れたということを承認します。

金亨 それに似たことですけれども、町の有力者がこの人を入れるようにというので、書く場合に上の字を漢字にして、この字は平仮名にしてと、書く字を教えてくれて、その通りに書くようにと言ったことがあったそうです。

ね。

富藤 選挙の場合にはみんなが個人として見るよりも、家族の一員として見るのではないかと思います。親類のたくさんあるところや部落のボスの存在とか、特に権威がある方でないとか立候補出さないの、とても有能な方ですがそのお嫁さんがお父さんの気に入られず、お父さんと別れて一家を持ったのです。その方が立候補し選挙の演説を聞きに行ったのですが、立派な青年であるし、こんな方を出したいと友人と話していますと、うしろの方が、どんなにいい方でも親と喧嘩するような方は絶対だめだ。飛び出したから全然あの人には財産もないし、そんな方は当選しても全然むだなような話をしていました。

岡部 部落の中の個人のふところの探り合いといえますが、その原因になるのに税金の問題があります。私たちの方でしたら田が一反一万七千五百円、普通畑だったら一万二千元というふうに、税務署の査定がきまっているのです。雑でしたら四百五十円、雑草は二千四百円ときまっています。畑の面でも雑草も雑草も作っている方でも普通畑一万二千元ですし、兼業農家でしたらあり来たりに差をとってその次にきつまずきをとるという作り方しかできません、それでも一万二千元ときまっていますのです。そうする

大谷 あれは無記名投票ですが、自分で書いて投票した場合でも、見ていてすぐわかってしまうということが言われるのですが、どうなのですか？

岡部 わからないけれどもおどかしなのです。ただ投票所別で聞きますから、小さい地域でしたらすぐわかるのです。自分の予定よりも少なかったらどこが動いたのだろうということ……

大谷 投票するとき方々一緒にして開ければわからないですね。

金亨 町会議員のとき各支部から出しますでしょう。その支部は何名いるから何票入るといことがわかれるというのです。

馬場 大谷農家の人はとても正直で「あんたは誰に入れたの」と頭から問いたら言いはしませんが、カマかけてちよっと聞くとその人が思わず知らずひよつと自状する場合があります。

金亨 もっとばか正直な人は、この支部ではこの人が立っているけれども、ほかに親戚が立っているのだから入れられないからといって運動員に断わるのです。

梅北 選挙立会人の中には誰方から頼まれて、うしろから見えておきますと、腕の動かし方で、頭文字の二字、三字ですぐわかるということをやうのです。一種の脅迫です。

と今年のように基礎控除が九万円まで値上りになると、総収入も値上りにならないと税務署は困るのです。町に幾ら幾らという割当があり、それがまた分割されて部落で幾らの割当を果さなければならいとなると、みんなが自主的に書いて出した分では到達しない。そうすると税の審議会があすこは雑が五十羽となっているが、ほんとうは百羽いるとか、あすこは炭を二かま焼いていると出ているがほんとうは五かま焼いているとか審議します。この審議会には各地域の隣組から代表が一人ずつ出ているので、自分の組のことはあまり言われないうに努力し、よその組のことをほじくり出し、たくさんにしないと目標に達しないから、もの凄いいせり合いで当人の申告以外に周囲が目をつけていた事柄である程度税金の額を合わして、それをもう一度当人に承諾させて通過させるというようになります。それがなんとか改善されたら、他人の税にそれほど関心を持たなくてもいいのではないかと思います。

佐々木 納税の問題が出たので申し上げますが、ある小さな部落で、毎年完納のたびに報奨金を部落に貰ったので、報奨金ほしさに納税一〇〇パーセントで優秀な部落になっていますが、実際問題を調べると報奨金ほしさに個人に対して、お前のところ一人のために部落が報奨金を貰えないという圧迫があるわけです。経済問題が変つてると、

納められない年もあるので、そういう年は非常に無理をします。差し押さえられるときは個人の問題ですから、部落と関係ないと思いますが、報奨金のために部落からの圧迫を受け、個人の自由と矛盾したものがあのように思うのです。

大谷 その報奨金を部落で買えばどういうふうに使うのですか。

佐々木 部落の資金にして、運動会とか慰安会などに使っています。

弘中 うちの方は報奨金を部落で買うと、半分はお父さんたちが、半分はお母さんが使うことにして、女の方は旅行するときの足しにします。

梅北 七十戸ばかりのある部落では、婦人が一年に一度慰安旅行に温泉に日帰りで行くのです。男性の威力が断然強く、五、六年前までは約半数しか男の人に首を縦に振ってもらえなかった。ところが一年一年行ける婦人の数が多くなり、今は七十戸の婦人が全員バスに乗って温泉に行くことができます。それは男性の理解よりも世間体とか、うちの家内ばかりやらなくては男同士の名目が立たないという考えからかもしれないが、とにかくどういふ方面からでもやって頂くことができるようになったのを楽しんでいます。

見てあげたわけですね。そのうち十五、六人の近所の方が、一年生以外のうちの子供もお願したいということになりました。子供だけではなく、私たちの向上のために話し合いをしようというので、それが五、六年続き相当発展し、立派な会ができたわけです。その若い母親は、昔からここはうるさいところだから用心するようにと姑に言われていましたが、深く氣にとめないでいたところ、活発な会の動きに婦人会がしつとして除名運動を起したのです。でもその会は折角ここまで続けたのだからと意思を強く持ってやめたのです。そのうちに、婦人会が休会になり、あとから生まれたグループがずんずん伸びていきました。こういう時、相談相手になるような人がほしいといっていました。

植村 私のところの部落は開拓地ですし、部落全体が一家のように仲のいいところなのです。耕作面積も平均しており、果樹の出荷も農協に任せており、あそこはどのくらい出荷したということがお互いにわかっているわけです。そういうふうにいるいろな面がわかるために、すべての面において干渉しないので仕事やりやすいのです。

大谷 開拓地ではそういうふうに部落というか集落というかが、それが非常に自由なですね。一般的に言うところ、それが古い村になるとどうしてなおらないか。

金子 うちの部落では、上から命令されたことだったら

大谷 小村さん、あなたは独身なのですが、家としてではなく個人として、部落の問題はどうですか。

小村 私の部落は今度ダム建設で水没地域になっています。それで家族の中でも部落の中でも賛否両論、いろいろ問題があります。私は去年ここに来たばかりでよくわからないのですが、私の学校の先生や、その他の方の話によると年寄りはやはりダムに反対なのですよ。ところが若いものはダムが出来た方へ発展していった方がいいという意見が強いのです。家族の中でそういうふう年寄と若い者の意見が対立しているが、若い人が年寄の前ではあまり意見を言えないことです。

大谷 若い人たちが賛成するのはどういう意味ですか。

小村 補償金でも頂けば、という考えで、今の村では発展性がないと思われるからでしょう。

大谷 あなたは先生ですが、教員として子供を通して見て、部落がどういふ役割を果たしているのでしょうか。

小村 新しい方向に部落は動いているように思います。PTAの会とか、母親学校とか協力的に動いているように思います。

栗山 ある若い母親が一年生の勉強を見てあげようとしたら、近所のお母さん方が農家で忙しいので、うちの子供もついでにということでお話し合いの中で四人ほど一緒に

やりよいです。たとえば私たちが小さな集まりで話し合っで日掛貯金を始め、だんだん拡がって部落全体が日掛貯金を始めたのです。それを見て男衆がなにかに使った方がいい、水道でも作ったかどうかということ、下の人たちが話し合っで盛り上ったのですけれども、なかなか解決しないのです。それを町の衛生課の人が聞き出して、町の仕事として話に来てくれ、知事さんに陳情して、上からの命令みたいな形になったのでしたのです。ですから上からの命令、婦人会でもPTAでも、婦人会なら会長さんが言った、PTAならPTAの会長さんの命令というのなら仕事をやる、下がこういうふうにしよということはなかなか成立しないのです。

大谷 自分たちが作った団体の問題については明日突っ込んで話し合いますことにして、今日は、話をそこまで発展させないで、部落の中での問題をもう少し突っ込んで話したいので、部落との関係において今の問題を出して下さい。

大坪 私たちの村にたくさんのお電話所があるのです。それで発電所があるために大きな用水が幾つも流れていて、毎年子供たちが落ち、年によっては五、六人死ぬことがあります。農繁期は託児所も二週間しかなく、子供たちを放任するので、それではいけないと公民館の前に子供たちの

遊ぶ遊園地を作ってほしいとお父さん、お母さんたちに呼びかけ、やっと遊園地ができたのです。これなどは一人一人の力が大きな町の政治を動かしたのではないかと思うのです。

#### 部落の民主化を阻むもの

大谷 部落が個人の生活、個々の家庭が自由に伸びていくことを縛りつけているものは一体なんなのでしょう。か。弘中 その理由はボスのような方に子供の就職などを頼まなければならぬような人が多く、結局経済と権力に結びつくのです。

小出 「長いものにまかれる」との諺がありますが、長いものはどの部落にもいますね。

大谷 その長いものが一体どうしてできたのですか。

小出 みんながそうしてしまったのね。

栗山 お互いが自分の自由を生かそうとしないのです。そうして権力のある人がますます権力を振るうということになるのでしょうか。

大谷 あなた方は、権力を持っている者はきままっていると考えているが、どうして権力を持つようになったのか、今は農地改革の前のように地主が権力を持っているわけではないでしょう。農地改革後においてはみんな一応自作農

になったわけで、その中でそういうふうになって来た基礎はなんでしょうか。頭がいいとか口が回るとか、そういうことなのでしょう。それとも経済的なことですか。

斎藤 経済的なことばかりでなく、政治的にも両方の旗頭がありまして、その方に頼めば就職させて下さるというように皆がそうしたらいいのです。

小出 それは一人が反対しても、大部分の人が「長いものに巻かれる」と言うからどうしようもない。

梅北 強くなった者を落して、新しい正しい人を押し出すことはなかなかむずかしいものです。

大谷 部落の場合にはほとんど平等というか、序列はないはずなのですが、その序列がどうしてできたか、またどうして作られたかということを含め込んでいかないと、自由と責任についての問題が出て来ないわけでしょう。「だんだん皆さんが作ってしまったのだ」とか、あるいは「長いものに巻かれなければやっていけないから」というふうなスバツと結論を出してしまわないで、もう少し突っ込んで考えてみましょう。同じ農村といっても開拓地の場合には、植松さんのところだけでなく、全国的傾向としておなじ農村といっても古い農村のようなものは割合に少ないです。両者違うわけでしょう。なぜ違うのですか。

岡部 人間関係からみて、先祖歴代同じ人が同じところ

に住んでいるんですね。ですから前の前のごときまでその人にかかって来ますから、その人自身がいくら有能で働きがあっても、その人のおじいさんが小作だったというふうなことまでその人に影響して部落全体の者がそういうふうに見て個人的なボスというものよりも、農村全体の人々のうわさ話がそういう有能な人を育てないのではないかと思えます。三十代ぐらいの人は大いに意気盛んでこれからやっ

てやろうと思うのです。一度組長に若い人ばかりがなったことがありますが、あんまりやりますとアカだということを使うのです。アカだと言われることがひどくこわいので、初めは意気に燃えていた者でも、だんだんに自分のあとからついてくる人がなく、圧迫のようなものが多いと、黙っている方が気楽に世が送れるから、理論だけでそんなこと言っちゃって世の中は通らないと思って、自分自身が古いものに同化されてしまうのではないかと思えます。

牟生 私ちょっと考え方が違うのですけれども、部落の問題でもそういう悩みのあるところは、家長が幅をきかし、男の方の理解が少いからだと思うのです。私のところは、女の方は婦人会やPTAやいろいろの方面から教育されているから、「長いものに巻かれる」という思想もだんだんかげをひそめて来たいと思います。部落の会などもこのごろは未亡人の方が出てきますし、私の隣組では十三軒の

うち寄り合いのときには半数以上女の人で、このうち、未亡人が二人います。兼業農家のうちは女の人が大い組の寄り合いにも出ていきます。そんな関係で女の人が大い組の向上しつつあるのだから、もう一歩というところは男の人の教育をしていったらだんだんよくなると思います。

大谷 今部落問題と家の問題が結びつけられて出されたのですが、かなり私は大事な問題だと思うのです。大体お話を伺ってみると、皆さんのところではうちの中はかなり民主的にいっているというお話なのですが、部落の問題になるとそうではない。そのくしい違いが問題ですね。

斎藤 私は家庭の封建制といいますか、家長が絶対権力を振るっている家庭で育った人たちは部落で地域的にもそういうふうにししかほかの人を見られたいと思うのです。そのためみんなの行動によってみんなのいく方向を見て自分をきめるわけですが、それを上手に利用する人が出てくると思うのです。

佐々木 私どもの部落では素外民主化されているように思えます。やはりボス的な方はいますけれども、そういう方は相当な優越感をもっていますが、ある程度そのプライドさえ持たしてあげれば、案外満足しているような感じが致します。私の部落の公民館長さんは民主的な方で、その辺は非常にうまくされているのです。なにか相談事がある

とその方を部落の役員に立てて相談はするのですが、決断を下すときには自分の考えや末端の方の考えを入れてうまく捌いているようです。

馬場 婦人会ができたときも「おなごがのぼせ上って」と最初は言われたのですが、女が一步步つ前進したので、男の方も婦人を認識するようになりました。それでやはり女の方が自分の力というか、自分の教養というような面を向上させていったら、男性もやっぱりそうになってくるのではないのでしょうか。

大谷 九州の方々のお話を伺っていて、形の上では九州は男が大変力を持っているように見えるけれども、実は女の方が大変力を持っているということ、これは私、九州に行ってもいろいろ話を聞いて感ずることなのですが、しかし、ほかのところはそうではない。姑さんの問題なども結局、旦那さんがしっかりしていればどこかに吹っ飛んでしまはずなのです。だから、九州の場合にお姑さんの問題がほとんど出なかった。これは理山のいいことではないと思うのです。

小田 婦人学級とか母親学級はあっても、旦那さん学級とか父親学級というものがありません。ある程度その面の教育をして貰わなければいけないという話が出てくるのです。婦人は向上しようと思っていますが、旦那さんは寧ろ面白で

居坐りたがって、そこにズレがあります。

厚生 生産力を婦人が持っているということが大変大事だと思ふのです。農家では婦人が封建的な家長に押えられているように、評論家は一般にきめていようですけれども、うちの方では婦人がほとんどと農家の主権を握っている。男の人が働きに出ているから、肥料を買うのなどの野菜をどうするのだから女の方でなければできないし、経済的に生産に携り、大変力強いと思うのです。私は初め（職争の前ですが）高野山の奥の小さなところで働いていましたが、その女の人がもの凄く力が強くて朗らかなのです。なぜかと思つたら、その女の人は高野山に野菜売りに行く仕事を持っていて、お金を自分で儲けるから力が強いのです。

大谷 その問題は日本の農業という点から見ると大変に問題を持っています。つまり兼業農家が非常にふえたというところ、旦那さんが働きに行きますから奥さんが農業をする「昼御家」という形になりますね。ところが農業の生産力を高める点から言うといろいろ問題がある。こういう農家がふえることは日本の農業全体にとってはいいことか、悪いことかが非常に大きな問題だと思ふます。しかし婦人の自覚がそれによって高まったことは事実です。けれども兼業農家はあなたのおっしゃるのと反対なのです。兼業農

家は主たる収入は兼業収入から得ている。これは勤め人が少し農業をやっているだけの話でかなり違ってくるわけですね。この中では加藤さんと植松さん、大坪さんあたりがほんとうの専業農家らしい専業農家で、そのほかのところはなんらかの形で兼業農家でしよう。ですから農村の家庭のあり方にしても違っていると思うのです。だからそれで割り切つてしまふことは私ではできないかと思うのです。

松浦 部落の中のボス的な圧迫に対してどう反抗するかということもいつも考えておりますが、私たち婦人の集まりである「いもこじ会」です。その会の方と話をしているとつか気持がわかって来て、ボスたちが酒を飲んでどのように暴れようとかのような計画を立てようと、それをあまり気にしないで、婦人は婦人で仕事を進めていこうという動きをとっているのです。

#### 部落の仕事

梅北 専業農家の立場から申しますと、とにかく専業農家は忙しいので、毎年あの方たちがやっていると、顔役にお願ひしますし、また専業農家の方は経済的に困りますと、顔役の人たちに使つて頂くとか、顔役のおこぼれでも少し貰えば結構満足して、自然にボスを育てているので

はないかと思ひます。

植松 私のところは部落会長とか、班長は選挙でなく順番でやっています。隣組は一班が七人なのですけれども、部落の会合よりもその会合を多くするので、ボスということとはあまり聞きませんね。

斎藤 私の方の町会長は、今連絡行政委員といっておりますが、昔の町会長と連絡行政委員をかねているようなものなので、ひまがなければできないわけです。それから金がないければみんなを集めたいと思ひます。あまり小さい家ではとても入りきれませんし、冬などはとても寒いので、ストーブを焚いている家でなければ会合ができない。それで自然とある程度豊かな方になるのではないかと思ひます。

佐々木 鹿児島の組合も、青森と同じような点があるので、役場の仕事に相当ありますし、雑用があまり多過ぎて、それをいっしょうけんめいやると家業をそっちのけでやらなければならぬ。相当経済的に裏づけのある方で、家族の理解ももちろん必要です、いろいろな条件にかなった方はあまりいないのです。

大谷 部落というものは、そんなにたくさん仕事をしてなければならぬほどのことがあるのですか。村全体となると、ボスの支配は割合に稀薄になるわけでは

しょう。一番そういう生活圏における圧力というのは、部落の中で強いわけでしょう。村全体でもやはり強いのですか。

弘中

部落が一番強いと思います。

松浦

大谷 ポスの支配は、何階にも重なっているわけでしょう。だから部落は昔からの伝統を持っておりまし、それが強固に固まってなかなか自由な環境ができないということがあるわけでしょう。今の傾向はむしろ町村合併になってから部落の仕事はふえたのではないですか。部落をそういう形で固めることが必要なのかどうか、つまり私は運命的集團あるいは宿命的集團という言葉を使いましたけれども、果してそれが宿命とか運命として受け取っていいかどうか、つまり部落の段階での仕事をこんなに多くする必要があるかどうか、あるいはこれをもう少し圧力を加えないようなものに組織を変えていくことができないか、それについてどうでしょう。

岡部 部落の区長にはなりたいた方もいますけれども、なりたくなくても、むりやりに押しつけられる場合もあります。区長の仕事はもの凄く複雑なもので、昼夜なしに会合がある。苗木を植える場合の見張りなども役場に林務係があるのですから、その人たちが責任を持ったらいいのに、

婦人会や農協婦人部のように、皆さんのお作りになった団体そのものに部落や村の圧力がかかってくるので、これをよく話し合っていないと、つぎの話がセンチメンタルになって発展がないと思うので、もう少し突っ込んで話したいと思います。

佐々木 私どもの部落でも常に部落の名譽ということに盛んに言うのです。私は、部落のPTAの理事をしていた時、皆さんの意見を学校に出すのは当然だと思ひ、部落の皆さんが反対意見なので反対したのです。そうしたら部落の方に、部落の恥をあんところとで言うやと相当攻撃されました。

岡部 部落の仕事を担当することになると、それについて連絡しなければならぬし、会合に出席しなければならぬことが出て来て、自分の本来の仕事ができなくなり、その上無給ですから経済的に困ることになります。ですからいけないことだと思ひますが、やっぱり経済的に余裕のある方にその仕事を押しつけて、個人は御免蒙って自分の仕事をしていた方が経済的に楽なので逃避するのです。

大谷 そうすればその人は経済的な犠牲を払ひながら、これだけのことをやっているのだからと、顔がきいておのずから力が出てくるわけですね。この厚い壁を破るには一体どうすればいいのですか。

それも区長がしなければならぬようになってくる。それはなぜかという、その林務係がそこまでの責任を持って自分の仕事をやらなければならないという自覚がないのではないかと、伝達の方法が町から部落を通し、部落から区長を通して連絡する形式で来ますから、林務の係のことも区長を通して連絡すると一般に通知がしやすくなり、林務係が言ったくらいでは連絡がしにくいというところがあるように思ひます。区長の仕事と責任を分担し、自分たちでやっていったら、ポス的なことも少くなるのではないかと思ひます。

大谷 非常に大事なことだと思うのですが、先ほど選挙や税金のことも出ましたね。皆さんは頭の切りかえが必要だ、親父教育が必要だとおっしゃるけれども、結論として頭の切りかえをしたにしても、どうにもならない問題があるわけでしょう。さっきの選挙の場合、今のような投票のやり方とか、あるいは制度的なものがあるでしょう。その問題に触れないで個人の自由を考えることはできないのではないかと、だから部落は与えられたもの、こうなのだからやむを得ないと考えてしまっているのかどうか、あなたの方の立場から部落の機構というものはどうなっているのか、それが変れば自分たちはどういう点で自由になれるかという問題をここで検討しておく必要があるのではないかと、地域

岡部 都市では、そういう問題はどうなっているのでしょうか。そういうことは全都市役所の仕事として行われるのですか。

大谷 戦後はほとんどそうです。

岡部 でしたら、町村の行政もそういうことには出来ないのですか。

馬場 久留米市では自治委員というのが各部落に四名おります。そうして市から直接にいろいろの連絡があるわけですが、はじめは、自治委員は選挙制でしたが、経済的な理由で入らないように入らないようにしていたのです。そのうち話しあいでお世話して頂く人に部落費から幾分かお礼を出すことになったわけですが、市から直接連絡が来ますと、部落の長が見ないわけですが、結局長が見ないととてもみんなが困るわけ、その自治委員のうちから長を選ばし、長へ謝金は市からも幾分か予算が出ております。連絡事項だけでなく何でもよからうというので、どうしてでもできないところだけ抜かして次次に回していつています。

斎藤 私たちの方でもさっき行政委員と、町の方と二つやってとても大変だと申し上げましたが、去年から一人にだけ重荷をかけるために手分けしまして、班に班長をおき、班ごとに相談役をおきまして、重要なことは相談役と



みんなで相談し合って、部落のことはみんなできめるようにしております。このように運営するようになってとても明るくみんなの気持が反映するようになりましたので、この点もつけ加えておきます。

金子 役場の小使さんがする仕事は小使さんがして、むやみに部落の役員のところに持って来ないようにしたらいいと思います。

岡部 学校の子供を使って、役場からお手紙がくるのです。ですから到って便利に通知が区長さんのところに届いて、役場がそれをしなくてもいいようになります。

弘中 私、主人が役場に出ているので、弁解するのではないのですけれども、役場も見ていると非常にお金がないのです。そうして役場そのものに言わせれば、中央集権で、自治自治というけれども、結局お金がないのです。

金子 私、私の主人も役場に勤めています。税金の使い方ももう少し考えれば小使さんだってもう少し多勢使えるところです。

佐々木 私の方は役場でプリントして、それを配って歩く人はいるのです。オートバイで配って歩いて仕事を押しつけているのです。

大谷 私が議論を出してはまずいのですが、現在の村の財政というか、お金の使い方にも格んでくるわけです。

て、役場の陣容を充実することによって、部落の中でのいろいろな行政の仕事を引き受けなくても済むようにすることは考えられないのか、ある意味で言えば、今までのお話を聞いてみると、部落の中にボスができるというのはやっぱりそういうものがあるからできるのだ。そうするとボスを退治するにはやっぱり税金を多くしても退治した方がいいのではないか、そういう問題にもなってくるわけでしょう。どっちがいいのですか、自分たちが完全にボスから自由になって人格が独立されるためには、税金が少しくらい多くなってもやむを得ないと考えるべきかどうかという問題、理窟を押し進めていけばです。そうなるでしょう。東京の場合にさっき言ったような町会長や部落長がなく、区役所の出張所に行けば一切の問題が片づくわけでしょう。農村の場合なぜそれができないのか、行政事務をただでやらせれば、税金が少なくて済むので支持しているから、自分たちの自由を売り渡しているということになる、深く突っ込んでいけばどうなのでしょう。

幸生 私のところは、合併になってから市には税金を納めますし、区費といってこれは区の自治になったわけなのでこれも納めるのですから、区費と市民税で二重に税金を取られているのです。

松浦 私なんだか目が開けたような感じがするのです。

からそこまで問題を持っていかないと、部落自体の問題も根本的なところへ入っていかないわけで、そういう点はどうでしょう。

岡部 部落費はやっぱり部落民が納めているので、戸数割というのがあります。家の経済状態から見まして一戸に幾らと負担させられ、四期ほどに分けて部落に納めます。部落所有の木を売った金を個人に分けてやれる部落もあるのですが、私たちの部落はそういう余裕がないので、たまに売れたお金はしっかり部落が持っていて、学校が建築された時、その寄付は個人が払えないので一括して部落が支払ったし、お便所を改良便所になおす時の補助に、各戸に三千円づつ返しました。そのほか、婦人会の方にも年に五千円の補助を出すとか、青年団の方にも出しているとか、使い道がずいぶん多くて入るお金がないのです。

大谷 弘中さんは村にお金がないとおっしゃったけれども、たしかに現実においてはそうだと思う。これは国の財政の問題とも絡んで来ますし、だからそこでも考えなければいけない問題ですが、取りあえず村の中でもむだな支出をしている面がないか、たとえばこれはさしきわりがあるけれども、村の村会議員さんたちの金の使い方とかいうようなものに問題はないのか、あるいはそれに問題がなくなっても金が足りない場合は、自分たちがもう少し税金を出し

部落では土木事業とかいろいろな事業をやるわけですね。私のうちの税金を考えると部落の税金が一万円、住民税が一万円、固定資産税が三万円一年間に出るのです。部落の税金の一万円を地方の行政に繋がらせると、今よりもっと正しく生きるのではないかと考えたのです。部落根性はほんとうに根強いので、容易なことでは退治はできないと思いますが、みんなが考えて自分が得がいくなかったらいやだと言わないのではないかと考えるのです。それともう一つ部落根性の退治に大事なのは町会議員の選挙や、農協の理事の選挙に強い力を持っていると思うのです。私たち町会議員の選挙に婦人を出したのですが、女を出しちゃいけないという非常に強い反対がありました。部落根性をやめて頂いて、今の部落の経費は前は地主だけが払っていたのですが、農地が平均したので、みんなが払っているのですから、この点なんとかいい方法で道が開けたら、行政の面の負担でもずいぶん改善できるのではないかと、夢のようだけれども夢でなくしたいと思っています。

幸生 いま少し婦人も税金の使い道を研究すべきだと思うのです。あまりにも無関心だと思ふのです。それは私大

学に行っている子供にいつも言われるのです。税金の使い道なのですが、人口三万ぐらいの市で市長さんは、四年間勤められただけに退職金が百万円です。

それがたった一回の市会でできまうと新聞で見るまで知らなかったのですが、うちの主人は三十何年間勤めて百万円ほど退職金貰うという、もの凄く世間からうらやまれるのです。私のところの近くで農道を改修していますけれども、市役所から測量に来て十万円という見積りをし、二万円だけ市役所からくられて残りは組の人が奉仕するのです。

それなのに市長さんに百万円をやったということで、ほんとうに婦人の肩から怒りが出て、とにかく婦人から市会議員を出さなければいけないと思ったのですが、婦人の議員は落ちました。市長さんはあのくらい頼みますといつて入れて貰ったのですし、そうして月々の手当を貰ってまた機密費、交際費も使って、それで人口が三十万もあるのです。たら百万円あげたって頭割りとしては構わないけれども、人口三万そこそこで四年で百万円、今度の市長さんも四年経ったら百万円貰うということになれば、そこに汚職とか選挙の不明朗なものが行われると思うのですが、まだまだ私たちの力でできませんから、おいおいにおしえていかなければならないと考えています。

金子 私たちがもっと政治を勉強し、税金をどういうふうに使っているのかも見ていかなければならない。予算を組んだら正しく使ってくれればもっとむだもなくなるのではないかと。ですから選挙も大切ですし、自分が選挙

おくらそういうことになるのではないですか。婦人だけでなく一般の村民が自覚して、村から正しい人を出せばそういうことがなくなってくるので、部落から出すことが間違っているのです。

弘中 立派な人をお金を使わせないで出すようにしなければだめですね。

松浦 自分の部落から議員を出さなくても、議員さんたち全体の目が正しければ、あんまり恐れることはないという感じを私過去四年持ちました。

斎藤 今の考えにちょっと疑問を抱くものです。それは政治を勉強しなければならぬと思つて、議会を見学に行つたことがあるのです。その時さまざまの論がออกมาして、ほんとうに正しい論の方が勝つてはなくて、結局多数決で決定されたわけで、私はつくづく自分の部落をよくしたい場合には、部落からそういう方を出さないと負けてしまうのではないかと思ひました。もう一つつけ加えておきたいのですが、その後の私の評判ですが、私がそこに行きましたために、あの人は男性化しているとか、町会議員に立つらしいといううわさをされ、婦人の町議会見学を喜んでる男性は一部あるかもしれせんけれども、大いにはなんだかいやな目で見ています。

大谷 しかし、そう見られるということは実は意味があ

する自由があるのですから、責任を果さなければならぬと思うのです。その点で勉強しなければと思います。

佐々木 私も今の意見に賛成で、自分たちが選出した議員のことを一向知らないということは、無責任だと思ひます。

大谷 やっぱ部落単位で代表を出さないと損なのです。

斎藤 私の方のある部落では三人も町会議員が出ています。そうしたらそこにはどんな道が作られ、一人も出ていないところは取り残されたようになんにもできないのです。その点から考えて部落から誰も立たないとだめだとみんなはいうのです。

金子 そういふ点一般の人が強く見守っていて、そういうことをさせないようにすればいいと思います。

幸生 町村合併したら、小選挙区になり、そして余計部落根柢が強くなって来たようです。青年団の演芸会にしても、部落単位にしますし、婦人会の作業でも部落単位でしますし、農道の改修というのも議員の出ている部落が有利になっていることを目の前に見えています。

金子 だけれども一人の議員が学校のことも、土木のことも全部やるのではなくて、土木関係とか学校関係のとか分れていると思います。私たちがあんまりほったらかして

るでしょう。うるさいから見て貰いたくないわけです。

松浦 私たちのところでは、婦人会でよく見学に行きます。行きますと議員さんたちもとてもお行儀がよくて、どんなにいい意見が出されるので、「みんながあんない子になりますからまた来て下さいよ」と言われるのです。

斎藤 私も一人だけではだめだと思ひ、みんなを誘ひしましたけれども、みんな賛成していながら、当日になりますと洗濯があるの、なんののといひまして行かないのです。どうも自覚がないと思います。

大谷 まだいろいろ御意見があると思ひますが、今日はこのくらいにしたいと思ひます。問題を掘げっぱなしにたようですけれども、結局部落なり村なりの中における自由を確立するためには、自主的な人間として生きるためには非常にいろいろな問題が絡んで来ている。だから頭の切りかえとかどうとかというところに結論がなるかもしれないけれども、そこにいくまででうんと噛みしめていかなければならない問題があるということがわかった。今日はいろいろの問題が出ました。これをまたあさってに持ち越して、あさっては主としてPTA、地域婦人会、あるいは読書会とか、農協婦人会といったような点から考えてみたい。今日議論した問題を最後にまた結びつけて集団における個人の問題、自由と責任の問題というのの一体どうい

ふうに考えたらいいかというところに、持っていきました。

#### (第一日閉会)

#### 移動会議の感想

大谷 昨日社会施設などを見学してどうでしたか。感想を簡単に話して下さい。

植松 私は埼玉の方へ行っただけですけれども、私の方は開拓地ですべてが新しく作られているものですから、春日部の部落の方と話し合っただけという参考になりました。はじめに家族写真会を聞き、映画を見たあと反省会をやります。お互いに映画を見て心に感じたことを率直に話しているのです。出席者もお嫁さんに当る人が大部分でした。

辛生 農村の婦人の暮しの実態を見たいと思って、埼玉班を希望しました。一番初めに行ったところは私のところと非常に事情がよく似た三つの村と、一つの町が合併した、五万そこそこの小さな市、その会長さんは市の教育委員をしていらっしゃる方で、その方のお話では、初めは社会教育という観点で政治教育をしていたのですが、今、部落学習に重きをおいて、私たちの見せて貰ったのは映画教室。私も半年ほど前に公民館のお世話で同じような形式で映画会を持ったので、非常に親近感を持って、農村

の婦人がこういうふうにして、必要なことをみんなが喜んで学習しているところがとてもよかったです。

松浦 私、神奈川へ参りました。私はいつも農村におりまして、雰囲気の変ったところを味わいたいと思って行っただけですが、一番感じましたのは東芝の奥さんたちとの会議で、サラリーマンの家庭の生活というのはわれわれ農家の生活とはおおよそ縁の遠いものですけれども、その人たちの非常に活潑な意見を聞いておいて、われわれはずいぶん農村のからの固い中に縛りつけられているという感じを強くしたのです。私たちももっとからを破って再出発をしなければならぬ、今後の農村はますますみじめになるだろう。家庭の中の旦那さんの協力ということで、旦那さんが雑巾がけも手伝うという話が出ましたが、私たちの部落で旦那さんが雑巾がけしたら、かかあ天下なんといつて非常に悪い言われる。

小出 同じく神奈川ですが、東芝電気従業員の方々の話し合いの中で共稼ぎの問題が出て、机を並べて五、六年、十年も働いたという主婦の方がいられて、子供が生まれてからやめた、非常に経済的に淋しさを感じたといいました。

金子 私東京班で、老人ホームを見せて頂いたのですが、なにかあきらめているようでした。館長さんは夫や子

供になにもかも捧げ尽した良妻賢母といわれた人は、年寄りになって老人ホームに入ると一番困る形の人だということとを言っておられました。「婦人クラブ」というのを作って、三分の一くらい仲間があるとのこと、それには自由に、新聞を月一回発行しているとのことでした。

岡部 東京の老人ホームの問題ですけれども、あえて参観に行きますと、みんな無責任な同僚の言葉も多く老人におかけするのを見て、自分があの人たちを引き取って面倒を見なければならぬ家族の一員であれば、とうていあのような同情の態度をとれないのに、他人のことになると思う態度をとるのは、老人に対してあまりよくないと思います。

それから養生堂の工場を見せて頂きましたが、オートメーションでだんだん人手がいらなくなり、今年は中学卒業を採用せず、高校生が三十名入っただけとおっしゃいました。私農村から来ますから、ああいう状態が進んだら一体農村の子供はどこに行ったらいいかと、問題を持って帰って来ました。

梅北 千葉の方に参りました。同じ千葉県でも九十九里など外房の方と、内房の方は大分違うようで、農村に比べまだまだ漁村の方が深刻な問題がたくさんあると思います。九十九里は遠浅で船の出し入れのために朝晩女の人ま

でがパンツ一枚で胸までつかって船を押し出す。近海漁業ができないところは遠洋にでかけるので、一年のうち夫婦が一緒にいるのは一カ月くらいで、だから嫁に手がいないという問題も出ていました。

佐々木 神奈川に行きますと、私も農村に暮して朝晩農村婦人の生活を見ておりました、農村の方は農村の婦人ほど不幸なものはない、いつも苦情ばかり言っておりませんが、昨日は東芝の御夫人方の生活を見ると、都会には都会の悩みがあるのだということがわかりました。

弘中 千葉の漁村については梅北さんと同感です。そのほか山下清さんの出られた八幡学園に参りまして、今でもこういう施設は足りないけれども、しかし相当数になったのは、お母さんたちが初めは世間体ばかり気にして精進庵を隠すようにしていらしたのが、たまたま八幡学園に入園させてよい結果を得たので、こういうことだったと恥を捨てて、足を棒にしてあちこち説かれた結果だろうと思う。だから自分たちの手である程度解決することもできるのだらうと思います。

千葉の港湾の方は埋立ててすばらしい工場ができておりますし、またこれからは建つのです。八幡学園のときにはお母さんたちの手で問題が解決できると感じたのですが、千葉の港湾に行ったときにはお母さんたちの努力というの

は微々たるものだという感じがしたのですね。政治の力は大きいのだなと感じます。

斎藤 私東京の祖師ヶ谷団地に行ったのですけれども、皆さんとても判り切っていないし、私たちが農村の立場から見ると「全然隣りはなにをする人ぞ」という、東京の生活を見まして驚いた次第です。集団のなかで個人の生活が圧迫されないで、自由に行われているということがわかりましたけれども、集団を育てる気持が薄いのではないかと感じます。たとえば子供が共同の花壇の花をむしるのを困ったとおっしゃっていますが、それを他のお子さんの場合も叱っているのかどうか、叱った場合にそのお母さんが素直に受けているかどうかを聞きたかったです。機会がなくて聞けなかったのですが、子供の自治会などをお作りにならなかった点はちょっと共同生活というものに対する熱意が足りないのではないかと感じてます。

小村 東京の祖師ヶ谷の団地へ参りましたが、あすこの場では集団生活が結局スムーズによくいっているように思われました。集まった方は良識がある方が多く、年も三十前後の、縁が一定したような方だったし、もう少し突っ込んで個々に当たったいろいろな問題があったのではないかなと思ったのですが、時間がありませんでした。

小田 神奈川県の勤労婦人会館を見せて頂き、働く婦人

のためにああいいう会館を全国的に建てて頂きたいなと思いました。

大谷 皆さん農村なのですけれども、都市の生活について、もっと突っ込んで考えた場合の生活の根というものについて感じたことはなかったのでしょうか。それはちょっと昔の方が変ですがね。工場を御覧になった方は、ちょっと見るといなかよりも生活がいいように見えるのですが、失業の問題などについて話が出ませんでしたか。

佐々木 あんまりいい会社を見せて頂いたのですね。問題がなかったのではないかと思います。

小田 出席しました婦人方は寮とか、鉄筋のアパートに入っている方々で、鉄筋のアパートに入っている方は勤続十年、十二、三年以上の方ばかりでした。その下の方はもっと苦しいのではないかと。あれは会社でも中堅層以上の奥さん方ですね。

大谷 たとえば岡部さんはオートメーション化を、農村の過剰人口をなんとかしなければならぬという立場で見た場合に、非常に考えさせられたという意味のことをおっしゃったでしょう。もっとオートメーション化が進んだとすれば、今あすこで働いている人たちでも整理されないとはいえないわけでしょう。

岡部 そう思って見ました。石けんを包む作業も今は機

械がしますね。この機械がどんどんできて来たら女工さんたちは仕事がなくならないかと思いましたが。

大谷 私はここで問題を一つ出したのですが、農家の生活は農産物の価格が下ったりすれば更に苦しくなることはあるけれども、今の生活の根拠だけはとにかくに努力していけば持ち続けていけるわけですね。ところが都市の勤労者は社会の生産力が高まるに逆について職場を失うかわからないという不安が底にあるわけです。だから表面的にはあなた方から見ると大変うらやましく見えることであっても、もっと突っ込んで考えてみれば問題があるということを感じられませんか。農村ではなんでもかんでも農村より都会の方がいいのだというふうに考えがちなので、おとといも話をしましたように、また皆さんから御意見出されたように、娘さんの大部分は勤め人のところに嫁ぎたいという気持を持っているんですね。それがほんとうに農村の娘さんたちが考えているようなものであるかどうかという問題について、なにも感ぜられなかったかどうかということをお聞きしてみたいと思います。

幸生 私は東洋レース工場を見たのです。私たちの目から見たら、公園のようにいろいろな木が植えていっているに生活しているし、寄宿舎なども設備がよくて、いなかにいるよりも、ここにいる子供はしあわせだと思ったのです。

が、「こっちとおうちとどっちがいい」といったら、やっぱりうちがいいといっていました。手取りのお金が月二千円余りだそうです。農村では子供も年寄りも役所の人も、みんなが暮しを礎っていくのに努力している。それは自主的でないかあるかということは別問題として、農村の生活はやっぱりいいと思いました。

佐々木 東芝の課長さんのお話でしたが、東芝の社の方はとても貯金熱が盛んで、一人平均十万円ぐらいの貯金を持っています。それは今の先生のお話と関連するものではないかと思いましたが、失業したときに頼るものがないので、そういったことで先に先にと計画しているのではないかと。農家では田圃という資産がありますけれども、自身都会にいて、失業の苦しみを味わった卒業生なのですから、都会の方は目に見えないところに苦勞があると思えます。

岡部 農村の娘さんが都会に憧れるのは、表面的に見て農村の仕事は苦勞だから都会に憧れる人もありますが、それ以外に生活を楽しむ環境が都会にはあるけれども、農村は仕事ばかりで生活を楽しむという時間がちっともない、結婚してもいっぺんも夫婦二人揃って外へ出ることがあるではなし、少し早目に終ってゆっくり庭でも眺めて寝るといふことはないし、寝るまで仕事をする。それで生活に

やけがさすのだろうと思うのです。

大谷 そうすると、農村の社会的な空気がどうか、そういうものがいまだから都会に出たいというのがかなり多いというのですか。

金子 困地生活を見まして、なにかフワッとしたように底がない、農村の生活の方がどっしりしている気がしました。もし御主人が失業したりなくなった場合、子供を抱えてその奥さんはどうするか。農村だったらからださえ丈夫だったら誰でもやっていけますが、困地生活をしている奥さんはどういうふうにして生活していくかということも心配になりました。農村の生活のしにくいのは周りの人との人間関係の面が主であって、経済面ということは割合心配ないのではないかと思います。

### 集団の自主性——婦人会の問題

大谷 農村における人と人との関係が非常にややこしいから、むしろ都会へ出たいというよりなことになって来たわけですね。そこでまあわれわれの主題に就いて来たわけなのです。おとといは最も身近な宿命的な集団としての家族関係から出発して、そこから部落の關係に入ってきたわけですね。たくさん問題が出されたが、一つもまだ片づいていないわけですね。問題を出しっぱなしにしているけれども、こ

劣等感になりまして、自分もあの人と同じレベルまで上れるのだという意欲を失っているのです。あの人たちは学校を出ているから自分と全然違った環境にある人だ。同じ仕事をしていても自分と違っているのだと、自分を卑下して伸びようとする努力しない。ですから、上から与えられたものに對して自分が従っていくので、自分から求めていくという気持ちで農村婦人には少ないと思います。

大坪 私の方ではお姑さんのグループがとても活発で、初は一緒に入って頂いたのですけれども、やはり若い人たちは若い人たちが伸ばしていかなければ、考え方も違ってくるのだからということで、若妻グループを作ったのです。初めのころは農村の生活に密着した衣食住の改善から初めなのですが、いつも同じことをやっても伸びないから、精神的に豊かなものを持つように、農村の生活が辛ければ辛いほど気持ちでもおおらかな気持ちを持つように短歌の会を作ろうと思ったのです。それで先生へ申し込んだところからお母さんたちのグループの会長さんに申したところが、和歌や俳句やそういう会をするのはまだまだ十年も早い。それよりもどういうふうにして姑さんに仕えたらお姑さんが喜ぶかということをするように言われ悩んでおります。

金子 若妻会は作って頂いたのですけれども、農

で結論つけるのではなくて、おととい話し合ったことを頭の巾において、今お話しになったような昨日皆さんが見て来られた事柄について、強い印象を受けておられるので、それも頭に入れて、今度は皆さんが意識的に自分たちでお作りになった集団——地域婦人会とか農協婦人部とかあるいは読書会とかいろいろのサークルと自分たち個人の生活との関係を取り上げてお話しして頂きたい。

佐々木 婦人会活動は、農村の方が大変盛んなわけですが、農村では放っておけば集団活動は全然できないのではないのでしょうか。

都会の方は放っておいても、昨日お話ししましたところでは、社宅の方が一緒にいるいろいろなグループを作ったり、生花とかお料理を研究していらっしやるということですが……。

弘中 意識的に作るというのは下の者が意識的に作るのではなくて、指導者の立場の者が意識的に作らなければできないとおっしゃるのでしょうか。

佐々木 都会の方は自分たちの意思で作るのですね。けれども農村は指導者が作らなければできない。

岡部 それだけ自分が無力であるように思い込んでいます。その劣等感が都会に對してだけでなく同じ婦人会の中においても青年学校出た人に対してそうでない人の

村ではなぜ作って頂かなければいけないかということが問題なのです。

大谷 それは非常に大事な問題ですから、しばらくその問題を取り上げましょう。

弘中 お姑さんの会というのはそれはどういうふうにして生まれたのですか。

大坪 部落のお姑さんだけでお互の親睦を計るために、十一年前からはじめたもので、会員は三十名です。

金子 農村ですと自分から作りたくて作っても、周りの人がそねんでうまく育たないのです。

大坪 私たちも作りたいたいという声があったけれども、お母さんたちが作らして下さらなければどうしてもそういうわけにいかないのです。

芋生 理想はそういうことになるのかもしれないけれども、地域婦人会ができたのは教育委員会とか公民館のお世話で出来たのですが、私たちが小さなグループを作ってお料理を習いたいという、生活改良普及員が料理の講習をして下さるし、農業のことは農業改良普及員が教えて下さるのです。上からの指導で婦人会、農協婦人部、母親クラブという官製の会ができていくけれども、私そのことで一つも不満がないと思うのです。現在の農村の状態では自主的に特定のクラブ、たとえば短歌の会、お花の会を作っ

でも農村では育ちません。だから官製の会の中で私たちは自分の力を伸ばすように努めるのが一番いいのではないかと。思うのです。官製の会の中で生活改善の面も結構、料理を習う方、一方ではお花を習う方、そこには地域に住んでいる限り入っていい、そういうふうにして門戸を開放して入ってこそ農村は育つと思うのです。自分らが楽しいグループを作るとか、官製の会はいけないといったって、実際に金がプラスにならないといけないのだから、現在としては一段づつ上っていく過程にあるのだから、私それを生かすためによりプラスになるように、会員がみんな努力する。それが自分らの限られた自主性だとそんなに思っています。

大谷 限られた範囲内ですね。

金子 それが問題だと思います。官製の会だったら、もしもこの講師をお願いしたい、勉強したいという場合に、上の人たちがその講師を頼んだのでは具合が悪いという、頼めないのではないですか。私も小さなグループを持って九年になりましたけれども、ほんとうに農村では育たないのです。伸びようとしているお母さんは仲間に入ってきて来ますけれども、呼びかけても入って来ない人たちが足を引っ張るので伸びられない。だから自主性のあるお母さんがもう少し多くあれば伸びると思います。

いけない。みんなが平等に話していくところにグループが育つのだと思うのです。それでみんなに平等に機会を与えてくれた官製の会が、なにも官製だからといって排撃する必要はないと思うのです。

松浦 私のグループは、今学生さんのおっしゃったように、偉い人のないグループなのです。みんなが会長なのです。毎月やっているのですが、あまり毎月やっているのとお母さんの会を持っている方がいいというので、お母さんたちの会を作った、「ときわ会」という名をつけて、必要などときには私たちと一緒に遠足したり、研究会したり、「家の光」という雑誌がありますが、あれの読書会をよくやるのです。すべて当番制で運営しています。会場も当番で各人の家があたります。

大谷 問題は混線していると思う。松浦さんは偉い人のない会がいいとおっしゃる。学生さんもそうおっしゃった。しかしその前に官製の上から作られた組織がいいかどうかという点と、今おっしゃっていることは違うのです。官製の組織であるが故に偉い人がいない会とは限らない。むしろ官製の場合には偉い人の形を作った偉い人を作らなければならぬというのが一般なので、その点をはっきりさせないと結局がつかない問題なので、もう少し官製の会がいいのか、自分たちが自主的にやるのがいいのか、ど

佐々木 レベルの低い方を引っ張るのにはどうするかというところが地方会議で問題になったのです。レベルの低い方まで引っ張っていけば進みたい人が遅れるという意見がありますが、農村では低い人たちは周りに引っ張ってやらないことには、毎日毎日の仕事に追われていて、自主性が生まれなれないと思います。

岡部 レベルの低い、高いということは農村に一緒に生活していたらみんなお互いなのです。向上の意欲が多いか少いかという差はありますが、しかし農村では人をまっとう上げるといふ傾向がみんなにあるので、みんなの仲間になって一緒に進んでいこうと自分で思っても、すぐ会長とかなんとかいう役を先にくっつけられてしまう。そうなる自分の働きがある程度制限されて、みんなは自分たちと関係のない人がしゃべっているように考えてしまうのです。ですからそういう心理を取り除くのはどうしたらいいかと考えます。

芋生 劣等感を持っているという面からおっしゃったのですが、ものには両面あって、農村では優越感を持っている人たちが一番いけないのだと思います。いつか婦人公論にサークルが農村では発展しないというように書いてありましたが、私は婦人公論の読者だというように選ばれた方が、他の人が劣等感を持っているというように育えるのが

っちにも問題があるけれども、どちらがいいということを含めてしまえないかもしれないけれども議論した方がいいでしょう。

斎藤 その問題で悩んでいるのです。官製で地域婦人会が作られたのですけれども、幹部には名譽欲だけで意欲がない人がいます。自覚がちょっともないので、結局なにかやろうと思いましたが、どんなに宣伝し、どんなに努力しても、またその人たちの状態を考えると忙しくない時期を見計らってやってもできないのです。つくづく自分の考えで集まったのでなければだめだという感じがして、幾何婦人部を作るときにはみんなを集めて、「ほんとうにこの目的に御賛成の方は入って下さい、そうでない方はあとの下に下さい。見ているうちに御自分がお入りになりたくなってきたに入ってください」と説明したのです。あんまりむずかしう言いますとみんな入らない入らないというのです。賛成かどうかとお聞きしたら賛成だとおっしゃる方が一人あって、私入りますよといったらみんなが真似して入るというのです。ですから私はほんとうに自覚を持った方の集まりというは農村では無理ではないかと思うのです。といって官製のにも疑問があるので、私たちは部落単位か、部落の中でほんとうに話し合いの場を設けていくより仕方がないのではないかと、そうでないとみんなが向上しないのではないかと。

いかと感じました。

小出 私には、官製の婦人団体の会長を三年やっております。(笑)やっぱり今斎藤さんのおっしゃられたように意欲が全然ない人がほとんどです。私は別に音楽サークル持っているのですが、それは誰言うとなしに集まった会で、三十二年六月から始めました。現在会員二十名、それはどんな雨の晩、風の晩でも、世間の批判があっても意欲に燃えた人ばかりです。で、年令の差もありまうけれども三年ほど続けまして、生活の中に根をおろした音楽同好会になりました。そういうようにみんなが盛り上った会でしたらスムーズにいけますけれども、官製の婦人会、県単位という会はリードしていくのがむずかしい。

弘中 その音楽同好会は婦人会の活動でなくて、盛り上ったのです。会費は自分持ちで……。

小出 会費は話し合って五十円くらい出しています。

佐々木 都会の方は自主性がありますから、放っておいても自分たちで自然にグループを作られると思いますが、農村の方はほとんど自主性を持ち合わせてないので、やはりある程度のお膳立てをしないと……。

大谷 しかしお話を伺うと、ここに出ていらっしゃる方はなんらかの形で小さなサークル作っていらっしゃる方がかなりあるわけでしょう。だからできないといってしまう

ていいかどうか。あまり都会と農村をきっぱり分けてしまっているのかどうか。

梅北 私は上からのお達しで作られた団体の一番欠点はないかと申しますと、集合率が悪いことではないかと思えます。会員が負担のない気持ちで集まることのできる会であつたら、割にスムーズにいくのではないかと思います。特に農村におきましては一月に一度でもいいから、一時間なら一時間と限定した時間で会合を持つことが大切ではないかと思えます。

金子 農村の人がお姑さんの許しを得てたやすく出られるのは婦人会です。それは婦人会がどうしても出なければならぬような官製だからです。しかし婦人会は役員ばかり忙しいところで、会員たちは婦人会はなにをしているかわからず、年に一回総会に出るくらいです。ですから、支部活動を盛んにすれば、今日は婦人会の支部で集まるからといえは出やすい。自由に集まることのできる人はサークルを持って自主的な勉強をすれば伸びていきます。その人たちが婦人会の支部活動をするときに、自分たちが勉強したことを、だんだんにしみ込ませていけば婦人会はよくいくのではないですか。

#### 集団の必要性

す。反対に個人を殺していくような集団だったら問題がある。

小出 私は魅力のある集団でありたいと思います。その場合に各自個人個人が自主性がなければならぬ。婦人の個人の向上のためには私たちは集団を持つ必要がある。

大谷 魅力のある集団というのは一体どういうものなのか。

弘中 先生のおっしゃる集団というのは婦人会とか、農協婦人部とかいう集団ですか。

#### 集団活動における個人の自主性

大谷 そういうもののばかりでなく、サークルとかいろいろあります。官製であっても部落集団ではないのですから、自分たちが入ろうと入るまいと勝手なはずなのに、皆さんのお話を伺うとどうしても入らなければならぬものが多い。ここに問題がある。これでは部落の場合と同じではないか。部落について皆さん大変お困りになっているということがおとこの話で出た。

弘中 金子さんのおっしゃったように、婦人会があれば出やすいという、その意味で賛成なのです。出ることによってたしかに向上できる。

大谷 だからもう一歩究つ込んでみようといっているの

大谷 もう一つ問題はもとに戻りましょう。現在の集団についていろいろな御意見が出ているわけですが、一団は必要なのですか、必要ではないのですか。そうして、その集団は必要であるとすればなんのために必要なのですか。

金子 自分のうちで一人でよく考えていれば解決しないことがたくさんあるので、集まって話し合う場はほしいと思います。

幸生 集団は必要だと思えます。官製の会がいいとか悪いとかいう問題でなしに、それが個人の生活とか、社会を明るくする上にプラスになるか、マイナスになるかという問題だと私は思うのです。昨日見せて頂いた埼玉の会のように、自分らのプラスになるように会員の編成をしなければいけないと思うのです。

大谷 プラスというのはどういうことがプラスになっているのですか、現実には……。

幸生 たとえば料理の講習にしても、自分があの料理を習いたいと思った時、町でしたらテレビを見て勉強することも出来ませんが、私たち農村では、個人では経費がかかりますが、婦人会で立派な講師や、普及員にお願いすればしてくれるのですから、大いに必要だと思えます。

小村 個人を生かすいい集団だったなら必要だと思いま

です。つまり小村さんの出されたように、自分たちを自由に伸ばしてくれる集団であるかどうかが問題である。現在の集団は個人個人を伸ばしているかどうか問題ですね。

学生 小村さんが個人が生かされている集団でなければならぬとおっしゃったのですけれども、私はその集団の中にあって、自分が個人を生かすべく努力するのが当たり前だと思っております。私たちが市役所から東郷受けるのはいやだといって、婦人会に入らなければならぬがプラスになるのか、その中に入り込んで関係の公務員を教育して(笑)公務員の方にこれだけやってくればいいではないかといえはいいのです。集団の中で個人を生かすべく努力しなければならぬ、私はそんなに思っています。

斎藤 農村の実態から考えて、その意見は正しいと思いますが、一般論としてはあなたの方のようなほんとうに目覚めた方々が何人でもおりますればいいのですけれども、そうではないのです。

佐々木 先ほどの問題をくり返しているようですが、農村の方は婦人会でもなければ向上する機会がなくなるのではないかと。それに自主的にグループを作ることとはほとんど不可能だろうと思います。

大谷 それも一つの見方ですね。どうですか。学生さんのおっしゃることも、佐々木さんのおっしゃることもよく

意識的に組織した集団は一体どういうものなのか、そこにどういふ問題があるかを考えようというのです。おとこの最後のところで、部落には大変困ったことがあるというお話がたくさん出ましたね。その場合に自由を、自分たちであがのうかどうか、税金を出してあがのうのうのいいかどうかという問題が出ましたね。そして税金の使途まで勉強して政治の末端を監視しなければならぬという問題が出たでしょう、その問題を……。

斎藤 読書会の場合は皆さん非常に自主的なのですが、婦人会に入りまして自分が引っ張り上げるような立場になりました、つくづくいやになったのです。自分の幸福のために集団に入ったのになんで入ったのか、ただあくせくしていららるるために入ったのかと思うのです。自主的に作られたものは各自が責任を持つのです。話し合うグループはほんとうに自分の悩みから出たものでなければならぬ。農村の実態として佐々木さんがおっしゃったようになかなか出られない立場にある。井戸端会議で泣いたり、婦家に帰って自分の生活を悲しんでいるのでしょうか。でも婦人会にくるとなんにも問題がないというのです。自分が悩んでいることを自分で解決できるのだというような気持ちをもたせる。どうして自覚させたらいかが。

私中 読書会などを部落の中でも私とあなたと三人だけ

わかるのです。なにか、農民というのは引き上げてやらなければならぬというふうに感じられているようですが、引き上げるといふことは一体どうなのか、引き上げて貰いたいという意識がないのに上から引き上げてやるという指導者意識で、問題が解決するかどうか。あちらこちらに行って感ずくことは集まった方はこういうふうにして指導していかなければいけないと指導の癖ばかりなされる。その指導をなさる方で育っていくところもあるかもしれない。そういうふうには集団を指導のための集団として考えるだけで、割り切れるかどうか。もっとそこに考えてみなければならぬ問題があるのではないかと。しかし婦人会ができて、今お話しのように会員がもっとも出て来ない、厄介だという声が出る。あるいはない方がいいという声が出る、それは一体なにか、その問題をここで掘り下げて貰いたい。つまり引き上げなければならぬということはよくわかりますが、それだったら政府に上から下まで組織を作って貰って、金を出して引き上げて貰うということをやってしまった一番手っ取り早い。そういうものではないのではないかと。自分の立場を意識的に引き上げるといふ意識、ということをお私が出したのは、今までは家や部落は自分たちが意識して作ったものでなく、ではめ込まれた集団というふうにおかれおれおれ考えている。今日の問題は自分たちが

でやろうといったときに、ほかの加わらない方があんなことをしてというでしょう、言わないですか。夜でなければ農村は出られないでしょう、「夜遅ろうてどこにいきやるんだらうか」などと、近所の人がいろいろ話すから行きにくいということはないですか。

斎藤 それは隣り近所のお嫁さんみんながある程度出てくるようになれば、割に言わないと思うのです。それは自覚をしてお嫁さんを工夫して説き伏せるといふような方法を考えて、積極的にならなければ打倒できないのではないかと私はそう思うのです。

岡部 私たちの地域婦人会では出席をとりまして、個人の出席のいい人にはほらびを出す、それから地域の各組が、この組が一番だったからその組に褒賞金を出すという制度があります。初めのうちは私はひどく疑問を持しましたが、出席にとらわれて行きたくない会合に行く努力を払うのはもったいない気持ちがありました。ですけれども「どうしても行かなければならぬ会合だ」、「みんなに迷惑のかかる会合だ」ということになる、お母さんたちが行って来なさいといふ出される半面もある。しかし、私たちのような年代になって自分でもなにかやりたいという気持ちになったものは、その会合が足りないので。そこで今年になってやっとグループを揃えて、兼業農家が多いので苗



代をやるとか、田圃をやるときに、自分が考えてやらなければだめねとお友達と話し合いました、農業指導員がお話しにけるので、そのお話を聞きたい人は来なさいと官の会を通して連絡をするのです。その会合でしたら、みんなが切実ですから、肥料のことについても人が変わったほどく下がるのです。それが官製のみんなが仕方なしに行っている会合ではちっとも発言しないし来ないのです。

齋藤 やっぱり、必要から出たのではなければだめです。ね。

松浦 私は地域婦人会と、農協婦人部と両方やっておりますが、自分が農家ですから農協婦人部が一番大事な集団だと思っております、おのずと農協婦人部に行くのです。やっぱり農協婦人部の会合に行けばなにか得するし、行かなければ損するのです。たとえば、私たちの地区では「乳酪農の会」とか「煙草耕作の会」など、いろいろな会を持っているのです。そういう会合のときに行かなかったら、今月の牛の飼料の配合が少し変わっているのだからそれがわからないうことになります。煙草の会合でしたら大事な苗つけ床の植えつけのことが習えないから、損をする。家計簿もやっていたんですが、初めは自分のうちの家計簿を人に見られるのがいやで、全然やらなかったのですが、指導者もよかったですと思いますが、家計簿をつけていろいろな

会長さんがあって、三年の間話し合いを積み重ねて来て、その結果として婦人会を一本にしました。官製ですから婦人会の会長も立てなければならぬし、生活改善部の会として会長を立てなければならぬし、農協婦人部の部長を立てなければならぬし、今年から母子愛育の指定村になったので、その会長も立てなければならぬ。そんなときに会長さんを個々に立てたら決して私たちは発展しない。だから婦人会の会長さんに五色のたすきをかけて、その会長さんの下に部を作って、生活改善部の部長であり、班長であり会員であるようにして、その中で個人が生かされるように努力しました。

大谷 そういうふうには立派にやっています。ところが極めて例が少いので、むしろその下であがっているものが多いと思う。ここまでいくという到達点で問題をおしまいにするのはなくて、自分らはそこまで達するのになんかあがっているのか、阻んでいるのはなにかということとをここで話し合わなければいけないと思うので、その前の問題を出して頂きたい。

#### 集団の運営

佐々木 婦人会のあり方そのものに相当問題があるだろうと思います。今の婦人会は上からの流れを受けるだけで

検討をするときに、月末集計や年末集計をしておかなくてはいいくらやってつまらないし、有線放送で流れてくる資料に対しても、自分のところでそういう集計をしてないとかからないので、今月体んだけれども来月はやろうということをやってみると生活に希望ができません。精神的な希望だけでなく必ず得がいくのです。一つの得がいくというのが一番会合に行く魅力だと思います。

齋藤 私も両方やっているのです。農協婦人部は初め去年七十六名でしたのが全然勧誘などしないのに、三百六十幾名になり、初め七百名だった婦人会が今三百名ちょっとです。

大谷 片一方に入りますか。

齋藤 大概両方に入っていましたけれども、今はやめまして農協婦人部に入っていました。私としてもとてもやりがいがあるし、両方に情熱は注がないので、農協婦人部に熱心になりましたら、婦人会の方に非難の空気がありまして。婦人会には婦人会の立場があるし、目的があるし、農協には農協の目的があると思つて、婦人会を私もやめようと思つていのですが、あなたがやめると婦人会の方に反対してこちを作ったと思われるから、やめなさいと言われたのです。

半生 私の方は三十年に町村合併で、方々の婦人団体の

下の声をほとんど上に通していません。幹部の方も相当反省して貰いたいといつも思っているのですが、役場自体も婦人会の組織を利用して雑用を押しつけるし、商店も婦人会を利用して宣伝しようとして、上の方がそれを案外考えてないのです。下の声を一向聞いてくれない。婦人会創立のときにも私たち相当反対したのですが、それが途中で消えてしまつて上まで通らないのです。そういうところもお互いに反省すべきではないかと思ひます。

岡部 私たちの部落は初めはグループ活動もありませんし、ひどく遅れている感じを持って参ったのです。皆さんのお話を聞いてましたら私たちの地域には有能なリーダーがないのです。私たち若い者がこのままでは世の中に遅れていくような気がするのです、なんとかみんなでやろうとなつて来たのです。それまでにはたがびたがび会合をして、一人一人が自分に自覚して来て、自分が考えて自分がやらなければという気持ちに大分なつて来ております。

大坪 私のところは若妻グループで読書会を作ろうとした時、お母さんたちが読書会だなんだといつても、親たちの悪口を言うに過ぎんと言われたのですけれども、結局作つてみたのです。そうするとやはり農家ですと子供があるとして来れないし、初めは二、三人、四、五人の程度で

したが、会が重なるにつれて、そこに入って勉強することによって、今まで農家で新聞もろくろく読めないのですけれども、「家の光」の輪読によって自分たちの視野が開け、だんだん発表力も養われていい結果がでていていると思います。

幸生 婦人少年課というのが県庁にあります。その課でかわいそうな少年を守るためにというのが少年クラブ、をつくることになって、会を組織させたのでまたたく間に母親クラブが県下で上ったのです。一方には農協婦人部もありますし、又生活改良友の会というのも一年くらいの間にはたばたつと組織されました。そしてお役所のなわ張り争いが私たちの組織の運営を阻むのです。私たちは非常に苦勞して婦人会一本にして、農協婦人部の会長も婦人会長さんになって頂いて調整して会員に対して公平に当るというように苦勞しているのに、非常にこまりました。

大谷 先ほどから問題になっているのは、あなた自身で問題を出したになったのですけれども、官製の方がいいとおっしゃったけれども、この危険性があるでしょう。その危険性は非常にこわいものなのです。あなたのところは組織をそういうふうになさって、長い間苦勞し息の根をとめられてはいるのではないか、その矛盾がここでの問題では

持っのとはとても大変です。県に四十くらいグループを作っている人がありますが、どうして足踏み状態になるのか、どうしてつぶれてしまうのかというのを、会の中心になつて人たちに呼びかけて、集まって話し合い、また勢力を新しくして自分のグループを育てていくということ、で、年一回リーダーの研修会があります。そういうふうな「母のつどい連絡会」というのを作り、自主的な集まりをぼつぼつ続けております。

岡部 農家のお嫁さんは、お母さんの指図を受けて仕事してありますから、自分で考えてこれがこうだからこうしなればならんという考えがないので、会合に出て来ても自分の考えが発表できない。それでお母さんがいても自分が仕事をやっているとこの自信のある人はある程度意見をもちますよ。ですからみんなに自信を持たせることが一番いいのではないかと思います。発言するのになれないので自分が言おうと思うことを相手に通じさせることができないのです。そのときに指導者の立場の人がうまく取り上げてその勇気を認めてくれると、またみんなもう一回という気になります。すけれども、それをべちゃんにすることの方が今でも多いのです。ですから一べん言ったけれどももうやめておこうという人がふえて、やっぱり人に言われたようになっていっているのが多いのです。婦人会のや

ないか、集団の中での自由というのは、自由を獲得しておられるかもしれないけれども、その前に問題があるのではないか、その問題をここで取り上げよう。

金子 私のところは非常に保守的なところですが、三年前に集まりをもちたいと思って、周りの人に呼びかけたけれども集まってきた。それでグループで集まっているとよその隣組に入っては悪いとか、八分にさせられると周の人がいうのです。ですからグループ作りはできないといつてやめてしまふのです。やめてしばらく経つといろんな不満があるし、子供のことも一人では抱き切れないのでまた集まって話し合ひののです。集まるとまたいんな目で見られるからというので、婦人会の支部長さんに婦人会の仕事をして貰おうと、県の「郷土をよくする会」にお願いして毎月講師のお話をお願いしたので。そうして半年経ったのですけれども、その後さっぱり発展しない。ですから私たちが集まることもできないのでノートを回し始めたのです。働いても働いても楽にならないのはどういふわけか、それは政治が悪いのではないか、そういうことを書き始めまして、やっぱり集まらなければだめだと集まってそういうことを話し合ひますと、男衆がそういうことを女衆が話したのは周りの人に悪い、というのでまたしばらく休んでいるのです。ですから婦人会よりほかに集まりを

りかたをみんなに自信を持たせるために、自分が発言しなければだめなんだ、いやでも応でもそこで発言しなければならぬという責任を持たされたときには、自分に自信ができてくるのです。

植松 私のところは青年会の方が婦人会の方に呼びかけて若妻会を作ってくれたのです。それで私始めて出席して感じたことは、会がまだできたばかりのせいもあるのか、発言する人がほとんどに少なかったです。発言する人はお姑さんのいない二人暮らしの方ばかりで、お姑さんのいる家庭の人はほとんど発言せずに会が終わってしまうことが多かったのです。そうして夜道をうちに帰るときになって、子供のことや家庭のこと、また仕事のことを会で一言も言わなかった人が次々と話し出すのです。会が角張っているということと地方会議で言ったら、あなたがこの席で私たちの会が角張っているなんて言うほどの勇気があったら、なぜ私たちの会はなんとなく角張っているわねと言われないのだと宛て込まれたのです。そのときにその会で言えるような会でしたら、このようにすることに原稿も出さなかったし、私たちの立場をまだまだ理解してくれてないのです。畜産 姑さんがいるのであとで仕返しされると恐いからということがありますけれども、家庭の中で何年も発言権もなく暮らしている、習性となって、なかなか出な

いのです。でも井戸端会議でいろいろ話しているのです。私は二十五人くらいで婦人学級を開き、私たちの周りにむだなものがないかと聞いたのです。誰も発言しない、それで四人づつ分けて、あっちこっち回らせたなら、みんな口をとがらかしてお話ししているの、その中からまとめて誰か話をして下さいといったら、どんどん意見が出たのです。

松浦 農家のものも言えない婦人がなんとか意見を口で、あるいは文章に表わすようなことがこれからどうしてもなければいけない。そのことだけでも今日の会ではほんとうになんとか、みんなですういう方向を見出して貰いたいと思います。それがなかったならば農民の、あるいは農料のしあわせは将来絶対来ないと思います。

大谷 今非常に大事な問題が出たわけです。いわばそういった深刻な苦しみについての話が今までなかったわけですから。それがしかし最後の自由なのでしよう。集団の中での自由というのは、自分の考えていることをあくまでも主張し、そうしてそれを通すことができることがなかったならば、その集団は意味がないと言われてもしょうがない。

金子 P.T.A.の役員は選挙の時、おかしな選挙の仕方をします。総会に行きましたら受付でがりずりの紙を渡して、それに会長と副会長になる人の名前が書いて

そのからを載ったのです。私は会長にもどしどし究つ込みます。そういうふうにしてスムーズにP.T.A.関係はやっておりま。

幸生 私の方は任期は一年で交替しています。P.T.A.の会長はひとつも子供の教育に熱心でもない男の人が市会議員だからとか、予算とるのに都合がいいとかの名目で会長になっている例が多いのですが、私はそこにも不合理があると思います。実際問題として、どうかしてP.T.A.の会長に女を入れなくてはいいかと思うのですけれども、一番そこが悩んで、私小学校も中学校も副会長にはなったのですけれども、会長には一回もなかったことないし、とくに女の副会長は形式的に入れてあるだけで、機密の相談には参加させないのです。運営委員会ときにはいっしょうけんめい言うのですけれども……。

大谷 いわゆる地域婦人会とか、農協婦人部でそういうことではないのですか。

金子 私の方は今まで会長をやっていた人たちが集まって、この次は誰がやるということを決めるのです。ですから下の人は誰が会長になるか知らないのです。

大谷 これは自由な組織ではない、入っているというのとだけではないでしょう。

幸生 無記名自由投票でしたらよろしいですね。

あります。渡すときにもしその人が会長、副会長に気に入らないときには名前の上に三角を書いて下さいとおっしゃるのですけれども、鉛筆を持って行った人は一人もいないので、もし書くのだったら受付で借りなければならぬので、誰も書いた人がありません。

大谷 P.T.A.は自主的に作っているようだけれども、これは運命集団ですね。この問題はどうですか。

弘中 P.T.A.の会長をきめるのに、最後は総会にかけるけれども、私たち下の役員が最初が集まります。そのときにどういう方にしようかと一応会長が言うけれども、今までやっていった方が続いておやりになりたい意思がないことはないの、私とも周囲の空気がほかの方がよいとは言えんようになるのです。広い範囲からほかの誰かありませんかといえなければいけません、この方とこの方ではどうでしょうか、といわれるとあれはいけません、こっちの方がいいということはない言えなくなってしまう。そこで大体きめて、今度は総会になったら、金子さんがおっしゃった九つけるほどではないけれども似たようなものですね。

小出 私はP.T.A.の副会長を五年やっています。私の方は学級委員は投票できめ、その役員が寄りまして会長を選挙するのですが、封建的な気風の強いところですから青友会の会長さんは金持の奥さんにきまっていたのです。私が

副部 私たちのP.T.A.は貧乏ですから、学校の役を受けたら再々学校へ行かなければならぬので、その努力を払うのに自分のところの経済が困るからなるべく会長さんになりたくない人が多いのです。各部落で推薦した連絡係をする人がありますが、二年で交替になります。その人たちが各部落の中から適当な人を選んで、その中からみんなが会長を投票するというようになって、小学校の方は子供が次々卒業していくので、会長も代わっていきますが、中学校になるとまた様子が違って、市会にでも立候補してやるかという人が出て来ます。小学校の会長はみんなならされるから仕方なしにやるので、二年間会長としてお役に

大谷 大分問題が出たのですけれども、どうも聞けば聞くほどいろいろな集団にみなさんが自主的に入っているのではなくて、できたものの中で一部の人が動かされていることが非常に多いと思ふのです。いろいろな原因があるにしても、結局さきほどからお話が出たのです。指導者の問題とかあるいは一人一人が良識を持たなければだめなんだということになってしまふのです。けれども、そうやってしまふと結論が出たようなことになるので、指導されなければどこかへ動いていけないということとは一体どういふことなのでしょう。原因はどこにあるの

でしょうか。

金子 ほんとうに自由にもの言えないのです。

半生 私はどこでも言いたいことは言っているの、みんなが私のことを知っているし、私も自信持て言っているのです。

大谷 同じ農村でも半生さんみたいなどころもありまして、発言の自由を制限されているところもあるわけでしょう、そうすると根本的な自由はないわけです。自分の言いたいことを言えない。だからおととい部落の問題をくり返しくり返し取り上げたのはそれなのです。だから皆さんがお作りになった意識的な組織の前に問題があるわけですね。意識的な組織の中で発言さえも部落がうしろに拂えて抑えているわけです。そういう点を午後にもっと深めてお話し合いを進めたい、つまりそういう遅れた農村社会の中で、自分たちが意識的に積極的に集団を作ることの意味、それを自由な集団に持っていくにはどうすればよろしいか、といったような問題に入っていくてみたいと思います。

#### (休 憩)

集団はどうあるべきか

大谷 そろそろ集団とは一体どういうものか、どういう

婦人会の中に織り込まれていますから、ある程度いいと思います。

大谷 婦人会の中に織り込まれているから婦人会の値打が出ています、それは婦人会がやるべきものではなくて、部落、町村がやるべきもので、それを婦人会に押しつけているから婦人会がなければ困るということになってしまっている。今の場合は婦人会がなければ困るところに追い込まれているけれども、それは自主的なものではなくて、いわば町村でやることの諸団体になっているから、困るということなのでしょう。

弘中 私たちの場合、そういうことをおっしゃられるとその通りなのですが、東京の方なんか服装統一すると逆コースとかおっしゃるのですが、いなかでは入学式などにはみんないい着物を着て行くので、着物がいい人は私は紋付がないからといって出ないのです。義務教育までは絶対会服を着ることにすればみんなが出やすいのですが、それは婦人会でできたからと言わなければできない。結婚改善なども公民館あたりが指導してやったのは理想的過ぎて実行されないのですけれども、部落の婦人会でできたことは実行されますから、狭い範囲ではとても役に立っています。

梅北 五年くらい前婦人会の役員をしておりましたが、

ものであるべきかということを話し合ってみたいと思うのです。半生さん佐々木さんなどからは集団はぜひとも必要だというお話も出ました。それでは集団が必要なのはなぜかという問題をこころで話し合ってみたいと思います。斎藤さんの場合は集団が必要でないという意味ではなくて、地域婦人会は自分たちのところではない方がいいという意見だったわけですね。集団が必要でないとお考えの方はないわけですね。どうでしょうか。

佐々木 あんまり自信ないのですけれど、私たちの部落でもいろいろごたごたがあったので、婦人会を解散しましよというところになったのです。そうすると一般会員の方から反対の声が出て、どうしても婦人会がなければ困るというので、結局また持ち直ったことがあるのです。

大谷 あればいいというのは、話し合いをする機会がほしいからあればいいというのでしょうか。

佐々木 私たちの部落の場合では、結局婦人会が村作りに影響してくるという感じを持っております。自分が住む社会がよくなれば、自分たちもよくなるだろうという考えを漠然と持っていると思うのです。

大谷 非常にざっくりばらん言葉で言って、婦人会があるために社会がよくなっているかどうか。

岡部 お便所の薬漬や野菜、排便の伝達などの活動が

子供の病氣やいろいろな事故のため、もう婦人会の役をとてもやれないといっている自分から脱退したのですが、とにかくやはり淋しいので、一種の娯楽団体といえますか、農村では踊りや料理講習があったりすると、やはり自分一人ぼつおんとするのは淋しいし、明朝さが自分からなくなっていくような気がします。

金子 私は自分が小さいグループを作っているなことを話し合うことができますが、婦人会は自由に発言も行動もできない現状なので、その様な団体ならなくてもいいような気がするので、しかし周りの人を見てみると婦人会がなければ外出することもないので、各個人のためになるような婦人会であったならば、又そこまで婦人会を成長させることができたんじゃないかと思えます。

大谷 役員の方はそれほど感じにならないかもしれないけれども、一般の方々には婦人会に出て自由に発言できるようにしているか、どうでしょうか。

岡部 初めは発言しなくてもべっちゃんこにやられたりしたもので、発言しないでおこうと思ったのですが、このころになって母親大会とかPTAの会合とかに出てみると、やっぱり自分の考えはある程度述べなければ意義がないという気になりました。ただ非難を恐れず言わなくなるという態度からは、ちょっと一歩だけ前進したような気がします。

す。

弘中 みんな言いたいことは言いたいのですけれど、大きなグループで大きな会場になったらみんなおどおどして言わないのです。小さい部落の婦人会の集まりだったら、どんな人でも発言します。大きなグループだと思っていても言えない。言ったことの反響よりも、なれてないから人の前でものが言えないのです。

松浦 ものが言えないということは、おじけることもたしかに大きな部分ではあると思いますが、家庭の中とかそういう小さい集団でもが言えないというのは意欲がないのだと思います。自分の意欲を通すためにはたとえどんな条件のもとでも替えるように、そうした環境をお互いの力で作るということが大事だと思います。

大谷 それは作るということが必要なだけども、現実の問題として口下手だから言えないというふうに言い切っているかどうかということ。と申しますのは、私もかなり方々へ行っているのですが、山口の場合は弘中さんのおっしゃる非常に非常に発言があるのです。農協婦人部に行っても非常に活発に発言がたふさんある。これはやはり弘中さんの方は都会化していると思うのですよ。だからかなり一般の農村とは違った面があるのですが、ほかのところはどうなのでしょう。

金子 ここに来ていらっしゃる方は発言しようと思えばできる人たちだから、そんなに感じないと思うのです。ほんとうの下の人だったら周りの人に遠慮して言えないことが多いと思います。

大谷 私もどうもそういう感じがするのですよ。皆さんは言いたいことを言っておられるからべつに不自由を感じていない。だからのびのびやっていると考えるかもしれないけれども、一般的に言えばそうではない。つまりある意味ではここに出てくる皆さんと皆さんの組織に繋がっている会員の方の間に大きな断層があるのではないか。どうなのですか。

梅北 私のところの部落では、それは婦人会のようにいきません、といって、今でも部落の集會などでは一言のものとに却下されます。

大谷 一般的に考えてみると、たとえば婦人会がなにかをするので具体的な決議をする時、その前にその問題についていろいろ発言をする。その場合に誰かが発言したことに對して従来の部落の取りきめとか、あるいは部落でボスが押えている。それに反駁するものが出てくるとすればそれに対して圧迫がないかどうかという問題です。先ほどのPTAの会長を選ぶときに三角をつけさせるという例は農村社会の封建制でしょう。農協の婦人部でも政治的圧迫

斎藤 みんなの真似をして入ったものだから、自分が婦人会の一員だという自覚もないと思います。それで発言もしない、考える気持ちもないのだと思います。

金子 私の方はそうではなくて発言したくてもできないのです。私は一番初め仲間に入ったときに発言したのですよ。そうしたら親戚の人が「なぜああいうところで発言したか、会長とか町長の奥さんという人が多勢並んでいるのに、入ったばかりでそういう発言をする」とみんながなまじきだと思ふ。だからそういうことはしない方がいい」と言うのです。そういう考え方があると思うのです。

大谷 私がこういふふうにだめを押しているのは、皆さんの発言がおとといの発言と今日の発言がくい違っているのです。おとといは農村のおかれた部落社会に拘束されてのびのびとしてもが言えない。のびのびした生活ができないとおっしゃった。ところが、婦人組織になるとそれがちっとも出て来ない。ただおじけづいて言えないとか、なれないから言えないというふうに制り切っている。つまり婦人組織というものは、部落のそういった遅れた圧迫と別存在として存在しているかどうか、成長しているかどうかのだめを押しているのです。婦人組織だけは自分が勇氣を持ってものを言え言える、圧迫を受けないようなものになっているかどうか……。

があるわけでしょう。その問題がなぜ婦人組織の問題に繋がった問題として出て来ないかと、だめを押しているのです。だから別の問題として切り離しているようにすけれども、その問題を出して頂きたい、ここにはほんとうの集団と自由の問題がある、そこまで突っ込まなければ、集団における自由の問題が出て来ない。

金子 たとえば年に一回婦人会の總會があります。そのときには毎年なにか余興をやることになっていて、その予算があるわけです。会長さんが各支部の支部長さんを集めて余興はなにをやるかというのですが、支部長さんが踊りはいやだといっても、その年の会長さんが踊りの好きな人だったら、その年のレクレーションは踊りになってしまふのです。

佐々木 上からの圧迫はたしかにあります。隣の部落ですけれども、引揚者が会長になり、なにか変わったことをしようと思った場合、押えられて全く運営の自由がないわけです。会長でありながら会の運営の自由を持たないのです。

#### 民主的な集団の運営

大谷 どうも皆さんのお話を伺っていると、皆さんは婦人組織の中で自分の自由を十分に確立して、言いたいこと

を言っている。というふうに私には考えられない。部落の問題では皆さんは、窒息しそうだとお話をなさったわけですね。それでは自分たちの作った組織、上から作られたにしても原則としては加入、脱退の自由があるという恰好になっている組織では、個人が自由に行動できると考えていいかどうか、くりかえしいうようですが、だめを押しているわけですね。

金子 婦人会ではどのような選挙のやり方で、会長をきめるのですか、自由に自分の意思を発表することができるとですか。

佐々木 私たちの方では候補者をたて、前会員の互選です。ほんとうは推薦候補者を立てた方が円満にいくのですけれども、推薦では立つ人がいないのです。結局選挙でまいった人が立ちます。推薦候補を立てた場合、もし自分が入りたいと思う人がいても推薦候補に立たない場合、自由な投票ができないのではないかと問題がありますね。

金子 うちの方は、会長をやったことのある方が集まると、今年は誰を会長に、来年は誰が会長になるときめるので、会員は誰が会長になるかは知らないのです。

小出 私の方も、そういうケースがあったのですけれども、私、会に出ましてからそれでは自主性が無い、選挙の意義がないからというので投票箱を八つ捲えて、それから

大谷 なぜそうであるか、どうしてそうであるかということをお話し合わなければなんにもならないと思うのです。そこを突っ込んでもう少しやって貰いたいと思うのですよ。

斎藤 大して目的を持って入ったわけではなく、人の言いなりになって入ったわけですから責任がないのです。それで会長とか副会長とかを選ぶ場合にも自分はどうちでもいような気持があるのです。そこが問題ではないかと思ひます。リーダーばかり悪いのではなくて、一人一人がほんとうの責任を感じてないわけなのです。

金子 自分の言いたいことを言えば周りから、穏当ではないと言われるからではないですか。

斎藤 大体ここにいらっしゃる方はなんらかの形で役員をやっている方でしょう。だからあんまり困っていないかもしれないけれども、一般の人はどうかということですね。

金子 一般の人は言いたくても言えないのではないですか、あの会長では困るということを考えていても……。

大谷 皆さんは意味があると思うから積極的に会長や副会長、役員をやっている。意味がないと思ったらやらないと思う。一般会員が皆さんと同じように考えているのかなのです。ここで考えていることは……。

は一切投票になっております。

岡部 私たちの方は自由選挙になっておりますから、みんな好きな人を書きたいのです。必ずといっていいほど来年は一体誰を入れたらいいだろうかと、みんな聞くのです。大体現在の会長の皆さんの意思によって副会長さんが次の会長さんになれるようにきまっています。副会長さんが次の会長さんにならなくても、そういうことをすると違う人を選びたいと思っても、そういうことをすると違わないし、副会長に悪いから、そういう嫌で選んでほしいということが流れてきます。それが流れたらやっぱりみんなその通りにするのです。

大谷 つまり穏当でないからという考え方が流れているのではないですか。

弘中 穏当でないということをお忘れたら農村の生活は成り立たないのです。

大谷 なぜそれを皆さんお出しにならないかということなのです。それは自由でないということなのです。

小出 自由を束縛されているということでしょう。

金子 そういう生活になれてしまっただけで当り前のような気がしているのです。

弘中 そうですね、でも都会の生活だってやっぱり穏当でなければならぬということはあると思うのです。

金子 私は婦人会はきらいではないし、その中でいろんなことをしたいと思っています。ですから支部長さんがなにかお話を聞きたいというときには講師の幹事もします。婦人会をよくするために、協調できないことは、はっきりいうだからと言いつつ方がいいのではないのでしょうか。少しでも個人がその中で自由にそうしてしあわせに生活できるようにものにしていくということは悪いことではないと思います。集団の中の責任が集団を育てるような気がしますけれども……。

大谷 学生さんにひとつ意地の悪いことをお聞きするようですが、ぎりぎりのところに追い込まれたときに協調できない問題がある。それを協調しろ、協調しろといっても片づけようがない。その団体の中で自分の生き抜かなければならないものが、生き抜かされるだけの条件を備えているかどうかを私は問題にしているのです。だから最後の結論はあなたのおっしゃるところにいくかもしれないけれども、もう一歩突っ込んで個人の問題を取り上げる必要があると思う。個人の意思を尊重し合う組織になっているかどうか、団体が個人の意思を圧搾しない組織になっているか、立派なものだ、皆さんに農村の集団がそういうふうになっているかどうかということをお聞きしているわけです。はっきり言えば、この前に、部落の中では皆さんは

それはできないということをおっしゃっているわけでしょう。ところが婦人の組織はそれができるといふふうに言うのですが……。

松浦 私はこんなに思います。私の婦人会に二つのグループが隣同士であるのですが、一方のグループはとにかく話し合いを、旦那さんの悪口もお母さんの悪口もなんでも言えるほんとうに楽しい会のように思っています。もう一つの会は毎月料理の講習をしたりしているのです。そのグループの方がこちらのグループの方にむかって、あんなのところは話し合いをしてなんでも話されるからいいと言われなければならない、なんにもしてないではないかと言われるのです。ところが向うのグループの方がこちらに向って言われるのには、立派な指導者があって、あの人が料理の講習をされるのでいやな顔をしたら叱られるから、仕方ないのに放っておいても行くんだという意見が出たのです。そういうふうな地域に権力を持った人が、あるいは経済的に時間的にひまを持つことが出来る余裕のある人が指導者になった場合には、ことなかれ主義でみんながついていくような感じがします。それで権力を持たない、いい指導者のところでは、みんなが自由に話し合いができて、その中から正しい運営ができるのではないかと、私は隣同士の二つのグループを見てそう思います。

で料理の研究とか、生活改善とかあまり毒にも薬にもならないようなことをやっているからでしょう。

大谷 午前中とにかく補助金など貰うと講師を呼ぼうとしても、その選択にまでくればしが入れられるのではないかというお話があったわけなのですが、その点はどうなんでしょうか。

金子 私はそう考えているのですが、多くの方々のお話を聞いていると、婦人会というものはそういうものだから講師も上からいって来たものを頼めばいいと考えているが、私はそういうことは困ると思うのです。

半生 私の言いたいのは、社会を一ぺんに改革することはできないから、さし当りその中で自分らの努力によっていいものにするように、婦人会の会長を県会に出すように一歩一歩進んでいったらどうかと思うのです。

弘中 婦人会の指導者を手に入れておれば、みんな下の方が思うようになるかと思って政治的にねらわれているのですが、ほかのところは知らないけれども、私の方はよく言えばいいのです。巻かれていよう顔をしてますけれども選挙のときなんかそんな票は入れないです。

金子 そこまで個人が育てばいいですけれども、育つまでの段階が……。

大谷 だからね。指導者のあり方指導者の如何というこ

梅北 それで感じたことですけれども、婦人会となり出すと、婦人会から村八分にされましても経済的圧迫とか、生活していく上にそれが響くということはありませんけれども、部落ということになりますと田の水の割り方からお祭式のときまで困りますから、経済的に直結しているから言いたいことも言わないで我慢しているのではないかと思います。

大谷 一般的に言って、現在の婦人組織というものは拘束するだけの実力を持つほどに強いものになっていないと考えてよろしいわけですか。

弘中 生活に直結した力がない。

斎藤 そうです。たしかに目的がぼやっとしていてから……。

大谷 つまりそこは自由が圧迫されることを真剣に考えるほどの団体ではない。

小村 そうしたらあってもなくてもいいようなものではないかもしれませんか。

松浦 婦人会というものはそんなに強いものではない。非常に強いものである、それが自分たちがはっきり考えないうちに妙なところに追い回されていく力を持っているのが今の婦人会ではないかと思えます。

金子 政治を勉強するような仕組みになっていないの

とおっしゃったけれども、個人が育つ条件ができていくかどうかということですね。せんに詰めてみれば……。

金子 自由があれば高まるのです。でも指導者階級の人があることを育つたら悪いと言う中では、そういうふうに育っていかないのです。

#### 集団における個人の自由

斎藤 私たちの隣村の話ですけれども、教員をなさった方がリーダーになっているのです。その方の意見は絶対なものだと自分で思い込んでいます。また一般の人はその方に反対するような気持は全然ないのです。みんなの自覚がないということが一番問題だと思います。

大谷 必要だということを考えないで、お義理で入っている人が多いということになりますか。

松浦 農協婦人部も結成の当初は、婦人会即農協婦人部という考え方で入ったのが、私たちの地区の状況なのですが、その後いわゆる商工会の方と農協婦人部の摩擦が起き始めて非常に仕事にしくいということが総会で発言されて、われわれは農協で消費組合として、いろいろなものを扱って貰おうと思うが、商工会の方ではそんなことではわれわれの商売ができないというので、大変な圧力があつたのです。そのときに話のよくわかった少数の人から、商売

人に支配されないで私たちがやるのではないかという発奮がありました。そのときにわれわれは豊陽婦人部の役員であるということが初めてわかったのです。それまで豊陽婦人部がどれだけ農民に必要なものであるかは、役員から聞かされたのですけれども、そういう事態が起ったときにみんなが認識したようです。

佐々木 私たちの部落では金員婦人会に加入することになっております。全部が入りませんと一画からその組織が崩れる心配があるとという考え方からそうなって、なかば強制的に新しく越して来られた方はすぐに役員が加入の申し込みをお願いしていくわけです。

小出 私の方はあくまで自主団体ですから、入りたいと希望する者だけが入るわけです。初めは無意識で入った者でも婦人の地位向上のための講演とか料理講習とかいろいろなものがあり、それに魅力を感じてきた方は脱落しないで続けようということになりました。

岡部 私たちの方もそこに住んでいる人はみんな加入します。強制的な加入ですけれども、私たちの部落ではお嫁さんが入ったらお母さんは退会することになっていました。ですからお母さんの年代は婦人会の中にはいませんから、案外みんな思うことが言えるのです。別に中年婦人部があり、お姑さんだけが加入することになっております。その

弘中 会費でも高ければ来ないのですが、役場から補助があるのでは会費は安いのです。年間が三十円、それならまあ入った方がいいといった場合です。

半生 本会には三十円ですが、それとは別にグループは毎月十円づつ納めて、その上、なにかのときには出しております。

大谷 役場から補助がなければどうなりますか。

弘中 会費を上げなければやれません。

大谷 会費上げたらどうなりますか。

弘中 入りたくない人は入らなくなると思います。

大谷 どうちがいいと思いますか。

金子 それは会費を上げてどんどんやったらいいと思います。

半生 私たちは税金を納めているのだから、国から補助金をもらってもいいのではないかと思います。

大谷 それはあなたと金子さんの意見のくい違いです。

金子さんは金を貰えばどうしても押しつけられるという。あなたの場合は金を貰ってもとにかくいいと思う。

半生 私は国に納めた税金だと思えます。みんなにもそう教えています。

斎藤 私は自覚を促す意味でも自分の金を出して、自分でも学ぶとか、協同活動するのがほんとうだと思って、そ

会は旅行したり、年に三回会合を持つなどしております。大坪 私のところは、お母さんとお嫁さんが必ず二人入ることになっているのです。ですから、お嫁さんは子供がいりそこに出にくいのですから、自然お母さんたちの会になってしまふのです。

金子 うちの方もお姑さんが多いのです。引越してくると何の連絡もないのに、その役員が会費を買いに来ますから、なにも知らずに入ってしまふのです。

斎藤 うちの方では年寄りのリーダーがしっかり組んでますので、若い方がこうしたい、ああしたいと思いましてもなかなかできないし、もちろん会長の椅子などにも坐れませんが、やめたいやめたいとリーダーはおっしゃってますけれども、心の中ではほんとうはやめたくないのです。いつまでも昔のやり方が続いていくことになると思います。

植松 私のところの若妻会は、お姑さんのいる間はいくばく年をとっても若妻として入っているのです。ですからいぶん年令の差があつて、二十代から四十五才の人までいるのです。

半生 私のところは任意団体です。「地域に住んでおり、目的に賛同する者をもって形成する会である」ということが書いてあります。みんなが入っていますから、私はお義理に入っているのではないと信じております。(笑)

のことを提案したのです。賛成を得て五十円から百円になったのですけれども、ほんとうはそれだけでは足りないから、もっとあつた方がいいといったところが猛烈に反響が来て、ほんとうに困った人たちのことを考えてやらない、入りたくても入れない人もいるのだから、その人たちのことを考えてやれと言われました。

金子 会費のことですが、うちの方は会費は三十円です。ときどき映画をかけたリポロを集めたりしてお金はたくさんあります。使い道を知らないで年末にお金が残ると、小学校に寄付したり講堂に使ったり、婦人会の仕事とは異なるところに使ってしまいます。

梅北 私の方は全然金をとっておりません。簡易保険と有線放送がありますから、電気料を集めて、七十五人の会員で千円くらいの収入がありますからそれを充てています。

#### 補助金について

大谷 どうなんでしょう、二つの意見が出たのです。金を貰った方がいい、貰わないで自分たちでやった方がいい、これは今度の社会教育法の改正法を巡っての重大なことの一つなのです。

小出 内容を充実するためにいい講師を請って料理講習



の回数をおよぼすにしても、講師の御礼をするにも月一人十円はいりませんから、それでも不足でいるような物品を売ってみたり、ポロを回収したりして充当しています。それで国家から頂いた方が内容が充実して事業がやりやすいと思えます。

斎藤 その内容が充実するとかしないとかいうような問題でなく、まず第一に自分が婦人会員になるのだという気持ちの表われとして会費を取るべきだと思います。

大谷 これはやはり農協婦人部でも問題になっているわけですね。農協婦人部にはお金があるということが問題なのです。農協婦人部は農協からお金を貰うべきか、会費制で自分たちでやるべきかについては、私は会費制でいくことを主張しています。そうでないから世間では農協婦人部が農協事業推進の仕方の下請をやらせられるという見方をしているのですが、それと同じことが地域婦人会の場合でもあるのではないかと。

金子 私は補助を貰っている婦人会にも入っているし、自分たちの会費だけで賄っている会にも入っています。自分の会費だけで賄っている会ですと自由にものが言えるし、上下の関係がなく横の繋がりになります。講師をお願いするにしても誰からも制限を受けずに勝手にお願いすることが出来ます。そのとき講師料がないときにはその場

議員などのむだずかいが大変多いという話も出ました。

もう一つは、税金をもう少し多くして、部落に役場の仕事をそういう形で押しつけられるよりも、税金でそれをやって貰った方が部落の中にボスを醸成する原因を排除するという意味で、むしろその方にくべきではないか、こういうお話も出たのです。これは私は大事な点を衝いていると思う。つまり、政治の問題が非常に大事だということけれども、お金の問題として考えてみれば、結局自分たちがボスを排除するために税金をもっと出すのがいいのかどうかという問題になってくる、つまり自由を金で買わなければならないという問題になってくるわけですね。

弘中 農村の人は、三十円儲けるのは大変な労力ですから、お金には悪く言えばけちですね。だから税金出してまで……そうしようとは思わないでしょう。

大谷 皆さんこちらへ来て団地の生活を御覧になったと思うのですけれども、あの団地に住んでいる人たちが結婚する場合に、農村ほどはお金を使っていない。農村では底抜けに、自分の能力以上のお金を使っているわけですね。交際費は私どもも調べてみると大変に多く、日本の他の職業の家庭に比べても農村が一番交際費が多い。私は専門だからはっきり言いますが、貧乏を除けば私はそういうった雑費を出せないということはありませんと思う。

でカンパします。ですからとても自由で入っていて気持ちがいいけれども、婦人会の方ですと婦人学級が講師をお願いするときには、役場の社会教育課がお願いした講師が来ますから、型にはまって毎年同じようになってしまう。

佐々木 私たちは会費だけで役場の補助がありません。それなのに、役場からいろいろな雑用を押しつけられるので、どうせ押しつけられるなら……。(笑)

大谷 それでおとのお話した部落の問題に立ち帰ると、部落でボスができるのは仕事が多くて、それを処理していかなければいけない。そのためには大変時間がかかるので、貧乏人はなれない。だから一部の人がそれが固定してしまふ、こういうことでしたね。特に岡部さんはそういう御意見でしたね。そこでその仕事とは一体なにかということを検討してみると、行政の末端としての町村がやるべき仕事を部落に押しつけているということになります。それはねのけるのに一体どうしたらいいかという問題になった。弘中さんの御発言では村の経済が非常に貧弱だから、村でやることのできないで、部落にただでやらせるようになる。こういうことでしたね。そうだとすれば、それでいいかどうかという問題になってくるのではないかと、村にほんとうにお金がないかどうか、財政的に窮乏で全くそれだけの余裕がないかということを問題にした。村会

梅北 私たちのところは子供のいないところも、小学校はPTA会費を集めるのですが、月に二十円の会費をなかなか出さない方がいるのです。ところが、おとし小学校で婦人会の郡の合同会議を致しましたが、そのときだけPTA会費が納まりました。だから体面などを考えれば出しますね。

大谷 幸生さんと小出さんが金を貰った方がいいという御説明なのですが……。

幸生 会費で賄えれば理想的ですけども、今の段階でしたら遠慮しないでくれるものは貰って足しにしたいと思うのです。

斎藤 それについて私は農協婦人部に入っていますけれども、会費をとることを立前にしております。私たちは農協から補助を頂いておりますけれども、それによって単に下部組織として出発したのではなく、婦人の地位を高めるために補助金を下さるならありがたいとばかり申ししております。だからなんの圧迫もございません。協力は求められますけれども……。

小出 それを頂くことによって上から強制されるとか、圧迫を受けるようなお金でしたらいららないのです。現在月十円の会費で事業がやりやすいことがありますが、頂こうと思いましたが、今年の四月から国民健康保険の

集金を婦人会の手でやろうということになり、年間三万円ほどの収入になりますので、それでやれるのではないかと考えております。やろうというお金だったら頂いて一応有意義に使ったらと思います。けれども、自分らで働いて自分らの会費制でいく方が気楽で自由です。それと、いいと思います。

大谷 私はいくつかの事がありますが、事業やるのにお金が必要で、おっしゃるけれども、その事業で会員がほんとうに伸び伸びと育っているかどうか、つまり婦人会としては事業をやった実績を上げた形になるかしれませんが、それが、会員の一人一人を自由な個性を持った人間として、自分を主張できる人間として伸ばしていく方向にしているかどうか。

小出 まだまだそこまでするつもりは私たちが町のしきたりとして、敬老会などに支出する金の方が大きいのです。会員自体の個性をのばすようには努力しておりますが、まだ充分というわけにはいきません。

大谷 婦人会が敬老会のお金を出さなければならぬというのはいくらも……。

小出 それ自体間違っているのですけれども、私引き継いだときからそうなっているのです。そういうことは上からお金を貰ってやるのが当り前です。私のところでは六

だと思ふ。出してまで育てる必要はないのですか。もっとたくさん出すくらいならやめた方がいい、そんなのは金がかかるだけだから、やめた方がいいというのが一般的なのですか。

金子 婦人会に出すお金がそんなにいるとはどういうのでしょうか。そのお金の使い道はどういうところに使っているのでしょうか。

小出 料理の講習会とか講演とか、たび重ねて何回もやります。講師の費用など相当いるのです。敬老会がガンになっていて、経費は全額もらい、私も余興だけ受け持つのなら喜んでしますけれども、そこで二、三年前から強硬に言っているのですけれども……。

松浦 「老人の日」だったら国の行事ですね。レクレーションを見せるのは婦人会でするのはいいけれども、レクレーションの費用も全部出して貰うのは当り前ではないですか。

小出 全部はなかなか出ません。

大谷 読書会とかいろいろなサークル、これは皆さんが自主的におやりになっているらしいのです。これは大体異論がないと思います。ところが婦人会とかPTAとか、農協婦人部にしても、やはり自分たちの自由な組織というよりも枠がはまってきてしまった。そこでこれがなにか

町村全部やっています。金手 それは町でやるべきものだとはいきり断ればいいではありませんか。

大谷 大体婦人の組織というものはなにをやるべきか、なんのために必要かということをお私に考えて貰いたいというのをさっきから言っているわけですね。敬老会のお金を出すための事業とかなんとかは私は本筋ではないと思う。

小出 それは婦人の地位向上が目的ですけれども、昔からの町村のしきたりになっていくもので……。

梅北 私の方は去年していたから、おとししていたからといって、前の釣り合いを出さなくても、私たちは毎年新しい計画を立てますから、敬老会をたたくないという会員が多ければやめ、敬老会をしたいという方が多ければしております。

小出 毎年やっていることを今年だけやめるといことは、会員自体には親がいますから、はっきりやめればさつが起り、あの会に出るのやめるといことになるので、私個人の考えはありますが続けております。敬老会の費用としておとしから少し補助金を頂きましたけれども、とても金額ではないのです。

大谷 自分たちの組織に金が出せないということなのか。どうなのですか。そこがところが一番大事なところ

わけのわからないものになりつつあるのではないかと、つまり村の行政組織とか、農協組織の中に入り込まれて使われているのではないかと、そう思うのですけれども、どうですか。

斎藤 私は婦人会よりも農協婦人部の方が、私たち農協の一人一人の要求に答えているような気がします。みんなが喜んでいような気がします。それで特に募集をしなくても七十人程度の会員が一年のうちに三百人になったのだと思います。

松浦 私も考え方においては農協婦人部の方が自主性があると思います。今度から会費を取るようになっていますが、お友ができたからお金を出そうということにしております。しかし会費を出すお金がないことはないので、考え方が問題です。たとえば貧乏な部落でもお葬式になりますとお位牌につける戒名は、きまりがありまして、このうち八千円、このうちは一万円、下のところで三千円くらいになっています。ほんとうに貧乏なうちでは会費を払うのも困りますが、こんなお金が出るのなら会費はそんなにいせんということはおかしいと思います。

大谷 今の状態ではあまり取れないからおっしゃるけれども、むしろ出すようにすることが自主性を育てることではないか、政府からできるだけたくさん金を貰おうとい

うのでは、いつまで経っても自主性は育たない。逆行することにはなりません。

幸生 その通りです。私もできるだけそのように仕向けております。会費を上げなくても必要なときにはその都度出しますが、幹部の出張旅費とか敬老会には出しません。自分達の学習にだけ使うようになりつつあります。

岡部 会費の使い道ですけれども、私も旅行の補助に使うことが多いので、毎年一回旅行会をバスを買い切つてする場合に、自分たちの納めた旅行会費がたつた三十円なので、その補助を五十円婦人会から出すのです。そういう財政のやり方、これは結局会長さんの評判をよくするだけのもではないかと思うのです。旅行に行かれる方は大体きまつた方で、子供がないとか経済的に恵まれているとかいう人で、経済的に恵まれている人たちが納めた会費を経済的に恵まれている人が貰つて平気で旅行に行くことに對して、私は旅行は自分のお金で行つたらいいのと思ひます。

斎藤 私たちの方では地区が九つで、さらに地区を統合している支部が二つありまして、その上に田子町があります。地区の方では会費は全然貰いませんけれども、保険の手数料が毎月入つてかなりお金があるので、それをなにに使うかということになりましたら、寄付のように、パツと

私のうちに誰か来ますと、あの方は見たことがない人ですけれども、どなたですかというのです。私は正直なものですから誰々だということ、なににに來ましたか、というふうに立ち入り過ぎて困るのです。

松浦 一部の例外もありますけれども、全体として競争心も強いし、隣りが寝ている間にこれくらい仕事したというので愉快になる。表の戸を開けると隣りの人が起きるから、裏の方から出て仕事をするといいあさまい考え方が農村では見られるのではないかと思います。表面ではとても仲良く、映画に行くときは一緒に行ったりしているのに……。(笑)

大谷 部落に頼らなければならぬという気持は皆さんあんまりないのです。

斎藤 頼っていますね。たとえば、田植なども隣近所が一緒にならないと遠くに頼みに行くひまがありません。利害關係から親類以上に仲良くしているということもあります。

大谷 去年は協同活動についての主題でしたが、協同活動というか、協同組織というのに頼り切つて、自分自身が消えてしまつていくことが問題になった。そこから今年「集団の中における個人の自由と責任」という主題が出て來たわけです。ところが、おとといからお聞きしている

目立つようなことに使いたい気持があるのです。

大谷 それは会員全体の協議でできるのですか。

斎藤 一人か二人の意見なのです。

#### 部落集団と個人

大谷 婦人会は、結局あまり大きな仕事はしていないと考えていいわけですね。そこでもう一度部落に帰りまして、部落では助け合いというような点から部落の組織が大変役に立った、これがなければ困るというようなことがよく言われるのですけれども、皆さんどう考えるのですか。この部会では部落というものはプラスになるよりも悲しくて自由がないということが多かったように私は受け取ったのですが、どうでしょうか。この問題をもう一度ひっくり返して下さい。

斎藤 この前には部落対個人という問題が出たように思ひましたが、地域は仲良くしながらしつともあるし、境界線の問題で利害關係があるもので、なんとなくしくりしていない。風で向うの蔵が崩れ落ちたりする大変だ大変だと言っているけれども、心の中ではひねくれた言い方ですけれども、自分の蔵の壁が落ちなくて安心したという気持がある。

もう一つは、あまり立ち入り過ぎるのですよ。たとえば

と、今年はまだ集団というか協同というか、そういうものにもたれかかるよりも、むしろそういうものには大してはたれかかっていないというお話の方が強かったわけですね。つまり去年は集団の中に個人が埋没してしまつて、なんでもかんでも協同活動、協同活動というふうに言つてしまつたわけです。今年の場合にはそういった協同というものがプラスになつてゐる点はあまり出て來なかつたような気がします。

佐々木 その協同団体が自主的な団体であれば個人の自由もあるわけですが、今の婦人会のように上から作られた団体であれば個人の自由がなくなる。

大谷 だからむしろ個人を強調する面が出てくる。そう考えていいわけですね。つまり自分たちが作つた団体であれば、有意義で自分たちにプラスになるからたれかかってよろしい。ところが、婦人会とか部落は自分たちが作つたものでなくて、自分たちの意思よりもほかの事情で、部落の場合には運命的な集団として作られている。婦人会の場合には上からの流れとして作られている。だからそこにはあまり自主性がない。したがつてその中に自分を埋没してしまふほどに頼っていない。むしろ個人を束縛する。個人の自由を束縛する面が強い。こういうことなのですか。斎藤 自分がほんとうに必要なと思つて作つたのではない

いからということになるのではないでしょう。

松浦 去年共同炊事をやった経験から、今後の部落の活動というのはもつとお互が接近できるのではないかと、私は部落に対して非常に希望を持っています。その隣組のグループの中に自分が悩みを持っていけるように思います。共同炊事はみんなが一緒にしなければいけないと、自分でやってみてわかったらしいのです。今年は初めから自分一人がしないで、私は私で田植をする、みんなは一軒づつ当番をするということで、改良普及員に来て貰って指導して貰いたいと思っています。

大坪 私のところでは、今まで井戸というものがなかったのです。それは地下水が深いためでしたが、田圃に農薬を撒くようになってからどうしても井戸が必要になって来たのです。それで部落の人全部で井戸を掘ろうということになって、急速に一、二年の間に井戸を掘るようになったのです。それともう一つは去年からみんなで田植のあとに集団で旅行しようということになって、そのときは若い人も年寄りも男も全部行くようになったのです。とても楽しかったのです。ですから部落活動ということとはとてもいいことだと思っています。

#### 集団における個人の責任

とになりますね。だからこの点を皆さんが意見を出して頂きたい。

斎藤 その点は、家庭でも地域でも同じことですから、みんなでも話し合うような空気ができて、反対の方があっても少数だからといって押しつぶすのではなくて、その方の意見も時間をかけて討論するだけの親切を持ち、よく話し合った上でさまざまな規約を作る。作ったことはみんなが実行していくというのが一番いいのではないのでしょうか。

大谷 パーッと勝手にふるまうことと、自由とは違うはずでしょう。それはどこが違うのですか。

梅北 自由というのは身分相応に、自分の責任を引き受けるということではないでしょうか。

斎藤 さっき言いましたように、自分がどんどん発言できる空気があって、規制ができればいい。それを自分の役割に応じて責任を果たしたいのではないかと。

小村 ほんとうの自由は第三者には迷惑をかけないで、自分の責任のとれる範囲内で自分の力いっぱいやっていくことと思うのですか。

半生 勝手にふるまう近隣の生活を乱すとか、共同の生活を乱すとき、それを自由だというふうに考えていったら間違いで、それは勝手だと思いませんか。

佐々木 家族内でも個人の自由とは言いながら、一人一人が勝手な行動をとっていると、たとえば食事にしても、いつも時間がまちまちになると、家族内の秩序が乱れてくると思えますので、それを社会の中においた場合にやっぱり社会の秩序が乱れてくるので、最少限度の秩序を守ることは個人の責任ではないかと思っています。

大谷 大変むずかしい問題になって来ましたね。

小田 結局個人個人が家庭において得た自由と責任が集団を育てる要素だと思います。家庭についての責任は、家庭という場をよく認識して、日常の生活の中で計画を持った生活をしたと思います。それを私は今後の婦人会活動の中に織り込んで、なるべく一人づつにそうした気持ちになって頂き、これからの会を規制していききたいと思っていますけれども……。

大谷 個人が勝手にやることは許されない。それが責任の問題だというお話だったのですけれども、このところ非常にデリケートというか、むずかしい問題をはらんでいると思う。つまりおとといの語では部落は、非常に制約されて息詰まるようだというお話が出たのですけれども、その中で秩序を乱さないようにやるのが責任だ、つまりその中で自分の主張をある程度は曲げてその秩序を守っていくということがいいのでしょうか。結構難しい問題ですね。

大谷 皆さんの御家庭のことは一通り聞いたのですが、お困りになっていらっしゃる方は非常に少ない、その場合にお姑さんが頑固でお舅さんと旦那さんが向うについておって、どうしても自分が人間としての自由な生活をするのができない。その場合に、自分がそれを主張すれば、家庭の融和が乱れたとしたら、これは一体どういふことですか。

半生 それでしたら自分が上手に操縦して行って、力尽きたときには離婚したらいと思えます。昨日の埼玉班移動会議の部落学習の際の映画もそうでしたが、子供が泣けばお乳をやればいいとひいばあちゃんが言う、今は乳の時間ではないからと若いお嫁さんが頑張る。そういうときはうまく一応はお嫁さんの言うように協調して、その間に自分を育てる道はいくらでもあったと思うのです。

金子 誰かを犠牲にして自由ということはあるのでしょうか。お嫁さんを犠牲にしてうちの中を円満にしていこうということは、私にはいいことではないと思うのです。

大谷 そこが議論の分かれ目です。つまり長いものには巻かれるという話がしきりに出ましたね。長いものに巻かれるなら、農村の今の秩序は維持できない。だから長いものに巻かれるよりしょうがないから、ボスと認めているというお話があった。ところがボスとしてみるのと長

いものに巻かれないような連中が出てくることは迷惑しごく問題なのです。みずから犠牲にすることによって圧迫を加えてくるのです。それでもとにかく協調の精神でやるべきかどうかということですね。

斎藤 自分の力で家庭のなかで権利とか、自由を得ようと思っても、とてもできない状態なのです。

小出 地方会議のときに、どうしてもおじいさんとお嫁さんが意見が合わんとその娘さんがおっしゃるのです。親子なのにどうしても理解してくれない。婦人会の会合に出ても怒る。そういう場合にはどうしたらいいかという質問に対して、おじいさんとのけものにしなくて、若い者の話し合いに入れて話し合ったら、おじいさんもわかってくれるのではないかという意見も出ました。最後には娘さんの母親がその家庭の中の防波堤にならなければいかなんという意見も出ましたけれども、その時のリーダーの先生は、なんぼ言ってもわからなければ、死ぬのを待つより解決できんという結論を出しましたが……。

斎藤 そういうことも暫えると思うのです。お嫁さんがなんの発言もできないし、権利も与えられていない。支配者が被支配者かという縦の関係ばかり考えるくせがありますので、社会教育、成人教育が必要ではないかと思えます。一人だけで解決しようと思うと、片一方が死ぬか、自

一番最後の問題としてまた出て来たわけですね。もうこれ以上どうにもならないといった場合、その問題を一体どう解決したらいいかということ、これは最もせじ詰められた形の問題だと思うのです。

半生 集団の中の個人は、自分の自由を、最少限に犠牲を少くして、集団を育てていこうと努力するところにあると思うのです。そのためには協同活動が一番必要だと思ふ。私は自分でいかに犠牲を少くしようと思っても、一人の力では小さいから、協同活動によって最少限に犠牲を少くして集団を育てるべく努力し、家庭をも育てる努力をすることです。今の教育を受けた私たちの五年生の子供は、学級自治会でホーム・ルームの時間などいいことを言っているのですよ。この子らが三十になったらほんとうにいい社会が生まれると思うのです。

佐々木 犠牲になる本人は、円満に持っていこうと思つて犠牲になるのですけれども、そういう時には周囲の人が自由を作つてあげるのが責任ではないかと思うのです。

金子 お互いに自分を高めていくことが、自分の自由を守り、人の自由を守ることになるのではないのでしょうか。

#### 集団における話し合い

松浦 集団の中で個人の自由と、集団のそれがびったり

分が子供をおいて出ていかなければならないのではないのか、それを解決する道は教育よりほかはないと思います。婦人会などの組織を通してよりも、部落の小さい単位に自分たちの話し合いを持ち、そこに外向いていって徐々にしろい話の中で考えなおしていくようにしなければだめではないか。いつも同じ所に集まるだけでなく、代りばんこに集まって、年寄りも姉もみんなが見られる幻燈とか、十六ミリなどを持っていつて、真向からあなたが悪いといつたら聞かないのですから、内面から崩していっていいのではないかと思うのです。

大谷 おじいさんが死ななければ問題が解決しない、そういうことは一番不幸なことなのです。そういうことにならないで、問題を解決するには一体どうしたらいいかという問題ですね。これが最後に残された問題なので、つまり集団の中で苦しんでいる人たちが、その苦しみを切り抜けていくのには一体どうしたらいいかという問題ですね。今度の婦人会でいよいよ最後のところに来たのですが。

弘中 問題のある方は婦人会に出られないのです。ここに今の婦人会の問題があるのです。

金子 そういう方はなんの会合にも家庭の事情で出ないのです。

大谷 つまり、最初に私が問題にした家庭内での問題が

いくということはありませんかと思ふのです。その集団の考えに決まっていることに対して個人が犠牲にならないように、たとえば多数決で決定される場合に、反対側を犠牲にしないためには、ほんとうに敬虔な気持ちで愛情をもって話し合うようにするのが一番だと思ふのです。今まで話し合いをしようとするのが感情が先になって喧嘩になるのです。その喧嘩にならないように、みんなが努力して話し合いの場をうまく持つて、最少限度に反対の意思がとどめられることが一番大事だと思います。その場合にどうしても私はこれが正しいと思つているときは、集団から離れるのもやむを得ないし、静かにその意思を持ったままで集団に属しているか、二つに一つだと思ふのです。

斎藤 目的集団の場合には、自分の意思が圧迫された場合などは、離れることはできるのです。家庭の場合は圧迫されて、話し合えと言われても話し合いができるならいいのですけれども、命令のままに動いているのですから、全然自由がないのです。それを自由に持つていく話し合いは全然できない。その問題をどうしたらいいか、そればかり考えているのです。

松浦 それは一人がしよんとすると無理がいくと思ふのです。たとえば私たち家計簿の運動をするときに、お嫁さんが家計簿をつけようと思つてもなかなかつけられない。

お姑さんが握っていますから。しかし集団の中でだんだんお嫁さんが家計づけるようになったということで、お姑さんがわかってくれた。時間がある程度必要なのです。急ぐと誰でも失敗すると思います。

半生 私は松井さんのおっしゃったように、共同の責任において一人の犠牲をできるだけ少くするように努力したいと思います。家庭でお嫁さんが一人辛い立場だったら、若妻をつくるなりして、みんなの力でできるだけ犠牲になる人を守ってやる方法を考えたいと思います。

岡部 家庭内でもそうですが、個人の立場を自覚すること、おばあさんでしたらおばあさんとしてのあり方に目覚めるし、若妻は若妻としての立場に目覚めるということが家庭を民主化していくのではないかと思います。また御主人もそれに対してある程度の側面的援助が必要ですし、そういうふうにみんなが持つていって、おばあさんがおばあさんらしくみんなから愛されて、その価値を認められるような、そんなことを話し合っていくようにしたいのではないかなと思うのですけれども……。

大谷 高めるということはどういうことでしょうか、しきりに高めるという言葉が出てくるのですが……。

金子 自分を高めるということは、ラジオを聞いたり、新聞を読んだり、または人の話を聞いたりして、自分が夫

とも親とも子供とも話し相手になれる人になって、自分の意見を上手に話す人になるということ。そうでないと、わからないからといってその人が押えられて犠牲になって、円満らしく見られるような家庭になるのですから、自分が誰とも話し合える人になる、それが私は自分を高めることになると思うのです。

斎藤 岡部さんの金子さんのようによくわかるのですが、理論的にはわかっていても私たちの立場として新聞を見る時間がないのです。自分の作業衣の繕いさえ三年くらいできず、純農家はそんなところが多いので、まして女が新聞よむのはなまじきだと叱られ、なかなかラジオを聞くひまもないのです。あるとき私たちの町から「自分は話し合いにも出られない。全然財布も握っていないので、子供に小遣いもやれない。だんだん自分が子供にも夫にも見捨てられていく存在だとわかっていながら、どうすることもできない」ということを書いた作文が提出されましたが、その通りだと思ふのです。そういうのをどうして救うか、言われるとなんとか言うことを聞くというのを利用しても、と思います。もちろん自主的にやるのがほんとうですけれども……。

金子 ひまがないという、そこにも問題があると思うのです。たしかに農家の方たちは忙しくてひまがないのです

けれども、私が見ていると、野良の道で行き合ったときなどずいぶん長い間むだ話をしている。それもレクレーションかもしれない。そういう時間がなかったらまた辛いかもしれないけれども、そういうときに、むだな話をする時間を少くして、早く野良に行って、お昼の休みくらいはその日の新聞でも持つていって読むようにする、そういうことはできないのでしょうか。

斎藤 自主的な家庭でしたら、それができると思います。が、新聞見ることとともいやるのですね、年寄りたちが……。

金子 お風呂焚きながらでもなにか読むようにしたらどうですか。小さい子供育てるときはお乳くれる時にも、子供おぶっている時も、なんでも手当り次第に見ているようにしたのですけれども、そういうことはできませんか。

弘中 お姑さんにきらう人がいるから……。

## おわりに

大谷 それでは最後のとりまとめの言葉を述べるところまで来たわけです。誰方がおっしゃったように、集団と個人というものの、これは調和していかなければならないことは誰でも考えているのですけれども、実はこれは根本的に矛盾する関係であると思う。完全に両方が調和して矛盾が

なくなるというのは理想でなければあり得ない。矛盾があるのが当然だ。その矛盾を一体どういうふうにしていくかが問題だと思ふ。その矛盾を解決していくのには妥協では解決できない。その矛盾を解決していくために努力をするというか、闘うというか、そういうことが必要だ。その矛盾を一つ一つ、一人一人の人間がいろいろなものに制約されるのがより少くなるように解決していくことが、自由への道だと私は考える。自由とは自分を束縛しているいろいろなものからみずからを解放することだと思ふ。人間は元来いろいろなものに制約されて来たと思ふ。人間の社会がここまで発達してきた歴史は、せじ詰めてみると自由を獲得するための闘いであつた。その成果が今の社会に表われていると思ふ。人間に対する制約を考えてみると、幾つかの種類があると思ふ。まず第一は自然による制約。それから第二は社会による制約。第三には経済の関係での制約。第四には自分の心の中にある制約があると思ふ。これは大変わかりにくいと思いますが、具体的にお話を致します。

第一の自然による制約というのは人間の社会が非常に発達した時代、大昔には人間は自然に支配されながら生きて来たわけです。だから自然を人間が利用するのではなくて、むしろ自然のまにまにと申しますか、自然に支配され

ながら、これに適応することによって生きて来たと言えらると思ふのです。それが科学とか技術の発達によって、だんだん自然的な条件にうち勝つて、自然そのものを人間が利用することによって、いわゆる近代文明というものを礎き上げてくることができたと思ふのです。そういう点で自然との闘いによって人間は自然からだんだんに自由になって来たのだということが言えると思ふ。

第二の社会による制約は、御承知の通り古い時代の段階では奴隷制度の社会であつて、そこでは奴隷は貴族によって飼われている、いわば人間の皮を着た家畜と等しい状態であつたわけですね。それが封建時代になりましてから、とにかく奴隷ではなくなつて農奴と言われるわけですが、領主の土地を耕さして貰つて、その代りお年貢を出すという關係によつて、その代り牛馬ではなくて一応人間として扱われるようになったわけですね。それが日本で申しますと、明治維新になつてから四民平等ということになつて、昔の領主とお百姓という身分關係は一応なくなつたわけですね。ところが、農村について言いますと、やはり土地を持つてゐる地主と小作人との間には封建時代ほどではありませんけれども、やはり高い小作料を払わなければならぬといふので、小作人はかなりみじめな生活をしてゐた。それが農地解放を通じてとにかく農村でも土地持ちと、土地持

はみずから闘ひ取つて初めて実現できるものだと思ふ。従つて自由になるために一番大切なことは今言つたような自由といふものがなにかといふことをはっきり自覚し、それを実現するためにみずから闘ひ抜くという精神を持つ、自由を自分が獲得しなければならぬ。自分の自由は自分で獲得しなければならぬといふ激しい意欲を持つことが一番大切なことである。自由はおごるものには与えられないと思ふのです。

そこで自由を獲得するために、正しい意欲を持つとは一体どういふことかと考えますと、私は自分をほんとうに大事にしなければならぬと自覚しなければその意欲は出て来ない。個人主義的なことを言うようですけれども、私は自分が一番大事だといふことを自覚することだと思ふ。犠牲を払わなければ、何事も達成できないとよく言われるけれども、しかし自分が大切にするといふことが先に立つ、自分を大切にするといふ自覚があつて初めて犠牲といふもののほんとうの意味が出てくると思ふ。そうでなかつた場合にはこれが長いものに巻かれる、あるいはやむを得ないといふことで投げられてしまふと思ふ。だから犠牲は一体なにかといふことも、ここで考え詰めていく必要がある。犠牲は自由を闘ひ取るために一時自分が譲歩しなければならぬといふこと以外のもではないと思ふ。またそれ以外

ちでないという社会的な差別はなくなつて来たといふふうに、人間が人間を身分的に支配する社會關係がだんだん薄らいで来たと言えらると思ふのです。

それから第三の経済的な關係ですがこれは今でもやはり食える人は非常にゆつたり食つてゐる。食えない人は非常にみにけなな生活をしてゐる。統制は現在はないので戦争中に比べれば自由になつて来ておりますけれども、しかしまだまだ不自由な点がたくさんあると言へると思ふのです。

それから第四の點は、自分の心の中に自分を縛りつけるものがあると思ふのです。このことはたとへばいろいろな迷信が残つておる。あるいは自分が長いものに巻かれなければならないといふ考え方を持つてゐること、そのことが実は自分が自由な精神を持つてゐないことを意味すると思ふのです。いづれにしても自由は自分自身を縛りつけてゐるいろいろな關係を、一つ一つ切り離していくということが自由になるということだと私は考えております。

そのように考えていくと、皆さんがおとといからお話になつたことがらはまだまだ解き放してゐなければならぬといふ制約と申しますか、皆さんを縛りつけてゐるものがあると思ふのです。これを一体どういふふうにしてその縛りつけてゐるものを解き放していくかといふことが問題だと思ふのです。これは誰かが与えてくれるものではない。自由

のものであつてはいけないと思ふ。それと同時に、人間と人間との關係ですから、自由を得るために人々をして自分を納得せしめる、自分の主張を納得せしめるというところが闘争場合の一番大きな武器だといふことを自覚する必要があると思ふ。なんといつても、社会は人間と人間との關係なのですから、人々をして納得せしめることができないか。たならば、自分を生かすことはできない。それでは人々を納得させるのには一体どうしたらよろしいかといふと、口先だけでは納得させることができない。自分の全生活を通じて、自分の生き方を通じて人々に自分を理解させ、そして自分の考へてゐることが正しいといふことを納得させる以外に手はないのではないか。せんと詰めていくとここで個人の責任といふ問題が出てくる。つまり納得させることを、納得せしめるに足るだけのことをやるのが大切なのであつて、ここに責任がうまれてくると思ふのです。だから勝手にふるまふことではなくて、人々を納得せしめるに足る行動といふか、生き方をするのが、それぞれの人びとにとつては大きな責任だといふことを自覚することが私は大切なのではないかと思ふ。これは家庭の中においても言えるし、また部落の中においても言えるし、あるいは目的集團の中においても言えるのではなからうか、こう考えます。その場合には皆さんがしばしばおっしゃつたよう

に長いものに巻かれるような形を、一時的にはとる場合もある、とらなければならん場合もあるかもしれない。しかしこれはいわゆる長いものに巻かれるのではなくて、はね返すために、正しいところに持っていくために、一時的に譲歩したのに過ぎないのだから、長いものに巻かれるということ、長いものに巻かれつつ放しではいけない。はね返すというか、正しい理解を得るために一時的に譲歩するというふうに私は考えるべきだと思います。

ところが、農村の場合には、今私が申しましたような意識がなかなか出て来ない。特に家庭にばかり引っ込んでいるとなかなかそういった意識が出て来ない。一番強固な、強固なと申しますか、厳しい集団と個人との矛盾が出ており、先ほどお話のように「おじいさんが死んでしまわなければ……」というような、呪いに似たような気持を持たされるように、最も身近な集団としての、家庭の中においては容易に解決ができない。先ほど「荷車の歌」のお話がありました、あの場合に主人公、おせきさんの生活態度には私も泣かされたのですけれども、あれ以外にやりようがなかったかどうかということです。結局においてはあれはハッピー・エンドになっておきますけれども、あすこはいくまでののたうち回るようなことをやる以外に手はなかったかどうかということを、私はあれを見ながらしみじみ

考えさせられた。あの場合にあの時代にも、今皆さん方がやっていらっしゃるようないろいろな目的集団ができておったならば、もっと違っていたのではないかとしみじみ考えさせられました。婦人会がそれを果しているかどうかわかりません。私は皆さんのお話を伺っていると、現在の段階において、多くの婦人会はそういったことを教えるだけの力を持ち合わせていない。これはそのまま持っていていかなければならないと思います。しかし皆さんの方の目的集団としての小さなグループの中には、それがほんの小さい芽ではあっても、芽生えはじめているのではないかと、それが大きくのびてくれば、今日頑強に残っている家庭というものの束縛をもときほぐす外からの力となつてはたらくことになるのではないかと思います。そういう意味で、農村でも自分たちの自主性に基いた目的集団ができることが望ましいと思う。その目的集団の中で今言ったようにみずからを生かす努力を皆さんがしていく、そういったことを一緒にやる人は最初は少いかもしれない。しかし自分自身を生かそうとする人が一人でもいることは、長い年月の間には必ず影響力を与えてくるに違いない。その影響力を与えられる場が協同活動の集団だということふうに私は理解するので、なにか大変まとまりのないようなことでしたが、一応こういうところで私のまとめとします。

#### 第四部会

出席者

|     |     |     |     |     |      |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 北海道 | 岩手  | 宮城  | 福島  | 茨城  | 群馬   | 千葉  | 石川  | 長野  | 愛知  | 岐阜  | 山梨  | 高知  | 佐賀  | 長崎  | リーダ |
| 中田  | 渡辺  | 佐藤  | 仁平  | 鈴木  | 宮崎   | 芳野  | 土室  | 征矢  | 森下  | 青木  | 水本  | 山本  | 竹下  | 元岡  | 評論家 |
| ひさ  | 龍子  | とき子 | イノ子 | 茂子  | 崎生   | よし子 | 外子  | 美子  | 千代子 | 美代子 | 伸子  | ヨネ子 | 初音  | ぬい  | 渡辺  |
| (農) | (農) | (主) | (主) | (農) | (学校) | (農) | (主) | (主) | (主) | (主) | (農) | (農) | (主) | (主) | 智多雄 |



渡辺 きょうから四月間、皆さんと一緒に勉強させてい  
たきます。きょう開会式でも一部会のリーダーの伊藤さ  
んから話が出たように、固くなってではせっかく皆さんが  
持ってきたいろいろな問題も完全に出しきらないこと  
になるので、どうかふだんグループの人たちと話し合いを  
しているつもりで話をしていたきたい。そこでどんな工合  
いに問題を広げたり、深めたり、進んでいったらいいか、  
いろいろ考えてみたのですが、いくら自分が集団の中で個  
人としての正しい自由を持ち、責任のあることをやってい  
こうとしても、自分の属している集団が、その中の個人の  
自主性を全然認めないような集団であつたら、大ぜいを相  
手の一人相撲になつて、自分が倒れてしまわなければなら  
ない。それでは何もならない。自分も集団もそのまま腐っ  
てしまう。

そこで、いま私たちの属している集団について、ざっく  
ばらんに話していたら、集団はそういう姿であつていい  
のか、これが集団のあるべき姿なのかどうかということ  
を一つ考えてみようと思う。その批判の上に立つて、それ  
では集団はどういう姿であるのが本当に正しいのか、正し  
い集団であるならばそれを構成している個人は、そこでど  
ういう振舞をしていけば自分を育て、同時に集団をも一そ  
う立派なものに作り上げていくことができるか、そういう

う点だけでも数えて、そして現実どんな姿になつてい  
るかということをもとめてみたいと思います。自分の属して  
いる集団の現実の姿を洗いざらいさらけ出していただきた  
い。どなたからでも結構です。

#### 集団の問題点

中田 私は北海道の剣淵村です。婦人会に属していま  
せんが、部落集団の中に溶けこんで、その人たちと一緒に生  
活しています。私たちが農家の主婦として何か発言しよう  
と思つても、地域の婦人会の役員とか、または指導的立場  
にある方に引きずられてしまつて発言できないし、また  
発言してもおさえられてしまつています。それで私は家族と話  
をして、つぎに隣り近所の実行組合の中で話合つていま  
す。それにはお父さんや青年達の協力が大切ですから一緒  
に会合をもつて、農家の生活と経営、または個人、家族の  
幸福、そうしたことについて話し合いをしています。父さん  
たちは経営と取り組んで、母さんたちは生活をみつめて、  
いろいろ話合つたわけです。例えば婦人側の発言で、実行  
組合の人たち全部が集団となつて温泉に行きたいという希  
望が入れられたり、父さんたちが申し出て、お小遣いを  
使う場合に、どこでいくら使つたとか、お酒を幾ら飲んだ  
とかいわないで、小遣いとして大きく書いてくれという要

求にだんだんと考えが進んでいくのではないかと思う。  
一見難しそうに見えるこのテーマについても、解決とまで  
はいかなくても、そこへ近づく道がひとりで見つかるの  
ではないか、そういうふうに考えているので、そのように  
だんだんと皆さんの間で話を盛りあげていっていただきた  
いと思つております。

そこできょうは、まずはじめに皆さんの属している集  
団、その現実の姿を本当にありのまま話合つていただき  
たい。皆さんの属している集団——会——について、皆さ  
んの自己紹介の中にもありましたが、とくにそのような組  
織された集団の会員になつていない方でも、実は集団に属  
しているわけです。いちばん集団の自然な形は家族集団で  
す。それから自分の周り、隣り近所がある。こういう近隣  
の集団、部落集団、そういうものに、わたしたちはいやお  
うなしに属しているわけです。そのほかに自分らの考えで  
作り上げた、つまり人間の意志で組織した集団もある。そ  
ういう組織集団、これには小さいグループから大きい婦人  
会のようなもの、あるいは農協の婦人部のような集団もあ  
る。それらはみんなどのように違つていくかということ  
も、これから一つ皆さんが自分の属している集団の現実の  
姿を話し合つていただくなかで、ひとりずつに出てくるだろ  
うと思います。私も氣をつけて皆さんの話を聞きながら進

求が主婦側で認められたりし、本当に円満に楽しい会合を  
もつことができた。

山本 指導的な立場の人たちが、農家の主婦の意見を引  
きずるので発言ができないとおっしゃいましたけれども、  
私たちの部落では戦前の有力者が根を張つていて、その人  
たちに部落会が牛耳られていて、他の弱い人がよく発言で  
きません。それで気が弱くて発言しない人たちの意見をど  
のように会員の決議事項の中に反映して取り上げるかとい  
うことが問題になると思います。

渡辺 指導者が引きずつていく、会員の入々を押えつて  
してしまうという問題が出ました。部落集団の中の有力者と  
いうものが、集団を牛耳つて、弱い人の意見がなかなか出  
てこない、それをどうして取り上げたらいいかということ  
になつたわけですが、ほかにこの問題について——。

仁平 発言できないということとは、私たちも地域婦人会  
の中でよく感じております。いろいろ理由もありましょ  
うけれども、地域婦人会というものの組織が、地域的に網羅  
的であつて、その中に大きな力があるために、個人の発  
言ができないというような場合が沢山あります。発言をし  
ても、あとでボスの人方や、有力な方たちに叱られたり押  
えられ、村八分にされることは農村では恐ろしいことなの  
です。加立することは絶対に恐ろしい、そのために発言で

きないということが大部分ではないかと思ひます。

もう一つ、大ぜいの人と行動を共にすれば安全だ、ということも含まれているとは思ひますが、組織のあり方が一番問題ではないかということに結果的にはなるように感じます。

佐藤 仁平さんから網羅的という話があったが、私が婦人会の役員になったとき、ある部落に行つて昨年度婦人会の会費は幾ら納めましたかと聞きましたら、みんな自分の納めた会費の額をはっきり知らないのです。これにはびっくりしてしまいました。それで自分の所属している婦人会をどのように考えているか、いろいろな問題についてアンケートを出してみました。それによると本場に根本的な問題が解つてない。自分の納めた会費がどのように使われるかというところさえも解らないし、役員の方でもそれを会員に知らそうとしなかった。役員の婦人会に成り下っていることをつくづく思います。

芳野 網羅的婦人会の情けない姿が大分出たのですが、網羅的婦人会がマイナスの方向にいくとそういうことになるが、運営如何によつては地域を民主化するのに一番力があるのではないかと思う。私どもの松ヶ崎部落は、ご多分にれず封建的な部落ですが、婦人会だけは民主的に運営されていて、部落を前に進める一つの大きな力になってい

る。ただ放つておいたのでは部落の婦人たちが自由を勝ち取るチャンスが全然ないので、婦人会にはいることによってそのチャンスができていくという状態です。

征矢 大体婦人は昔からの教育によつて発言はへたなように仕向けられてきたわけです。そこで私たちは第一に人まへに出て発言できるように勉強をしようということで、手近かなところでグループを作り、ラジオの集いをおやりします。一つづつの番組を開いてメモして、そのつぎの会合のときにお互いに発表し合ひのです。そうやって自分の考えをまとめて発表する勉強をしています。個人個人の勉強なくしては、しっかりした発言もできないわけですから、リーダーの方のお世話も必要ですが、自分たちの勉強によつて発言を可能にしておくことが必要だと思ひます。

渡辺 いま六人ばかりの方の発言が出たのですが、一方では役員もしくは有力者が、会員たちの発言を抑えているから、どこまでも役員たちの考えでみんなが引きずられていってしまう。ところが長野の征矢さんの場合は、いづれにしても会員が発言しないからいけないので、自由に発言するようにすれば役員たちに引きずられるようなこともないだろうというので、みんなで発言の勉強をしているという話が出たんですが、どっちなんでしょうか。会のなかで、

個人の自主性が確立されていないのか、それとも会員個人個人が発言をする力をもっていないのか、そのために自主性を出そうとしても出せないのか。その結果役員たちに引きずられることになっているのか。いったいそのどっちでしょう。

土室 私のところは町で、現在八百人ほどの会員がいるのですが、大体会のリーダー格が牛耳っています。会員の方はただ引きずられていて、私は小さなグループをもち立てて、横のつながりを持たせて伸びていくのがいいのではないかと思っています。

佐藤 私が住んでいるところでは、三十二年度までの婦人会長は職前から二十年余りも続けた方なのです。いわゆる役員のための婦人会であつて、一般会員には行事もわからないし、婦人会がどんなことをやっているかもわからない。ただ会費を納めて一年間のうちでわかることは敬老会だけという状態であつたらしいのです。それで進歩的な人の手によつて新しい会長を立て、役員も全部新しくして、こんど発足しました。会長はなかなか民主的な人で、組織の作り方に問題があるというので、会の下に部を設けて、各部に部長、副部長、世話役を作り、その方たちにほとんど責任をまかせて、自分は会全体のまとめ役であるという立場でやっている。各部の会合は少人数であるから発表も

よくできる。何か行事をするというときは部会の世話役、部長、副部長を全部集めていろいろなことをはかつてやっている。だからいまはスムーズにいっています。いままでの組織の作り方にも問題があると思ひます。

鈴木 私もそう思ひます。

渡辺 慶子 私のほうでも去年から組織の機構と運営とを少し変えて、部門別の活動を始めた。生活部、保健部、文化部、レクリエーション部の四部門に分け、会員のだれもがどれかの部会にはいるというふうに変えました。会費も前は年間二十円でしたが、これではどうしても足りないのので、今度思い切つて百二十円に値上げを総会で決議し、仕事はなるべくある一部の人間だけの動きにならないように、負担を感じないようにみんなで働こうということにしました。それが非常に良かった反面、二十円の会費だったから痛くなかつたけれども、百二十円になると考えてしまふ、思ふように出られないのに百二十円も取られるのではつまらぬからやめるといふ人も出てきた。そういう点で別な心配をしております。

鈴木 私のところは私たちの部落だけが婦人会から全員脱落してしまつた経験をもっています。原因はいろいろあります。とにかく上からの命令で動く婦人会には同調できなかつたのです。私たちは、もう少し地に足のついた生

活をしたい、そのためには上から動かされるのではなく、自分たちの生活の中から考え出して仕事をしていたほうが良いという気持ちをもったので、部落の人がみんな相談をして婦人会から抜けてしまいました。それで新しい生活改善のグループを作ってみましたけれども、大きな会から脱落して小さな会を作ることそれ自体がいいものかどうか悩んでいるわけです。

竹下 地域婦人会が組織的な組織であるところに問題があるということが出ましたが、会の仕事そのものに問題があるのではないかと思います。私たちの考えによると、地域婦人会の動きそのものが地域の婦人の生活と直結したものでなければならぬのではないかと思います。主婦たちが発言しないということも、結局発言しないでも役員の人やってくれるだろう、私たちの生活に直接あまり関係はないという気持ちの方々もたくさんあるのではないかと思います。現実には私たちが日常の生活の中で困りぬいていること、例えば農繁期に子供たちを遊ばせるとか、各戸給食をどうしてやたらいいか、自分たちの家事労働の手間をどうして省いていくかということなどをもう少し婦人会で取り上げていったら、地域婦人会がもっとよりよく伸びていくのではないかと思います。

実は、私は部落の支部長をしておりますが、昨年度の農

繁期に近所の子供たちを二十人ばかり集めて、臨時にお宮の事務所で保育所を作ったところ、若いお母さんたちは本当に喜んでくれました。お父さんはもちろん、おばあさんもおじいさんも安心して働けることができた喜んでくれました。今年も農繁期保育所をやってほしい、同時に共同炊事もやってほしいかというところまでみんなの気持ちが盛り上ってきたわけです。

渡辺 組織の問題が出てきたのですけれども、それとからんで地域婦人会は本当に村の婦人生活に直結したことをやっていない、だから生活に直結したことをやるため、仲間て別のグループを作るといふ話が出たわけです。竹下さんは託児所という生活に結びついた事業をやって大へん喜ばれたというお話で、今度は婦人会の仕事という面に入ってきたのですが、ここで考えさせられることは、一体婦人会は何をするところでしょうか、何を目的にしているのでしょうか、これは組織の問題にもつながるし、事業活動の問題にもつながることです。一体町や村であれば、そこに必ず婦人会があり、婦人がそこに組織されているのです。これは何を目的にした集団なのか、みんなで考え合っ下さい。

#### 集団の目的

元岡 私のところは小さな村で四、五年前に市に合併したのですが、それと同時に中学校が二つ集まって統合されたわけです。ところが私たちの部落では外部との交流が少ないうちに、想像もつかないような封建的なところで、結婚にしてもたいてい親戚同士が行ったり来たりというだけのことなのです。昔のことを少しでも改めようということとはとても難しいところです。そこで今度統合にからみ、自分たちが作り上げた学校をよそに持っていけるのはとても寂しいという気持ちもあって、どうしても部落全体で絶対反対をしよう、何の理由も付けずにがむしやりに反対してしまつたのです。民主団体である限り、会員の中にはいろいろな意見があるのだから、それをがむしやりに一本に持っていくことはいけな思つて、私が婦人会の会長をしていましたから中立の立場をとろうと語合つたのです。

そうしたところが、初めは若い方たちはよくわかつて中立を守つたのですが、婦人会には相当年配の方がいますし、おやじさんに叱られて一軒のうちに主人のいうことを聞かないようでは、家庭は円満にならない。男が一生懸命合併に反対して心配しているのに、婦人会の女たちがのほほんとしている状態ではしょうがないということで、相当圧迫されました。それでもとにかくなんとか中立を守って

いくというので、私も役員だけは語合つて中立を守つてきたのですが、とうとう一部のボス的な男の人がじかに出てきて、やはり村を救うためには婦人会も手を握らなければ駄目だと私たちが排斥されたわけです。排斥の方法は、反対の仲間だけを集めて、そして調印をとって歩き、最後に会を開くよう要求をされ、やらなければならぬようになって会を開いた。ところが緊急動議として排斥調印の名称を出されたのです。そのときの数人は会員数の三分の二で、民主団体として多数決の趣意でいきますと、私も三分の一では調印されなくなつて、二つに分かれ、現在まで二つになっているのです。

一つの外部の問題によつて、婦人会内部がめちやくちやにされたことはどうしても情けない。三分の一の人は、とにかく本質的な婦人会のいき方を守つていこうということにいまもやっています。何か割り切れないものがあります。今後みんなと手を握って、昔のなごやかな婦人会ができるかどうか、まだ本当に未知数です。

自分が自主的に行つた婦人会を、ぐらぐらさせていくような会員の考え方に、何かまだ大きな欠陥があるのではないかと、そういうところに婦人会としての自覚が欠けているようだし、その指導が欠けているように思ふのです。

渡辺 ここに二、三天大きな問題があると思ひます。いま

課題に出した婦人会は、一体どういふ目的をもった会なのか、その中における会と個人の問題ははっきり出てくると思います。元岡さんの例は中立という態度をとったが、このことはどういふことを意味しているのでしょうか。婦人会は仲よく手を繋ぐ部落会、町内会と同じですか。竹下 婦人自身の教養を高めるための団体だと思います。

速辺 賢子 そうだと思えます。

芳野 地域の隣り近所が手を繋ぐだけだと沈滞の平和という意味にもとれます。けっしてそれはただ、妥協的に手を握るのではなくて、一軒一軒の主婦が、一人一人向上することによって地域の幸せをたかめていくというのが婦人会の目的ではないでしょうか。

中田 私たちのところは自然環境が悪いために一年間働いても借金が残る、そういう状況ですから、私たちの婦人会は生涯を高め、生活の向上をはかり、そして地域の親睦をはかるということにもっていくように話合っています。

佐藤 地域の婦人会は地域の婦人が手を取り合って教養を高めることはもちろんですが、主婦たちが生活をみつめて、地域の問題、自分の家族の問題を解決していくための話合いの場、勉強しあう場であると考えています。元岡さんの問題も無意識に反対と言った三分の二の人たちと、も

つとよく話合いをしていけばよかったのではないのでしょうか。

元岡 三分の一の人たちは現在でも村八分にされて、交際しない交際はさせてもらっておりません。

芳野 会として中立の態度をおとりになるようきめるとき、果して皆さん一人々々の意見を結集しておきめになったかどうか、そうであれば三分の二が脱落することはないと思えますが……。

元岡 それは話合いました。しかし本当に話合いをしうとしても聞いて下さる力のある人たちの集まりなら事はし易いと思うのです。ところがどっちかというと、私どものところは最後はやはり自分のおやじさんの意見に従うことがいいことだというふうにししか思っていない。だから私どもがいくら言っても耳を貸してくれようとしません。

水木 目的がどんな立派なものであっても、部落のためにならないことだったら、部落は反対するものです。最近の話ですが、皇太子のご成婚記念で桜の苗木を婦人会で植えて、並木を作ることになり学校の校庭に植えることになった。ところが、最近沢山の部落が合併したものですから、部落意識が強すぎるうえ、学校は部落から随分離れたところにある。そこに桜並木を作っても遠いところの人は見に行くことができないので、部落のためにならないか

ら、一個人当たり五円の金も出せないということになった。

部落に少しでも苗木を分けてもらえろのだったらいが、ただ五円を取られて離れた人のために並木道が作られるなら出さないという意見に負けてしまって、結局苗木を各部落に分けてしまったので、桜並木を作る意味がなくなってしまったのです。

征矢 村会議員の選挙の場合のことですが、部落から適当な人を財産や身分ということによって推薦するのです。部落から二人立つ場合うまく票を分割しないと落選する。

そこで部落のここから左はだれそれ、右はだれそれに書けというふうになっていて、その境いの家は一軒に四人いる場合には、二票はこの人、あとの二票はこの人ということがずっといままで続いておりました。ところがこのごろ婦人たちがだんだんと自覚してきて、そういうことは非民主的で、自主性がないからいけないということでは非民主的で、自主性がないからいけないと思つた人を書けばいい。表面平和であるためだったら、そのときはいい返事をして、実際書くときには自分の推す人を書けばいい、そこまで自覚して参りました。

中田 誰でもいいからうわべはそうしておいて、書くときはこつちの人ということでは本当に明るい家庭ではないように思いますが、どうでしょうか。もっと話合ひべき

だと思えますね。

鈴木 中田さんのお話のようにいけば理想的ですが、私のところも、東京から七十キロという近いところですが、まだまだお話にならないほど封建的です。それで少しづつでもいいから階段を一段ずつ登るようになっていく。いくら指導的な人が一生懸命になつて悪いでも、本人そのものが自覚しなければ駄目なものですから、部落の婦人会で少しづつでも勉強していくこと。時間をかけることが大事ではないかと思っています。

#### 集団における個人の自由

速辺 元岡さんの問題に、征矢さんの話をかぶせてみると、少し何か考えられませんか。いままで部落推薦で部落が網羅的に申合せてこの人に入れるという人を入れるように選挙をしていた。しかしそれがいけないんだということを話合つて、みんなで学習したおかげで自分が選挙をしようにする人を自分の意志で投票する。うちの旦那さんにはだまっている、というのは別の問題になりますからそれはさておいて、そういう政治学習をして本当に自分の意志で投票するようになったというお話があったんですが、その問題を元岡さんの婦人会の問題に当てはめたらどうでしょうか。

芳野 元岡さんの場合、集団の暴力というが、部落の暴力というものが、婦人会という集団の自由を征服し破壊した例であって、長野の例は部落の封建性を婦人会集団の方で打ち破って、めいめいの自由を打ち立てていったということではないでしょうか。

渡辺 征矢さんの解決の仕方を元岡さんの問題に当てはめたら、どんなふうな方向でいくべきであったかというところが出てきませんか。

征矢 やはり私たち個人々々の意識がそこまでいったわけですね。元岡さんの場合の三分の二の問題は、三分の一の人が長野の場合のように意識の強い方たちだったからその方たちと同じ立場をとる方が相当多かったのではないかと思います。

鈴木 網羅的婦人会だから、意識の低い人が会の本質をわきまえずに沢山はいつている結果ではないでしょうか。

渡辺 婦人会とは、学校問題で賛成か反対かの態度をきめなければならない性質をもった集団なのか、それともそうではないのか。そういうところに問題を絞りましょう。

水木 婦人会で態度をきめる必要はなく、個人々々が自分の意見で態度をきめたいと思います。

渡辺 それではなぜ元岡さんのような問題になったのでしょうか。

土室 婦人の自覚が足りないと思います。集団における個人個人の自由を各人が認められないわけですね。

芳野 結局、元岡さんの場合、婦人会が右か左かきめる必要はないので、その問題に対して白紙でいったほうがよかったのではないですか。

元岡 中立を守って関係なしにいくと思ったのですけれど、男の圧力によって三分の二と三分の一に分かれたわけですね。

中田 そのきめ方は男の人が署名を集めたのですか。投票にしたのですか、そのところが大事だと思えます。例えば男の人がそう望んでも、婦人会の人が正しい自分の意志を投票によってやればいいので、そこが問題だと思えます。

元岡 北海道のほうは相当民主的におやりになっていらっしゃるからちょっとピンとこないかと思えます。九州の私のところは自分でもびっくりするほど封建的なところですね。反対、賛成をとる場合に一軒一軒歩いたのです。その場合に判を捺さないと脅迫されたような格好になった人もあるのです。

青山 組織を作る以前に問題があると私は思う。自主的に会員になる人ばかりの集まりであつたら、そういう問題は結果的に起らないと思うのです。私は会の目的に賛成し

ますということで作られた会であれば、まともい思い、し、まとも役になる人も仕事やり易いと思う。しかし、自主的に入ってこない人をいつまでも放っておくことには、問題があるかと思う。農村とか僻地の場合だったら、自主的に入ってこない人をいつまでも放っておいたら、いつまでたってもその人たちは向上しないと思います。自主的にはいった人たちだけで独走してもいけないと思います。が、このへんをどういうふうにもっていくか先生にお聞きしたい。

渡辺 私がいま元岡さんの問題を取り上げたことは、ある集団の目的、それをはっきり考えさせることだと思つたからです。私は元岡さんの場合、婦人会は婦人会自体として学校を移すことに賛成か反対かという態度を表わす必要は少しもないと思うのです。部落が賛成、反対という問題でもめているのだつたら、会員が部落人として自分の意志できめればいいことで、会員の態度として表明することはそれ自体婦人会の目的とは違うのではないか。やはり婦人会はその地域に住んでいる婦人たちの地域の生活をふんまえて、自分らの立場を積み、婦人として身につけなければならぬ教養をみんなと学習の中で高めていく、そういうつながりを持った集団というふうに私は考えている。この学校移転の問題は政治の問題にからむことです。だから婦

人会は会として中立の立場を取るのが当然だろうと思ふ。しかし会員はその地域に住んでいる婦人なのであつて、問題は地域の政治問題なのだからこれを全然顧みない、そっぽを向いてしまふようなことであつてはいけません。むしろ積極的に婦人会の学習課題としてこの問題を取り上げて、みんながこれは一体どういうことからこんなふうになったのかといつて、その移転問題を学習する。そして部落人個人としての態度を作り上げていく、そういうやり方をするのが、私はこういう問題に当面した婦人会の仕事ではないかと思つています。ですから婦人会として賛成か反対かの態度を表明しろといわれたらお断りすればいい。賛成か反対かについては、会員個人の自由意志にあることで、婦人会の関知する問題じゃありません。ただ、婦人会としては、会員各人が子供を持つていくことだし、自分の住んでいる地域の将来にもかかることだから、大事な学習課題として勉強しようというふうに持ち出すのはいい。そうして賛成の人も反対の人の意見を聞けば、そこには沢山の理由があることでしょうから、そういう理由を指導者が調べ上げて、話合ひの材料にして自分たちの勉強にしていけることが、問題の正しい解決を見つけていくやり方ではないか。選挙にしても同じだと思ひます。

投票は全く個人の自由意志ですから、会がだれに投票す

るという態度をきめることはどんなでもないことで、今度の選挙はどういう意義があるか、いま村の政治はどうなっているか、そういう場合にどういう人を選び出せば村の政治がよくなり、自分らの生活が高められていくかということ、候補者と当面する村の問題をにらみ合せて、そこで選挙と政治という問題を学習すること、このことは婦人会として大きな仕事だと思っています。そういう学習で得たものをみんなが自分の身につけて、そこで自分の意志を自由に働かせて、自分の思うままの人を選び投票する、そういうあり方ですね。ここに婦人会が政治団体じゃない、また部落や町の行政の下請けみたいなことをする団体でもない、それとはちがった婦人会本来の目的が、はっきりここで考えられることだと思えます。

そうすると、そういう目的を考えれば、では組織はどうしなければならぬかということも出てくると思います。いま婦人会のことばかりに話が集中しましたが、私たちの今度のテーマになっている集団は、まだまだ沢山あるわけですから、そこで婦人会に集まってくる婦人たちの日常生活の拠点である家族集団について、もういちど同じような問題をとりだしてみたいと思います。婦人会はボスに牛耳られるとか、思うように発言ができないとか、そんな問題でなかなか個人の自主性が婦人会という集団の中では生

かされていぬということが出ましたけれども、それではそれ以前の自分の生活の一番の小さな単位、拠点であるところの家族集団、ここではそういう家族の中のボスに牛耳られていないか、家族の中で自分らの自主性を確立しようとして発言をするにもかかわらず許されていない、そういう問題を考えてみましょう。沢山集団がありますし、それぞれにちがった目的があることですから、そういう目的をはっきりさせていけば、集団とその他の個人の関係ははっきりしてきます。組織の問題はちょっとお預けにしましょう。それで家族集団にはいっていきましよう。

森下 ここに集まっていらいっしやる方は婦人会などでも上のほうの役をやっていらいっしやる方で、正しく批判できる方、あるいはPTAに行っても相当発言のできる方ばかりのお集まりのようですが、私は自分が本場にひらの会員の代表として申上げるので、少しレベルを下げて考えていただきたいと思います。

私たち農家の婦人はとても忙しいのです。きのうここへくる前に苗田の仕事をしてきたのです。きょうは日曜で私がいけないけれどみんな泥田の中で仕事をしています。ではないかと思うと、気がもめているのです。そのくらい農家は忙しいのです。ところが考えてみると、婦人会に出て幹部

になつてゐる人たちは、たいてい手のあいた人が多い。もう一つ大事なことは財布を握っている人が上に立っている。ひらの会員の家庭では財布が買えていない。ですから本場に家庭の中で自主的に動くかと思つても、財布がない場合には本場に動けないのです。婦人会でいくらか料理講習をやつて下さつても、お嫁さんに財布がない。家に帰つてお料理講習を実際にやってみることができない。また、婦人会は私たちの日常生活の経済に直接関係ないでしよう。婦人会にはいったら別に経済的に楽になるといふことがないし、直接経済に關係するのは働くことでしょう。だからどうしても婦人会がぼけてしまふ。忙しかつたらやめて家の仕事をする、主人の気嫌が悪いからやめておかなければならないということになる。私が本場に言いたいことは、家族のだれにもしわが寄つていない家でなければならぬということです。そうすると、社会に出ていつても本場に自分の考え方がはつきり言えるようになると思ひます。ここに集まっていらいっしやる方は、私もそうですが、お財布を買つていらいっしやるのです。お財布の買ひ方を皆さんにうかがいたいです。

森下 森下さんのおっしゃることは、人間關係の問題とかいうきれいな事じゃない、もっと根本的な経済的な立場にたつて考へて、経済的に自主的な立場をとらされないでい

て、何で自由や責任があるか。ましてや家庭を離れて、他の集団に出て、そこで自主的な活動ができるかというように問題を出されているわけです。一つ皆さんで話合つて下さい。

鈴木 いまのお話はとてもよくわかります。結局お金を持つていない人は出てこれないのです。そういうことは偉い方たちにはわかつてもらえないことです。私たちは小さな生活改善グループを作りましたけれども、それだつてやはりいくらかの会費がかかるわけです。二十円なら二十円のお金をどうするか、今度見ても飼つて子供をふやしてそのお金をそれに当てましかつていっているのです。農家の生活は本場にそんなにきれいな事ではなく、現実はお金に直結しているのです。

中田 農家の主婦は自分の家がいくらかお金があり、借金がいくらあるか。自分の家の年給収入がいくらかはわからないのでしょうか。

森下 わかっていますよ。しかし財布はもらえない。鈴木 家計簿をつけましようといつたら、生活改善グループでもつけられないといふのです。ですからいりょうなものは、例えば豆腐でも父ちゃんが家にいれば一二丁買つ、そのたびにお金を出してくれるが、豆腐一丁でもお母ちゃんはお金を持てない。そういう状態ですから



家計簿をつけるなどということはまだまだ出来ない状態です。つげようと努力しなければいけないでしょうし、つければ進歩もあるとは思いますが……。

#### 自主性の確立のために

芳野 財布をもっていないことは現実でしょうが、それでは大事な一票もとても使えないし、子供の教育もできない、つまり求代までも同じやみの中で生活することになるでしょう。現実には財布はもっていないけれども、ただ手をこまねているだけでなく、お互いに手をとり合ってもてやるような方向に持っていかなければならない。現に私どもの周りでも持つ方のほうが普通になっています。農家は人並み意識が強いから、十軒のうちで九軒までもてば他の家ももてせます。年よりのほうより若い人がもてば合理的にうまくなっているのが多いのです。年寄りが握っているというのを救っていないで、やはり組織の力によって主婦たちが力を合わせていかなければいけないと思います。

中田 家計簿をつけるということは、隣り近所、近いところが集まって相談してやればやれると思いますね。

芳野 婦人会で直接するということは無理だと思いますよ。元氣をつけ合ってみんながベチャコにならないように励みあうことは婦人会でできると思いますが、婦人会で

渡辺 森下さんから出た問題によってつぎつぎに話が運ばれたんですが、いまその筋道を追っていくと、家族集団というもののあり方を具体的に教えてくれたんです。森下さんは財布の自主性がないということ、それはなぜないか。ただ手をこまねて何もしないで財布を任せてくれといったも、任かされないから、任かせてもらうためにはやはり実力を作らなければいけないということ、実力とは何か。農家だったら耕作の技術も経営のやり方も男と同じように、あるいは男以上に婦人も身につけなければいけないということになってくる。

そうしたら今度は鈴木さんは、そういうことを身につける方法として、グループで生活改良普及員から教わることでできるというふうな話がたどられていったんですが、これで集団のあり方をだいたいわかってもらったと思う。まず森下さんから問題が出た、そうした家族集団はどんなふうにするべきでしょうか。

森下 主人は私に対していつもこういうことを言うのです。日本の女の人は自分を犠牲にすることが最上の道徳と考えている。しかもそれで自己満足しているというわけですね。私はこの言葉を本当に辛辣に受け取って悲しかったのです。けれども私の過去の生活がこれなのです。主人の出征という、自分が本当に悲しい思いにたつたとき、私は日

こういうふうにきまったのだから財布を下さいというふうに関心することはできません。

もっと実力を持つことです。農業でもなんでも旦那さま任せにしておいて、財布を握ろうといったのも無理です。肥料の配合方法でも、雑穀の作付けのプランでも、きちんと実力と力を示し行動に現わせば、直ぐにはくれないでしょうけれど、二年、三年と経つうちに、これだけはお前がやってごらんといって財布をくれますよ。せっかちにやらないで、じわじわときをかけなければいけないと思います。

森下 それには知識が問題ですが、どういう方法で農家の知識を得ていこうと思いますか。

中田 この村にだって、生活改良普及員も農業改良普及員もいるから直接聞いてもいいし、一人で聞くのはもったいないと思ったら、隣り近所手を握って一か所に集まって聞いてもいい。

鈴木 そういうことからいったらうちのほうは大分遅れていると思いますけれど、希望が持てると思います。私が作りましたグループは二十四人ですが、改良普及員の方が月に一回いらっしゃる。男の方ですが肥料の成分の話などをきいて、自分の生活に直結したことから勉強しています。

本の女として一番いいことだと思って喜んで主人を出征させたのです。主人が留守の間、私は自分でどうしてこんなになったのだろうということを考える前に、これを我慢すれば私としては一番偉いことだと思っていたのです。私は朝早くから起きてお手をやって、みんなを起して子供を学校にやって夜遅くまで一人で仕事をしている。それが自分の仕事だと思っていたのです。ところが、子供達がお母ちゃんが一人でそんなにしんどい込まんでもいい、みんなでやろうというので仕事を分担しました。晩のご飯のとき、下の子供もみんな手伝ってくれるのです。片づく。そして夜になるとみんなが自分の部屋にはいって、それぞれ自分の勝手な生活をするのです。私もこの時間がとても長くあるので部屋で本を読んだり、ものを書いたりするのです。主人も子供四人も立場は違いますが、この家ではみんな平等でみんなが大事な人であり、一人でも抜けたらこの家はやっていかなれないというふうに考えました。

渡辺 森下さん自身のお家の姿を聞かしてもらったが皆さんはどうです。

山本 森下さんの場合は、旦那さんのご理解があるようにいいと思いますが、現在の農家の男の人は、大抵ワーマンです。農家の主婦は男と同じように田植にもいなくてはいけません、その上掃除と洗濯、炊事いろいろな用事

があるのです。そういうことは私の家だけではなく、近所を見まわしてみても、農家の男は理解してくれていない気がするのです。私自身農家の仕事は好きなのですが、百姓にお嫁にいくのはいやだと思っております。

渡辺 いま山本さんは、農家の男の人は森下さんの旦那さんのように理解がないといっているのですが、今度の会議に皆さんが出てこられるとき、さあ行っておいでと激励をお受けになりましたか。

佐藤 家族のものから本当に励まされて出てきました。

渡辺 そうするとふだん婦人会その他の会合に出て行くときでもさあ行っておいでといわれておりますか。

佐藤 言われております。

土室 言われておりません。

渡辺 今度のように町れの場所に出られるときには別な意味で励まされていると思うんですが……。

中田 ふだんでもそうです。

渡辺慶子 私も。

青山 私は家を出る場合に全部自分がやるべきことはやっておくように努力しているのです。どこに行く場合でも主人は絶対に干渉しない。それで自分が出ようと思えばそれまでにおかなければならぬことは全部しておいて出るので、自分の責任を果しておかぬと自由は得られる。

ときさあ行っておくというふうには、機嫌よく出します。子供の場合もちろん出いようによつてあげられるのです。だから私が出るときでも気持よく出してくれる。そういう努力も必要だと思っております。自分が外に出た場合にこういういいことがあった、こういう話を聞いたということとを家に帰ってみんなに話すのです。家族全部に知らせる、そうするとお母さんが外に出るとこういういいことがあるのだということがわかる。

子供の場合、もちろん佐藤さんのおっしゃるように教育していかねばいけないと思いますが、まずみずからの立場を考えなければいけないと思います。

渡辺慶子 皆さん方は理解のあるお家の方たちばかりですが、自分個人では行きたいと思っても、周りの人が行かなければ、あの人も行かないのに自分だけ出席できないということを出歩いてしまうような人もまだまだあるので。

森下 佐藤さんのおっしゃったこと、征矢さんのおっしゃったこと、それぞれものの考え方に年代の相違があると思います。私は年とっているから昔のものをいま急に断ち切れることは無理で、自分が自由になって外に出ますということになったら、相当潤滑油を使わないと無理です。主人は私が出ることは平気です。ただ夜遅いことはいけないの

ない、だからそういうふうにながけています。

渡辺 皆さんはここに出ていらつしやるような方々です。から、皆さんのお家ではいいが、周りの村や部落の婦人の方の暮しをみていて、そういうふうな婦人会の会合に励まされて出席している方が多いかどうか。あるいはそんなところに行つちやいぬ、また行くのか、というようにいやな思いをさせられて出ていっているのではないのか。

富崎 地区のPTAの会合があつて、その時間が六時というとき、私は時間にちゃんと参りました。ところが皆さんは一時間くらい遅れていらつしやるが、父ちゃんがまだ帰つてこないから遅れたという方が沢山あります。私は他のお家では旦那さんが帰つてきてご飯を食べさせないと出てこれないというのが不思議なのです。

佐藤 家族のものに牽制されると出られなくなるといふ家庭の人は多いです。私はそんな家庭をみていますから、いまの子供たちがせめて大人になったならば、そういうことにならないような人間になってもらいたいと思います。そして自主性のある子供を育てたいという気持で子供たちをみつめています。

征矢 佐藤さんは子供に望みをかけるとおっしゃいましたが、まず私は自分が気持よく出られるような雰囲気や家の中に作るように努力したいと思っています。主人が出かける

で、十時になったら必ずもどつてこいという。ですから私はいつも会議の途中で十時ですから帰りますという、美代子さんの十時が始まったといわれるのです。私たちの年代ではやはりある程度言葉使いや態度に、冗談や機転を潤滑油に使つて、相手を意固地にさせないことが必要です。子供たちの代にはそういうものがなくてもお互いがみんないいような時代がくるような気がするし、またそうでなければうそだと思つたのです。

渡辺 若い世代の代表である山本さん、あなたのところの周囲には青年団があるでしょう。あなたははいってなくてもお友達がいっているでしょう。そういう人たちがお家から青年団の会合に出て行くのに、いやな顔をされないうで出て行きますか。

山本 青年団には皆自由に行かせているようです。

森下 自由に行かせているところの問題があると思うのです。本当に自主性があつて行っているのではない。お嫁に行ったらもう出られないから、農家の娘さんはお嫁に行くまでは、大いに自由を享受せよというわけですね。どんなに会合が遠くなくても親は文句は言わない。お嫁さんがご飯を炊いて出してくれる、またいつまでも寝かしてくれる、うそみたいなことです。

渡辺 男の子はどうですか。



森下 働くときには働きます。ですから相当夜遅く、二時、三時までやっても仕方がないと思つてゐる。そんなに遅く寝れば朝早く起きて働く人はないから、しぜん朝は遅いですね。娘さんにはそういう自由なことが結構したらもうできないという気持ちが相当あります。

渡辺 忙しみのに青年団などやめておけといひませんか。

森下 多少そういうことがあつても、お嫁に行つたら出来なくて可哀相だから行かせるというところでしょうね。

渡辺 男の場合は……。

森下 男はそんなことないと思ひます。

渡辺 いままで婦人が外に出られるか出られないか、子供たちを出しているかどうかという話が出ましたけれども、家族は外に出て行くということになれば、部落の集會から村の集會、さらには東京の集會までずっと出てこれる。もっと外に出て行くかと思へば、東京の集會からさらに国際會議まで行かれる。出て行くかと思へば果てしがないほど出られるでしょう。では家に入り込んだらどこまで入り込めるでしょう。

森下 限界があります。

渡辺 家族集団というのは、やはりいちばん小さい集団だと思ふのです。その集団が持つてゐる働く力は、もう内

に働く余地がなくて、外に発展するよりほかはない。そういうぎりぎりの一番小さい集団だと思ふのです。ところがいままでのお話から農家の家庭をみると、どうしても家族を家の中に引張り込んでおきたがる傾向が強い。家族を外へ出すことを阻んでいることを私は問題にしたいわけですから、そういうところから家族集団のあり方はどうあるべきか考えたいと思ふのです。

#### 家族集団のあり方

渡辺 皆さんの話の中から、とにかく家族集団は内側にはもうはいり込む余地はない。外側に発展していくその拠点出発点だということが、皆さんの具体的な話で出てきました。ところで個人はその家族集団の中で生きてゐるわけですが、家族集団はそれにどう動くか、婦人会という集団と會員という個人の問題を話合つたように、それを話合つて下さい。

すぐわかると思ふのです。さっきも話が出ていたように子供を育ててゐますね。その前は子供を生む。その前には夫婦の生活がある。ところでこの夫婦の結びつきについて、皆さん一つ日常の夫婦生活から、自分らの夫婦観を出して下さい。

宮崎 私の主人は鹿児島出身ですがわりあい民主的で、

家にいるといろいろなことを手伝つてくれるので、いい旦那さんといわれてゐます。商工会議所の事務をしておりまして、職業柄集會などでも遅く、夕飯を家族一緒に食べることがないのです。私も土曜日もという学生時代からの習慣で楽しくくつろいだ気分になるので、一カ月に一べんか二べん土曜日は子供と一緒に飯を食べてもらいたいというのですが、仕事でできないというのです。愛情はあると思ふのですが、最後はどうなにか愛していても仕事のためには別れてもいいという考え方が根本的にはあると思ひます。それでいままでずいぶん悩んできたことがあります。

渡辺 どうですかこの問題にくつつけて、皆さん自身が旦那さんと話し合つて話を下さい。宮崎さん、土曜日には是非早く帰つて下さいという言葉には、できるならふだんも早く帰つて欲しいと願つてゐるわけですか。

宮崎 土曜日だけでもいいから帰つて下さいというのです。なかなか帰れないのです。

渡辺 外側に発展して行くこととする旦那さんを内側に引っ張るんですか。

宮崎 子供が可哀相で、たまには家の料理を食べてもらいたいと思ふのです。

水木 うちの主人もよその方がみていらつしやらないと

きはよく手伝つてくれるのです。お掃除でもご飯の残片づけなどよくしてくれるのですが、よその方がいらつしやるともう全然止めてしまつて、専ら面白を発揮していろいろ命令するのです。よその方と二線に行動しないと仕事が出来ないという理由で何時も口論になるのです。

征矢 どうしても日本人は妻が仕事だということになっている場合が多いようです。宴會によつていろいろな商談でもスムーズにいくという習慣が過ぎ過ぎていて、なかなか改めることが出来ないのではないかと思ひます。ですからそれを一応妻としては認めてゐるのですから、土曜日くらい帰つていらつしやるように主人の努力と協力も必要ではないかと思ひます。日本の男の人は見栄坊で亭主の真振をみせたがり、また愛情の表現が下手なこともあるし面子でできない場合もあるが、やはりそういうことも一つ習慣になるのですから、その習慣をやぶる努力も愛情の表現と一緒にやつてほしい。それがお母さんとしての妻に何層倍かはげみになるし、力になるから子供のある家庭では、そうした夫婦の協力が発揮されなければいけないのではないでしようか。

中田 私の家は父さんが帰つてこないでも、五時になったら子供にご飯を食べさせて、自分も一緒に食べてゐますが、父さんは田舎の役場の勤めで、このごろのように資金

の貸出しなどがあると毎月大へん遅いのです。それで私ははつきりしないからご飯は五時に食べることにしてしまっているが、父さんも一緒にご飯を食べることを望んでいると思います。

征矢 北海道の方の場合、両方がそれで満足していればいいのではないのでしょうか。家庭がこうあらねばいけないという基準はないと思うのです。

中田 うちでは先に食べてしまったほうがいいという。まだ夕飯を待っているのではないかと思って、早く帰らなければならぬと思うと自由がないという。

渡辺 みんな暮らし方が違ってから、方法が異なっているわけだ、いろいろちがうものをそれと同じようにしろといっても無理です。皆さんの話を聞いていると、たしかに皆さんの場合は、夫婦はちゃんと人格的な理解と、異性としての愛情というところでははつきりと結びついていてるわけですね。それだけは誰も否定しませんが。

元岡 いまの富婦さんの場合は、商工会議所にお勤めですと、案外人さまの休みのときのほうが忙しいのではないかと、案外人さまの休みのとき、よそのご家庭よりも犠牲が多いように思います。田舎ではやはりどうしてもお酒を必要とするのです。私の主人も公務員ですが、朝光線にいるから三百六十五日のうち二、三日くらいしか家でご飯を食

間ではなくて、自分らの子供について考えてみて下さい。夫の場合には不満も出ますが、子供にも出ますか。

征矢 うちは大学と高校の子供二人ですが、やはり母親はうるさがられる場合が多い。その点なるべく気をつけて子供の気持を考えるようにしているのです。夜、勉強しているとき、一人の子は私が起きているとはしゃいでいる。

ところが一人の子は私が起きていようと何か重荷を感じたので、そこを使いわけるようにしてなるべく夜も紅茶を入れてやるとか、本当に愛情的に包んでやるような気持を絶えず持っています。なるべくその子の立場を理解しようとして努力しているのです。父親との間がうまくいかない場合もどっちのほうもうまく傷つかないように調停するといふと変ですが、緩衝地帯になるような、そういう気持を持っていると案外うまくいくのではないかと思います。

渡辺 いままで出た家族の問題を整理してみました。高森下さんから平等にやっていると出ました。高い低いという上・下の関係ではなくて横につながった平等の立場にある関係がはつきり出しましたね。

つきには富婦さんからそとに発展していくという話がありましたね。それからまた話もどって、そういう家族集団の個人個人の動きを台をみた上で、今度はそれがどんなふうに結びついていっているかということ夫婦の問題で話した

べない。やはり皆さんが休みのときのほうがお客様が多い。そういうことも家族としては職業柄理解してやらなければならぬ場合が多くて、主人は過重になるような思いをさせたくないと考え、このごろはあきらめました。

鈴木 私も賛成です。男の人は外で働いて、経済と生活が結びついているのですから、少しは理解してやらなければならぬ。私もふだんほとんど夕飯と一緒に食べたことはない。そういうものだと思って割切っているのです。が、そういう考え方はいけないのでしょうか。

渡辺 理解しているのでしょうか。

鈴木 諦めではないが中間くらいです。(笑)

渡辺 私もここ半月ばかり家に帰るのが大で二時か三時、寝るのが四時、夜寝取り遅えたような生活をしているのです。家内も私が帰るまで起きています。非常に迷惑をかけていると思うが、ここ一年ばかりの私の仕事の性質をちゃんと理解してくれて、帰ると一本つけてくれます。これは完全に理解してくれている証拠だと思います。あしたもこれぐらいと頑張っていて下さいと激励してくれているのだとも思います。それが出てくるのは何かといえば、夫婦の結びつきが本当に人格的な理解と男性と女性との愛情が土台になっているからでしょう。かなり肉体的に苦しい目目であつても励ましてくれる。そういうことを夫婦の

んですが、少しは他人とは違った結びつきをもっていることがわかりました。人格的な理解と夫婦の愛情、親子の愛情そういうもので結びついていて、そこがはつきりしてききました。

そのつぎにもう一つ、遅く帰ってきて十分に理解して励ましてやっている、あるいは子供が夜おそくまで勉強しているのを、いっしょに起きていて紅茶をわかつてねぎらつてやるという話が出たのですが、そういうことで個人の活動を発展させてやることが出てきましたね。これをまとめてみると、どういふことになりましょうか。

芳野 家族というものは平等ですが、立場は同じではない。各々の立場立場でも重さは平等にしていくながいと思ひます。

渡辺 立場立場はどんなふうにありますか。

芳野 結局、遅く帰る旦那さんを理解してあげるのは旦那様の仕事にとって必要なことだし、その疲れた旦那様をかばってあげるのが、奥様のしなければならぬ仕事ですね。そういうしなければならぬ責任をめいめいが果たしていきたい。

渡辺 そうすると、お母さんだけが家にいて慰さめる立場専門みたいですね。

鈴木 話はそりですが、家庭の仕事は分けあって……。

渡辺 婦人の居場所の家の中ばかりではないはずだ。

婦人会の会合にも出るでしょう。PTAにも出る、グループの活動もやる。とにかく家族の一人一人はみんな何かの形で外へ出ている。そしてその外ではその人を中心にしてほかの大勢が結びつき、そこで家族集団とは別な世界をつくって活動している。一人一人そういう外での別な世界、地域の世界、もっと広くいえば階級の世界といってもいいでしょう。もっと広げていくと大きい社会といってもいいでしょう。それを広げて国際的な社会を考えてもいいでしょう。そういうところで、自分の家族の一人一人の個人がそういう仕事の世界と結びつき、みんなが社会という大きな集団を作っている。そこで活動するのには例えいいように、そこで個人が個性を十分に発揮して仕事ができるように、そういう力とはたらきを、家族が理解と愛情によって結びついていることでつくりあげているわけですね。つまり家族が手をつなぎ合って一つの小さい集団を作っている、その集団はもっと広い大きな連帯の大事なつながり目になっていくわけですね。いままで皆さんから実例が出たので、それをたどっていくとこういうことになると思います。私のはなかなかなこうはいっておりませんね。できるだけ外に出ていくのを引っぱり張っていますね。そして自分らだけで

小さく固まることに何か家族の平和とか、家庭の平和を考えているようですね。先ほどから問題を引っ張ってきた結論とは違いますが、これはどこから来ているのでしょうか。そういう働き方のほかにもう一つ家族集団の中には大事な問題があります。これを忘れては困る。そしてこれはすべての前提になる問題です。一言つけ加えておきますと、それは子供や年寄りを育て守っていく、そういう生物学的な働きのあることです。これでいよいよ家族集団についての考え方が出たと思いますので、つぎは別の集団にいきましよう。

さきほど、元岡さんが山された話にぶらさがって問題を

#### 地域集団の現状

宮崎 私の隣には「春祈禱」という風習があります。これは昔の農村のなごりではないかと思う。各戸、米を一升づつ出してお餅を作って食べる。お互いにそれで親しみあうという趣旨は大へんいいことですが、やり方がど

うしても民主的ではない。今年の例を申すと、米を出し合うといっても、私のところは農家より勤め人の方が多かったのですね、みんなお金で買うわけですね。その米を持ちよって掲げたのですが、ちょうどその日、私たち夫婦は二人して東京に行かなければならぬ用事ができて欠席したので。私のほかにもう一人、共かせぎの先生も出席しなかったのです。部落で作っている納税組合の報償金が一千円と何がか返ってくる、それを「春祈禱」の費用に当てているのですが、その先生の家庭と私の家庭には全然何のお話もなく皆さんが使ってしまった、お宅には審判をしてもらったのだという。強制的に審判をさせられた形になっている。勝手に出なかったから勝手に使うというわけです。

「春祈禱」はいまではもう無意味で、もっと簡単にやりようがないかと思うのですが、それを持ち出すと白い目でみられ大変困るのです。

渡辺 黙っていればいつまでもひどい目に会わされる。

宮崎 さらに引きつづいて婦人だけで旅行貯金をする話が出たのです。もしその時に旅行に出られないとすれば、その貯金したお金も没収されてしまうということで、これでは納得できないわけです。

仁平 先日、青年と婦人との集まりを聞いて結婚簡素化の映画を見たあとで話合をしたのですが、いままで何べ

んもいわれているが、ちっとも簡素化できないので、本当に実行できるものをきめましょうということになったのです。が、いちばん問題になったのは式の時間をきめることだったのです。このつぎに町内会で青年と集まって話をしましたというところになった。ところがある模範青年が、時間きめても、どうしてもついていけないという。たまたまその青年は結婚式が間近にさし迫っている人だったので。どうしてだといいますが、いままであちらこちらの青年団や友達によばれた、もう帰ろうとするときだいいだろうと引っぱり張られて飲む、それが友情だと思っている。だから自分の結婚のときに、時間が十時になったら帰って下さいということはいまままでよばれた友だちにはいいえ。友情としても実行できないというわけですね。それが部長、副部長級の青年なのです。私もこれとは思って帰ってきました。

芳野 十何年前の話ですけれども、お祭の時、みんなお酒を飲んで、中にはお酒を飲めない人もいるのだから、お菓子を貰ってもいいと思ってお金を包んであげたところ、それが気に入らないといっておみこしを門にぶつけられてしまいました。そのときは本当にこんな土地から引越してしまおうと思ったくらい悲しかったのですが、一歩退いて考えてみました。自分がお金を包んでお菓子でも

といってやったことは自分ではむしろいいことだと思つて  
いるのだが、向うではそれを認めるだけの仲間意識ができて  
いない、自分の主張を入れてもらうにはやはり仲間意識  
を作ってからでなければならぬ、そう思つて、十年の時  
間をかけて、道普請といえ、泥だらけの足袋をはいてや  
るし、みんなとすっかり仲よしになってやつてきました。

そして初年の行事だけは、部落会で私が提案して古いやり  
方を直しました。それは昔から初年の日は、部落中が一人  
五十円持ち寄つて飲んだり食ったりする。むかしは火事場  
のとき、みんな出ていったので、その慰労の意味の名残り  
なのです。いまは十五名の消防団ができていますので、か  
ら、なにもみんなが飲んだり食ったりする必要はない、み  
んなが多少お金を出しあつて十五名の方を慰労してあげた  
らいいのではないかと。反対者は少しだけで大ぜ  
いが賛成してくれて、初年の集会だけはすっきりした形に  
なつたのです。正面切つて反対すると村八分にされたらし  
て、とんでもないことばつちりをうけますから、回りくどい  
ようですが、こちらの発言をいれてもらえるような仲間意  
識を作つてじわじわいくのがいいと思います。

山本 農村の場合、お葬式のときなど、部落みんなが、  
その家に押しかけていく。押しかけていって、本当にお  
葬式の手伝いをしている人は四、五人で、あとはただわい

ころを感じてきたのです。これは年とつて古い習慣に随性  
的にとけこんだように思われるかもしれせんけれども、  
そういうことでもなしにとでもお互いが親切なのです。隣り  
で困つたことがあれば手伝いに行く、助け合いという点で  
とてもいいことがあるのです。農村は封建的でないやだとい  
うが、迷惑がからぬ程度のお互いの近隣助け合いは必  
要だと思つています。

山本 助け合いはいいと思いますが、限度が問題だと思  
います。どの程度までお付合をやつたらいいか。

青山 冠婚葬祭の問題が出ましたけれど、私がいるところ  
は二年ばかり前に住みついて本当はまだよくわからない  
のですけれど、どうも皆さんの話を総合してみると、すこ  
く冠婚葬祭に金を使うらしい。ある人の話を聞くと、私は  
十年前に結婚したけれども、いまだに十年前の結婚のとき  
の借金を払つていて、それほど派手に結婚式とかその  
他の行事をやらなければならぬかといつても、あそこでや  
つたからうちでもやらなければならぬかというわけで、踏  
み切れないのです。婦人会でも確かにばかばかしい金の使  
い方だからぜひ改良しなければならぬといつて、会合の  
ときに問題を出されるけれど、賛成しながら本当に踏み切  
つていく人がない。こちらにくる前に会合があつたとき

わい騒いでいる。部落民の気持はわかるけれども、やはり  
その家に経済的な負担がかかるので、それはやめていた  
きたいと思うのですが、どのように解決したらいいかわか  
りません。

渡辺 困つた問題だと思ひますね。迷惑な話ですね。い  
いことはないですか。

渡辺 慶子 このあいだ、父がなくなり、それを体験した  
わけですが。私の家は主人と子供らと五人だけですので、近  
所の昔から親類つき合いの人たちがきて手伝つて下さつた  
ため滞りなく終つたのです。うちのほうは土葬なのでお墓  
を掘るといふことも富の中を掘るのですから大へんなこと  
です。そういうことを献身的にみんながやつて下さつた。昔  
からの親身なつき合いが本当に大事なものだということ  
を感じたのです。

鈴木 私のところも四十戸全部が農家ですけれども、私  
の家は古いから、家の周りがみな分家になつていて、あら  
ゆる反面で本家の負担が多い。ご祝儀でも葬式でも分家の  
ことまでしなければならぬ。ご祝儀でも葬式でも分家の  
にそれが負担で、都会生活がどんなにいいだろう、東京の  
人は隣りの人の名前さえ知らない簡単な生活ができるのが  
羨しく感じていたが、結婚して十八年にもなると、やはり  
分家とか近所とかいふ人たちとつき合いの生活のいいと

に、これは町条例でも作らないととても改良できないとお  
っしゃるのです。結婚調度品に結婚税をかけるとか、贅  
沢なものに余計税金をかけるというふうにするれば、簡素化す  
るだろうというのです。みんな困るというながらなかなか  
踏み切れないところに問題があると思う。解決点をどなた  
かに教えていただきたい。

征矢 うちの村も十年前に申合せが打ち出されたので  
す。五、六年前、教育事務所の方々がきて簡単な結婚形式  
を一つ教えていたで、実際やってみたのです。お酒の二  
合堀一本の式だけでいい。ではそういうことをやってみよ  
うということになったがすぐ破れてしまふのです。他の儀  
式についていろいろ申し合せしてもまたすぐ破られる。や  
はり申合せに問題があるのではないかと思う。村ぐるみ、  
部落ぐるみの申し合せがしつちう行われるが、個人の  
意識が育つていかなければ、その実行は永久に駄目だと思  
うのです。

藤下 いまの葬式のことにしても、結婚のことにしても  
もつと根本的に問題があるのです。農村では楽しみが少な  
いのです。いわゆる生活をエンジョイしてない。どっか  
にいわせをもちつかないときさっぱりしない。だから極  
言かもしれませんが、お葬式も一つのレクリエーションな  
のです。近所にお葬式があると、新しくきたお嫁さんはよ

そのお葬式のために、三回くらい着物を着替えてみせる。お葬式を一つの自分のレクリエーションにしている傾向がかなりあるのではないかと思います。ですからお葬式のときよりも結婚の場合、それが目出度いことにつながるから、こっちは気分まで派手になってしまつて、どこかにお嫁さんがあつて村中でわつと見に行つて大変な騒ぎになる。またそうしてもうほうも嬉しいうような気がする。一週間くらい前からあそこにお嫁さんがくるという話があると、興奮してその日は公然と早く畑仕事を引き揚げてみに行くことを許されている。それほどふだんの楽しみが少ない。そこに問題がある。

渡辺 青森県に実例があつたのです。冠婚葬祭簡素化の新生活運動をやるうといつて町村におふれを出したら、村に楽しみがないからほかにもつといふレクリエーションを見つかるまで勘弁して下さいといわれたという。

たしかにいまの冠婚葬祭の場合、そういう一面もありますね。話は部落の話から外れたので、部落の話にもどりましょう。

山本さんがいい発言をして下さつて、お手伝いをし合う助け合いにも限度があるといわれたが、この点をもう少し掘下げてみませんか。助け合いをやることはいいことですね。ところがそれを裏返すと元岡さんの場合のように、ふ

自分たちの腹を満たそうといういわげけも根性ですね。またお葬式がすんでそのあと、七日七日ごとにお手伝いを受けた人を全部呼ぶのです。そしてお振舞いを四十九日する。お膳は八種類から十種類くらいのご馳走をする。これは大へんな負担なので、婦人会にも出し最近では七日七日はしないことになり、四十九日に一晚お礼心として五皿程度のものを料理してお呼びしようといふところまでいったのです。全廃すればいいのですけれども田舎はそこまですぐに息をいふことはむづかしいのです。年寄りはこのほかになんの楽しみがあるかという。

森下 私のところの実例をいいますと、最小限度にしてもお手伝いは六十人くらいになる。むかしの隣組単位の人が全部そこに行つて炊きだしをする。名刺を受けとったりする役目をやる。それらが少なく見積つて十五人くらいあるでしょう。それから親類を数えていくと四十人くらいある。大きい家のおじいさんが死んだりすると、学校の子供が一べんに二十人くらい欠席してしまう。大いにお父さんについてお葬式に行くから、結局学校は休んでしまうわけです。どうしても六十人くらいはお葬式のお手伝いすることになつてしまふ。そこでさつきお話の出た、どこに限度をおくかということが、どうしても重要な問題だと思ふのです。

だん助け合いをしているんだから、学校の問題でもやはり助け合いで同じような行動をとらなければならぬということになるのではないか。それともう一つ、私たちの現在の生活は近隣の助け合いを必要とするほど独立した暮しができない状態にあるのかどうか。その助け合いはどういうことから出発し、どういうところで、問題がひっくり返つてつながつているかということ、それを少し考えてみましょう。どうですか、助け合いは結構だということでしたけれども……。

鈴木 義理でやつて、格好だけお手伝いする気持はいけないと思うのです。農村ではとくに義理を非常に重んじる気持がある。

竹下 お葬式の場合が出ましたが、私のほうの実情をみますと、ある家に不幸があると、五軒か十軒の人が寄つてきて、お葬式を済ますまでのあいだの万端の世話と、跡始末までしてくれる。その時ご馳走といつても特選料理ですが、その全部の賄いをする、手伝いにくる人も子供を連れて家中でくぐるわけです。男は男でいろいろ道具を作ります。女は炊き出しをする。私が嫁いではじめてお手伝いに行かされたとき、外でボカンとしていたら「竹下さん早よう食べせんかいばい、食べんば損するばい」という。そういう気持なのです。人が悲しんでいるのに、そつちのけで

渡辺 そこで話の中味を探してみると、鈴木さんがおっしゃったんですけれども、本家・分家の問題と同時に家とすることがありますね。その問題はちよつとつておきましよう。いまのところお付き合いの手伝い話を中心になつたわけですが、そして話は結婚とお葬式だけになつてしまつたが、それでは毎日の生産活動で、そのような助け合いが行われているんですか。

中田 何十万もするような農機具は共同購入しているから、作業も共同作業です。そのほか農繁期は全部共同作業です。

鈴木 うちのほうは、北海道みたいな共同作業はできない。分家と本家のつながりで田植があつた場合、手は足りないとえば、二人三人きてもらいましようといつて助け合いをする。そういう形で私の家なんか大分助けられていた。古い言い方ですが、一族お互いに助け合つてやつています。

森下 直接生産するときは誰もがみんな同じ時期なので。だから自分のところに水が廻つてきたらせつせとやるけれども、出荷のとき、トラクタがきていふという場合には、どうしても人の助けなければ自分の荷物も出ませんから、みんな一生懸命になつて部落そろつて共同作業をや

渡辺 それは農業協同組合や特別の組織の中で働いているわけですね。

森下 農業協同組合と部落とは違います。各々で農業協同組合につながっている。青年が全部手をかけてくれています。そうして集まっています。

渡辺 出荷という仕事は農協の仕事でしょう。

森下 仕事は農協です。

渡辺 農協の組織の中でそういう働きをしているわけですね。

鈴木 農協に入っておりましても、農協の仕事として出荷をしない場合に、私たちの部落なんかは出荷組合を多くの人たちが作って、出荷組合は五人か七人が集まり、そこでみんなが集まって大きな荷物にして送り出す方法をとっています。これが助け合いの状態です。

渡辺 それはみんな利害に結びついた組織になっているわけですね。ところが部落の助け合いというのは組織がないわけですね。ただ家と家との結びつきでやっている。いまききたかったのは、生産活動で木場に助け合いをしているかどうかということだったのです。お葬式と結婚式の助け合いは聞いたが、どうも生産活動の助け合いは出てこない。部落の助け合いのそもそものは、生産活動から始まったんですね。森下さんから水の話が出たが、水利を共同で使

い、山林を共同で持つて伐採も共同でやる。それが共同の収入になっている。農村の仕組みはまず共有林を持ち、あるいは共有の野原をもつことからはじまって、農耕も共同にやるようになり、農業のいろいろな仕組みも共同にしなればならなくなつて、農村の仕組みが共同体になっていった。生産活動を共同でやることからはじまって、同時にいろいろな暮しも共同でやるようになった。ところが、新しい時代になって、農協とか、実行組合とか出荷組合とかと、生産や経済については、それぞれ組織が作られて、生産関係の助け合いは新しい組織のほうへ移されてしまったので、残ったのは嫁取りとお葬式のお手伝いだけということになってしまった。こう考えると、これもだんだんなくなっていくべきものです。それがまだ残っているのは、農村にはほかにレクリエーションがないから、その間に合世をしているという面もありましようが、とにかくみんなも無意識にそれに甘んじてこのしきたりに従っているわけですね。大事な生産や経済の活動については、新しい組織のほうへ移っていったのに、その付属物のような古い行事のしきたりだけが、なぜいまでも残って、表面はとにかく、内実のところ部落の個人個人の家におしかぶさって苦しめているのか、そういうものは一体どこを通してくるか、この問題を考えてみようではありませんか。

宮崎

私のところは市役所からの通知が地区から各家に回ってくるけれども、その回覧がいつも間に合わない。PTAの通知でも子供がじかにもつてくるときは間に合いますが、回覧板でくるとどうしても遅れる。無自覚な方があって回覧板をまわさないで止めておくわけです。隣組はあっても害があるだけで何にも益がない。そういうものは廃止してしまつたほうがいいと思うのです。

渡辺 行政の下請け的な仕事をしている部落は、これも一つの問題です。しかし行政の下請けはあとに残しておきましよう。私がいま問題を出したのは、冠婚葬祭にしても、部落の強い力がのしかかっているわけですね。この問題を解きほぐしたいのですが、別な話にしましよう。

青年たちが、自分らだけで簡素な結婚をやりたいと思つた、しかし友達がそれを許さない。友達との付き合いでそういうことをしたのではすまないというので、簡素な結婚式を挙げなかったという話が出ましたが、そういうふうに自分の家では簡素に結婚をしたい、自分の家ももっと平等な人間関係にたちたい。嫁も大事にしてやりたい。ところが部落はそれを許さない。そういう場合、周りが許さない圧力を持っているわけですね。私はこういう話も聞いたことがあります。農閑期になると部落は仲よく、揃って温泉旅行に行ったりするんですが、そのとき年寄りには年寄り夫婦

で、若いものは若いもの、嫁は嫁のグループで別々になり、嫁さんと旦那さんと夫婦で行くことをしない。それはなぜかときいたら、夫婦で一緒に表を歩いただけでもひやかされる、だから夫婦で行かせたいが出ていけないというのです。そういうふうに、嫁さんを大事にしようと思つても世間が許さない。ところで、農家の婦人の場合、自分の地位も高め、家族関係も平等な立場に立ちたいというので、一生懸命努力するとします。それにはまずじぶのいる古い家と闘いしなければ、自分の地位を高めていけません。これが一つの抵抗です。ところが自分の家だけではなく、もう一つ部落というものがある。たとえ自分の家を民主化してみても、部落がそれをゆるさない。すぐに厳しい目で押えられてしまふ。これが第二の抵抗ですね。農村の婦人は家の中の闘いのほかに、部落の圧力と闘わなければならない。そういう二重の圧力を背にしているわけですね。そしてこの部落の圧力というのは、いつも家を通してくる。

ところで、さきほど家族集団について話したとき、皆さんはすばらしい家庭であることをお話になったが、こんどは部落の事情をうかがうと大へん圧力の多い部落の話がでました。そこに皆さんは住んでいらっしゃる。そうすると皆さんの家々も皆さんがお話になったほど、はたして

部落の圧力をはねとばして立派な形にできているか少し疑問になってきたわけです。皆さんの家々がすばらしい家族集団になっていたら、その家族集団が作っている部落は皆さんが非難するほど、そんなに悪いはずはないと思うんです。

そうすると、さっきちょっと預っておきましようという私がいった家の問題が、あらためて考えられてきます。四、五年前には新憲法、新民法の学習がはやって、婦人たちはもはや家の制度はない、家族制度はない、家長制もないのだ、みんな平等の立場で人間的な理解のもとに手を結んでいるのだと盛んに論じられ、いつの間にかもう理想的な近代的な家庭が出来上ったかのようでした。ところが、それは流行のように消えてしまつて、ここ四、五年ほとんどその話が語られなくなった。みなさんもそのことにはふれなかった。だがきょうの話をきいていると、自分らの家庭を振り返って、家はなくなったのか、本当に家長制はないのか、婦人の地位が高まったのか反省してみなければならぬ気がするのです。部落の問題がこれほど皆さんを圧迫している。そのことを考えると、その部落を作っている家々が一体どうなのか、家々が近代化されていなのに部落を近代化しようとしたって無理じゃないか、私たちは一応觀念的には頭において新しい家族集団のあり方、それを實際

それができなければ部落を逃がすかしなければならぬ。助け合いといふながら損をかけている。この解決をどうしたらいいか、きょうの話し合いでは家族集団の場合と結びつけて考えられたのですけれど、そのほかに婦人会の問題とも結びついて出ているわけです。近隣の集団はどういう姿であればいいか、その中で自主性を確立して、個人としての正しい自由を振るまう、そのことに責任を持てるような部落集団はどういう姿であるべきか、一つその理想の姿をいよいよ頭の中に描いて下さい。これを宿題にして、その答案を明後日の話し合いに出して下さい。きょうはこの辺で終りたいと思います。

#### (第一日閉会)

#### 地域集団のあり方

渡辺 それでは一昨日に続いて、またお話し合いをいたしましょう。

宿題があったわけなんですがね。まあ答案でなくてもいいですから、どなたかお考えをまとめた方はありませんか。たぶん昨日東京班がごらんになった団地の生活というのは、これからの新しい部落といえますか、地域集団といえますか、そういうものをどう作り上げていくかということに、何か——全体ではないんですが——示唆するものが

的に、いま私たちの生活している家族の場合と照し合せて、本当に自分らの家族集団というものが自分らの理想としている家庭になっているのか、まだまだ古い尻尾を残していはいないか、そこを私は反省していただきたいと思うのです。そのことをつくづく感じたのです。部落の中で自主性を発揮しようとしても、すぐ村八分になったり、そっぽを向かれてしまう。部落はそれほど苦しい圧力が強いところなんです。婦人過問のテーマをこの問題にあてはめてみて、部落の中の個人が、どのくらい自由と責任がもてるのか、自由に振舞えるのか、どれだけ責任を負うことが出来るのかと考えると、これは非常に大きな問題だと思つたのです。解決を出そうとしてもなかなか簡単には解決がつかない。芳野さんは初年祭を合理的にするのに十年かかっていらっしやる。大へんなことだと思つた。部落集団と家族集団のからみ合い、婦人会と部落集団とのからみ合い、そういう問題を明後日もう一ぺん、深く検討してみたいと思つます。

部落集団はどういう姿がいいのか。いままで出てきた話ではこんな非民主的な昔のままの姿の集団はなさそうです。北海道は別です。本州の方々の場合ではひどく非民主的な姿です。その中で個人の立場で自主性を確立しようとする、部落の人全部を相手に喧嘩をしてねじふせるか、

あったと思うのです。一つ宿題の答案を二、三出して下さい。

芳野 宿題の答えにはなりませんけれども、昨日の団地での話し合いですと、家というものはあるけれど、まだ近隣関係というものがほとんどないに等しいように受けとれたのです。

土室 知識階級はだんだんそんなようになっていくと思うのです。カラの中に閉じこもりまして、近所とはあまり交際しないというような……。

佐藤 私もそのように感じて、こういうような家庭がたくさんできたら、いい部落、近隣社会というのができるだろうと思つたのですが、都会の人と違って生産活動に結びついた農村の場合ですと、あれだけではやっていけないというところだけはわかってきたのです。生産活動に結びつけて考えた場合、都会の方のように、隣に無関心で、干渉しないでいて、困ったときに助けてもらいたいという場合はたしてうまく助け合いができるだろうかと思ひました。

渡辺 佐藤さんのお話は、大へん問題を持っているわけです。別な言葉で翻訳してみましようか。(笑) そうなんです、佐藤さんの言う通り、困ったときにはたして助けてもらえぬかどうか、普段いろいろなことでは助け合わなければならぬのです。それはなぜかということですが

ね。ということは部落に生んでゐる人たちは、部落の生活によつて、とにかく自分のお金を、貧しいものは貧しいなりに持続しているわけですね。そして部落にいれば食っていけるが、部落からはじかれたら食っていけないんです。これがまだ残っている共同体のしっぽですね、ところがだいたいそれは違つてきたと思うのです。つまり、農業協同組合ができた、それからそれぞれの、たとえば蔬菜組合とか、果実組合とか、そういう機能的なグループが、だんだんと生活の中から生まれていつてゐるんです。昔はそういうことをしなくてもよかったです。部落全体でやればよかった。貧乏な人は貧乏なりに、上からのお恵みにあずかっていた。これはわずかばかりのお恵みですよ。部落にいれば生きていけるというお恵みですね。そして自足自給の生産だったわけです。ところがだんだん世の中が進んで、お金で物を売ったり買ったりするようになると、自給自足的な生産活動だけでは食っていけない。そこで部落の経済生活、生産生活も変つていく。ところが都会ではうんと早くからそれが變つてゐた。都会では近隣同士が助け合つて、持続的な生活をするということではなくて、商品を生産するところと、それを売り買ひするところとで結びついている。近隣とは何も関係がない。昨日くらんになった団地の人たちは、団地は自分らの家族集団のいいこの場所であり、む

つみ合ひの場所なんですね。それだけです。自分らの社会的な生活はどこにあるかといへば、みんなそこから期出で行つたところにある。お父さんは会社へ行き、子供は学校に行く、共がせぎの場合は、奥さんも外に行く。近隣集団として、団地のなかで助け合ひをしなくてもいいのです。だから死ぬ、お葬式があるといへば、職場から人が来てやつてくれます。こういう団地の生活へ入つていった人といふのは、これは何とかして、いなかの近隣集団、部落集団のような生活から抜け出したい、自分一人の生活を持たないといつて、鉄筋コンクリートの壁の中にみずからもぐつていったのです。そういうのが現状ですね。ああやつてかたまつて並んでゐるが、家が並んでゐるだけなのですね。何もあそこで手をつないで集まつてゐるのではない。ところがあの人たちにもだんだん子供ができてくる。子供はお隣の子と遊ぶようになる。朝になれば外へ出ていくその留守中、子供たちをどうしようかという問題が起きてくる。こうなつてはじめて団地のお母さん方は、自分らの地域集団としての問題を、必要に迫られて、考えてみなければならなくなる。そこで子供が一緒に遊べる場所、あるいは一緒に勉強できる場所がほしいということになってくる。そういう要求から、近隣集団として団地の人たちだけで手をつないで、子供の施設をつくりだしてゐるところもあり

ます。ところが都会は、生産ばかりでなく、すべてのことが分化してゐるので、そういうところにすぐ保育所が建つ、行政の面からもそういう保育所を建てるのができる。幼稚園もすぐ近所にできる。自分らだけで何か協同施設として保育所を建てるよというのを無理に考えなくても、そういう施設がまわりにできてゐる。そこへ預けて行けばいい。自分らは、やっぱり一軒々々が、ただかたまつてある建物の中の完全な個人の家族集団で、ここの中で他からの一切の干渉を避けて暮してゐる。こういうのがいまの団地の生活です。これを農村の部落の問題と考へあわせると、どちらが近代化されてゐるかということに思ひ当るだらうと思ひます。農村も遂次そういうところになってきますよ。協同体という古い原始的な集団、それがずっとしっぽを引いてきていますが、だんだん皆さんは婦人会をお作りになるし、お父さん方は農業協同組合にお入りになった、あるいは酪農組合をお作りになった。こうして農村にもそれぞれ独自の機能をもった組織ができてきましたね。そういうものがまわりにできて、協同体の中で一緒にたなつてゐた機能が、一つずつそれに吸ひとられていくと、あとには何が残るかといへば、そこにはいわゆる地域社会としてのだけのものが残つてくるわけです。

山形の私の知り合ひの氣藤という社会教育関係の先生が

も聞いた話ですが、あるところで婦人学教がはじめて開かれた。そこでまず出席簿をよみあげたそうです。「何とか部落の鈴木しげ子さん」「同じ部落の宮崎弥生子さん」というふうに呼んだわけですね。ところが、そう呼びあげられて、集まつたお母さんたちがびっくりした。はじめてお隣の人の名前がわかつた。(笑)東のおっかあとか、西の嫁ごとか、五郎衛門のねえちゃんとか、みんな家についてゐる名前で、嫁ご、ねえちゃん、おっかあ、そういう呼び方をしていたから、毎日会つていながら名前を知らなかった。これはどういふことになるか。これまではお互いにかたがたといふものでお互いを見ていた。ほんとうの個人でない、家についてゐるもの、家の附屬物としてのおっかあであり、嫁ごであり、ねえちゃんだったのです。これは皆さんのところにも残つてゐると思う。そうすると、私たちの家族集団が、非常に民主的な近代化されたものになつたと思ふのは、まだまだ早いのではないか。こんなふうに、家のおっかあとして、家のねえちゃんとして、家の嫁ごとしてだけしか認められていないのが実情である。そういう婦人の存在、それはそのまま、自分らの家族集団がまだ家という古いしっぽを残してゐる、まだまだ家の側面の中に固く縛られてゐる。

こういう古めかしい家が、そのまま寄りあつてゐる



のが部落集団、つまり農村の近隣集団なわけです。家の制度というものが厳しく残されていて、それが昔からの共同体の力関係とまざり合って結びついて、そういう部落の人たちを、個人としてその存在を認めるよりは、むしろ共同体の中の構成員として、その中に配属された姿で見ている。別な言い方をすれば、そこで自給自足できるという、そういう状態が見かけだけそのままで残されてきた。そしてそういう状態のままであることが、みんなに仕合せだと思われている。ところが近代化された農業が入っていくとそれがだいたいぶちがって来る。牛一匹入れてもおそらく人と違うと思うのです。まして商品的な農業生産をやっていると、たとえば果樹、野菜などだったら、これは一刻を争って出荷したり、市場の値段と見合せて作ったりしなければならぬので、かなり速くてきてますね。出荷組合などを作ると、もうそこでは地盤関係、力関係というものは非常に薄れてきて、みんながちゃんと平等の立場で、そして十分に確立された個人の立場で、そういう仕事に参加しているわけですね。ですから一昨日の話に出た、いざというときはみんなそれと出して出荷を助け合うというこの助け合いは、部落の助け合いと違うのですね。

また、これまでは部落内でまとまっていれば、自給自足的に何でも満足されたわけですが、そういう新しい農業生

み合っている。そこで婦人会でいざこざがあったり対立すれば、村八分のような、つまり、はじき出されなければならぬ。結局婦人会は何とかしてみんなが自己満足するような状態で作られていなければならない。したがって網羅的になる。入会すれば自分はこれで部落の婦人なんだ、自分はいつも安全なんだ、そういう気持ちで入っていくわけですね。よく入会の仕方からして自主性がないといわれるが、入ることによって自分は救われているわけなんです。はじき出されたいのです。何も婦人会の目的に沿って活動を活動にしようとか、それによって自分が高められようなどという考えはないのですね。そういうところにじつは問題がひそんでいると思うのです。

これからの新しい部落というものは、その部落を作っている地域集団の一つの単位である家族集団が、まず完全に家の制度をぬぐいさつてしまふ、家自体が近代化する、民主化する、家自体がそれをやっている、それは同時に部落集団、地域社会というものを、今までの共同体的なものから、もっと進んだものにする、今までの共同体的なものかといってもそれは、決して頭の切りかえや、こういう話し合いだけでできるものではない。その土台になるものは、経済活動であり、経済の仕組みであるわけです。それが近代化されない限り、なかなか頭の切りかえだけではできない

産と取り組んでいくと、とても自分の部落だけでは問題が解決されなくなるわけです。はじめて牛を一匹入れてもらんなさい。牛を飼う知識を部落では持っていない。ほかの部落へ行っても、牛を飼っている経験者から話を聞かなければならぬ。牛乳を出すにしても、はじめて牛を入れたところには牛乳を出荷する組合も組織もない。町の組合に連絡をつけなければならぬ。だんだんそれが進んでいくと、町だけで満足できなくなる。市にあるもっと大きい連合的な組織の中に連絡をつけるようになる。市でも満足できないことになる。県庁へ行っても連絡をつけるというように、少しでも新しい近代化された生産と取り組んでいくと、ひとりではこれまでの協同体的なしっばを一すずつでもちめていくことになると思います。こうして機能的に分化されていくと、自然私たちは生産という土台に立って、私たちの社会的な活動も、そういう機能的な集団を作ってやるようにならざるを得なくなってくる。ところがいまの農村部落はそれが中途半端だと思うのです。いわば過渡期ですね。なるほど皆さんは婦人会を作って、そこに一つのアソシエーションといいますが、機能的な仲間を作り上げたことは作り上げたんですが、それはまだほんとうに近代化されていない。つまり部落というものに縛られてその中でできているので、結局これは部落集団といつもから

ものではない。頭だけが進んで、そういうことをしようとする、部落の圧力にあって大きな衝突を起すことになる。しかし頭だけにしても、かなりそういうところへ押し進める力になることは確かですね。みんなそういう頭で切り変えていく、その切り変えていく過程で、今のようない経済活動ではだめだ、そうするためにはどうしても経済活動自体が、もっともっと近代化されなければならないということがわかってくるわけですね。

仁平 婦人よりも今の青年の方がほんとうに目ざめているのですが、なぜ実行できないかということに突き当たって悩んでいるのです。

渡辺 それはやっぱり青年が、ただどうしたらいいだろうと悩むだけで、そこに踏みとどまっていはいけないうです。ね。一歩踏みだしていくためには組織が必要になってくるのです。親たちの農業技術というものは、おじいさんから、そのまた前から教わったままの技術で、たんぼに稲を作るだけでしかなかった。こんなことじゃ村はいままでたっても、自分らがただ飯を食っていくというような生産の土地でもやっているように、ミカンを植えたりなんかしなければならぬというので、青年団がミカン畑を自分らで試作した。そうしたらえらく収入があるのです。ね。それ

でおやじたちは、自分らにそういう技術がないからびっくりして、だんだん青年たちに経済的な指導権を譲りわたすようになったという話が広島にあるのです。ただ困った困ったと足踏みしていないで、何か自分らの仲間の方で実際にやれることはないか、というふうには、少しでも実践に踏み切っていく、それが大事だと思うのです。

仁平 こういうふうにもまた言うのですよ。いろいろ生活改善をしようとしても、家の中に不和ができるために、思っても実行できないという。それもやっぱり、おやじをたてるという家の制度につながってありますね。

芳野 家の近代化は一番やりづらいことです。何か経済的機構が変わったり、また農業の方法が機械化農業に変わって、いけばいやすくなる。ところが私どものまわりでは、農業だけに取り組んでいたのでは生きられないわけですから、兼業農家といいますが、工場などへ勤めに出る。

渡辺 ぼくは兼業農家は農家といえないと思うのです。もう農家から脱落したか、抜け出して行った人です。

芳野 土地がなかったらいやだにしようということになります。だけれども、そこには地域社会がありますね。そこをどうしたらいいか。

渡辺 兼業農家が農村にたくさんふえていくということは、これは農村が近代化していく一つの動機になる。

で自分たちが手におけた中学校を失うことは悲しくもさびしくもあり、哀惜の情にひかれ、それが激しい反行動の原因でした。最後まで絶対反対申し合せのうち、少数者の賛成者は必然的に村八分扱いになり、近所づき合いはこぼまれ、市の伝達行事は全部拒否、賛成者の商店は不買申し合せ、私の夫は統合指導者の理由で追放を迫られ、夜は家に石つぶてが投げられ、役職にある賛成者の首切り運動、竹槍で自殺しろと脅迫される。こんなことが毎日続いた。多勢に無勢では抗するすべもなく、一の発言は百の罵詈雑言で封じられ、理論は絶対とおらない。しかし昨四月、中学校は新設され、入学式は三十六名の子供が父兄に付き添われ登校した。その日早朝から反対側の大人と子供は、ビケを張り通学を妨害した。その後の通学もどれだけ妨害されたろうか。このような動きに大きくゆさぶられたのが青年団、婦人会でした。こういう団体を強力な反対体制に統一しようとする男の圧迫は猛烈をきわめた。もちろん会員は家ぐるみ反対、賛成で、当然会も二つの感情にもつれ合った。しかし団体だけは中立を守り、会の将来のために紛糾に巻き込まれぬようにしていこうという意見を、さすがに青年はよく守ったが、婦人会の反対者は、夫の意思は妻も同じ、それだけでなく家庭の円満があり得るか、賛否両論の

それじゃ一つ集団と集団のからみ合いについて、話を一つけていきましょう。それで元岡さんの場合がいい例ですから、これを糸口にしてやってみましょう。元岡さんの話は婦人会という機能集団が部落という地域集団と衝突して、婦人会は分裂するようなはめになり、しかも弱いほうの元岡さんたちは、部落から村八分のような目にあっている。これは一体どういうことを意味しているか、婦人会という集団については、一昨日もう話し合い済みでしたね。だからここでは集団と集団のからみ合いということ、この問題を考えましょう。元岡さん自身はどう考えてますか。

元岡 では、もう少し詳しくわかっていただくために原稿を読みます。

「私の町が市に合併し、昨年中学校が統合された。これをめぐって賛否両論も激しく、過去一年紛糾の明け暮れでした。複雑な政治内容はともかく、市に合併された当時の目的を思い、子供たちの将来を考え、市の方針に協力するのが当然だという結論に達し、部落の絶対反対という無法な申し合せをしりぞけて、三分の一の住民が統合の線に踏み切った。平戸島西南の一部落で、外部の交流はほとんどなく、親類縁者で構成されていることは封建制が根強く、過去のこのみ捨てがたく、そうした中

中で会が中立を守れるかと、男の力をかりて反対一本に押そうとし、多数決を利用して役員排斥調印を始めた。会員の中には、脅迫されて調印した人もあった。会運営は不可能となり、混乱状態となり、とうとう二つに分裂した。よりよい会に育てる義務を持つ会員が、かりにも外部の目的に踊らされて、自己の会を破壊するような行動は許されない。私たちは自由意思によって集まっているが、会は自分一人のものではない、自己の意見を通して外部の力をかり、会を動かそうとするのでは会員の資格はない、自分の意見は会の目的を中心として話し合い、そこねらうと態度がほしい。多数決に事よせて少数者の意見を無視することは大きな間違いだと思ふ。婦人会は女の修養場所である。これを侵害することはだれもできない。私たちはここで勉強する権利と自由を持っていて、身に付けた教養は生活の上に応用し、明日への発展がなくてはならない、一つの技術を身につけることは人間形成の目的である。よいこと、悪いことの判断と、それをはっきり認める勇氣がほしい。私たちの修養は生活の上で一對一のお互いの尊敬を持ち合える技術だと思ふ。多数と少数の戦いの場所ではない。」

山本 三分の一と二にわかれたというのですが、その三

分の二のほうは、経済的とか、教養といいますが、それはどういふような状態ですか。

元岡 やっぱ三分の一のほうはよそから疎開して来た人です。案外教養の豊かな人が多く、親戚関係がほとんどでしょう。ですから親戚の有力者の発言が一番大きく動くわけです。そしてやっぱり知識的な人の有力な親戚同士が固まりますね。経済はほとんど同等です。

仁平 今のお話のように三分の一の人は大体においてほかから転じてきた人であるということを考えますと、やはり家族制度的なものの考え方が一番根本になっているのではないかと思います。

#### 部落感情について

渡辺 元岡さんの話と、山口の水木さんの、せっかく松並木を作ろうと思った話が、部落々々の入口に一本ずつになっちゃったというこの部落の姿ですね、これはよく似ていますね。それを支配しているものは部落根性ですね。それを問題にして下さい。

芳野 部落というものの歴史は古いわけですが、そのおとくというものが、交通便利になった今日では、もともとと広げられていいわけです。たとえば元岡さんのお考えは部落のわくを解消して、新しい時代の、地域全体としての

仕合せをはかっていくというのが趣旨なのです。それがわからないわけですね。しかし部落の中にも可能性のある方がいると思うのです。説得力のある進んだ人が、簡単にではできませんけれども、命がけで時をかけて説得力をいけるべきではないですか。

渡辺慶子 今もやっぱり通学について同じような状態が続いているのですか。

元岡 続いています。分室ができて、二年生まで分室に入っていますが、ほとんど今まであった併設校とは問題にならないですね。三年生だけは無理やり通わされていますが、いやだといって通わないでいるのもいて、私どもの賛成者の子供たちは圧迫されながらも、今も通っているわけです。

佐藤 その部落根性というのは感情的なものではないでしょうか。

渡辺 だからその感情はなぜ起きるか。部落根性はどうしてできてくるだろうか。

芳野 みじめな目にあっている反対派の方より、お宅さんのように、賛成派の方は通学は圧迫されるけれども、教育自体は恵まれている、やっぱりそのほうが得だということとがわかるのではないのでしょうか、反対派も……。

渡辺 学校がどうだこうだということではなく、なぜこう

いう問題が起きてきたかということと話して下さい。

水木 そのことの目的をよく理解しないで、部落意識を押し出すために目的が薄れていくのですね。

渡辺 その部落意識というのは一体どういうもの……。

征矢 部落意識の例があるのですが、うちのほうでは選挙の場合に、部落感情が猛烈に出る。部落が四つにわかれていますが、その中から村長さん、婦人会長、村会議員を出すにしても、みんな部落の順番がきまってしまっている。あの部落に非常に優秀な人がいるが、次はこの部落だときまっちゃってしまっているから、この部落の人たちは大勢して百パーセントの投票を行うのです。これは決して政治意識に目ざめているのではなくて、自分のほうの部落から出た人が勝つならという気持です。それで否応なしに、どんな優秀な人でも一年切りでだめになる。それで一応非常に平和が保たれています。たまたま優秀な人をまた推そうということになる、非常に排斥されるわけです。ところがその村が次の村と合併されました、大きい村になりました。そうすると今度は四つの部落ではなしに、村全体として考えるような気持がわいてきまして、その合併された村に負けるか自分の村が見劣りするから、そっちの村に負けないような村にしようということで、四部落が一緒になっ

てその人を出そうという気持がわいてきた。つまり自分た

ちの身びいきが強い、その気持が部落を支配しているのです。

渡辺 その身びいきですよ。問題は……。

仁平 身びいきですね。家のつながりというもので、部落はずっと長くつづいてきた。だから、部落感情というのは、自分の家というものを立てたい、夫婦であったならば夫を立てる、親子ならば親を立てるというのが、結局部落を立てるということにも共通してくるのではないか。

森下 「立てる」という、そういう意識の前に、自分たちの力が不足だからまわりに自分と同じ人がいれば、安心して生活できる。だから自分をその中に入れて安心して置くというものがほしいのです。その一緒にいようという気持が、結局外から見ると部落意識というふうになるのです。佐藤 その安心感というものは何だろうと考えると、結局自分たちがその部落に住んでいるということを得をしているということ……。

渡辺 森下さんのおっしゃったことは、けさ最初に説明した自足的な生活ということに通じますね。そこにおればとにかく暮らしていける。機能が分化されないで、未分化のままでごちゃごちゃになっていて、そこには方関係、身分関係の支配が行われていて、その支那の仕組に従っておれば、とにかく田んぼは少ししかなくても暮らしていける、生

活的には自足ができるということ、これですね。それからさっき話が出たように、部落の歴史的なもの、家というものの、同族的な集まりが非常に大きい。このテーマは集団のことをやっているのだから、集団的な内容を考えてみたいと思つてこのことを出したのです。婦人会にも同じようにいえることです。婦人会には婦人会感情がある。その感情は一体どういうことかというのを考えなければならぬ。部落についていえば、部落というのは自分と同じなので、部落即自分なんです。おらが部落というでしょう。婦人会の場合でも同じです。私どもの婦人会、私たちの婦人会という。みんなが話するにも「私たちは」とか「われわれは」とか、という言葉で「婦人会は」ということを言っている。私たちは一つの集団を作ると、それを自分と同じように見るといふ傾向があります。部落についていえば、これはさきにも言つたような古い共同体、そして同族意識にかたまつていて、経済関係では自足的な満足にひたつてゐる。そこで部落におれば安心という森下さんの説が出てくるわけですが、それを裏返せば、おらが部落、つまり自分と部落を同じように思ふ、部落に何か不利なことがあることは、自分に不利なことと考える。そういうのが部落感情になるわけです。部落の損失・痛手、そういうことは自分の損失・痛手だ。部落の利益、それは自分の利

害、婦人会も固まりますね、そういう固まる性質があります。なぜ固まるんでしょう。

元岡 固結しなければ獲得できないということがある。

征矢 自分に自信がないからですね。自分の行動、自分の考えというものが、ほんとうに正しいという自信がない。

渡辺 集団が固まっていられるその内容はどのようなものですか。まずある目的にむかつて一つに固まりますね、それからまだありますね。

征矢 それは自分の利益のために……。

渡辺 利益は目的でしょう。皆さん、婦人会を作っている場合どうですか、婦人会の目的のほかに社交性、娯楽性がありますね。これは集団としてにかく集まって、まとまっている要素ですね。

芳野 あそこが入ったから私も入らなければ義理が悪いという人並み意識というもの、一つの大きな固まりの要素になってますね。

渡辺 部落はそれが二重に重なるわけです。ほかの会でもそういうことがあるわけです。たとえば職場の組合の場合、そこには教養部というものがあつて、お花を生けたりお茶を習ったり、婦人たちのそういうグループがありますね。お花を習い、お茶を習うということが目的なんです。

益だといつも考えている。そういう考え方は婦会にも通じる。婦会に何か損なことがあるということは、自分が損なことと思う。そんなふうに、部落でも婦会でも、自分が入っている集団と自分と同じものだという考えがいつもある。これが集団を作らせる一つの大事な芯になるわけですが、そいつがしばしば問題を起す。

征矢 うちのほうでは、小さいグループを作っているのと一生懸命勉強してましたが、それを婦会が白い目で見てました。けれども、上のほうでこれは大へんいいことだと言つて、育成費というものを下さつたもので、自分たちも作らなければ損だと言つて、グループがたくさんで始めたのです。

渡辺 そういふふうにおらが部落、われわれの婦人会というので、集団と自分をいつも同じに見るといふ心理が働いているわけです。部落感情の場合は、そのほかに部落におれば安心だということね。それから部落の構成の仕方が、昔からの同族関係、地主といつたようなもの、そういうものの強い支配のわくが部落を押えているから、部落感情はほかの集団感情よりも根強いわけですが、ほかの集団と共通なものをそこから取り出してみると、いま言つた自分と集団は同じものだといふ考え方が一つ。それからもう一つ、元岡さんの場合のように、部落は固まるという性

が、そのグループに入ることによつて、自分らのまわりの女性の職場人たちと手をつなげる、社交といひますか、そういうものがありますね。娯楽性というか、楽しみがありますね。婦人会の場合も同じだと思います。婦人の教養を高めるという本来の目的のほかに、こういう要素があるわけですね。農村の場合は社交性が、いつも部落仲間意識とつながるわけです。引ついているわけですね。そういうものが部落にある。それからそこへ入つて行くことによつて、普段おつき合ひしない人とも顔つなぎができるという、そういう要素が、今の婦会にはかなりあると思ひます。婦人会は、組織的組織だといつて非難しますが、実はお隣がはいったからはいるといふことを自主性のない入会の仕方として非難されるが、そういうはいり方をさせるものは、集団にある社交性、娯楽性もその一つだといふことを見のがしてはいけません。必ずしも目的だけをねらいにして集まっているものとばかりはいえない。ことにそれが農村の部落のように、部落におることによつて、生活の安心がある限りにおいて、部落で作られるそういう会には、すべて入つていかざるを得ないというのが、部落に住んでいる人たちの腹の底だと思ひます。

芳野 現実の姿がそうです。

渡辺 今はそういう姿であるということです。その二つ

がからみ合い、婦人会という会を作るときも目的だけで集まっているのではない。その会に入ったことによって、一つの社交的な場所が作られる。そういうことで自分らの日常の生活に物質的・精神的な満足が得られるという、そういう喜び、一つの社交性・娯楽性といったようなもの、そういうものと合せて、この会には婦人の教養を高めるといふ本来の目的がある。そういう中で十分に社交的なもの、娯楽的なものに満足しながら、さらに会の目的に沿って婦人の教養を高める活動をしていく、これが婦人会の姿です。ところが、これが部落と重なり合ったとき、そういう社交性・娯楽性、それから本来の目的、そういうものにだけひかれていくんでなくて、部落の中におれば安心しておれるという、そういう部落感情、そしてこれはまたおれたちの部落なんだという、部落と自分を一緒に見る見方、そういうものが重なり合って、部落の婦人会本来のもの以上のものが入ってくる。そこで問題は、元岡さんの問題に戻るわけですが、その婦人会が、社交性・娯楽性、本来の目的、そういうもので集まっているはずの婦人会なのに、部落が学校問題で压力をかけてくると、婦人会ではそれを支持する考え方が強くなったということは、この実例の場合でいえば、本来の部落感情がもたれている。部落におれば安心だ、そして部落は自分なんだ。部落の損害

は自分の損害だという、自分と部落と一緒に見ている見方、それが婦人会を作っている人たちのめいめいにあるから、部落の考えが婦人会にそのまま入り込んでいく。そういう姿が、元岡さんのところの問題を起した土台にあることではないかと私は思うのです。それからもう一つ大事なことがありますね。反対した人たちはよから引き揚げて来たという人、部落本来の人でないということ、部落の人にとっては他人視されやすい立場の人であるということ。部落の利害は常に一身の利害と感ずる。そして部落に住んでいけば安心だということから生まれてくる同族主義、そういうことから一そう他から入って来た人に対する排他性が強いわけです。そこで部落はそういう集団であってほしくないではないかということ、今日の話し合いの中心にしたいわけです。ところで、そういう排他性は部落ばかりでなく、ほかの集団にもないか、どうか。まず家族集団にはどうでしょう。

山本 家族の場合でしたら、お嫁さんと姑さん、とくに農家の場合、みじめだと思わずにすれども……。

渡辺 お嫁さんの問題は排他だけではいいですね。排他的なものも多少ありますがね。

青山 私のところは大体町の中だけで結婚のやりとりをする。だから親戚とか血縁関係が多いわけです。十年ぐら

いそこに住みついた人でも、まだいつまでたってもよそ者だという気分がある。だから進歩的な意見を出した場合でも、よそ者が何を言うかというような気持ちがずいぶんあって、せっかくなのいい意見も芽をまわれることが多いのです。そういうことをなくすために、婦人会も啓蒙運動を始めていますが、いつになつたらみんなの気持ちの中に入れるかということが大きな問題だと思ふのです。

芳野 お嫁さんの場合と逆に、養子が生うだつが上らないということも家族の中の排他性の現われだと思ふます。

水木 家族の中にいろいろ年代がありますね、五十代、三十代と、その年代によって、排他性がある程度違いますね。お年寄りや若い者とは、その中である程度は理解しているつもりでも、若い者が何を言うかというような、排他性が動いているような気がします。

元岡 農村地帯は農民とほかの職業との区別がとても激しいのです。自分たちは百姓だ。百姓は百姓で固まって、給料取りなんか問題ではないというふうに、とても意識するのです。

征矢 元岡さんがおっしゃったことは農家が多い場合はそうですけれども、私のほうは半農半勤め人もありますので、そういうものはだんだん薄れてきました。けれども、

疎開などしてよそから入って来た場合、そういう人たちが非常に優秀な人でも、そこに何十年住みついても、村の役員は一切やらせてもらえない。そういう点は非常におかしい。家の株というものがあって、家の株を持っている人が外に出る場合に、いくらかの金でそれを譲って行く。よそから来た人がそれを譲ってもらって株を持つと、そこではじめて村の一員として発言できるようになる。そうすると資格ができて、役員にもなれるというわけです。

森下 家族の中では、実際問題として、新しいことを非常にかろうのです。古い家ほどきらいです。たとえそれが利益であっても、新しいものはきらい。新しいこと、新しいものに対して排他性があると思ふのです。

渡辺 それも一つの排他性でしょうね。自分のことになると、なかなか反省ができないのですが、子供たちの生活を見てみましょう。兄弟で遊んでいるところへよその者がはいって来ると、よく押しのけてしまふ子がいますね。兄弟だけで手をつないでいる。これは兄弟自体がそういうものを持っていて、その子供たちの育てられてる家庭から、そういう反映を受けているのです。それは親が持っているわけです。

渡辺慶子 親戚の子供さんが遊びに来ると一緒に遊ぶけれども、親戚の子供以外の子供は座敷に入れてはいけな

というふうなことです。

渡辺 それもあるでしょう。こうして考えてみれば、私たちの集団の中に、こういう悪いものがたくさんあるわけですね。そういう中で、私どもはどんなふうにして自主性を確立していくかというのが、今度のテーマなわけですね。そうすると、これはちょうど二ワトリと卵みたいなもので、どっちが先かなかなか言い切れないんです。自分が自主性を発揮しようとしても、集団自体が悪いものばかり持っているから、それを一々ぶちこわしていかなければならぬ。自主性が確立されない。そこで、ぶちこわしにかかっているうちに、自分はヘトヘトになって倒れる。そういうのが今の集団とその個人の関係なのだから、自主性の確立も容易でないといえる。また、集団を作っているみんな自身も悪いものを持っているから、それで集団自体がそのまま悪い集団になっているともいえる。そうすると……。

#### 自主性の確立について

仁平 夫婦関係というものを強く打ち出していきたいと思えます。農村では親子の関係だけが非常に重んじられて、親の言うことは聞かなくてはいけないといえますけれども、夫婦の仲というものはあんまり重んじられていないのではないかと。たとえば養子なんかもあんまり考

自分の気持ちそのままの生活をしているのです。

山本 非常によいことだと思います。どなたもしたい方法だと思えますけれども、やはり経済的に余裕がなければできないと思えます。

征矢 経済的にとおっしゃったけれども、何んとか工夫すればやれることもあるのです。例えば、子供が机を並べていたのはだめなら廊下の突き当りにカーテンをつるして、机を置いて一団一城の主というようにそこを作っているというように……。

森下 私の家はお金はないのですよ。よその人に対してお上んなさうと行って、上ってもらって客間がないのです。でも、夜おそく人が来ても、子供たちに全然影響しませんが、だからどなたでも自由に入ってきて来ます。

中田 子供の年齢にもよるのではないのでしょうか。私も子供に独立した部屋を与えるようにしたのですけれども、おふろ場でも、お手洗いで、私どものいる部屋を通らなくとも行けるようになってくるのに、子供がわざわざそこを通るのです。もう自分の部屋にわかれてもいいのと思っても、ちよっとわかれたかと思うとすぐやって来るのです。

森下 私のところも、年によっていろいろ違います。小さいときは一緒にやらせていました、ちよと今の段階

てくれないのです。夫婦が寝るところにみんなが寝るといふように、夫婦を重んじないということ、これも大きい問題があるのではないのでしょうか。

渡辺 その問題を森下さんから一つ。家族全部個室を持っていたらいいんです。なぜ持っていないか、これは昨日東京班がごらんになった都会の団地の生活ともつながるものがあると思うのです。

森下 私の家はいま子供がみんな育ち盛りで、どの子どももみんな階段が通っていますので、そういう者が同じ部屋にいることは実に不便だということを痛感したので、たとえば一番上の娘は夜の勉強が終わるのが十二時ごろ、長男は大学受験のため十二時から一時ごろ、ところが一番下の子は小学校五年生ですが、大体八時から九時ごろに寝る。次男の中学三年の子はそのころそろそろ勉強する勉強する時間、寝る時間にしてもみんな通っている。それを見てまして、どの子を犠牲にするということもできません。そこで主人が本を読む部屋のすみっこを客間にして、家中全部開放して、子供たちは一人ずつ部屋を持つことにしました。その部屋の中で自分の好きなときに勉強をし、お互いの迷惑にならないような時間におふろに入って、まるでアパートみたいな生活です。いいか悪いかわからないのですが、現在ではそういうふうになってんばらばらに、

がそういうふうにより各自の特徴を生かした部屋がほしいというときです。

渡辺 入ったときから、自分の室を与えています。学校に入ったときから、自分の室を与えています。

征矢 森下さんの場合、非常にいいと思うのですけれども、お姑さんがあったり、御主人が無理解の場合は中々うまくゆかず問題だと思ふのです。

渡辺 皆さんは家庭内においては婦人の地位を高められている方でしょう。御主人とも非常によく理解し合っている方でしょう。一昨日の話を聞いて思ふのです。森下さんの話は非常にいい問題を幾つか持っていると思うのです。まずこれはさっきからの部落の問題を合せて考えるのに、非常に大事なことで、一つの家族の中でさえも、そんなふうにみんな立場立場が違ふのです。小学校の子、中学校、高等学校、大学の子と、みんな違うわけですね。それが一軒のうちにまざり合っている。それを子供たちそれぞれの生活を自分だけでちゃんとやっていけるように個室を与えて解決したということは、いったい何を教えているか。それはやっぱり私たちが個人を確立していくのには、そういう気持だけでなくて、自分ちゃんと個人としてはっきりした自分の場をもっているということです。これはしつけにもつながることでしょうが、とにかく大事なことは、森下さ

んの家族はお互いに一部屋一部屋持っていて、他人に干渉をし合っているという事です。家庭の中でも家族一人一人の私生活、そういうものがちゃんと守られている。そこでこれを部落にかえて、部落の問題と考え合せてみて下さい。

山本 部落の場合、経済的に非常に段階があるわけですが。そういうときに部落会で、やはり経済的に恵まれている者の意見をとって、貧しい者とか、弱い人たちの意見が抹殺されてしまう。そういう人たちの意見がどのようになら取り上げられるかということが、わからないわけです。

渡辺 森下さんの家にしても、一軒のうちでもそういう問題を持っているのが、一人一人個室をもつことによって解決したのですから、これを部落にあてはめてみましょう。部落はもっともとて広くていろいろな人がいる。そしてそれぞれ一軒一軒立場が違う。一軒の家の中よりも、一つの部落のほうはもっと個別に分離し独立しているはずなのに、実際は逆です。家は確かに別になっていながら、それなのに中味はちよっとも別になっていない。みんなが絶えず私生活に干渉しあっている。これはおかしいですね。そういうところを解決していく最初の出発点として、まず自分の家族集団の中で、そういう個人間の確立を考えてい

にはみんなが話し合うという方法をとっているのです。元岡 親子の間というのは、技巧をこらさないでも、わがままを言っても通ずる面はあるのです。

渡辺 もしね、朝から晩まで一つ部屋に顔を突き合わせている、そういう中から、いま森下さんが例に出されたようなユーモアが生まれるか。一人一人離れていて、たまたま意思を伝えなければならぬというときに生まれてきたか……。

森下 私は後者のような気がする。

渡辺 農家はみんないろいろのところに全部集まるでしょう。嫁さんが明日までに子供のほころびを縫ってやらなければならぬので、別のところに行つて針仕事やっていると、嫁がいなくて変な顔するでしょう。嫁さんが居眠りしながらでもそこにおれば喜んでいい。そういう状態は……。

征矢 お互いにみんなを生かす努力は、家族でも必要です。

渡辺 よく農家では、広い部屋を、ほとんど使わないでいます。これを個室に改造することを考えましょう。それこそお金がなくてもできるのです。間仕切りして、一人ずつの部屋で、自分の時間を持つということ、これはやっぱり個人の確立を目指す上の一つの条件として大事なこ

と。そのことを具体的に、生活的に一つ出して下さったのが、森下さんの家族が個室を持つというやり方だと、私は考えたのです。こういうやり方、いかがでしょう。

青山 大へん理想的でいいと思うのですけれども、そういった個々の生活をしているだけでは、つながりというのが薄れていくのではないかと思います。私は女学校に入ってから一つの部屋が与えられまして、大体そこで生活しました。周囲とあまりしゃべらないで、勉強も何もその部屋でし、食事が一緒ぐらいで、それも父なんかと一緒に食事ができない場合も多い。そうすると父に対する愛憎、私が父から受ける愛情というものは、ほとんど感じられないわけです。それによって、自主性というものが養われるといういい面もあるかもしれませんが、父とか母とかを、あまり懐しが材料になるものがないと思うのです。そういう点を上手に家族が持ち合う場を作らないと、結果的に悪い場合もあります。

渡辺 朝から晩まで自分の部屋に閉じこもりきりではない。家族集団という問題がそこにある。それが土台になっての今の森下さんの生活ですよ。

森下 ですから集まるときというのは夕飯のときだけです。集まる機会が少いのですから、なるべくユーモアということを考えて、かどをたてないようには、集まってきたとき

ではないかと考えております。それで森下さんのお話を出したわけです。私は家族集団の中では、そういうことをしても下宿屋のようにはないと思う。いかがでしょう。そこでまた問題が出てきます。家族集団がそういうふうになる一人一人がちゃんと城郭を作つて、そこで完全に独立して、なるほど個人の確立はできたろうけれども、家族集団としてのみんなのまとまり、手のつなぎぶりは、どうなのだろう。家族は朝夜が明けるとから、夜暗くなるまで、みんな外にばらばらに散つては行くけれども、みんなが手をつないで集団を維持していかなければならないことがたくさんあるはずですね。それがうまくやっついていけるかどうか。この疑問をさぐってみましょう。森下さんのところでは、一人一人の部屋のお掃除は……。

森下 子供たちにやらせます。一番下の子はまだちよっと無理ですが、ほかの子は私がいじると怒りますよ。

渡辺 そうやって自分の一つの部屋を持つことは、自分の生活を自分なりに立てていく。自分の考えで、その部屋を始末していく。よこしっぱなしの人はよこしっぱなし、きちんと整頓する癖の人はきちんと整頓している。朝晩の着がえも自分でやっている。そういうことはどういうことでしょう。

宮崎 責任を持つということ。

渡辺 それからもう一つ、森下さんはそういう問題で私たちが考えなければならぬものをお持ちのようですが。というのは、ご家族はみんな森下さんを助ける仕事をしているでしょう、それはどういふことですか。皆さんがそれぞれ別の仕事を分担して……。

森下 そういうふうになられておりますと、お互い同士の行動がわからないわけです。ですからご飯をいただくところに予定表が記入できるようになっている。大きなカレンダーを用意しておく。それに自分たちの予定をみんな勝手に記入します。大体学校に行っている子はクラブ活動や試験の日割を記入します。私はそこへ畑の予定を記入する。子供はお母ちゃんはこのころはものすごく仕事があるというのを見てくれて、手伝うと言ってくれます。それからこういう衝突はこの家でもあると思うのですが、一番下の子がラジオを聞きたいが、兄たちは試験のときは、ラジオが聞かえないようにしてほしい、なるべくなら切ってもらいたいという。そういう場合には、今日一日のうちで、だれが一番大事な仕事をしなければならぬ人かというのを、カレンダーで見わけます。兄ちゃんも明日試験だから今日はラジオやめようという。私ほんとうにかわいそうだと思うのですけれども、そのかわり兄ちゃんが終わったあとは、ぼくがラジオがけると言っていて、そ

カパーしてやっています。農業経営面では大体肥料を配合する技術的な方面は主人に絶対信頼をおいています。私は、今日の仕事と明日の仕事との関係とか、これから何をまくとか、そういう仕事の切りまわしをやっております。長女は技術的な面を勉強して参りましたから、どっちかといいますと、主人の手助けのほうです。長男も目曜あたりですと、大体半日は力仕事をやってくれます。

渡辺 皆さんどうですか。皆さんもそういう経験をお持ちでしょう。

水木 とてもいい方法のように思いますが、それをあんまりひたむきに強く打ち出し過ぎているという印象を受けました。予定をカレンダーに記入するというのも一つの方法ですけども、茶の間でご飯を食べながら、今日ぼくはこういう仕事を持っている、こういうふうにしたんだがなあと言っていて、話し合いで家族が譲り合い、助け合う、そういうふうにもっていく方法をとってもいいと思うのです。

山本 森下さんのお子さん、それで満足しているわけなのですか。

森下 満足しているかどうか、聞いたことないからわからないのですけれども……。

土室 お互いに思いやりという方がいいことですから

の日の下に「ぼくのラジオ」と書くのです。私は子供たちの間のことは子供たちにまかせています。カレンダーは家庭の歩みだと解釈している。そしてそこに書かれた行動というものは、お互いがそれを認めあっているものであり、またお互いが祝福しあっているものでありたいということを、私は願っているのです。

渡辺 つまり森下さんの家では、カレンダーを媒介にして、いつもみんなの生活がお互いにわかるようになっていくわけですね。カレンダーを中心に、みんなの個々の生活が計画的に統合されて運ばれている。これは大へんいいことなんです。ほかの集団の問題の場合でも、こんなことを手がかりにして考えてみたいと思います。森下さん、家事分担のことはどうなんですか。

森下 最初は朝早く一人で起きて、一人でご飯をたいてというふうに、私一人が仕事をしていたら、うちはそれで済むと思っていたのですが、子供たちと話し合って、みんなが家の仕事を一斉に片づけるようになりました。夕飯の仕度は大団長の子供たちです。外まわりのいろんなこと、物をしまつたりするのは兄、おふるたきが一番下の子、私は大体明日の準備、弁当のおかずとか、次男はまき割りです。こういうようなことを、必ず毎日繰り返しています。試験の子があるときは、その子をオミットして、だれかが

ども、犠牲になるというふうなこともありませんか、兄さんのために自分が聞きたいラジオも聞かれないということとは……。

渡辺 それは犠牲でしょうか。

元岡 森下さんはそこまでいらっしゃるのに御家族で相当話し合ったでしょう。カレンダーにまで書き込んでやるというのには……。

森下 カレンダーに書くということも、私が勧めたわけではない。子供が一番先に書き出した。

元岡 まず話し合いをしてからカレンダーに書くのであって、やはり計画的にやるのには、話し合って計画的に書くのがほんとうではないか……。

征矢 とにかく一人一人が生かされていくというその気持をお互いに持つことであって、少数の家族であっても、大家族であっても、そういう意識を持つということが解決の根本になるということを考えるのです。こまかいことは技術面ですから方法はいくらでもあるけれど、根本の一人一人の自主性の問題こそ一番大事ではないかと思うのです。

渡辺 大へんいい結論を出していただきました。いま話に出た家事分担に関連して申し上げます。仕事の分担ということは、言いかえれば一つの役割を持つという事です



す。自分の役割は自分が果さなければならぬ。そこに自主性が生れる。また自分がそういう役割を持てば、何とかしてそれをうまくやっていこうという気持ちがせんに越えてくる。これがもし責任という言葉でいわれるなら、これこそほんとうの責任感だと言いたい。責任というと外から押しつけられるノルマみたいなもののように考えられがちで、あまり口にしたくない言葉ですが、今申し上げたような、ひとり口で内側から、これをよくするんだ、おれの役割なんだという気持として、午後からの課題の責任について話しあいたいと思います。

#### (休憩)

#### 個人の自主性は確立されているか

渡辺 今までのいろんな集団を、その悪いところだけみんで意地悪くほじくり出したのですが、そういうこととにらみ合せて、それではそういう集団の中で、現在個人の姿はどうなっているかということを考える、そういうところへ話をもっていきたいと思います。

それでは一番小さい集団の、家庭の問題から入っていきたいと思いますが、家庭の中で個人はどういうふうな姿で現在生きているか、そこでは十分に個人の自主性が生かされているか、一つ具体的に話を出しましょう。生かされて

いる例や、反対の例も出して下さい。そうすればどういう形で生かされるのか、だんだんとわかってくるだろうと思います。

家政をあまりせず、それを切り盛りし、管理している主婦の立場が、ほんとうに自主的に生かされているか、家政に干渉はないかどうか。

芳野 近所の人の話ですけれども、決して貧しい家ではなく、篤農ですが、その主婦が、「去年までご飯を炊いておみおつけをこしらえるほかは、おかずは姉さんに相談しなければならぬ」ということを言っていました。お孫さんもあるような年ですけれども、主婦の立場というものが全然認められてない。

征矢 私たちのほうでは、ご飯食べるときは一家の中で座がきまっています。その家の一番権力のある方がお釜のそばにすわるのです。それがつまりおしゃもじを握っている、自分がお釜のそばでよき権利、それを譲るということとがとも問題なのです。お姑さんの権利の強いところではお嫁さんは幾つになっても、その座をわたしてもらえない。一軒の家であって地位がきまっているということが、それによってすべて表明されている。

土室 私の近所には町内会費を集めるに来ますと、いまお父さんがいないからお金がないというところがたくさんあ

る。みんな男の人がさいふを持っていて、お父さんがいないでは何も買えない。

仁平 このあいだ若妻会があるから出てくれというので行きましたが、いつまでたっても集まらない。どういうわけで集まらないかと思ったら、隣もその隣も、一軒々々みんな役員の方がいって、きょうは若妻会があると呼びかけなければ、行きたくても出てこれない。迎えに来てもらって、はじめて出てこれる。ですから時間がたってしまう。こういうところにも嫁さんの個人の自由が全然認められていないことが出ている。お姑さんに気兼ねする状態が、いなかではまだまだあるのです。

渡辺 だんだん問題がたくさん出てきましたね。それが実情なんですね。

藤下 私自分で体験したのですが、いま高校に行っている子が、小学校半ばごろまではお姑さんと一緒に住んでおりました。村でいろいろ催しがある場合、ほんとうは私も行きたいのですが、お姑さんも小姑も出かけてしまう。そうするとだれも家の留守番する人がない。小姑なんか、姉さんが留守番してくれるからとかにも私が留守番するのがあたりまえのようなことをいう。ずいぶん長い間、これが嫁というものだと思って暮らしてきました。お嫁さんがほんとうにおはから自分でご飯がよそえるということとは

長年たたなければできない。こんなことはほんとうにいやなことだと思ふのです。

渡辺 家庭内の個人の問題の中から、結局嫁の立場が出てきます。仁平さんの話もそうだし、征矢さんの話もそうです。一体これはどうしたらいいんでしょう。夫の理解ということはあるんですね。

仁平 親子、姑の關係よりも、夫婦の關係を、もう少し重く見ていただきたいのです。

渡辺 そういうようにいろいろな古い仕きたりで、身分關係のはっきりしている中へ嫁さんが入って行って、人格を無視されている場合、だれか嫁さんを引き上げてくれる者がなければならぬ。

征矢 やはりそれは夫になりますね。夫が嫁さんをおかいいそうだと思つて陰で慰めるのではなく、もうちょっと、堂々と両親や家族のものに上手に話しかけて、努力していただきたいと思うのですけれども、大てい家庭は、お前は黙つてろ、黙つてろといつて、かわいそうだけれども、押えている。そうすることによって家の平和が保たれているという状態が多いのです。これはだんなさんが、強いきちんとした態度で両方を立てて、うまくそのあいだの調停をすれば、それが一番いいのではないかと思います。

山本 地方会議の分科会のように、私が男の人にしかか

りしていただきたいと言いましたら、年配の人が男の人はそういう家庭的な小さいことにこだわることはないというので、男の人は無責任だと思ったのですけれど……。

森下 地方会議のとき、リーダーの先生が親たちと別居しろ、それが理想だとおっしゃったのですが、私どもの場合、別居ができたならこんな悩みはないと思った。農村の場合、別居することとは困難だと思うのです。

芳野 私は東京に生まれて、いまのような農村に嫁いできて、農業を戦時中をはじめ、姑と一緒にやっていたから、その苦しみたるや一口に言えない。こんなところ何とかして逃げ出したいと思いましたが、夫も無理してくれないでやっていたわけです。別居もできない、夫も理解してくれない、みずから向上しようという努力もしないのかの婦人を、少しでも自覚させ、仕合せにするためには、やはり女同志の集まりの力によるよりほかはないと思って、婦人会をこしらえました。私どもは役員をまわり持ちにするという原始的な形をとっているのですが、部落のみんなに役がまわることになっていて、だれも文句がはいない。いままで出られなかったお嫁さんでも婦人会の役がまわってきたということで、出られるようになるわけです。それで一年なり、二年なり勤め上げると、その人の意識も、もの考え方まで変わってきます。いままでベシヤンコになっていたのを、何

鈴木 私のほうは小さい部落ですが、生活改善グループを二十四人ばかりで作りましたが、そこにはだれが出ていない。時によってはお姑さんとお嫁さんと二人でそろって出てきてもいい。その家の自由ということにしましたら、大体交代に出てきます。ずいぶん意識は低いところですが、持っていく方で、そういうふうにおだやかにいく場合もあります。

森下 嫁さんの立場の人は、保育園がPTAの行事にはいばって出て行きます。学校からきて下さいという通知がくるから、喜んで公然と出られる。嫁さんがPTAに行くので、大い婦人会はお姑が行くのです。

元岡 しかし、あんまり年とった人がきても感覚が全然違うのです。私なんかの場合は、若い人たちに多く来てもらいたいように思うのですね。

森下 ほんとうはそれがいいのですよ。

元岡 二つの会を作れば問題ないわけです。

征矢 老人学級というものを作りまして、老人をそこへ出してやって、外出はいいものだから、気持ちに若さとはり気を持たせてあげると、自然嫁さんの立場も理解してくれるようになります。一応まずお姑さんたちの道を聞いておいて、自分たちもそこに出て行くというふうにしていくのが

とかして自分で自由を得ようという努力を始めるようになってきております。

元岡 嫁さん一つ婦人会に出させるようにしようということになった。婦人会に出てきているお姑さんの名前を全部嫁さんの名前に切りかえたのです。それが隣の家もそうだし、みんなそうだから自分の家も嫁を会にやらなければみんなから文句言われるから、仕方ない嫁を出そうということになって、不服のうちにも、とにかく若い者を出すようになった。そして姑同士が話し合って、自分たちも姑の会を開こうというふうなところまできたのです。

渡辺慶子 姑の名を変えないで、嫁さんの会を別に作ったほうが円満にいったのではないのでしょうか。

元岡 それが両方だと出られないのです。

征矢 うちのほうでもうるさい人が出てくると、あの人が出たので困る、一つ嫁さんを出して、あの人を引っ込めようとか、それからまた逆にあそこ嫁さんは気に食わないから、いつまでもお姑さんが出るようにとか、いろいろ問題があるのです。

土壘 私の町では、年寄りには仏教婦人会に入っていて、若い人は婦人会ですね。それで会同志の摩擦というものはありませんが、やはりよくしようというようなせり合いがちょいちょい見受けられる。

いいと思う。

渡辺慶子 私のほうはお嫁さんたちで、ヒマワリ会という会を作り、行事計画等は、婦人会の計画とか合わないようにならなければいい。婦人会が町内に十二団体あるのですが、その中の半分以上には若妻会ができています。年に四回ぐらい町内全部の婦人の集いを、公民館の主催でしますが、そこへ方々から若い嫁さんも集まって、いろんな要求が出されます。月に二百円なりなんなり、小遣いがほしいというふうな声も出されます。そういう声を聞いて、うちの嫁にも、いくらか小遣いをやるようにしようというふうに、だんだんそういう声が出てくるように思っています。

山本 皆さんのところでは、若いお嫁さんがそういう若妻会とか、いろんな会合に出ることをきくらうようなことはないのでしょうか、私のところではお姑がきくらうので、自然とそういうところに出ないようになっていくのです。

渡辺慶子 あそこ嫁さんもやるから、うちでもやらなければならぬということに自然になってきます。やはり仲間意識ですか。

森下 婦人会一本にしぼって、婦人会のほうはまあまあ大いにお婆あさんが出る。PTA、保育園のことにはお母さんたちが出るという行き方ですね。けっしていいとか悪

とかいいうのでなく、私どもの現状はそうです。

山本 若い人たちが集まったならば、姑、年寄りのことをうわさするといふようにとって、嫁が外出することをきこうわけなのです。

渡辺 悪口を言われると思ってね。そんなふうでなかなかまだまだなのです。自分らの家族集団自体も満足にいてないという、そういう状態なのです。まだ個人が家族の中でさえも確立されてない。ですからそこには自由に出られない、自由が持てないという状態があるわけです。いまお話を聞いていると、姑は姑の立場、嫁は若妻会、これは必ずしも若妻とは限らないでしょうけれども、年寄妻もいるでしょうけれども、妻だけの会を持つ、こんなふうに年齢などでわかれていきますね。これも一つの社会の持つ役割の分担だろうと思うのです。それからそういうことを考えていくと、家族、家庭という中でも、もう少しみんながはっきりした役割を持ってみたいらどうか。それで姑はしゃもじという役割を持っている。これはいいですね、お給仕してもらえんだから、こんないいことないじゃないですか。(笑聲)そこでそういうところで、みんなどんな役割を持っているのか。それを一つ問題にしてみようではありませんか。

征矢 婦人は家族全部を社会に送り出して、愛いなく働

かすように、うちの中をうまくやっていくという、そういう働きをもっている。

渡辺 うまくやっていく役割ね。

元岡 私のほうの場合には、お嫁さんは労働力、品物ですね。人格を認めてもらうのではなくて、手が足りないからという、それだけの話なのです。

山本 ほんとうにそうです。嫁さんをもちうるとき、労働力としてもらっているような気がするのです。

渡辺 農村の婦人の別名を申し上げましょうか、乳役兼用無角牛、角のない牛ですね。そういう役割を担わされているのが、一般の農村婦人じゃないかという話があるんですが、どうですか。子供を養うのに、おっぱいを出すんです。それから田んぼで働く……。

鈴木 若い人たちのあいだで、農家へ嫁にいこうという人が少ないという問題が出たとき、農業は重労働だし、そういうことが極端にいやだということを力説した。

渡辺 これは、婦人の地位は家庭内においてさえも高められていないということに、いつの間にか問題がきてしまったようですね。

征矢 乳役兼用無角牛という名前を取り去る一番適役は夫だと思ふのです。

渡辺 そこで夫の役割が出てくるわけです。

仁平 その夫がお嫁さんをお願いがしろにして、姑を立てるということになるので妻が認められないのです。

征矢 いままで婦人会を開いたりして、非常に社会に対して理解を深めてきた部落でも、それを家庭にまで浸透させることができないのは夫が原因だということが、毎年の問題で出ているらしいのですが、なかなか解決されないですよ。

渡辺 とこがが一昨日のお話だと、皆さんは非常に夫婦が理解し合っているというように……。(笑聲)

中田 反対の場合もあるのですよ。四、五日前に青年と主婦の研修会がありましたとき、農家のお嫁さんになることを、このごろみんなきらいけれども、ほんとうですかと聞いたら、そこにいた娘さん達は、ほとんどの方が、私は農家の長男のお嫁さんになりたいというのです。理由は、このごろの姑はとって理解があるから、農家の長男なら嫁に行きたい、次男、三男はいやだというのです。

仁平 私も青年と一緒に話しましたけれども、その部落は非常に青年たちが民主的なのです。そのときお話ししたら娘さんたちが、農家に嫁に行きたくないかと言ったので、みんな私は農家にいってもかまわないと言っている。この部落では女の人を認めてくれる青年が集まっているから、ここの娘さんは農家に嫁にいてもいいというの

だなど深く感じました。

森下 反対の例をあげますと、若い人たちは、女はするいということをやっています。どうしてするいかと聞くと、このごろはいろいろな機械を農家では入れて、たくさん使っているが、脱穀機とか耕運機などにしても、それが働いている最中故障を起すと、嫁さんは、いままでも機械をいじって働いていたのに、機械がとまった瞬間にやめてしまふ。機械をなおすのは別な仕事のように思っていて、一人でわら運んだり、たばねたりして、機械のそばへ寄ってこない、新しい物にとりつこうとする気が全然ないというのです。わらなんてあとで一緒に運べばいいのだから、どうしてそこが動かないかということと一緒に見ればいいではないかという。一番問題は女の人が生産をする場合に、ただ自分の労働力に頼るという考え方であることです。だから田舎えあれば労働がやれる、男は機械でも何でも使えりけれども、女はからださえあれば労働がやれると考えている。私は、女もやっぱり男と同じに機械に対しての技術というものを、身につけたいと思うのです。

#### 集団における個人の役割

渡辺 そうすると、人格的な理解とその愛情による結びつきは、一昨日の話でよくわかった。しかし、それだけで

はない。それと同時に夫の仕事への理解、また夫は妻の仕事への理解、これも必要なのですね。それがないとただ人格的に認め合ったって、南軍が合わない。なぜなら、われわれの毎日の生活はきわめて具体的だからです。森下さんはそういうことを問題として出してくれたと思うのですが、皆さん自身のなかで、あるいは見たり聞いたりした周囲の中から、この問題をどんなふうにお感じになっていますか。

芳野 その通りです。それを常識化するためには、まわりがもっと進歩しなければならぬ。というのは、私の村の女子青年団の役員をした娘さんが、とてもはっきりしていて、ものをよく考え、言うべきことはどんどん言っていて、私たちから見ると、とても理想的な娘さんで、一人娘だからきつという養子さんがくるだろうと思っていた。あちこちから話がかかるが、なかなかうまくいかない。それはあの娘さんが非常にはっきりしていて、自主性があるということと敬遠されていまだに結婚していない。まわりがそれにバランスがとれない場合には、それが通らないということを感じている。

仁平 農村においては、女の人の仕事というものには適している仕事と、適さない仕事とがあるのではないか。適する仕事をさせて、女の力を十分に出せる場を見つける、

研究が盛んです。その仕事は自分の仕事だという張りあいを持って、自主性を持つてと思うのです。

森下 仁平さんのおっしゃったことで、クワを入れる仕事は男に向いているとおっしゃったのでしう。

仁平 クワというばかりでなく、男の仕事と女の仕事は、農業にもどこか違いがあって、適する仕事がある。女にあるのではないかと思うのです。体力的にもあるでしょうし、野菜とか果樹とか、女に適した仕事がある。そっちをやったならば認めてもらえるのではないですか。

森下 野菜とか果樹はものすごく技術があるので、必ずしも女がやったら男に勝つという自信はないですね。ある程度どこかの場所では技術を高めるといことが必要ではないか。

征矢 耕転機を使う技術は、男を負かす嫁さんがいくらでもいるのです。仁平さんのおっしゃるような気分は、大體なくなってきました。

水木 兼業農家の主婦は、自分が責任を持ってしなければならぬ。だから技術の面でも、機械をいじることでもよく研究するのです。やはり情熱を持つのです。

渡辺 兼業農家でできることが、専業農家になせできないか。征矢さんのお話になったように、まったくきか立ちした勉強の仕方を、農村の若い娘さんたちがやっている。

そうすれば十分女の価値が発揮できる。クワを入れる仕事などでは、力においては私たちは男に劣る。しかし果樹とか、野菜には女の力を十分發揮して、立派な成績をあげていったらいいのではないか。

征矢 文化の向上ということによって、衣服にしても、生活の程度にしても、だんだん都会と農村の差がなくなってきました。花嫁修業もやはり同じです。農家へ嫁いだお嫁さんも、都会のサラリーマンの娘さんと全く同じ修業をしてきています。お花を生ける、お茶を習うとかで、仕度もやはりそういうふうです。そういう意識で嫁ぐことが、深い理解を持つならばそれにふさわしい準備が必要だし、自分もしっかりした立場を占めるための勉強を、花嫁修業時代にしておかなければならないのではないかと。技術を身につけて、そこでみっちり勉強すること、そうやっていった場合、その家庭の中でも、嫁さんの立場というものが認められると思うのです。そこで初めてしっかりした家庭ができる。

水木 私たちの方は兼業農家が多いせいか、主人が勤めを持っていて、畑の仕事は嫁さんの分担になってしまっています。お嫁さんは田を少しでもよく作るために、農業経営の

生活に即しない、しかもそれは自主性のある勉強じゃない。みんながやっているから、都会でやっているからというのでやっている。村の青年学校の女子たちは、何をいっただい勉強の課題にしているのか、ちっとも農業に関する技術を勉強してない。ミシンと生花、茶の湯、こんなものはかりです。みんなのまわりに青年学校があまりでしう。仁平さんは生花の先生で、農村の娘さんに一生懸命教えていらっしやるから感想はありますが、もっともつとわれわれのする勉強があるのにそういうことばかりやっている点で……。

仁平 私、生花の免許持っているのです。それを教えているにすぎなくて、積極的に生花だけはと書いて、主張しているわけではございません。

渡辺 いや、そうじゃなくて、一般の娘さんがそういう勉強ばかりしている傾向が多いので、それをあなたはどういうふうにふだんお感じになっていますか。

仁平 いなかの娘さんは農家をきらうという傾向もありますけれども、お母さん方が自分の娘を町のサラリーマンにやりたいということが大きな原因なのです。それで洋服を習わせ、お花を習わす。しかし自分の長男には農業のできる嫁さんをもらいたいと考えている。娘さん自身は、非常に都府にいい青年がある場合は、農家にいってもいいと

いう気持ちをもっておりますけれども、農業ができないのに、農家にいったら困るから、農家にいかないのだからという人もあります。

土室 女の子ばかりのことが出てますけれども、男性もそうです。農業学校に入らないで、普通高等学校に進む。私の村は農家が多いから先生が困るのです。君は農業学校へ行くのがいいといつても、絶対いらないのですね。

芳野 同じ例ですけれども、どんなさんが奥さんにまかせないから、いつになっても自主性がなく、よりかかっているからまかせられないという悪循環が行われている。だからまかせてしまえば、必ずそれだけの教養は積むと思うのです。私はいまの若い世代の方にはそういうのをいいほうの循環にまわしてもらいたいと思います。若い男子の方が、青年学校やグループで勉強の計画を話し合うときは、農作業的なことを希望しない、農事研究ということをやがるのです。それは一日中畑で泥と取り組んでいて、夜になって青年学校でもまた土壌だ、稲だ、水ぎだというのはやりきれない。夜だけでも進みたい、それが一つ。もう一つはたとえここで新しい技術を身につけてもおやじががんばっていてもまかせてくれないからおもしろくない。技術を得るだけで実行できないからという、この二つの理由で、男子でさえも、真剣に取り組もうとしない。

征矢 文化的農村生活が理想とされているから、うちのほうの場合ですと大きい農家の長男ほど農学校に入る。零細農家の長男は普通の高校にすすんで職業につこうとするのです。

中田 私のほうはほとんど農学校に行きます。町ぐるみの農学校ですから、農学校に対してそうした気持は持たないです。卒業すれば機械を動かしてやります。女の子を集めて機械の講義をする人がいないから、女の子の勉強する場所がないのです。しかし、畑に行ったらわからないうちから、機械に取りついて動かしてみたらきつと動かせます。

征矢 学校へ行かなくても、いろいろな先生の農業の本があるでしょう。女の子達は本をよく勉強しているのです。しかし、それを教えたくない。自分が勉強していることを外に出すまいという傾向がある。また一方、女の子は男が相談してくれないというが、男は相談してもだめだと思ふから相談しないのです。女の子も勉強が必要だと思ふ。

元岡 それはそうですけれども、社会がそういうことを許さないのです。

森下 種まきの技術などどうやったらいかにということとは、みんなかくし合っている。こういうふうによればい

山本 農家の女性も技術を身につけたいけれども、つけられないという場合も多いです。一日中男の人と同じように外で働いて、家庭に帰ってからも育児とか炊事とか、いろいろ用事があって時間がない。嫁さんの場合はことにそうです。

渡辺慶子 嫁にいく前にもないのでしょうか。

山本 その前には、私たちのところでも洋裁とかお花とか、きれいなことばかり習っているような気がします。私たち若い者がそれは反省しなければいけないと思います。元岡 先ほど森下さんが、女も技術面を研究するようにといわれたのですが、私どものほうでは機械を購入する機会、奥さんに全然相談しないで買って来てしまします。それを得意になって動かして、故障が起きて奥さんがそばへ寄って行っても、女は向うに行ってるとはねられてしまう。女に対する教育熱がゼロなんです。

鈴木 私のもう高等学校に入る場合、農家の子ども全部普通科に入る。はずれた者が農業科に入るといふので、農業科を出た子供は非常な劣等感を持つ。それで農民そのものが劣等感を持っています。農業科の者のほうが農業のことをについてはうんと勉強しているのですが、それが劣等感を持っていて、生かそうとしない、農民根性というのでしょ

いということば教えないで、自分だけがいいことをしようとする。

渡辺 いま技術のお話が出て、農村では女の人も農業のそうした耕作技術、あるいはその他の経営の技術も一応身につけておくことのほうがいいということでしたけれども、そういう農業生産の技術ばかりでないとと思うのです。農家の家庭の中だけを考えても、もっとも女の人、お母さん方がする仕事がある。家の生活の切りもりの技術、これを身につけただけでも、ぼくはもっと農家の婦人の地位が高まるんじゃないかと思う。去年の会議で話があったのですが、青森県の田中さんでした。あの人はさいふを持たされなかった。ところが近所の仲間と家計簿をつけたグループを作った。そして話し合いを持ちまわりでやった。自分のうちでやるときは、なるべくお父さんお母さんに聞えるようにみんな話しかけた。そしてなるほど家計簿はそういうものかということ、だんだんと年寄りたちの耳にふすま越しに聞こえさせて、とうとうしさいには家計簿を作ることを許された。やがてさいふも握られるというところまでいったという、こういう話が出ておりましたが、そんなふうには農業技術ばかりでなく、家計の切りもり、運営の仕方をもう少し科学的な技術、合理的な技術として身につけられたら、自分自身の自主性も高ま

るし、同時に家の中で低くおさえられている婦人の地位も高まるんじゃないかと思うのです。技術というものは非常に合理的なものです。常に最短距離を行こうとするものです。水が高いところから低いところへ最短距離を求めて流れる。これは自然法則ですが、その自然法則のままに支配されないで、人間の方でそれをコントロールして、自然法則を使って生み出しているのが技術ですね。そういう非常に自然法則的な合理性を技術自体が持っている。それを身につけることは、自分の不合理な考え方を、暮しぶりを合理的に改めるのに役立ちます。技術というものを、私はそういう意味で高めたい。

それで話を元に戻しましょう。そういうふうには、家族集団の中でも一人一人役割をもてば、それを何となくして効果的に生かそうという気持ちが、ひとりでも出てくるわけですね。森下さんのお話からも出たとおりです。そういう役割を持つためには、生活の土台になっている農業経営というもの、夫と同じ立場でよく理解していなければ、なかなか役割まで持つことができないということですね。それで、一昨日の話にもう一べん戻るわけですが、早に人格的な認め合い、愛情、それではまだ十分なものがある。家のいろいろな仕組み、仕事、そういうものを合理的に組みなおして、婦人の地位を男性と平等な立場においてやって

それはいったいどうなくてはならないかということになる。一昨日から今朝にかけての話合いで、私たちの見てきた外側の集団は、これが必ずしも集団に入っている個人の自主性を生かすようにはできていないということが出ましたね。なぜそれらは個人の自主性を生かしていないのか、さっきのニワトリと卵とどっちが先かということと同じことだということになります。それにしても、外側で若妻会を作り、婦人会を作った、そこで勉強していくことによって、家族集団自体が高まっていくということが多少ともできたとなると、それなら若妻会、PTA、婦人会というのは、現実にある家族集団よりも、もう少し民主的なものらしい。もちろん比較的によさう。ところでそういう集団は、自然にできている集団ではなくて、みんなが意識して作り出した、作り上げている集団のわけですね。だからそこでは何か一つ、一応その集団が理想とする目的をはっきり打ち出している。そして、どうしたらそれを求めることができるか、なんとかしてその目的を達成したいと活動しているわけですね。

ところでその集団は、集団本来の目的を生かすようなあり方を正しく出しているからそうなるのか、あるいはその構成員である一人一人の個人が、自覚して進んでいるからその集団が少しでも効果をあげているのか、そのどちらな

いこうとするためには、男性の仕事それから家の経営の問題、そういうことにも婦人は十分な理解を持たなければならぬ。結局、まず家族集団の根本である夫婦の結びつきというものが、そこまですべて初めてほんとうの結びつきになるんじゃないか。そしてつぎには、先ほど千葉の芳野さんのお話に出たような、ものが作り上げられていくためには、同時にそれを取りかこんでいるまわりが問題だということになりますね。家族集団は一番小さい集団ですが、いまいろいろ問題にされていることは、家族集団が、内に閉じこもろうとすることから起っている問題ですね。それを是正していくには、家族集団の外側で、家族の一人一人が社会的な結びつき、社会的な連帯をしていく中で、家族集団の在り方そのものを是正していかなければならない。そこで問題は家族集団の外まわりの集団に移っていくことになる。皆さんのいままでの話からもこのことは十分理解ができたんです。たとえば若妻会を作る、婦人会を作る、PTA活動をしよう。そうやって皆さんは外側での結びつきというものを非常に大事に考えている。それは意識しなくても、そういうことによって自分の小さな家族集団もおのずからよくなっていくということは、先ほど森下さんのお話でだいぶ出ましたね。そこで外側の集団が、そんなふうに家族集団にいろいろな影響を与えるとすると、そ

のかを、一つ探りあてていただきたいと思います。家族の一員が、その家庭をなんとかよくしようとしてもなかなかよくならない、そういう家族集団の場合でも、家族が外の集団の中で、いろいろな社会活動をしているうちに、そこで身についたものが家族集団に持ち帰られて、家族集団自体がよくなっていく。PTA、婦人会にしても、その中で個人がいくらその集団をよくしようとかあがいても、あがけばあがくほど苦しくなる。結局、脱落するか、あるいはその集団からはじき出されるかしなければならぬ。個人の努力だけではなかなか歯がたたない。そこで一応の手がかりとして、外から客観的に集団のあり方を考えてみたい。個人の自主性を生かせる集団はどういう姿でなければならぬか。二日間におわって集団の悪口をいってきかた、そういう悪口なんか言えない集団はどんな姿なのか。それを考えていけば、集団の組織、運営の仕方が、はたして集団の一人一人の自主性を生かすようにできているかどうか。その点で皆さんの婦人会は民主的ですか。

#### 民主的な集団の組織

元岡 残念ながらそういうふうにはできていないから、私たちは村八分にされているのです。

鈴木 私の部落は町村合併をする前は、村の一番はずれの隅にあって、四十戸ばかりの山の中の農家だったのです。終戦後婦人会ができたときに、あまり非の中の蛙になつてしまふというわけで、四十戸全員が参加しました。四年ばかりはその状態がつづき、会長さんの命令に従つて、順調にやってきたけれども、農家は特別忙しいし、だんだん自分の生活が大事になつてしまつて、わざわざ出て行つたりするのが負担になつてきた。それというのは、婦人会ではそれほど自立した仕事をしていない。生産面に関係する仕事をしていなかったことも不満の原因ですけれど、自分の生活も忙しいし、経済的にも貧乏である。部落で役員になった人が、ひまをつぶして出て行くのはいやだということ、役員になった人からだんだん抜けて十八名になつてしまつたのです。そうすると抜けた人が、会にはいない人を、役にも立たない婦人会にはいない、まだあんなことやつていてというふうなことをいって、抜けた人とはいつている人の間に摩擦が出てくる。婦人会があるために、部落の仲よしがけんかしてもつまらぬし、一応この辺でやめましようというわけで、みんなが一応やめた。そしてそのまゝの状態でいまして、ちやうど町村合併になつた。そこで新しい統合中学も建ち、商人もはいつてくるというわけで、全然勉強してこない女はひげ目を感じ、

くるものは全然なくて、奥達からの通達事項と映画の潮引券を配るくらいが婦人会の仕事になつています。私は別に役員はしていませんから、それに対する批判はできない立場なのですが、でも、グループ側でも取り入れて、何かしらいいのではないかと思つて中央に來ました。ついでにいろいろなことを皆さんから學んで行こうと思つています。

渡辺 水木さんの問題は……。

水木 私たちの部落は四十九軒ですけれども、ほとんどの人たちが婦人会員なのです。それで生活改善グループを作つたらと、市の普及員が働きかけまして、たびたび作るか作らないかという会合を持ったのです。話し合うたびに五十人ではちょっと多いということで、どうしても二つか三つ、よくいえば四つにわかれてもらいたい、しかし今まで一つ部落で活動していたのに、四つにもわかれてしまつと、部落の円満を欠くという声が一部の有力者から出たために、採決をとつた。その結果多数決で小グループを作らないということになつたけれども、それでは生活改良普及員の働きかけに対して申しわけないから、体面上作つたというにして、部落全部で一つのグループという名前になつたのです。しかし、やはりほんとうの話し合いはできなくて、作つたときも、作らなかつた以前とちつとも変ら

ず身が狭くなつて、このままでしょうがないがまた婦人会にいてもらうのも何だかへんだし、生産に関係したことを自分たちで勉強しようではないかというわけで、幸いに生活改良普及員の方がきて下さつたので、その人のお話を聞いて、部落の人が四十人集まつて話し合った結果、二十四人のグループを作りました。これにはいい人はいつてもはいつていい。いやな人はいつやめても仕方がない。勉強していきたい人だけでやていきましよう、ということをやっています。ほんとうは全部に呼びかけて入れようと今も努力してますけれども……。

渡辺 慶子 私の場合も、脱落する人が出てきたことの原因は、私たちの会があまりふえて四支部二百人近くになつたのを、一つの会にしていこうとしたところに無理があつたのではないかと、反省しています。

渡辺 だけれども、とにかく地域の婦人たちのための婦人会なんだから、そこから一人でも漏れていくことは……。渡辺 慶子 おいていくと、その人たちがいつまでも浮び上らないから、みんな連れて行きたいのです。それで私、とても悩んでいるのです。

土壘 私の町の婦人会は六百ぐらいの会員があつて、会長さんが七、八年続いております。このごろは、婦人会の幹部の方のことは知りませんが、私たちが下のほうに

ない。婦人会即生活改善グループになつた。それで不満がいろいろあつて、反対をする、今度は平和を乱すということであつて、反対意見は消えてしまふ。全然新しいことをするということをしきうものですから、何の活動もしないで今に至つております。

渡辺 鈴木さんと水木さんと反対の立場ですね。結局、みなさんの話では全部をいつも一緒にそろえてやつていこうということは無理だということですね。

仁平 私の方では、二百何十人の地域婦人会ですけれども、その中から二十何人の方が「ともしび会」というのを別に作つたのです。それが目ざましく活動したために、婦人会から非常にそねまれました。「ともしび会」の男性は、婦人会を脱退して会長を一人立てるといふのですが、女の人にはわかれられないのです。なぜなら村では学校が一つなので、PTA、運動会などの子供の問題なんか、力を一つに合せなければできない、今わかれてしまつたら子供の教育のためにいけないからわかれられない。そういうケースもございます。

鈴木 今のお話で、会の目的を考えたときに、別になるとそれで全然離れてしまふというふうなことになるのですか。

仁平 私の考えでは、婦人会も「ともしび会」も同じ目

的なのですけれども、片ほうの大きいところでは目的を達しようとしても達せられない。仕方がないから、私の方で目的を達しようというので、「ともしび会」ができたわけです。

渡辺慶子 私のはうは、先には五支部だったのが、いま四支部になったのです。それは一つの支部がずっと離れていまして、会合のたび小学校に集まるのですが、来るのに一里以上かかるのです。それで、婦人会で何かやりましても、出てくる人は、その年の支部長、班長だけが都合して出て来るというだけで、とても会員のためにはならない。その支部の人たちが大へん熱心でしたから、この方たちなら大丈夫、小さい会にしてもやっていけると思いまして、三十二年度からわかれて小さい会を作ったかどうかとすすめ、五十人ばかりの小さい婦人会ができたのです。そうしましたら、その分教場を中心にしてとてもみんな熱心に一生懸命やるようになりました。やりやすく整えてやればいいのだということ、一つ体験したのです。

渡辺 いろいろ問題が出ましたね。やりやすさということですね。最初から困難な障害が起こりそうなことが予測されるような集団を作ると、そこから問題が出て、途中で挫折してしまうわけですね。活動しやすい集団ということが、大事ですね。

中田 先ほどから皆さんのお話を聞きしていましたが、婦人会を小さくするとか、大きくするとか、婦人会の幹部の方が婦人会を作るように聞えるのです。私はそうではなく、やはり会員一人一人の意見がほんとうに会の中でも自由に発露されて、会が大きくなったたり小さくなったたりするのでないかと思うのです。

佐藤 地域婦人会の実態は、終戦後国防婦人会の看板を塗りかえて、網羅的だったのです。

渡辺 実は民主的な自主的な団体だといいたが、上から作ったものでしょう。地域婦人会というものがどこから作られてしまって、みんなそこに入れられてしまったという形なんですね。

佐藤 十年間の間に、自主的な考えのある方は、それに入っていることには耐えられなくなり、この結果二分されたしまった。

中田 私たちのほうも婦人会で小さいグループを作って一年間やったところがありますが、割に発展しないところがあるのです。

渡辺 それじゃ婦人会をどんなふうにしたら民主的な会になるか、つまり会員個人個人の自主性が生かされる会になるか、それを考えてみようじゃないですか。

青山 一昨年まで婦人会の会長は国防婦人会時代からの

会長だった。いわゆる幹部の婦人会であって、一般の人が知るところは、大体敬老会の行事だけという会だったらしいのです。それがみんな不満でありながら口に出して言えない。また幹部が会長の側近となり、会長は思うようにやれるわけですが、一部の会員がそれに不満を持ちまして、これではどうしても発展はしないし、何とかしてこれをぶちこわさなければならぬと、十人ばかりの有志が集まりまして、いざこわそうというときになると、土地の人はやはり会長への義理などいろいろの理由で表面的にはやれない。そこで会長の息子や親友たちが、会長と「ひくべきだ」「いやひかない」と争ったらしいのです。そしてけんかわかれのままで新しい会を作った。そしてみんなで投票の結果、大多数をもって今の会長にきまった。その方は前の会長とのいきさつもあるので、ずいぶん辞退されたけれども、結局みんなから支持されて引受けた。そして組織の作り方、運営の仕方、月別の行事なども、全部会員に相談して、千人あまりありますから、皆さんにはかるわけにいきませんが、十人ずつグループの代表が集まっていたいでやっています。ずいぶんうまくいっていると思うのです。また町の政治に婦人団体が首を突っ込んだらいけないといわれますけれども、町の一員として町の政治も眺めなければならぬからというので、町議会が持たれる場合に

は、必ず各部落から一人ずつ、婦人会の一員として出て行って、議員さんの発言を聞いたり、わからない点は質問をして、明るい町作りに努力しています。やはりいい婦人会を作ろうとすれば、だれか、礎石になる人がなくてはいいのではないかと気がします。

渡辺慶子 どこでも、会長というのは長い期間なっている……、という話をよく聞くのですが、私はやはり会長自身がよく反省して、その弊害を防ぐべきだと思います。自分がいるうちに、次のリーダーになるような人を育てておかなければならないと思います。

水木 多数決はいい場合はいけれども、部落の婦人会における多数決は、まだ問題だと思います。多数決によって何事もきめるとするのは、民主的なルールでよいが、よく話し合ってから多数決にしていた方がいい。

#### 自由な話し合い

渡辺 いかにしてみんなの意見がおたがいに伝わるかという事です。つまりあの人はこう思っているんだということを、お互いによくわかればいいわけだ。それをわからせるにはどうしたらいいでしょうか。たとえば千人もの会で話し合えますか。つまり、自分の意見なり何なりを自由に出せるというのは、小さいグループほどいいわ



けですね。そういう小グループを作るについて、鈴木さんは非常に悩んだといわれるがそれはなぜですか。

渡辺 慶子 小グループの中にもリーダーがなければならぬ。そのリーダーが問題だと思っています。

鈴木 私たちの場合は、やはり村の人みんなが入っている婦人会から、自分たちだけが脱れるというのは、自分たちに対する恩恵……。あれは異端者だと思われはしないかという事など非常に強い気持ちがいふあった。

渡辺 つまり、集団の中での分派行動と見られることですね。小グループを作ることと、分派行動は本質的に違うと思うのですけれども……。

芳野 すでに目的が違っている分派行動は小グループと違う。小グループは母集団と目的は一つで、その中から代表が出て行って、全体の話し合いが持てるのだから全然違います。

渡辺 皆さんの婦人会はグループができていて、それが総括されている婦人会ですか。

佐藤 私たちのほうは一年に一ぺん総会をやる。そのとき予算も立てないで使った金の決算報告をやる。突っ込むと金に汚ないと言われる。物を寄付する婦人会でして、婦人会員自体のことを考えるより、小学校に何を寄付し

という意識を持つ婦人会にしなければいけないと大いに反省した。みんなが婦人会員という意識を持つには、みんなが共同の仕事をすればいいのだ、それは何だろと考えたわけです。非常に義侠が盛んになっているためにハエがふえ、疫病が非常に出た。それで少しでも環境をよくするために、ハエ退治をしようではないか、これは一軒や二軒でもない家があらためてから、みんなですうというので、みんなの仕事になったために、その環境衛生活動というものを、婦人会の仕事として取り入れた。このことがまああ婦人会という意識を強める一つのきっかけになった。そして今まで固定していた役員もだれでもできるのだということになり、一人二人ずつ順番に持ちまわりということに押し切ったわけです。六つのグループとも、命令したわけでもないけれども、あつちでもそういうふうになったから、こつちもそうしようというので、全部が持ちまわり役員になってしまいました。初めは特権階級でなければできないと思っていた人も、やってみればできるといふ自信がついた。渡辺さんのほうも、リーダーがいらないなど言っていないで、どなたかやればできるのだというようなこと、踏み切らして上げたらと思いますね。

渡辺 慶子 支部長や班長はまわり持ちでやっておりますが、十年前にくらべればずっとよくなっているのです。

たということです。私もそこから入って来て、役員にされました。それでこれではならないと思つて、部落を基盤としたグループでつなげた地域婦人会ということを考えましたが、なかなかとりいれてくれない。分派行動ととられて、平和を乱すといわれる。小グループを作つてやることが平和を乱すと考えられるのです。

芳野 村婦会はないしそれに近い婦人会というものは、大抵戦後上からの力でできたものですから、自主性というものが無い状態だと思うのです。渡辺さんのほうの婦人会も大体それに近い婦人会ですね。十年の間にそれではいけないと考える人も出て、そういう人々が一つになっていくわけですね。その場合、そういう人を分派行動と疑う前に、全部の方が小グループにわかれて、めいめいの意見が、直接会の中央に反映できるように組織に切りかえるべきだと思うのです。そうするとリーダーがいなくても困るという心配が出るかもしれませんが……。ちよつと私どもの例を申しますと、百二十戸が大体六つのグループにわかれていて。グループの中でリーダーになるような人が役員になっている。二十軒のうちでリーダーになれるような人は農村では一人か二人しかいないから固定してしまつて、いわゆる役員は婦人会になって、会員は一年一回の総会に出るだけになってしまった。みんなが婦人会員

佐藤 七年も八年もやっていると辛いから役員になり手がないというのならないですけれども、私のほうではやっていると役を人に譲ることが辛くて(笑)やめて下らないのですよ。そういう人たちが権になつていて、会員の人たちの気持ちを汲んでくれない。部落の集会を聞いてくれない。それで七年も八年もすがりついている。

渡辺 話を軌道にのせまして、小グループはみんなの自由な発言ができて、意思をお互いに理解し合うのに非常にいいということがはっきりしました。つまり自主的に発言ができる。だれの思惑や、だれの考えとかいうことに気兼ねすることなく、自分の意思が発表できる。小グループはいいということになったのですが、そこで芳野さんは役員の持ちまわりということを問題にされました。これはどうなんでしょう。みんなに役割を与えて、そしてそこにいる会場で責任を持った仕事をやっていくしつけをするようにすればいいというわけですか。

芳野 平会員の間は意識を持とうにも持つ機会がない。ところが力があろうとあるまいと、自分が二十人のリーダーの座にすわられますと、否応なしにその意識を持つようにならざるを得なくなってしまう。

渡辺 話し合いの場所での司会者ですね。

渡辺 慶子 私たちのほうも、それはやっていますけれど

も、ほんとうの意味のリーダーが少なくて困るということ  
です。

土屋 今おっしゃったのは、リーダーが小使さんの役で  
す。たとえば会長さんが七、八年続けていらっしゃる。そ  
の方をやめてくれとはとてもいえない。無理やりにやめさ  
したとしても、その方の圧力を感じて、かわりに会長にな  
るといふ方はとてもない。広島の方はそれをうまくおやり  
になりましたけれども、私どものような因習的な町は引き  
受け手がないわけです。

青山 今でも圧力は残っています。問題は起きているが  
取り上げて仕方がありません。

土屋 それだけに踏み切れればいいわけです。

芳野 二十人ずつの大グループがありますが、その中で  
やはりほんとうのリーダーの資格を持った人もいるわけ  
です。会長とあと三人副会長があります。その副会長の中  
の誰かが次の会長の椅子につく。要するに力とか特権階級  
が会長の椅子にすわるというのをなくさなければ……。

渡辺慶子 私さっき申しましたように、何年も続けて会  
長をやっているというのは、会長意識に取りつかれたため  
で弊害があると思ってきましたから、二年以上は私続けたこ  
とはないです。一たんは平会員になって、それはさびしい  
ことはさびしいけれども、平会員の心持がわかりますから

う。会費があんまり安いから、全部が出て行ったらそれだ  
けでは絶対にまかなえない。

元岡 私七、八年続けて会長をやったわけですが、私  
の場合は会長になり手がありません。仕事が多過ぎて会費  
が少いために、結局トコトンまでいくと会長の負担になっ  
てくる。そのため会長選挙をしなくてもだれもなり手がな  
いのです。それをやらなければおわてしまわうでしょう。やむ  
を得ずやってきたのですけれども、そういう点、会長にな  
り手がないということにも、大きな問題がある。

仁平 これは呼びかけが非常に多いということにも問題  
があるのです。市の課長さんにお会いした時、ほかの地区  
では總會のときに自分を呼ぶのに、あなたのほうはいまだ  
かつて呼んだことがない。あなたのほうの会長はなってい  
ない、だからあなたたちで会長を啓蒙してくれ、こうおっし  
やるのです。私はそれを聞きまして、会長さんを見なおし  
てしまった。パッとしない会長さんだけれどもえらい人だ  
なと思いました。多くの婦人会は各方面からの呼びかけを  
諸々と承知して、それで仕事が多いとこぼしている。

渡辺慶子 忙がしくてやり切れないから、やりやすい立  
場の未亡人、お産婆さんが何年もなさるとおっしゃいまし  
たけれども、やっているうちにやっぱり一種のボス的な存  
在になりがちですから、そういうことは改めていきたい。

ね。何年かたつて、また選挙になれば改選するのですけ  
れども、そういうふうにやってきまして。千葉の芳野さん  
は副会長がまた次の会長になるというふうに、どんな会  
員が育っていくとおっしゃいましたけれども、もっと小さ  
いグループの人たちに、話し合ひさせてうまく引き出して  
くれるそういうふうなリーダーがほしいのです。

鈴木 会長さんはほとんど未亡人ですね。家庭を持って  
いて、一生懸命に家の仕事に励んでいる人が会長、副会長  
というの責任が重すぎる。そういう仕事には出て行かれ  
ないのです。村でもほとんど学校の先生をやつて、恩給を  
もらっている人、あるいは未亡人、そういう人がみんな役  
員をしているのです。そこに何かがあるような気がしま  
す。

森下 私のほうは今の鈴木さんのところに似ているので  
すよ。お産婆さんとか、未亡人とかはやりいのです。家  
庭の荷物がない。それからもう一つは農協婦人部即地城婦  
人会で全部一緒になっている。これは争い事をしたくな  
かったからそうしたのですけれども、仕事が多過ぎはしな  
いと思うのです。婦人会自体の仕事がある上に、農協婦人  
部として、こちらのやりたくない仕事でも、いくらでもよ  
こす。それで幹部の人など仕事があるのすごく多いのです。  
だから家庭にお荷物のない人が出て行くことになるでし  
ょう。

それには一人一人の会員の意識が高まらなければならな  
いと思ひます。私の方には十二の単位団体よりなる町婦協と  
いうのがあります。総会で会長の改選を選挙でやることにな  
ったが、候補者の選出方法については結局単位団体ごと  
に話し合ひを五分間持って、候補者をきめていたでいて、  
その候補者について選挙しようということになった。どこ  
ろが私の名前が十二団体のうちの七団体から候補者として  
出された。それでそのまま選挙しますと、私が当選しそ  
うなものですから、私は家庭の事情で、今年はとてもし  
うような社会的な仕事ができる立場ではなく、引き受けて  
も結局町婦協のためにならないからという発言をしまし  
た。それで投票してもらったら私は書かれないで、別の方  
が出たのです。やっぱり婦人会の人たちは育ちましたね。

征矢 うちのほうの場合ですと、ぜひ何年も続けてほし  
い方もやっていたらいいようなやり方です。部落意識が強  
く、順番持ちまわりでこの次は私のところで出すというふ  
うで、どんな立派な方でも、一年きりやめさせるように  
できている。婦人会の仕事は上からの命令でやりますけ  
れども、農協と一本建となつてます。農協のほうは、また  
農村としてそこへ加入してやっていたらいいかなければなら  
ない。

婦人会の仕事というものが自主的にできないことは、やは  
り農協の仕事に追い使われて忙しいからできない場合もあ

るのです。ですから二本建にしたかどうかという話が出てますが、いかがですか？

佐藤 地域によって二本のところと、一本のところがあるのですが、二本のほうは会員の意識が高くなって、いいということをやっています。

森下 私のところは反対。農協と婦人会とわかれたら絶対に争いのもとだということです。農協の一部即婦人会というようになっていきます。

佐藤 農協は農家の主婦としての生産活動に直結するものであるから、一人の人で両方の団体に席をおいている方もある。

青山 さっきからお聞きしていると、上からの命令で婦人会が動いている。私たちのところでは婦人会は自主性を持った自主団体で、いずれの干渉も受けないということと動いています。婦人会の会費だけで運営していच्छやるのですか。

元岡 年間五十円の会費だけではとても運営していけませんから、商売の利益でやっているのです。

青山 私たちのところは簡易図書館のお世話をして、ほとんどそれで運営しています。

渡辺 婦人会の会長の仕事は忙しらしいけれども、それじゃ婦人会は何をやっているのか。鈴木さんのところは

土室 ございますけれども、役員に告げ口されますから、なかなか言いません。

渡辺 告げ口すれば反省の材料になりませんか。

佐藤 陰でだけこそ言っている。

土室 一応犠牲になってやるという覚悟があれば、また別ですけれども、あの方自分がやりたいからだと言われま

すから、よほどの信念がなければやれないです。  
佐藤 十年も十二年もおやりになった人たちのカスをとんとつけた婦人会の役員になりたくなくて、二年間引き受けなかった。二年たったらさされたのですが、民主的な方々と話し合って、十二年も固まったカスを少しづつおとすようにしていきたいと思い、会長にもよく話ししましたら賛成してくれました。私、広島さんのお話のように、やらなければならぬと思ったのですが、ほんとうに反感持たれました。

渡辺 佐藤さんに伺いますが、あなたが犠牲になってから、民主的になりましたか。

佐藤 今年で二年目ですが、会計のつけ方なんかも、項目別にわけて、こうやるのだというふうに話したらわかって参りました。私が婦人会をこわすのでないということも今年の総会で会員の人もわかってくれた。これなら少しづつ普段の活動も民主的にやれると思ったのです。

何もやらないから脱け出したんでしよう。自分らだけでも身近かな生活の工夫をしていくグループを作りましたというて……

土室 それはやはり上からの仕事がたくさんあるのですよ。役員はとても忙しいのですね。婦人会自体の仕事はもちろん忙しいことはわかってますけれども、仕事の多いところとは、役員ばかりが仕事を持って歩いて、会員はなんにもないのです。

渡辺 つまり役員婦人会、総会婦人会、そんな会の中では自主性もないですね。

土室 失望してしまいました。協力できないですよ。

渡辺 そこで自主性の問題になりますけれども、そういう会をそのままほうっておいていいですが、これがほんとうに自分らの属している、ちゃんと一つの目的なり主義なりに固まった婦人会なのかという疑問を投げ出す自由は、皆さんお持ちになってますね。その自由な発言で自分の意見を発表し、疑問を投げ出して、みんなそれでいいののかということをお考えなさいという機会はないのですか。

土室 私どもではございません。現在の役員の方にそんなこと申しますと、まるで姑根性をだして書いていると言われる。

渡辺 会員同士で言い合うという機会はありますか。

渡辺 そうすると皆さんは、なかなかこれでいいのかという疑問も、容易に話し出せないという状態なわけですね。婦人会という大きな集団の中に、今皆さんがお話になった小さいグループ、分派行動で作ったのじゃなくて、もっとお互いの意思を通じ合おうとして作り上げた小さなグループ、それならかなり自由に発言ができるということでしたから、そういうグループをやってみたらどうだろう。そうして絶えず自分の属している集団に対する反省、批判、これは陰口悪口ではなくて、正しいことを、自分がその会に属している一員として、その会をよりよくする、よく育てるための批判ですね。そうしてそれを総グループの話し合いの中でやっていくことによって、会自体がいくらかでも民主的な方向に進んでいく。そうすればその会の進み方に歩調を合せて、会員全体も同じように、そうした民主的な立場といえますか、そういう進み方をするようにないていくだろう。従ってそういうところから、おのずから自主性が生まれてきくはしないか、そういった自由な立場をとりやすいのが小集団だったとしたら、大へんいいことです。

ね。自主性を育てるために、自由にふるまえるために小グループを作りましょうということは大へんけっこうだと思ふのです。問題は自由なんですけれども、小グループを作ると、今度は芳野さんのお話では、持ちまわりの当番の

世話役、これができるというお話をしたね。これは会長とかなんとかの大へん忙しい仕事ではなくって、自分らのグループをお世話すること、せいぜい一週間に一ぺん集まったって、それぐらいのお世話はできる。その程度の持ちまわり当番をやっていた場合、何かそこで新しく生まれきてますか。

#### 集団における個人の責任

芳野 まだ平会員のときには、金というものがどういうものかということがわからない方が、当番をやったために、おぼろげながら会合の目的とか、それからどうあるべきかということが、理論ではなくて、体得でき、よくするのも悪くするのも自分たちの責任だということを感じますから、非常に積極的に、言われなくてもするべきことはするようになります。

渡辺 これも一つの役割ですね。

渡辺慶子 今おっしゃったように、持ちまわりの班長の役目をするため、思いがけなくリーダー的な素質を持っていた人がみんなに認められる場合もありますけれども、一年間は知らないからやるけれども、それが終わったとたんに、婦人会なんていうので、あとは出て来ないという人もあるのです。ですから両方あるのですね。

つかなければ民主的な運営ができないんだという考え方はやめて、個人の特性、能力に応じた役割を、みんなが認め合う、つまり探して認め合うのですね。そういうやり方こそ、それこそほんとうに民主的なやり方で、それを育てるのがグループではないかと思うのです。そういう役割意識をはっきり植えつけさせる。そうすればさらに大きな集団の会合を持って活動をしつづけることができ、十分にそこで自分本来の役割を、自分で見つけることができるし、人から与えられてもそれを果すことができる。だから役割というものは、何も平等に考へなくてもいいのだと思う。

これは一つの例なんです、新利根に開拓農場がある。ここは十五人の未婚の青年たちが開墾地を買って小屋を作った。初めのうちはみんなその土地を耕さなければならぬので、土地と取り組んだ。そこは非常に条件の悪い土地で、下水の排水、田んぼの暗渠排水等、土木工事に三、四年もかかったんですが、土台からがっちりやっていったために、耕地が非常にいいのができた。耕地ができて機械も入り、牛もはいった。ちゃんと一つの農村部落の形を作り上げた。そうすると今までの堀立小屋も人間が住むような住居にしなければならぬ。お嬢さんも来るということになって、いろいろな仕事が出てきた。十五戸の家を建てるにはよそから大工さんと呼んでこなければならぬ

渡辺 そうやって一年間はやったけれども、来年からはいやだというような気持ちを起させる、その一年間が問題だと思ふのです。何をしたいか、一体目的を果すような活動を常にやっていったか、これでいいのかという大きな批判、そういう批判を絶えずお互いに申し合っているのがグループの話し合いだろうと思ひます。会長がいつも同じ人にきまってしまう。これはやりたくて居る人もあるでしょう。それからいやでもほかにいないから推されて居る人もありましようが、私はそいつを無理やり万般なくみんなに押し当てるということとは、ちょっと困るじゃないかと思う。いろいろな事情もありましよう。そこで私は考へるのに、役割というのは、やっぱり個人個人に、それぞれ持っているものなんですね。そういう個人個人の能力を認め合うことが大事だ。しかしそれは大ぜいの、千人も何百人もの婦人会の総会ではとてもできっこないです。二十人ぐらいの小グループだと、だれはどういう能力を持っている、だれはどういう特性を持っている人だというのがよくわかりますね。あの人は字が上手だから書記を頼める、あの人は整理がうまいから下足番やらやら（笑）。そういうことがみんなにわかり合って、そういうふうに役割を分担し合えば、これはおれの役だ、何とかうまくやろうということになる。役には必ずまんまん平等に、みんなが

いのだが、集団で三年、四年と生活しているうち、だれがカンナ使いが上手であるとか、木を切るのがうまいとかと、その人の特性がいつの間にかわかってきて、そういうことから、新しい家を作るのには、ちゃんとその集団の中から大工さんが生まれてきた。また電気の配線をしなければならぬというときに、電気非常に興味を持っている特殊な性能を持った人がいるということも、普通の生活の中からみんなにわかっていたので、電気工事専門にかかってもらった。ここでは必ずしもみんながお百姓をやっているのではなくて、本来は十五人入ったから、十五軒の共同耕作でやるべきなのに、いろんな仕事だんだんふえてきて、特技のある人、才能のある人がそれに一番向く仕事をやる。土と取り組んでいる人は十軒ぐらいしかいない。それ以外の人は大工をやったり、電気工事をやったりする。これらの人も同じ共同生活に入っているわけだ。開拓地だからみんなが土と取組まなければならないというわけはないわけで、そういう一つの社会集団ができると、そこにたくさんさんの仕事がある。それではその機能に応じたそれぞれの役割ができていく。同じことは婦人会、農協婦人部、さらには自分の家においても言えます。そういう役割をはつきり自分のものとして身につけると、そこではその役割を果すための自主的な活動ができるようになる。自由に

ふるまえる。役割を果そうとすることから、その集団に対する責任ある仕事ができる。そういう自由と責任の問題が考えられるのではないだろうか。やっぱり私たちはこの集団にあって、もう一人一人が一体どんな役割を担っているか、その役割を考え、それぞれの特性に応じてそれを持ち合う。そういうことから、その人の集団の中における自主的な活動ができる。この自由と責任については、まだ問題があると思うのです。それはどこまでがその集団の中の個人の自由なのかということです。これはどういうふうに考えたらいいでしょうか。

仁平 集団に属している人たちは、やはり一つの目的の下に集まっているのですけれども、その中の個人個人はやはり一人一人違ったものを持っているのではないかと思います。そのためいろいろな意見がたいてい出て、ディスカッションも当然起っていいのではないかと思います。自分の意思が通らず、集団の意思と個人の意思が対立するということになる場合もあるけれども、私はそうあっていいのではないかと考えます。集団が一つの目的に向かって進む場合、いろんな意見が対立する。最後に集団の意見として出てきたことと、自分の言ったことと合わない場合が生じてきますね。それで脱退したり、集会に出席しなくなったり

するのは、自分の目的のために、集団というものに責任を担ってなくなっているからだと思っています。

鈴木 集団の中で、自分の生活というものもやはり考えて、集団の中で自分というものを犠牲にしない程度で、大切にしていって、その程度が大切だと思うのです。

青山 私のところで、昨年十一月に町長の選挙がありました。そのとき立候補した人は前町長と新しく立候補したお医者さんと二人です。前町長は二期ほど勤めた方で、その二人の戦いになったわけですが、そのとき婦人会の副会長としてお医者様の奥さんがあって、お医者様のほうをどうしても応援しなければならぬという立場にあり応援されたのです。その後投票の結果、お医者さんのほうが当選したわけです。ところが反対のほうの前町長派から婦人会が動いたというふうに見られて攻撃を受けた。特に幹部の者一、二名は退職せよとやられたらしいのです。公明選挙でないというふうに言われたらしい。しかし集団に属している場合は、その人は副会長であるけれども、その人個人というものはなくてはならないと思うのです。その人も、自分は個人的な立場でやっとな主張はできますし、そうであっていいと思うのですけれども、自分が副会長であるということにおいては、ある程度の束縛を受けなければならぬ立場にあるということを、その方自体も

考えてはしかたと思うのです。そういうことを考えたから、自分が動かなくてほかの人に動かしてもらって立候補された方には弁解はできと思うのです。社会的な集団の指導的な立場にあれば、ある程度の束縛を受けなければならぬという自覚がなくてはならないと、私は思うのですけれども……。

渡辺 その副会長の立場での責任の問題が出てきますね。そういう会長、副会長というのは、自分の集団においてかなりの影響力を持っているわけですね。だから自分の置かれた立場が、集団にどういう影響をもっているのかと考える責任があるわけです。だけれどもその人は、どんな方法で応援しようとする個人の自由ですから、その線を引くことが大事ですね。線を引くことのできない集団であるところの問題がある。私は副会長だから、私のやることは会がやっていることだと思われては、この場合困る。今度の選挙の応援については、私と会とは無縁であるということではフリーな立場で私はやるんですと言って、それが理解される会だったらいいます。しかし、そこまで行っていない現状において、それだけの行動をしなくてはならない人には、それだけの用意がなくてはならない。現状はどうか。婦人会ばかりでなく、その周囲はどうか。自分がこういう行動を起したら誤解を招く、自分だけが、いわゆる善意的な

行動しても、かえって悪意にとられてしまうようなことはない。そういうところに、私たちがたまたま一本ばかりではやっていけない問題がある。一応意思を通ずる技術がなければ、なかなか困難だということですね。いま青山さんから出された問題は、これは大へんいい問題で、集団の中の個人、集団を離れた場合の個人、この区別がはっきりしない限りは、この問題はなかなか解決できないわけですね。集団の中では、あくまでその集団をよりよい集団にしていこうため以外には、自由な行動は許されないが、集団を離れて、別個な立場での個人は、個人としての自由がいつもあるわけです。しかしまだまだこのように割り切れていない。われわれの今の段階の社会では、そこにどうしても区別のできないものがあるので、そういう場合には、少なくとも集団で何か役を持っているような、集団に対して責任を持っているような立場の人は、誤解のない措置を講じないと、大へんな失敗を招く。

さて、これまでの話し合いの最後のまとめをしたいと思います。一昨日、今日と二日間の話し合いの中で出たことは、あまりにも私たちの集団生活には自由がないということですね。みんな非常に非民主的なわたくしに縛られて、何の自由もない。家庭にもない。地域の婦人会にもない。まして部落の中にもない。つまり自主性を確立する、

個人を確立する、そういうふうな場所が私たちの属している集団にはないことですね。集団がそうだからまず私たちにそこで自主性が発揮できないわけですね。

それについて、今度の婦人週間のテーマ、集団の中における個人の自由と責任ということ、私たちがほんとうに理解するために、そして少しでもそれをこれから行動の中で生かしていくために。私は私なりにこれを言いかえてみたいと思うのです。「私たちは集団の中へ、その集団とともに生きる個人としての自由を持ち込むことに責任を持ちましょう」「集団の構成員としての自由を持ち込むことに責任を持ちましょう」。つまり私たちは集団の中であまりに自由がないので、まず自由を持ちこむことによって、私たちの集団はもう少し活発になり、もう少し民主的になりはしないか。そう思われてなりません。もともと集団の構成員が、ほんとうに構成員としての自由を、集団の中で深めたら、おそらく皆さんの属している家族集団も婦人会も、農協婦人部も、もともと活発な活動をするだろう。もともと民主的になるだろうと思うのです。

今までは話す自由で太いにおしゃべりしたんだから、こんどは聞く責任をもちましょう。ここも集団ですね。話し合いをする、そういうために集まってきた集団です。そこで皆さんは話し合う、聞き合うというか、そういう責任が

あるんですね。それじゃ征矢さん、さっき言いかけたから、お話し下さい。

征矢 私たちのほうもやはり婦人会や、村会議員の選挙の場合、自主性がない。それからPTAの会合とかいろいろなところに出た場合に、とてもいい意見を持っていないが、発表できないのです。ことにうちのほうはうんと山の中で、人に出てものを言う機会がないのです。お隣とか、結婚式とか、法事とか、そんな場合にしゃべるくらいですから、何かの会合があったときにはこんなことがきまったと、あとになってくやしがる。自分たちに正当な考えがあった場合、その意見を出したい。その場合、発言というものが一番問題だから、その勉強をしようということになった。しかしただみなで集まっておいおい願ってもしょうがありませんから、たまたまうちのほうにあったラジオの集いというのに入った。ラジオは皆さんの家に必ずありますから、教養に關係のあるものなどよいものを聞くのです。各自家庭でそれを聞いて、その聞いたものをものとして月一回会合を持ちまして、自分の聞いたのを発表するのです。それに対して質問もあるし、その中でまた適当な問題がありますと、それを深く掘り下げて話すのです。十五、六人の小グループですけれども、個人と集団との話し合いもすてに行われたのです。このようなことで皆さんが前

で話をすることによって自信を持ったのです。自分の考えをまとめるということもいくらか訓練ができたし、ラジオですからあらゆる面の勉強ができて、だんだんというんなことが批判的に眺められるようになった。選挙のことも真剣に考え始めたのです。そして婦人会長の選挙がありましたとき、婦人会長にはちゃんとした人を出さなければ、婦人会そのものがちっとも進歩がないから、今までのように、ただ組合長の奥さんとか、そういうふうな立場の人しか出ないのを改めて、しっかりした人を出そうという話し合いもできた。とにかくそういう機運が生まれたということ、話し合いの勉強がすべての一番の基礎になっている。それから社会面にも目を向けられるようになり、婦人会のほうも明るい見通しがついたような気がするのです。

渡辺 征矢さんのお話に出た選挙のことですが、部落部落で順番に候補者がきまっています、みんなその人をするということになるという選挙のあり方、町会議員、地方自治体の場合には、そういうことが今でもあるんですね。部落推薦という形ですね。これはどうもけしからんことで、私はいっもなせそういうふうになるのかと思っているのですが、それをだんだんおしえていく一つの方法として、部落が行政の末端になっているということ、これの解決をまず最初に

しなくてはならない。もともと部落では家柄の人、力のある人、そういう人が支配的な立場に立っている。今でもそういうものは残っているわけですから、黙っていてもそういうものが非常に支配的になりがちのところへ、役場が部落のしなければならぬことを、そういう人たちに持ち込んでくるので、その人たちは役場の下請けをして部落内にいろいと触れまわす。そういう関係で、ますますボスの立場を助長させる。みんなが自由であるべき選挙なんかでも、この調子でみんなを引きずって行ってしまふ。どうもこれは非常にけしからんと思うのです。

水木 助け合い運動の行き過ぎが私たちの部落ではあるのです。背い羽根赤い羽根の問題でも、一応役場のほうから割当てがきます。平均額を示してくるのです。帳面にどここの家が幾ら寄付したというのがずっとまわってきます。まあ強制的に助け合い運動が行われているような状態です。

渡辺 国でやればいいじゃないですか、そんなことは。何のために高い税金をぼくらがはらっているんですか。自分らの政治の貧しいところを、私たちに肩がわりさせて、貧乏人を助けようというのでしょ。ぼくらの税金をそれに使ってもらいたいでしょう。この助け合いというのはとくに農村部落に多いのですが、早くそれから脱け出す

ことが必要ですね。

宮崎 やめることができないのです。

水木 青い羽根、赤い羽根だったらまだいいのですけれども、学校の校舎を建てるから寄付してくれというPTAの寄付です。食器を備えるから、旗を作るからといって、関係のないところへもやはり帳面がまわってくるから、どうしても出さざるを得なくなる。額はいくらでもいいから思っただけ出せばいいというのですが、一定の標準をちゃんと書いてくる。いなかですから一升平均といってお米を出したりする。助け合いの意味が強制的になって、ほんとうの助け合いになっていない。

元岡 婦人会には、共同募金とか自赤募金、青い羽根、緑園運動などがくるのですが、私たちのような小さい部落は、赤い羽根でも街頭に出て売るということは絶対できないですよ。結局割当てられますね。県が大体割当てられるのです。

水木 人口割に割当ててきますからね……。

元岡 結局その運動を、婦人会あたりが社会事業として、一つのお手伝いではないかというふうなことでやったらしい。それを受け継いで今もやっているのです。市長さんのところに行つて、共同募金を私たちにやらせないでほしい、御用機関みたいに私たちを使いすぎると言ったら、

共同募金は自分も大きらいだが、上のほうから割当ててくるのだからやむを得ないと言つて済ましている。

渡辺 それを拒否する自由を持ちましようよ。

征矢 日赤奉仕団がありまして、その仕事なのです。

渡辺 日赤奉仕団はそういう目的の集団だからいいですよ。婦人会は社会奉仕をする団体じゃないでしょう。

水木 区長のようなものからもきますし、婦人会からくるし、PTAからくる。街頭に出れば買わされるといふうちに、あらゆるところからくる。

征矢 水害の場合の義捐金まで、割当てではないけれども、きめられてしまうのです。とにかく私たちは無事に暮らしているからたくさんしましようという、〇〇さんより余計されては困るといわれる。とにかくいろんな面で制約されてしまうのです。

竹下 行政官庁から押しつけられて、婦人会が寄付行為をするのはもちろん私どものほうにもありますけれども、そのうえ神社なんかも寄付してほしいと婦人会に持ちこんでくる。婦人会の席で、私の支那ではそういうことをしてもらいたいのだった、お宮の總代があるのだから、そういう方へ頼んで下さい、婦人会の仕事ではないから、そういう意味で婦人会を利用してもらつては困ります。私は引き受けませんからと、断つたのです。そうした

ら引き下がりましたけれども、ほかの支部の方には全部押しつけてしまったのです。当然会長が断わればいいのですけれども、会長自身は選挙のときに自分がその人たちから何票ももらうわけでしょう。だから、おさい銭を上げると思つて、いくらかずつでも上げて下さつたらいいのだからと、とりなしてその場を済ませてしまふ。結局、お宮のお札一枚三十円のうち、五円を婦人会に上げますからというわけで、餌で釣るのですね。今年は結局それを受けることになったのですが、来年からはそんなことしたくないと思ひますね。

渡辺 今のお話と関連してお聞きしたいのですが、今度社会教育法が改正された。今までの補助金を出してはいけないうという項目を削ってしまった。出してもいいというふうには書いてないが、項目がなくなつて、出そうと思へば出せるわけですね。皆さんの間ではどんなふうに考へていますか。

鈴木 私のほうの婦人会では、最近村から補助金をもらつてはいるらしい、それで村の役場の仕事をお手伝いしなければならぬようなかっこうにされてしまった。それで村で社会教育大会をやるといふので、支部長級の人やまた各部落の婦人会のおえら方を集めて、そこで教育する。私はちやうど学校のPTAから行つたのですが、婦人会の方が

たくさん来ていました。その中から代表を選んで、水戸で社会教育振興大会をやつたわけです。こういうやり方だと、役人の考へている方へ、方向づけられてしまひますね。

渡辺 皆さんは補助金をもらったほうがいいですか。

佐藤 私個人は反対です。方向づけられることはいやです。私たちの婦人会では、その問題を取り上げることではないのではないかと思います。私個人的には反対ですが、私が言い出すわけにいかないのです。

渡辺 どうしてですか。

仁平 私のほうは半分半分です。

佐藤 郡内の婦人会では賛成らしいのですよ。

渡辺 あなたの婦人会では、あなたはそういう反対の意見を出せないのですか。

鈴木 もらつたほうが得だということになるわけですか、結局……。

佐藤 教育委員会、局長、そういう方は出すほうに賛成らしいのです。それを出すという、いよいよもつて反響が来るものですから、今のところいい出しません。

芳野 婦人会の行事として教養講座を持つ場合、社会教育課でも同じような計画があると、両方ですから会員の都合いいになる。だから共催でやってもいいわけではない

ですか。講師の先生について社会教育課が注文をつけないで、婦人会の自主性を認めてくれるのだったらいいではないでしょうか。

渡辺 認めてくれますか。

芳野 こっちで交渉などをしてしまおう。謝礼も社会教育課から三千円なら三千円はもらってしまおう。

佐藤 そう割切ればいいですが、今の段階ではなかなかそうはできません。

征矢 そういうふうなひもつきの、危険性が多分にあるから、まあもらわないほうがいいということは、だいたいわれておりますし、個人的に考えても、そういうふうな気持があるが、公民館では、さんさん今まで運動して、やっとの思いでよいようにかえてきたのだから、ただそれを一方的に考えて、反対だといって、反対されては困るということをおっしゃられた。

渡辺 それは公民館が困るんで、公民館を利用する民衆は困らないでしょう。

佐藤 団体を育成するために困っているだろうから、補助金をくれるという気持があるのなら、もっとくれ方があるだろうと思うのです。なぜ団体にくれなければならぬのか。公民館における社会教育をもっと振興させるための仕事が出てくるようにくれたらいいのではないかと。

がお金を使うということを問題にする。娯楽に全部会費を使うのだったらいいます。だから役員は社教の補助金をもらって、いく分なりとも旅費の助けにしようと思うのです。その問題でいつもめめますから、社教がくれるのはもらったほうが得だということです。

渡辺 こういう判断は一人では困難です。みんな仲間です。話し合えば、自分のまだ足りないところを話してくれるかもしれません。ですからいわゆるマスコミの害毒ということも、非常に皆さん問題にしていると思うのです。ラジオ、新聞でも一人で読んでいると、ラジオが言ったからほんとうだ、新聞にあるからほんとうだと思つて、みんな自分でのみ込んでしまふわけです。ところがそれを大げいひで話し合うと疑問を出す人もあるわけです。だから一人で、ラジオが言ったり新聞が報道したりすることを受けとめようとする、そいつに負かされるから、大げいひでその問題を話し合おうと、一人で受けとめる以上に正しく受けとめることができるわけです。お一人で非常に苦しんで、どっちがほんとうだろうという迷いの問題はですね、皆さんのグループでぜひ話し合いの課題としてやっていただきたい。ですから征矢さんからお話の出たラジオの集い、これも一人で聞いて、そして感想を書き合うということ、これもけっこうですが、できたらその場で一緒に聞いて、そのあとす

芳野 ちゃんと予算がありますね。社会教育の振興のために。こまかい項目は忘れちゃいけないけれども、当然婦人会なり青年団なり、そういう活動へ使うように予算をとってあるのです。どんな形でも、こっちの自主性の失われないう限りは、どんな形でもいいのではないのでしょうか。

仁平 自分から利用するという態度に出たほうがいいのではないですか。それだけの自主性をもって、官庁を利用してお金をもらう。

芳野 私たちもそれだけの自主性を持つてますよ。もううにはもらっても、絶対に引きずられないという……。

元岡 社教からですが補助金を出した場合にはそれだけの条件はつきますということをおっしゃいました。出す以上は、必ず社教の線に持つてゆかれることはたしかですね。経済を握られたら動きがとれなくなりす。しかし一年五十万の会費ですら出したくない現状ですよ。お金がなければ何もできない。だから補助金をもらいたくてたまらない。そこに苦しさがある。危なっかしいが、もらってしまふようになるのではないかと思います。

水木 私たちのほうももらいたいほうですよ。会費だけでは、役員が中央部に出張するとか、話し合に出かける旅費も出ないので、自己負担する現状です。公けの会に出るのだから、会からとつたらいいというと、役員が役員だけ

が話合ったほうが、もう少し効果が上るんじゃないかと思ふ。

征矢 そういうこともやっています。いろいろな方法で。

渡辺 大へんけっこうです。強力なマスコミの力ですから、一人ではなかなか受けとめられない。こんどは集団の中の個人の問題を取り上げてますけれども、つぎには集団自体の自主性、これをもっと大きい中で考えなくちゃならない。一昨日お話ししたように、家族集団の中におるとき、実はもう一つ外の社会と、連帯をもつて活動していかねければならない役割を持つています。婦人会に入る、その婦人会を取り巻くもう一つ大きい集団がある、それをいつも考えていないと、水木さんが問題に出している集団のエゴイズムが出てくる。婦人会と農協婦人部が対立するものも、おれのが、おれのほうがでけんかをするわけです。ところがこれをちゃんとはっきり自分の集団はこういう目的でやっている。社会的にこういう役割を持つていてということとを自覚して、そのことのために集団の主張を出すのだったからかまわなければ、人の集団の役目も自分のほうに引き受けたつもりでやればけんかがでてる。農協婦人部はあくまでも、農村の経済活動、経済生活を高めていくということに目的があると自覚すれば、片方を教養の目的とする婦人会とは衝突しないわけです。自分の属している



集団の利害を考えると、その集団を取り巻いているものと大きい集団の利害と、自分の集団の利害と、どっちが一体大事なのかというのを考えなくちゃならないわけですね。そこでよく政党はその政党を太らせるために、お国の損になるようなことでも平気でやる。そういう政治が行われているんですね。これもやっぱり一つの政党のエゴイズムですね。そうじゃなくて、国の政治をよくすること、国民の生活を高めて仕合せにすることが政党の大きな目的です。ところが、しばしば政党さえよければいいのだ、自分の政党がよくすることが大事なんだということで、ほかの政党と対立する。そして争う場合、すぐ国民なんてことは忘れてしまうことが多い。だから私たちはいつでももっと広い世界、もっと大ぜいの人、それを頭において、自分の集団の問題を考えたと思います。なるほどこの問題は集団の利益になるけれども、このことで集団が強く主張したら、集団外の人たちはどうなるか、迷惑になりはしないか、そういう反省が必要だと思うのです。そういう反省がないと、もっと日本は強くなければならない。もっと資源を持たなければならぬといって、太平洋戦争みたいな戦争になってしまう。やっぱり私たちが、日本はあの場合、どうしなければならなかったのかということを考えると、一体世界の平和はどうすれば保てるか、世界中の人が

どうすれば仕合せになるかという考え方が先に立てば、戦争はなかなか起きなかった。そういうことをいつも私どもは警戒していかなければならない。これは集団に属している自分自身の個人のエゴイズムを、いつも反省していなければならぬのと同じことです。

それでは皆さん、一つうんと集団の中にその構成員としての個人の自由を持ち込んで下さい。それを集団生活をしている私たちの責任にしましょう。そして私たちのいるいるな集団をもっと民主的に自主的に、そして活動的なものに発展させましょう。

(閉会)

会議報告と話し合い

リーダー

◇ 印

伊 坂 大 渡 伊  
藤 西 谷 辺 智  
界 志 省 多 者  
保 三 三 者

## 部会報告

第一部会（篠藤）この部会の話し合いのまとまった結果を伝えるというよりも、私の意見を申し上げたいと思います。

まず問題になりましたのは、家族集団についてでした。結婚する時に二人の男女の自由と責任から家庭をつくるのですが、子供は選ばずしてその集団の中に入ってくるのです。子供が自主的にものを考え、同時に自由と責任を果せるような教育をしなければならぬという話し合いが出された時に、女は子供が出来たら家庭にかえるべきだという意見が出ました。それは、母親が、子供を育てることによって人間的に成長して行くのであるし、職場に出ても家庭のことに心を煩わすためにいろいろ問題があるという意見でございましたが、私としては、将来共稼ぎを希望しております関係上、大いに関心をもちました。子供のことに煩わされるということですが、子供のことに煩わされない社会制度というものを、考えなければならぬと思います。

それからまた共稼ぎする場合に、結婚すると女はだめだという意見が出されましたが、私自身としては女の口からこういう意見が出されるのは非常に遺憾に思います。

ですが、家庭と職場とまた労働組合、この三つの仕事の中で非常に悩ましくしてきてきた。その姿が夫にうつると、夫はまた悩ましくむという中で、よほど、職場、組合の仕事を手放そうと考えたが、そのそれぞれに自分の全力を尽したところが、非常に明るく、自信がもてたということから、自分はやはり組合活動の中で、あるいは職場の中で、自分の責任を果すことによって自分が成長するのだ、という話がありました。

働らく職場において、その職場の労働組合において、個人というものをどういうふうに生かし、また責任を果してゆかなければならないかということが、まじめに反省されたのが第一部会の一つの特徴ではなかったかと考えます。

第二部会（村松）私はこのような会議に出席するのは初めてですので、三日間というものの、緊張の連続で、話しあわれたことを整理することができませんで、部会報告などといっても単に自分の思想というのか、ちょっとした印象くらいのことしか申し上げられないと思います。

二部会では職場の中で個人の自由と責任の問題を考えて出席したのは二人で、それから自主的な文化サークルのような団体に関係していらっしゃる方が七人、家庭のことを中心に考えて来た方が四人というメンバーでした。

職場のことは、全然無視されたわけではありませんでした。

結婚してしまおうと、雑用を仕事の中にもってやるから、能力の差が出てくるという話し合いになったのですけれども、私はその雑用——女だからいろいろのことをしななければならないという考え方に、なにか根本的な問題があるのではないかと考えます。男性は少しも協力してくれないということも出ましたが、女自身がそんな工合に育て上げているのではないかと工合に考えました。

また、何か建設的な意見を申す時に、方言ですが「けちやもん」という言葉が出されました。「けちをつけるもの」として、みんなから迫害されるが、これは場合によっては大いに歓迎すべきだという意見も出しました。

それから、マスコミによって、意識の統一をされてしまっていて、一人一人の自主性が失われてきているのではないかと、という問題が出ました。自主性を伸ばして、真実の姿をみつめ、つかみとるには、まだまだいろいろの問題が残されている。私は今度の会議に出席して、集団の中の私というものを、改めていまさらのように重大に痛感いたしました。

伊藤 補足いたしますと、私のほうの部会では、職場や組合活動の中の自主性とか、あるいは個人の自由とか責任とかいう問題について、かなり話が行われたと思います。その場合に一人の会議員の方は、昨年結婚したばかりの方

ども、主に家庭とか近隣、そういうことにもっとも多くの時間が割かれまして、ここに地域社会のことについては、近所付き合いはどうするか、地域婦人会の問題、それから選挙の問題までも、いろいろなことが含まれていて、私たち婦人にとっては、一番身近な集団のことなので、多くの時間が費やされました。

私たちの自由を阻んでいるものとしては、たとえば近所がうるさいとか、見得とか、そねみとか、また家庭にあっては亭主関白だとか、職場におけるいろいろな問題がある。それから、何か自分の生活を脅やかすものから自分を守ろうとすると、たとえば原爆や水爆をやめてもらうという署名運動をしても、あれは赤だといわれてしまう。そうすると、自分で正しいと思っても何かこわくなってやめてしまう。またPTAなどの寄付が多過ぎて非常に困るからといって反対だというと、やっぱり赤だといわれやしないか。そういったことで、非常に自由がじゃまされている。しかしむしろそれが男性にとってよりも婦人にとって風当たりが強いとすれば、女性自身の中に自由を阻んでいる原因があるのではないかとということがしきりに考えられました。

職場にいる時は、やはり腰掛だからというので組合のことにはあまり熱心にならない。そういう組合というように

集団の中での自分の責任もあまり考えない。そうしてあなただ任せでゆく。そのまま家庭に入るからまたあなただ任せで、自分の判断力をもちたい。そういう状態でPTAとか婦人会に出て行けばやはり幹事任せになってしまい、それが、一番大事な自分たちの生活にも直接ひびいてくる。選挙の場合でも、自分の判断で投票するのではなくて、なにかに引きずられてやってゆく。そういうようなところにこの大きな、婦人の自由を阻んでいるものがあるのではない。私たちがほんとうに自由になるためには、そういう環境とか、また大きいえば国の政治というものも、悪い悪いといふばかりでなく、自分自身でそれを見て、自分の力で変えてゆく努力をしなければならぬ。そのためにはほんとうに集団の中で自分の自覚をもってゆかなければならぬ。自分の判断力をもってゆかなければならぬ。それ自分一人ではできないし、また一人でやっても仕方がないので、まわりの人たちといっしょに勉強してゆかなければならぬ。その場合にやはり地域社会、近隣同士というものが非常に大事だ、ということが話しあわれました。

坂面 ただいま大塚郡会の雰囲気と申しますか、考え方を話されましたから、私は結論だけを話そうと思います。お集まりになった方々は、家庭を通じて、地域社会あるいは集団の中でいろいろ経験をお話になった方ですが、

大部分の方がそういう集団のあり方にかなり失望して、自分から抜け出す、あるいは自然的に落伍してしまったといふ方が多かったが、もう一度考え直して、やはり結局は自分というものをしっかり握んで、鋭く反省しながら、なおかつ勇氣をもってみんなと手をつないで進んでゆく、しかかも行動する時に上からの号令——ある方は、御自分が号令をかけ過ぎて失敗したとおっしゃっていましたけれども——今度はそういうことではなしに、むしろ下から盛り上げる力によって、時間をかけて丹念にやってみようということをお考えになったようです。

そうして大体みなさんが、この郡会の論議を通じて身におつけになったことは、自分の考、あるいは自分のやりたいたいと思うことがみんなの考と一致すること、人間の世界ではあり得ない。話しあいによってその幅をだんだんと縮めてゆく、寛容の心も必要ですが勇氣も必要です。こういう自分というものを握むことによって、もっといい社会をつくってゆくという確信をもってお集りになる。というような表情をしていらっしゃいました。

第三郡会（岡部）農村には集団と個人の問題がたぐさあつて、それぞれ問題をもってお集まりの方たちですから、最初に自分のもっている問題を全部はき出して、悩みをみんなに聞いていただくという形式で、いろいろの問題

が提出されました。こんなにたくさん問題が出てどうなるかしらと思うようでした。

農村ではやはり家と部落、それが一番強い、きずなになって個人をしばりつけているようです。部落では名誉職的な考から、区長とか、そういったお仕事、ボスの存在の方に握られておまして、それがみんなの自由を阻んでいるということに気がつきまして、いったいどうしてそんなボスが発生したのかという原因をつきつめて考えてみることにしました。そうしますと、そこには、農村の人たちは金を出さないでただで人を使う、そういった考えからやはり暇のある方、お金のある方がそういう大事なお役目をなさって、いい考えをもっている暇のない方、お金のない方がそういうことができないために、ますます権力が膨大して、なにごとにつけてもそのボスの圧力がかかってくるのではないか、やっぱりみんな税金を納めることを考えて、その税金がどう使われているかをしっかりみつめて、そのお金で、そういった名誉職的な存在にある区長とか、組長とかを、自分たちがやっているといる人を見るまでに成長してゆかなければだめではないかということになりました。

それから、意識してつくった集団、たとえば地域婦人会であるとか、自分たちのつくったグループとかいうものの中で、個人がどれほど成長しているか、個人の成長

をはたして助けているかといった問題を考えてみました。この場合に、地域婦人会ということがやはり大きな問題になってくるようでした。

地域婦人会というのは、やはり上から与えられた集団で、そこに住みついた方は否応なしに会員として入らなければならぬといったような条件をそなえておきますので、個人一人一人に会員としての自覚なしにそういう集団をつくっている。そこにやはりそれが発達してゆかない理由があるのではないかと思います。それに比べて、グループはみんなが自分たちでなんとかやろうとして集まっているために、個人の自由とか責任からしっかり守られているようです。けれども農村という集団ははたして個人が自由であるかどうかということをふり返って考えますと、やはりそこにある程度の妥協が必要ではないかということになっております。そうするとわかれるというのではなくて、将来の飛躍のための譲歩がなくては進んでいかないといいことになりました。ですから自分たちの全生活を通じて、自分の主張を認めてもらうように、責任をはたしながら自由を得てゆく。そのためにはやはり自分たちで自由を生む努力がはらなければならないということに気がつきました。

大谷 実になまなましい問題がたぐさ出でてきたので

す。大ざっぱに申しますと、この全国婦人会議に出ることについて非常な制約を受けなければならなかったというようなこと、また選挙の際における自由な投票が農村では阻まれていたといった問題、そういう切実な訴えがあったわけでした。

また家庭の中では、つきつめてまいりますと、年寄が死んでしまわなければ問題が片付かないといったような問題も出てきたのであります。農村は、こういった点から見ると、都会から比べましてたいへんに社会的な制約というものが強いので、その中で自分を生かそうとすることがたいへんなことで、これをなんとかしてゆくためには個人個人ではどうにもならない。そこで意識的に目的集団をつくり、そのはね返りで一つの家庭にある自由を獲得してゆかなければならぬわけですが、この目的集団そのものが逆に部落社会がおくれているために発展しにくいということをみんなが話しあい、これをどうするかという点で、いま岡部さんのお話しになったようなところにゆきついたのであります。

第四部会（征矢） 私たちのほうは、初めに婦人会のことをおもに話しあいましたが、旧態依然として、上からの命令を伝えるだけで自主性がなく、仕事というものが一つもなされてないということ、それを不満として部落ぐ

るみ、グループぐるみの脱落が非常に多いということが話し合われ、婦人会のあり方はどうあるべきかについて討議が行われました。

事例として出された問題ですが、四、五年前に市に合併されたある部落に、新校舎を建てるということになり、非常に封建性が強くて、新しいことをもち込まれることが非常に嫌われるところですが、この場合も、がむしやりに反対するというのが起った。それで子供のことから婦人会が黙って見ているわけにいかない。婦人会としてどちらかに決める段階に追い込まれた。この際に、反対側では戸別訪問をして反対の刷印をとり、賛成者に対しては非常に圧迫を加えてきた。反対が三分の二、賛成が三分の一になった。こういう村の状態にかかわらず、新校舎が出来上り、反対者は通学させなかった。こういう状態では困るので、市の方ではついに負けたような状態になりまして、その村に分校がつくられた。ところが賛成者に対する圧迫は依然としてありまして、村八分的な状態がまだに続けられているという状態だそうです。

この問題については、この婦人会の場合、婦人の意識が低くて、自由も責任もなかった。結論としては、婦人会自体としては部落員としての態度をはっきりさせなければならぬ。会としては、一つの学習問題としてこれを取り上

げて勉強するべきだったということを経あいました。

次に家族集団については、家族の中における婦人の姿はやはり旧態依然として、自由も責任もない状態が多いのですけれども、そこから抜け出すには、自由を与えてもらうのを待っているわけにいかない。自分から、農家である場合には農業技術をすっかり身につけて、生産面でも役割を担うことが人格的に自由を完うせられて、自分を生かすということである。大きな集団に生かすにはどうすればいいか。それには気楽に話しあえるグループをつくって、そこで話しあい判断力を備えてゆくより仕方がない。そのグループが個々の能力に応じた役割をもつことが大事で、これは家庭についても同じである。集団と共に生きる個人として生きる自由をもつことに責任をもたなければならぬ。その上で集団自体の自主性を考えなければならぬ。集団のエゴイズムにならないように。集団以外の人の迷惑を考えると、集団と同様、個人においてもたえず個人としてのエゴイズムを反省してゆく必要がある。そういうことであります。

渡辺 いま征矢さんの報告にもありました通りに、ほんとうにびっくりするような村八分という問題が現実にあることを、この部会ではみんな深刻な思いで話しあったのです。

一軒の家庭で、なんとかして自分の家だけでも民主的な集団をつくりあげたいとたいへんな努力をしますが、その家にも部落の圧力がかかっている。また婦人会のような集団が自主的な立場をとろうとすると、やはり部落の圧力がそれをおさえてしまう。そういうように非常に農村では、個人の自由どころか、一つの集団の自由さえもその地域の圧力によっておさえられてしまっているという事実。これがみんなにはひしひしとわかって、なんともいえない気持ちだったのです。

いずれにしても、個人の自由というものはどこにもない。集団の一員として、その中で充分に個人の自由を發揮し、責任をもち得るためにはどういう態度で進んで行ったらいいか。そういうことが、いまの御報告のように進められていったのですが、農村の場合、ほんとうに痛感させられることは、なんとかして集団の中に個人の自由をもつと生かそうという努力からはじめて、そこで始めて集団自体も立派な集団になるのではないか。そのためにはいつもその集団のあり方を話しあうことから個人の自主性を育ててゆこうという話しあいでおしまになったようです。

#### 話し合い

◇ 第三部会の方へ。農家の嫁が経済的に自立すること

によって、嫁の位置は改善されるだろうとのことでした  
が、実例を二、三挙げていただきたいのですが……。

加藤 私自体のことを申し上げるようでおかしゅうござ  
いますが、農家の嫁が幸福になるということは、やはりあ  
る程度経済的に裏付けをもらってなければ幸福になれないこ  
とは事実でございます。これは、経済的に恵まれない農家  
の嫁というものは、一つの労働力にひとしいからです。も  
し経済的に恵まれていれば、農具の改善、家庭生活の改  
善が行われましたら、嫁の労働力はたいへん救われます  
し、家庭内のいざこざの問題につきましても、生活面に余  
裕がありますと、精神的な面にも自然人間の余裕ができ  
てくると思います。

私の村では、農協婦人部でいろいろ話しあひの結果、  
なにか一つ実現できることを話しあおうではないかとい  
うことになりました。一昨年、洗濯機の購入を共同でいた  
しました。農協から資本を出していただき、私たちは生産物  
の販売等によって代金を返してゆくことにして、個々の農  
家に洗濯機を入れたところ、非常に明るく農家生活を  
営むことができるようになりました。現在私どもの村では  
大体農家も洗濯機を入れておりますが、嫁が、全部とは申  
せませんが、大体農家の嫁らしくない幸福な生活を  
することができるようになってまいりました。

そういうことが第二部会で出なかったか、伺いたいと思  
います。

松井 私は昭和二十三年から夫が結核療養所に入ってい  
ました。子供は是非学校を出したいと思ひまして、文房  
具店を十年継続してやっております。その間、私は従来の  
商売というものから抜け出して、利益ということもまた私  
には必要でございますけれども、私のお店を通じて子供  
に接しますから、子供と一緒に向上してゆきたいと念願  
して、最初非常に苦しかったのですが、余暇に読書など  
をしまして、三千円ため、昨年六月頃、図書館をつくりま  
した。今の子供というものが、漫画から抜け出すことはでき  
ないか。漫画というものは短いもので、瞬間的な思想の、  
責任も自由も感じない子供ができるということを変えまし  
て、私個人として読みものを運び、整理したり読んだりす  
るうちに、一人一人の子供たちが責任をもってそれを整理  
したり、きれいに読んだり、お話しあったりするようにな  
りました。だんだん個人というものを意識させて、自分  
たちはどうしなければならぬかという、社会的な責任と  
いうものを子供に植えつけたかと思ひたのでございます。  
そういう今までこうしてやってみりました。格別むずか  
しいことはございません。

◇ さきほど村八分……まあ都市八分ですか、そういう

馬場 いまの問題に関連しまして、福岡県の地方会議で  
もち出された問題でございましたけれども、農家の嫁とい  
うのは財布をもつてないので、子供のノート代とか本代ま  
で不自由して、とても辛い思いをしているというお話が出  
ましたところ、ある方から若いお嫁さんが集まって、養育  
部というものをつくって鶏を飼っている。一人が大体十羽  
あるいはそれ以上飼える余裕のある方はたくさん飼って、  
卵を売って少しづつ資金をつくっている。それで子供のお  
小遣いなどもある程度やれるし、少しはまった分は自分の  
レクリエーションのために使う。経済的なものを身につけ  
たのでとても自信ができて、今では暗い嫁というものは一  
人もなくなつたというお話が出ておりました。

◇ 個人の自由を阻む最も大きいものは、心の中にもっ  
ているものが多く、その次に経済的なものと社会的なもの  
があるということ伺いましたが、親と子供の問題で、過  
渡期的影響を大きく受けております私たちの年代層の問題  
は、経済ではないかと思ひます。五年、十年先の社会保障  
制度の確立より、今こそそれが一番必要ではないかと思  
いますが、現状は子供の気持次第というまことに不安定なも  
のを頼りにしてゆく方の多い時です。ことに都会において  
に遠慮と気がおが非常に非常にあるのではないかと思ひますが、  
ことについていろいろお話しがありましたが、私たち集団を  
育てるものの一番の苦勞はそこにあるのではないかと思  
います。原水協の仕事はそれ、また労使クラブのお手伝  
をすれば社会党であるというレッテルを貼られるし、子供  
会の子供たちが目の丸の旗を御成婚祝いに差上げようと、  
街頭募金に子供と一緒に立ったりしますと、自由党系であ  
ると、勝手に赤だ桃色だ白だと、中みは知らないで、レッ  
テルを貼る。これが二大政党の現在の罪悪ではないかと思  
う。私たちはどんな着物を着ていようと、中みは変らない  
自信と、またこの仕事に対する責任をもってゆきたいと思  
います。この点においておきかせいただきたいと思ひま  
す。

小川 志な 私ども、「草の実会」の栃木の小さなグルー  
プをしておりますが、どういうわけか、時々草の実会の機  
関紙とか、会員グループのことで調べられたこともありま  
して、それが長いこと続きましたが、私はその中で、赤と  
かなにか線を引かれる前に、調べる人も、相手も人間だとい  
うことをよく認識して、一生懸命の内容とか、私のや  
っていることを細かく話をして、それで現在に至っており  
ます。別にはつきりした線は自分で着せられていないと思  
います。ですからお互いの話しあいが、どんな場合にも必要  
で、また自分たちのやっていることに反省が必要ではな

いかと私は思っております。

村松 第二部会でもいろいろ出ましたし、私もそのことは身にしみて感じております。

さきほどの方の質問の、個人の心の中にあるものの次に経済的な問題というふうにおっしゃったけれども、私はそういうふうにしたのではなくて、非常にいろいろな経済的にも就職の自由も阻まれていて、ほんとうに生活する自由も阻まれているということ。そのことをやぶるためには、やはり自分の心の中にある一つの垣根をつくっている。それから自分の資格のなさ、そういうものが一番大きい原因ではないかと思う。そうして、なにかやると、赤だとかなんとかいわれてたじろぐということは、結局自身自身にしっかりと断力があった、自分がこれがいいと思つてやったのだつたら別に動揺することはないのではないのか。だから私は、自分一人でやるのではなく、ほんとうに身近な人たちと一緒に手をつないでやらなければならぬ、そういうような話し合いになったと思います。

田口 私もしるる会に行きまして、反対意見などを申しますと、やはりいろいろ言われるのでございます。それから町内会におきまして、やはり町内会のやり方に、これは間違っているのではないかと言いますと、やはり異端視されるわけでございます。でもそんなことを気にかけて

伊藤 その問題に直接ふれるかどうか、わかりませんが、今度の婦人会議の一つの特徴だったのは、二日目に移動会議を開いたということです。その移動会議で埼玉の農村に行った一班がありますが、農村の主婦たちが非常に立派なグループ活動をしていました。私も直接見て来たわけですが、映画を見て話し合いをしています。その日の映画は三代……おじいさん、おばあさん、両親、子供たち、そういう家族のことで、簡単にいえば姑の問題が関係するのですが、会議員の中から「いつでもこういう家族の問題にばかりこだわっているか」という質問が出た。会議員の言われたことは、私たちの家庭生活というものをみつめてみても、そのどの点からいっても、やはり地域の政治とか、広くは国の政治というものに関係している。だから蚊と蠅をなくしようということをよく言うが、それは婦人たちだけでやるのはなかなかむずかしいことで、それよりも、市なら市、町なら町の予算というように考えて、その中から予算が足りなければそれを出すようにして、国全体の一種の政治の力というものを動かしてやればある程度簡単にできる。そういう意味で、グループ活動というものが、小さく小さく固まるのではなくして、やはり自分の住んでいる地域の政治とか、あるいは経済の仕組といったようなものにまで勉強を伸ばしてゆかなければなら

いたのではやはり世の中をよくしようというようなことはできないのではないかと思うのです。だから自分が正しいと思うことに対しましては、勇気をもって私たちの自由を守ってゆく、守ってゆくだけではなしに、私たちの自由を広げてゆくというのですか、かちとってゆくということが大事なのではないかと思ひます。(拍手)

◇ 家庭における個人の自由と責任は相当訓練されておりますが、社会生活の面ではまだまだそれを阻むものがたくさんありまして、なかなかその点において自由や責任を充分に果たすということはたいへん問題でございます。その点において婦人自身の自主性の欠けている点、また社会性の訓練の不充分ということがたいへん原因になっておりますけれども、もう今はそう言っている時でございませぬので、むしろ婦人の力は、もっとしっかり固結するなりまた団結できなくても協力性をもちまして、小さな仕事でもみんな共同してやるといふこと、そうしてその面で地方自治のためにいくらかなりとも貢献するという大きな使命をもつために、自分たちの一人一人の自由、また集団における責任を立派に果たしてゆくことが、今日の時代に直向した急務ではないかと存じます。その点におきまして、第一部会の先生にいろいろ御指導願いたいと思ひます。

らないのではないかとことを言われて、向うの農家の主婦たちにもある種の感銘を与えた。

やはりグループ活動とか、サークル活動とか、あるいは婦人会というようなものを、身をもって、一歩広くしてゆくというふうな点によって、婦人の自主性や社会性を伸ばすという点に進んでゆく、こんなことが今度の会議を中心になんで話しあわれたと思ひます。

◇ 私たち学生の間でよく問題になるのですが、卒業してからそういう婦人団体に入る場合、どうしても逃避的な態度をとるのです。そういうところで活動している人たちは、経済的にも恵まれている人たちがばかり集まっている。

私たち今度卒業しますと、八割か九割の人は家庭婦人になるのですが、こんな考え方で絶対だだと思ひますが、具体的な態度として、今にも考えることができないのです。そういうことをどうしたらいいか、ちょっとお聞きしたいのです。農村から出て来まして、東京で学校に入り卒業してから一種の職業をもちますと、まわりの人たちは、すぐ職業が身についているからいいなどといわれ、なにか特別視されるおそれがあるのです。そういう場合どうしたらいいかちょっとお聞きしたいのですが……。

森下 私の家は、子供のことは子供が自分で自由に考えて、という方法をとりましたら、自分がどうしても農業学

農村の婦人が都会に走り過ぎるのは、農村の生活があまり変化がなくて淋しいということがあるのですが、それは女の立場からいいますと、やはり自分に、農村に適した技術をもち合わせていないという根本的な問題があるように思うのです。しっかりと地面に根をつけて自分で農業をやりたいという娘さんは、私は絶対に都会の娘さんと同じような格好のコースをとらないで、農業学校でしっかりと農業の勉強をすることが、結局自分の技術を身につける最大の幸福と考へております。

半生 私たち農村に住んでいる人は、自分で指導者だという態度をとることが一番みなさんについてきていただけないもどかだと思います。教育があるとか、程度の高い暮らしをしているような人たちが役員にどうしても選ばれ易い。ですからその人たちがずっと自分を下げて、みんなが一步後退し、二歩後退してゆくと、ほんとうの農村の集団が育ってゆく意味があると思う。いまの御質問非常に立派な質問だと思います。

◆ 第一部会の方へ。ききほどの御報告の中で、女は家庭にかえれという問題が女の方の口から出たというような

ということ、ある程度成功したのではないかと思います。ところが私も人生の半分のところにまわりまして、あとと半分の、自分自身の自由をこれから享樂したい。享樂という意味は、社会に出てある程度自分の才能を伸ばしたいという分岐点に立ったのであります。

私の考え方を、若い方々はどういうふうにお考えになる  
 だろうか。中年以後の方はどうお考えになるだろうかとい  
 う疑問をもちまして出て来たのでございます。

さきほど、中年の上に属する方の御質問で、私ども社会保険制度をどういうふうに……という御質問がございましたけれども、もちろん社会保険制度が盛んにならなければならぬということとは部会でも盛んに討議されましたが、私もまた、大分の地方会議においても、現在の中年以上の方のほとんどもう子供には頼るまいという声はたしかなものでございます。子供に頼らないならば、その中年以後の経済をどうもってゆくか。私はますます人間の寿命が延び、中年の期間が長くなりましたから、今から社会に出て、自分たちの自由を獲得し、また社会的なお仕事をし、また老後の経済的な安定を得たい。そういうふうな私の一生のプランをもって出て来たわけでございます。

伊藤 いまお話しになりましたような立場で、この問題が提起されたわけですが、これに対しては非常に活発

とで、私自身もそのことは非常に残念に思っているお母さんですが、子供を育てることが女の仕事であるということはお母さんとうたひ思ひますけれども、それが女の人の使命でなく、て、職業をもっているというこゝと自体にも女の向上はあつたのではないかと思う。

現在の日本の国では、そういう社会施設に恵まれておられないものですから、働いてまでも子供を育てようとする人は、非常に苦難の道を乗り越えてゆかなければならないわけです。今後は一生職業を持ち続けたいという方は非常に多いと思うのですが、子供が生まれたらすぐにも社会施設に預けて、安心して働こうという論議がされたかどうかという点お伺いしたいと思えます。

草野「供えをもつ母親は家庭にかえれと申しますと、たいへん保守的で古いように思われますが、兄は初めは職についておりまして賑り切っておりましてので、非常に家庭に入ることは辛うございましてけれども、主人と母と三人の家族会議を開きまして、結局嫁入りに入りました。

時に、私は五人の子供を育てることによって、自分がどれほど深くったかたといふことを痛感して、主人の書業に従って家庭に入つたことと後悔どころか、今私の申すに五人の、赤ちゃんコンクールにも入選した子供がおると

な議論が生まれて、若い未婚の方で職場に傾いておられる方は絶対反対であるという立場の方が二、三ありました。

いまの草野さんは、子供がある程度成長したら、自分は職場にかえるという。これに耐しましては、実際に印刷工場で、かなりの低賃金で働いている若いお嬢さんは、そんなよいいな者は職場に入ってきてくれるな、という、もったいもない意見だったと思いますが、また、結婚して間もない奥さんは、自分は共稼ぎで、子供が出来ても共稼ぎはやるつもりでおったけれども、いま草野さんの話を聞いてややぶるめいてきた、という感想をおもちになった方もありました。

その中で、実際に子供を育てながら共練きでやっておられる茂内さんにちょっと御意見を聞いたらどうかと思います。

茂内 私は現在小学校の二年生の子供を抱えながら、夫婦共稼ぎの教員をしています。

私は真野さんの御意見はある程度真理はあると思うが、今の歴史の流れから見て、非常に逆用される危険性をほらんでいるのではないかと思います。子供は母親の手で育てるだけではない、という疑問をおもちになっていったんだと思います。それにはもちろん社会保障制度のこともあるが、日本のお家庭における子供の育て方が問題ではないか。もう少し

母親から離れても自主的に子供が育つような育て方を、子供に自主性を与えるという育て方を満三才になったらできるような、そういう面から考えて、家庭で母親が子供のそばで育ててやることだけが母親を育てることではない。むしろそういう自主的に子供を育てながら人間的に成長してゆく、そういう確信のもとにそれを主張してまいりました。

司会 まだまだたくさん御質問があると思いますが、残念ながら時間がありませんので、リーダーの先生方に、ごく簡単にしめ括りの話を伺いたいと思います。

伊藤 第一部会では、いまみなさんがお聞きになりましたように、母親は家庭へかえれという問題が出た時に、かなり激しい対立議論が出て、それを聞いておりますと、年代の相違というものがはっきりこの会議に出てきたのでは、ないかという気がする。これは私の見方で、新しい戦後の新教育を受けた人たちが二十……それ以上になっておりまして、そういう人たちのものの見方というものが、それから今の母親世代の人たちのものの見方に、はっきりと差が出てきた。あるいは婦人会とかグループ活動というものを眺めている場合にも、たとえば何の意識もなく婦人会などに入ってしまった。お客様会議などという言葉がしきりに使われましたが、そういったことに對して若い世代の、

少くとも新しい教育で自主的なものの考え方を育てられてる人は、おばさんたちは入る気もないのに入ってしまう、というように批判している。それが家庭の問題、地域集団の問題、さらに組合活動というところではっきり対立しておったということが、私には印象的であったと思います。

坂西 今年のスローガンは非常にむずかしい。いろいろな範囲に亘り、抽象的であったために、非常にみなさんが苦勞なさったと思います。

若い方は個人を強く主張するだけで、集団に入る必要はあまりないのではないかというお考をもっていられたいようです。しかし議論を進めてゆきますうちに、集団というものが個人の成長にも非常に役に立つ、そうして、同時に個人が集団を盛り立ててゆく、ということがはっきりしてきました。ただ、私はやはり集団、個人、自主性、自由、責任というふうなことは、耳に聞き、口で話すだけではあまり役に立たないのであって、おかしな表現かもしれませんが、みなさんがこういうことを皮膚で感じていただきたい。あなたの顔で、筋肉で、皮膚で感じて、そうしてそれをよくじっくり考えていただくこと。

最後に私がちょっとびっくりしたのは、お集まりになった方の一人から、どうぞ先生、ここで、郷里にもって帰る

ように自由と責任の定義を話してください、ということだった。これは私が改めて責任ということに對して、ネルソン將軍のように「皇國の興隆この一戦にあり」と叫んでも何にもならない。私が皮膚で感じていただきたいというのは、そういうことでなくて、みなさん自身のものとしていただきたいということです。

大谷 今度の部会を通じて、さきほどお話がありましたように、なまなましい形で問題が出てきました。いろいろな問題を全部さらけ出していただいて、いったいどうしたらいいかということを考えてまいりましたら、はたと大きな壁にぶつかってしまつて、みんな黙り込んでしまった。この壁をどうしたら乗り越えかすことができるかということになりました。結局のところは、これは社会全体の問題、社会の政治全体につながる問題だということにだんだんみんな気がついてきたわけです。

そして最後に、みなさんがおっしゃったことは、この会議によって自分は自分なりに筋の通った考え方をしているという考え方をしていたが、自分の考というものは矛盾だらけであったということをおっしゃった。現実には集団と個人の間に矛盾というものはある限りにおいて、人々の間に矛盾があるのは当然だ。自分たちの考の間に矛盾があ

るということを感じたのはたいへん大きな進歩であつたと思う。これをどうぞお帰りの方はおみやげとしてもって帰っていただきたい。そうしてこの矛盾をみなさんで語りあっていただきたい。隔々までも広がらしていただきたいと私は考えております。

渡辺 農村の部落では助けあいが行われている。助けあいはたいへんいいということが初めはいわれていたが、だんだん助けあいというのはどういう姿のものであるかということをもみなで話しあったところ、お葬式にしろ結婚にしろ、たいへんな助けあいになっている。一部落縁ぐるみで、子供まで連れてやって来て御飯をどんどん食べて、ごちそうをもつて帰る。こういうのが実は助けあいの実情だ。そんなことが出まして、その話からさらに進んで、今度は共同募金としての、これは町や村で割当の数量がきまっている。それをみんな実はぶつづつ言いながら、助けあいの好きな農村人でありながら、そういうものには内心ぶつづつ言いながら金を出しているというところを見ると、どうも農村の助けあいというのは、かなりお互に干渉しあっている助けあいだ、というところに話が進んでまいりまして、こんな迷惑な助けあいはないほうがいいのではないかと。そういうところに農村部落のたいへんな痛がある。それではこういうものはどうしたら切り離せるのか。やはり



## 移動会議

古い共同体のしわをなくしてゆくのだ、そのしわを少しでも短かく、だんだんとなくしてゆくにはどうしたらいいか。なかなか問題の解決は容易ではないが、おぼろにみんなが頭に描かれたことは、やはり生涯の仕組を変えてゆくより仕方がないのだ。それには、婦人はどういう立場をとったらいいか。森下さんの話で出たように、婦人も農業経営に参加して、技術を身につけて、むしろ農家の男の方は、普通科の高等科を出ている、というように、非常に技術的に熟していないんだから、女の人もその技術を身につけて、早く生涯の仕組を切りかえてゆくことが大事なことではないか、ということがおぼろながら、みなさん心の中におもちになったように私は印象づけられたのであります。

司会 どうもありがとうございます。集団における個人、その自由と責任、総会の話し合いをこれで終りたいと思います。

## 東京班

- 資生堂東京工場視察
- 沿風園（養老施設）視察
- 祖師谷住宅視察および主婦との懇談会
- 新宿生活館視察

## 懇談会出席者

## ○会議員

中 田 ヒ サ（北海道）  
 斎 藤 敦 子（青森）  
 佐 藤 と き 子（宮城）  
 加 藤 テ ル（秋田）  
 仁 平 イ チ ノ（福島）  
 芳 野 よ し い（千葉）  
 土 屋 明 子（山梨）  
 金 子 サ ト（静岡）  
 風 間 昭 枝（愛知）  
 岡 部 静（京都）  
 和 田 治 子（大阪）  
 飯 田 よ し 枝（大阪）  
 小 村 明 子（島根）  
 河 野 ミ ヤ（福岡）  
 草 野 光 子（大分）

## ○祖師谷住宅 主婦十三名

## ○NHK江上婦人課長

## ○司会 東京少年婦人館長

司会 私どもの東京班は、祖師谷の団地に移動隊を持っ  
 て来させていただきました。そして会議員の皆さん方と、  
 祖師谷住宅にお住まいの主婦の方々にお出ましを願って、  
 ここに御一緒にお話し合いをさせていただくことになりました。

今年、婦人週間の目標にそって、全国婦人会議では、  
 集団と個人の関係は一体どうなのであるかということ考  
 えることになっているわけでございます。ただいま非常  
 な立体的ななかにはちょっと見かけがたい団地住宅とい  
 うものを会議員の方に見ていただきましたが、いろいろ御  
 不審にお思になる点があると思います。どういう点でお  
 困りになっていらっしゃるのか、またどういう点に喜びが  
 あるか、というような点で、新しい論点が、今後生まれて  
 くるのではないかとということが考えられるわけでございま  
 す。ですから、今年の婦人週間の目標に沿って、皆さんに  
 いろいろ御質問をいただきまして、それに対して実際の御  
 経験をお答えいただきたいと思います。どうぞよろしくお  
 願いたします。

まず団地の家庭の問題について、何かお尋ねになりたい  
 ことがございましたら……。

芳野 お子さんの教育についてですが、狭いので、運動  
 不足になると思いますが、その点いかがでしょうか。

主婦 団地の中に遊園地がございますので、子供たちは

自由に遊びます。その点非常にいいと思っております。  
 風間 ただいま四階のうちを拝見しましたけれども、高  
 いので小さい子供さんが危なくないでしょうか。

主婦 ちょっとそういうお子さんは危なうございます  
 ね。  
 主婦 協会のほうでお入りになるときに、大体一階、二  
 階に小さいお子さんのおありになる方、上のほうは御夫婦  
 だけとか、お子さんのあまり小さくない方とか、というよ  
 うに配慮して下さるのです。

金子 皆さん方、何か隣同士で協力していらっしゃるこ  
 とございますか。

加藤 みなさんは個人の生活を大事になすって、うちの  
 中に閉じこもっていらっしゃるって、人に干渉されたくない  
 と思う方も多いと思いますけれども、来る道が大へんきれ  
 いになっておりますが、その辺のかね合い（笑声）はどん  
 なふうになさっていらっしゃるのですか。

主婦 毎月各家庭で百円ずつ出していただいて、その中  
 から清掃夫を雇いまして、お掃除なり雑草取り、それから  
 砂場の小さいガラスのかけらなどを拾っていただくとかし  
 ております。

司会 今の加藤さんの御質問ね、たとえばお庭の芝生で  
 すね。一階の前の中庭とか、そういう共同でもっているも

のはどういうことになっているかということもお聞きになりたいお気持ちもありになると思いますが……。

主婦 そういうことは八軒で——一つの階段が八軒ございますので——お話し合いしまして、階段毎に住居の前だけは処理しています。だから芝生もその八軒の方で草をむしって、一、二階の方が花壇を作ったりしております。

加藤 その話し合いは、どこでもスムーズに行われているのでしょうか。

主婦 一つのブロックがきれいになっていて、ほかが汚ない場合は、ほかのほうで話し合っているようです。

加藤 チームワークを八軒が守っていらっしゃるのですね。

土屋 私も甲府市に住む集団住宅の主婦でございますけれども、私のところは八軒が一つのブロックになっておりまして、委員を選出しまして、三月交代ということになるのでございます。こちらは連絡機構というか、そういう点はいかがでございますか。

主婦 私のところは毎月交代でしております。

主婦 みんなで相談するとか、代表的に交渉するということのような場合は、月番の方がおやりになるのです。

司会 近所隣でお互いに力を合せる問題というようになるとに、お話がいったようでございますが、自分のうちだけ

の個人の生活を確立させることができるかというようなことを、団地の奥様に承りたいのですが……。

加藤 お隣同士わずらわしいとか、それからボス、といっているんですが、指導権を発揮なさる方がいらっしゃるという場合、皆さんはどう思っているのでしょうか。

主婦 私は一階でございますが、子供もおりません、入口を中心に両側に四軒ずつ、八世帯でございます。そして隣組ではございませんが、八世帯を一組としてお当番を一月交代でやっております。お当番じゃないから知らんぷりしているというところはございませんで、私の場合はなるべく自分がやるようにしているんですか、いい意味の個人主義的な生活で、ほんとうに私どもの八世帯の場合は、理想に近いような皆さんいい方でございますから、不平なんかもございませんね。

加藤 共かせぎのときは、お当番はどういうふうにしていらっしゃるのでしょうか。

主婦 私の組には共かせぎの方はいらっしゃいませんけれども、お当番もやはり都合の悪い方ございますね。そういうときは、私一階でございますから、それに年の功で、皆さんのをお引き受けることもございます。無理に干渉はしませんけれど……。

加藤 ですけど、お願いした方は心苦しいとお思いにな

るのが普通ではございませんでしょうか。

主婦 そうでもございませんね。

加藤 そうしますと、御自分の責任を果さないということもあるのではないのでしょうか……。その責任の限界が私よくわからない。階段はお当番がなさるのでなくて、個人がなさるんですか。

主婦 それは組によっていろいろ違います。

主婦 私どものほうには二軒共かせぎの方がいらっしゃるまして、あとの六軒でやっております。その方たちは当然お忙しいのですから、おやり下さらなくてもいいということとで、皆さん不平もなくやっておりますね。

芳野 冠婚葬祭の助け合いはどんなふうに行われていますか。

主婦 私どものほうでは、最初越して参りましたとき、顔合せの意味で一度八軒で集まりまして、そのとき慶弔規定、という大げさですけれども、一戸百円でお返しなしということに決めました。

芳野 誕生日の祝いとか、そういうことはなしですか。

主婦 最初一周年記念というのをいたしました。そのあと多少出たり入ったりしまして、何回記念ということではなくて、お正月なんかに、やはり全部で記念撮影したり、とてもなごやかにやっております。

芳野 百円の対象になる行事は、亡くなった場合、結婚、出産の場合ですか。

主婦 それからお越しになった場合。まだ不幸という例はないですけども……。

加藤 人には迷惑かけないけれども、わずらわしい交際をしたくないという方、そういう方は誰のかわかったアパート生活で、自由に個人主義の生活をなさることができそうですか。

河野 老人ホームで老人が非常に生き生きとしていらっしゃるのを見て参りまして、こちらの関わりがちなままして、お年寄りがいらっしゃる方はどうなすっているかと思いました。それから何となく隣同士孤立化しておるというような感じを受けましたが、それが子供に影響しないかということを考えますが……。

司会 こういう狭い、合理化されて必要だけにとどまった住宅の中で、個人のコーナーが持てるかということ、それから老人問題、そういう問題が出たわけですが、いかがでしょうか、一人一人の方がどういう自由を楽しんでいるのか、たとえばお年よりの場合とか、勉強していらっしゃる皆さんの場合……。

佐藤 大体お家族何人ぐらいでしょう。

主婦 私のところは女の子が二人と夫婦で四人家族でこ

ざいますが、男の子と両方いらっしゃる方は、お部屋のことで御心配になると思います。

土屋 おしゅうとさん御夫婦と一緒にいらっしゃる方、ごいませんか。

主婦 ほとんどないと思います。どちらかというと親子でいらっしゃる方がありますけれども、おしゅうとさん御夫婦という例はごいませんね。お母さんと息子さんの場合は、息子さんがお嫁さんをもらうと別居なさる。

主婦 先ほどの問題でございしますが、私子供が三人おりまして、小学校に中学、高校に行っております。みんな大きいので大体三人に占領されて、親は居候のような感じでございしますが、何年か過ぎると子供が一人ずつ独立していくと思えますので、それを楽しみにしてゐるようなわけでございます。(笑)子供が小さいうちはいいけれども、ちょっと二間じゃ狭いという感じがいたします。

主婦 親と子供と同じ部屋にやすむというのはどうもよくないですね。

佐藤 四人、五人でございするとちょっと困りますね。

加藤 集団と個人の関係で、たとえば子供さんのしつけをなさりたいというとき、あそこは何時まで遊んでいるからということで、そういう集団の流れに、自分のうちの子供も流されてしまつて、しつけが容易でないということとは

も……。

主婦 結局子供にせがまれて……。一軒の家に何人もの子供が、ちょうど夕飯ごろに行きまして迷惑だろうというようなことで、泣く泣くテレビを入れるというのが多いのではないのでしょうか。テレビの多い棟には結局それでだんだんふえていく……。

加藤 やっぱり伝わって行くのですね。みんなテレビを買うというところまではお考えにならないですか……。

主婦 今までに話が出ましたけれど……。

司会 さっき大切な発言がありました、たとえばお母さんと息子さんと一緒に住んでいらっしゃって、息子さんが結婚すると別居するというお話をしたが、一体どちらが出て行くのですか？

主婦 お母さんのほうです。こちらは独身の方はいけないわけでございます。婚約同士でお申し込みになつてもいいですけれども、いつ当選するかわかりませんからお母さんと息子さんで入居していらして、結婚まで息子さんのめんどろを見てあげる。

司会 最初からそう約束されているのですね。お入りにする時に……。

主婦 御一緒にいらつしても、それはかまわないですけれども、初めからそういうふうな予定のもとにお越しにな

ありませんか。

主婦 それは別合に自由だと思います。この中だけでなく、町の子供さんもうらっしゃいますが、この中同士も大へん都合よく遊んでいるように思いますけれども……。

斎藤 私よく東京の生活について「隣は何をする者ぞ」というような無関心な方が多いと聞いてましたが、かえってさばさばしていいのではないかと思っていたのです。その点こういう集団住宅ですと、隣の方々に生活にあまり立ちいられ過ぎて困つたというふうなことがございせんでしょうか。

主婦 その点窮屈な点はないように思います。

岡部 裏からも表からも生活がのぞかれて、お洗濯なんか、お困りになることはございせんか。

司会 団地族の見栄の問題はよく言われますね、どうでしょうか。

主婦 私どものほうは、大体半令層が若い人で占められておりますので、割切つて考えているのではないかと思います。

加藤 テレビなんか立っているところは一っぱい立っているけれども、立っていないところは全然立っていない、ここの棟ではないのに、さっきの屋上にはほとんど立っているというふうな傾向が見られるようでございすけれども

っているわけです。

河野 いなかでは隣のミソガメの中の分量まで知っているけれども、東京ではそういう点割切つていらつしやいますし、あまり差し出がましいこともないとおっしゃいましたけれども、そこが家族のお話合いでできたものか、自然に、お若い方だから身についていらつしやるものか、そこを、いなかの者としてお聞きしたいのです。私どもの第二部会で、いなかでは、いいつもりでお隣のお世話をやきますと、おせっかいといわれるので、それだからこちらの方はいいかげんにしておくとお話しが出ましたが、どのところに線を引くのが新しい行き方か、それを伺いたいと思うのです。

司会 今の御質問は、皆さん方が若いから、年代というものから、非常に合理的にパッパッと何でも考えていらつしやるものか、それとも非常にお困りになつて、皆さんの知恵を出し合い、話し合いでそういうふうにしたのか、その出発点を伺いたいということです。

主婦 地方では、人の生活に干渉し過ぎるのではないのでしょうか。

飯田 家族の話し合いでそういうのをきめになったのではなく、人間社会の中の一市民としてのルール、それに沿つて皆さんやっつけていらつしやるのではないのでしょうか、常

職的に守らなければならないルールに沿って、人の生活に立ち入らないとか……。

佐藤 生活に干渉しないで、お互いに仲よく手をつなげるということね。それはほんとうに何の基盤もなく、スムーズにできるのでしょうか。私地方の者ですから、そのところが理解しにくいのですが……。

主婦 そんなこと申し上げてはおかしいかもしれませんが、けれども、この住宅は大体サラーの線が一定されているわけです。そういった点も大いにあるのではないかと。あんまり上もいらないし、下もいらないし、やいません。大体年令層も似ていて、条件も同じよう、そういうことが非常にみんなが気持ちよくおつき合ひできる条件になっているのではないのでしょうか。

佐藤 ほんとうに皆さん、手をつなげる仲のよい方ばかりいらっしやるのでしょうか、何か問題が起きたとき、隣に干渉しないで、冷めたくなったり、そういうことございませんか。

主婦 人間同士ですから、病気だとか、それは大へんだという問題のときは、みんなやっばり力を合せます。

佐藤 常には干渉しなくても、お困りのとき、苦しみのときはみんな力を合せるのですか。

主婦 一階から四階まで、みな飛び出して来て、医者を

のほうでやって下さって、協会の方で常住の方もいらして、その方が事務的なことをやって下さる。金体を通じてどうしなければならぬというような問題は、今まで起っていないわけですね。

土屋 会費は、各役員が集めて管理人に届けるということですね。

主婦 それは家賃と一緒にございます。それから階段のお当番とか、そういうことは住宅協会のほうから、入るときに一応一カ月交代でやってほしいというふうに入るときに規則として請がございます。一応申し合せの規則でございます。

加藤 共同生活ではごく小さいことからトラブルが起る、うちではテレビがないからと方々に行ってテレビをもらいになるが、先方で食事なさるとか、そういう迷惑な時に、都合が悪いと言って、あっさりおっしゃれるでしょう。か、小さいきっかけがトラブルの原因になるのですか。

主婦 私、こちらに参りましてテレビを買ったんでございます。前はテレビを入れてなくて、子供が御近所に見せていただきに行っていたでございます。夕飯だからと呼びに行きますと、あと十五分で終るからと、子供は帰ろうとしないうです。それで私、テレビを入れても、見にいらっしやいと云わないことにして、もしそれでも来られた場

呼んだりします。

仁平 婦人として、何かまとまった組織のようなものを持つていらっしやいますか？ 先ほど八軒ごとに、一つの階段ごとにお当番をきめて、役員を出すということは伺いましたけれども、各棟から役員を出しになって、全体の組織を作るとかいうことはございませんか。

土屋 私のほうは一棟から一人ずつ役員が出て、それは半年交代ですが、大きなグループを作っていて、会長があるのですよ。ここではそういうことはどうなっているのやいませんか。

主婦 そういう会は持っておりません。管理人さんがある程度やって下さる。

仁平 皆さん方で、何かしなくてはいけないというよう問題は全然起らないということになるのですね。個人で解決する事件だけしか起っていないというわけですね。

主婦 住宅の管理については管理人がおりまして、それが大体やってくれます。それから個人個人の問題でございませぬ。たとえば綱物をしたい、お花をしたいという方は、生活科学協会の協力がございまして、そこで生活面の指導もして下さる、講習会その他ここで集まりを聞いて、若干の会費を取ってやるということで、そういった集まりはございませぬ。リトダーはおきませぬけれども、科学化協会

合はお見せするようにするほうがいいと思う。

斎藤 一応時間を制限して……。

主婦 何だかお子さんに気の毒ですけれども、見にいらっしやいと申し上げたことございませぬ。

河野 私どもでは地域婦人会というものは、デンと大きなのがございまして、そこへお嫁に来たら、その会員になることになっている。こちらはそういう既成の婦人会はないのでございませぬ。

主婦 そういう既成のものはございませぬけれども、とにかく上から規制されるのは皆さんいやなのです。皆さんが良識を持っていらっしやる。私、その中からやはり何か集まりがほしいというわけで、希望者が「婦人の集い」というものを作っております。それに入るのも入らないのも自由でございませぬ。

加藤 皆さん御自分のお子さんに、共同生活だから散らかさないように、人に迷惑かけないようにという御配慮なんかはどうしていらっしやいますか。

主婦 私、参りますときに、それが一番心配でございまして、子供に団地だから静かにしなさい、御近所にあいさつなさいとか、そればかり気にしていたのです。子供も自然にそうなりまして、階段を上るのも静かにして、皆さんにあいさつもする。

加藤 そんなことまで、子供さんが自然に身につくとい

主 婦 今のお子さんのような方はかりいらっしやるとい  
いけれども、お子さんに荒らされるので困っている方が  
(笑聲) います。

仁 平 神経質になりすぎることはございせんが……。

主 婦 参りましたときはちょっとマイローゼギみになり  
ました。お若い方に赤ちゃんができまして、四つ五つにな  
りますと、階段上ったり下りたりなさいますと、そのほう  
がにぎやかになりますので、今のところはもう氣にしてお  
りません。

主 婦 つまりお子さんが、集団生活になれていらっし  
やらないせいだと思いますが、住宅協会のお花を荒らすと  
か、中には相当大きな棒でたいて木を丸坊主にしていま  
います。そういうことがずいぶん多いでございます。

河野 福岡県では学校から帰って参りました子供の生活  
の中で、一番大きな部分を占めているのは子供の活動で  
す。これが非常に大きな部分を占めまして、大抵の家の  
お子さんがお世話になっていきますけれども、これは学校に  
行っていられっしやるお子さんでも、行っていられっしや  
ない方でも、子供が悪いことしますと、子供の会のお子  
に、子供の遊びを見てくれとおっしゃる、お子さんがお互

いに話し合って、子供さんの生活を見るときどうにして  
おります。

主 婦 児童会はございすけれども、自発的な集会で  
ございます。子供たちが自主的に自分たちもこういふところ  
に住んでいるのだからいい生活をもっていこうというた  
めの子供会です。

佐藤 こちらのお子さんは児童館があつて、ほんとうに  
うらやましいと思いますが、限られた方だけでしよう。放  
任されて、というと語弊がございすけれども、児童館に  
見てもえないうい子供のために、どなたかなにかして  
いらっしやるのですか……。

主 婦 その点は今まで科学化協会のほうで、子供のため  
のそういう催しもたびたびございましたし、読書会もこ  
ちらにございすので、ある程度の本もございす。会費  
をおさめて、グループを作つてやっています。

司会 生活科学化協会という上からのものでなくて、団  
地のお母さん方の間に、公徳心ですか、共通のものを大切  
にするという生活態度、小さいときからそういうし  
つけをすることを考えなければならぬというふうなお話  
合いが着つて、何かいい実を結んでいただけないものかし  
らと思つたのです。

佐藤 自分で自制したり、子供なりに悪い遊びを牽制し

たり、子供の間からそういうことが自然に生まれて来ま  
す。

主 婦 一つのグループに、私どもをわすれらわすような子  
供がございまして、それは全体の責任、皆さんの連帯責  
任というふうな感情でおります。

金子 「婦人の集い」というのは、どんなふうな集まりで  
しょうか。

主 婦 大体会員は居住者の三分の一ぐらいなのですけれ  
ども、新聞を出しております。

中田 お世話なさる方は輪番制なのですか、新聞はどの  
ようにして……。

主 婦 月一回、半紙版のものです。皆さんが原稿をお出  
しになって、皆さんの俳句、和歌などを載せます。会費は  
月十円です。

風間 自主的なグループをお作りでございすね、こう  
いう集団住宅ですと、選挙の場合、利用される、といつて  
は悪いけれども、何かにつけていろいろ問題があるの  
ではございせんか、選挙に対して、皆さん個人の自主的な  
意思でなくて、管理人の方に影響されるということが……。

主 婦 それは自由です。

土屋 管理人の問題が生まれなければ、管理人といふ  
のはどなたがおなりになっていらっしやるのでございす

か。

主 婦 官公吏ということになっているのです。それで、  
応そのお家の奥さんが管理していらっしやる。

仁 平 住宅協会から指名されて、管理人になるのです  
か。

主 婦 普通は抽せんて入居するのですけれども、管理人  
は住宅協会が推選されまして、入りますのに抽せんはない  
のでございす。

加藤 激しい競争の中から推選でお入りになるわけでは  
ないか。

主 婦 東京都の関係で都の小学校の校長とか、住宅公団  
金融公庫からお出になつていらっしやるわけでは  
ないか。

土屋 大抵御主人はお勤めだから、管理人の仕事そのも  
のは奥さんがおやりになるわけではございすか。

主 婦 多額の金額を預かりますから大へんです。一人が  
百戸見当つていらっしやる、全部で十人いらっしやるわ  
けです。

加藤 お手当は出るわけではございすか。

主 婦 別にございせん。

加藤 もらつてませんか、それはひどい。(笑聲)

土屋 期限は何ヶ月とか、任期はあるんですか。

主 婦 三、五年おやりになつて、やめたい場合は申し出

られます。

芳野 ちよつと経済的のことを伺いたのですが、保育園など大へん設備が完備していて、いい生活がおできになると思ひますが、いわゆる団地なみの生活をなさろうとすると、支出も多くなると思ひますが、経済的圧迫をお受けになりませんか。

主婦 私ども、すれすれの線で生活しておりますし、ありのままの姿で生活しておりますから、一向窮屈に感じません。

主婦 大体お入りになる前では、どういうところにお住まいになっていったかという、六畳でも五千円、六千円で権利金が五万円もとられて、それでこちらが抽選で当たっていらつしやうて、その点経済的にはいくらか助かるのではないかと思うのです。こういうものを全国的にたくさん作っていただいても、この程度なら皆さんお入りになれるのではないかと思うのです。建物もきれいだし、中も電気器具にしなければならぬとか、そういうたことになってくると、それは大へんですけれども、そういうことは自分で生活できる範囲内でやればよいので、めいめいがね。

加藤 これから長いうちに、管理人の方がボスの存在になりませんようにしないと……。

主婦 そういったことは絶対にございませぬ。(笑聲)

さいますから、リースのカーテンはいつもかけっぱなしです。別に悪いこととしてゐるわけでもございませぬけれども、あけてしまひますと、普通の建物で一番はずれでございまして、前のほうのあれだけの建物全部から、何かのぞかれてゐるような気がして、いつもリースのカーテンをかけたままです。それがノイローゼみたいになって、一ぺんいいから、あけて生活してみたいというような気がします。

主婦 私も一階でございしますが、カーテンはいつもあけてっぱなしです。皆さんがうちの中をよく御存知だということ、かえって安心で、玄關だけはかぎをかけていますけれども、庭のほうはいつもあけてっぱなししております。

主婦 くず屋さんも通りましよう。私、何かなれませんと、のぞき見されるというように思われて……。

主婦 お子さんのある場合、カーテンを閉めておくことなどできません。夜は巡視がございます。

主婦 私は、部屋の中をよく見せようとも考えませんが、あるものしかないという考えで、非常に軽い気持ちでおります。

仁平 皆さん、お隣同士でお茶飲み話とか、集まつてお話ししたり、そういうときがございますか。そういうことは絶対なさらないで、個人々々で、生活していらつしや

加藤 管理人が町内会の役員かなんかのように……。

主婦 事務的なことだけでございませぬから……。

加藤 結局お金を集めるし、いつも皆さんのことをするという意識になつてしまつて……。

主婦 ほかではそういうことを、選挙のときにやるというふうなこともあるような気がするのですけれども、こちらではそういうことは全然ございませぬ。あくまでも個人々々の自主性を尊重しておりますから、そういうことは全然ないと思ひます。

仁平 さっきからお聞きしますと、ほんとうにいいことばかりですが、こういう生活をなすつていて悪い点はどんな点でございませぬか、それをちよつとお聞きしたいと思ひます。こういう生活でこういうことは無いほうがいいというふうな点。

司会 私こういうことを聞いたことがございませぬ。団地生活ではまずカーテンが問題になる、それこそ前もいうるも見えてしまふのですから、引越していらつしやる方がどういうカーテンをお下げになるかが関心の的になるので、ゴブランのすこいのもお下げになるというふうなことを、ちらつと聞いたことがありますが、いわゆるのぞかれる生活のいやさ、そういう点はいかがですか。

主婦 私、年寄り夫婦でございませぬけれども、一階でござ

いますか。

主婦 私のところでも茶飲み話などします。

芳野 主にどんなことをお話しになりますか。(笑聲)

主婦 大体子供のしつととか、健康上のこととかで、他人のうわさとかそういうことはないのです。

主婦 そういうときに来たくない方は来ないし、来たい方だけ来る。しよつ中顔出さないから工合が悪いというふうな、そういうことはあんまりこだわりませぬ。

主婦 この方もいらつしやるからお入りにならないと勝えばお入りになる、だから四人になったり、五人になったりです。

仁平 いなかでは他人のことばかり気にしてゐるのですよ。自分を忘れてゐるくらいに……。皆さんは他人のことを気になさらずに、御自分の生活が仕合せになるうというそういう結論ですね。

主婦 地方の方は、他人に対する干渉が多過ぎるのですね。

佐藤 まあ気にするのです。

主婦 私も地方に住んでましたけれども、地方の方が、もつとお互いに教養高めることに努力なされて、話題を変えていかれたらどうでしょうか。お百姓してらしたら、野菜物がどうしたらよくできるかというふうなことをお話し

合って、あそこのお父さんがうるさいとったことではなく、話題をもう少しあらゆる方面にもっていった、少しでも向上しようということですね。そういった点、私は近所のお母さんたちにお百姓のことを教わってまいりまして、自分で効果があったように思うのです。そういった点でもお互いに勉強されるほうがいいと思います。私もいつもどんな場合でも勉強の場だと思ひまして、いろんなことを勉強してきました、お小さい方たちにいるいるお伝えしたリなんかしておりますけれども……。

仁平 皆さんはどういうふうにして勉強していらっしゃるかということをお聞きしたい。

芳野 私、農材から出て来た者ですけれども、農材の忙しさは大へんなのです。こちらの場合、ひまな時刻をどうしてつぶしていらっしゃるか、(笑)伺いたいです。

主婦 ひまを利用して、洋服をなさったり、編み物をなさったり、内職というほどではないけれども、よそのものもたまにはやるという程度の、時間の切りまわしをやっていきます。

加藤 内職のグループもあるようでございますね。

仁平 都会の方は勉強々々とおっしゃいますけれども、あたりがそうだからそうせざるを得なくなる場合もあるし、そして今までの封建性のない、因習のないところに暮

上げましようとしてよく話して、子供は一応納得してくれます。また一軒のうちにピアノがございしますので、私もほしいと申しますが、そんなのは天井につくらいいお金がなければ買えないのだから、あなたはバイオリンのおけいこしましようといってお聞かせると、本人が納得してくれます。押しつけがましいですけれども一応納得します。それからちやうど児童館が二階でございまして、園児の方が遊んでいるのがよく見えます。それであなたは五つになつてから行きましようというふうで、納得していらして……。

河野 団地では若い方も年寄りも一緒に何でも判断していらっしゃる、いなかの方では、町風というふうなものがございまして、その中にとけこめなければ、自分が近所についていけない、その風習の中に悪いものがあると思ひますけれども、決してこれを打ち破ることができない。破ろうとしますと先住者はおもしろくないというわけでございますけれども、団地なんかではそんなこと何もない中で生活していらっしゃるわけでございますね。今日のお話なんか伺いまして、今からいんなことを取り入れられ、皆さんで話し合つて、決して悪いカスはつけていただきたくないと思ひます。

佐藤 ほんとうにそう思ひます。

加藤 年を経るに従つて、何か悪いものがついてくるか

していらっしゃるから、したいようになされたいと思ひますけれども、いなかはどういう地盤の非常に悪いところに生活している。でも今はとても勉強していらっしゃるんですね。いろいろ話し合ひして、小さいグループがたくさんできております。そうして勉強しているのですよ。皆さん以上に……。ですけれども、それに抵抗する大きな力がまだまだおくれた遺物として、農材には残っている。それに抵抗していくだけの力がないのです。都会の人はほんとうに幸福な御身分だと思ひます。

佐藤 農材の古さの中に抵抗しながらやっているということ、おわかりになつて、いつでも励ましていただきたい。皆さんの仕合せを少しでも農材に……。

芳野 大人の方はそれぞれの収入に応じた暮しをして、割切つていらしても、子供の場合はなかなかそうはゆかないと思ひます。私の知っているある団地の人から一軒の坊ちゃん三輪車をお買いになると、子供はほしがる、予算にないお宅なんか、大人は割り切つていても、子供はほんとうに困るというお話を聞いたらけれども、こちらさんのほうは、その点どうでしょうか。

主婦 私どものほうで一時自転車はやりまして、私の四つになる子供も自転車はほしいと言つてましたが、自転車は危いし、あなたは本が好きでしょう、本を買つて

ら……。

司会 時間もございせんけれども、この際どうしてもこれだけは伺いたいというふうなことを……。

飯田 東京の盛んなアパート群を見まして、ここからこそ最も近代的な集団と個人のあり方が生まれてくるのではないかと、希望のようなものをもっておりまして。ここではあまり話し合ひがないとか、グループもないがとおっしゃつてましたけれども、むしろそういうものを持ちたいと思つていらつしやらないかと思うのです。そういうものをお持ちにならなくても、新しい集団の行き方としては、自分のルールを守ることと責任を感じたのではありません、そこに新しい集団のあり方を感じたのですけれども、皆さんからお話をお聞きして、ほんとうに私の思つていた通り、みんな自由と自主性を楽しんでいらつしやる、これを伺つて、やっぱり理想的だと思つた。自由と自主性のうちに必ず責任があると思ひます。人間の社会生活には責任があるので、その責任を通して子供を育ていくのが母親の責任だと思ひます。子供さんが協会で植えた木を抜くと思います。そういうお子さんをお母さんが、集団生活の中で、そういうことをしてはいけないということをおしつけになることが、これからのお母さんたちの責任だろつたということですね。



閉会 大阪の方が大へんいい結論をつけて下さいました。団地の奥さん方ほんとうにおりっぱで、今年の婦人週間の目標に沿ったような、ほんとうに自由と自主性を集団の中で楽しみながら、育てながら生きていらっしゃるのですね。今日、今日は地方の方と相互に御意見の交換ができて、双方とも勉強になったのではないかと思います。N.H.K.の江上婦人課長がお見えでございますから、何か一言。

江上 どうも今日は大へんに大ぜい会議員の方が押し付けて、方々——お見せになりたくないところもございました。見せていただきまして、ほんとうにありがとうございました。こんなふうに親しくいろいろなお話がとうございました。こんなふうに親しくいろいろなお話しあいができるというございました。会議員の皆さんも今日は方々見学をなさいます。お疲れだったのにいい会がなごやかにできているようで、大へんけっこうでございます。皆さんよく言えばと書いてくいたことをおっしゃるものだと思つて、(笑)私、感心いたしました。こういう集団の中に住んでいらっしゃいますと、言えないこと、言にくいこともおありになったと思ひますが、それがまたいいことではないか、N.H.K.と労働者の座談会があった翌日から隣の人と工合が悪くなったということでは困りますし、でもお話を伺つておりますと、非常に進歩

の方向に向つて、皆さんお考えになつていらつしやる、大げさな話ですが、私ホロリとするような気持ちで、隣の人に、お話をはずねねと書いて喜んだのでございます。この会議員の方たちは、明日はまた会談の続きでございます。また明日は一生懸命お話し合いをいたします。どなたでもけっこうでございますから、お誘ひ合せて、この人たちが明日は何を言うか(笑)よく確かめに、どうぞいらしていただきたいと思ひます。私もアパート生活しております。今日はいいい勉強をさせていただきました。どうも皆さんありがとうございます。

(閉会)

懇談会出席者

○会 議 員

|           |           |           |           |           |           |           |           |           |           |           |           |            |             |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|-------------|
| 渡辺 康子(岩手) | 小川 志子(栃木) | 宮崎 弥生(群馬) | 長岡 栄子(埼玉) | 村松 愛子(東京) | 栗山 茂子(東京) | 片山 久子(岐阜) | 小山 久子(岐阜) | 青山 恭子(広島) | 松浦 定子(愛媛) | 竹下 初音(佐賀) | 住吉 和子(長崎) | 平川 加津子(大分) | 佐々木 絹子(鹿児島) |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|-------------|

○東芝勤労者の主婦 十一名

○その他

東芝高野厚生課長

斎藤勤労課長

○司会 神奈川婦人少年委員長

神奈川班

○東京芝浦電気株式会社小向工場視察

○同工場住宅および消費組合視察および勤労者の主婦との懇談会

○神奈川県勤労婦人会館視察

○県立ゆかり園(肢体不自由児養護施設)視察

司会 それではただいまから全国婦人会議の会議員の皆様と、東芝の社宅の主婦の皆様との懇談会を始めたいと思います。

ただいま初めて顔を合せたわけでございますので、こちらの皆様から申し上げますれば、全国の皆様がどういう生活をしていらっしゃる方々かしらと疑問をお持ちでしょうし、私共も今社宅の方を拝見いたしましたので、皆様がどういう生活をしていらっしゃるか想像しているところですので、みなさま大體朝起きてから夜おやすみになるまでどんなふうな生活をしていらっしゃるか、というようなことからお話しただけだとは思っています。

主婦 家族は五人で、主人と私と子供が二人おばあちゃん一人おられます。最近できた、東芝の家族のアパートに入らせて頂いております。今までは寮におりましたので一部屋でございましたが、今度は二部屋ございまして、その上、水道とかガス・電気みんな便利にできているところに入れて頂きまして、なんだか夢のように毎日過しています。朝主人が出てからは、今年幼稚園に入った子供を幼稚園へ出し、そのあとはなにやかやと洗濯をしたり用事に追いついておられますが、その間に少しばかり洋裁の内職をしておりません。そんな程度でべつにこれといったことはしておりませんし、婦人団体のようなグループにも入っていない

ません。おばあちゃんがおられますものですから、やっぱり二人だけの家庭とはちょっと違って、少し窮屈なことはあるけれども、私はおばあちゃんには一年もいってまします。それから——なるだけ親切にしてあげようと思っております。それでも、お互いに言いたいことははっきり言っております。さくばらんと言って、黙ってしましようというふうな気持はございません。お互いにはっきりしておりますから、こんな点いいのか悪いのかちょっとわかりませんが、私共では大變気持よくいってまいります。

小川 もと主人が富士電機におりまして、新庄の住宅に一年ほどいたことがございます。そのとき同じ住宅の生活の中で大變摩擦があったことを記憶しております。そういう点、この社宅ではいかがでしょうか……。

司会 隣近所のおつき合いの関係ですね、その辺はいかがでございますか？

主婦 私なんか呑気で、全然ほかのことは気にならないものですから平気です。ほんとうに朝から子供と一緒に毎日遊んでおります。主人は今日は残業かなと思うと、隣の旦那さんが同じ課だものですからすぐわかるので便利です。それでないとお汗などあったためたりさめたり大變ですが、今日は残業かしらと聞きにいて、今日は残業だよというところから作ったり、定時だからもうすぐ帰ってく

るよというところ、あら大變といってそれからあわてて作り始めた(笑)とても便利ですよ。

主婦 何時に終われば何時に帰るということはみんな会社の人で知ってますし、私も同じところに勤めてましたから、今日は何時に帰ってくるから何時に御飯だとか、寝る時間もみんなきまっておりますから……。

主婦 私は上平閑寮で寮生活しております。世帯数は二十軒、若い人が半分、あとは四十から五十の人がほとんどでございます。最近若い人がとても多くなりまして、昼間は自分たちで編ものなどをやっております。夜はお花やレース編、お料理などを一月に二回か三回ずつとやっています。今度赤ちゃんが生れましたので、ちょっとこのところをやめたのです。家族は主人と子供が二人おりまして四人。

司会 寮の方ですと、部屋が並んでいるわけですか。

主婦 部屋は上が十軒の下が十軒、上下になつています。司会 そうしますと台所やなにかはみんなで一緒に使うというわけですね。

主婦 全部自分の廊下のところは石油コンロを出すようにしております。水道は上と下とにそれぞれきております。このごろはよく火災がありますので、そういう関係上石油コンロは中に入れないよう廊下でやっております。

司会 廊下の掃除などはどうしていらっしゃるのですか。

主婦 階段や壁の使うところは順番に、各自のところは

もちろん自分でやりますが、お手洗いは一日おきに当番でやっております。また当番制で十時になりますと夜警をや

って鍵を締めるのです。一カ所だけ開けまして、そこは自由に入ることができるようになっております。

主婦 私の寮は割合に年配者が多いのです。それで、毎月各家が大体百円から二百円の積立を致しまして、一年に一回主婦を対象に、子供を連れてバス旅行をします。それがまあ寮の一つの娯楽になっております。それからお互いに助け合うという意味で、入寮致しますと月五十円づつ強制的に貯金致しまして、慶弔のときなど急にお金のいる場合、自由に寮長さんに申し込めばいつでも大體あるお金の範囲内で貸して頂けるようになっております。まあ年配者が多いせいですが、あまり自分達の向上を目的とする

っております。

司会 やはりいろいろと当番制ですか。

主婦 掃除当番は二日に一ぺんづつで、廊下と階段の掃除をします。夜警は冬季には三回、夏になりますと一回だけ、輪番制でございます。

司会 寮の生活はそれこそ晩のおかずまで匂いでわかるという状況ではないですか。

主婦 そういう悪いところもあると思うのですが、今日なんのおかずかしら、困っちゃったわ、というような時、私のうちはこういうおかずよ、そう、それがいいわね。私もそうしよう(笑)といったいいところもあると思うのです。ですからあまり深刻に考えないで楽天的に考えた方がいいのではないかと思います。何年かいるとそれにだんだん馴れてくるのですね。最初は切ないときもありますけれども……。

主婦 親子三人で鉄筋アパートに入っておりますから、もったいないくらい。全然隣りとの交渉はないしお当番もないのです。ですから外出するのにも気がねはないし、設備も整っておりますから、主人が出たあととはもったいないくらいひまです。それをのほほんと生活しているのはもったいないと思いますが、雑用をしながら一日を過しております。世間の干渉もないし、そういうお隣りのおかずまで

わかるということもない代り、隣りの方ともしばらくでしたというときがたまにあるくらい浸透です。一番下の方でしたらしょっちゅう皆さんと接する機会が多いのですが、私どもは四階におりますからちょっと上から見下しても声をかけないで済む場合が多いので、そういう点では皆さんとのつながりが少ないのです。その点はとても恵まれていて感謝しております。

司会 普通一軒持っていられる方はなかなか留守にできないようですが、鉄筋のアパートのような場合には、今のお話のように大変外出も自由で、鍵一つでよろしいのですね。ただあまりさみし過ぎるという方ございませんか。あまりにおつき合いをするきっかけもなくて……。

主婦 そういう場合もあります。よそのおうちも扉一つで全然見えないのですから、お隣りにはなにしている皆さん一日過しているのかと思うときもたまにございます。けれども子供が一人おりまして、幼稚園にも行ってないで一日うちにおりますから、その点一日退屈しないで過しております。

司会 鉄筋の方はお隣りとあまり挨拶もせずに暮らすというのですが、鉄筋のアパートに住んでいらっしゃる方、なにか別のお考えございますか。

主婦 私と寮におりましたが、とても寮の方は親切で

よかったのです。なにかみんながほんとうに親子のようでしたもので、それで今度鉄筋に入ったらなんかとても淋しいという感じもしました。これではいけない、なにかも

と隣近所の皆さんと二、三人でもいいからほんとうに親しめる親子のようなつながりが作りたいと思うこともたびたびございました。そうしてこの間ラジオでグループ活動のことを言っておりましたもので、ああそういうこともあるのだな、なんかきつかけを作りたいなと考えましたけれども、またそのままになっております。

司会 広島県からいらつした青山さんも社宅に住んでいらつしますが、そちらではなにかグループ活動を

していられいますか。

青山 今は活動しておりませんが、私が今の社宅に入りましたのは一年八カ月前なのです。それから四カ月くらいは毎月一回社宅の者が集まりまして、輪番制で親睦会をやっております。御主人が御病氣をした方がございまして、そこへ来てとまどってしまったのです。それっきりやっております。社宅はずっと家並が続いておりますので、お顔を合やすことは私たちは多いのです。しかし、お年寄が多かったり若い者が多かったり年代に差がありますと、融けにくいということもあるように感じます。だから年配の同じような方が固まりまして話し合うことが多くなるよ

うな傾向が私たちのところにはあります。

司会 御主人を送り出されたあとは、小さいお子さんが多勢のお宅は別ですが、大分おひまがあるように見えますが、そういうところを利用して隣近所でグループを持つところまでいかなくても、隣近所になにかなさっていらつさる方ございますか。

主婦 私の方は鉄筋なんです、皆さんとても仲良くって、二軒づつ四階で、八軒ありますが、それがとてもいいグループを持っています。月に二回くらい持廻りでお茶を頂いて、お料理などをよその奥さんから聞いたり、それを実行したりしております。

村松 私のうちはすぐ川向うの大田区の雑谷なんです。そこらには小さな下請工場がたくさんありまして、私もその中の一つで、非常に生活にも苦労しています。集団住宅といっても前に会社の寮だったのが、その会社がつぶれてよそへ売り渡した、もう今にもつぶれそうなところに家賃が安いのですから入っている。そういうところで、先日母親学級をやりましたときに、私たち「アパート生活の環境と子供のしあわせ」というテーマを設定しまして、一日半に亘って話し合いをしたのですけれども、そのときそこに出た問題とこちらで今伺ったのとあまりにも雲泥の差なので、この近くにもそういうところがあると私たちの方の

状態を申し上げたいと思いました。

もう一つは、全国婦人会議の前に東京で東京會議を待つたわけなのです。そのとき固地に住んでいらつしやる方たちの出席が多くて、その問題がいろいろ出されたのですけれども、そのアパートに住んでいらつしやる方々は非常に競争心が強くて、どこのうちで洗濯機を買ったかから杜宅ではないのですけれども、おんなじ会社の方がいるアパートではその会社の中の人々の問題、昇給の問題なんかがみんなそのまま住宅へまで持ち越されて来て、お互いにそねみ合いやいがみ合いが起りやすいということを伺ったのです。それでなぜこちらの方たちがそんなふうによく集團生活がいつているかということを書かしていただいで、東京の會議に出て來られた方々におみやげにしたいと思ふのですけれども……。

主婦 私どもは見かけはちよつと悪い寮ですけれども、中に住まっている方は非常に融和する方が多いございます。最初はやっぱり奥さん方の中には多少競争心がありますから、お互いにどこではなを買ったということを気にすることがあるわけです。年配から言くと、私が一番年配なものですから、考えまして、最近新聞でも見ますけれども、アパート生活は自分がすべて先に立って高価なものを

で、そういう方たちもなかやましてくれないかというふうになりまして、今はしないのが愈々著みたに見られるというほど、ほとんどの方が内職をしております、非常

に楽しみなのです。それまでに踏み切るまではずいぶん苦  
勞しました。いろいろ隘口を言われましたけれども、それ  
を乗り越えて来てみると悪口一つ出ないわけです。私、子  
供によく言うのですが、こんな小さな部品だけれども、こ  
れ一つなくてもテレビはできないのだ。これも社会の役に  
立つ仕事の一つなのだからなんでもやらなければならな  
い。あなたたちは学校があるのだから自分のことをしっか  
り生かしてくれといっておりますけれども、今、大分皆さ  
んがついて来て下さって、前にいやな思いをしたことがむ  
しろこのごろでは反対に感謝されるようになりました。

司会　先ほどの御質問は御主人の昇給の問題や人事の間  
題までよく家庭に持ち込まれるが、こちらにはそんなこと  
はないだろうかという御質問でしたが、ほかの方ではそう  
いうことございませんか。たとえば子供さんがお母さんに  
物をねだるときに、ただ写真機がほしいといってもなかなか  
か買ってくれない。だけれどもどの誰さんが買って貰っ  
たから買ってくれというとお母さんが早速買ってくれた。  
これは社会に住んでいる子供さんからお母さんを見るとそ  
ういうことがあると思うのです。私も東京の方と同じ疑問

買ったりますとよくいかないという記事も読みまして、自分からなるべく質素にしております。こゝは工場地帯ですからある程度会社の部品が内職に出るのです。内職というとは最初はとても内職する人を、困っているからするのだというふうに見る向きが強かったのです。私どもにも年寄がおりますし、昔かたぎだものですから、内職すると見下げられるというふうなことを申しまして、同じするならお花でも教えたらというのです。この辺は下請工場がたくさんございます。私の知っている婦人会の方から御主人が停年になって下請の仕事をするようになったのだけれども、ひとつ協力してくれないかというお話がございました。やってみるとおもしろいのですね。ところが近所隣りでは、あすこは内職しているそうだと陰で悪く言った方もあるそうでございます。うちの主人が一目残業すればそのくらいのお金はとれるといった陰口も聞えました。ところが三年くらい経ちますと子供さんが大きくなった、遊んでいてはいけないというので、みななするようになりました。価格にすれば三、四千円ですけれどもとても嬉しいのです。子供がなにか買ってくれといったときに案外パッと買ってやれる、そういうことをしているうちにだんだんみんなが歩み寄りまして、今二十一世帯でございますけれども、遊んでいる方というのはほんとうに乳飲み子を持っている方だけ

を持ちましたので、その点もう少しお話をして頂けませんか、先ほど太愛朗らかに呑気にやっていたいればなんでもないということでしたが、いかがでしょうか。

主婦　私の主人は二十代だものですから、うちはまだ若いのだから買わなくてもいいわ、あのくらいい年になれば私のところだってお給料も少しぐらいは上るだろう。(笑)

そうなれば買えるだろうと夢のように考えております。うちの方の方はみんなそういうふうに考えているのではないですか。

斎藤 和の寮でもテレビのある家が三軒あるのですが一軒のおうちがとても親切な奥さんで、今日は何々があるから見にいらっしゃいと呼んで下さいます。それでこの間も皇太子様の御結婚のパレードなんかも、そこのおうちで洋服筆筒が縦になっていたものを横にしまして、お膳や机も廊下に出しまして、みんな入れて下さったのです。ですから子供たちも今日は月光飯面があるとかなんとかいいまして、おばさん、入れてちょうだいと言って見せて頂きますから、子供たちはあんまりほしがりませんで、そこのお宅にみんな見に参ります。

住吉 先ほどの皆様のお話を伺ってしまして、とてもうまいっていらっしやるので、これはもう人間の質からして違うのではないかと思っております。(笑) 私も現在市

営住宅に住んでおります、なかなかうまくいってありません。ただいまのこちらのお方のお話をお聞きして、やはりなにか一つの仕事を持っていられしやるからうまくいったのだなということがわかりました。

村松 うちの方のボロアパートのことなのですけれども、すぐそばに立派な寮があります。その方たちと私たちの方のボロアパートとがうまくいかないのです。というのはお互いに、仲良く固まってるのはいいのですけれども、なにか優越感を持っているように感ぜられるのです。片一方のこじきアパートの方は子供会を作ったり、子供の遊び場もないものですから、みんなで物干を張れなかった屋根のてっぺんに移して、ほんとうに狭い空地を四十二世帯のうちに子供が六十人いるのですが、その子供たちの遊び場にしました。そういうところに対して、恵まれた環境にある寮の方達は、同じ勤労者でありながらなにか差がある、御主人たちが同じ勤労者として手を繋ごうとしても、奥さんたちの間でなかなか手が繋げないということがあるのです。大きな会社と小さな会社の同じ勤労者、たとえ収入が違っても同じ勤労者だという気持ちで奥さん方が手をつなげたらと思うのですが……。

主婦 私ほそういうふうに見ております。

青山 東芝さんの社宅と土地の人との関係はどういうふう

うになっておりますか。社宅だけで周囲に土地の方というのはないのでしょいか。

主婦 そうでございますね。やはり東芝の人というときさんがある程度うらやましいことというふうな気持ちがあるように見受けられますね。

青山 私たち社宅という土地の人から「よそ者」と目視されるのですよ。社宅の者はのんびりしてなんにもせんと、結構忙しいのですけれどもそういうふうに見られて、なにか会合で発言したりするのを、よそ者がもの言いで出してというふうにとられることがありがちなのですけれども……。

司会 その点は川崎というところがだんだん膨張したところで、事業場もどんどん建ちますし、大分進んでいると思います。ただ東芝のように大きな事業所の方と中小企業の方とは非常に会社における御主人の賃銀その他の条件が違いますので、東芝さんはいいなという感じはございますが、よそ者という感じはございませんね。工場の方側は側地みたいのが建っておりますね。課長さん、あれは何でございますか。

高野 市営と県営住宅です。ここは開拓地ですから、言うならばみんなよそ者ですね。

主婦 私の子供のクラスでおくにを調べましたら、ほと

んど日本全国からだそうです。そういうよそ者という感じは持ちませんね。みんな寄り合っているのですね。

片山 ちょっとお伺いしたいのですけれども、皆さんは地域の婦人会に属しているのですか、それとも東芝だけで婦人会を作っているのでしょうか。

主婦 地域の婦人会がございしますが、東芝の会というのがございせん。

司会 先ほど社宅を見せて頂いたときに、ここにはどういふ方が入るのですかという御質問が出たのですが、上役とか下役、職場の違う方が同じ社宅に入ることがございませぬ。よそではよく会社のご家庭の生活にも影響するということを伺いますが、こちらの方はいかがでございますか。

主婦 残業五十時間制限ということが組合で言われておりますが、中には六十時間もなさる方もあるので、いろいろ不届はあるのですけれども、それは収入の面で言われるだけで、生活自身が困っておりませんから、そのときにちょっと騒ぐという程度で、二、三日で終ってしまうのですね。だからなにか言われても二、三日我慢しなさいという程度なのです。

司会 よそではいかがでございますか、そういう面では、社宅は全部入りまじってお住まいですか。

高野 私の方針としては課長、部長は入ってくれるな、むしろ下の方の職員、工員層に入ってもらいた方がいいというのですよ。下の方の方に、いわば直接作業の方に入ってもらいた方が会社としては非常にプラスになるだろう、僕はそう思っておりますね。まあ大体そういうふうに入東芝全体の住宅政策というものが今後伸びていく。部長、課長クラスには一軒二戸建の建売住宅の方にほとんど道を切り拓いていくという方向におけばいいのではないかと思

います。

主婦 職階級によるトラブルはべつにありません。それよりもお給料の多い少いが直接生活に響いて生活の様式が違って来ます。それの方がちょっと気になりますね。しかしああいう寮に住んでいますと生活の様式を一々気にしてもしようがないのですね。ですからお互いに自分のところは自分の給料に応じた生活の程度でやっていき、よそさんの方はあまり気にしない方針でやっていけばトラブルも起りません。

司会 会議員の皆さんの中には農村にお住まいの方がおいでになると思いますが、社宅を拝見して、短い時間でございすけれども、農村の方々はどんな感じをお持ちになったかお話し頂けませんか。

松浦 私のところは純農村で純農家でございます。私は

アパートを見ているうちに、農村の娘たちが百姓へ嫁に行くのはいやだ、お勤め人のところに行きたいという気持は、ほんとうにそうだと思いましたが。そういう気持を持ってはいけないということはないのではないかと思います。ほんとうにあんな気持のいい住まいを私たちも持てたらいと思えます。それといろんな強い封建制の中に住んでいる私たち農村の者は、なんにも遠慮なしにそういう生活ができる皆さん方を大変うらやましく思ったわけでございます。

斎藤 ちょっとお伺いしたいのですが、ここにいらっしゃいます皆さんは、御主人を会社へ送り出されたあとは家庭での生活ばかりの方のようにお見受けしたのですけれども、私は将来結婚したら共稼ぎを希望している者でございますが、共稼ぎをなさっていらっしゃる方はいらっしゃるのでしょうか。

主婦 私も主人と同じ職場に二年ばかりお勤めしました。普通の方ですとずっと主人と同じ職場にいるのはとてもいやだそうですが、私は同じ職場で隣りの机に並んで勤めていました。二年間勤めたのですが、子供が生まれるのでやめたのです。東芝というのは大ていの方は共稼ぎなのです。今の寮の方でも半数は共稼ぎです。

主婦 私も共稼ぎの経験があるので。長いこと子供が

らっしゃったら、その子供さんたちを誰が見ていらっしゃるか、その点お伺いしたい。

主婦 共稼ぎの問題ですが、お子さんをおいてお勤めする方は今のところないのです。ですけれども、共稼ぎは普通の家庭生活と両立しないということはないと思います。私は結婚してからお裁縫とお花をやっていましたから、主人が残業して私が定時で帰りますと、帰りに野菜なんか買っていくのです。そうして、私大休のことをやっていきますが、主人が残業から帰ってやってくれるので、私がお裁縫から帰るとお膳ができています。(笑)一週間に二日なのですが、それはなにも結婚する前に条件に出したわけではないのですけれども、自然にそうなったのです。お当番なども察にございますが、食事が終って片すけてから二人でやったものです。うちの寮には年配の方もいらっしゃいます、お子さんがいらっしゃると難荷がけでもどんな旦那さんがやりますよ。

司会 予定時間も大分超過致しましたので、懇談会はこれで終りたいと思います。両課長さん始め東芝の主婦の皆さんありがとうございました。(拍手)

(閉会)

おりませんで勤めておりました。二人で勤めると生活が楽なですね。あまり金銭的にこだわらない生活していたのですが、やめてしまったら急にこれだけでやっていかなくはならないのだと思うと情ないときもありました。やめた当時はいろいろのお金が入ったのですが、それがなくなると心細いのです。同じ職場にいても主人とよその人とずいぶん収入に差があるような気がしましたが、主人が、俺だって四十になればもっと多くなるよというのです。東芝は年数で自然によくになるので、最近全然そういうことを思わなくなりました。うちでもお隣りの人ぐらいの年配になったらもっとよくなるだろうということで、よそと競争するとか生活の差があることは気にしませんね。

村松 さっきからの話が解けたような気がします。ほかのところのように奥さんたちの摩滅がないのは、やはり働いた経験のある奥さんが多いことだの、ばらばらではなくて組合の中の活動も知っていらっしゃるといふようなこともあるのではないかと……なんかそんなような気がして来ました。

竹下 先ほどから共稼ぎの方もずいぶんいらっしゃるといふお話がございましたが、共稼ぎの方は職場の生活と家庭生活が両立しないで困るといった問題はありますか。また子供さんがお生まれになってだんだん大きくなってい

埼玉班

○春日部市部落学習会視察および地域婦人との懇談会

○岩槻人形製作における婦人の家内労働状況視察

○日進もちつきおどり見学

○東邦レース株式会社上尾工場及び寄宿舎施設見学

懇談会出席者

○会 議 員

- |            |            |             |             |             |             |            |             |            |            |            |            |            |              |               |                   |                 |                |                                   |              |
|------------|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|------------|--------------|---------------|-------------------|-----------------|----------------|-----------------------------------|--------------|
| 高谷 容子 (青森) | 植松 宮枝 (山形) | 中野 美代子 (東京) | 大坪 恵美子 (富山) | 土室 千代子 (長野) | 横関 千代子 (岐阜) | 原田 道子 (兵庫) | 小川 力子 (和歌山) | 下川 輝子 (岡山) | 水口 三子 (山口) | 山口 三子 (香川) | 村本 三子 (高知) | 村上 三子 (熊本) | ○幸松地区の主婦 三十名 | ○埼玉県 持田社会教育主事 | ○埼玉教育事務所 中里社会教育主事 | ○春日部市教育委員会 小川主事 | ○第一部会リーダー 伊藤 昇 | ○その他 春日部市広報課長 厚生課長 埼玉郡婦人連合会幹部 十数名 | ○司会 埼玉婦人少年連長 |
|------------|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|------------|--------------|---------------|-------------------|-----------------|----------------|-----------------------------------|--------------|

司会 移動会館のしおりというのに、こちらの地区のいろいろな説明が書いてございます。それと同時に、今日みなさま方のお手許にいらっしゃる「農村における婦人の部落学習」というパンフレットをもらいました。さきほどの部落学習会もその一つとして見せていただきましたので、もし質問がありましたら、質問から伺いたいと思います。

村上 一つのグループと申しますと、大体どのくらいのグループ員がいて、どういうふうな状態で活動していらっしゃいますか。

もう一つ、これは地域婦人会の中のグループ活動ですか。それとも別個のものですか。

会長(長野) グループ員は二〇名から三〇名位です。はじめに中央学習が開催されて、それから部落学習に移っております。私たちはグループが一人立ちできることが望ましいという考えでありますが、いまここにあります生活改善グループの桃園会は独立しようとしています。

それからやはり婦人会から独立したものとして、牛島地区に県の指定を受けた新生活運動のグループがあります。

あとは婦人会の中の仕事のひとつとしてやっております。村上 それでは、グループ費は、婦人会の中から出ているのですか。別個にグループ員の中から出ているのです。

か。

会長 本部から出ますのは講師の先生の謝礼ぐらいで、あとは集まる度に十円ずつみなさんが持ち寄って運営しております。

村上 グループに加入する方は、勧誘されてお入りになるのか、自分でお入りになるのでしょうか。

主婦 私どもは八丁目の下組にございます五月会と申します。私たちのグループが一年になります時に、中央学校でいろいろお話をございました。私は聞いてまいりましたが、みなさんは家庭のいろいろな仕事の関係でなかなか中央へ出られない方が多いのです。そういう方と一緒に、仲良く手を取りあってやってゆくのが一番いいのではないかと考えまして、それにはみなさんが、毎月一回ぐらいずつ顔を合わして、いろいろ話しあうのがいいということを一一人お話し申し上げたのです。まず、私たちはなにもできないから、まあ一日十円の貯金からはじめましょうと、はじめたわけです。一日十円ずつ毎日集めるのは容易でないという意見が出て、今では五日目ごとに集めております。月三百円になりますのでそれをもとに貯金して少しでも台所がよくなったらいというのが私たちの今のモットーです。会員は十九名です。

山本 この会のはじまりですが、部落の方たちの盛り上

りでできたのか、それとも社会教育課の方からの指導でできたのかお聞きしたいのですが……。

主婦 それは部落からもり上がって出来たのです。ですから希望者だけ入っております。部落全部ではありません。

会長 教育委員会の方にも協力はしていただきますが、みなさんが自由な形で、自分たちで計画を立てております。この次はこういう行事だから、こういう先生をお願いしたいということを私のところに連絡してくださいと、農繁改良普及員とか看護婦さんとか助産婦さんとか、いろいろそういう方をお願いしているわけです。

中里 私、社会教育のほうを担当しております。地域活動を盛り上げるということにつきまして、今までの婦人会では、一つの地域によって大きくまとまってゆくという一つのゆき方がありましたけれども、みなさん一人一人が家庭の主婦として健全な家庭を築いてゆくには、そういう活動が小さなところまでしみ込んでゆかなければだめだということ、よりよい集まりの場というものを考える。また時間的にも非常に集まりの時間がよくとれるのはどこかということをもつけ出して、部落を中心にして、あるいは部落が多ければ半分くらいに分けて、集まりのいい場所を選んで学習するいろいろな活動も展開する。そこで解決でき

ないような問題は、これは大きくまとまった婦人会なら婦人会というところで解決の道をはかってゆくというように考えます。

小川 今日拝見しまして、一つの理想的な行き方と思うのです。リーダーはどういうふうにして選んでいらっしゃるのですか。

会長 それは部落で自由にしているわけです。責任者ということとそれだけに任すのではなく、どのグループでも会計とか連絡係とか、一人一人が何かしら責任をもっています。

小川 会長さんとはどういうふうにつながっているのですか。

会長 私にはいろいろ問題で、暗礁に乗り上げたりすると、よく連絡してくださいまして、そういう時は行って、どういふところが悩みかということを通して、一歩でも半歩でも前進してゆくように、会の援助をしております。

あくまでもみなさん、一人一人の会であるからということ、自由に勉強しております。私は強制しません。一人で奮ってゆけば結構で、何か困ったことがあると、御相談をうけて、役に立てば行きましようということで、悩みをわけあって、一つ一つ前進してゆくように思っています。

小川 会長さんとのつながりというのは非公式なもので、組織的なものではないわけですか。

会長 さきほど申し上げた独立した会以外は全部組織でつながっております。

征矢 すると、グループに全員入っているのではなくて、入っていない方もあるのですか。

会長 グループ学級には、会員はほとんど入っています。入っていないけれども、あの人たちいいことをやっているな、とわかってくると自然に、わたしも入りたいといっています。

征矢 グループ間の反目というものはございませんか。

主婦 お隣りのグループの方がお料理の勉強するという時には見学させていたでいて、仲よくやっております。

水木 グループの役員は、一年交替とか半年交替とか、お役目の変るといふようなことはないのですか。

主婦 うちのほうでは毎年変わっております。

主婦 私どものほうは五月会といまして、五月に誕生したのですが、この五月で二年になります、すると貯金が七千くらいになるわけです。そうしますと、かまどの一つぐらい改善できるので、この五月になって、私たちお世話役、会計さん、連絡係が代りましようと話あっています。

土壺 グループの集まりを月に何回おもちですか。

主婦 月一回します。二十五日が定例日になっております。

主婦 うちのほうは家庭菜園と料理の講習をやっておりますから、月に二回ずつ集まっております。

山本 主婦の方たちでお忙しい方ばかりと思いますが、そういう会に定刻にちゃんと集まりますか。

会長 ほとんど集まりますね。二度も三度も集まりますから、時間かけていけば集まれないのです。

中野 今日始めてこういった会を見て、びっくりして、とても感激しているわけです。とてもよく発言していらっしゃるのですが、この地区などは、限られた地区から集まっていられるわけですから、その発言が一人一人にひびいて何か事が起らないかということが考えられますが……。

主婦 私たちのほうでも映画会がござりますが、お嫁さんとしゅうとの映画会の時ですと、ああいうお嫁さんであると情ないという問題が出てまいります。その次には、家族全部で見るほうがいいことになりました、お嫁さんも男子の方も出てまいります。それからお年寄の方まで出てまいります。

原田 映画を見てうちに、もって帰って、生活の中で実



実践していらっしやると思いますが、それをもう一回反省して話し合いなされるといいことはございませんか？

主婦 私のほうでは特別、反省会というものは設けませんが、道端で会った時など、この間の映画はどうだったかという話をよく話し合います。

村上 映画をどういうふうにして決めていらっしやるか。

主婦 映画を見たあとに話し合い、この次はどういう映画を見ようかということ、みなさんの希望の多い映画から見ております。

会長 「嫁としゅうとの問題」とか、「生活改善をやりたいがお年寄りがわかってくれない」というようなやはり偏みのある問題が出てくるのです。希望を取って、道徳の問題とか、家庭内の人間関係など順々に、いろいろ話し合いでわからないことを目で見せて、両方からわからせようというねらいです。

横関 私のところは映画によってお話ししているが、映画をやらなくてはこういう会合に寄っていただけないというところで、非常に困ったことがあるが、そういうことはございませんでしょうか。

会長 いま、映画をやってないところがずいぶんござい

る不満があつて変えていったのか、その辺を……。

会長 いろいろな形で、変えているところもありますし、続いて二年間おられる責任者もございしますが、やはり会のみなさんの希望でそうことになっておりますので、ひとつもいざごさはないようです。

在のほうですと、学習の世話をする人は、一般の人よりもなおいそがしくなるため長くはできないということで、一年交替。また家庭状況のいいところは、みなさんの希望で、二年続けるところもあります。そういう形でしておりますから、強制ではなく、みなさんのやりいようにやっております。

半生 私の地区も、こちらと同じように、七つの市町村が合併して、三万そこそこの小さい市が出来たので、たいへんよく似ているものですから参考になってありがたいございしました。

私の地区でも、これと同じ映画を冬に、公民館でまわして青年団と一緒に話し合いの会をもちましたが、その時は婦人ばかりでなしに、どちらかの会と横の連絡をなさっているかということをも一つ伺いたいと思います。

主婦 私たちの方では、よく地区が協力してくれまして、隣り組を通して、みな一致してやっております。

会長 会場になる家は、おばあちゃんもおじいちゃんも

主婦 私のほうではやはり映画はいまのところ全然やっております。今日こちらで映画を見せていただいて、ほんとにいいな、ああいうところから学べたらということを感じたのです。こういう集まりをしますのに、出席ということでは非常に困る家庭があるのです。老人の方が無理解で出席できないという家庭にこうした会合を、もって行きまして話し合いで老人も引き入れて、共に映画を見ようというところで成功した例をもっています。

それから 私たちも、十円が単位で、八十円くらいが最高の日掛貯金をはじめて、それによって生活改善をやっております。

私のところもちょうどこういう田舎ですが、どうしてもふとんをそのまま破るので、敷布を買おうということになった。一月三百円で、一年間に三千六百円、一メートル九十円のが四十メートル買える。そうすると二十名の敷布ができる。そういうことで盛んに敷布かけを実行しています。また一年一回会費を徴集して委員会をやるのに百五十円とするといいかにも主婦として辛い時があるが、結局十円ずつ貯金していただいて委員会をやっているのです。

高谷 このグループを見ても、リーダーに対して不満があるようです。この会では当番制にしてやっているようですが、そういうやり方をとったのは、リーダーに對す

若い人も参加するというところで、それが目的で各家庭にもち込んでやっております。

半生 もう一つ、私の婦人会では、レクリエーション部というものを部制にして一つ設けてあるのですが、そういう部制という方面はどのようにしていらっしやるか伺いたいと思います。

主婦 お正月にみなさんで新年会をやりまます。これは懇親会という意味で、クラブの方だけではなく、部落の方全体に呼びかけるのです。その時婦人会の指導者の方にいろいろなレクリエーションを指導していただいて、一緒に踊ったり、お茶をいただいたり、お菓子を食べたり、料理をいろいろ教わったり、つくったりして、みんなで味わいながら楽しくお話ししあっております。

大坪 お料理の講習会は、農繁期の保存食をやっているのですか。

主婦 保存食は、忙しくなる前に講習しております。てっか味噌とか、カレー、ふりかけとか、そういうものを練習しております。

植松 お料理講習の献立つくる時に、どういうふうにおつていのですか。

主婦 お料理の講習は、栄養士さんがおりますからお願

いお料理やっております。

主婦 勿論講習を受ける方の希望も入れて、この次は何をやりますようにということではしています。

高谷 田舎の方は職業が同じで、生活程度が似ていますからまとまり易いのは結構と思いますが、まとまりがいいというところを利用して、選挙などが始まった時に、そのほかに引つ張られてゆくという危険はないでしょうか。

会長 私は今まで中央で話しあいの時に、自分たちは自由だから自分たちで正しい人を選ぶので、旦那さまに言われたからそれとなくしてはならないことはないということをよく話しますが、旦那さまにいくら引きずられるのではないかと考えておりますが、やはりたいへん違ってきたと私は思っております。

征矢 みなさん月一回から二回、こういうふうな会に出になるということを伺いましたが、それに対して、御家庭のほうで、御主人とかおしゅうとさんの御協力の程度を伺いたいのですか？

主婦 いまのところは、たいへん喜んで出していたいております。

私の方は前には問題もありましたが、いろいろな前から教育されてきましたので、わりあい、お年寄りの方もお嫁さんのことに理解をもってまいりましたから、今では出よ

をもっているというようにおっしゃいましたが、そういう男性の方の会との連絡のようなものもございませうか。

会長 農業改善のグループが一つ去年の暮から出来ましてけれども、土地資源を生かした生産活動ですから、旦那さまたちが一緒にやっておりますが、今日来ておりませんので失礼します。

食生活の改善グループとか、たいへん実用的なグループばかりで感心しているのをごいしますが、このほかに文化的なグループをおもちになるお方はありませんでしょうか。いわゆる読書会とか短歌会とか俳句会とか……。

主婦 私のほうでは半分が農家で、半分が非農家で、いろいろ仕事が違うので、半分ずつとり入れてやっています。農家の人も、草を取りながら俳句でもしたらどうかというので、いまのところ、まだ私たちのグループの中では四、五人ですが、俳句を続けております。

地区に幾人か俳句をやっている方がありますので、その方のごところをお願いに行って直してもらおうのです。

征矢 いまおっしゃっている文化的なことの中には社会的な勉強はどういうふうにしていらっしゃるのですか。勤労とか警戦法とか、全国的な問題が起った時に、グループはその声に反響して動いているのかどうかというこ

いほうに向っております。

下山 会長さんにお尋ねしたいのですが、県とか市の、社会教育課の協賛とおっしゃいましたが、どういうふうなものを受けていらっしゃるのでしょうか。

会長 協賛の援助というのは、精神面です。

小川主事 会長さんが非常に御熱心で、昭和三十一年国民科学講座を文部省から委嘱され、引続いて婦人学級、それから三年目に部落学習が始まりましたが、中央学習家庭映画会は私のほうで映写機から一切お世話しています。会長さんのほうから要求があれば出るようになっております。わたしのほうからこういうふうにしよというようなことはしておりません。

会長 今後も私どもが今まで勉強してきた民主的なあり方で進みたいと思っておりますが、今までも決して教育委員会からこれやれとかあれやれということはないのです。必要によって、技術指導者などがほしい時にはお願いしたりしております。

下山 指導者を選ぶというのは、こちらから注文を出しになるのですか。

会長 そうです。決して教育委員会のほうからは言わないのです。

小川 さきほどこちらの方が、男性の方も農業の研究会

とです。

会長 わたしたちはそれに対してあんまり積極的に行っております。

主婦 いまのところ、うちのほうでは、社会問題といふところまで考えておりませんし、選挙などということもまだ全然計画には入っておりません。身近な問題を考えてゆくということでは集まっております。

原田 十五名ぐらいのささやかなものでございますけれども、私も話しあいグループをもっておりますが、社会問題といふことは、私たちの小グループの中では必要ではないと私は思うのです。まず明るい家庭をつくるということが、私たちの話しあいの本筋ではないかと思っております。私、主人と二人でおりますけれども、男はとても勝手なところがありますが、わたしはなかなか言えないのです。そこでグループの話しあいの中から、みなさんがいいことをおっしゃった時に、今日はこういったお話があったのですよと申しまして、そういうチャンスを利用しましたので、この頃は家の中がとても明るくなりました。また私自身が、おしゃべりができなかったのですが、今ではどうやら人の中に出てしゃべることができるようになりました。話しあいというものはよいものだと思っております。

田口 みなさんの身近な問題からいろいろお話しあいし

ていらっしやるのは、ほんとうにいいと思うのですが、私はやはりもっと社会面に——家の中のやりくりを考えることも大事ですけども——ここでしたら、身近な問題として市や県の子算がどういうふうになっているとか、また蚊や蠅を少なくしようというのは、婦人会ではなかなかたいていなんですが、それが政治になりますとやはり容易に実現できるわけですね。だから、その時選挙がありますと、選挙はほんとうに大事なことから、婦人会でその話し合いをするとか、また子供の教育を考えます時にはPTAについて話しあうということが大事であると思います。わたしたちの団体は「葬しの会」といまして、婦人会と政治とが一緒にならなければならないという会ですから、こんなことを痛切に感じたわけです。

会長 そのことにつきましては、まだほんとうに私たちの部落学習は一年生でございます。二年ばかり、政治とか社会とか取り上げて勉強しましたが、あまり在の方にむずかしい問題をもって来ますと、ついてゆけない。自然の姿でゆくのはいいと思いますが、こちらから押しつけるようなことをしますと、むずかしいからいやだということになりますから、中央学習では二年、社会とか政治の勉強をやったわけです。

横関 こうした集まりも、結局話しあえばかりやつてい全国一で表彰されました。この地区が乳幼児、妊娠婦の死亡率が多かったので指定を受けたが、長野会長さんが会長になる前から中心になって指導して、表彰を受け環境衛生のほうも三、四年前から経費を市から補助していただいで、蚊と蠅をなくす運動もよくやって市内でも模範的に活動していらっしやる。農業方面にも指導的な立場の方が三、四人いらっしやるので、たいへん成果をあげている。納税の成績などもよくよい指導者に恵まれているため、たいへん実績があがっているのです。

主婦 私どもが初めに困ったのは、鶏を飼うことで、鶏舎のつくり方とか鶏の飼い方をやりました。食改善にはうちで鶏を飼って卵をとって、それからやりましょうというので、岩槻の改良普及員に指導員として来ていただいてお話を伺った。この時には幾人かの男の人参加しましたが、男の方はつい突込んで先生に質問するわけです。すると先生が若いものですから、時々とまどうことがあるので、先生の氣持を害してしまったことがあるのです。それからずつ、その先生には来ていただけないので、とても私たちは困ってしまつたことがあります。これがちょうど去年の四月でそれからちょうど一年になりますけれども、せつなくつづいたことだから、みんなで続けてゆきましようとお互に話しあつて、会長さんをお願いし、それから

るのでは行き詰まると思います。一歩前進して、もっと横のつながりを深めて、お互の向上をはかることを考えなければいけないと思います。

水木 私の部落は人数が多いために、みんなが話しあおうとしてもできないことがある。それを小さいグループにしたらみんなが一言でもしゃべれるようになると思いますが、それをわけることがなかなかできない。みなさんのグループを見ておりますと、二、三十人であつと多いような気がします。一応話せるようになっていっているのでしょうか。

主婦 どなたも、一口ずつでも話しあうように心がけておられます。

主婦 私のほうの部落は、みなさんで話しあうように、いろいろ指導しております。

山本 印刷物を見ても、お話を聞いても、とても淡しいと思うのですが、とてもむずかしい問題がどのようにして解決されたかという具体的な例をお話いただけたらいいと思います。

主婦 私、この春日部市の連合婦人会長でございますが、この地区は合併前からたいへん村長さんも指導していらっしやる。社会教育主事の方も御熱心で、指導者が揃つて

お料理のほうは保健所の先生をお願いするとか、被服は職業補導所の先生をお願いするということで、解決してゆきました。

司金 いろいろおありのようで、もっとたくさんお話ししていただきたいのですが、時間もございませんで、最後に全国婦人会議のリーダーでいらっしやる伊藤先生がこの班においで下さいましたので、先生から一言お話しをして頂きたいと思ひます。

伊藤 さつきからお伺いしております、おそらく会議員の十五人の方もそろつたと思ひますが、ことごとく感心させられているのです。私もかなりあちこち歩いて、婦人学級も見せていただきましたが、こちらほどなごやかにいっている例は少ない。ことに映画のあとの話しあいの時に、一人一人実によく発言される。会議員の方も大分感心しておられたようですが、あれだけ自由に発言をするという自由があるならば、この次からでも、何回も出てくるということになる。何回出て来ないのほうで小さくなつていくとつまらなくなつて出て来ない。

今年の婦人会議でも問題になっているが、発言すること、婦人の責任だと思ふ。それを果せるのは、自由な空氣があるから果せる。さきほどの映画のあとの話しあいの中であの映画を見て「若い者のやり方がおかしい」という御意

果が出て感心したが、普通の家屋で見ても、ひねになるあの赤ん坊が泣く、お母さん、つぎは若い婦が出て来て、おむつをかえてさうと行つてしまふ。おばあちゃん、ちよつと一口飲ませろといふ。どなたかの御意見で、あれはちよつとくわえさせて、自分の部屋に連れて行けば何でもないのでないか。私は、そのこと自体がどうと云うよりも、みなさんのお仲間の考え方がそこまですんで進んでいゝ。都会から見ますと農家はいつまでもしゅうとにいいめられてゐるようだが、そうでなくて、それを乗り越えておられるという印象を非常に強く受けた。ここに集まつておられる方はみんな若い方ですが、こういうところには若い方が出ないという先入観があるが、それももう乗り越えておられるようです。外で考へてゐるものをふみ越えて進んでおられる。二年とか三年の短い期間ですが、ずいぶん進んでおられるといふことは、私はとりもなおさず、発言の自由が常に許されてゐることだと解釈したわけです。

さきほどから、社会問題とか政治問題とかいうことも出ましたけれども、概念としてゐるいろいろなことが頭から入つてきて身にはつかない。私は、身近な問題からいろいろ考へあつて、そうして生活を異にしている人たちが集まつて話しあふことを自由にやつてゆきますことによつて、みなさんも社会の問題、当然市の予算、県の予算といふところ

るまでやき得ると感じたわけです。

そういう意味で、社会教育界の方がおっしゃいました『しみ通る社会教育』といふ本に於いては、今日の姿に非常に私は敬慕を感じたといふところがあります。

国会、いろいろとお話はつきましたが、一応懇談会をこれで終らせていただきますが、地元の方にはたいへんお心づかいをいただきまして、どうもありがとうございます。

懇談会出席者

○会 議 員

- 小 幡 貞 子 (北海道)
  - 茂 内 礼 子 (秋田)
  - 鈴 木 茂 子 (茨城)
  - 織 田 ヲ タ 子 (新潟)
  - 森 下 美 代 子 (愛知)
  - 宮 前 初 子 (三重)
  - 竹 中 由 美 子 (広島)
  - 弘 中 れ い 子 (山口)
  - 国 領 朝 子 (徳島)
  - 高 橋 晴 子 (愛媛)
  - 馬 場 幸 恵 子 (福岡)
  - 元 岡 ぬ い 子 (長崎)
  - 梅 北 千 代 子 (宮崎)
  - 松 井 近 子 (鹿児島)
- 漁業協同組合婦人部員 十一名
- その他
- 本都千葉漁業協同組合連合会専務  
林千葉県信用漁業協同組合連合会専務部長  
古川片貝漁業協同組合役員  
(婦人少年室協助員)

○司会 千葉少年婦人室長  
懇談に入る前に、千葉県の漁村婦人の実相を知るため、映画「荒海に生きる女たち」と映写。

千葉班

- 八幡学園(精進尾施設)教育状況視察
- 千葉港及び埋立状況視察
- 川崎製鉄株式会社千葉製鉄所視察
- 漁村婦人との懇談会

映画「荒海に生きる女たち」 映写

司会 今の映画は九十九里の話でございますが、それらの派では「おっぺし」と申しますが、今ごろんになりましたような形態の仕事をしております。今日は様々の漁業形態によって、その中で女の人がどういう仕事を持っていたり、ということについてお話をしながら、御質問をいただいたり、又他県の派に關係が深くて、その地域のことを何か知っていらっしゃるという方は、そういうお話も出していただく、ということにしましょう。女の人が受持っている仕事によって漁協婦人部の活動も違うと思います。それをどういうふうにやっているか、どういうふうにやっていったらいいかという問題まで、御一緒に話でできたらいいのではないかと思います。

どうぞよそゆきでなく、浜言葉で結構でございますから両方御遠慮なくさくばらんにご話し合ってください。では映画の話を補足するという意味で、先ず九十九里からおいでの方井さんに話していただきたいと思います。

地元 今、映画でござらんになった通り、九十九里では港がないので、婦人が浜から船を引き出し又引き上げるといふ、皆さんにはとても想像のつかないような重労働をしております。港をつくるには莫大なお金が要りますので、この一助にもと、私どもも貯金しておりますが、なかなか簡

単にはいかないようでございます。

古川 私は片貝の漁業協同組合に勤務しております。片貝では一軒の網主と、大体女が二十五、六人おり、船の揚げおろしに働き、そのあとで今映画でござらんになった通り、浜で焚火をして暖をとるのですが、そのときにいろいろ話し合うことができて、今度は一つこういうことをやるうじゃないか、というわけで、先ず何よりも港がほしいということから、地元の熱意を示すため、「おっぺし」のおかみさんたちが、過ぐる五月から、自発的に貯金をやっているわけでございます。

九十九里は浪が大へん高く、港がないので、女が「おっぺし」で二〇トン内外の船を出し入れしておりますが、これは大変な重労働でございます。

松井 その町は、漁業一本でございますか。

地元 半農半漁でございます。

松井 その漁業は何日かかかって避いところまで出掛けるのですか。

地元 その日に出てその日に帰るのです。

鈴木 私は漁村というものを知らないもので、幼稚な質問かと思いますが、女の人の労働に対する賃金は、網元の漁獲高によって支払われるのか、船の収獲はどういうふう

に漁民に分配されるのでしょうか。

地元 あれは固定給がなく漁の出た日だけその日の漁獲高により分けてとるのです。漁がなければ、うちにいて何か仕事をしております。

森下 網元と、そこで働いている人は、どういう関係ですか。

地元 労使の関係です。

森下 それは都会でいったら、網元が工場主というわけですね。

地元 そうです。揚線というのは本来二統からできているのです。出船といって、今ごろんになった漁獲物を分配する船が四隻ぐらいいり、それを一統というのですが、それを統一するのが網元というわけです。

森下 その船は、全部網元の個人持ちなのですか。

地元 九十九里は大体個人持ちでございます。

梅北 網元と、それから船子との漁獲高による収入の按分の仕方はどんなふうになっているのですか。

地元 それは漁獲、たとえばイワシをとってくるでしょう、その終りに相場というのをやるのです。そしてイワシが一ぱい幾らというのがきまるのです。その日の漁獲高が一〇〇〇ぱいあるとしますと、一ぱい大い六百円ぐらいますが、その日の収入額がきまります。それからいろいろの経費を引き、残りを四分六にして四分を働いた人達に

分け、網主が六分をとるのです。もし漁獲がなければ一日一〇〇円です。

働く人としては、一人の網元に……。水夫は女が六〇人ぐらいい、男が四〇人で、全部で一〇〇人ぐらいいります。それから船方——船に乗って行く人は、また別でございます。

元岡 私の方でも四分です。ただ、漁のないときの一〇〇円というのは出してないようです。それだけこちらはいいいんです。

地元 最近払うようになったのです。今までは漁のないときは食べさせただけでよかったのでございますが……。松井 すると、不漁が長く続けば、網元さんもきつというわけですね。

地元 不漁の場合は、まあ一カ月も出なかったら一〇〇〇円ぐらいいあげています。今では昔と違ひまして、何かしら仕事をしており、又大体貯金もしてましよう、幾らかよくになりました。

森下 船を引っ張っていく人たちを見ますと、年令に差がありますね。

地元 昔は若い人もなりましたが、今はああいふ仕事をやる女の人たちがあんまりありませんで、大体年輩の方ばかりになりました。若い人は都会に行ったりなんかしてし

まいますね。

鈴木 すると将来の問題が出てきますね。今の人たちが年をとって、若い人がいなくなった場合、そのときはどういうことになるんですか。

地元 まだ先まで考えておりません。港が作られれば、婦人たちは要らないということになるのです。ですから港のできるのを祈っているわけです。

古川 中学とか高校の就業の統計を見ると、水産を志望するものは非常に少ないのです。

地元 今までやってきた人が川崎製鉄へかわってしまいいまして、水夫というのが少なくなってしまうし、た。

竹中 船の手伝いをされる方達は、個人が特に希望して入られるのではなくて、お母さんたちの勤めとか、今までの御縁があるから入れていただく、そういう方ばかりでございいますか。

地元 実際は大体そうなっていますが、職のない人が浜に來ればどなたでも……。

森下 もし働いている人が病氣した場合は自分だけで費用を払うのですか。

地元 病氣は自分持ちですが、けがのときは労災保険でやっております。

子方面に行っております。ですから男たちは、家にいるにはいっても、夜の仕事ですから、家庭生活の完全にはできないは、年に一月あるかなしでございすね。興津も九十九里と同じで、岸壁がまだできませんから、サバを勝浦沖で釣ったときに興津へ持ってきますと、そのサバをかがで一ぱいずつかついで女たちが運ぶのです。その重さは一かご一五貫から一八貫ですね。ですから早く岸壁を作りたくて、漁業会長初め皆さん心配してくださいますのですが、興津へ揚げないで勝浦へもっていかばらくなものですから、勝浦へもっていかせようのです。興津の漁業会の収入が少なくなってしまうのです。それで、興津は漁協婦人部もまだまだだめです。ただ貯蓄を奨励している程度です。

松井 男の人が家にいないとすると、家庭の生活というものはずべて女にまかせるといことになるのでしょうが、生計費は納元からおもらいになるのですか。

地元 それはどこへ行っておりますも、月二回ぐらいは送金してきます。この収入はやはり納船と同じことで、漁獲高によってきまるのです。

織田 そうしますと家に残っている奥さん方はどういうことをしているのですか。

地元 興津では農業を兼業している家は少ないのですが、農業をやる人は農業を一生懸命やる。冬はたき木を取って

司会 今の労災保険のことですが、保険の掛金は固定給がないところでどういうふうにして払っておられますか。

古川 協定賃金をきめております。女は一日一二〇円、男子は二〇〇円です。今までの統計によりますと、女子の災害も多いのですよ。というのは今の映画で船の下におくものがあつたでしよ。あれを「ばん」と称しますが、二八貫あるのです。あれを婦人が持つので落しがちになる。それで打撲したり又ワイヤーではねられての事故が多いのです。

梅北 宮崎の南の方に、浦津という漁港があるので、そこは港の設備はよいので、男の人だけ働けば、女は漁業そのものには携わらなくてもいいそうです。その方がおっしゃるのに、私たちも漁協婦人部を作ったけれど、漁業は予定というものが立たないので、予算生活がでにくい。それから仕事の分担なども平均しておりませんために、婦人部の活動もあり思わしくないとおっしゃっていました。それに関連して皆さん方によいお知恵がありましたら聞かしていただきたいと思ひます。

司会 婦人部活動についても地域別のお話の中で触れていただきました。では次の方どうぞ……。

地元 私は興津ですが、サバ船ですから、勝浦市の沖で取れるのはちよつとで、あとは遠出で、北海道、大島、鮪

ためておくとか、農繁期には田植えから取り入れまで婦人の手でやっております。農業をしてない方は貸仕事をした、日傭に出るとか、洋裁のできる人は人のものを作るとか、繻ものや裁縫をやるとか、そういうことをしています。何もやらないでだんなさまのかせぎを待っている人もありますが。又近海だけで、小さな船でやっている家もずいぶんあるのですが、そういう家の奥さんたちは年じゅう忙がしく、漁によりまして朝一時ごろ起きて御飯をたいて、だんなさんを出してそれでまた一休みする人もあるし、しないでそのまま一日労働する人もある。

小幡 農家の嫁が都会へいたがという話を聞くのですが、そういうふうには、年じゅう親子そろって生活できない漁村の家族の問題について、漁村の若い人たちはどういうふうにお考えになつていられるのでしょうか。都会に出たいという方が多いのですか。

地元 多うございすね。ですから在の方へお嫁さんをもらいにいきますと、漁師は半後家だからいやだというんです。それは半後家どころじゃなく、まるっきりいっていくらいですから、しゅうとさんがよほど嫁をかわいがってあげなければかわいそうでございす。

森下 農家ですつと女の子でもこのごろ農業学校なんかに入れているようで、あまり都会に走らないで、自分の家で

興業をやるという女の子がふえてきましたけれども、漁村の方のお子さんたちはいかがですか。

地元 やはり今では男の子は全部高校へやりますし、女の子も大がいの家庭では高校へ入れておられます。森下 高等学校へいった娘さんは漁業をいやがりますせんか。

地元 みんな東京へ行ってしまうんです。それで嫁さんさがしにとても骨が折れます。ですから私は婦人部の手でお嫁さんをさがしてあげるといいのじゃないかと思うんです。

司会 時間の関係もありますから先にいきまして、その次の方は天津でいらっしゃいますが、大体興津の方と同じようでございますか。

地元 さようでございます。うちの方は港はございますが、船が小そうございまして、興津では二〇トンからある船ですが、天津では、まず大きな船でも七、八トンぐらいでございます。あとはみんな二、三トン位の小船で、個人々々でサバ船をやっております。

司会 次に興津の方はいかがですか。

地元 興津は漁業の種類が多いところでございます。先ほど映画でござらんになったようなイワシ船の揚繰もございまして、興津のような遠くへ出る船、天津のような近海で

働く船、それから海女が多いです。又ワカメが取れますし、テングサもありますし、漁業の種類が大へん多いところですよ。ですから婦人部のまとまりが非常に悪いところでございます。今興津では近海のサバ船の関係者で作っている婦人部が一番活動しております。朝、浜が終ってから潜りにいくとか、山にいくとか、婦人の労働の非常に激しいところでございます。

司会 次は千倉の方何ですか。

地元 私の方は、漁業形態がほとんど大型の遠海でございます。興津と同じように主人がするがちですから、主婦が家政をまかなうわけです。一番困りますのはさっきもお話に出ましたが、子供を教育しますと、向学心が伸びて参りまして、漁師はいやだ、都会へ出たいというのです。まあ港の方は九十九里どちらがってりっぱなのがございまして雇われておりますが、漁師といいますと、ほとんど海上で生活しておりますので、社会のことに無知になりますね、そこに問題があると思うのです。それから又、収入が不安定でございます。婦人の労働としては、港へ船が入りますと、加工してサバ節つくりがあります。手のあいている人たちはほとんどそれに従事して時間制で日当をいただきます。その額は労働の種類によって違いますが、生を扱う場合には非常に骨が折れるので一時間四〇円、ふつうの

加工の賃金は二五円です。ただ漁期が短かくてこの仕事は二カ月ぐらいです。

小幡 奥さん達の楽しみはどういう方面に求めておられますか。

地元 集団的にやるものとしては、慰安旅行をやっております。今まではあまり旅行をしない人が多かったのです。財政的にもできなかったのですが、この頃は映画も月に二、三回やりますし、教養方面として講演会もいたします。

茂内 家族としての楽しみや娯楽はどうでしょうか。一カ月に何日とか、公然と休める公休日があるのですか。

地元 きまったものではありませんね。しげがお休みなになるので、定休日はないのです。家庭の楽しみとしてはせいで映画へ行くくらいでしょうね。

地元 私どもの方は、漁業協同組合で定置網をやっております、婦人部もそれに全面的に協力しております。

本部 私から御説明しましょう。大碇網というのがありまして、これは海岸から網を出して、ブリやマダロが通るところを通せんぼするのです。魚はおかの方へ上れませんが、沖に行くところ、沖には大きい袋が据えつけてある、それを定置網というのです。大きいのは差し渡し三〇メートルぐらい、一〇〇〇メートルぐらいのもあります。池田

さんのお話になったのは、据え付けた網が流れないように下へ土俵を入れるわけです。その何千俵という土俵をこしらえる、その話をしてるわけです。

地元 一回の網の土俵に二万五、六千円かかるんですが、三月の終りに網入れて、九月一ぱいぐらいたまわせます。その基礎の仕事の土俵入れ、それから網入れがある。それが終わりますと今度は漁がある、その魚を船から揚げます。それを氷に詰めたり、トラックに積み込んだり、そういう作業は婦人部で担当しているのです。ですから漁がありますと、とたんに忙しいですね。

この協同組合の協力作業は全部婦人部でやり、登録制になっております。上揚げ作業は夜間の場合もあるので、登録制ではありません。子持ちの方とか手のない方は登録しなくても出られますから。こういう仕事は重労働ですが、結局自分たちの協同組合の仕事ですから、そう無理とは思わない。賃金も土俵入れで一日二五〇円ですが、自分たちの経営の定置網だから、賃金が少いと不平を言う方は一人もおられません。結局組合がお金持になれば組合員の配当も多くなりますね。自分のことですから不平不満を言う人がいないのです。

司会 次は青堀に参りましょう。

地元 私の方は二九八人の漁協組合員のおかみさんたち

で漁婦人部を結成しております。内房といっておりますが、太平洋の方に面しております。外房とは正反對の仕事で、夏は小型船で揚繰で取ってきたエビとか雑魚のようなものを家庭で女の人たちが乾しております。それから取れた中でのいいもの、アナゴのようなものは東京の方へ直接販売されたり、背負っていく人もあるようです。これはほんの内職ぐらゐの程度で、ほんとうはのりの養殖事業が大半を占めております。のりの養殖は終るのが四月で、五月になるとあとしまつ、六、七、八月はのりの養殖の準備期間です。その間に手繰りというものがございまして、九、十、十一の三ヶ月がのりの養殖事業の一番あてにしている時期でございます。その期間になりますと、女の人で海の方へ出る人はごく一部で、大半はのりの加工でございます。朝早く二時から三時ごろのりを拾いまして、それを簀につけて乾します。お天気がよければその日の三時ごろに仕上がりますが、お天気が悪いと設備のある人は乾燥場などへ入れてその日に仕上げます。その日に仕上がったのりはつやがございまして、値段もいいのです。一、二月ごろには押し詰り相場というものがございまして、一枚一五円で一帖一五〇円ぐらいで売れる。そんなふうに入大へん当った年は恵まれますが、当らなければそれこそ非常にみじめで何もなくなり、お正月の越冬資金もないような状況になります。

應になつてしまいます。そうしてふだんは、潮の関係で海に出ない日が月に三日ほどございますが、私の方では内湾が半漁半農でございますから、女の人たちはちょっと休まないで畑や田んぼへ出かけて働く一方です。そんなわけですからラジオも聞かないし、新聞もあまり読まないし、集まりにもなかなか出てこないというような状態でございます。私は小さなグループを作りまして、皆さんと話し合いをもつことが一番いいではないか。大きいグループよりもっと小さいグループで話し合いをしたら、加工のこと、貯金のこと、それから生活態度、そういうことがスムーズにいくのではないかと今考えておるわけなのでございます。

司会 その隣の方は如何ですか。

地元 私は本更津の手前の長浦というところで、やはりただいまおっしゃったようにのりと小魚、貝類――アサリが非常に取れます。のりの間にはアサリを取ったりエビを取ったり、小魚類が取れまして、この節一般に豊かになりました。よそのお話を伺いまして、今さらながら恵まれていることに感謝いたしております。

司会 そのお隣、浦安の方どうぞ。

地元 私の方は東京のすぐ隣になります。今までの方とは少し違ふのです。のりもやっておりますが、これは前の

話のようなことですから略しますが、中央市場へ近いために、貝の加工をやって、それを中央市場へ持っていくます。そのアサリやハマグリをむくのを全部女がやります。うちの方は漁がほとんどないので、貝類をよそから買入れまして、それを加工する。女は加工所へ雇われるわけですが、女一人三〇〇円から五〇〇円ぐらいかせげるのです。そうしたことのできない方は東京へ行商に参ります。ですから今年みたいなのりも不作で、漁がなくても、それは最低の生活でございますが、どうか食べていきます。その半面、婦人部の活動というものはあまり活発じゃありません。それは皆、かせげるためにひまが惜しいので出て来ないからです。そういうわけでほんとうに敬養面では低いのでございます。

鈴木 一日五〇〇円という一月一五〇〇〇円の収入ですね。その場合、女の方が男の人より収入が多いといったことも出てくると思いますが、そうすると、家庭における女の発言力が、男より強いというようなことはありますか。

地元 幾分その傾向はありますね。年を取ったおばあさんなんか、動けなくてもむくのは上手なのです。ですからおばあさんがかせげば、お母さんが家のまかないをやるというようにするし、むけない人は東京へ売りに行くというよ

うなあんばいです。

森下 出荷のほとんどは協同組合を通すのですか。

地元 協同組合はありますが、出荷はやらないのです。個人の十何軒かがそういう加工場を持ち、中央市場にお店を持っています。そこへ持っていくために、一軒の家で二〇人ぐらい、場所によっては一五〇人ぐらい集まります。浦安食品カン詰工場もありますので、常時雇われている人もあるし、家でぼつぼつむく人もあります。男がアサリとかハマグリを取りに参りまして取る量が少ないですし、しかも千葉は子供の多い土地ですから、こういう女の働きがなければ生活していきないうです。

司会 それでは女の人がどんな仕事をしているかということの説明は一通り終りましたので、これから、こういう状態の中で婦人の生活一般の問題などについて話していただきたいと思ひます。

国領 それではお子さんは勉強してどんどん成長しているのにお母さんはラジオもあまり聞けない、ミシンも踏めないというふうでは、お母さんと子供の間にずれが出てこないかと思うのですが、それはどういうふうに解決するのですか。

地元 そうですね。子供たちは「うちのおっかあしやうがねえ」とよくいっています。(笑聲)



地元 子供と親のずれをどうするかという、それが一番の難題なのです。

國領 嫁しゅうとの問題は農村よりも軽いというようなことは伺っていますが、その点はどうですか。

地元 封建的な嫁しゅうとの関係というのはあまりないですね。というのは主婦の発言力があるわけですから。

梅北 私たちの方は農村ですが、川でアユを取る部落があり、そのアユを買い受ける買主とアユを取る人の間は、封建的身分関係で縛られて、選挙のときなんかそういう人の言うことを部落の人たちは聞くという関係になっています。漁村でも網元と水夫のつながりに案外そういうところがあるように本で読んでいたりするのですが、政治への関心はどんなものでしょうか。

地元 ないということはいえませんが、網元がこうしてくれといっても、なかなかこのごろ受け入れられなくなってきたのです。やっぱり東京が近いのでいろいろと教育される機会が多いですから……。

元岡 私はこの人間で、長崎へ行きました者ですがやはり長崎はここに比べると、お話にならないくらい考え方が封建的で、この千葉あたりは上の上ですよ。

地元 網主と漁民で協議会を作っているのですが、そこでも盛に討論するのです。例えば取獲高のことで網主が

六分といい、漁民は五分五厘くれといって、お互いに納得の上で助きますよ。納得がいかなければ絶対に操業に出ないというふうにして、何回でもやるのです。

梅北 なかなか頼もしいですね。

地元 昔は網主と水夫ではずいぶん差がついたのだと思うのですが、今はそんなことはありません。

梅北 女の人が男の権力に押えられていないというお話でしたが、女の方たちは選挙のときなんかでも、はっきり自分で選んだ人を選ぶというふうになっていますか。

地元 それがそれだけの自由が与えられていながら、その自由を放棄して生かさないうのです。それが一番欠点でしょう。

司会 具体的には自分で選んだ人にいれないとか、投票のときにずぼっちゃって行かないとか、そういうのが多いというわけですか。

梅北 そういう勉強の場もたない。忙しくて集まることさえできないということですね。

地元 自分をたかめるという意識がないのですね。漁師のおかみさんだから仕事さえしてればいいというのが多いのです。

梅北 農村でも同じようなものです。

地元 しかし私の感じでは、農村の方が意識していらっ

しゃると思います。天津地区で婦人週間のブロック会議に出たのですけれど、農村のお嫁さんたちは自由を獲得しようとして一生懸命ですが、漁村は反対なのです。自由を得ていて生かすことをしない、放棄しています。

弘中 選挙のときなんか、この人を入れてくれなんて運動されると、いなかではいやといえないので、表向きは「はいはい」というけれども、いざ投票するときはその人を背くかどうかわからない。案外勝手に自分で投票しているようですね。

地元 まあそうですね。じきに県会選挙が始まりますが、婦人部が結成されて、組織運動に参加したり、あるいは組合大会に参加したりして、漁村はどうしても漁村のものを出さなければいけないということが認識されますね。

茂内 農村ですと電気機具がこのごろ非常に普及してきて、婦人学級とか社会学級で台所の改善を大きく取り上げていますが、漁村ではどうでしょうか。

地元 漁村の方もけっこう普及して参りました。茂内 組織の力で合理化していこうという結束があるわけですか。

地元 うちの方は、電化は組織の力ではやってません。まあうちの方は貧乏ながらも漁村としては恵まれているの

でしょうか、個人的に相当電化しております。電気洗濯機はあまり使われていませんが、電気ガマなんか相当使っています。ふるの場の改善も婦人部でやるというわけで、四、五軒改善いたしました。

弘中 今日バスで通って見たのですが、海岸を埋立てて工場ができるらしいのですが、そのために漁業ができなくなり、収入が減るといふようなことがあるのか、その場合には交換条件で、その工場へ収入の減った家の方が勤めに出来るのでございますか。

本部 おっしゃる通り埋立てをいたしますと、のりを作る場所がなくなり、アサリ、ハマグリを取る場所がなくなります。おそらく東京湾は、この一〇年のうちに海はほとんどなくなるのではないかと思います。そういたしますと漁民は仕事ができなくなるが、県でもいろいろ転業の施策をしておられます。総合職業補導所というものがございしますが、そこで職業補導をしています。ですから若い人はいいのですが、年配になった人は今更ですとのりを作ったり、貝を取ってれば御飯が食べられたのが、すっかりだめになるのですから、何とかしなくてはいいけない。そのために補償金が出ることに昨年きまりました。南のところのある一漁業組合が一〇〇万坪埋立てまして約一二億程度の補償金が出る。坪当り一二〇〇円ぐらいの補償金になっ

ておられます。のりを作る家は大体一軒で二〇〇万円ぐらいもらっているわけです。しかしこの二〇〇万円も、座してくらえば幾らもございませぬ。これをどう有効に使わせるかに私も頭を悩ましています。ここ一、二年のところは半漁半農で少しはかせぎもできましようが、将来は漁料の姿を全然失うのではないか、その場合にはどうするか。これは一番の悩みでございませぬ。東京湾、伊勢湾、有明海、いずれも同じ漁民の悩みをもっているわけです。

元岡 先ほど工場へ入って見学したときに、高級な技術をもった熟練工にはこの土地の人はどうかと伺ったら、県民性としてあまり向かない性質をもっているようにとおっしゃるんですね。私もそうですけど千葉県人というのはのんびりしたところがありますから、なるほど思ったのですが、もう少しよそからそういう人をつれてこないで県内で工夫したらどうかと心配したわけです。

司会 いろいろお話が出て参りましたが、地元からお客様に伺いたいことはおありになりませんか。

地元 うちの方の婦人部は結婚の簡素化とか、生活の改善をやりたいと思っているのですが、一般にそういうことを派手にやることでして、なかなかむずかしいのですが、どこかうまくやっていらっしゃる婦人部があったらお話をいただきたいのですが……。

ろん反対です。しかし、いいことなんだからやりなさいと、公民館の館長さんもそれを奨めて力になってくださり、青年達自身もこれはどうしても自分たちだけでなく、あとの人のためにもということで努力したのです。勿論町中みんながそうだったとはいえませんが……。

織田 私はこれからうまくいきそうな例を申し上げます。それは準備するのには青年だけ集まらずに、お母さんやお父さんの立場からも、それから学識経験者とか、社会的地位のある方も、みんな各代表者が集まって何べんも何べんも話し合い、一つの形を作り上げて、この一日ごろから実際にやることになっており、うまくいきつつあります。まだ結果がわかっていないから、何とも申し上げられませんが、準備は若い方たちだけでなくて、大ぜいでやられたらいいと思います。

森下 私はお葬式の方のことを申し上げますが、何でも一ぺんにやるのは無理ですから、先ず一つのことを改める。それで成功しております。それは葬協で祭壇を買ったのです。協同組合にみんなでお金している中から、一五、〇〇〇円で電気もお花も全部ついた祭壇を買って、その祭壇をお葬式のとき借りる。その借り賃が一〇〇〇円です。これは葬儀屋にやってもうよりはずと安いのだそうです。たった一つでいいから実際に始めるといことが大事だと思

梅北 私の方の近くの村の婦人会で、結婚の簡素化に熱を入れてやっているところがあるのです。どこでも似たようなことと思いますが、公民館を建てて会場は公民館を使用する。衣装は貸衣装を揃えている。それからお膳は幾らとかきめているのです。品物の支度ほどの程度か、それを幹事さんが熱心でして、よその村の人との結婚の場合なんか、そちらの村へも出かけていってその趣旨を説明するとか、会場へも出張して監督をやられるとか、そういうことをやってみようというところをおっしゃっている。それが、やはり内緒で、隠れて荷物を夜運んだとかいろいろございませぬ。結局そういうことはこういうふうにきめたから必ず守れという押しつけでは、一応形だけでもいいのだめになります。そこで私の方では結婚というものは形式でなくて、人間と人間の結びつきだから、それを強調するという考え方で、青年団の人たちが嫁み出して、青年同士の間で詰合をし、男の側と女の側とが相談して、必要なものを買いととのえる、たとえばおふとんなんか家にあるから持っていくというふうになりました。そして捨置な農村で、今まで非常に派手なところであったのですが、思い切って会費結婚をやったのです。親戚も友だちも、みんなが二五〇円の会費を持ち寄って公民館で式を挙げ、簡素化の先鞭をつけたわけです。親とか親戚はもち

います。

地元 私の方はもう四年目になりますが、七五三のお祝を婦人部でやっています。一戸当り二〇〇円ずつ出し、学校とか漁業協同組合をお借りして、千歳あめやおもちとか、お赤飯を用意し、親たちも招待して合同祝をするのです。毎年大体二〇〇人ぐらいの該当者がございませぬが、一三〇人ぐらい参加してくださいませ。

司会 評判はどうですか。

地元 長男はともかく、次男、三男は子供が喜んでいから、それですましてしまおう。一緒に婦人部でやってくれるからありがたいという話を聞きます。

地元 私の方は婦人部の方が活発にやって、葬儀の道具も六、七年前からやっています。結婚の貸衣装も三組ぐらい持っておりますし、七五三の方もやっておりますが、ここ二、三年幼稚園でやりましたところ、幼稚園でやる時にはセーラー服を着せてやって、うちでお参りにいくときには着物を着せるというのがちよいちよいある。その点は遺憾でございませぬ。

司会 今日にはほんとうに会議員の方はお疲れのところ、又地元の漁協婦人部の皆様方も遠いところお集り下さりよい御礼をさせていただきます。有難うございました。御協力下さいました漁協の方にも心から感謝いたしました。

---

集 団 に お け る 個 人

—その自由と責任—

第七回全国婦人会議記録

昭和35年 1 月 25 日 印刷

昭和35年 1 月 30 日 発行

東京都千代田区大手町1ノ17番地

発 行 者 労働省婦人少年局

東京都中央区入船町2ノ3

印刷者 永 井 直 保

---